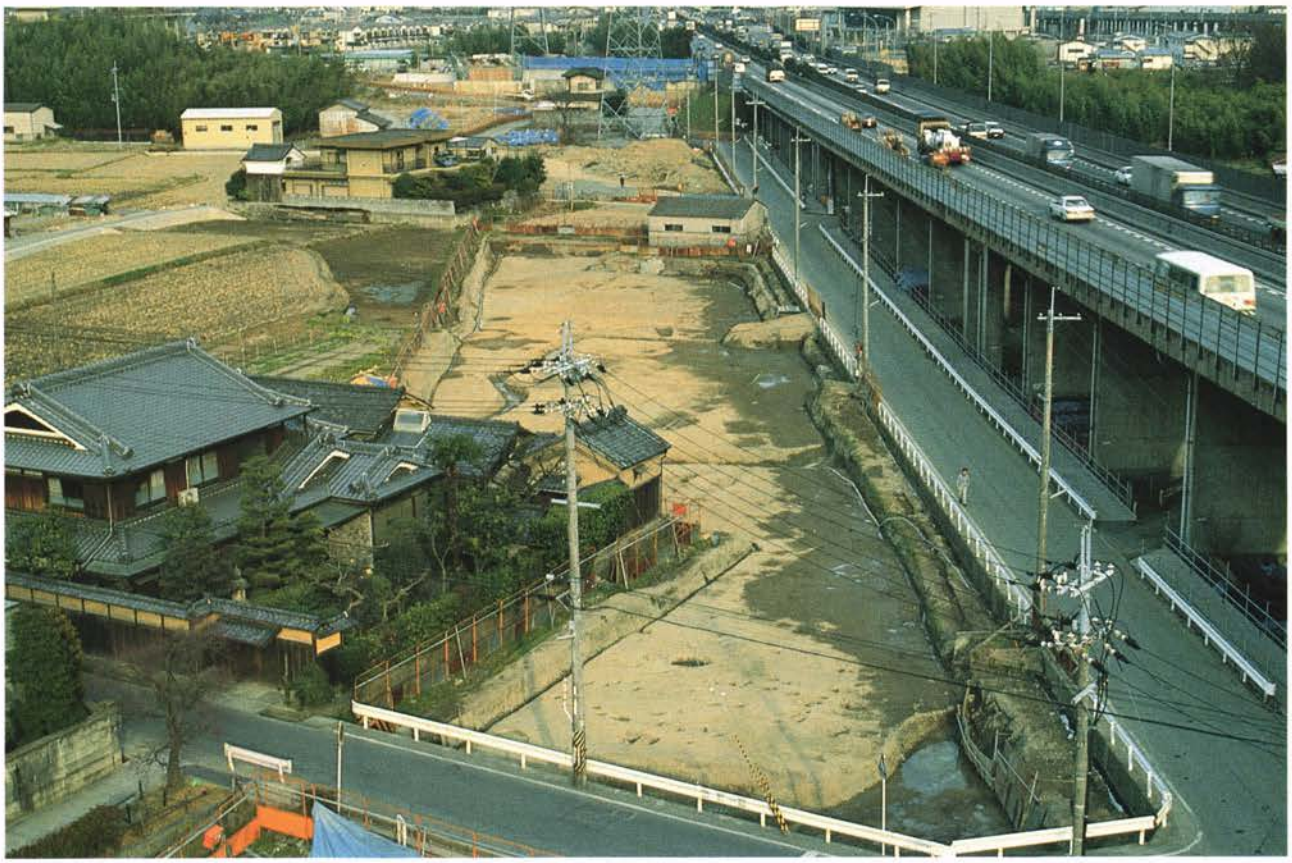
京都府遺跡調査報告書

第 24 冊

百 々 遺 跡

1 9 9 8

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)D１トレンチ全景（南西から）

(2)D１トレンチ全景（北東から）

(1)D１トレンチ西国街道東側掘立柱建物跡群（南から）

(2)D３トレンチ西国街道東側掘立柱建物跡群（東から）

(1)C 2トレンチ西国街道路面（南西から）

(2)C 2トレンチ西国街道西側溝（南から）

序

わたくしどもの京都府埋蔵文化財調査研究センターは、各種公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業、ならびに研究と普及啓発等の諸事業を主たる業務として、昭和56年に発足し、平成10年３月で満17周年となる公益法人であります。

そのうちの、発掘調査の成果については、『京都府遺跡調査概報』と『京都府遺跡調査報告書』を刊行しており、研究の一端は『京都府埋蔵文化財論集』第１～３集を刊行し、さらに普及啓発としては、『京都府埋蔵文化財情報』を公表してきたところであります。

今回刊行のはこびとなった本書は、京都府遺跡調査報告書としては24冊目にあたるもので、平成元年度から４年度まで４か年にわたって発掘調査された百々遺跡に関する調査成果を一冊にまとめたものです。むろん、各年度の調査成果の概要については、逐次『京都府遺跡調査概報』に収録・報告されています。

当センターでは、遺跡の重要性にかんがみ、報告書として調査成果をまとめるべきであるとの見地に立ち、原因者である日本道路公団のご了解を得て刊行の運びとなったものです。関係各位の深いご理解とご協力に対し、この場をかりて厚くお礼申し上げる次第であります。

本書は、調査を担当した当センター職員の、学問的情熱に裏打ちされた、昼夜を分かたぬ数年に及ぶ努力の甲斐あって、ここにこのような形で結実させることができました。彼らの労苦をねぎらうとともに、本書が京都府のみならず、わが国の古道・国府などの研究の進展に大きく寄与することを心から願ってやみません。

平成10年３月

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長　樋口　隆康

例　　言

1．本書は、京都府乙訓郡大山崎町字円明寺地内に所在する百々遺跡の発掘調査報告書であります。

2．百々遺跡は、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて実施したもので、その現地調査期間は、平成元年度から4年度までの4か年を要した。

3．現地調査及び本報告書にかかる経費は、日本道路公団大阪建設局が負担した。

4．本書に掲載した遺構図は第6座標系を用い、方位はすべて座標北をさす。

5．写真撮影は、遺構を各年度の調査担当者が、遺物写真は田中　彰が行った。

6．本報告書の作成は、各年度担当者の協力のもとに、調査第2課調査第4係岩松　保が主に行い、編集は、勝山紀子の協力を得て調査第1課土橋　誠が行った。

7．本書に掲載した遺物・写真・図面などは当分の間、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが保管している。

本 文 目 次

はじめに----------1
第１章　調査に至る経過----------2
　第１節　調査の経過----------2
　第２節　試掘調査の結果----------2
　第３節　調査の方法----------4
　第４節　調査の体制----------5
　第５節　各年度の調査概要----------7
第２章　遺跡の環境----------9
第３章　検出遺構----------12
　第１節　Ａ地区の調査----------12
　第２節　Ｂ地区の調査----------14
　第３節　Ｃ地区の調査----------15
　第４節　Ｄ地区の調査----------31
　第５節　Ｅ地区の調査----------41
第４章　出土遺物----------44
　第１節　土器----------44
　第２節　土製品----------62
　第３節　瓦----------64
　第４節　木製品----------64
　第５節　石製品----------67
　第６節　金属製品----------67
第５章　総括----------71
　第１節　各地区の時期別遺構----------71
　第２節　建物跡方位の変遷----------78
　第３節　西国街道の成立と変遷----------82
　第４節　百々遺跡の評価について－山城国府説との関わり----------92

挿　図　目　次

第１章　調査に至る経過

第２節　試掘調査の結果

第１図　試掘トレンチ配置図及び平面図・土層柱状図----------3

第３節　調査の方法

第２図　大山崎工区地区割り図----------5

第２章　遺跡の環境

第３図　周辺遺跡分布図----------10

第３章　検出遺構

第１節　Ａ地区の調査

第４図　Ａ・Ｂ地区トレンチ配置図----------12

第５図　Ａ地区トレンチ位置図----------13

第２節　Ｂ地区の調査

第６図　Ｂ地区トレンチ配置図----------14

第３節　Ｃ地区の調査

第７図　Ｃ地区トレンチ配置図----------15

第８図　流路ＳＲ34901内遺物出土状況図----------16

第９図　Ｃ２トレンチ上面検出遺構平面図----------18

第４節　Ｄ地区の調査

第10図　Ｄ地区トレンチ配置図----------32

第11図　中世墓ＳＸ34924実測図----------33

第12図　ＳＸ34933実測図----------36

第13図　Ｄ１トレンチ土層実測図----------37

第５節　Ｅ地区の調査

第14図　Ｅ地区トレンチ配置図----------42

第４章　出土遺物

第１節　土器

第15図　中世土師器皿変遷図----------47

第16図　平安時代土師器変遷図----------50

第17図　西国街道西側溝ＳＤ349111計測別器種構成比率----------52

第18図　百々遺跡遺構別器種構成比率----------54

第19図　百々遺跡遺構別器形構成比率----------55
第20図　百々遺跡遺構別供膳形態器種構成比率----------55
第21図　各遺跡別器種構成比率----------58
第22図　各遺跡別器形構成比率----------58
第23図　各遺跡別供膳形態器種構成比率----------60
第24図　墨書土器実測図----------61
第25図　陰刻花文実測図----------62
第２節　土製品
第26図　土製品実測図----------63
第４節　木製品
第27図　井戸側計測位置図----------65
第５節　石製品
第28図　石製品実測図----------68
第６節　金属製品
第29図　銭貨計測位置----------68
第30図　鉄製品実測図----------70
第５章　総括
第１節　各地区の時期別遺構
第31図　百々遺跡遺構変遷図(1)----------72
第32図　百々遺跡遺構変遷図(2)----------74
第33図　百々遺跡遺構変遷図(3)----------76
第34図　百々遺跡遺構変遷図(4)----------77
第２節　建物跡方位の変遷
第35図　掘立柱建物跡方位分布図----------80
第３節　西国街道の成立と変遷
第36図　奈良時代の集落・寺院・神社と交通路----------86
第37図　平安時代の集落と交通路----------89
第38図　百々遺跡調査トレンチ位置図----------93
第４節　百々遺跡の評価について—山城国府説との関わり
第39図　第三次山城国府推定地と調査トレンチ配置図----------95

付　表　目　次

第１章　調査に至る経過

第３節　調査の方法

付表１　調査地一覧表----------4

第４章　出土遺物

第１節　土器

付表２　西国街道西側溝ＳＤ349111計測別器種構成比率表----------52

付表３　百々遺跡遺構別器種構成比率表----------54

付表４　百々遺跡遺構別器形構成比率表----------55

付表５　百々遺跡遺構別供膳形態器種構成比率表----------55

付表６　各遺跡別器種構成比率表（総破片数）----------57

付表７　各遺跡別器形構成比較表----------59

付表８　墨書土器一覧表----------61

第２節　土製品

付表９　土製品一覧表----------62

付表10　出土瓦一覧表----------64

第４節　木製品

付表11　木製品一覧表----------65

付表12　ＳＥ349112井戸側観察表----------66

付表13　ＳＥ36714井戸側観察表----------66

付表14　石製品観察表----------67

第６節　金属製品

付表15　銭貨観察表----------69

第５章　総括

第２節　建物跡方位の変遷

付表16　掘立柱建物跡一覧表----------79

付表17　掘立柱建物跡方位頻度表----------80

第４節　百々遺跡の評価について―山城国府説との関わり

付表18　周辺調査一覧表----------94

付表19　出土土器観察表----------99

図 版 目 次

図版第１　調査地位置図
図版第２　Ａ地区調査トレンチ平面図・土層図
図版第３　Ｂ地区トレンチ平面図・土層図
図版第４　Ｃ１トレンチ検出遺構平面図・土層図
図版第５　Ｃ２トレンチ検出遺構平面図
図版第６　Ｃ２トレンチ土層図
図版第７　Ｃ２トレンチ西国街道西側溝変遷図
図版第８　Ｃ２トレンチ掘立柱建物跡実測図(1)
図版第９　Ｃ２トレンチ掘立柱建物跡実測図(2)
図版第10　Ｃ２トレンチ掘立柱建物跡実測図(3)
図版第11　Ｃ２トレンチ掘立柱建物跡実測図(4)
図版第12　Ｃ２トレンチＳＥ349112実測図
図版第13　Ｃ２トレンチ検出遺構実測図
図版第14　Ｃ３aトレンチ検出遺構平面図
図版第15　Ｃ４トレンチ検出遺構平面図
図版第16　Ｃ３a・Ｃ４トレンチ土層図
図版第17　Ｃ３a・Ｃ４トレンチ掘立柱建物跡実測図(1)
図版第18　Ｃ３a・Ｃ４トレンチ掘立柱建物跡実測図(2)
図版第19　Ｃ３aトレンチＳＥ36714実測図
図版第20　Ｃ３aトレンチＳＨ36717実測図
図版第21　Ｃ３a・Ｃ４トレンチ検出遺構実測図(1)
図版第22　Ｃ３a・Ｃ４トレンチ検出遺構実測図(2)
図版第23　Ｃ３bトレンチ検出遺構平面図・土層図
図版第24　Ｄ１トレンチ検出遺構平面図
図版第25　Ｄ１トレンチ検出遺構平面図(西端部)
図版第26　Ｄ１トレンチ検出遺構平面図(中央部)
図版第27　Ｄ１トレンチ検出遺構平面図(東部)
図版第28　Ｄ１・Ｄ３トレンチ掘立柱建物跡実測図(1)
図版第29　Ｄ１・Ｄ３トレンチ掘立柱建物跡実測図(2)
図版第30　Ｄ１・Ｄ３トレンチ掘立柱建物跡実測図(3)

図版第31　Ｄ１・Ｄ３トレンチ掘立柱建物跡実測図(4)
図版第32　Ｄ１トレンチ検出遺構実測図
図版第33　Ｄ１トレンチ竪穴式住居跡実測図
図版第34　Ｄ３トレンチ検出遺構平面図・土層図
図版第35　Ｄ３トレンチ検出遺構実測図
図版第36　Ｄ１・Ｄ３トレンチ西国街道東側検出遺構実測図
図版第37　Ｄ１・Ｄ３トレンチ西国街道東側遺構変遷図
図版第38　Ｄ２トレンチ検出遺構平面図・土層図
図版第39　Ｅトレンチ検出遺構平面図
図版第40　Ｅトレンチ土層図
図版第41　Ｅトレンチ竪穴式住居跡実測図
図版第42　Ｅトレンチ検出遺構実測図
図版第43　土器実測図(1)
図版第44　土器実測図(2)
図版第45　土器実測図(3)
図版第46　土器実測図(4)
図版第47　土器実測図(5)
図版第48　土器実測図(6)
図版第49　土器実測図(7)
図版第50　土器実測図(8)
図版第51　土器実測図(9)
図版第52　土器実測図(10)
図版第53　土器実測図(11)
図版第54　土器実測図(12)
図版第55　土器実測図(13)
図版第56　土器実測図(14)
図版第57　土器実測図(15)
図版第58　土器実測図(16)
図版第59　土器実測図(17)
図版第60　土器実測図(18)
図版第61　土器実測図(19)
図版第62　土器実測図(20)
図版第63　土器実測図(21)
図版第64　土器実測図(22)
図版第65　土器実測図(23)

図版第66　土器実測図(24)
図版第67　土器実測図(25)
図版第68　土器実測図(26)
図版第69　土器実測図(27)
図版第70　土器実測図(28)
図版第71　瓦実測図
図版第72　木製品実測図
図版第73　井戸側実測図
図版第74　銭貨実測図(1)
図版第75　銭貨実測図(2)
図版第76　(1)Ｄ地区調査着手前の状況(東から、後方の山は天王山)
(2)Ａ・Ｂ地区を望む(東から、後方の山は天王山)
(3)Ｄ地区拡幅工事の状況(西から)
図版第77　(1)Ａトレンチ　全景(南から)　(2)Ａトレンチ　全景(北から)
(3)Ａトレンチ　南半部(北東から)
図版第78　(1)Ｂ１トレンチ　全景(北東から)　(2)Ｂ２トレンチ　南壁土層(北から)
(3)Ｂ３トレンチ　全景(北東から)
図版第79　(1)Ｃ１トレンチ　全景(東から)
(2)Ｃ１トレンチ　ＳＤ34902検出状況(西から)
図版第80　(1)Ｃ１トレンチ　ＳＲ34901掘削状況(西から)
(2)Ｃ１トレンチ　ＳＲ34901内遺物出土状況(東から)
(3)Ｃ１トレンチ　ＳＲ34901内遺物出土状況(北西から)
図版第81　(1)Ｃ１トレンチ　ＳＸ34906・ＳＤ34902検出状況(南東から)
(2)Ｃ１トレンチ　ＳＸ34906検出状況(南から)
(3)Ｃ１トレンチ　ＳＫ34909・10検出状況(南西から)
図版第82　(1)Ｃ２トレンチ　全景(南西から)　(2)Ｃ２トレンチ　全景(西から)
(3)Ｃ２トレンチ　西国街道西側掘立柱建物跡検出状況(西から)
図版第83　(1)Ｃ２トレンチ　西国街道西側溝ＳＤ349111検出状況(南から)
(2)Ｃ２トレンチ　杭列ＳＸ349130検出状況(北東から)
(3)Ｃ２トレンチ　西国街道西側溝ＳＤ349111内土砂堆積状況(北から)
図版第84　(1)Ｃ２トレンチ　西半掘立柱建物跡検出状況(北東から)
(2)Ｃ２トレンチ　掘立柱建物跡ＳＢ349113・114検出状況(北から)
(3)Ｃ２トレンチ　掘立柱建物跡ＳＢ349113・114検出状況(南から)
図版第85　(1)Ｃ２トレンチ　井戸ＳＥ349112検出状況(北から)
(2)Ｃ２トレンチ　井戸ＳＥ349112完掘状況(東から)

(3)Ｃ２トレンチ　井戸ＳＥ349112内底面石礫検出状況(北から)
図版第86　(1)Ｃ２トレンチ　西国街道路面ＳＦ349104検出状況(南西から)
(2)Ｃ２トレンチ　西国街道西側溝ＳＤ349103検出状況(南西から)
(3)Ｃ２トレンチ　ＳＸ349110・131検出状況(北西から)
図版第87　(1)Ｃ２トレンチ　瓦器埋納土坑ＳＫ349129検出状況(東から)
(2)Ｃ２トレンチ　布留式土器埋納土坑ＳＫ349128検出状況(東から)
(3)Ｃ２トレンチ　Ｐ294検出状況(北西から)
図版第88　(1)Ｃ３aトレンチ　全景(北から)　(2)Ｃ３aトレンチ　全景(東から)
(3)Ｃ３aトレンチ　掘立柱建物跡ＳＢ36701・02検出状況(北東から)
図版第89　(1)Ｃ３aトレンチ　掘立柱建物跡ＳＢ36703・04・05検出状況(北西から)
(2)Ｃ３aトレンチ　掘立柱建物跡ＳＢ36706検出状況(西から)
(3)Ｃ３aトレンチ　竪穴式住居跡ＳＨ36717検出状況(北西から)
図版第90　(1)Ｃ３aトレンチ　竪穴式住居跡ＳＨ36717検出状況(南東から)
(2)Ｃ３aトレンチ　竪穴式住居跡ＳＨ36717カマド(新)検出状況(南東から)
(3)Ｃ３aトレンチ　竪穴式住居跡ＳＨ36717カマド(旧)検出状況(南東から)
図版第91　(1)Ｃ３aトレンチ　井戸ＳＥ36714上面石礫検出状況(南東から)
(2)Ｃ３aトレンチ　井戸ＳＥ36714井戸側検出状況(南西から)
(3)Ｃ３aトレンチ　井戸ＳＥ36714井戸側検出状況(北西から)
図版第92　(1)Ｃ３aトレンチ　井戸ＳＥ36710内土器出土状況(北から)
(2)Ｃ３aトレンチ　井戸ＳＥ36712内石礫検出状況(東から)
(3)Ｃ３aトレンチ　井戸ＳＥ36713内土器出土状況(北から)
図版第93　(1)Ｃ３aトレンチ　井戸ＳＥ36710完掘状況(東から)
(2)Ｃ３aトレンチ　井戸ＳＥ36712完掘状況(北から)
(3)Ｃ３aトレンチ　井戸ＳＥ36713完掘状況(北西から)
図版第94　(1)Ｃ３aトレンチ　土師皿埋納柱穴Ｐ10検出状況(南から)
(2)Ｃ３aトレンチ　土師皿埋納土坑ＳＫ36711検出状況(南から)
(3)Ｃ３aトレンチ　土器埋納土坑ＳＫ36719検出状況(北西から)
図版第95　(1)Ｃ３bトレンチ　全景(東から)　(2)Ｃ３bトレンチ　全景(西から)
(3)Ｃ３bトレンチ　溝ＳＤ36737検出状況(北から)
図版第96　(1)Ｃ４トレンチ　全景(南東から)　(2)Ｃ４トレンチ　北半検出遺構(西から)
(3)Ｃ４トレンチ　掘立柱建物跡ＳＢ394009・010検出状況(南から)
図版第97　(1)Ｃ４トレンチ　素掘り溝群検出状況(東から)
(2)Ｃ４トレンチ　土坑ＳＫ394004検出状況(南から)
(3)Ｃ４トレンチ　南東部遺構検出状況(南から)
図版第98　(1)Ｃ４トレンチ　土坑ＳＫ394007検出状況(南西から)

(2)Ｃ４トレンチ　土坑ＳＫ394007完掘状況(南西から)
(3)Ｃ４トレンチ　土坑ＳＫ394006内遺物出土状況(東から)
図版第99　(1)Ｃ４トレンチ　井戸ＳＥ394001検出状況(北西から)
(2)Ｃ４トレンチ　井戸ＳＥ394001完掘状況(北西から)
(3)Ｃ４トレンチ　土坑ＳＫ394004内石礫検出状況(南西から)
図版第100　(1)Ｄ地区調査着手前全景(東から)　(2)Ｄ１トレンチ　全景(南西から)
(3)Ｄ１トレンチ　全景(北東から)
図版第101　(1)Ｄ１トレンチ　西国街道東側掘立柱建物跡群検出状況(南から)
(2)Ｄ１トレンチ　西国街道東側掘立柱建物跡群検出状況(東から)
(3)Ｄ１トレンチ　西国街道東側掘立柱建物跡群検出状況遠景(北東から)
図版第102　(1)Ｄ１トレンチ　掘立柱建物跡ＳＢ34922・23検出状況(南から)
(2)Ｄ１トレンチ　トレンチ中央北半部上面遺構検出状況(北東から)
(3)Ｄ１トレンチ　トレンチ中央北半部下面遺構検出状況(北東から)
図版第103　(1)Ｄ１トレンチ　掘立柱建物跡ＳＢ34954周辺遺構検出状況(北東から)
(2)Ｄ１トレンチ　溝ＳＤ34953・中央部北半下面遺構検出状況(東から)
(3)Ｄ１トレンチ　溝ＳＤ34953検出状況(北西から)
図版第104　(1)Ｄ１トレンチ　竪穴式住居跡ＳＨ34959周辺遺構検出状況(北東から)
(2)Ｄ１トレンチ　掘立柱建物跡ＳＢ34957検出状況(北西から)
(3)Ｄ１トレンチ　竪穴式住居跡ＳＨ34961・62検出状況(西から)
図版第105　(1)Ｄ１トレンチ　自然流路ＳＲ34951検出状況(南から)
(2)Ｄ１トレンチ　自然流路ＳＲ34952検出状況(南東から)
(3)Ｄ１トレンチ　自然流路ＳＲ34952・溝ＳＤ34953内土層(東から)
図版第106　(1)Ｄ１トレンチ　土壙墓ＳＸ34924検出状況(南西から)
(2)Ｄ１トレンチ　土壙墓ＳＸ34924内埋納土器・石礫検出状況(南東から)
(3)Ｄ１トレンチ　土壙墓ＳＸ34924完掘状況(南西から)
図版第107　(1)Ｄ１トレンチ　土坑ＳＫ34915・16完掘状況(南西から)
(2)Ｄ１トレンチ　井戸ＳＥ34958検出状況(南から)
(3)Ｄ１トレンチ　銭貨埋納遺構ＳＸ34933検出状況(北西から)
図版第108　(1)Ｄ１トレンチ　土器埋納土坑ＳＫ34925検出状況(西から)
(2)Ｄ１トレンチ　土器埋納土坑ＳＫ34930検出状況(北西から)
(3)Ｄ１トレンチ　土器埋納土坑ＳＸ34965検出状況(北東から)
図版第109　(1)Ｄ２トレンチ　全景(南から)
(2)Ｄ２トレンチ　自然流路ＳＲ36740検出状況(北から)
(3)Ｄ２トレンチ　自然流路ＳＲ36740検出状況(北西から)
図版第110　(1)Ｄ３トレンチ　全景(北東から)　(2)Ｄ３トレンチ　西半部(北東から)

(3)Ｄ３トレンチ　全景(南西から)
図版第111　(1)Ｄ３トレンチ　西国街道路面ＳＦ394103・東側溝ＳＤ394101検出状況(南から)
(2)Ｄ３トレンチ　西国街道路面ＳＦ394103・東側溝ＳＤ394101検出状況(北から)
(3)Ｄ３トレンチ　土器埋納遺構ＳＸ394104検出状況(東から)
図版第112　(1)Ｄ３トレンチ　近世遺構群検出状況(北東から)
(2)Ｄ３トレンチ　石垣状遺構ＳＸ12検出状況(東から)
(3)Ｄ３トレンチ　暗渠排水ＳＤ05検出状況(南東から)
図版第113　(1)Ｄ３トレンチ　井戸ＳＥ02検出状況(西から)
(2)Ｄ３トレンチ　井戸状遺構ＳＸ394107検出状況(北東から)
(3)Ｄ３トレンチ　井戸ＳＥ03検出状況(北西から)
図版第114　(1)Ｅトレンチ　上層遺構面全景(北東から)
(2)Ｅトレンチ　下層遺構面全景(北東から)
(3)Ｅトレンチ　下層遺構面全景(南西から)
図版第115　(1)Ｅトレンチ　自然流路ＳＲ367042下面・ＳＤ367048検出状況(南から)
(2)Ｅトレンチ　自然流路ＳＲ367042a内堆積砂礫(北から)
(3)Ｅトレンチ　自然流路ＳＲ367042a内堆積土中土器出土状況(東から)
図版第116　(1)Ｅトレンチ　竪穴式住居跡ＳＨ367045検出状況(南東から)
(2)Ｅトレンチ　竪穴式住居跡ＳＨ367045完掘状況(南西から)
(3)Ｅトレンチ　竪穴式住居跡ＳＨ367045カマド検出状況(南西から)
図版第117　(1)Ｅトレンチ　竪穴式住居跡ＳＨ367047検出状況(南から)
(2)Ｅトレンチ　竪穴式住居跡ＳＨ367047カマド検出状況(東から)
(3)Ｅトレンチ　竪穴式住居跡ＳＨ367047北東隅カマド検出状況(北から)
図版第118　(1)Ｅトレンチ　井戸ＳＥ367041検出状況(南から)
(2)Ｅトレンチ　轍ＳＸ367043検出状況(北から)
(3)Ｅトレンチ　土器埋置遺構ＳＸ367046検出状況(北東から)
図版第119　出土遺物(1)
図版第120　出土遺物(2)
図版第121　出土遺物(3)
図版第122　出土遺物(4)
図版第123　出土遺物(5)
図版第124　出土遺物(6)
図版第125　出土遺物(7)
図版第126　出土遺物(8)
図版第127　出土遺物(9)
図版第128　出土遺物(10)

図版第129　出土遺物(11)
図版第130　出土遺物(12)
図版第131　出土遺物(13)
図版第132　出土遺物(14)
図版第133　出土遺物(15)
図版第134　(1)土錘　(2)製塩土器
図版第135　木製品(1)
図版第136　木製品(2)
図版第137　石製品
図版第138　銭貨

百々遺跡発掘調査報告書

はじめに

この報告書は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが1989(平成元)～1992(平成4)年にかけて行った長岡京跡右京第349・367・394次調査に関する発掘調査の記録である。

日本道路公団は、中央自動車道西宮線(通称名神高速道路)の茨木インターチェンジと京都南インターチェンジ間の車線拡幅工事を計画したが、京都府域のかなりの部分が長岡京跡の範囲に含まれるため、事前に発掘調査を行うことが必要となった。発掘調査は、1988(昭和63)年から1997(平成9)年までの10年間にわたり行ったが、この報告書ではそのうちの大山崎工区(東西総延長約550m)を対象とした。

当該地は、『京都府遺跡地図第4分冊〔第2版〕』(1989年、京都府教育委員会発行)・『大山崎町遺跡地図』(1989年、大山崎町教育委員会発行)によれば、長岡京跡の南限にあたり、百々遺跡の範囲にも重なっている。4年に及ぶ発掘調査の結果は、長岡京の条坊関係の遺構をいっさい発見することができなかった。この事実は、その頃、長岡京の想定二条大路の北二町の位置で二条大路相当幅の道路遺構が発見されたことと合わせて、見直しの論議が盛んであった長岡京の条坊問題について大きな方向性を与えることとなった。すなわち、長岡京の京域を従来の説より北へ二町分ずらして考える意見であって、いまではこの案がもっとも説得的である。この場合、今回報告する調査区は長岡京の九条大路の外—京の南郊ということになる。ただし、長岡京の四至については、いまなお発掘調査で確認されてはいないのであって、長岡京の調査・研究にとって急務の課題といえる。

こうして、本地区では長岡京の遺跡は見いだし得なかったのであるが、その前後の時代の各種遺構・遺物があまた発見された。それらは縄文時代から室町時代に至る長期のものであるが、西国街道とその周辺に営まれた平安時代から室町時代にかけての遺構・遺物が主体をなす。本書は、交通の要衝に営まれた百々遺跡の変遷過程を追究した報告書であるが、付近には弥生～古墳時代を中心とする広大な集落遺跡である算用田遺跡や下植野南遺跡が展開しており、こうした遺跡群の推移を比較検討することによって、この地域の歴史がさらに詳しく具体的に明らかになるものと期待される。この点については、現在準備を進めている下植野工区の報告書でその責の一端を果たしたい。

(平良泰久)

第1章　調査に至る経過

第1節　調査の経過

調査地は、京都府乙訓郡大山崎町大字円明寺内の井尻・百々・御所前・開キ・夏目にわたり、百々遺跡の範囲にあたる。また、金蔵遺跡及び算用田遺跡に近接し、第三次山城国府推定地をも含む。第三次山城国府は797～861年までの山城国の国府で、「長岡京南」に位置したとされている。その場所は確定していないが、百々遺跡を中心とした位置に推定する考えがある。百々遺跡は数次の調査により、平安時代前期の掘立柱建物跡や溝などを確認しており、この時期を中心とする遺跡であると推定される。算用田遺跡では、1985年の大山崎町教育委員会の発掘調査で古墳時代後期の竪穴式住居跡が確認されており、金蔵遺跡では1980年の調査で中世を主体とする遺構・遺物を検出しているが、両遺跡とも調査面積が少ないためその全貌はよくわかっていない。さらに、調査対象地全体が長岡京の推定九条南側隣接地にあたることや、都と西国を結ぶ官道「山陽道」が想定される範囲に含まれることから、長岡京に関連する遺構の検出も期待された。

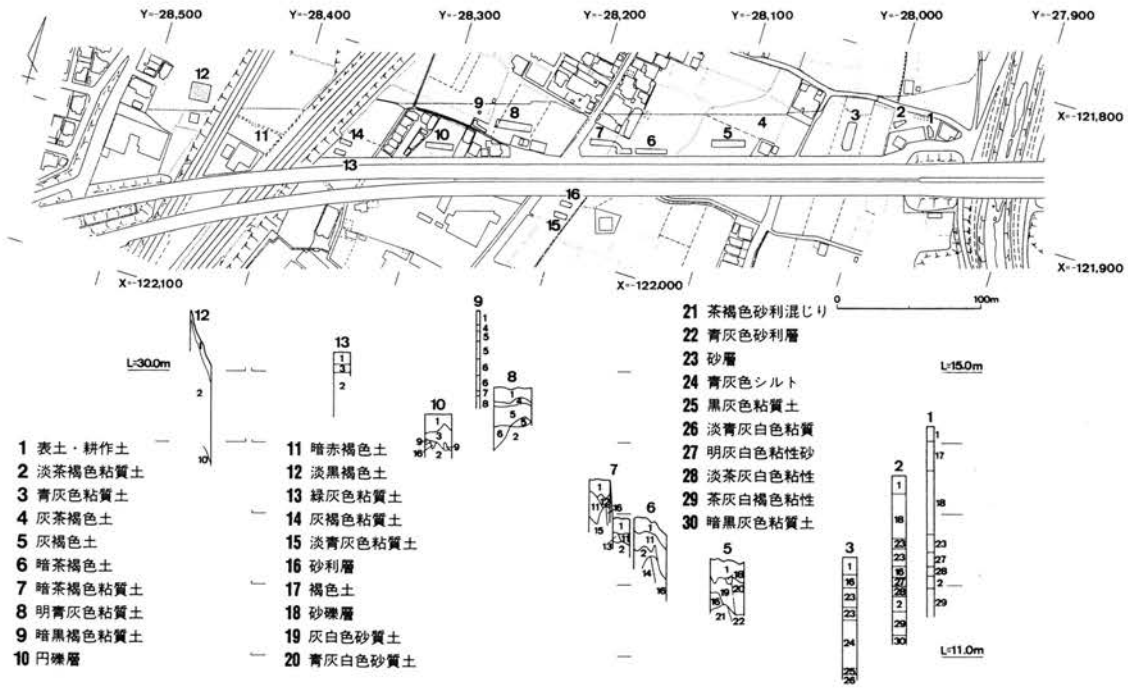
これらの調査対象面積は、約73,000㎡にも及ぶ広域であるため、まず、用地買収の進んでいる地点から試掘調査を行い、調査の計画を立てることとした。ここで使用する「名神大山崎工区」の名称は、中央自動車道西宮線(通称名神高速道路)の拡幅工事に伴い、日本道路公団によって設定された工事区分を踏襲した。

調査は、平成元(1989)年度に試掘調査を行い、その結果にもとづき調査計画を立て、翌平成2年度から本調査を開始した。本調査には、用地の買収なども含め調査地点を選びながら最終的に3年間を要し、平成4(1992)年度に終了した。本調査に係る経費は、日本道路公団が負担した。

第2節　試掘調査の結果

平成元年度は、1～11地点のうち用地の都合により取りやめた4・11地点を除く9か所で試掘調査を行い、遺構・遺物の広がりを調査した(第1図)。あわせて、名神高速道路の拡幅工事に伴い移転が計画された、関西電力の鉄塔移設予定地での調査を、3地点で計5トレンチを設定し行った。その結果、3トレンチ周辺と13・14トレンチ以西を除く大山崎工区のほぼ全域にわたって遺構・遺物が包蔵されていることが判明した。以下では、試掘調査の結果にもとづき、周辺の調査成果もふまえて、調査対象地内における遺跡の状況を検討する。

1・2トレンチでは、調査地点の東を流れる小泉川水系の砂礫～砂層の堆積以下で淡茶褐色粘質土・茶灰白褐色粘性土と連続する堆積層を確認し、2トレンチでは、その下層で暗黒灰色粘質土の土師器を含む遺物包含層を検出した。これらの結果、この地点の南に広がる算用田遺跡や、北東の松田遺跡などの古墳時代の集落跡に関連した包含層を検出したと考えられる。



第１図　試掘トレンチ配置図及び平面図・土層柱状図

３トレンチでは、１・２トレンチと同様の砂礫～砂層の堆積以下で青灰色のシルト・黒灰色粘質土・淡青灰白褐色粘質土を確認した。これらの層からは、若干の遺物は出土したものの、遺構は検出できなかった。この地点は、今回の調査地の内で最も低位に当たり、いずれの層にも生活面がないと判断した。

５トレンチでは、現耕作土下で青灰白色または灰白色の砂質土となり、その下層では、西半部で茶褐色砂利混じり層、東半部で青灰色砂利層を検出した。これらの層は、多くの遺物を包含しており、精査によって溝やピットなどの遺構を検出した。また、東半部の青灰色砂利層の下層では東に向かって地形が下がることが明らかとなった。

６・７トレンチは、旧西国街道の東に設けたトレンチである。両地区で連続する層位として、耕作土・暗赤褐色土・淡茶褐色粘質土を検出した。淡茶褐色粘質土層の精査では、方形掘形を含むピット群を検出した。また、西国街道の東脇では、同街道の側溝の可能性のある土器を含む砂利層を検出した。この調査区では、試掘調査全体で一番多くの遺物が出土した。

８～10トレンチは、旧西国街道の西に設けたトレンチである。８・９トレンチでは耕作土以下の灰茶褐色土・灰褐色土・暗茶褐色土までの堆積状況はほぼ同じであるが、西国街道の東でピット群を検出した淡茶褐色粘質土を、８・10トレンチで検出した。また、この面での精査では、多数のピットを検出した。

15・16トレンチは、鉄塔移設予定地で、旧西国街道の東に設けたトレンチである。現地表下約１ｍで黄褐色土となり、この面で多くのピットを検出した。

12トレンチは、立地が天王山の丘陵部で現況は竹林となっていた。表土下で淡赤褐色粘土層・円礫層となり、遺構を検出できなかった。わずかに土師器片が出土したにすぎない。

13・14トレンチでは、耕作土下で青灰色砂利混じり粘質土・淡茶褐色粘質土を検出したが、遺構・遺物とも検出できなかった。

これらの調査の結果、調査対象地内における百々遺跡の範囲は、東は5トレンチから西は10トレンチまでの地域であることが確認できた。

第3節　調査の方法

平成2年度からの本調査を開始するに当たり、大山崎工区は、小泉川から天王山まで約600mの路線長があるため、便宜上、次のように地区の表示を行うこととした。西から東にA～Eの5地区に分け、A地区は天王山トンネルから阪急電鉄の間の山腹部、B地区は阪急電鉄とJR西日本鉄道の間の丘陵裾部、C地区はJR西日本鉄道以東で府道樫原－高槻線(通称西国街道)以西、D・E地区は西国街道から小泉川の間とした。D地区とE地区の間は、試掘第3トレンチで沼状の地形となって落ち込むことが判明しており、この沼状の落ち込みの西側をD地区、東側をE地区とした(第2図)。

A～C地区は、百々遺跡と第三次山城国府推定地の一つにあたり、A・B地区は山崎城の造ら

付表1　調査地一覧表

平成元年度1989（試掘調査）

トレンチ名	次数	調査記号	所在地(字名)	推定遺構（遺跡）	面積	開始	終了	担当
1～7	R343	7ANSIR	円明寺井尻	百々遺跡・算用田遺跡	740	1/8	2/8	三好
8～10・13・14	R343	7ANSDD-3	円明寺百々	百々遺跡・第三次山城国府		1/8	2/8	三好
11	R343	7ANSGE-2	円明寺御所ノ前	百々遺跡・第三次山城国府		1/8	2/8	三好
12	R343	7ANSHK-2	円明寺開キ	百々遺跡・第三次山城国府	260	1/8	2/8	三好
15・16	R343	7ANSNM-2	円明寺夏目	百々遺跡		2/13	3/8	三好
合計					1,000			

平成2年度1990

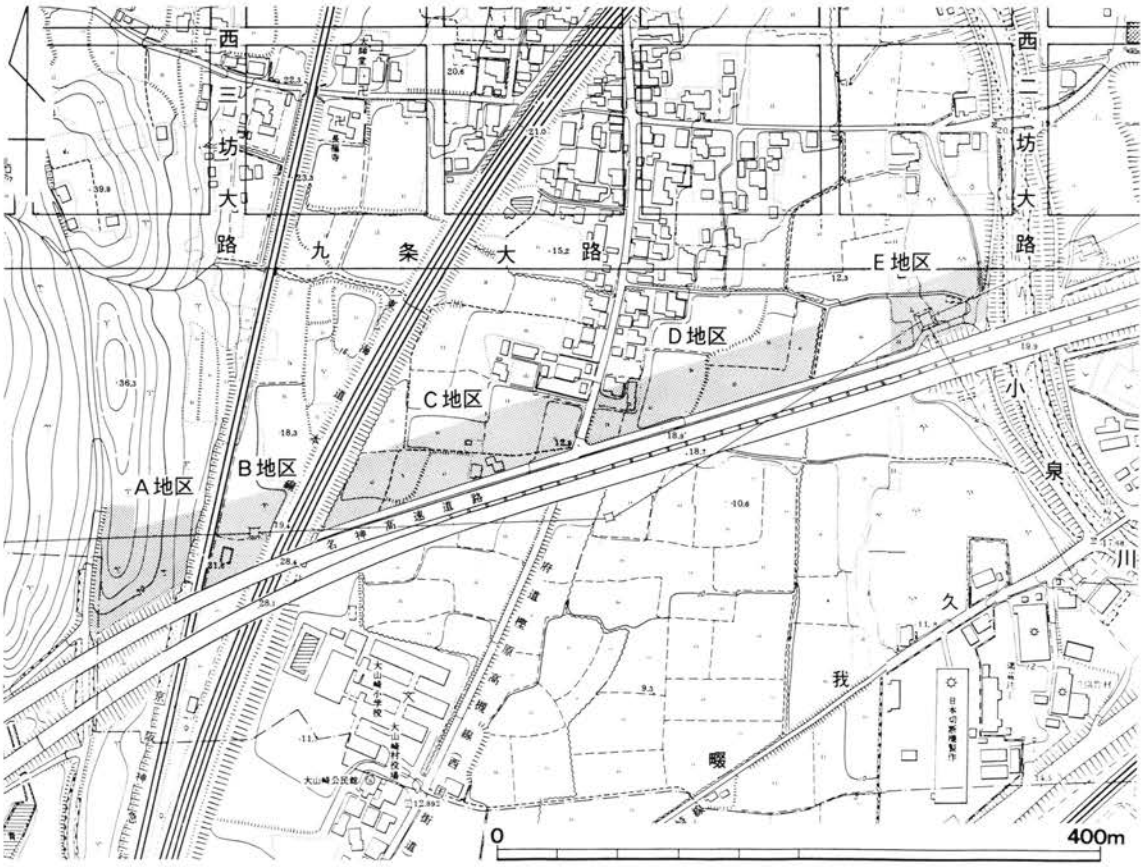
地区名	次数	調査記号	所在地(字名)	推定遺構（遺跡）	面積	開始	終了	担当
A地区	R349	7ANSHK-2	円明寺開キ	百々遺跡・第三次山城国府	200	9/10	10/12	岩松
B地区	R349	7ANSGE-3	円明寺御所ノ前	百々遺跡・第三次山城国府	100	4/9	5/15	中川
C-1地区	R349	7ANSDD-4	円明寺百々	百々遺跡・第三次山城国府	540	10/17	3/6	岩松
C-2地区	R349	7ANSDD-4	円明寺百々	百々遺跡・第三次山城国府	660	10/17	3/6	岩松
D地区	R349	7ANSIR-2	円明寺井尻	百々遺跡・算用田遺跡	2,650	5/10	3/6	岩松
合計					4,150			

平成3年度1991

地区名	次数	調査記号	所在地(字名)	推定遺構（遺跡）	面積	開始	終了	担当
C-2地区	R349	7ANSDD-4	円明寺百々	百々遺跡・第三次山城国府	1,230	4/8	12/20	岩松
C-3a地区	R367	7ANSDD-5	円明寺百々	百々遺跡・第三次山城国府	1,190	4/16	12/9	岩松
C-3b地区	R367	7ANSDD-5	円明寺百々	百々遺跡・第三次山城国府		4/16	7/17	岩松
D-2地区	R367	7ANSIR-2	円明寺井尻	百々遺跡・第三次山城国府	100	8/6	9/27	岩松
E地区	R367	7ANSIR-2	円明寺井尻	百々遺跡・算用田遺跡	1,000	12/9	3/6	石尾・戸原
合計					3,520			

平成4年度1992

地区名	次数	調査記号	所在地(字名)	推定遺構（遺跡）	面積	開始	終了	担当
C-4地区	R394	7ANSDD-6	円明寺百々	百々遺跡・第三次山城国府	750	6/9	8/28	石尾
C-3地区	R394	7ANSIR-4	円明寺井尻	百々遺跡・第三次山城国府	220	1/7	3/5	岩松
E地区	R367	7ANSIR-3	円明寺井尻	百々遺跡・算用田遺跡	1,000	4/8	6/6	石尾
合計					1,970			



第2図　大山崎工区地区割り図

れた天王山の山裾に位置する。D地区は、金蔵遺跡と算用田遺跡の範囲にある。

これらの地区内では、用地買収など条件整備の進捗に合わせ調査を行うため、地区内での調査順に合わせて地区名の後ろに枝番号を付すこととした。また、周辺の調査との混乱を避けるため、上記の地区名と合わせ長岡京の調査地の地区名と調査次数を併用した。

第4節　調査の体制

本調査を行った調査組織は以下の通りである。

調査主体者　福山　敏男(理事長　平成元～4年度)
調査責任者　荒木昭太郎(事務局長　平成元年度)
　　堤　圭三郎(事務局長　平成2年度)
　　松阪　寛支(事務局長　平成2・3年度)
　　城戸　秀夫(事務局長　平成4年度)
調査担当責任者　中谷　雅治(次長兼調査第1課長　平成元～4年度)
　　杉原　和雄(調査第2課長　平成元年度)
　　安藤　信策(調査第2課長　平成2～4年度)
事　務　局　山本　　勇(次長兼総務課長　平成元年度)

小林　将夫(次長兼総務課長　平成２・３年度)
佐伯　拓郎(次長兼総務課長　平成４年度)
安田　正人(総務係長　平成元～３年度
総務課長補佐兼総務係長　平成４年度)
杉江　昌乃(主事　平成元～４年度)
今村　正寿(主事　平成元～４年度)
鍋田　幸世(主事　平成元～４年度)
松尾　幸枝(主事　平成元～４年度)
林　淳次(主事　平成元年度)
上田　幸正(主事　平成２～４年度)
調査担当者　平良　泰久(課長補佐兼調査第４係長　平成４年度)
小山　雅人(調査第３係長　平成元～３年度)
戸原　和人(調査第３係主任調査員　平成元～３年度
調査第４係主任調査員　平成４年度)
石尾　政信(調査第３係調査員　平成３・４年度
調査第４係調査員　平成４年度)
岩松　保(調査第３係調査員　平成２・３年度
調査第４係調査員　平成４年度)
三好　博喜(調査第３係調査員　平成元年度)
中川　和哉(調査第３係調査員　平成２年度)

発掘調査参加者(敬称略)

平成元年度：青木和人・青木　潤・青木葉子・赤池学博・赤沼謙吾・東　裕子・石津敦子・岡田典久・片山和子・北村　清・久保博昭・坂本英美・滝脇善充・武田宏司・武村英治・田中あゆみ・田中　牧・塚本映子・辻川哲朗・常脇由香子・十時奈津子・飛田浩一・中崎憲和・中原昌弘・長田康平・野田典枝・秦光次郎・服部典子・早川文乃・原田光明・広瀬時習・船越裕介・別所寛康・松尾均子・水野　泰・宮本純二・山口昌彦・山根嘉久男・若松幹郎。

平成２年度：青木葉子・赤池学博・赤木　香・東　裕子・石井晶子・岩佐聖子・上村恵代・栄本祐子・江口正孝・江藤結城・大倉英士・太田菜諸子・小田裕子・大森智子・岡田良紀・小島孝修・加藤真弓・川崎法子・北岡理絵・久保博昭・小藤俊太郎・小牧　勲・坂本英美・坂本祐三子・澤野智佳代・渋谷庸子・清水琢哉・進木和美・首藤有里・鈴木陽一郎・高峰靖子・高尾恵子・竹内美砂・武田宏司・辻本幸子・椿井良昌・飛田浩一・中崎憲和・中西正和・成田理絵・浜中邦弘・針尾有章子・春木増美・広瀬時習・別所寛康・松本とも子・丸尾　晋・溝口博士・三柳洋一・宮本純二・三次美紀・吉田絵里・若松幹郎。

平成３年度：阿部真生・赤池学博・赤尾　健・赤木　香・綾部弥奈子・岩佐聖子・江口正孝・小倉紀子・大倉英士・小笠原健二・小島真木子・尾関真二・柿原　実・北岡里絵・久保博昭・小島孝修・小牧勲・小村美香・迫田友子・迫田伸子・澤田昌子・島田加奈・島田豊章・首藤有里・進木和美・高尾恵子・寺本知佐子・飛田浩一・鳥井田かおり・中川千秋・中村祐子・西田良平・野田雅美・林　美希・針尾有章子・廣末貴子・広瀬時習・前田暁宏・前田起世江・松井真美・松本とも子・溝口博士・宮本純二・森　暢子・森　喜子・山門芳江・山本恵子・山本憲作・梁井　裕・吉田絵里・芳谷一郎・四塚笑子・若松幹郎

平成４年度：赤木　香・江口正孝・岡本一秀・小笠原健二・小島真木子・尾関真二・片山普美子・門脇秀典・兼島美帆・河合弥生・北岡里絵・木下いづみ・小島孝修・小村美香・島田豊彰・首藤有里・進木和美・飛田浩一・永見真知子・針尾周吉・広瀬時習・溝口博士・宮本純二・八津谷　都・柳井みずえ・山門芳江・山本恵子・吉田絵里・四塚笑子・脇村有美

整理作業参加者(平成元～８年度)

青山恵子・小田栄子・竹内千賀子・竹谷和子・田村重野・下園京美・鈴木まり子・内藤チエ・西村敏子・若林照子・吉谷美佐子・高山(坂本)英美・小野山信子・久平喜美子・長谷川マチ子・明日礼子・荒川仁佳子・小澤和子・長尾美恵子・河野晶子・倉辻万里子・村上優美子・奥村美紗代・佐藤卓子・竹内友美・米沢裕子・串田香奈子・倉西雅子・関口睦美。

現地指導者(順不同・敬称略)

都出比呂志・中山修一・川上　貢・足利健亮・上田正昭・佐原　眞・樋口隆康・木下　良

第５節　各年度の調査概要

平成元年度における試掘調査の概要については、前節で述べたとおりである。ここでは、平成２年度から平成４年度までの調査成果を簡単にふりかえることとする。

１．平成２年度の調査(7ANSHK-2・SGE-3・SDD-4・SIR-2地区)

調査地は、長岡京跡の右京九条域に接するため右京第349次調査とした。調査は、Ａ地区の１か所で約200㎡を、Ｂ地区の１か所で約100㎡を、Ｃ地区では２か所で合計約1,100㎡を上層遺構の調査とし、３年度に下層遺構の調査を引き続き行うこととした。Ｄ地区では１か所で約2,650㎡の発掘調査を行った。調査には、平成２年４月９日から平成３年３月６日までを要した。

調査の結果、西国街道の路面と側溝、掘立柱建物跡や井戸などを検出した。調査で確認した側溝は、９世紀中頃から10世紀中頃のもので、周辺で検出した建物跡の中軸はすべて西国街道に並行していた。これらの遺構を検出したことによって、平安時代前期の宅地割りと西国街道の敷設時期や、その構造の一端が明らかになった。第三次山城国府については、９世紀前半の遺構が検出されておらず、関連する資料は得られなかった。また、長岡京期の遺構も検出されず、この時期の周辺での土地利用については否定的な結果となった。

２．平成３年度の調査(7ANSDD-4・5、SIR-2地区)

右京第349・367次調査として、３地区で５トレンチの調査を実施した。

Ｃ地区では昨年度に引き続き下層の調査を行うトレンチと、地区内中央に水路が南北に走るため、２か所で1,190㎡のトレンチを設けた。Ｄ地区では昨年度調査地区の南東部分で１か所100㎡を、Ｅ地区の調査は1,000㎡について今年度から着手した。この調査トレンチは、本年度は上層について実施し、平成４年度に継続して下層の調査を行うこととした。調査には、平成３年４月８日から平成４年２月27日までを要した。

調査の結果は、昨年度の調査成果と同様であった。西国街道の西側溝は、９世紀中頃から10世

紀中頃のものであり、周辺で検出した建物跡はすべて西国街道に平行していた。これらの遺構を検出したことで、平安時代前期の宅地割りと西国街道の敷設時期や、その構造の一端が明らかになった。しかし、第三次山城国府については、本年度もその存在を示す資料は確認されていない。この地区周辺では、都が長岡京から平安京に移された後に、西国街道が整備され、これに沿って建物群が建てられている状況である。長岡京期の遺構も検出されていない。

3．平成４年度の調査(7ANSDD-6、SIR-3・4地区)

最終年度の調査である。Ｃ地区で１か所750㎡、Ｄ地区で１か所220㎡の調査を、またＥ地区では昨年度に引き続いて下層の調査を実施した。宅地の移転など用地問題のため残っていた地点での調査である。Ｃ地区では、中世・平安時代の掘立柱建物跡・井戸・土坑などを検出した。Ｄ地区では、９世紀後半と考えられる西国街道東側溝の続きや、同側溝の方位に並行する掘立柱建物跡などを検出した。Ｅ地区では、平安時代以降の氾濫堆積の下層から轍跡や、古墳時代後期の竪穴式住居跡などを検出した。調査には、平成４年４月８日から平成５年３月５日までを要し、すべての調査を終了した。

この４年間の調査は、第三次山城国府推定地や平安京と西国を結ぶ古代山陽道の調査など、長岡京外であるにもかかわらず、古代国家に係わる重要遺跡の調査をすることとなった。平成２年度以降の本格的な調査では、以下のことが判明した。

縄文時代　包含層から、数点の土器片がＣ地区で出土している。

弥生時代　Ｄ地区で、数棟の後期～庄内期の竪穴式住居跡を検出している。南に広がる算用田遺跡との関連であろう。

古墳時代　前期のものとして、Ｄ地区やＣ地区の埋め甕があるが、竪穴式住居跡は確認していない。後期には、Ｅ地区やＣ地区で竪穴式住居跡が確認されている。Ｅ地区の竪穴式住居跡は、下植野南遺跡の広がりの中で捉えられるが、Ｃ地区の竪穴式住居跡は周辺で同様の遺構が検出されておらず、調査地の北側に集落が想定されるにすぎない。

平安時代　広範囲にわたって、掘立柱建物跡や井戸跡が検出されているが、想定される第三次山城国府は、建物跡の配置・規模など、国府を推定できるものではない。また、西国街道の路面や側溝からは、路面が西側に造り替えられていくことや、その造営時期が９世紀初頭にさかのぼることが明らかとなった。

鎌倉時代以降　西国街道の西側で検出した掘立柱建物跡や井戸跡などは、宅地の配置がわかる資料としてまとまる。

(戸原和人)

第2章　遺跡の環境

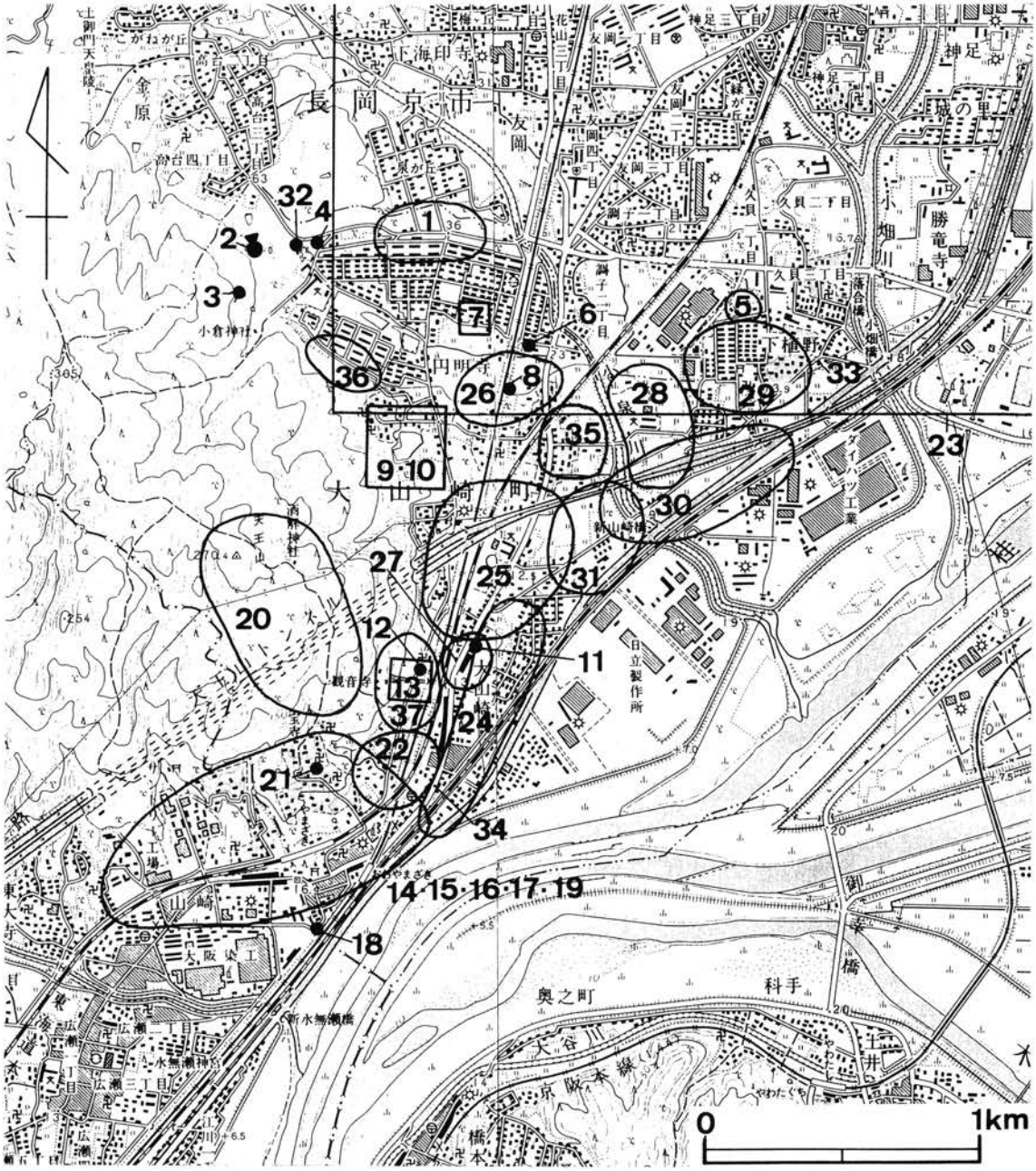
大山崎町は、京都盆地の西南部に位置し、西半部は西山山地の一部が北西から南東に連なり、山地の東縁に丘陵・段丘が分布し、その東側は桂川とその支流である小泉川によって形成された沖積地が広がる(第3図)。

山地南端には、標高270mの歴史上よく知られた天王山がある。天王山山麓の段丘と、桂川・宇治川・木津川の三河川が合流して淀川となる場所のあいだの狭い範囲に、ＪＲ東海道線・新幹線・阪急京都線・国道171号線・名神高速道路などが通る交通の要衝となっている。

今回報告する大山崎工区は、名神高速道路で京都方面に向かい、天王山トンネルをぬけた丘陵上から、段丘端をかすめて扇状地を通り、小泉川橋梁にいたる区間である。

大山崎町内には多くの遺跡があり、後期旧石器時代のものでは、ＪＲ山崎駅北東の丘陵～段丘上に山崎遺跡がある。縄文時代には、大山崎町北東部の低位段丘から小泉川が形成した扇状地に、長岡京市との境界の硲遺跡や宮脇・松田・下植野南遺跡がある。弥生時代になると、町の北部の段丘上に脇山遺跡、小泉川左岸の宮脇・松田・下植野南遺跡、同右岸の算用田・百々遺跡と遺跡の数も増加してくる。古墳時代には、弥生時代の遺跡がさらに発展して、多数の住居跡が検出されている松田・下植野南遺跡や算用田遺跡は、一体となって拠点集落を形成していくと推定される。また、北部の丘陵上には、有力首長墓と推定される古墳時代前期の鳥居前古墳があり、北東部の低位段丘上に中期の境野古墳群がある。後期の小倉古墳をはじめ、いくつかの全壊した古墳があるが、町内に古墳は多くない。

奈良時代になると、古瓦の出土で知られる山崎廃寺、行基が架けた山崎橋跡・布教活動の拠点とした山崎院跡などがつくられる。山崎院跡と推定される地域では氏名や人名を記した陰刻瓦、緑釉陶器・須恵器などが出土している。町の北部は、桓武天皇による長岡京遷都で都城の一部となり、京域内外で長岡京期の遺構・遺物が見つかっている。道路や港(山崎津)も整備されていたと推測される。長岡京廃都後、山城国府が長岡京の南に移された記録があり、その候補地に百々遺跡(第三次国府)がある。ここでは、山陽道の側溝をはじめ、平安時代～中世の建物跡群・井戸跡や多数の遺物が発見されている。嵯峨天皇が水無瀬・交野方面への行幸に利用する離宮をつくり、これが後に河陽離宮と呼ばれた。離宮は、天皇の没後に国府に転用され、第四次国府となった。そこには相応寺跡や、多くの施設がつくられていた。第四次山城国府は、ＪＲ山崎駅の南の離宮八幡宮周辺と推定されている。ここでも平安時代の山陽道の側溝が検出され、山陽道が百々遺跡から離宮八幡宮まで、現在の府道樫原高槻線(西国街道)とほぼ同じ場所を通ると推定されている。中世には八幡宮を中心とした油座が結成され、全国に荏胡麻油を販売して、山崎は大変繁栄していた。近年油を入れた壺が見つかり、油生産が行われていたことが証明された。



第３図　周辺遺跡分布図

1. 脇山遺跡(弥生時代)
2. 鳥居前古墳(古墳時代)
3. 小倉古墳(古墳時代)
4. 石倉集石遺跡(江戸時代)
5. 境野古墳群(古墳時代)
6. 葛原親王塚跡伝承地(平安時代)
7. 葛原親王屋敷跡伝承地(平安時代)
8. 里後古墳(古墳時代)
9. 円明寺跡(平安～鎌倉時代)
10. 九条家屋敷跡(平安～鎌倉時代)
11. 傍示木古墳(古墳時代)
12. 白味才古墳(古墳時代)
13. 山崎廃寺(白鳳～平安時代)
14. 河陽離宮跡(平安時代)
15. 相応寺跡(平安時代)
16. 山崎国府跡(第４次国府)(平安時代)
17. 山崎院跡(奈良～平安時代)
18. 山崎橋跡(奈良～平安時代)
19. 山崎駅跡(平安時代)
20. 山崎城跡(桃山時代)
21. 銭原遺跡(奈良時代)
22. 山崎遺跡(旧石器時代)
23. 長岡京跡(長岡京期)
24. 山崎津跡(奈良～平安時代)
25. 百々遺跡(第３次国府)(平安時代)
26. 久保川遺跡(鎌倉～室町時代)
27. 堀尻遺跡(鎌倉～室町時代)
28. 松田遺跡(縄文～古墳時代)
29. 宮脇遺跡(縄文～古墳時代)
30. 下植野南遺跡(縄文～古墳時代)
31. 算用田遺跡(古墳～飛鳥時代)
32. 鳥居前遺跡(奈良時代)
33. 久我畷(平安時代)
34. 山陽道(長岡京期～平安時代)
35. 金蔵遺跡(鎌倉時代)
36. 西法寺遺跡(室町時代)
37. 白味才遺跡(平安時代)

山崎合戦で明智光秀軍に勝利した羽柴秀吉は、天王山に城を築き、山頂には石垣・土塁・空堀・礎石などが現在も残っている。秀吉につかえた千利休が残した茶室(持庵)は国宝となり、ＪＲ山崎駅前の妙喜庵にある。

今回報告する大山崎工区は、長岡京跡の隣接地で百々遺跡・算用田遺跡の範囲に入る。

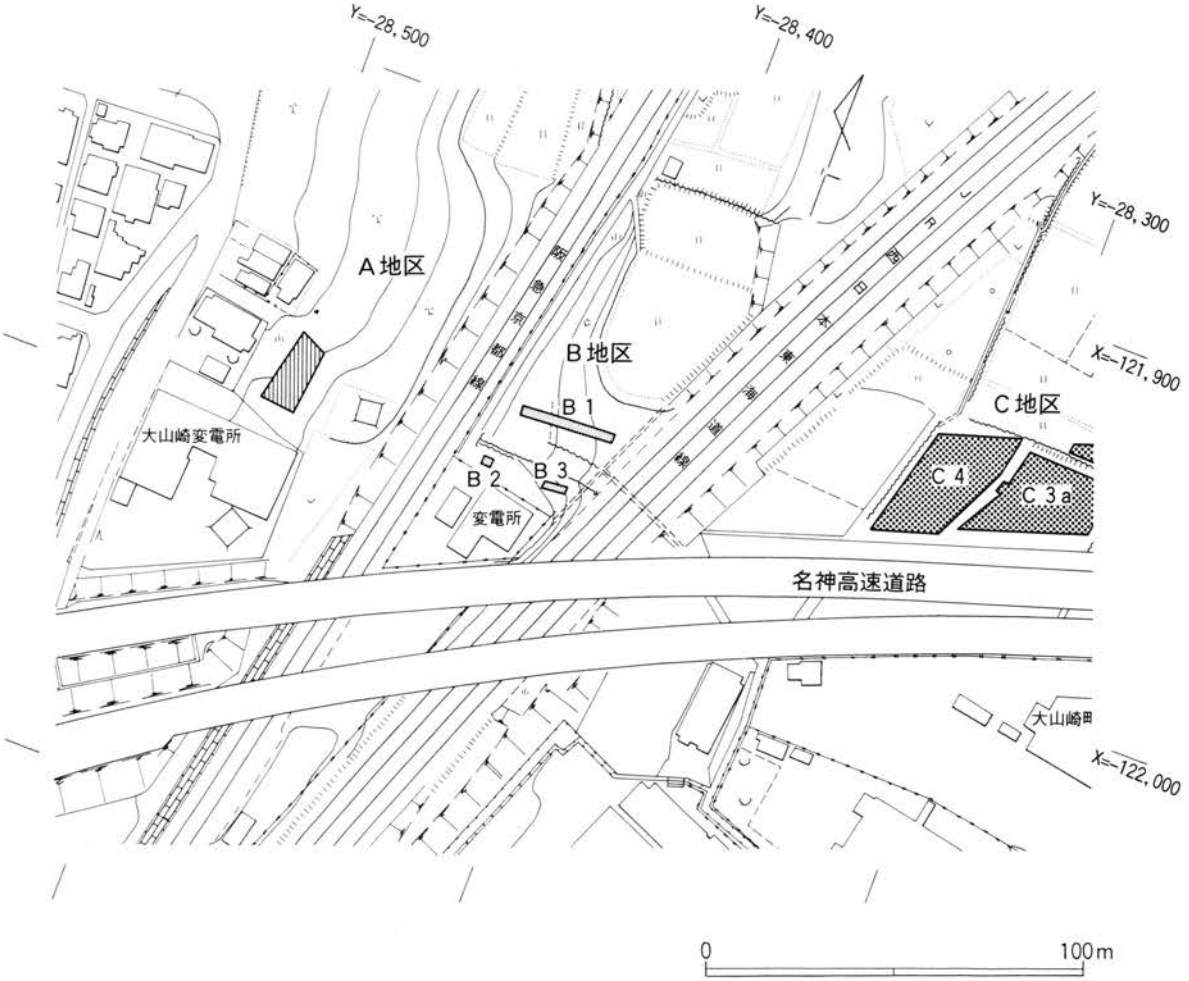
(石尾政信)

第3章　検出遺構

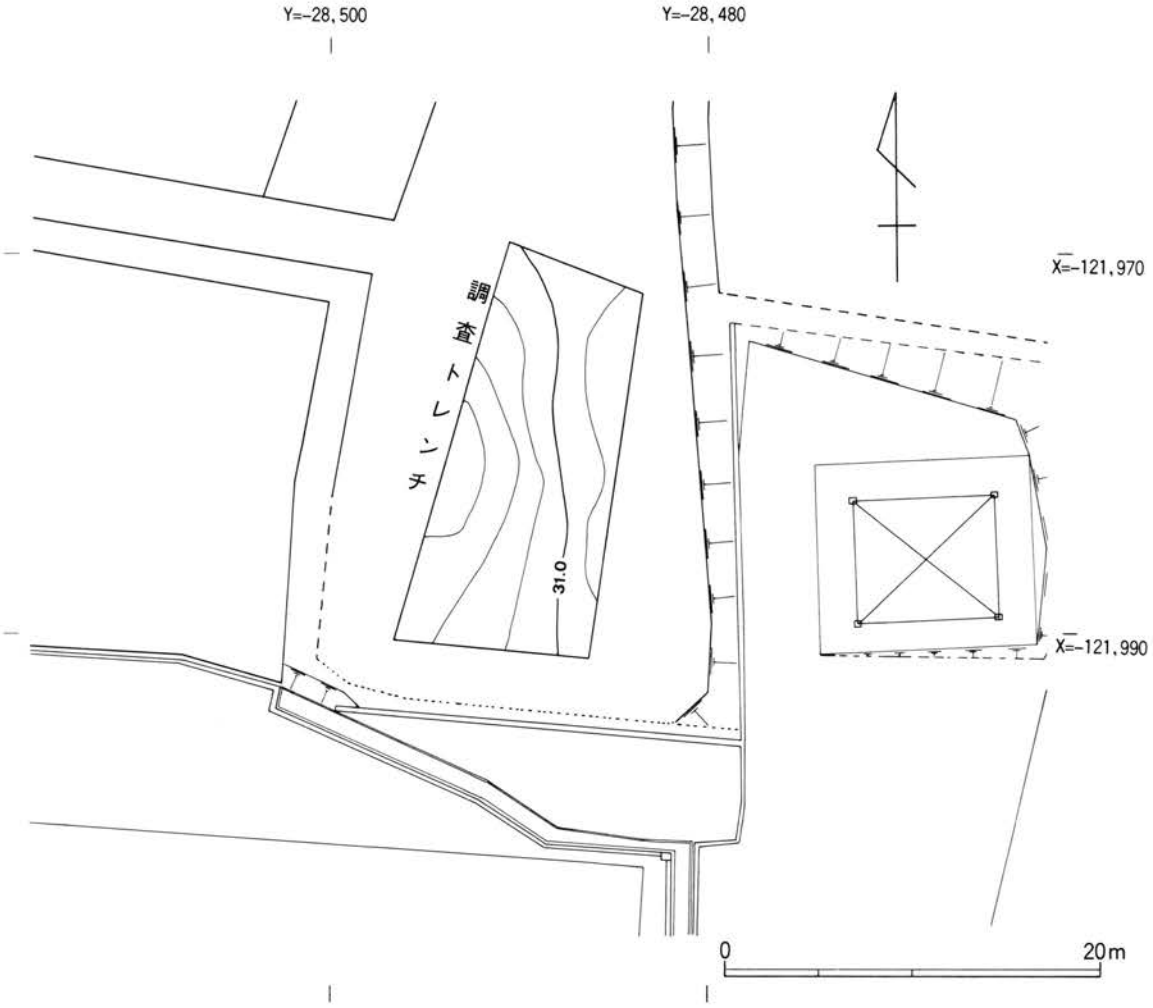
第1節　A地区の調査(図版第77)

A地区は、阪急京都線以西、天王山トンネルまでの総長約200mにあたり、天王山の東斜面地の一角に位置している(第4図)。大山崎町大字円明寺小字開キ地内にある。A地区の西半――南北に走る町道の西側は、広範囲に住宅地が開発されており、遺構はすでに削平されていると判断された。そのため、遺構・遺物が残っている可能性が高い、町道の東側、現状では畑地・竹林になっている緩傾斜面で調査を行うこととした。さらに、平成元年度に行った試掘12トレンチでは土師器片の出土をみたが、遺構は確認されなかったため、このトレンチの西南方約30mの平坦地に22m×10.5mのトレンチを設定して、遺構の検出に努めた(第5図)。

この調査トレンチでは、西から東に下る傾斜面を確認したのみで、遺構は全く検出できなかった(図版第2)。調査地東壁で南北方向の土層を観察すると、現代の畑作の耕作土下には、若干の



第4図　A・B地区トレンチ配置図



第５図　Ａ地区トレンチ位置図

遺物を含んだ暗黄褐色土が厚く堆積していた。また、トレンチの南壁で行った東西土層の観察では、地形が高い西側から東に向けて土砂が流入・堆積したと推定され、長い年月の間に土砂の流入・流出が頻繁に繰り返されたと判断され、生活痕跡を示すような包含層は認められなかった。一部、石の集積が認められたが、地山内の石が風化して散乱したものと判断した。包含層からは、須恵器甕腹片、土師器片が少量出土しているが、図化しうるものはない。

今回Ａ地区とした地区内では、右京第68次調査として大山崎町教育委員会が実施している。今回設定した試掘トレンチの南側の関西電力大山崎変電所内で発掘調査を行っており、その時の調査では、地表下約２ｍ以上の盛り土層を確認したに留まっている。こういった過去の調査の結果からも、遺構や遺物が包蔵されている可能性は低いと推測された。

この地区には、第三次山城国府関連施設が包蔵されていると推定されたが、それと関連づける資料は確認できなかった。前に述べたように、Ａ地区の西半は天王山住宅が造られており、Ａ地区全域にわたって遺構・遺物はすでに削平されていると推定され、この試掘調査をもってＡ地区の発掘調査は終了した。

（岩松　保）

第２節　Ｂ地区の調査(図版第78)

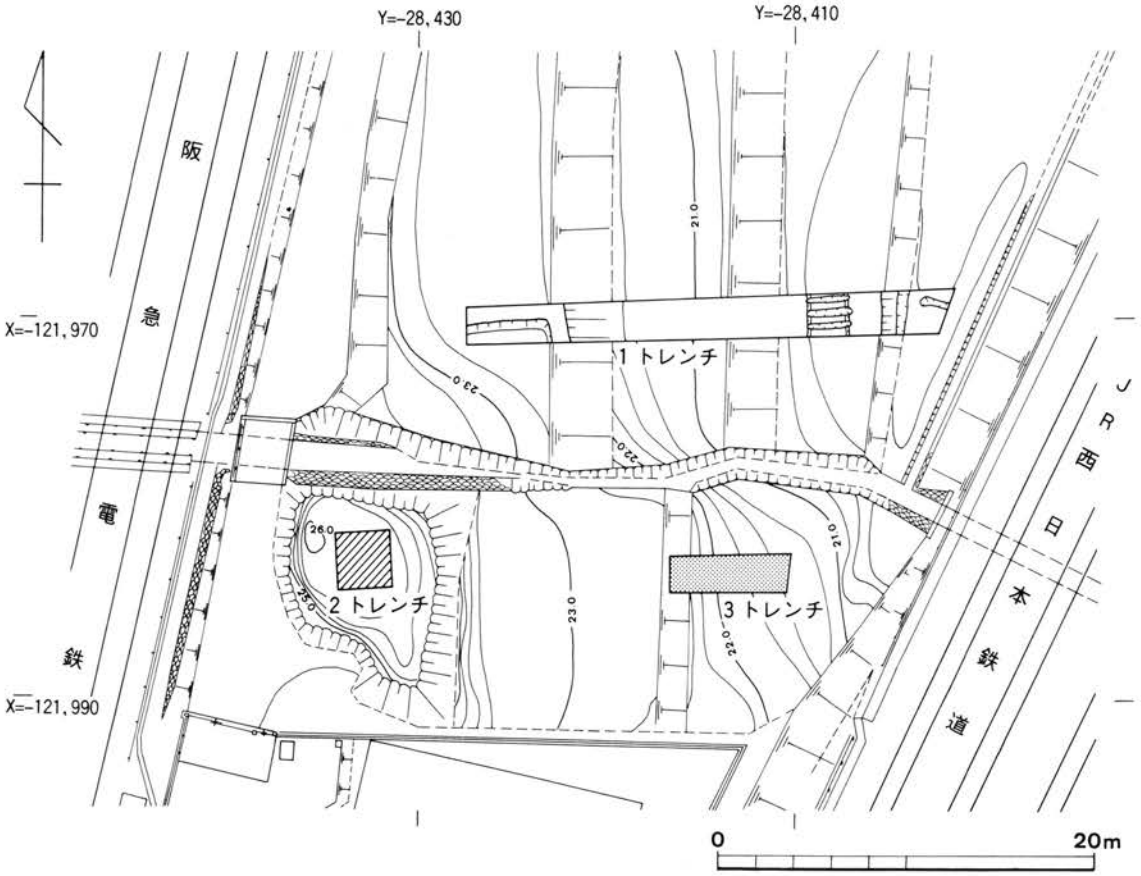
ＪＲ西日本鉄道東海道線と阪急京都線の間の約40mをＢ地区とした。Ｂ地区は大山崎町大字円明寺小字御所ノ前に所在する。調査前は、南北に細長い棚状の竹林があり、この地区の小字名とともに、調査前の地形が階段状の小区画にわかれていたため、天王山に築かれた山崎城の「出城」的な施設があった可能性が指摘できた。トレンチを地形にあわせて３か所に設け、遺構・遺物の広がりをまず確認することに調査の主眼をおいた(第６図)。

調査の結果、畑の耕作に係わる数本の溝や地境溝が検出できたが、近世以前と考えられる顕著な遺構は確認できなかった。現状で認められた階段状の地形は、竹の栽培もしくはそれ以前の畑作にかかわるもので、土器の細片は比較的多く出土したが、中世の出城などの施設に関連する遺構の可能性は少ないと判断された(図版第３)。

出土した土器には、弥生土器や須恵器、瓦器などが含まれているが、多くは細片で図化できるものはなかった。中には中国製の磁器片がある。

以上のことから、当初想定された遺構がもともとは存在していたとしても、後世に削平されたと考えられ、Ｂ地区の調査は１～３トレンチをもって終了した。

(中川和哉)



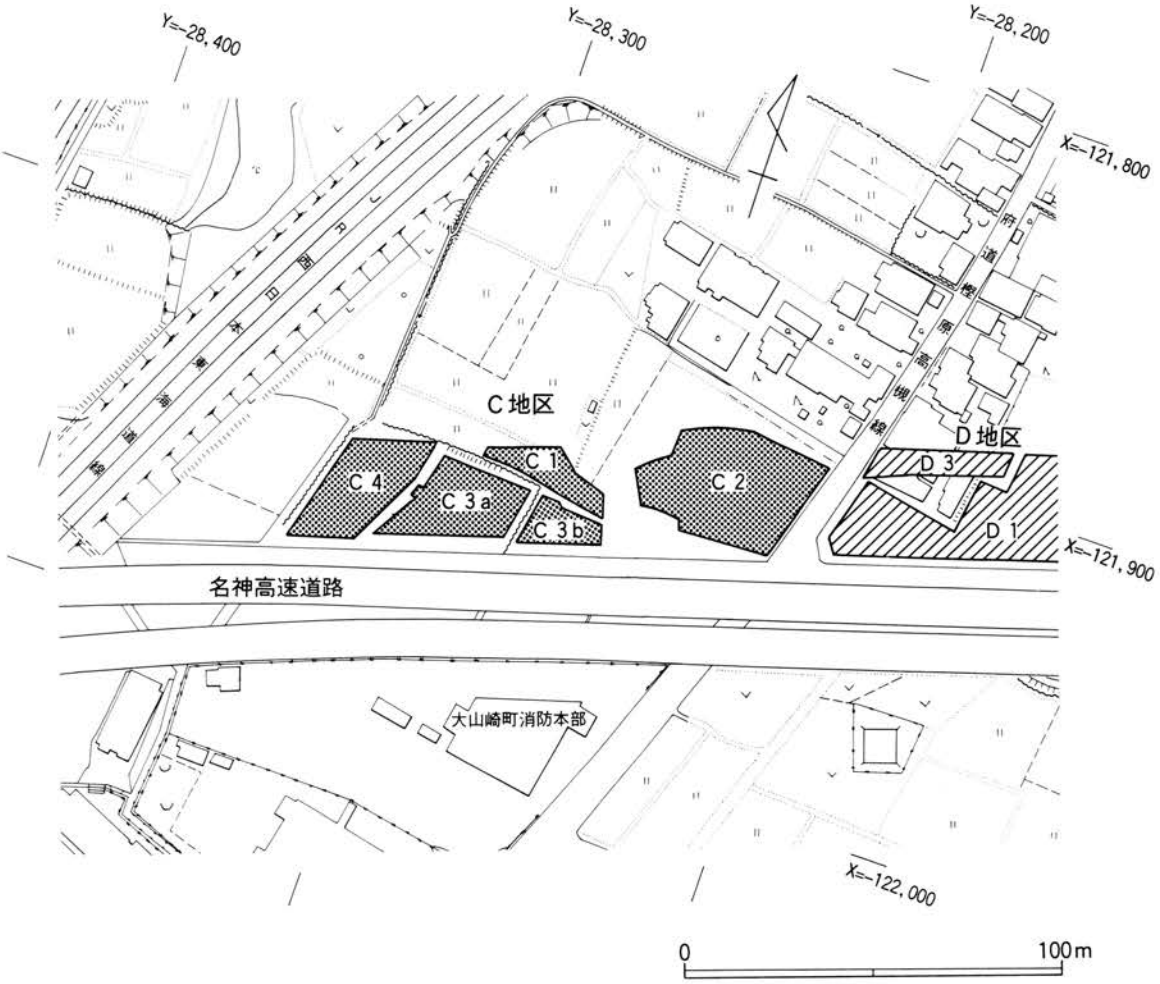
第６図　Ｂ地区トレンチ配置図

第３節　Ｃ地区の調査

Ｃ地区は、府道樫原―高槻線（通称西国街道）とＪＲ西日本鉄道東海道線との間の約150ｍである。大山崎町大字円明寺小字百々地内にあり、一部茶屋前地内を含む。調査着手前の現況は、西から東に下る棚田と一部住宅地として利用されていた。

Ｃ地区の西端の試掘13・14トレンチ周辺では、流路状の堆積となり遺構・遺物は検出されていない。試掘10トレンチでは柱穴などの遺構と遺物を確認したため、試掘10トレンチ以東、西国街道までをほぼ全面的に調査を行うこととした。調査地は、公団の用地買収や工事計画の優先などの理由のため、全面を一斉に調査することができなかった。そのため、調査に着手した順に１～４トレンチとした。３トレンチは中央に南北水路があり、これを付け替えられなかったため、東・西に調査地を分け、ａ・ｂの枝番号を付した（第７図）。

当初は、試掘10トレンチ以東を調査する計画であったが、Ｃ３トレンチの調査結果によって、遺構が試掘10トレンチよりさらに西側に分布している様相を示したため、最終的にＣ４トレンチを設けて調査を行った。



第７図　Ｃ地区トレンチ配置図

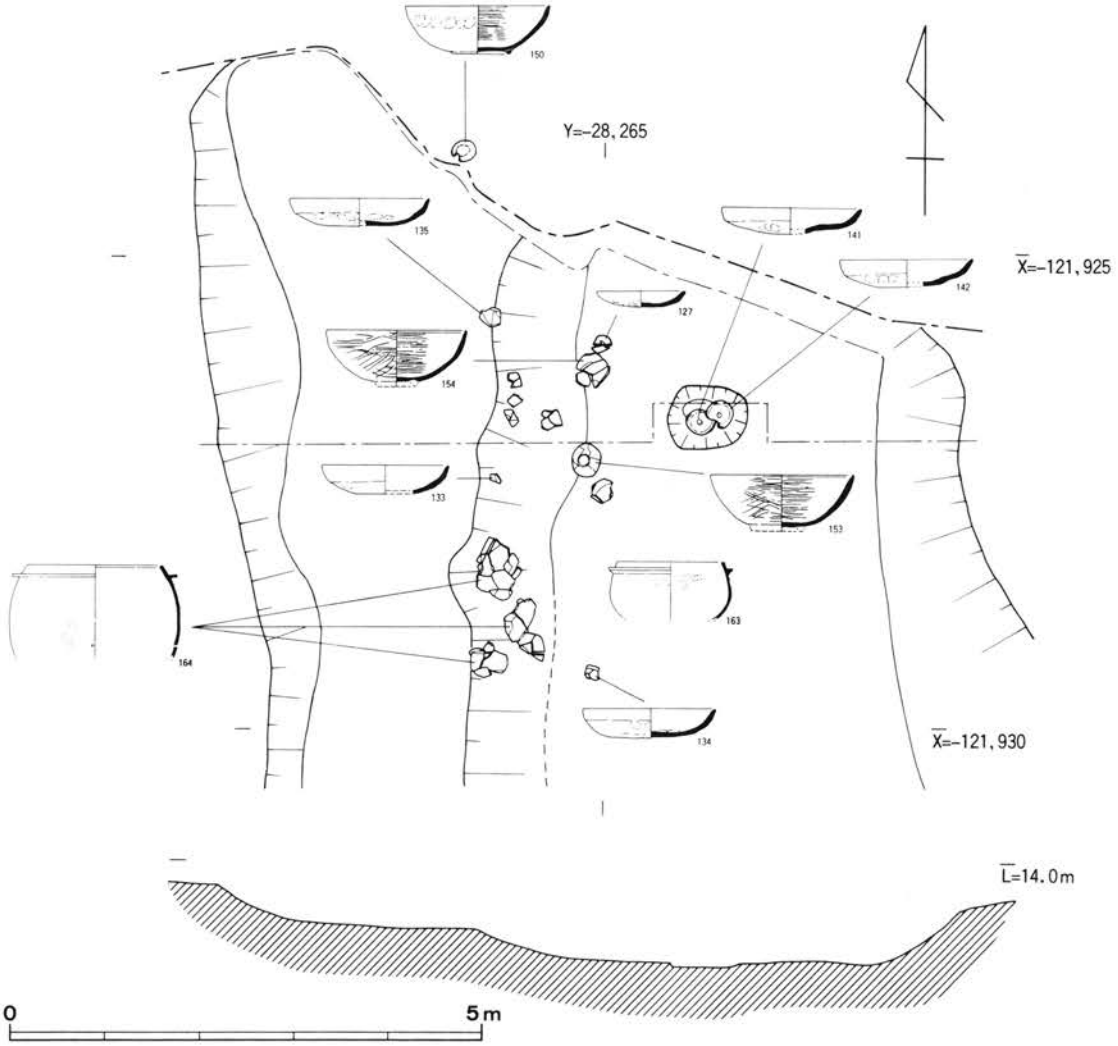
1．Ｃ１トレンチの調査(図版第４・79-(1))

Ｃ１トレンチは、東西２枚の水田にまたがっている。東側の水田と西側の水田では、50～60cmの段差を有しており、西側の水田の方が高い位置にある。トレンチのほぼ中央にあたるこの段差(Y=-28,275付近)の東西で、その土層が変わる。東側では、耕作土―床土―明褐色砂質土―茶褐色混じり淡灰色粘質土―地山である。地山直上の茶褐色混じり淡灰色粘質土(27)が中世以前の遺物を包む包含層である。西側では、９層の井戸が掘り込まれた層よりも上が近代以後の耕作に伴う土層で、20層や25層が中世以前の遺物を含む包含層である。

この調査区では、自然流路や中世素掘り溝、同「Ｌ」字形の溝、西端で平安時代と考えられる土坑を検出した。

(1)中世

旧河道ＳＲ34901(図版第80)　トレンチの東端で検出した自然の流路で、幅約4.6m・深さ約１m・検出長約８mを測る。川底は、北から南に下る傾斜を持つ。東肩は、南半で東方に振れ、幅が広くなる。西肩は、約40cmの高低をもって、幅約85cmのテラスを有し、そのテラスから川底に



第８図　流路ＳＲ34901内遺物出土状況図

下る傾斜変換点から斜面地に、瓦器椀や土師器皿、土師器羽釜が西側から一括投棄された状態で出土した。これらの土器のうち、土師器皿の底部には中央を穿孔しているものも認められた。埋土は、基本的には淡灰色～青灰色系の砂層で、かなりの流量があったと判断された。埋土中には中世の土器を主体に、上・下層ともに平安時代前期以降の土器片が出土した。平安時代の土器には、大形の須恵器甕や壺の破片が多い。この北側の右京第468次調査でも南北方向の流路が発掘調査によって見つかっており(大山崎町教育委員会ご教示)、この流路と一続きのものと思われる。流路内からは、121～166の土器などが出土しているが、これらのうち、土師器皿127・133～135・141・142、瓦器椀150・153・154、土師器羽釜163・164は、流路ＳＲ34901内に投棄された状態で出土した一群である(第８図)。これらは、流路の西肩から投げ込まれた状況で検出され、極めて一括性が高い。土師器皿(141・142)の底部には、径２～３cmの穿孔がなされており、何らかの祭祀に伴うものと推測される。これらの土器群は、Ⅰ－３～Ⅱ－２に相当し、12世紀初頭～中葉の時期である。南側で調査したＣ３bトレンチでは、この続きは検出されなかった。トレンチの南端で流路の東岸が東側に振れ、その付近の溝底は「うねり」をもっているので、ちょうど流れが東に変わる地点と推測される。

区画溝ＳＤ34902(図版第79-(2))　中央部で検出した「Ｌ」字形の溝で、トレンチの北壁から東西に約22mを検出し、南に曲がって約４mをへて、トレンチの外にのびる。この南に曲がったところで、東辺に沿って杭列が並んでいた。この溝は、調査着手前の田畑の区画とほぼ一致することから、当時の田畑の区画溝と推定され、杭列も土止め用のものと推定される。そうすると、現在見られるこの周辺の田畑の区画は、少なくとも中世にさかのぼるものが、一部は存在すると考えられる。埋土は、青灰色系統の粘土で、検出高は約15cmである。167～171の土師器皿や瓦器椀、白磁などが出土しており、13世紀前半のものと思われる。

溝ＳＤ34903　ＳＤ34902の南側2.5mで検出した溝で、約９mにわたって検出した。幅30～50cm・検出高５～10cmで、西端は急激に浅くなって終わる。内部から土師器や瓦器の破片が出土している。溝ＳＤ34902に平行していることや、土留め杭列ＳＸ34906より東には掘削されていないので、耕作に伴う溝と考えられる。

土坑ＳＫ34904　溝ＳＤ34902の屈曲部で検出した溝状の大型の土坑である。埋土は淡青灰色粘土で、ＳＤ34902に切られている。幅約1.3m・長さ約4.3m、検出高は最大で約0.3mである。底面近くで172～179の土器片などが出土している。平安時代の土器も混じっているが、出土した瓦器椀の年代観から13世紀前半のものといえる。

土坑ＳＫ34905　溝ＳＤ34902に切られた土坑で、長さ約３m・幅約１m、検出高は約0.2mである。内部には35cm×50cm程度の石が埋まっていた。

杭列ＳＸ34906(図版第81-(2))　杭が多く打ち込まれた溝状の色の違いで、当初は溝状の遺構と判断していたが、断面観察によって、杭の打ち込みによる水分のしみ込みのため、土が還元状態になったものと判断した。田畑の畦畔を保護するための土留めの杭列と判断され、その方向や位置は周囲に残る現在の地形とほぼ一致する。

(2)平安時代

土坑ＳＫ34909(図版第81-(3))　調査地の西端で検出した土坑で、土坑ＳＫ34910と重複し、ＳＫ34910に切られている。これらの土坑及び、東側の溝状の遺構の北辺はほぼ一直線に並び、他の遺構と違って、国土座標上の東西方向にそろっている。平面形は隅丸方形状を呈しており、1m×1.4m以上の大きさであるが、検出高は約5cmと浅いものである。埋土から180の須恵器杯が出土している。

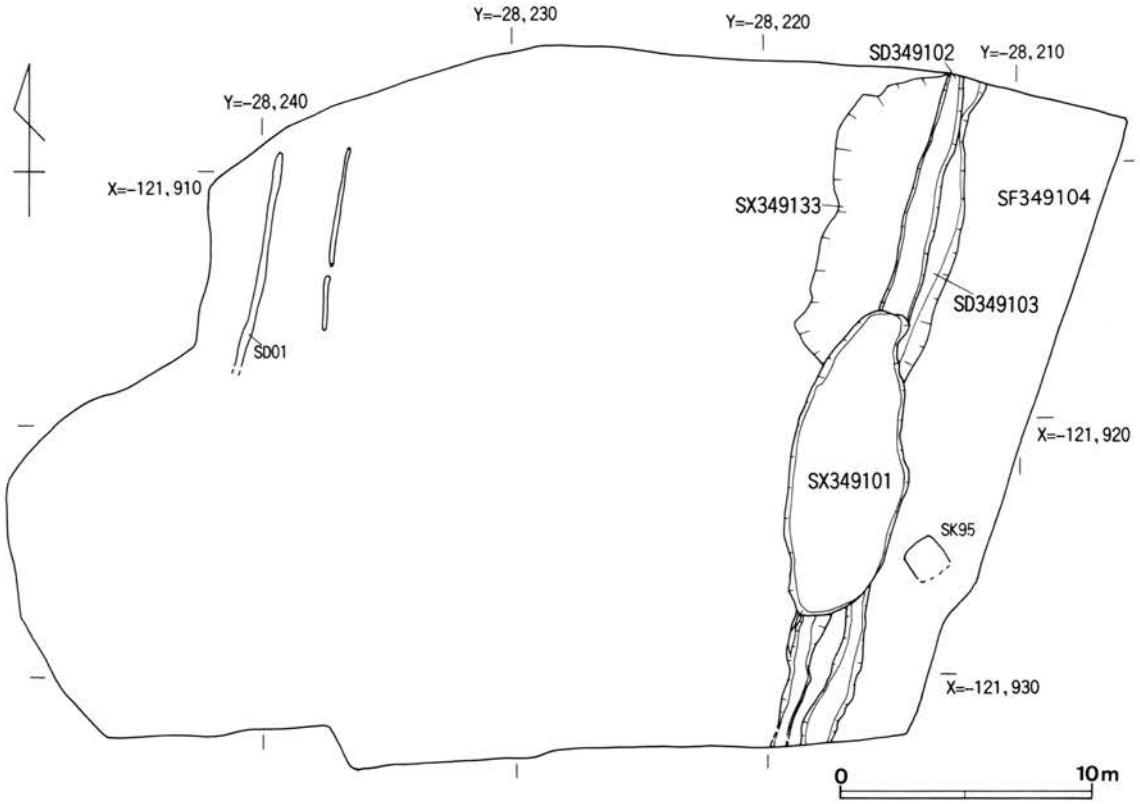
土坑ＳＫ34910(図版第81-(3))　土坑ＳＫ34909に切り勝っている土坑で、約70cm×約90cmの方形の平面で、検出高は約5cmである。181の須恵器杯が出土している。

このほかに、数個の柱穴状のピットを検出している。

2．Ｃ2トレンチの調査(図版第5・82-(1)(2))

調査地の中央やや西側で検出した南北溝(ＳＤ349106)の東と西で、約50cmの段差を有して遺構面を確認した。現地形は、ここで70～80cmの段差を有する田畑の区画がなされており、西側が高い地形であった。

基本層位は、この段差の東西で大きく異なり、西側が地山―淡暗茶褐色土層(16)－整地土(4・8・35)―床土－水田耕作土である(図版第6)。遺構は、16の中世遺物包含層を除去して確認した。西側は、基本的に、水田耕作土－床土－整地土―地山である。地山面は、ゆるやかに東へ下る傾斜面をなしており、西国街道西側溝ＳＤ349111が掘削されている。この緩傾斜面には平



第9図　Ｃ2トレンチ上面検出遺構平面図

安時代の整地層(20a～e)が分布し、この整地層上面に対応する遺構として西国街道路面整地土(21)、及び同西側溝(22：ＳＤ349103、43：ＳＤ349102)を確認した。柱穴は、基本的にはこの整地土を除去した後で検出した。また、北側の土層図のＳＤ349111内の土層は、壁面崩落のために記録できなかった。

この調査地では、平安時代の三時期にわたる西国街道西側溝と同路面、多数の掘立柱建物跡、井戸、中世の掘立柱建物跡・区画溝を検出した。

(1)中世

掘立柱建物跡ＳＢ349113(図版第８・84)　３間×４間の掘立柱建物跡で、座標北から５°東に振っている。梁間の柱間は６尺等間で、桁行の柱間は、北から６尺―５尺―５尺―６尺に復原される。

掘立柱建物跡ＳＢ349114(図版第８・84)　２間×４間の掘立柱建物跡で、ＳＢ349113の内側に収まる。梁間の柱間は７尺等間で、桁行の柱間は不等間で、４尺―4.5尺―4.5尺―４尺である。座標北から４°東に振っている。

掘立柱建物跡ＳＢ349115(図版第８・84)　２間×３間の東西の掘立柱建物跡で、梁間が7.5尺、桁行が７尺の柱間に復原できる。柱穴からは492の土師器杯・皿が出土している。この土師器皿は、ＳＲ34001から出土しているものと手法的によく似ており、12世紀前半の時期が与えられる。座標北から７°東に振っている。

掘立柱建物跡ＳＢ349116(図版第９)　２間×３間の身舎の南側に廂を持つ掘立柱建物跡で、柱間は梁間が６尺、桁行が８尺、廂の出が７尺である。柱穴からは、496の瓦器椀底部のほか、中国製陶磁器片などが出土している。瓦器椀の高台は底部に大きく作られているが、退化しているその形状からⅡ-３～Ⅲ-１と推測され、12世紀後半～13世紀初頭と考えられる。座標北から２°東に振っている。

掘立柱建物跡ＳＢ349117(図版第９)　２間×２間の総柱の建物跡で、図示はし得ないが、瓦器片や土師器片が柱穴から出土しており、中世のものと判断されるが、詳しい時期はわからない。柱間は南北が６尺、東西が5.5尺に復原できる。座標北から17°東に振っている。

掘立柱建物跡ＳＢ349125(図版第９)　調査地の北東部分で検出し、西国街道に接して建てられた掘立柱建物跡である。２間×３間の規模を有し、柱間は梁間が７尺、桁行が８尺である。柱穴から土師器や須恵器に混じって498の瓦器椀が出土しており、暗文は磨滅のため残存しておらず不確かであるが、器形からⅡ-１頃と考えられ、12世紀中葉の時期であろう。調査地の東部、西国街道に面して検出した平安時代の掘立柱建物跡と比べて、柱穴の規模はやや小さい。座標北から19°東に振っている。

瓦器埋納土坑ＳＫ349129(図版第13)　瓦器を埋納した土坑で、ＳＢ349113の柱穴に切られている。約25cm×約35cm・深さ約25cmの土坑内に石を組んで、その上に完形の瓦器椀(495)と破片を埋納していた。瓦器椀はⅢ-２のもので、13世紀前半である。

区画溝ＳＤ349105・106　調査地のほぼ中央で検出した溝で、西国街道にほぼ平行して、北で

東に約20°振っている。この溝の東西で約50cmの段差があり、西が高い地形である。調査着手前の現地形でも、この溝を境にして東西に水田が区画されており、西側の水田が東側の水田よりも約80cm高くなっていた。ＳＤ349106は幅約0.4m・深さ約0.1mで、ＳＤ349105は幅0.5～0.8m・深さ0.1～0.15mである。ＳＤ349106の西辺に沿って杭列が認められた。これらは、田畑に伴う区画溝と水路及び土止めの杭と考えられ、水田区画と段を造ったのは、これらの溝の掘削時期と同じと推測される。溝の埋土から瓦器片が出土しており、12～13世紀にさかのぼると判断される。

(2)平安時代

掘立柱建物跡ＳＢ349118(図版第10)　1間×2間の掘立柱建物跡で、柱間はやや不ぞろいであるが、梁間が11尺、桁行が9尺に復原できる。方位は北で15.5°東である。平安時代と判断される土師器や須恵器の小片が柱穴内から出土しているが、図化し得るものはない。

掘立柱建物跡ＳＢ349119(図版第11)　2間×2間の掘立柱建物跡に復原でき、柱間は東西が8.5尺、南北が9尺である。柱穴からは、530・531・536の土器が出土している。北で東に約20°振っており、西国街道に平行している。

柵ＳＡ349120(図版第11)　柱間が7.5尺で、四間分を検出した。東西方向の柵で、東で南に約18°振っており、周囲で検出した掘立柱建物跡と軸をそろえている。図化し得るものはないが、柱穴からは平安時代の灰釉陶器片や須恵器片が出土している。

掘立柱建物跡ＳＢ349121(図版第10)　梁間1間・桁行2間の南北方向の掘立柱建物跡である。梁間の柱間は14尺で、桁行の柱間は8尺等間に復原できる。柱穴の切り合い関係から、ＳＢ349124に後出するものである。建物跡方位は北で東に18°振れている。514・517・518の土師器杯や529の須恵器鉢などが北東隅の柱穴から出土しており、Ⅱ期新段階～Ⅲ期古段階、10世紀初頭から中葉のものと考えられる。

掘立柱建物跡ＳＢ349122(図版第11)　北辺部分が調査地外にあり、その全貌は不明であるが、梁間3間・桁行4間以上の掘立柱建物跡である。柱間は梁間が7.5尺、桁行が8.5尺で、建物跡方位は北より東に約18°である。506・509の土師器皿、535の無釉陶器椀、538の灰釉陶器椀が柱穴内から出土している。506・509の土師器皿は類例がないのでよくわからないが、小皿の径が12.0cmとＳＤ34914出土の小皿と近似すること、538の灰釉陶器がＫ90で9世紀後半のＳＤ34914の土器群の年代観と矛盾しないことから、9世紀中葉から後半のものと考えておく。

掘立建物跡ＳＢ349124(図版第10)　掘立柱建物跡ＳＢ349121に先行する建物跡で、ＳＢ349121と同じく、1間×2間の南北建物跡である。規模は、梁間が13尺、桁行の柱間が8尺である。525の土師器甕が出土している。

掘立柱建物跡ＳＢ349123(図版第10)　東西3間・南北3間の掘立柱建物跡で、柱間は、梁間が8尺、桁行が8尺に復原できる。建物跡方位はＮ－21°－Ｅである。柱穴内からは土師器や須恵器・黒色土器などの小片に混じって501の土師器皿が出土しており、9世紀の中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

掘立柱建物跡ＳＢ349126　掘立柱建物跡ＳＢ349119の東側で、西国街道西側溝ＳＤ349111の西

肩部で２か所に密集した柱穴群を検出した。ＳＤ349111の他の肩部では見受けられないこと、3.6m(12尺)程度の柱間で造り替えられているように判断できることから、門や簡単な橋などの構造物と判断する。南側の柱穴群のうちの一つから、513の土師器Ⅲが出土しており、Ⅱ期新段階～Ⅲ期古段階のものである。

橋脚ＳＸ349127(図版第13)　掘立柱建物跡ＳＢ349123の東に接して、西国街道西側溝ＳＤ349111の肩部で検出した柱穴列で、橋脚跡と判断している。西国街道西側溝ＳＤ349111の北半は二段に掘られてテラスを有しており、このテラス部分で検出している。柱間は８尺で、３間分を検出した。西国街道路面から宅地に入るための橋が架けられていたと考える。この東側の、テラス部から下る斜面では、護岸用の杭列を検出した。

護岸杭列ＳＸ349130(図版第13・83-(2))　西国街道西側溝ＳＤ349111の西岸を護岸するために打たれた杭列で、調査地の北端部約7.5mの範囲にわたって、26本の杭を確認した。これらの杭の間をわたす板材などは失われて確認できなかった。西国街道西側溝ＳＤ349111が段を有して掘削されており、これらの杭はそのテラス部の下に打たれていた。これらの杭列を除去すると、二段目の溝の掘形はこの範囲だけ垂直に掘られていることが判明した。西国街道西側溝ＳＤ349111は北から西に下る傾斜を有するが、この護岸されている部分では、北に下る傾斜を有している。

西国街道路面ＳＦ349104(図版第86-(1))　西国街道西側溝ＳＤ349111直上に造成された路面で、幅約5.5mにわたって検出したが、東辺は調査地外にあり、確認できていない。西国街道西側溝ＳＤ349111の堆積土の上に、最大1.1mの厚さで灰色礫混じり青灰色粘土(拳大以下)を固く敷き詰めている。検出した路面幅の東側約２mには比較的多くの礫が混ぜられていた。検出した路面上では轍や足跡は認められなかった。

西国街道西側溝ＳＤ349102　西国街道の西側溝と推定される南北溝である。南半部は不明土坑ＳＸ349101によって削平されており、検出長は約９mである。幅約80cm・深さ10cm程度の溝である。ＳＤ349103を切っており、埋土は礫混明褐色土である。

西国街道西側溝ＳＤ349103(図版第86-(2))　西国街道に平行して造られたやや蛇行する南北方向の溝で、ＳＦ349104に対応する西側側溝と推定される。中央部分が高く、北と南に低くなる勾配を有する。幅約60cm・検出高約30cmで、埋土は淡茶灰色砂である。ＳＤ349102とともに、ＳＤ349111を埋めて造成したと判断される整地土層の上面から掘り込まれている。幅約60cm・深さ約30cmである。検出した溝の長さは約27mで、幅１～1.2m・最大の深さ約0.4mである。527の杯蓋とともに、Ⅲ期中段階～新段階の土師器Ⅲ小片が出土しており、11世紀初頭頃と考えられる。

西国街道西側溝ＳＤ349111(図版第83-(1)(3))　現西国街道に平行して掘削されており、西国街道西側溝と推定される溝である。幅が4.8m以上、深さ約90cmで、西肩の北半は二段に掘られて小さなテラスを有している。東側の肩は調査地外にあり、トレンチ内東辺部では溝底から東に向けて立ち上がる傾斜面の一部を確認した。東側の肩部が西側と同じ二段掘りの構造とすると、復原幅は６～７mになる。溝底は中央部がやや高く、北と南に向かって下っている。これは、北と南に水を流すため意図的に掘削されたのか、大きくいえば北から南に流れる形状の中の部分的

な地形なのかは、今後の周辺地の調査の結果を検討する必要がある。このＳＤ349111に対応する路面は、現在の西国街道の真下に位置すると考えられる。北半部には、テラスの裾部に土止めの杭列ＳＸ349130が打ち込まれていた。この部分には後述の橋が設けられていたと考えられる。溝内下半部の埋土は、西側から流れ込んだ堆積土や、水流に伴い堆積したと判断される砂礫層が堆積していたが、上半の埋土は路面ＳＦ349104を造成した灰色礫混じり青灰色粘土で埋められていた。埋土中から円面硯や須恵器の転用硯・墨書土器などとともに、和同開珎・神功開寳・富壽神寳・承和昌寳といった銭貨及び蛇尾の裏金具が出土している。溝内の堆積土を大きく４層に分けて遺物を取り上げたが、遺物の項で述べるように、層の堆積によって厳密に遺物の型式が分かれるのではなく、９世紀中葉から11世紀初頭にかけて埋没したと推定される。これらの側溝の変遷は、ⅢＳＤ349102・ＳＦ349104→ⅡＳＤ349103・ＳＦ349104→ⅠＳＤ349111と新→古となる。これらの溝の存続時期は、Ⅲは不明であるが、Ⅱが出土遺物から11世紀初頭頃、Ⅰが９世紀初頭～11世紀初頭である(図版第７)。

不明土坑ＳＸ349101　ＳＦ349104・ＳＤ349103の上面を覆っている淡灰色粘質砂で、若干のくぼ地をなしていた。その性格は不明である。この上面では遺構は検出できなかった。

整地状土坑ＳＸ349133　調査地の東部で検出した土坑状の窪地で、調査地北辺の南側から西国街道西側溝ＳＤ349111の西辺に沿って、トレンチの中央部付近までを確認した。この遺構の掘形は不明瞭で、底面が凹凸となっていた。埋土は茶褐色土～暗茶褐色土で、底面は東にやや傾斜して落ち込んでいき、西国街道西側溝ＳＤ349111内に流入したと判断できる層が認められた。埋土には炭片が混じり、土器が比較的多く出土したことから、火災などの後に廃材などのゴミを埋め立てて整地した痕跡と考えられる。この遺構の上面でＳＤ349102やＳＤ349103を検出したが、精査を繰り返したにもかかわらず、柱穴痕は確認できなかった。416～455の土器が出土しており、Ⅰ期新段階の９世紀初頭のものである。

井戸ＳＥ349112(図版第12・85)　東西約2.6m×南北約2.55m・深さ約2.3mの掘形内に構築された、横板井籠組の井戸である。井戸の東辺では、掘形と井戸枠の間には50～60cmの大形の石が、検出面下、約60cmのところに挟まっていたが、井戸枠を抜き取る際に放り込まれた石と判断される。井戸枠内は基本的に灰色粘土で、石の投げ込みは少ない。底部の近くから大小の緑釉陶器椀が２点出土した(411・412)。涌水のため出土状況は確認できなかったが、２点とも大きな破片に割れて近接して出土しており、接合するとほぼ完形になることから、井戸廃棄時の祭祀の一貫として埋め置かれたと想定される。また、出土状況は記録できなかったが、井戸側一段目の下面付近で土師器皿が南西と南東隅付近で２点ずつ重なって出土しており、これらも廃棄時の埋納と考えられる。井戸側は、横板が８段にわたって残存しており、残存状態のよいのは下位の７段である。８段のうち上２段は井籠組で、東・西の側板は端部を凹字形にし、北・南の側板は凸字形に加工している。下位の６段は、片側にのみ抉りを入れ、抉り部分に隣の板材をはめ込んでいる。これらの板材には二種あり、「大」が幅26～30cm・長126～130cmで、「小」が幅16～20cm・長126～130cmと、規格の板材とも考えられる。底面には平石状の石を敷き詰めていた。一部の石を井

戸側の板材の下に挟んで、高低を合わせていた。井戸側内からは土器(382～415：Ⅲ期中段階～新段階＝10世紀後半から11世紀初頭)の他に、隆平永寶・神功開寶などの銭貨、櫛・曲物底板(図版第72-818～822)、砥石(第28図833)が出土した。

池状土坑ＳＸ349109　井戸ＳＥ349112の東側で検出した約５ｍ×約7.5ｍの隅丸方形を呈した窪みである。検出高約30cmで、しっかりした掘形を持つ。埋土は暗茶褐色土である。ＳＤ349132などの遺構を切っている。石組などは全く認められなかったが、池などの施設と考えられる。463～478の土器が出土しており、９世紀中葉から末(Ⅱ期古段階から中段階)のものと考えられる。

不明土坑ＳＸ349110(図版第86-(3))　西側はＳＸ349131を切っている。約2.4ｍ×約2.9ｍの方形掘形の南側に、長さ約1.2ｍの舌状の張り出しが設けられている。北側の方形部を中心にして、一部南側の張り出し部にかけて1.6ｍ(推定)四方の範囲に、拳大の石が敷きつめられたように検出された。検出面から約５cm掘り下げた時点で、「萬年通寶」が１枚出土した(837)。検出した深さは、約25cmである。９世紀前半。

溝ＳＤ349132　調査地の中央で検出した南北方向の溝で、幅40～70cm・検出高15cmである。北端は削平のためか浅くなって終わっているが、南端は調査地外にのびる。この溝に重複したすべての遺構に切られている。

ＳＸ349131(図版第86-(3))　ＳＸ349110に切られた土坑で、内部に拳大の石礫が入っていた。長辺約3.3ｍ・短辺約1.3ｍの不整形の土坑で、検出した深さは約15cmである。456～462の土器が出土しており、９世紀前半の時期である。

ＳＫ276　承和昌寶１及び銭名不明の銭貨１が出土している。

(3)古墳時代

甕埋納土坑ＳＸ349128(図版第13・87-(2))　掘立柱建物跡ＳＢ349113の北東部で検出した甕の埋納土坑である。甕は、約50cm×約40cmの不整形の土坑内に正立して埋納されており、口頸部より上は削平されていたが、それから下はほぼ完存していた(541)。土器の器壁は非常に薄いため、検出時の状態に接合ができず、体部が打ち欠かれていたかどうかは不明である。内部から他の遺物は出土しなかった。検出面は、掘立柱建物跡ＳＢ349113や349114と同じく地山面である。布留期のものと判断する。

(4)その他

Ｃ２トレンチのほぼ中央で検出した区画溝ＳＤ349105・106の東側と西側では約50cmの高低差を有する段をなしているが、この東・西で検出した遺構の様相が異なる。西側の平坦面では中世の掘立柱建物跡・柱穴・土坑などを検出しており、平安時代前期にさかのぼる遺構は皆無である。この平坦面で布留期の甕埋納土坑ＳＸ349128を検出したので、布留甕が埋納された以後に削平を受けていたとしても数十cm内外としか考えられない。したがって、平安時代前期の遺構が元々はあったのが、削平のために検出されないのではなくて、本来的にここまで建物跡が及んでいなかったためといえる。そうすると、西国街道の西側に分布する平安時代前期の建物跡群は、西国街道からわずか20ｍ程度の範囲にしか密集しておらず、一定の範囲に“整然と”建物が配置される

ような屋敷地とは異なった様相を呈する。一方、この調査区の東側のＤ１トレンチでは、西国街道から東に約100mの範囲にまで建物跡や井戸が分布するのとは対照的である。

Ｃ２トレンチでは西国街道西側溝を検出し、その変遷を追えた。この問題については、まとめの章で触れたい。

３．Ｃ３aトレンチの調査(図版第14・88-(1)(2))

Ｃ３トレンチは、Ｃ１トレンチの南側に当たり、現水路で東西に分割されていたために、ａ・ｂトレンチに分けて調査を行った。

この調査地の基本土層は、耕作土－床土－淡黄灰色土－茶褐色土(中世遺物包含層)－黄灰色礫混じり土(地山)で、標高13.4～13.6mが地山面となる。中世遺物の包含層である茶褐色土は10～15cmの厚さで堆積している。調査は、基本的には地山面で行ったが、トレンチの東辺部は中世遺物の包含層(茶褐色土)が厚く堆積していたので、この土層の上面と地山面の二面で調査を行った。その結果、茶褐色土上面より掘り込まれた遺構(ＳＢ36704・05など)とその下の地山面で検出した遺構(ＳＢ36706など)とが確認できた。このことから、中央部以西でも、本来は茶褐色土の上・下面からそれぞれ遺構が掘り込まれていたと考えられる。

このトレンチは試掘10トレンチにあたり、その調査時に設定した水抜き用の溝が一部の遺構を削平していた。調査によって、古墳時代後期の竪穴式住居跡１基、竪穴式住居跡に伴う排水溝２条、平安時代の井戸１基、建物跡１棟、中世の建物跡５棟・井戸３基、土坑などを検出した。

(1)近世以降

区画溝ＳＤ36708　東西方向の直線的な溝で、埋土は淡青灰色砂混じり粘土である。北側肩部に杭列の残欠が検出された。幅約1.2m・検出高0.25～0.3mで、底面は丸底である。近世の染め付け片が出土した。

土坑ＳＫ36709　現代の攪乱土坑で、埋土中からコンクリート片が出土した。形状は隅丸方形を呈し、底面は舟底状を呈する。平面形は一辺3.2m程度の隅丸方形で、最深部で約35cmを測る。

(2)中世

掘立柱建物跡ＳＢ36701(図版第17)　調査地の中央で検出した掘立柱建物跡で、３間×３間の規模に復原できる。この掘立柱建物跡を構成する北辺・東辺の柱穴の並びと柱間の間隔はかなり不規則であるが、一応、東西の柱間が８尺等間で、南北の柱間が北から９尺、６尺、６尺に復原できる。座標北より約11°東に偏する。各柱穴から瓦器や土師器の小片が出土している。

掘立柱建物跡ＳＢ36702(図版第17)　梁間２間・桁行３間の掘立柱建物跡で、柱間がそれぞれ７尺、８尺である。座標北から約６°東に振る。北西隅の柱穴には、91の土師器皿が埋納されていた(図版第22)。その他、北東隅の柱穴からは、88・90・93・94の土師器皿、98・99の瓦器椀が出土している。瓦器椀の年代観から、13世紀前半と推定される。

掘立柱建物跡ＳＢ36703(図版第18・89-(1))　調査地の北西隅で検出した掘立柱建物跡である。調査地外にのび、全貌は判明しなかったが、調査地のすぐ北には土手があり、それほど平坦面が

北には分布しないと判断されるため、２間×２間の規模を有するものと思われる。柱穴からは土師器の小片が出土したのみである。座標北から12°東に振る。

掘立柱建物跡ＳＢ36704(図版第18・89-(1))　調査地の東端で検出した掘立柱建物跡で、２間×２間に復原できる。中世の土坑ＳＸ36720の上面で検出した。79・80の土師器皿や96の瓦器椀が出土している。Ⅲ－２～３の型式に相当する。座標北から4.5°東に振る。

掘立柱建物跡ＳＢ36705(図版第18・89-(1))　南北２間・東西１間以上の掘立柱建物跡で、ＳＢ36704と同じく、ＳＸ36720の上面で一部の柱穴を検出した。柱間は８尺等間である。座標北から約1.5°東に偏する。95の瓦器椀の破片が柱穴内から出土しており、13世紀後半のものであろう。

井戸ＳＥ36712(図版第21・92-(2)・93-(2))　調査地の西辺で検出した井戸である。平面形は径約1.5mの円形で、検出高は約0.7mであった。断面の形状は擂り鉢形を呈している。板材や杭などは全く出土しなかったが、断面観察によって裏込め土と埋め戻し土と判断される土層を確認できたので、使用時には曲物などを内部に納めていたと考えられる。井戸埋土中では、拳大から小児頭大の自然石が数多く投棄されており、その石の間から土師器皿や瓦質土器甕などとともに白磁四耳壺片、白磁皿、青磁椀の破片などが出土した(42～48)。これらの土器片は、井戸内の埋土の２層と４層で多く出土したが、上下の層中で出土した土器片で接合できるものがあることから、これらの土層は井戸の使用中や廃棄後に自然に埋まったのではなく、人為的に石礫とともに埋め戻されたものと判断される。これらの石礫の中には、砥石(835)が含められていた。出土遺構の年代観から、14世紀前葉から中葉のものと判断する。

井戸ＳＥ36710(図版第21・92-(1)・93-(1))　調査地の西辺で検出し、平面形は長径約1.8m・短径約1.6mの楕円形を呈し、検出高約65cmの井戸坑である。掘形は二段で、検出面から約40cmのところでやや平坦なテラスをもち、そこからさらに約25cmに丸底に掘削されている。テラス部からやや下の高さで、瓦器椀１個体と土師器皿３個体が埋め置かれていた(68～71)。土層断面の観察で裏込め土と判断される土層を認めたことと、井戸坑掘形の形状からすれば、曲物などの円形状の井戸枠が据えられていたと推定される。土質や色調の違いから、底面直上にある６層の灰白色砂のみが井戸使用時の堆積土と判断され、１～５層はすべて井戸廃棄に伴う埋め戻しと判断される。68～75の土師器皿・瓦器椀が出土しており、瓦器椀はⅡ-２～Ⅲ-１に相当し、12世紀後半から13世紀初頭のものである。

井戸ＳＥ36713(図版第21・92-(3)・93-(3))　平面形は隅丸方形で、長径約1.9m・短径約1.7m、検出高は最大で約0.6mの井戸である。底面近くから底面上約20cmにかけて瓦器椀と土師器皿が、完形・破片が入り混じって出土している。埋土中には、井戸枠材と判断されるような板材の出土はなかったが、土層の観察により、この井戸にも裏込め土らしき土層が認められ、何らかの井戸側が設けられていたと判断される。この井戸坑の底面の平面形は方形であるので、曲物ではなく、方形の構築物であったと思われる。また、埋め戻し土のうちの一つの層と判断される第７層の灰色粘土の中間には、植物質のみの薄い層が水平に堆積していた。埋土からは、49～67の土師器皿や瓦器椀、白磁椀・皿などの土器、砥石(834)が出土している。瓦器椀の型式はⅢ-２～

Ⅲ-3で、その実年代は13世紀前半である。

これらの井戸ＳＥ36712・36710・36713は、すべて埋土中から瓦器椀が数点ずつ完形に近い形で出土しており、井戸の廃棄に際して土器が埋納されたと推測される。

土器埋納土坑ＳＫ36711(図版第22・94-(2))　土師器皿を埋納した小土坑で、直径約30cm・深さ約20cmを測る。坑底から約12cm遊離して、土師器皿(86)が口縁を下にした状態で出土した。ＳＥ394004の土師器皿(15)と近似し、その井戸の年代観から13世紀中葉から後葉のものであろう。その他、平安時代と考えられる土師器皿(116)が出土しているが、混じり込みと考えられる。

土坑ＳＫ36718(図版第22)　径13～15cmの円形土坑内に土師器皿二枚が納められていた。土坑の検出高は約５cmの浅いものであった。上位の皿は破損が大きいため、図化し得なかった(77)。

土器埋納柱穴Ｐ10(図版第22・94-(1))　ＳＢ36702の北西隅の柱穴で、土師器皿が埋納されていた。柱穴の平面形は約25cm×約30cmの隅丸方形状で、検出高は約35cmであった。そのほぼ中程で土師器皿１枚が完形で出土した(91)。検出した状況から、ＳＢ36701を解体後に柱穴に埋納したと推定される。

土坑ＳＸ36720　調査地の東辺で検出した不整形の土坑である。掘形は短辺約2.4m・長辺約4.8mの菱形、最深部で約0.25mを測る。底面は平らでなく、凸凹になっている。埋土から、瓦器片・土師器片などの中世の遺物とともに、奈良～平安時代の須恵器杯身片が出土している。

不明集石遺構ＳＸ36714　平安時代井戸ＳＥ36714の検出時に確認した集石遺構である。約1.7m×約2.7mの範囲の浅い窪地の東半部に拳大程度の石礫が集中しており、石礫の間には平安時代の土師器や須恵器とともに、瓦質の羽釜(115)が挟まっていた。この土器の年代観から、14世紀前半に屋敷地として利用されていた時期のものと判断される。その時点で、井戸ＳＥ36714の上位に石礫を投げ込んで整地したと考えられる。

土器埋納土坑ＳＫ36719(図版第22・94-(3))　ＳＫ36709の北側で検出した土坑で、瓦器椀(97)が破砕されて埋められていた。

(3)平安時代

掘立柱建物跡ＳＢ36706(図版第18・89-(2))　調査地東辺部で検出した東西２間×南北４間の掘立柱建物跡である。柱間は梁間が8.5尺、桁行が６尺である。掘立柱建物跡ＳＢ36704・05の東側は、中世の包含層である茶褐色土層の上面で検出し、この掘立柱建物跡の柱穴群は地山直上で検出している。この掘立柱建物跡の柱穴内からは平安時代の遺物のみが出土していること、東辺中央の柱穴は不明土坑ＳＸ36720の底面で検出していること、建物跡方位が真北より約15°東に偏し、中世の掘立柱建物跡ＳＢ36701～05とは方位が異なっていること、この方位はＣ２トレンチの平安時代建物跡と一致していることから、平安時代の建物跡と判断する。柱穴から出土した土器片のうち、117の須恵器が図化できたが、詳細な時期については不明である。

井戸ＳＥ36714(図版第19・91)　縦板組枘留めの井戸で、長径約1.15m×短径約0.95mの平面形が楕円形の井戸である。掘形は約1.6m×約２mの隅丸方形を呈している。井戸側は、縦板の上部と下部の側面に枘穴を設け、隣り合う井戸側を枘留めによって28枚を連結させて構築してい

る。上端部は痩せて消失しているために、元々の長さは不明であるが、最も残りのよいものは2.28mある。各部長は付表13を参照されたい。この井戸枠の外側には、断面方形の柱状の材や、幅広の板材が残存しており、しかも井戸の埋土中からは井戸枠と考えられる幅広の板材や桟木と推定される棒状の板材が出土した。このことから、井戸側の外周には、掘形の保護や雨水の流れ込みを防ぐための井戸枠が設けられていたと推定される(図版第19下図)。この形状は、井戸を廃棄する段階での部材抜き取り土坑の平面形が井戸側の形状にほぼ平行する楕円形であること、角材が四隅に位置していないことから、井戸側と同じく、楕円形もしくは楕円状の多角形であったと推定される。井戸枠内からは、廃棄に伴う土器埋納と判断される完形に近い形の土器の出土はなかった。井戸枠内の土層及び井戸側構築時の裏込め土の堆積状況は、調査の安全確保のため観察できなかった。井戸側内の埋土から104～114の土器片が出土している。Ⅰ期新段階からⅡ期古段階に相当し、9世紀前半のものである。

(4)古墳時代

竪穴式住居跡ＳＨ36717(図版第20・89-(3)・90)　約4.1m×約5.1mの方形の竪穴式住居跡である。検出高は10～15cmを測る。主柱穴は3本を検出したが、南東のものは上層からの土坑による攪乱のためか、検出できなかった。径は約20cmと比較的小さく、検出高は25～40cmを測る。北辺中央やや東側にカマドを設置している。このカマドを断ち割って土層を観察すると、5層と3層の上に土師器甑片を平らかに貼り付けていること、3′層と6層の間に明瞭な炭層(6″)があることが見て取れた。これらのことから、このカマドは造り替えられていることが推定された。新旧それぞれを二次カマド、一次カマドと仮称すると、一次カマド(図版第20右：平面図の中の土器片は二次カマド構築時の貼り付けと考えるため、実際の使用時には存しない)は、5層がカマド本体、6・6′・6″層が一次カマドの燃焼に伴う層である。二次カマドは、一次カマドの上半部の除去後、土器片を貼り付けた後に、3層を盛り上げてカマド本体を構築している。二次カマドの燃焼に伴う層が4層の炭層と考えられる。二次カマドの煙道部は、幅5cm程度とかなり狭く、その奥壁はほぼ直角に上方にのびる。検出した高さはほぼ10cmである。住居跡の埋土中からは土師器・須恵器の小片が出土したが、床面にはほとんど土器は遺存していなかった。刀子が一点床面上で出土した(第30図860)。118は、カマドを造り直す際に埋め込まれた土器片を接合したものである。カマド検出時に須恵器杯蓋片(119)がカマド焼土近辺で出土しており、7世紀初頭の年代観が与えられる。

排水溝ＳＤ36716(図版第89-(3))　竪穴式住居跡ＳＨ36717の南東隅から幅約30cmの溝を東方向に約4.5mにわたって検出した。竪穴式住居跡に伴う排水溝と判断される。検出高は約10cmで、南に下って掘削されている。埋土からは土師器片が出土しているが、図化し得るものはなかった。ＳＤ36716と後述のＳＤ36715が重複する部分には、中世の柱穴が穿たれていたため、切り合い関係を平面的には確認できなかった。調査地の南側壁面の土層観察では、ＳＤ36715の延長上では遺構の土色の差を確認したが、ＳＤ36716の延長上の壁面では土色の違いは認められなかった。このことから、排水溝ＳＤ36716は、ＳＤ36715に接続して終わっていたと推定される。

排水溝ＳＤ36715　竪穴式住居跡ＳＨ36717の周囲に、約3.5mの空閑地を隔ててめぐる径約15mの弧状の溝で、総長約15mにわたって検出した。断面は「Ｖ」字に近く、鋭角に掘り込まれる。幅20～30cm・検出した深さは10～20cmを測る。埋土は茶褐色土である。西側は削平されたためか検出できなかった。溝からは土師器の小片が出土しているが、その時期を決定できない。この溝は、中世の柱穴にはすべて切られていること、瓦器片を埋土に含まないこと、竪穴式住居跡が弧の中心に位置していること、先述の排水溝ＳＤ36716とジョイントしていると推定されることなどから、ＳＨ35717と同時期の遺構と判断され、竪穴式住居跡内に周囲の雨水が流れ込まないように設けられた排水溝と推定される。現在のように、この場所が平坦地になったのは、前述の中世建物群が建てられた際で、それまでは南側に低い斜面地をなしていたと推定されることから、竪穴式住居跡内に周囲の雨水が流れ込まないように、排水を行っていたと推定される。

北側のＣ１トレンチでは、Ｃ３aトレンチよりも約0.4m高いレベルで地山を検出しており、ある時期にＣ３aトレンチの整地がなされたと考えられる。Ｃ１トレンチの西端部で平安時代前期の土坑を２基検出し、Ｃ３aトレンチでは平安時代前期の井戸や掘立柱建物跡を検出しているが、Ｃ地区の西部では同時期の遺構が希薄にしか分布していない。これは、中世段階に新たに宅地や水田が造成された際に、削平されたものと判断される。

Ｃ３aトレンチのほぼ全域で、井戸・掘立柱建物跡・竪穴式住居跡などの遺構を検出したが、北半の中央部から西側ではほとんど遺構を検出できなかった。前述のように、この地区は中世の段階で斜面地をカットして屋敷地としているため、その部分に中世の遺構が無いということは、もともと構造物が造られなかったためと考えられ、この部分は屋敷地内の畑地や園宅地として利用されていたと推測される。

また、３基の中世の井戸を検出したが、これらは素掘りの井戸で、埋土中からは瓦器椀と土師器皿が数点ずつ完形に近い形で出土している。これらの土器は、井戸の廃棄に際して埋納されたと考えられ、一括性の高い土器群と判断される。

４．Ｃ３bトレンチの調査(図版第23・95)

Ｃ３bトレンチは、地表下約1.2mまで宅地開発に伴う盛り土がなされており、それを除去すると、旧耕作土－床土を認めた。これらの土層の下位は、基本的に地山が広がっていたが、南東部１/４には薄い包含層(５：茶褐色土・時期不詳)が分布しており、この上面で中世素掘り溝と判断される南北方向の小溝群を検出した。遺構を検出した高さは、13.05～13.2m程度であった。

この調査地で検出した遺構は、その大多数が現代の住宅に伴う溝・土坑・井戸などで、わずかに中世素掘り溝・土坑、宅地盛り土直前の水田区画溝を検出したのみである。また、この調査地から、瓦器や須恵器・土師器の小片が出土したが、図化し得るものは出土しなかった。

(1)現代

ＳＫ36728　内部から釘・ガラスが出土している。

不明土坑ＳＸ36733・34　ＳＸ36733は約2.3m×約３m・検出高約0.1mで、埋土は暗灰色礫で

ある。ＳＸ36734は、ＳＸ36733に切られている土坑で、約２ｍ×約６ｍ以上・検出高約0.1ｍである。埋土は暗褐色礫で、これらの遺構からは遺物は出土しなかった。

不明土坑ＳＸ36735　北西隅で検出した土坑で、ＳＤ36729・30に切られている。検出高は約0.2ｍで、遺物は出土しなかった。

井戸ＳＥ36736　コンクリート製の井戸で、扇風機や瓦が廃棄されていた。調査直前までこの地に建てられていた住宅に伴うものである。

井戸ＳＥ36736を除いて、これらの遺構からは遺物が出土しておらず、時期の決め手に欠けるが、後述のＳＤ36720～23・ＳＫ36724～27とは明らかに土色・土質が異なっており、近代のものと推測される。

区画溝ＳＤ36737　溝内埋土は上半と下半で異なり、上半は瓦などを含む造成の埋土で、下層は黒灰色砂土である。その堆積具合から判断して、造成以前のこの溝には水が流れていたと判断される。宅地に伴う造成の埋土によって上半が埋まっているので、この地が宅地に転用される直前の水田区画溝と判断される。南へ下る傾斜をもち、幅約１ｍ・深さ約0.5ｍである。

区画溝ＳＤ36738　ＳＤ36737とほぼ同一の規模で、埋土も下層分と近似しており、一連の区画溝と判断される。幅約1.2ｍ・検出高約0.25ｍで、溝底はＳＤ36737より約30cm高い。東へ下る傾斜をもつ。現代に残る水田の地割りが中世段階にまでさかのぼるならば、ＳＤ36737とともに、この溝は、その初現が中世である可能性がある。

溝群ＳＤ36729～32・39　西で北に振る方位で掘削された溝で、やや湾曲して平行している。これらの溝の内部からは須恵器・土師器小片が出土するが、すべてＳＤ36737・38と重ならないことや、部分的に平行する溝も見られること、埋土がＳＤ36737・38の下層分と類似していることから、ＳＤ36737・38と同時期のものと判断される。

(2)中世

溝ＳＤ36720～23　調査地の南東部で検出した小溝で、互いに平行・直交する。幅15～30cmで、検出高は最大でも10cm程度である。埋土からは、瓦器・土師器の小片が出土している。この溝を検出した一角のみ、包含層が残存していた。

ピット群ＳＫ36724～27　遺物の出土はなく、時期不明のピット群である。埋土は溝ＳＤ36720～23に近似している。

Ｃ１トレンチの東端で検出した南北方向の流路ＳＲ34901を検出した高さは、調査地の南辺で見ると約14.0ｍで、その底面の高さは12.75ｍ程度であった。この調査地で遺構を検出した高さは13.05～13.2ｍであるので、削平を受けていたとしても、十分にその流路が検出できる遺構面の高さであった。そのため、ＳＲ34901はこの北側でその流れを東へ大きく変えていると推測される。出土遺物には９世紀の須恵器があり、西隣りのＣ３ａトレンチでは平安時代にさかのぼる掘立柱建物跡が検出されているが、この時期の遺構はすでに削平されてしまったと考えられる。

また、ＳＤ36737・38に区画された一角のみで、これらに平行する中世の小溝群や中世と判断される包含層が確認でき、それ以外のところではこれに類する小溝や包含層は確認できなかった。

このことは、ＳＤ36737・38の掘削が中世にさかのぼることを強く示唆し、しかも、ＳＤ36729～32・39といった溝群も中世にさかのぼる可能性が指摘できる。そうすると、これらの溝群が北で東に約７°振っている点は、この地域の条里型地割りの成立と変遷を知る上で非常に興味深い資料の一つとなろう。

（岩松　保）

５．Ｃ４トレンチの調査（図版第15・16・96-(1)）

Ｃ４トレンチの調査では、中世の素掘り溝群・掘立柱建物跡群・井戸跡・甕埋納土坑・土坑、平安時代の掘立柱建物跡、古墳時代末期～飛鳥時代の土器が出土した不定形土坑などを検出した。

(1)中世

井戸ＳＥ394001（図版第22・99-(1)(2)）　トレンチ東隅で検出した平面がほぼ円形の素掘り井戸である。井戸は直径約2.5m・深さ約1.9mを測る。埋土からは、１～５の土師器・須恵器・瓦質土器のほか、瓦片や図版第72-812～816の加工木製品が出土した。曲物などは認められなかった。14世紀後半。

井戸ＳＥ394003（図版第21）　トレンチ西端で検出した平面がほぼ円形の素掘りの井戸跡である。井戸の掘形は、直径約1.2m・深さ約1.1mを測る。底面で曲物の残欠を認めた。埋土から６～13の土師器・瓦器などが出土しており、瓦器椀はⅠ-３の段階のものと思われる。

土坑ＳＫ394004（図版第21・97-(2)・99-(3)）　南方が西側に張り出した長方形の土坑である。長辺約3.8m・短辺約1.6～2.0m・最大幅約2.6m・深さ0.3m前後を測る。中央付近に人頭大の石が置かれていた。埋土から14～23の土師器皿・瓦質土器の鍋などが出土しており、瓦器椀はⅢ-３～Ⅳ-１で、13世紀中葉～後葉のものである。

甕埋納土坑ＳＫ394007（図版第22・98-(1)(2)）　トレンチ南部で検出した甕を埋めた円形の土坑である。土坑は直径が0.9m前後、検出面からの深さは約0.45mを測る。土坑の中央に頸部から上が欠損する須恵器甕が置かれていた(33)。甕内部には土砂が落ち込んでおり、土砂以外は何も残存していなかった。

土坑ＳＫ394008　トレンチ南端で検出した不定形の土坑で、深さ約0.2mを測る。埋土には土師器・瓦器の細片がわずかに混じっていたが、図化し得るものはない。

掘立柱建物跡ＳＢ394009（図版第17・96-(3)）　トレンチ中央部で検出した２間×１間の東西方向の建物跡である。柱掘形は直径35～40cmの円形で、深さ30～40cmを測り、柱痕跡が明瞭に残っていた。柱間は約2.1m（７尺）等間で、柱筋は西で約５°北に振る。柱掘形内からは土師器や瓦器片がわずかに出土し、28・29の土師器皿を図化した。28の土師器皿の体部の段がＳＸ34924出土の土師器小皿(580～583)と共通するものと考え、12世紀中葉と考えたい。

掘立柱建物跡ＳＢ394010（図版第17・96-(3)）　井戸ＳＥ394001に先行する南北方向の建物跡である。井戸によって柱掘形の一部が消滅しているが、２間×３間と推定される。柱掘形は直径45cm前後の円形または隅丸方形で、掘立柱建物跡ＳＢ394009より一回り大きい。掘形内から土師

器片が出土し、瓦器は含まない。柱筋は北で約12°東に振る。27の土師器皿が柱穴から出土しており、土坑ＳＫ394004出土の土師器皿14と器形が似ており、口径がややそれよりも小さいので、土坑ＳＫ394004と同じもしくはそれに後出するものであろう。

(2)古墳時代

土坑ＳＫ394006(図版第98-(3)) 調査地の西南隅で検出した不定形の土坑である。屈曲部分で幅約4.5mを測り、検出面から最も深い部分で10cm前後と浅い。埋土から土師器・須恵器の細片が出土し、34～36が図化できた。

この調査地は、北西から南北方向にゆるやかに傾斜する地形で、北端部では平安時代～中世の柱穴などは削平されているようすで、素掘り溝がわずかに残る程度である。中央付近では多数の柱穴群が検出され、現段階で柱筋が北で東に約12°振る掘立柱建物跡ＳＢ394010、北で東に約５°振る掘立柱建物跡ＳＢ394009が復原できる。掘立柱建物跡ＳＢ394009の柱筋に平行する柱穴列がみられることから、他にも中世の建物跡があったと推定できる。中世の遺構には、井戸ＳＥ394001・03や土坑ＳＫ394004があり、西国街道から約100m隔てたこの付近まで集落が広がっていたことが判明した。平安時代前期までさかのぼる遺構はなかった。

また、ＴＫ209～ＴＫ217の遺物が出土する土坑ＳＫ394006が存在するので、周辺にはその時期の遺構があると推定される。

甕埋納土坑ＳＫ394007は、名神大山崎工区では１か所の検出で、内容物も不明のため埋葬施設か貯蔵施設かは判断できないが、貯蔵施設の場合は深く埋め込む例がほとんどないので、貯蔵施設の可能性はきわめて少ない。

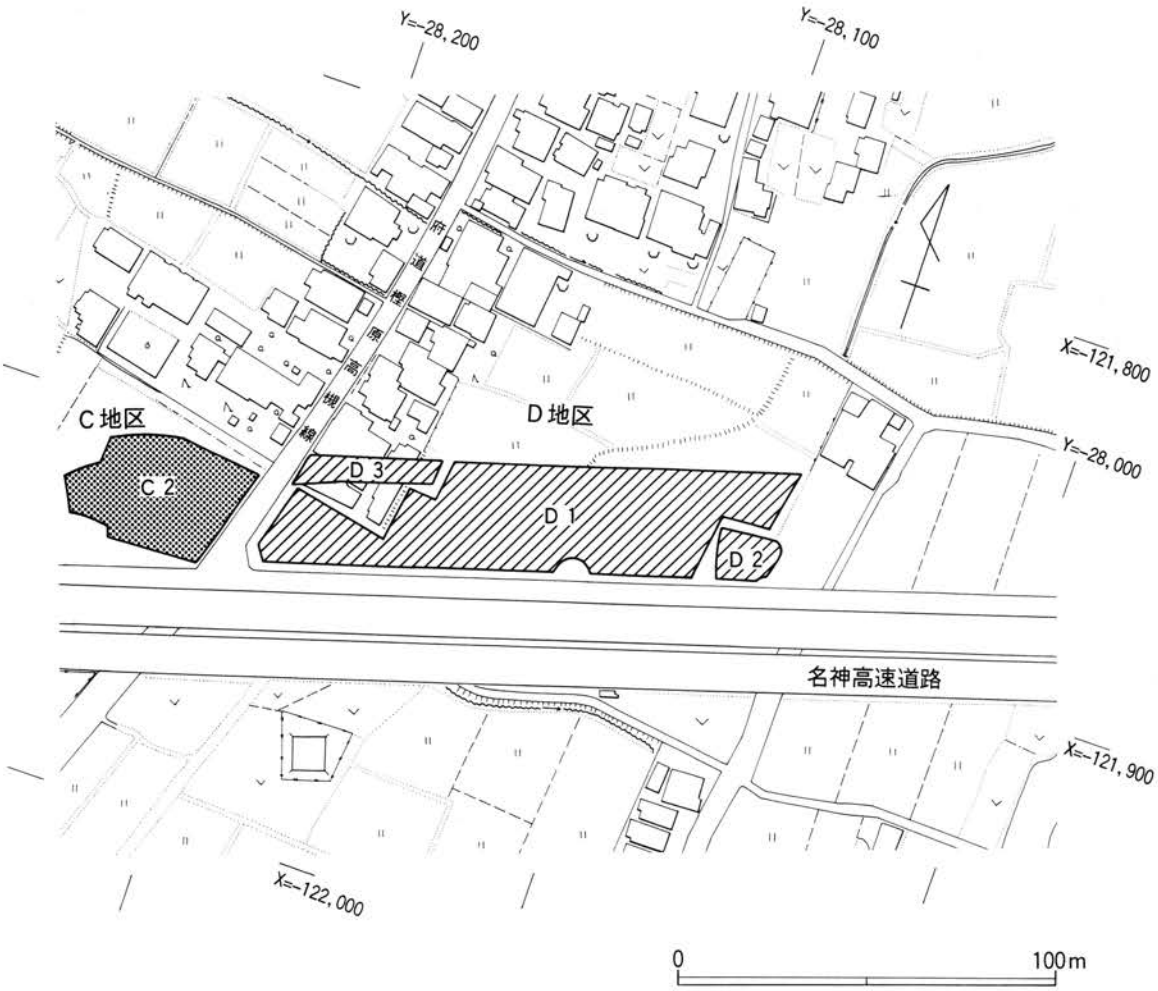
(石尾政信)

第４節　Ｄ地区の調査

Ｄ地区は、大山崎町大字円明寺小字井尻地内にあり、試掘５～７トレンチの周辺に該当し、90～92年度に本調査を行った。本調査は、用地買収の関係から１～３トレンチに分けて行った(第10図)。Ｄ１・３トレンチでは、西国街道に接した位置で掘立柱建物跡群を検出しており、Ｄ１トレンチの東半では弥生・古墳時代の竪穴式住居跡などを確認した。Ｄ２トレンチでは、小泉川の氾濫による流路・洪水堆積層を確認した。

１．Ｄ１トレンチの調査(図版第24～27・100-(2)(3))

Ｄ地区の調査地内は、西から東に向けてゆるやかに下る傾斜面をなしており、西端の西国街道東側溝ＳＤ34914と東端の井戸ＳＥ34958との検出した高さの比高差は約1.7mを測る。調査地の中央部北半には整地土が認められ、この上面と下面で遺構を検出した。現地形では、国土座標Y=-28,125付近で水田区画の段差が約１mあり、調査後でも約0.6mの高低差で東側が低かった。そのため、ＳＢ34954以東では整地層上面の遺構は削平されていた。また、Y=-28,110付近より東側は、地山の上に淡灰褐色砂礫層が堆積しており、小泉川の氾濫原であったことが判明した。こ



第10図　D地区トレンチ配置図

の淡灰褐色砂礫層は、平安時代前期以前の土器を含む包含層であるが、この層を除去して遺構を検出できた。おそらく、中世の段階で田畑として整地されて、居住に供されなかったためであろう。掘立柱建物跡ＳＢ34957以東はやや傾斜がきつくなり、試掘３トレンチの「沼」状の地形に連なり、遺構は井戸ＳＥ34958が検出できたのみで、氾濫により遺構は削平されたと考えられる。

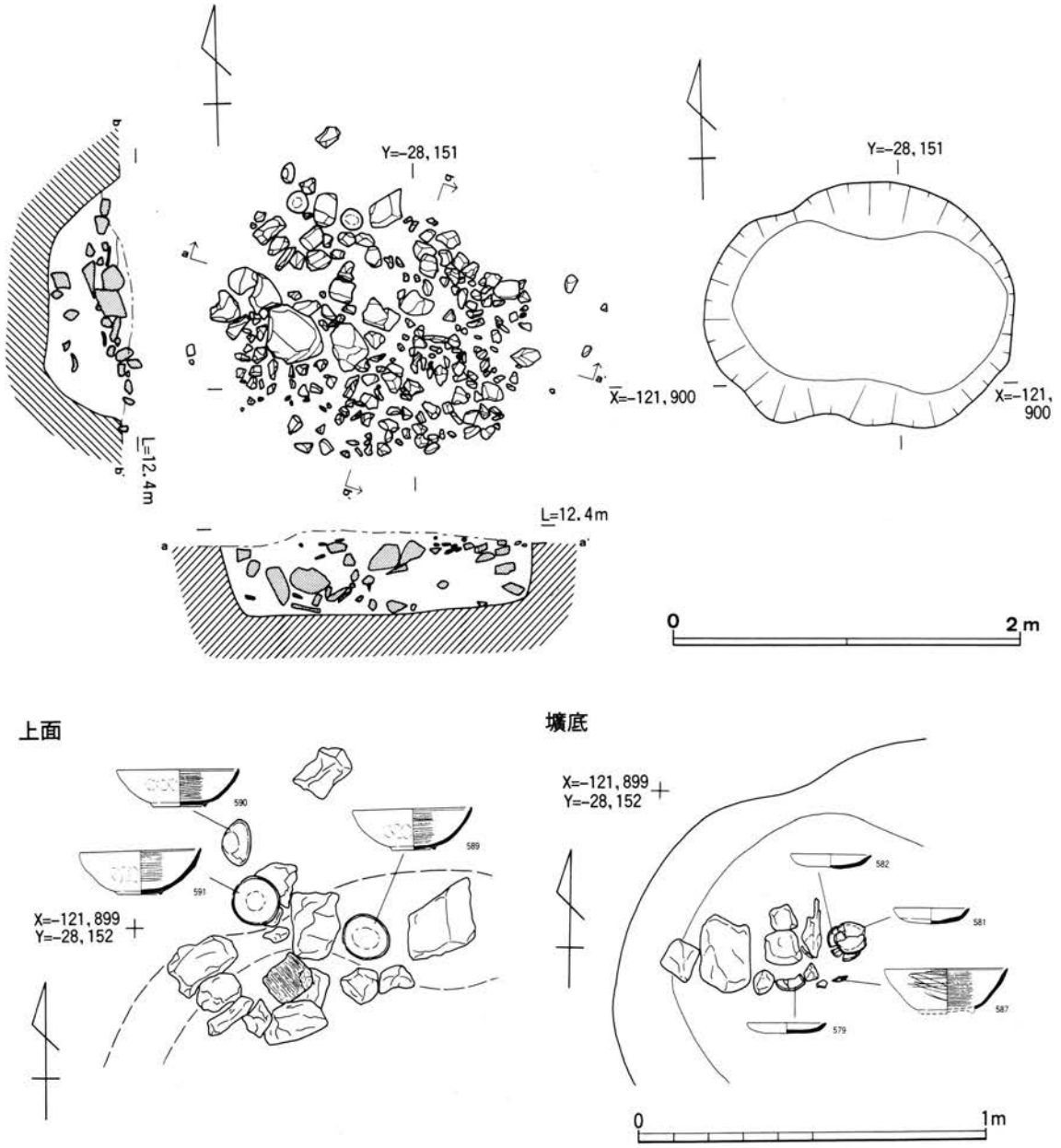
(1)中・近世

柵ＳＡ34928(図版第29)　掘立柱建物跡ＳＢ34926・27の南で検出した東西方向の柵で、４間分を検出した。柱間は5.5尺で、やや小振りの柱穴で構成されており、掘立柱建物跡ＳＢ34926・27・18と方位がほぼ一致する。掘立柱建物跡ＳＢ34919の柱穴と切り合っており、掘立柱建物跡よりも後出する。平安時代の土師器や須恵器の小片に混じって、705の瓦器皿が柱穴内から出土している。

井戸ＳＥ34920　西国街道東側溝ＳＤ34914及び路面ＳＦ34913の北側で、これらの遺構に重複して作られた井戸である。径約1.15m×約1.6mの長楕円形を呈し、検出高約0.25mである。埋土は青灰色礫混じり土である。底面近くで592・593の瓦器椀と皿が出土した。瓦器椀は、Ⅱ-1～2に相当し、12世紀中葉のものである。

中世墓ＳＸ34924（第11図・図版第106）　中世墳墓と判断される遺構で、約1.4m×約1.8m・深さ約0.4mの楕円形の掘形の中に、拳大から人頭大の石が大量に入り込んでいた。この石礫の間からは、576～591の土師器皿や瓦器椀が出土しており、特に土壙内の底面近くでは589～591の瓦器椀が完形でかためられて出土した。その状態から、埋納されたものと考えられる。人骨は出土していないが、本来は石礫を盛った塚状のマウンドを持つ墳墓であったのが、土壙内に落ち込んだと考えられる。瓦器椀はⅡ-１～２に相当し、12世紀中葉に位置づけられる。

井戸ＳＥ34921　調査地の西部で検出した井戸である。径約1.5m・深さ約0.4mの円形に掘られた穴に、桶が埋置されていた。田畑に伴う溜井戸と判断される。時期は、近世以後のものと推測される。



第11図　中世墓ＳＸ34924実測図

ＳＸ34931　中央部で検出した造成土で、盛り土を行って田畑の一筆を造成しており、最大約0.6mの段差が検出された。調査着手前の現地形でもこの段差が認められた。ＳＤ34932は、この段差の下部に設けられた排水溝と考えられる。この段差の東南部の整地土内から、製塩土器がまとまって出土している。

地境溝ＳＤ34932　中世墓ＳＸ34924の上面で検出した溝で、Ｄ３トレンチのＳＤ05の下位の溝の延長部である。遺物は出土していないが、この北側に杭列が設けられていた様相から、北側を造成した際に穿たれた地境溝兼排水溝と判断される。

(2)平安時代

西国街道東側溝ＳＤ34914(図版第101-(1))　西国街道東側溝と推定される溝で、調査地西端で検出した。幅1.25～2.3m・深さ約0.15mで、調査地の北端から南端まで約19mにわたって検出した。底面は丸底状を呈し、溝の埋土は淡灰色粘質土である。この北側のＤ３トレンチでもこの続きの溝を検出している。この溝内からは599から619の土器が出土しており、９世紀中葉から末のⅡ期古～中段階のものと考える。

廃棄土坑ＳＫ34915(図版第107-(1))　調査地の西端南側で検出した。後述の廃棄土坑ＳＫ34916とともに、西国街道東側溝ＳＤ34914を切って掘られた土坑で、切り合い関係から、廃棄土坑ＳＫ34916に後出するものである。長径約2.2m・短径約1.6mの楕円形の掘形で、検出高は約0.65mである。土層は、下半部に土器が多く混じる灰色粘土で、その上に灰色粘土混じりの黄褐色土が堆積しており、埋め戻されたと判断される。内部からは、土器や瓦の破片が比較的多く出土し、コンテナ５箱分程度あった。廃棄土坑と判断される。646から667の土器のほかに、第30図859の鉄釘が出土した。Ⅱ期新段階～Ⅲ期古段階の土器で、10世紀初頭から中葉と判断される。

廃棄土坑ＳＫ34916(図版第107-(1))　廃棄土坑ＳＫ34915に先行する土坑で、長辺約3.6m・短辺約2.3m・検出高約3.5mである。内部からは土器の破片が多く出土し、ＳＫ34915と同じく廃棄土坑と判断する。668～672の土器が出土しており、この土器の年代観より、少なくとも10世紀中葉頃にはＳＤ34914は側溝としての機能が停止しており、西国街道の路面はやや西側に移設されていたと判断される。

西国街道路面ＳＦ34913(図版第101-(1)(2))　青灰色礫混じり粘土で造成された路面で、幅2.8m以上にわたって確認した。路面は踏み固められたためか、堅く締まっていた。造成の厚さは最大で30cmを測る。路面上では、轍や足跡などを検出できなかった。一部西側に拡張し、土層を観察したところ、西国街道東側溝ＳＤ34914から西側に3.7mの幅で確認したが、それより西側は現西国街道のコンクリート側溝の掘形によって攪乱を受けていた。柱穴が路面上で検出されたことから、この路面の廃棄後、西国街道はやや西側に移設されたと判断する。

掘立柱建物跡ＳＢ34926(図版第29・101)　西国街道の東側に面して検出した掘立柱建物跡で、調査地内では１間×２間分を確認した。西国街道に面して確実な梁間１間の建物跡を確認していないので、おそらく北側にもう１間続いて、２間×２間の総柱の倉庫状になると推定される。東西の柱間が８尺、南北の柱間が７尺である。柱穴から、土師器や須恵器、黒色土器などの小片と

ともに、631の土師器の杯及び739の弥生土器壺が出土しているが、後者の土器は混じり込みと判断される。Ⅱ期古～中段階で、実年代は９世紀中葉から末と考える。北で東に約15.5°振る。

掘立柱建物跡ＳＢ34927(図版第29)　ＳＢ34926の南側で検出した２間×２間の掘立柱建物跡である。東西の柱間が８尺、南北の柱間が6.5尺に復原できる。柱穴からは土師器・須恵器・黒色土器の小片に混じって、630の土師器耳皿が出土している。北で東に約９°振っている。

掘立柱建物跡ＳＢ34918(図版第28)　２間×３間の掘立柱建物跡で、梁間の柱間が８尺、桁行の柱間が７尺に復原できる。柱穴の切り合い関係から、掘立柱建物跡ＳＢ34919に先行することがわかる。632の須恵器杯蓋が図化できた。北で東に約14°振っている。

掘立柱建物跡ＳＢ34919(図版第28)　柱穴の切り合いからみて、掘立柱建物跡ＳＢ34918に後出する掘立柱建物跡で、２間×３間に復原できる。柱間は、他の建物跡と比べて相対的に狭く、東西の柱間が4.5尺、南北の柱間が６尺を測る。方位はＮ－12°－Ｅである。柱穴内からは、土師器皿や甕、須恵器壺、緑釉陶器の破片が出土しているが、図化しうるものはない。この建物跡の中央で、約120cm×約130cmの方形の土坑、ＳＫ34917を検出した。その位置関係から、ＳＢ34919と何らかの関連を有していたと推定されるが、その性格は不明である。検出高は約10cmで、埋土からは土師器・須恵器の小片が出土している。

掘立柱建物跡ＳＢ34922(図版第31・102-(1))　西国街道から30m程度離れた位置で検出した掘立柱建物跡で、方位が北で東に約10°振り、西国街道の振れ角とほぼ一致している。身舎が南北２間・東西３間以上で、南側に廂を持っている。身舎の柱間は８尺で、廂の出は９尺である。柱穴は、平面形がややいびつな隅丸方形で、柱穴の規模にもそれほど規格性が認められない。後述のＳＢ34923とともに、柱穴内から弥生土器片が出土する割合が高く、近隣に弥生時代の遺構が包蔵されていると考えられる。633～635の須恵器杯が出土している。

掘立柱建物跡ＳＢ34923(図版第31・102-(1))　掘立柱建物跡ＳＢ34922と重複して検出した１間×２間の建物跡で、梁間12尺・桁行６尺の柱間を有する。北辺の桁行中央の柱穴は、切り合い関係があると思われ、精査を繰り返したが、確認できなかった。629の土師器皿が出土している。９世紀中葉から末のⅡ期古～中段階のものと考える。

掘立柱建物跡ＳＢ34954　東半分は削平されているが、南北２間・東西２間以上に復原できる建物跡である。柱間は５～7.5尺である。周辺では数多くの柱穴を検出しているが、建物跡に復原できるものはこれ以外にない。北で東に約３°振っており、北方位に近い。

掘立柱建物跡ＳＢ34957(図版第31・104-(2))　調査地の東端近くで検出した２間×５間の掘立柱建物跡である。北で東に約10°振っている。東西の柱間が７尺、南北の柱間が８尺である。柱穴内からは須恵器や土師器のほか、弥生土器が比較的多く出土しており、741・742が出土している。この建物跡の南側でも数多くの柱穴を検出したが、掘立柱建物跡に復原できるものはない。

井戸ＳＥ34958(図版第32・107-(2))　調査地の東端で検出した井戸で、検出高約0.65mを測る曲物の井戸である。井戸の掘形は二段に掘られ、上段は一辺約85cmの方形で、検出高約20cm、下段は径約70cmの円形で、深さ約50cmである。井戸上部は、幅約15～20cmの縦板の側板を一辺約

85cmの方形に組み、四隅に隅柱を設けるもので、側板や隅柱は最高で約25cm遺存していた。井戸下位には径約55cm×約63cm・高さ約25cmの曲物が納められており、その一部が残存していた。前者を水溜め、後者を井戸側と判断しているが、下段を井戸枠、上段を井戸側とも考えられる。この西側では、同時期と判断している掘立柱建物跡ＳＢ34957を検出しているが、これらの柱穴を検出した高さは11.2m程度で、井戸を検出した面より５～10cmしか高くない。このことから、当時の地表面はせいぜい数十cm削平されている程度であり、井戸の全体の深さは１ｍを越える程度であったと復原できる。井戸内からは、682～685の須恵器が出土している。685は篠窯石原畑窯の須恵器双耳壺で、Ⅱ期古～中段階に相当し、９世紀中葉から末に比定される。

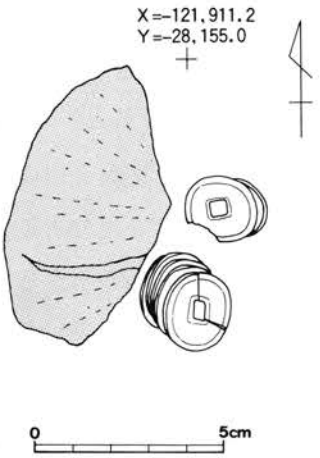
土器埋納土坑ＳＫ34925(図版第32・108-(1))　一辺約55cmの隅丸方形の土坑内に、２枚の土師器皿・杯が納められた遺構で、調査地の中央部北部で検出した。土坑の底面は斜めに掘られており、最深部は25cmを測る。土師器の皿はともに、底面から15cm程度遊離していた。これらの土器は686・687で、Ⅱ期新段階～Ⅲ期古段階、10世紀初頭から中葉に位置づけられる。

ＳＸ34933(第12図・図版第107-(3))　９枚の銭貨が１か所で出土した。これらは、３枚と６枚に分かれ、それぞれが重なっており、穴には繊維質の「紐」状のものが残存しており、紐を通していたような状況であった。すぐ横には十数cmの炭片があった。銭名を確認できるものは８枚で、すべて承和昌寳であった。不明の一枚も、大きさや出土状況から、承和昌寳である可能性が高い。これらの銭貨や炭は検出面で認めており、周囲には色調や土質の違いは認められなかった。おそらく土坑中に納められていたのが、遺構検出面まで削平されたものであろう。

土坑ＳＫ34955　調査地中央で検出した長辺約3.5m・短辺約0.9m以上の土坑で、検出した深さは約10cmである。内部の堆積土は、灰色混茶褐色土である。重複関係から、ＳＫ34956に後出する。ＳＫ34956とともに、東で南に約９°振っており、この西で検出した掘立柱建物跡ＳＢ34922・23と軸が一致する。Ⅱ期古～中段階で、９世紀中葉から末頃である。

土坑ＳＫ34956　土坑ＳＫ34955に後出し、約5.6m×約1.4m、検出した深さ約0.2mの土坑である。

土坑ＳＫ34964　調査地の東部で検出した土坑で、平面形は約2.1m×約2.2mと方形を呈する。検出した深さは約７cmと浅い。まとまった遺物の出土はなく、土師器の細片から、平安時代のものと推定する。



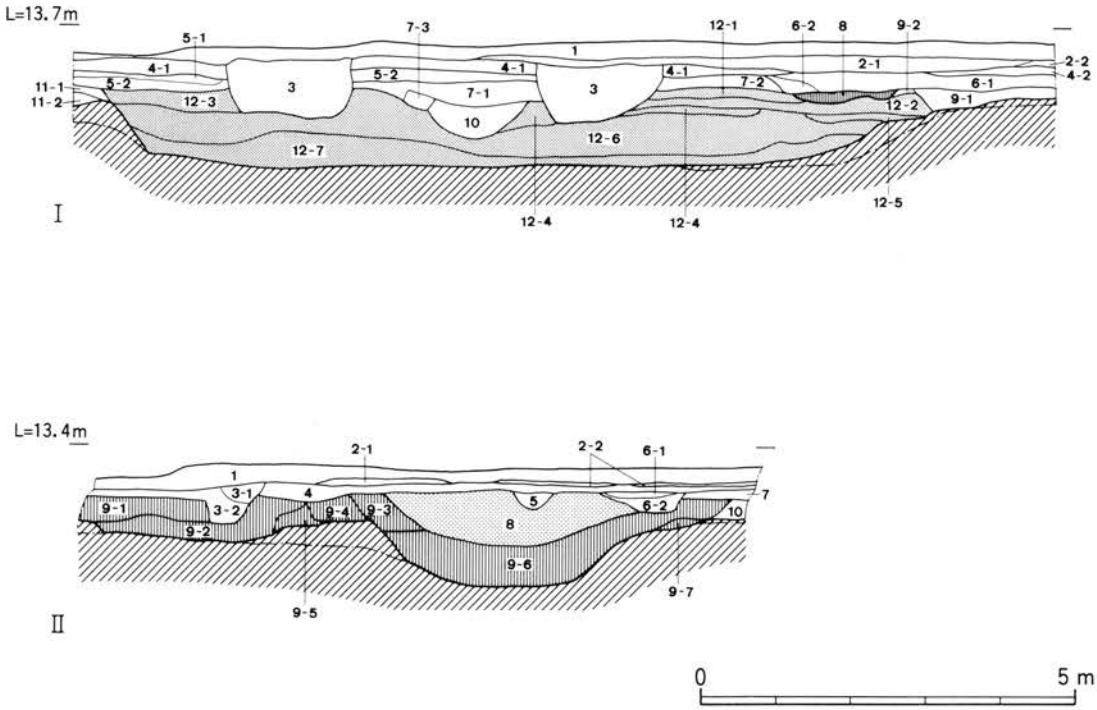
第12図　ＳＸ34933実測図(網は炭)

溝ＳＤ34953(図版第102-(3)・103-(2)(3))　調査区の中央部の下層で検出した溝で、やや蛇行して東に向けて、東端でほぼ直角に南に曲げて掘削される。総延長約50mにわたって検出し、幅約２ｍ・深さ約0.6mである。自然流路ＳＲ34952の流れの方向が自然地形に沿ったもので、この溝ＳＤ34953はそれにあっていないことと、直角に折れ曲がることから、人工的な溝と考えられる。西端は、自然流路ＳＲ34952と同じ地点から検出しており、土層観察では自然流路ＳＲ34952より後出のものであ

る。ともに砂層を主体とした堆積土で、ＳＲ34952の流れを人工的に振り替えたものと考えられる。溝の埋土からの土器の出土は少なく、712の須恵器杯蓋が出土しているが、東西を意識していることや東辺の南北方向の溝がほぼ真北を向くこと、平安時代の柱穴などを切っていることから、平安時代～中世の時期に掘削されたと判断される。

(3)弥生・古墳時代

竪穴式住居跡ＳＨ34959(図版第33・104-(1)) 弥生時代後期の方形竪穴式住居跡で、約4.7m×約5.5mのやや細長い平面形をなしており、検出高は最も残りのよいところで約20cmを測る。主柱穴は四本(径約20cm・深さ約30cm)で、主柱穴の中央部に約40cm×約50cm・深さ約30cmのやや



第13図 Ｄ１トレンチ土層実測図

Ⅰ西端部南壁土層図

1. 黒灰色粘質土
2. 床土
   2-1. 褐色土
   2-2. ややうすい褐色土
3. 現代井戸
4-1. 暗黄色土
4-2. 淡暗褐色土
5-1. 黒灰色土
5-2. 茶褐色土
6. 平安時代包含層
   6-1. 暗茶褐色礫
   6-2. 淡灰色礫(大ぶり)
7. 西国街道ＳＦ34913整地土
   7-1. 暗青灰色砂混粘土
   7-2. 淡灰色礫
   7-3. 暗褐色砂礫
8. 西国街道東側溝ＳＤ34914
   褐色混淡灰色礫
9-1. 暗灰色礫混土
9-2. 明褐色砂
10. 暗青灰色粘土
11-1. 暗灰褐色土
11-2. 淡黄灰色土
12. 流路ＳＲ34951
   12-1. 淡黄褐色砂土
   12-2. 淡黄灰色砂
   12-3. 暗灰色砂質土
   12-4. 暗灰色礫(やや粗い)
   12-5. 淡灰色礫(やや細かい)
   12-6. 暗青灰色礫多混土
   12-7. 黄色混淡灰色砂質土

Ⅱ中央部西壁土層図

1. 耕作土
2. 床土
3. 地境溝ＳＤ34932
   3-1. 暗茶褐色土
   3-2. 礫混淡黄灰色土
4. 褐色土
5. 明茶褐色土
6. 上面検出東西溝
   6-1. 黄茶色土
   6-2. 黄灰色礫混土
7. 茶色混灰色土
8. 溝ＳＤ34953：径2～3cmの粗い礫
9. 流路ＳＲ34952
   9-1. 明茶褐色土
   9-2. 淡灰色土
   9-3. 淡灰色砂質土
   9-4. 暗褐色土
   9-5. 茶色混淡灰色土
   9-6. 径2～3cmの礫が混じる砂
   9-7. 灰色混黄色土
10. 灰色土

大形の土坑があった。形状から、中心柱の跡と考えられる。中央土坑の南西に偏したところで炉を検出した。約0.8m×約1.05m・深さ約0.1mの皿状の浅い掘り込み内に、炭化物が混じっていた。炉壁はあまり赤化していなかった。北壁の一部で壁溝を検出している。埋土からは743～747の弥生土器が出土し、745の高杯は床面に接して出土した。

竪穴式住居跡ＳＨ34960(図版第33)　溝ＳＤ34953に一部削平されているが、約2.7m×約3.4mの方形竪穴式住居跡と考えられる遺構である。検出高は約0.1mと浅く、内部から732の須恵器杯身が出土している。

他に、竪穴式住居跡状の遺構としてＳＨ34961～63を検出しているが、これらの遺構からは顕著な遺物は出土しておらず、竪穴式住居跡である確証はないが、竪穴式住居跡ＳＨ34959やＳＨ34960に近接しているので、一応、竪穴式住居跡と考えておく。また、竪穴式住居跡ＳＨ34960の南側では約0.7m×約１m程度の土坑群を検出しており、まとまった遺物は出土しなかったが、土壙墓群の可能性がある。

流路ＳＲ34952(第13図Ⅰ・図版第105-(2)(3))　調査区中央部で検出した北西から南東に流れる流路跡で、幅3.2～4.4m・深さ約0.6mである。堆積土は、砂礫を主体とする。溝ＳＤ34953と同一地点からトレンチ内に入り込んでおり、流路ＳＲ34952を人為的に付け替えたのが溝ＳＤ34953と判断される。遺物の出土はほとんど見なかったが、733・734の須恵器が出土している。

土坑ＳＸ34965(図版第32・108-(3))　掘立柱建物跡ＳＢ34922の西北隅柱穴の下層で検出し、土師器甕が横位に埋納されていた(736)。検出した際には、土圧で細片に割れていた。土坑は約50cm×約55cmの楕円形の平面を呈し、底面は平坦である。埋土は淡黄褐色粘質土で、ベースの地山と識別が困難であった。土坑内には石なども全くなく、甕内から他の遺物の出土もなかった。

流路ＳＲ34951(第13図Ⅱ・図版第105-(1))　西端部の下層で検出した北西－南東に流れる、幅９m以上・深さ約1.1m以上の自然流路である。埋土はやや粘質の砂層の堆積も認められるが、基本的に砂層と礫層で構成され、流れが早い流路であったと推測される。遺物の出土はほとんどなく、数点の土師器もしくは弥生土器の小片に混じって、737の壺片が出土した。

２．Ｄ２トレンチ(図版第38・109)

基本的な層位は、盛り土―耕作土―床土―淡灰色砂土―淡灰白色土―明茶褐色土―暗灰色礫土(弥生～平安包含層)―淡灰色礫土(地山)である。調査地の中央部分と東辺部分の大きく２か所に流路内堆積土が認められる。これらの流路は、耕作土・床土直下からこの流路が切り込まれており、遺構面や地山面にまで到達していた。それぞれの流路は重複関係を有していて、東側の流路の方が新しい。

調査は、暗灰色砂礫土層までを重機で掘削し、以下手掘りで作業を進めた。

流路ＳＲ36740　トレンチの中央部で検出した流路で、埋土は淡灰色砂系統である。近世以降の土器を少量ながら含んでいた。土層断面では、耕作土・床土直下からＳＲ36740が切り込まれ、トレンチ東壁では調査面直上にまで流路内堆積土が覆っていた。近世以降の小泉川の氾濫の際の

部分的な「抉れ」がＳＲ36740として確認できたと判断される。

柱穴・土坑　地山面で検出した。地山の淡灰褐色礫土の上面は、西から東に下る地形で、この地山面で柱穴・土坑を検出した。これらの遺構内からは、平安時代と考えられる須恵器・土師器及び弥生土器が出土したが、その性格は不明である。

杭列　包含層である暗灰色砂礫土層を掘り下げている段階に、杭列を検出した。その時期などは不明である。

この調査地では、近世以降の流路跡が南北に貫流し、弥生～平安時代の遺構面を大きく抉っており、小範囲の発掘ということもあり、顕著な遺構は確認できなかった。Ｄ３トレンチの北・西側にあたるＤ１トレンチの東端部では、ＳＢ34957より東側は徐々に下る緩傾斜をなしており、井戸ＳＥ34958以外に顕著な遺構は検出できていない。Ｄ３トレンチの地山と考えられる淡灰色礫土層の上には、平安時代の遺物を含む暗灰色砂礫土層が堆積している。この土層は、小泉川の氾濫原堆積と判断され、小泉川の氾濫によって大方の遺構は削平されたようである。この下る地形は、試掘３トレンチで確認した沼状地形につながっていくと考えられる。

ＳＲ36740は、近世段階の小泉川の氾濫によると考えられ、近世の文献に見られる小泉川の改修工事の要因となった小泉川の氾濫を具体的に裏付ける遺構と判断される。

この調査トレンチからは、弥生時代以降近世の染め付け片までが出土しているが、遺構に伴うものは少なく、図化しうるものはない。

３．Ｄ３トレンチの調査（図版第34・110）

Ｄ３トレンチでは、平安時代の西国街道路面、同東側溝、掘立柱建物跡、土坑などを検出しており、南側のＤ１トレンチと同じ様相である。

調査は、重機により宅地の造成土を除去し、以後、人力による掘削に切り替えて調査を行った。この調査トレンチの東半分は、田畑の造成のために地山面が一段低くカットされ、そこには明治以降に盛り土がなされていた。そのため、平安時代にさかのぼる遺構は削平のためか、トレンチ東半では全く検出できなかった。報告は大きく近世以後と平安時代の二時期に分けて記述する。

(1)近世以後

井戸ＳＥ394105　調査地の西端部で検出した径約1.3mの井戸で、残存高約0.5mである。内部からは近世以降の陶磁器片が出土している。

井戸状遺構ＳＸ394107（図版第113-(2)）　南辺約4.3mの掘形で、検出高約1.2mである。二段に掘られた井戸状の土坑で、北半は調査地外にのびる。井戸側は、残欠も含めて全く認められなかった。木質を多く含む暗灰色土層から上では近世の陶磁器片が多く出土した。それよりも下層では近世陶磁器片を含まず、平安時代以前の須恵器・土師器が出土しているが、平安時代にさかのぼるものではなかろう。

石垣ＳＸ12（図版第35・112-(2)）　調査地の東半部で検出した石垣状の遺構である。石列は一段分約35cmを確認した。石垣の下位には、横棒を杭で止めて、石列を支えていた。この西側約３

mと東側は盛り土を行って造成していた。

暗渠施設ＳＤ05(図版第35・112-(3))　東西方向の溝で、内部に二列の木棒を埋め込んでいた。

井戸ＳＥ02(図版第35・113-(1))　溝ＳＤ05を切って造られた井戸で、現代のゴミなどが廃棄されていた。

(2)平安時代

西国街道東側溝ＳＤ394101(図版第111-(1)(2))　西国街道東側溝と判断する南北方向の溝で、検出長約10m・幅約2.3m・検出高約0.2mである。Ｄ１トレンチのＳＤ34914の北側の延長部に相当する。南半部は土砂取りのため大きく攪乱を受けており、この溝の肩は検出できなかった。北側ではほぼ真北方向を向くのに対して、南半の攪乱部より南側では、約10°東に振るものと復原できる。この溝内からの出土遺物は小片が多く、実測しうるものはなかった。

西国街道東側溝ＳＤ394102　調査地の西辺で、西国街道路面ＳＦ394103の上面で検出した南北方向の溝で、ＳＤ394101の西側約1.5mで検出した。現西国街道に平行し、西肩は調査地外にあるため検出できなかった。南端は浅くなりつつ、やや西に振って調査地外にのびる。調査地内では溝底は確認できず、北壁で確認できた深さは0.3m以上である。その位置関係や方向、出土遺物からＳＤ394101に後出する西国街道東側溝と判断される。検出幅は約0.6m、検出長は約９mである。Ｄ１トレンチでは、この溝に対応する溝は検出されていない。内部からは594～598の土師器杯・甕、無釉陶器の椀の破片が出土しており、10世紀後半から11世紀初頭のものと考える。

西国街道東側溝ＳＤ394106　ＳＤ394101に切られた溝で、ＳＤ394101に平行した範囲が、全体に徐々に西側に傾斜して落ち込んでいき、西辺の肩は急激に立ち上がる。北端部の約2.7m×約3.6mが土坑状になっており、最深部で約0.15mを測る。検出した深さは約0.2mである。ＳＤ394101に先行する西国街道の側溝と判断する。620～628の土師器や須恵器が出土している。ＳＸ349133と同じくＩ期新段階で、９世紀初頭の年代が与えられる。

西国街道路面ＳＦ394103(図版第111-(1)(2))　西国街道の路面と判断される遺構で、ＳＤ394101を東側溝とする路面である。拳大の石が混じる造成土で形成されており、土層断面の観察では、約20cmの厚さを確認できた。轍や足跡は検出できなかったので、ある程度は上部が削平されていると考えられる。路面内には若干の土器が混じっていた。路面に相当する造成土を除去すると、下面で柱穴などの遺構を検出した。路面検出面の上からは柱穴などの遺構は認められなかったが、Ｄ１トレンチでの調査を参考にすると、路面の上から切り込まれていたと推定される。この整地土内から出土した641は篠前山２・３号窯の椀に近似し、10世紀前半のものである。

土器埋納遺構ＳＸ394104(図版第111-(3))　ＳＤ394101の南部が幅約3.3m・長さ約５m・深さ約0.3mにわたって攪乱を受け、また、ＳＤ394101の溝の掘形は削平されており確認できなかったが、この溝の延長上で完形の土器や破片が石礫とともに密集して検出された。この土器群に伴う土坑の掘形は確認できなかったが、検出したレベルは、ＳＤ394101の溝底より約20cm下位に位置しており、何らかの土坑に埋納されていたと推測される。出土した土器の実測図は673～681である。ＳＤ394106と同じくＩ期新段階、９世紀初頭のものと考える。

掘立柱建物跡ＳＢ394108(図版第30)　柱間は８尺等間で、Ｎ－10°－Ｅの方位を有する掘立柱建物跡である。調査範囲が狭いため、全貌は不明であるが、この南側のＤ１トレンチでは２間×２間の倉庫状の建物に復原できることから、同じく、２間×２間の掘立柱建物と考えられる。637～640の灰釉陶器や無釉陶器の椀・皿が出土している。

掘立柱建物跡ＳＢ394111(図版第30)　梁間１間・桁行２間の掘立柱建物跡で、梁間の柱間が９尺、桁行の柱間が５尺である。636の須恵器が出土している。

掘立柱建物跡ＳＢ394109(図版第30)　１間以上×２間以上の建物跡で、東西の柱間が８尺、南北の柱間が7.5～８尺に復原できる。北で東に約15°振る方位をもつ。土師器、須恵器のほかに黒色土器や緑釉陶器が出土しているが、いずれも小片であって、図化し得なかった。

掘立柱建物跡ＳＢ394112(図版第30)　柱間８尺で２間分を確認した柱列である。柵とも考えられるが、柱穴規模や柱間の間隔が他の掘立柱建物跡と違いが認められないので、一応掘立柱建物跡の南辺列と考えておく。他の掘立柱建物跡と違って、振れ角が北で東に２°と、ほぼ座標北に向いているが、これは、西国街道東側溝ＳＤ394101が調査地の中央部より北側で、ほぼ真北を向いて掘削されていることと関係するかもしれない。柱穴内からは727の須恵器杯が出土している。

掘立柱建物跡ＳＢ394110(図版第30)　２間以上×３間以上の総柱の掘立柱建物跡に復原できる。柱穴は他の掘立柱建物跡と比べてやや小振りで、円形の柱穴も認められる。北で東に約15°振っており、他の掘立柱建物跡と同じく、西国街道に平行している。柱穴からは須恵器や土師器、黒色土器、緑釉陶器片が出土している。

(岩松　保)

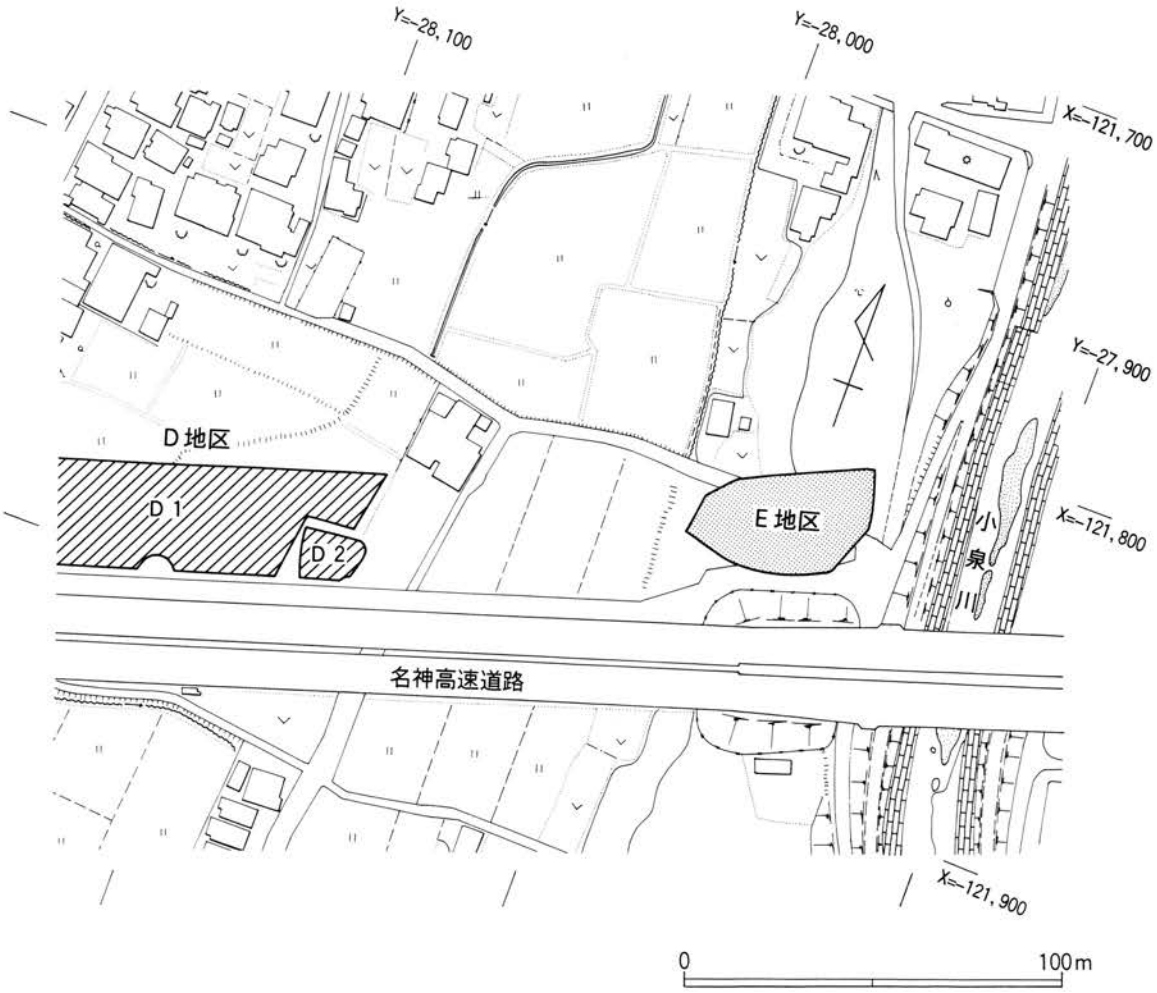
第５節　Ｅ地区の調査(図版第39・114)

Ｅ地区は、大山崎工区の東端に位置し、小泉川の西隣りである。Ｅ地区の西側は、試掘調査で沼地形となることが判明していた。そのため、Ｅ地区は小泉川より東側の下植野南遺跡や南方の算用田遺跡との関連が注目され、Ｃ・Ｄ地区とは異なる遺構が検出されることが予想された。小泉川下流域は、乙訓地方ではよく知られた天井川で、調査地の低い場所と、小泉川の河底はほぼ同じ標高である。

調査は、現地表から3.0～2.5m下、およそ標高12.2mの古墳時代後期の須恵器・土師器が出土する遺物包含層まで重機によって掘削し、その後は人力による手掘り作業を行った。古墳時代後期の遺物を包含する層は、調査区域の西側と南側に認められた。この遺物包含層を削り込んで粘砂土層・粘質土層・礫層が広がっており、北から南西方向の流路跡ＳＲ367042と判明した。流路跡埋土の上面で井戸跡ＳＥ367041を検出し、トレンチ西側で轍ＳＸ367043、竪穴式住居跡ＳＨ367045、南側で竪穴式住居跡ＳＨ367047などを検出した。

(1)近世以後

井戸ＳＥ367041(図版第42・118-(1))　流路跡埋土上面で検出した隅柱横桟止めの井戸である。平面形が一辺2.0～2.2mの隅丸方形で、検出面からの深さ約1.6mを測る。井戸底は流路跡の砂



第14図　E地区トレンチ配置図

礫層に到達している。桟の外側に丸杭を並べ、掘形の裏込めには礫を充填する。水田耕作に伴う灌漑用のものであろう。埋土から近世の桟瓦・漆器椀・陶器などが出土した。

流路ＳＲ367042ａ・ｂ（図版第115）　調査トレンチの大半が、ＳＲ367042の堆積砂礫である。粘質土層が堆積したところをａ、礫層の堆積したところをｂとした。流路内の砂礫層中には、平安時代以降の遺物が若干含まれており、西肩部の粘質土層中からは、須恵器杯蓋ＴＫ47や布留式土器壺が出土している。少なくとも古墳時代初頭頃には、この流路は形成されていたと考えられ、最終的に埋まった時期は、流路内の堆積砂内に井戸ＳＥ36741が造られていることから、近世の段階以前である。砂礫層中に若干ながらも平安時代以後の土器が混じることから、この流路は近世に至るまで流れていたと考えたい。この流路は、その流れの一部と判断される流路が下植野工区で確認されていることや、古墳時代後期の竪穴式住居跡を一部削平したりしているので、安定した流れであったのではなく、その規模や流量を時々に変えながらも、このＥ地区にその流れの中心があったのであろう。

溝ＳＤ367048（図版第115-(1)）　流路跡ＳＲ367042の礫層を除去した後の下層で検出した溝跡である。ほぼ南北方向に走る溝跡で、粘土層を削り込んで砂礫が堆積していた。幅0.7～3.5mを

測り中央付近が最も深く、南端は粘土層で止まっている。小泉川が激流となった時点で形成されたのであろう。砂礫層には磨滅した土器細片がわずかに混入していた。

(2)平安時代

轍群ＳＸ367043(図版第42・118-(2)) 西側の古墳時代後期遺物包含層の上面で検出した南北方向の轍状遺構である。轍は３組以上あり、その心々間は140～150cmを測る。幅10cm前後・深さ約３cmを測り、轍内には砂質土・砂が入っていた。この埋土からの出土遺物はなく、時期を決定するには至らないが、轍が切り込んだ包含層(古墳時代後期)より新しく、轍を覆っていた土層の時期(平安時代)より古いといえる。古墳時代後期から平安時代の、この地が安定していた時期には、道路として利用されたことを証明するものである。

(3)弥生・古墳時代

竪穴式住居跡ＳＨ367045(図版第41・116) トレンチ西端の轍群より下層で検出した竪穴式住居跡である。北西部は未調査であるが、一辺約3.6mの方形で、検出面からの深さ約0.2mを測る。住居跡の主軸は座標北から東に約40°振り、北東辺にカマドを造り付ける。壁溝はみられない。主柱穴は東側に２か所検出し、柱穴の直径は約30cm・深さ15cm前後を測る。カマドに向かって右側に土器がまとまって出土した。出土した須恵器杯身は、須恵器編年のＭＴ15・ＴＫ10に併行するもので、６世紀前半の所産であろう。東海系の影響がみられる脚台が付く土師器甕が出土している。

竪穴式住居跡ＳＨ367047(図版第41・117) トレンチ南端の土坑状砂礫堆積ＳＫ367044の下層で検出した竪穴式住居跡である。北西隅は流路に削られ、南東部は未調査であるが、一辺が約5.8m、検出面からの深さ約0.15mを測る。住居跡の主軸は真北から西に約90°振り、西辺にカマドを造り付け、北東隅にカマド状の施設が敷設されている。壁溝はみられない。カマド内には土師器長胴甕が壊された状態で見つかり、カマドに向かって右側に土器がまとまって出土した。出土した須恵器杯蓋は、須恵器編年のＴＫ209に平行する。７世紀前半の所産であろう。

土器埋置遺構ＳＸ367046(図版第42・118-(3)) 住居跡ＳＨ367045の北東で検出した埋め甕遺構で、弥生時代後期の甕が２個体、並んで発見された。明確な掘形はみられない。甕内部に土砂が落ち込んでいただけである。

調査地の約３分の２が平安時代以降に小泉川の氾濫によって削られ、大きく地形変貌したことが判明した。氾濫の影響が小さい場所では、轍群や古墳時代後期の竪穴式住居跡などを検出し、新たな知見を得た。

住居跡のカマドは残存状態が良好で、カマドの造り方、使われ方や住居跡を廃棄したときのようすがわかる好資料である。また、この住居跡は、小泉川左岸の下植野南遺跡や、下流(南方)の算用田遺跡の広がりを考える上で注目される。

(石尾政信)

第4章　出　土　遺　物

第1節　土器

1．時期区分

(1)時期区分概略

百々遺跡の一連の調査では、縄文時代から近世までの各時期の土器が出土している。これらを大きく見ると、D3トレンチの東半で確認された造成土内で見つかった近世後期の土器群、C地区全域及びD地区で検出した平安時代初頭から15世紀にいたるまでの土器、E地区・C3aトレンチの竪穴式住居跡のほかに各トレンチで散発的に見られる古墳時代後期の土器群、D1トレンチ東半からE地区にかけての古墳時代前期の遺構に伴う土器、これとほぼ重なる分布を有する弥生時代後期の土器群がある。

(2)各時期の様相

①近世

D3トレンチで検出した石垣遺構SX12の東・西で検出した造成土やその上・下で検出した遺構から出土している。肥前陶磁器や土師器皿、信楽焼擂り鉢などが出土した。土師器皿は口径により、5.6～7.6cm、9～11.2cm、12.8cmの三種がある。小森・上村らの土師器編年によると、XⅢ～XⅣ期に相当し、18世紀後半～19世紀の実年代が得られる(小森・上村1996)。肥前陶磁器はⅤ期に相当し、その年代観は矛盾しない(大橋1989)。

②中世―瓦器出現以後

a．土器群の概略

百々遺跡の発掘調査では、C地区とD地区で中世の多くの遺構を検出した。特に、C3aトレンチとC4トレンチ、D1トレンチで検出した素掘り井戸の中からは、瓦器椀と土師器皿が井戸の廃棄段階に「埋納」されており、極めて一括性の高い遺物群と判断される。その他、C1トレンチでは、流路内に廃棄された土器を中心に中世の土器群が出土しており、これらも一括性の高いものである。なお、ここでは、瓦器出現以後の土器を中世土器、それ以前を平安時代の土器と呼称しており、この呼称をそのまま時代区分に用いている。

さて、掘立柱建物跡や土坑内から中世の土師器皿が単独に出土する場合がままある。乙訓地域における土師器皿の編年には百瀬(1985・1995)や岩崎(1986)、小森(1994)、中井(1994)らのものがあるが、編年のタイム・スケールが大きいため、今回の百々遺跡のように継続的に集落が営まれた場合には、細かな遺構の先後関係を議論するのに適していない。そこで、今回の一連の調査によって確認した遺構・遺物をもとに、下記のように簡便な編年表を作成した。

まず、瓦器出現以後の遺構から出土した瓦器椀と土師器皿の組み合わせを中心に概観したい。

各遺構出土の土器群は、森島の瓦器椀の編年案(森島他1995)に準拠して、時期の古いものから順に掲げてある。

ＳＥ394003(図版第43・119)　13の瓦器椀は、内外面ともに密に圏線が施され、器形は全体に深い感じを与える。底部が欠損しており、高台の形状はよくわからない。６の土師器皿は、平安時代前期によく見られる口縁端部下を強くナデて端部を外方に引き出すタイプである。９の土師器皿は、体部上半の横ナデによる屈曲部が体部と底部の間に見られ、伊野のＤタイプの形状を示している(伊野1995)。後述のＳＲ34901内出土の土器群と比べて瓦器椀の形状が古い様相を示すこと、６のような古い様相を示す土師器皿を供伴していることから、ＳＲ34901内出土の土器群と同時期の可能性を認めつつも、一段階古い時期の一群としたい。

ＳＲ34901(図版第48・121・122・131)　瓦器は、内外面ともミガキが施され、高台は比較的しっかりとしているが、内面のミガキの間隔がやや広いものも見られる。森島編年のⅠ-３～Ⅱ-２(以下同)に相当し、12世紀初頭～中葉の時期が与えられる。このうち、一括投棄されたと判断される土器群は127・133～135・141・142・150・153・154・163・164で、この瓦器椀だけを見るとほぼⅠ-３～Ⅱ-１タイプのもので、12世紀前半の土器群と考えられる。土師器皿には、口径8.0～9.5cmの小皿(121～129)と13.5～15.5cmの中皿(133～143)がある。小皿には、端部がやや外反し二段の屈曲が認められるもの(121～123)、斜め上方にのびて単純に終わるもの(124～129)があり、ともに底部を調整した際の指ナデ痕跡が残る。中皿はＤタイプで、指オサエによる調整後に口縁部を横方向にナデているため、体部下半に段を有する。

ＳＸ34924(図版第61・126)　瓦器椀は、内外面ともにミガキが多く施され、高台も比較的しっかりとしている。Ⅱ-１～２に相当し、12世紀中葉に位置づけられよう。土師器皿は、口径8.5～9.5cmのものが主体で、調整は底部指オサエ未調整＋口縁部横ナデである。平らな底部からやや屈曲して斜めに立ち上がる口縁を有しており、器高が深いものは伊野のＤタイプに形態が近似する(581・583)。

ＳＥ36710(図版第45・120)　瓦器椀は、口径14.1～15cm・器高4.3～5.5cmである。体部外面のヘラ磨きは、省略もしくは省略化の方向にあり、内面の圏線ミガキも粗く施されている。口縁部内面の沈線はかろうじて認められる。Ⅱ-２～Ⅲ-１に相当し、12世紀後半から13世紀初頭の年代観が得られる。同タイプの瓦器椀はＳＫ34904からも出土している(図版第48・122)。これらの遺構から出土した土師器皿には、口径９cm前後のものと13～15.5cmの二種が認められる。前段階のＤタイプの系譜を引くものもある(70)が、Ｄタイプの器高を浅くして体部の段をなくした形状(173・174・176)や、底部から直に短く立ち上がった口縁を有するものもある(175)。

ＳＥ36713(図版第45・120・131)　瓦器椀はわずかながらも高台が付いており、口縁端部内面の横方向の沈線は省略され、内面の圏線は粗く施されている。口径10.2～14.2cmである。型式はⅢ-２～Ⅲ-３に相当し、その実年代は13世紀前半である。土師器皿には、口径は11～12cmのものと、６～８cmの小形のものがある。口径11～12cmのものは、前段階の口径13～15.5cmの中皿の範疇で捉えられるのかもしれない。底面を指オサエで平たく調整し、ほぼ直立して上方向にのびる

口縁を有するもの(52・55)と、斜め上方に短く立ち上がり、単純に終わるもの(53・56)がある。

ＳＫ394004(図版第43・119)　瓦器椀に施される圏線の省略化が著しいが、かろうじて高台が認められる。口径は12cm前後である。Ⅲ-３～Ⅳ-１に相当し、その実年代は13世紀中葉～後葉である。土師器皿には、平らかな底面に、斜め上方に直線的にのびる口縁を有するタイプで、口径により、7.5cm前後と10cm前後の二種がある。

ＳＥ36712(図版第45・120)　この遺構からは瓦器椀が出土しておらず、44の瓦質羽釜を鋤柄編年(鋤柄1995)でみると、14世紀前葉～中葉のものである。土師器皿の口径は10～11cmで、やや偏平な感を受ける。

ＳＥ394001(図版第43)　瓦器椀の出土がなく、４の須恵器片口鉢は、口径(復原)が27.4cmで、口縁端部の上下の拡張が明瞭ではなく、上部に肥厚させて終えている。森田編年(森田1995)の第Ⅲ期第３段階に相当し、その実年代は14世紀後半頃である。土師器皿は、平らな底部から斜めに短く直立する口縁を有するもので、器高指数10前後の浅いものである。

ｂ．各土器の変遷

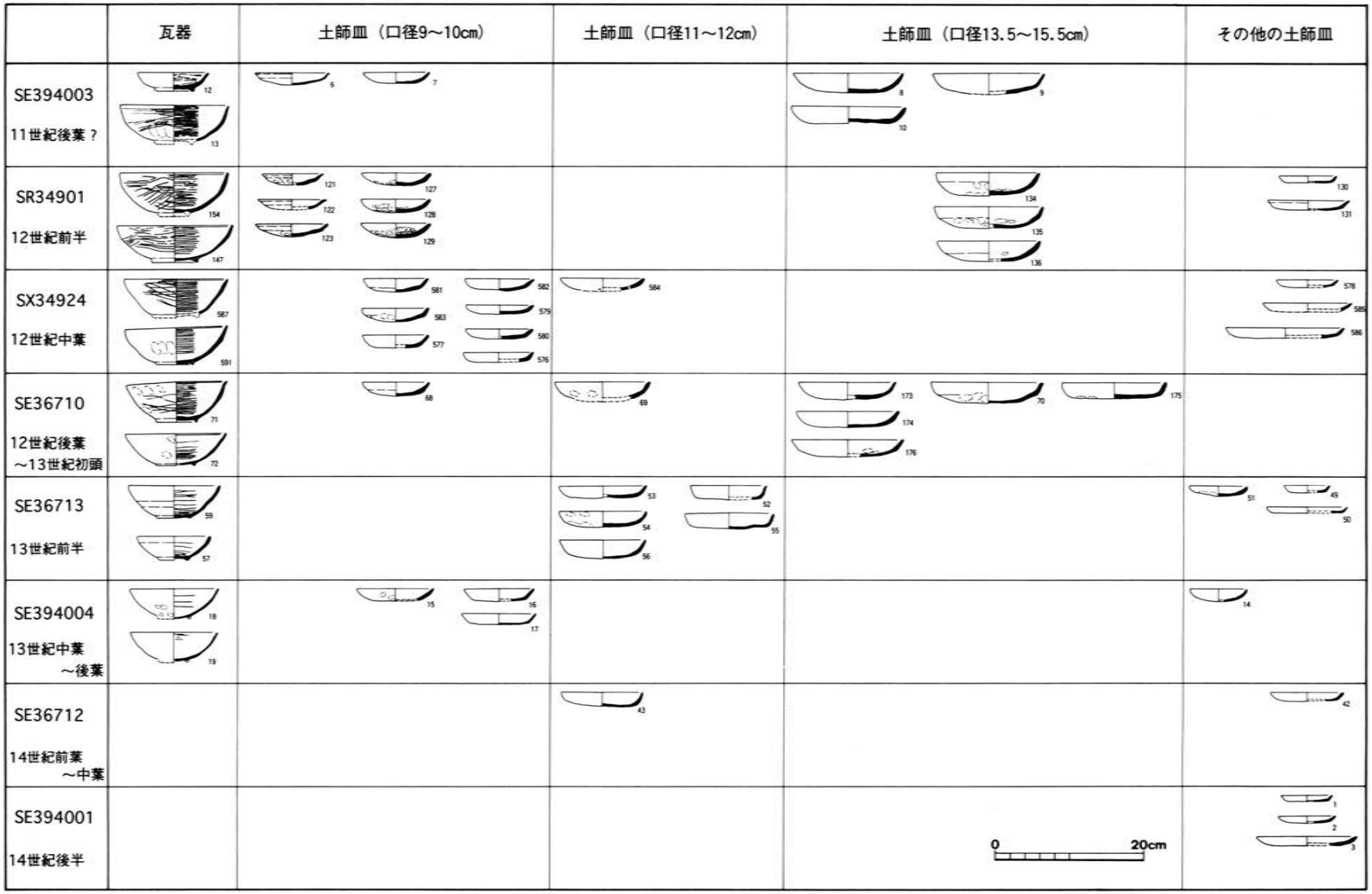
前項のように、各土器群にその実年代を当てはめた。各土器の器形の消長を簡略にまとめたのが第15図である。

土師器皿は、大きく分けて、口径13.5～15.5cmの中皿と９～10cm程度の小皿がある。６・121～123のように、口縁部を強くナデて屈曲させる平安時代前半に盛行する形態の系譜を引くものもあるが、量的には少ない。多くみられるのは、やや小さい底部から斜め上方に口縁がのびて、三日月状を呈するもの(７・15・68・127～129・577・581・583)と、やや広い底部から斜めに口縁が短く直立する形態(16・17・576・579・580・582)である。ともに、時代が下るにつれて口径が小さくなり、前者・後者ともに口縁が立ち上がるその屈曲の度合いが強くなる傾向にあり、最終的には後者のものとほぼ同じ器形となるようである。

中皿は、底部から斜めに立ち上がる口縁が単純に終わるもの(８・10・173・174・176)と、やや深い器高をもち、口縁部を強く横ナデし、体部に屈曲が認められるもので、伊野のＤタイプに相当するもの(９・70・134～136)がある。また、広い底部をもち、直立気味に口縁が短く立ち上がるもの(175)も見られる。これらからも、体部から口縁にかけての屈曲を強める傾向と、口径が小さくなる傾向が見られる。

中皿と小皿の中間に口径11～12cmのものが見られる。この口径のものは、中皿と基本的に同じ形態をとり、広い底部に直立気味に口縁が短く立ち上がるもの(52・55)と、底部から斜めに立ち上がり単純に口縁が終わるもの(53・54・56・69・584)がある。先にも指摘したように、中皿と系譜的につながるのかもしれない。

これら以外に、口径８cm以下のもの、器高が１cm内外で極めて偏平な器形の皿も若干見られるが、百々遺跡ではあまり出土せず、やや不確かである。前者は、やや小さい底部から斜め上方にのびた口縁が単純に終わり、後者は広い平らな底部に短い口縁が斜めに立ち上がる。



第15図　中世土師器皿変遷図

③平安時代―瓦器椀出現以前

a．土器群の概略

中世の土器群と同じく、平安時代の土器群も時代順に並べるために、まず、出土した土器群を遺構ごとに概観したい。参考にした編年は、小森・上村(1996)で、表記もできるだけそれに合わせたが、微妙な形態の土器については異同がある。

ＳＸ349133(図版第57・124・134)　皿・椀・杯Ａが出土している。これらのうち、椀は形態上、杯と区別がつかず、杯と呼称すべきかもしれない。皿Ａ(416～424)は、平らな底部から外反して短く口縁部が立ち上がるもので、器高指数(器高÷口径×100)はほぼ10～15である。調整は、外面をヘラケズリで仕上げるもの(423)も一部で認められるが、大部分が指オサエ＋ナデ調整である。指オサエはナデによって消されているため、器壁に指を這わせてわかる程度であり、目で見てわかるものはない。口縁端部はナデてそのまま終わるもの(416～421)と、口縁端部内面を強く横方向にナデたために内方に突出するもの(422～424)が見られる。椀Ａ(425～429)は、口縁部が大きく外反して長くのび、器高指数15～20程度である。内外面ともナデ調整である。杯は、皿Ａの口縁部をそのまま長く上方に延長させた形態(431～434)で、434は口縁端部やや下を横方向にナデており、新相を示す。この段階の土器群が出土する遺構にはＳＸ394104・ＳＸ394106がある。ＳＸ394104から出土した土器群は、やや古相を示すかもしれない。Ⅰ期新段階に相当し、９世紀初頭に位置づけられる。

ＳＥ36714(図版第46・121)　土師器には椀・皿Ａがある。104の皿は、口縁端部をやや強くナデて外方に突出させており、体部はナデ、底部は指オサエが残るｅ手法で、Ⅱ期古段階の様相を示している。それに対して、105の皿や106の椀は体部外面を削ったｃ手法であり、口縁端部の処理も行っていないⅠ期新段階の様相を呈している。ＳＸ349110(図版第58・125)では、口縁端部を強くナデて上方に突出させ気味の土師器皿(480)があり、器形がやや角張っているが、Ⅱ期の土器群と同様の手法で作られている。また、椀にはｅ手法で作られたもの(484)とｃ手法で作られたものがある(485)。このように、これらの土器群は、Ⅰ期新段階からⅡ期古段階に相当し、その時期は９世紀前葉と判断される。

ＳＤ34914(図版第62・63・126)　皿Ａ(599～601)と杯Ａ(602)がある。ともに、体部上半から口縁端部にかけて横方向にナデて調整を行って、底部は指オサエがそのまま残ったｅ手法で作られている。口縁部下を横方向に強くナデたために口縁端部が外方にやや屈曲した形態を有している。口縁端部がそのまま終わるもの(599)と、上方にやや肥大して終わるもの(600・601)がある。ＳＤ349111の最下層であるⅣ層出土遺物もこの段階であろう。ＳＸ349109(図版第58・125)には、口縁部を外反さす皿(469)や470はⅡ期中段階の様相を示すもののほかに、口縁部が屈曲して立ち上がる杯の一群がある(471～473)。473は、体部上半から口縁部にかけて強くナデて二段に凹むのが明瞭に見られるのに対して、471・472は不明瞭である。これらの杯は他に出土せず、その時期はよくわからないが、476は黒色土器Ａ類で無高台の畿内系Ⅰ類であるので、９世紀のものと考えられる。これらの土器群は、Ⅱ古～中段階に相当し、９世紀中葉から末頃に位置づけたい。

ＳＫ34915(図版第64・126・127)　土師器には、皿Ａ・椀Ａ・杯Ａがあり、基本的にはｅ手法で作られている。椀Ａと杯Ａは器形的にはよく似ているが、椀Ａは口径13cm前後のもの、杯Ａは口径15cm前後のものとしている。皿Ａは、器高指数が12～15で、口縁下を強くナデて口縁部が外方に屈曲する度合いが大きく、端部を上方に丸く収めている(647～649)。口縁端部を内方に突出させ、調整にｃ手法を用いる古相のものも見られる(646)が、これ１点のみであり、混じり込みとも考えられる。椀Ａは、前段階のものに比べて口縁端部が外方にやや屈曲しており、上方にやや肥大しているもの(651～653)と、そのまま丸く終わるもの(650)がある。杯Ａも口縁端部が上方にやや丸く突出しており(654～656)、椀・皿と共通している。Ⅱ期新段階からⅢ期古段階に相当し、10世紀初頭から中葉にかけてである。

ＳＥ349112(図版第56・123・124)　皿Ａ・杯Ａがあるが、器形的にそれほど差が認められるものではない。これらは、体部下半に指オサエの痕跡が多く残るのに対して、体部の上半部を強く横方向にナデることで、口縁部が大きく屈曲して外反し、端部が上方に突出する。口縁部の外反は大きく屈曲するものが主体で、ほとんどそれと目立たないもの(391)もある。平安京でのいわゆる「コースター形」の土器群は見られない。皿の口径を見ると、10～11cmのもの(382～387)、13～14cmのもの(388～393)、15.5cm前後のもの(394～396)の三種があり、口径10cm前後の小形の皿が一定量見られることから、Ⅲ期中段階～新段階に相当すると思われる。407の椀Ｃや409の鉢は篠黒岩１号窯のもので、緑釉陶器もＡ２類や小形のＧ類が認められ、10世紀後半頃の様相を示す。また、415の石鍋は把手が瘤状を呈し、Ⅱ類に相当する。これらの資料から、その実年代を10世紀後半から11世紀初頭とすることができる。

ｂ．各土器の変遷

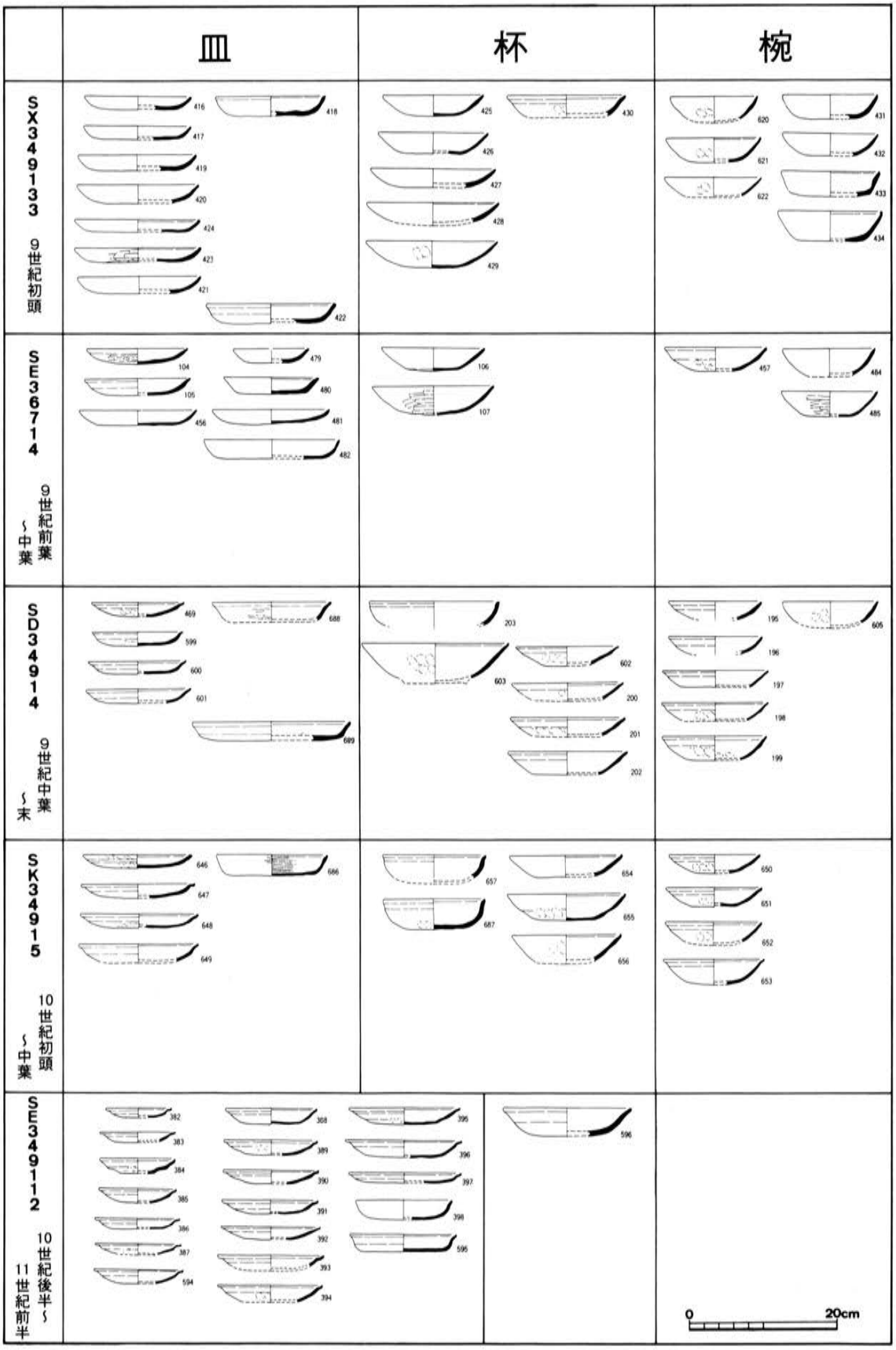
以上のように、各土器群にその実年代を当てはめた。それらと時期的に併行関係にある遺構から出土した土器を器形の変遷を中心にまとめたのが第16図である。

Ⅰ期新段階(９世紀初頭)　ＳＸ349133出土の土器群を標識とする。ＳＸ394104・ＳＤ394106出土の土器もこの段階のものである。皿には大きく二種あり、平らな底から斜め上方に立ち上がるものと、やや丸みをもって上方に立ち上がるものである。口縁端部はやや内方に突出するもの、そのまま丸く終わるものがある。ｅ手法が大多数であるが、一部ｃ手法が見られる。口径は14.5～16.5cmである。

Ⅰ期新段階からⅡ期古段階(９世紀前半)　ＳＥ36714出土の土器を標識とし、ＳＸ349110・ＳＸ349131などから出土した土器群もこの段階のものと考える。口縁端部が強くナデられて、やや外方に突出するものである。

Ⅱ期古～中段階(９世紀中葉から末)　ＳＤ34914出土の土器群で、ＳＤ349111Ⅳ層・ＳＸ349109・ＳＫ34955・ＳＤ34929などもこの段階の土器が出土する。皿は、口縁部が横方向に引き出され、端部がわずかに丸く終わる。椀と杯は、口縁部を広くナデており、端部を上方に突出させるものもある。椀と杯は、器形の差がほとんどなくなる。

Ⅱ期新段階～Ⅲ期古段階(10世紀初頭から中葉)　ＳＫ34915出土の土器を標識とし、ＳＫ34925



第16図　平安時代土師器変遷図

などから出土した土器群を含む。皿は、口縁部の屈曲が大きくなり、端部の突出も大きくなる。椀や皿も、端部が上方に突出したり、丸く終えるものが大多数である。

Ⅲ期中段階～新段階(10世紀後半から11世紀初頭)　ＳＥ349112出土の土器を標識とし、ＳＤ394102などの土器がこの段階である。器形的には前段階とそれほど変わらないが、皿に口径10～11.5cmの小形のものが出現する。この段階の遺構が少なく、椀や杯についてはよくわからない。

④古墳時代

竪穴式住居跡を中心に、須恵器や土師器が出土している。

ＳＨ367047(図版第68・129)　竪穴式住居跡から須恵器杯身、土師器甕などが出土した。須恵器杯身はＴＫ209～ＴＫ217のものである。Ｃ３aトレンチのＳＨ36717と同タイプの土器である。

ＳＨ367045(図版第69・130・133)　須恵器の型式はＭＴ15ないしＴＫ10である。ここでは、東海系の脚付き甕(776)や鞴の羽口(777)が出土している。

ＳＸ34965(図版第67-736)　土器埋納土坑に埋置されていた甕で、布留期のものと考えられる。

⑤弥生時代

弥生時代後期の土器が、Ｄ地区東半からＥ地区にかけて出土している。この時期の遺構には、ＳＸ367046やＳＨ34959(図版第67・128)があるが、一括性の高い資料は出土していない。竪穴式住居跡ＳＨ34959からは、手焙り形土器が出土している(747)。

⑥縄文時代

Ｃ２トレンチの柱穴状の土坑(ＳＫ272)から深鉢片が出土しているのが唯一である(図版第60-542)。分布密度の希薄性とその土器が小片であることから、土坑内に二次堆積した可能性が高い。

２．西国街道西側溝ＳＤ349111出土土器に見る器種・器形構成比率について

Ｃ２トレンチで検出した西国街道西側溝ＳＤ349111の土器は大きく四層に分けて取り上げたが、これらの層における各器種の破片数を数えあげた。認定した器種は、土師器、須恵器、黒色土器、無釉陶器(緑釉型須恵器)、灰釉陶器、輸入陶磁器である。それぞれの器種について、供膳、貯蔵、煮沸の形態を認定し、それぞれをさらに口縁部・底部・体部・不明に分類した。基本的には１cm^2以下の細片は個数から除外したが、特に土師器皿や椀などの口縁部と認定できるものは、それ以下のものであっても個数に含めた。また、土師器の甕や皿・椀、黒色土器の椀などは丸底を呈しているため、体部と底部を認定することが困難であるので、それらについてはすべて体部片として処理した。また、土師器体部小片のうち、明らかに供膳形態の体部片と違うものは、すべて煮沸形態の体部片としてカウントした。数量を数える上で、上記のような操作を行ったため、それぞれの実数についてはかなり不正確で、事実誤認もかなりあると考えられるが、全体に占める比率としてだけ考えれば、ある一定の傾向を示していると期待する。対照資料として、今回の調査ＳＤ349111の約60m南で調査された同じ百々遺跡内の右京第69次調査ＳＫ6901内出土の遺物の構成比率を報告書から作成して、比較・検討の材料とした(百瀬1984)。

なお、この項は、『古代の土器研究会』第54回例会で発表した内容を元にして作成した。土器

の破片数の計測は、大山崎町教育委員会古閑正浩氏及び仏教大学大学院生橋本勝行氏(現在京都府大宮町教育委員会技師)とともに岩松が行った。発表の席では会の参加者から多くの意見をうかがえた。その中でも特に、小森俊寛氏、平尾政幸氏には、土器の計測方法や器種・器形の認定についてのご助言を得た。

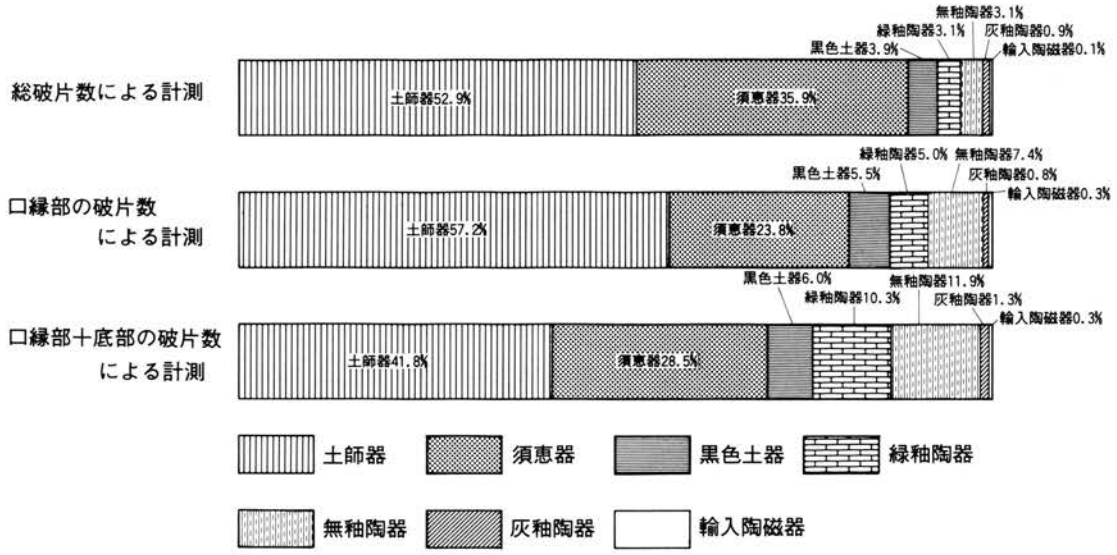
①器種構成について

各層の出土土器の器種及び器形の破片数を数えあげ、それをもとに一覧表を作成した(付表2・第17図)。

付表2　西国街道西側溝ＳＤ349111計測別器種構成比率表(％は、下二桁を四捨五入した。)

		土師器				須恵器			黒色土器			
		供膳	貯蔵	煮沸	合計	供膳	貯蔵	合計	供膳	貯蔵	煮沸	合計
総破片数	個数	1664	4	1653	3321	458	1796	2254	240	0	5	245
	個別	(50.1)%	(0.1)%	(49.8)%	(100.0)%	(20.3)%	(79.7)%	(100.0)%	(98.0)%	(0.0)%	(2.0)%	(100.0)%
	全体	(26.5)%	(0.1)%	(26.4)%	(52.9)%	(7.3)%	(28.6)%	(35.9)%	(3.8)%	(0.0)%	(0.1)%	(3.9)%
口縁部数	個数	417	1	150	568	158	78	236	50	0	5	55
	個別	(73.4)%	(0.2)%	(26.4)%	(100.0)%	(66.9)%	(33.1)%	(100.0)%	(90.9)%	(0.0)%	(9.1)%	(100.0)%
	全体	(42.0)%	(0.1)%	(15.1)%	(57.2)%	(15.9)%	(7.9)%	(23.8)%	(5.0)%	(0.0)%	(0.5)%	(5.5)%
口縁部＋底部破片数	個数	474	1	150	625	283	143	426	84	0	5	89
	個別	(75.8)%	(0.2)%	(24.0)%	(100.0)%	(66.4)%	(33.6)%	(100.0)%	(94.4)%	(0.0)%	(5.6)%	(100.0)%
	全体	(31.7)%	(0.1)%	(10.0)%	(41.8)%	(18.9)%	(9.6)%	(28.5)%	(5.6)%	(0.0)%	(0.3)%	(6.0)%

		緑釉陶器			無釉陶器	灰釉陶器			輸入陶磁器	合計
		供膳	貯蔵	合計	供膳	供膳	貯蔵	合計	供膳	
総破片数	個数	193	3	196	197	23	31	54	5	6272
	個別	(98.5)%	(1.5)%	(100.0)%	(100.0)%	(42.6)%	(57.4)%	(100.0)%	(100.0)%	(100.0)%
	全体	(3.1)%	(0.0)%	(3.1)%	(3.1)%	(0.4)%	(0.5)%	(0.9)%	(0.1)%	(100.0)%
口縁部数	個数	49	1	50	73	8	0	8	3	993
	個別	(98.0)%	(2.0)%	(100.0)%	(100.0)%	(100.0)%	(0.0)%	(100.0)%	(100.0)%	(100.0)%
	全体	(4.9)%	(0.1)%	(5.0)%	(7.4)%	(0.8)%	(0.0)%	(0.8)%	(0.3)%	(100.0)%
口縁部＋底部破片数	個数	153	1	154	178	17	2	19	4	1495
	個別	(99.4)%	(0.6)%	(100.0)%	(100.0)%	(89.5)%	(10.5)%	(100.0)%	(100.0)%	(100.0)%
	全体	(10.2)%	(0.1)%	(10.3)%	(11.9)%	(1.1)%	(0.1)%	(1.3)%	(0.3)%	(100.0)%



第17図　西国街道西側溝ＳＤ349111計測別器種構成比率

上段は、総破片数をもとに各器種及び各形態の破片数を計測し、その比率を計算したものである。ほぼ、土師器が1/2、須恵器が1/3、黒色土器、緑釉陶器、無釉陶器が3％程度ずつを占める。中段は、口縁部の破片数をもとに、各器種・器形の破片数とその比率を一覧にしたものである。総破片数による計測では、須恵器の体部片数の多さが全体に占める須恵器の比率を押し上げていた。しかし、それらの須恵器は、大形の甕の破片が多く、そういった器形では体部片に比べて口縁部が相対的に小さいため、口縁部数をもとに計測した方法では、全体の1/4～1/5程度を占めるにすぎなくなる。この傾向は、土師器の煮沸形態の比率の違いでも見られる。それに対して、土師器供膳形態や黒色土器、緑釉陶器、無釉陶器は、総破片数による計測方法に比して、1.5～2倍程度の比率を占めている。これは、体部片の数に比して口縁部片が相対的に多くあるためと推定されるが、実際、これらの器種は小形のものが多く、体部に占める口縁部の割り合いが大形の須恵器甕・壺に比べて大きい。下段は、口縁部と底部の破片数をもとに算出した。土師器は、供膳形態にしても煮沸形態にしても、丸底のものはまず破片からそれを底部と認識しえない。そのため、土師器は、下段と中段の比率を比べると、下段で増加した個数の割り合いは他の器種よりも断然低いため、その構成比率は約40％を占めるにすぎない。それに対して、須恵器や緑釉陶器、無釉陶器の個数とその比率は大幅に増加している。これらの器種・器形のものは、底部がほぼ全周にわたって遺存しているものが多く、底部が遺存しやすいことやその器種・器形を認めやすいことが要因として考えられる。底部がほぼ完存している場合が多いので、これらの器種の器形については、底部の数がその実数に最も近いと考えられる。

以上の検討から、それぞれの計測方法にはそれに応じた問題点があることが実例から明らかとなった。そのため、「どの計測方法が当時の土器構成実態をもっとも反映したものになるのか」という設問に十分答えることは不可能であり、せいぜい期待できるのは、同様の計測方法を採った時に、各遺跡ごとでどういう構成比率の違いが見て取れるか、そしてその違いが遺跡や遺構のどういった違いを反映していると考えられるか、という設問に答えていくことだけであろう。

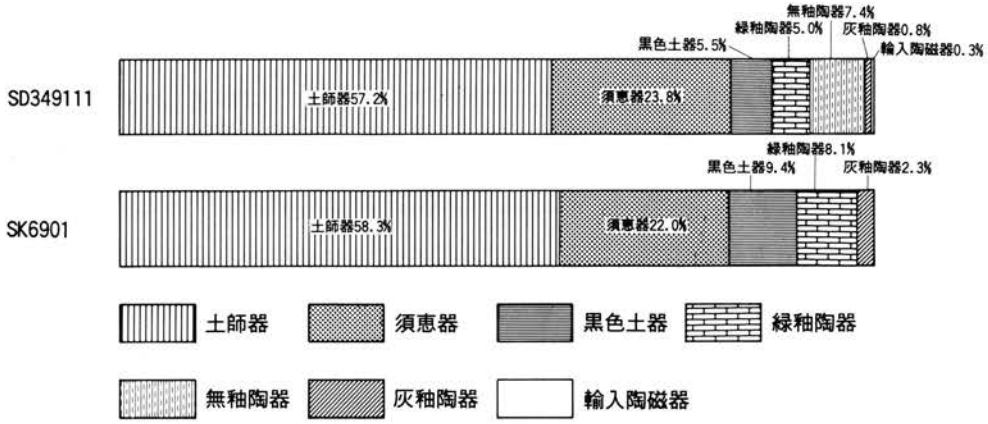
次いで、今回の計測結果をＳＫ6901の構成比率と比較・検討したい(付表３・第18図)。報告書によると、ＳＫ6901は西国街道の西側溝と推測されるＳＤ6901が埋まりきった後に、その凹地に堆積した黒褐色泥土内に多量の遺物が含まれており、その規模が２～３ｍ×５ｍ・深さ0.15ｍ程度の土坑である。この時の計測方法は個体数を数えるもので、口縁部に、体部や底部であってもその器種・器形が認識され得る破片数を加えて個体数としている(百瀬正恒氏ご教示)。この方法は、今回の計測方法とはそのまま合致しないが、基本的には口縁部数をもとにしているため、口縁部数をもとに計測した集計にもっとも近いと思われるので、これとの比較を行いたい。

ＳＫ6901とＳＤ349111の器種構成比率のうち、土師器・須恵器でほぼ同様の構成比率を示し、それぞれ60％弱と20％強である。黒色土器は、ＳＫ6901では10％弱を占めるのに対して、ＳＤ349111では約５％と半分程度である。また、灰釉陶器の占める比率では差が認められるが、その実数自体が10点余りのわずかな違いしかなく、その差に意味があるかどうかは、よくわからない。ＳＫ6901の集計では、無釉陶器(緑釉陶器素地)は緑釉陶器に分類しており、合わせて８％程度を

付表３　百々遺跡遺構別器種構成比率表(％は、下二桁を四捨五入した。)

		土師器	須恵器	黒色土器	緑釉陶器	無釉陶器	灰釉陶器	輸入陶磁器	合計
ＳＤ349111	個数	568	236	55	50	73	8	3	993
	比率	(57.2)％	(23.8)％	(5.5)％	(5.0)％	(7.4)％	(0.8)％	(0.3)％	(100.0)％
ＳＫ6901	個数	492	186	79	68	／	19	0	844
	比率	(58.3)％	(22.0)％	(9.4)％	(8.1)％	／	(2.3)％	(0.0)％	(100.0)％

*不明分を除いたので、それぞれの総数は異同がある
**ＳＫ6901は緑釉陶器と無釉陶器を合わせた数である
***ＳＤ349111は口縁部の破片数である



第18図　百々遺跡遺構別器種構成比率

占めているが、ＳＤ349111では、緑釉陶器と無釉陶器を合わせると12％強を占めており、やや差が認められる。この差は、各遺構出土の土器片の計測方法の違いが反映している可能性がある。

以上をまとめると、次のようになる。

1)土師器・須恵器の占める割り合いはほぼ同じで、５：２程度である。

2)黒色土器の占める割り合いが、ＳＤ349111では５％程度で、ＳＫ6901では10％程度を占め、全体に占める割り合いに約２倍程度の違いがある。

3)灰釉陶器や緑釉陶器・無釉陶器の占める割り合いで若干の違いが認められるが、これにどのような意味があるかは判断し難い。

②供膳・煮沸・貯蔵形態の比率について

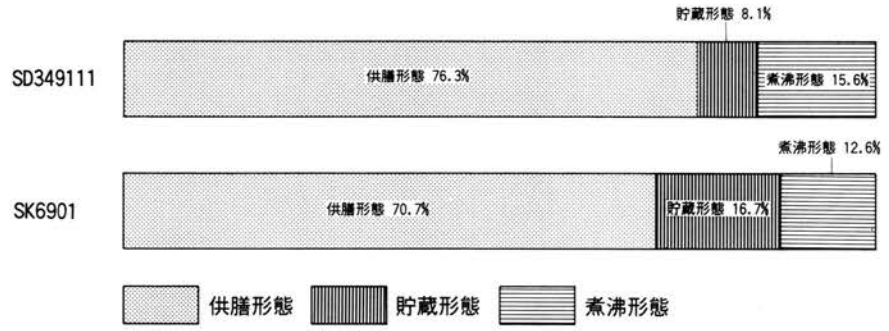
ＳＤ349111とＳＫ6901の器形別の構成比率を比較すると、供膳形態はともに70～75％程度、煮沸形態が12～15％を占めており、ほぼ同じ比率を示す(付表４・第19図)。それに対して、貯蔵形態の占有比率は8.1％と16.4％で、ほぼ２倍の開きが認められる。この比率の違いが、百々遺跡における土地利用形態のなんらかの違いを反映しているのかどうかは速断できない。供膳・煮沸形態の比率が両地点でほぼ同じで、それほど違いが認められないので、これらは一応同じ比率の中での偏差と考えて、両遺構とも貯蔵形態は10～15％程度を占めると考えたい。

次いで、それぞれの形態における器種構成比率について見たい(付表５・第20図)。供膳形態では、特に土師器と須恵器の比率で大きな違いが見られる。ＳＤ349111：ＳＫ6901で表記すると、土師器が55％：72％、須恵器が21％：10％程度を占めており、その比率に違いが認められる。ところが、土師器と須恵器を足すと、それぞれ76％、81％を占めており、両地点でほとんど違いが

付表４　百々遺跡遺構別器形構成比率表（％は、下二桁を四捨五入した。）

		供膳	貯蔵	煮沸	合計
ＳＤ349111	個数	758	80	155	993
	比率	(76.3)％	(8.1)％	(15.6)％	(100.0)％
ＳＫ6901	個数	597	141	106	844
	比率	(70.7)％	(16.7)％	(12.6)％	(100.0)％

*不明分を除いたので、それぞれの総数は異同がある
**ＳＫ6901は緑釉陶器と無釉陶器を合わせた数である
***ＳＤ349111は口縁部の破片数である

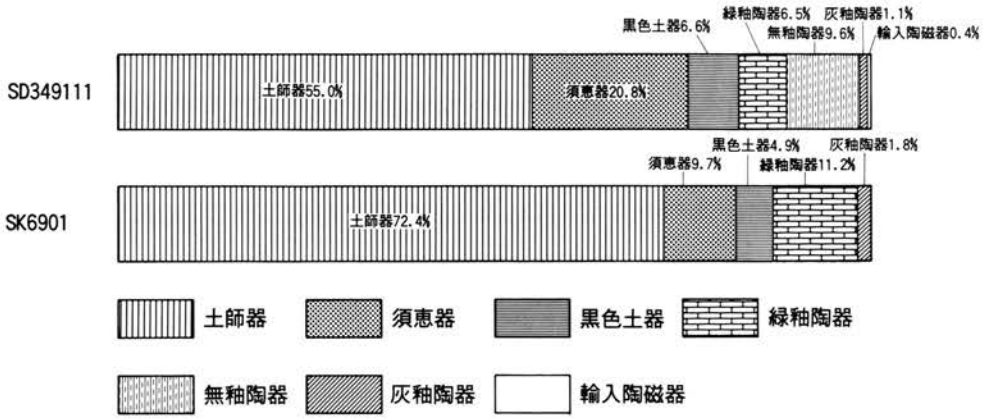


第19図　百々遺跡遺構別器形構成比率

付表５　百々遺跡遺構別供膳形態器種構成比率表（％は、下二桁を四捨五入した。）

		土師器	須恵器	黒色土器	緑釉陶器	無釉陶器	灰釉陶器	輸入陶磁器	合計
ＳＤ349111	個数	417	158	50	49	73	8	3	758
	比率	(55.0)％	(20.8)％	(6.6)％	(6.5)％	(9.6)％	(1.1)％	(0.4)％	(100.0)％
ＳＫ6901	個数	432	58	29	67	／	11	0	597
	比率	(72.4)％	(9.7)％	(4.9)％	(11.2)％	／	(1.8)％	(0.0)％	(100.0)％

*不明分を除いたので、それぞれの総数は異同がある
**ＳＫ6901は緑釉陶器と無釉陶器を合わせた数である
***ＳＤ349111は口縁部の破片数である



第20図　百々遺跡遺構別供膳形態器種構成比率

認められなくなる。このことから、供膳形態が両地点で須恵器や土師器以外の器種構成に違いがあったというよりも、ＳＤ349111では供膳形態で須恵器を用いる割り合いが高かったためといえよう。また、先の器種構成の比率で見たように、供膳形態では緑釉陶器及び無釉陶器の占める割り合いが高いのも大きな特徴であろう。貯蔵形態では、ＳＫ6901で灰釉陶器の占める率が約６％

と高く、ＳＤ349111では０％と違いが認められる。これは、ＳＤ349111では実際に体部片が出土したので、たまたま口縁部片がなかったためにここではカウントされずに０％となったのである。さらに、ＳＫ6901での実数はわずか８破片で、しかも今回の算出で口縁部片が“たまたま”含まれていないことを考慮すると、この違いにはそれほど意味がないのかもしれない。煮沸形態では、明らかに黒色土器の比率に違いが見られる。ＳＫ6901では、土師器と黒色土器の比率は半々、または土師器がやや多い程度であるが、ＳＤ349111では大多数が土師器である。黒色土器の構成比率は、ＳＫ6901がＳＤ349111のほぼ２倍の10％を占めている点、供膳形態では黒色土器の占める割り合いがほぼ同じか、ＳＫ6901の方がやや少ない点などを考慮すると、煮沸形態における黒色土器の構成比率の大きさがそのまま全体に占める割り合いの大きさに反映していると考えられる。

以上をまとめると、ＳＤ349111はＳＫ6901との器種・器形構成を比較すると、

1)供膳・貯蔵・煮沸形態のそれぞれが占める割り合いはほぼ同じで、75：15：10程度である。

2)供膳形態では須恵器の使用が土師器の使用に比べて相対的に多い。

3)ＳＫ6901の煮沸形態における黒色土器の占める割り合いが高く、この傾向がそのままＳＫ6901で黒色土器の占める割り合いが大きいという事実に結びついている。

③都城遺跡との比較

百々遺跡の器種・器形構成を他の遺跡のそれと比較し、百々遺跡の特徴を簡単に見ておきたい。ここでは、百々遺跡のＳＤ349111及びＳＫ6901、長岡京と平安京の各調査によって出土した土器の器種・器形の構成比率を検討した。調査における条件の違いやその個数を計測した人の熟練度、計測時における条件の違いなどがあり、その比率を単純には比較できないであろうが、大まかな構成比率の違いは指摘できよう。

それぞれの調査における構成比率は、古代の土器研究会編『都城の土器集成』Ⅰ・Ⅲ(1992・1994)の該当資料から作成した。また、百々遺跡ＳＤ349111及び長岡京・平安京の資料は、総破片数による計測値であるが、百々遺跡ＳＫ6701は、先述のように、個体数によるものである。

長岡京左京南一条三坊三町ＳＤ8903下層は、南一条条間大路南側溝下層出土のものであり、延暦９・10(790・791)年の年紀をもつ木簡が出土している。平安京右京三条三坊五町ＳＤ19はⅠ期新段階に属し、ＳＤ349111よりやや古い段階になる。平安京左京二条三坊九町ＳＥ273はⅣ期古段階に属し、ＳＤ349111の最終段階に併行する時期と考える。

付表６・第21図は、各遺跡の各遺構出土土器の器種構成を一覧にしたものである。この付表・挿図から見ると、都城遺跡では土師器の占める割り合いが70％を越えるが、須恵器の占める割り合いが少ないことが大きな特徴として挙げられる。都城遺跡でも、長岡京と平安京ではあり方がやや異なり、長岡京では須恵器の占める割り合いが比較的高く、土師器との比率は１：３程度である。それに対して、平安京では土師器が80～90％を占め、須恵器の割り合いはわずか５％程度である。このように土師器と須恵器の占める割り合いに大きな違いが認められるが、長岡京と平安京はともに、供膳形態が土師器の90％以上を占めている点は共通する。百々遺跡では、都城遺跡と比べて土師器の占める割り合いが相対的に低く、須恵器の占める割り合いが高いことは一目

付表6　各遺跡別器種構成比率表(総破片数)　(%は、下二桁を四捨五入した。)

		土師器				須恵器			黒色土器			
		供膳	貯蔵	煮沸	合計	供膳	貯蔵	合計	供膳	貯蔵	煮沸	合計
百々遺跡	個数	1664	4	1653	3321	458	1796	2254	240	0	5	245
ＳＤ349111	個別	(50.1)%	(0.1)%	(49.8)%	(100)%	(20.3)%	(79.7)%	(100)%	(98.0)%	(0.0)%	(2.0)%	(100)%
	全体	(26.6)%	(0.1)%	(26.4)%	(52.9)%	(7.3)%	(28.6)%	(35.9)%	(3.8)%	(0.0)%	(0.1)%	(3.9)%
百々遺跡	個数	432	1	59	492	58	128	186	29	3	47	79
ＳＫ6901	個別	(87.8)%	(0.2)%	(12.0)%	(100)%	(31.2)%	(68.8)%	(100)%	(36.7)%	(3.8)%	(59.5)%	(100)%
	全体	(51.2)%	(0.1)%	(7.0)%	(58.3)%	(6.9)%	(15.2)%	(22.0)%	(3.4)%	(0.4)%	(5.6)%	(9.4)%
長岡京	個数	344	0	21	365	68	67	135	1	0	0	1
左京南一条三坊三	個別	(94.2)%	(0.0)%	(5.8)%	(100)%	(50.4)%	(49.6)%	(100)%	(100)%	(0.0)%	(0.0)%	(100)%
町　ＳＤ8903下層	全体	(68.5)%	(0.0)%	(4.2)%	(72.7)%	(13.5)%	(13.3)%	(26.9)%	(0.2)%	(0.0)%	(0.0)%	(0.2)%
平安京	個数	33587	0	3272	36859	999	1066	2065	350	0	169	519
右京三条三坊五町	個別	(91.1)%	(0.0)%	(8.9)%	(100)%	(48.4)%	(51.6)%	(100)%	(67.4)%	(0.0)%	(32.6)%	(100)%
ＳＤ19	全体	(82.8)%	(0.0)%	(8.1)%	(90.9)%	(2.5)%	(2.6)%	(5.1)%	(0.9)%	(0.0)%	(0.4)%	(1.3)%
平安京	個数	1399	0	19	1418	10	80	90	59	0	6	65
左京二条三坊九町	個別	(98.7)%	(0.0)%	(1.3)%	(100)%	(11.1)%	(88.9)%	(100)%	(90.8)%	(0.0)%	(9.2)%	(100)%
ＳＥ273	全体	(82.1)%	(0.0)%	(1.1)%	(83.3)%	(0.6)%	(4.7)%	(5.3)%	(3.5)%	(0.0)%	(0.4)%	(3.8)%

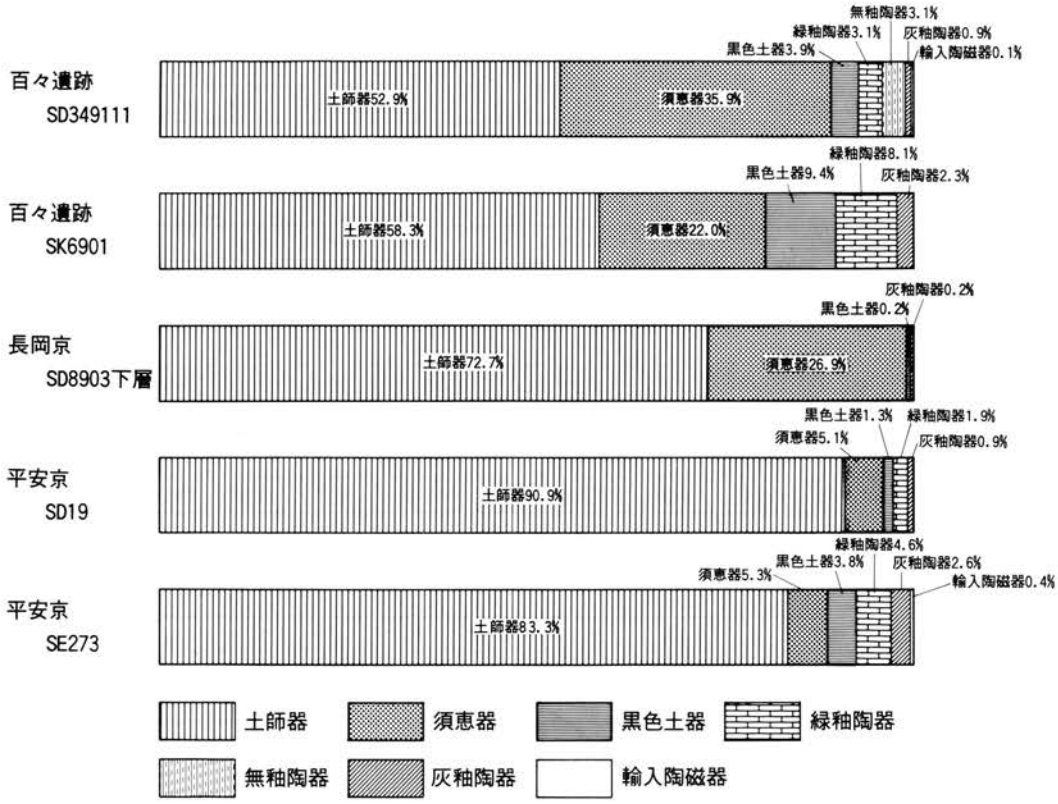
		緑釉陶器			無釉陶器	灰釉陶器			輸入陶磁器			合計
		供膳	貯蔵	合計	供膳	供膳	貯蔵	合計	供膳	貯蔵	合計	
百々遺跡	個数	193	3	196	197	23	31	54	5	0	5	6272
ＳＤ349111	個別	(98.5)%	(1.5)%	(100)%	(100)%	(42.6)%	(57.4)%	(100)%	(100)%	(0.0)%	(100)%	(100)%
	全体	(3.1)%	(0.0)%	(3.1)%	(3.1)%	(0.4)%	(0.5)%	(0.9)%	(0.1)%	(0.0)%	(0.1)%	(100)%
百々遺跡	個数	67	1	68	／	11	8	19	0	0	0	844
ＳＫ6901	個別	(98.5)%	(1.5)%	(100)%	／	(57.9)%	(42.1)%	(100)%	(0.0)%	(0.0)%	(0.0)%	(100)%
	全体	(7.9)%	(0.1)%	(8.1)%	／	(1.3)%	(0.9)%	(2.3)%	(0.0)%	(0.0)%	(0.0)%	(100)%
長岡京	個数	0	0	0	／	0	1	1	0	0	0	502
左京南一条三坊三	個別	(0.0)%	(0.0)%	(0.0)%	／	(0.0)%	(100)%	(100)%	(0.0)%	(0.0)%	(0.0)%	(100)%
町　ＳＤ8903下層	全体	(0.0)%	(0.0)%	(0.0)%	／	(0.0)%	(0.2)%	(0.2)%	(0.0)%	(0.0)%	(0.0)%	(100)%
平安京	個数	766	1	767	／	338	22	360	0	1	1	40571
右京三条三坊五町	個別	(99.9)%	(0.1)%	(100)%	／	(93.9)%	(6.1)%	(100)%	(0.0)%	(100)%	(100)%	(100)%
ＳＤ19	全体	(1.9)%	(0.0)%	(1.9)%	／	(0.8)%	(0.1)%	(0.9)%	(0.0)%	(0.0)%	(0.0)%	(100)%
平安京	個数	78	1	79	／	35	10	45	6	0	6	1703
左京二条三坊九町	個別	(98.7)%	(1.3)%	(100)%	／	(77.8)%	(22.2)%	(100)%	(100)%	(0.0)%	(100)%	(100)%
ＳＥ273	全体	(4.6)%	(0.1)%	(4.6)%	／	(2.1)%	(0.6)%	(2.6)%	(0.4)%	(0.0)%	(0.4)%	(100)%

*各遺跡の不明分を除いたので、それぞれの総数には異同がある
**ＳＫ6901は緑釉陶器と無釉陶器を合わせた数である
***ＳＫ6901は個体数である

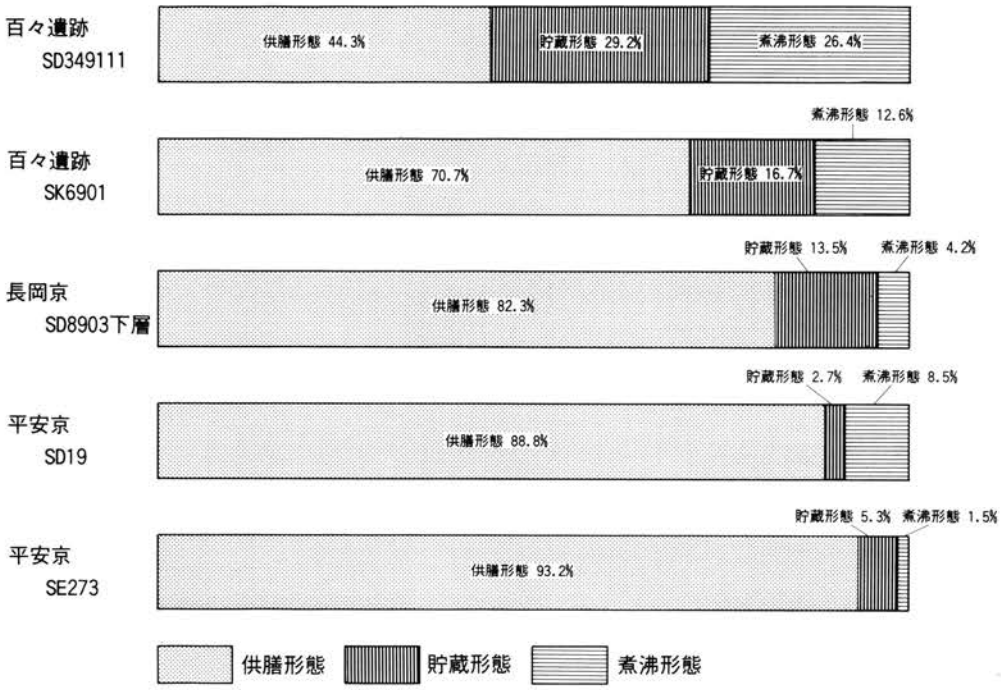
瞭然である。とはいっても、土師器と須恵器を合わせた比率は90%近くを占めて、平安京の様相とほぼ同じになるので、土師器や須恵器以外の他の器種が多くの比率を占めるということではなく、単に、土師器に対する須恵器の比率が高いだけといえよう。百々遺跡で須恵器が多いのは、貯蔵形態が全破片数の30%近くを占めており、その98%が須恵器であるというように、貯蔵形態における須恵器の占める比率が高いことが主因である。また、供膳形態でも、須恵器が占める割り合いが平安京と比べて約5ポイント程度高いことも一因である。

供膳・貯蔵・煮沸形態の別で見ると、百々遺跡では、供膳形態の占める割り合いが少ないこと、貯蔵形態や煮沸形態の土器の占める割り合いが高いことが指摘できる(付表7・第22図)。百々遺跡のＳＤ349111とＳＫ6901はその比率にかなり違いが認められるが、ＳＫ6901は総破片数による

のではなく、口縁部を主体とした個体数によるものである。①で見たように、総破片数と口縁部数では、後者の方が供膳形態の比率が1.5～２倍程度に高くなる傾向にあるので、実際にはそれほどの差はないのであろう。供膳形態における器種構成では、百々遺跡では土師器の占める割り



第21図　各遺跡別器種構成比率



第22図　各遺跡別器形構成比率

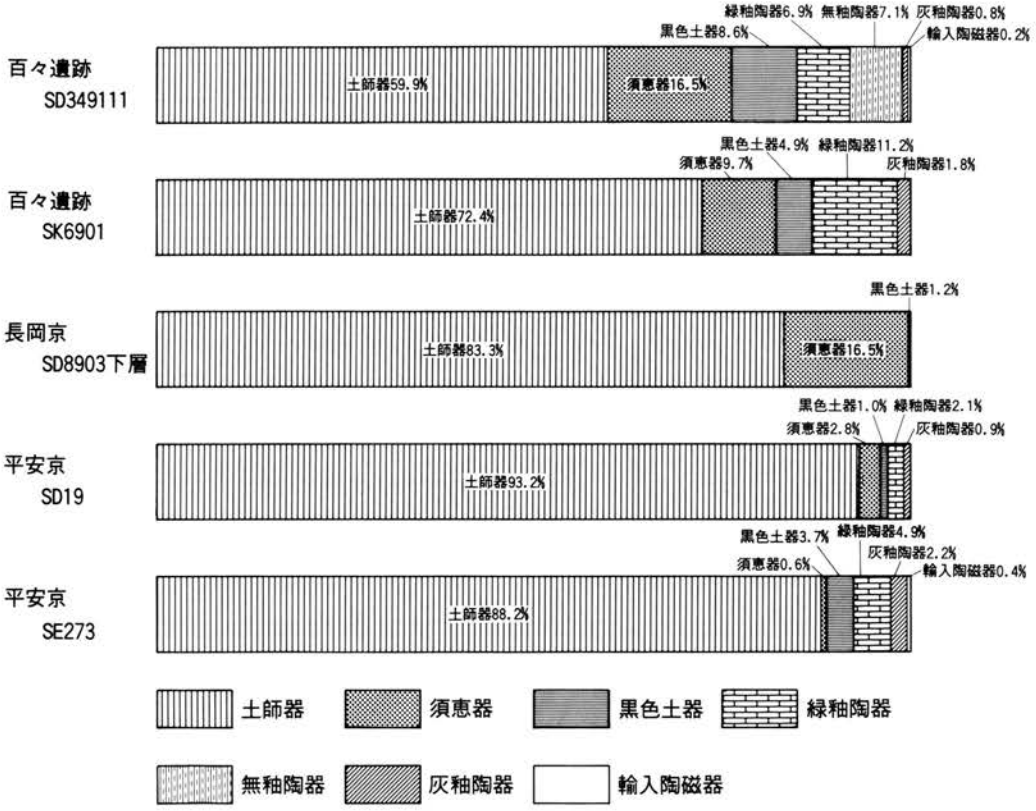
付表７　各遺跡別器形構成比較表（％は、下二桁を四捨五入した。）

		供膳							
		土師器	須恵器	黒色土器	緑釉陶器	無釉陶器	灰釉陶器	輸入陶磁器	合計
百々遺跡	個数	1664	458	240	193	197	23	5	2780
ＳＤ349111	個別	(59.9)%	(16.5)%	(8.6)%	(6.9)%	(7.1)%	(0.8)%	(0.2)%	(100)%
	全体	(26.5)%	(7.3)%	(3.8)%	(3.1)%	(3.1)%	(0.4)%	(0.1)%	(44.3)%
百々遺跡	個数	432	58	29	67	／	11	0	597
ＳＫ6901	個別	(72.4)%	(9.7)%	(4.9)%	(11.2)%	／	(1.8)%	(0.0)%	(100)%
	全体	(51.2)%	(6.9)%	(3.4)%	(7.9)%	／	(1.3)%	(0.0)%	(70.7)%
長岡京	個数	344	68	1	0	／	0	0	413
左京南一条三坊三町	個別	(83.3)%	(16.5)%	(0.2)%	(0.0)%	／	(0.0)%	(0.0)%	(100)%
ＳＤ8903下層	全体	(68.5)%	(13.5)%	(0.2)%	(0.0)%	／	(0.0)%	(0.0)%	(82.3)%
平安京	個数	33587	999	350	766	／	338	0	36040
右京三条三坊五町	個別	(93.2)%	(2.8)%	(1.0)%	(2.1)%	／	(0.9)%	(0.0)%	(100)%
ＳＤ19	全体	(82.8)%	(2.5)%	(0.9)%	(1.9)%	／	(0.8)%	(0.0)%	(88.8)%
平安京	個数	1399	10	59	78	／	35	6	1587
左京二条三坊九町	個別	(88.2)%	(0.6)%	(3.7)%	(4.9)%	／	(2.2)%	(0.4)%	(100)%
ＳＥ273	全体	(82.1)%	(0.6)%	(3.5)%	(4.6)%	／	(2.1)%	(0.4)%	(93.2)%

		貯蔵						
		土師器	須恵器	黒色土器	緑釉陶器	灰釉陶器	輸入陶磁器	合計
百々遺跡	個数	4	1796	0	3	31	0	1834
ＳＤ349111	個別	(0.2)%	(97.9)%	(0.0)%	(0.2)%	(1.7)%	(0.0)%	(100)%
	全体	(0.1)%	(28.6)%	(0.0)%	(0.0)%	(0.5)%	(0.0)%	(29.2)%
百々遺跡	個数	1	128	3	1	8	0	141
ＳＫ6901	個別	(0.7)%	(90.8)%	(2.1)%	(0.7)%	(5.7)%	(0.0)%	(100)%
	全体	(0.1)%	(15.2)%	(0.4)%	(0.1)%	(0.9)%	(0.0)%	(16.7)%
長岡京	個数	0	67	0	0	1	0	68
左京南一条三坊三町	個別	(0.0)%	(98.5)%	(0.0)%	(0.0)%	(1.5)%	(0.0)%	(100)%
ＳＤ8903下層	全体	(0.0)%	(13.3)%	(0.0)%	(0.0)%	(0.2)%	(0.0)%	(13.5)%
平安京	個数	0	1066	0	1	22	1	1090
右京三条三坊五町	個別	(0.0)%	(97.8)%	(0.0)%	(0.1)%	(2.0)%	(0.1)%	(100)%
ＳＤ19	全体	(0.0)%	(2.6)%	(0.0)%	(0.0)%	(0.1)%	(0.0)%	(2.7)%
平安京	個数	0	80	0	1	10	0	91
左京二条三坊九町	個別	(0.0)%	(87.9)%	(0.0)%	(1.1)%	(11.0)%	(0.0)%	(100)%
ＳＥ273	全体	(0.0)%	(4.7)%	(0.0)%	(0.1)%	(0.6)%	(0.0)%	(5.3)%

		煮沸			合計
		土師器	黒色土器	合計	
百々遺跡	個数	1653	5	1658	6272
ＳＤ349111	個別	(99.7)%	(0.3)%	(100.0)%	(100.0)%
	全体	(26.4)%	(0.1)%	(26.4)%	(100.0)%
百々遺跡	個数	59	47	106	844
ＳＫ6901	個別	(55.7)%	(44.3)%	(100.0)%	(100.0)%
	全体	(7.0)%	(5.6)%	(12.6)%	(100.0)%
長岡京	個数	21	0	21	502
左京南一条三坊三町	個別	(100.0)%	(0.0)%	(100.0)%	(100.0)%
ＳＤ8903下層	全体	(4.2)%	(0.0)%	(4.2)%	(100.0)%
平安京	個数	3272	169	3441	40571
右京三条三坊五町	個別	(95.1)%	(4.9)%	(100.0)%	(100.0)%
ＳＤ19	全体	(8.1)%	(0.4)%	(8.5)%	(100.0)%
平安京	個数	19	6	25	1703
左京二条三坊九町	個別	(76.0)%	(24.0)%	(100.0)%	(100.0)%
ＳＥ273	全体	(1.1)%	(0.4)%	(1.5)%	(100.0)%

*各遺跡の不明分を除いたので、それぞれの総数には異同がある
**ＳＫ6901は緑釉陶器と無釉陶器を合わせた数である
***ＳＫ6901は個体数による



第23図　各遺跡別供膳形態器種構成比率

合いが低く、須恵器や黒色土器、緑釉陶器の占める割り合いが高い(第23図)。これは、平安京と比べた場合に顕著であり、長岡京では百々遺跡とほぼ同じ割り合いを須恵器が占めている。また、長岡京では土師器と須恵器以外の器種は皆無であることも大きな特色である。

貯蔵形態は、その全体に占める比率が、百々遺跡の30%近くを占める高率の場合と、平安京の３～５%の低率の場合と、その占める割り合いに大きな差があるが、その器種構成はほぼ同じ傾向を示し、どの遺跡も須恵器が突出して多い。煮沸形態も、百々遺跡では25%程度を占めるのに対して、平安京ではせいぜい1.5～8.5%を占めるにすぎない。その構成比率を見ると、都城遺跡では時代が下るにつれて黒色土器の占める割り合いが高くなる傾向にあるが、百々遺跡では土師器の絶対数が多いためか、それほど黒色土器の占める割り合いは高くない。

以上をまとめると、百々遺跡は都城遺跡と比べて、

1)土師器が占める割り合いが低く、須恵器の占める割り合いが高いが、これは貯蔵形態の須恵器の量が多いためと考えられる。

2)供膳形態の占める割り合いが低く、貯蔵・煮沸形態の占める割り合いが高い。

3)供膳形態においては土師器の占める割り合いが少ない。

4)煮沸形態では土師器の占める割り合いが高い。

といった点が指摘できる。いずれにしても、これらの器種・器形の構成から見た特徴が、百々遺跡だけの特徴であるのか、都城遺跡の周辺に位置する遺跡の特徴であるのか、この資料からだけでは判断し難い。ここでは、これらの点を指摘し、その意義付けは将来の課題としたい。

3．器種・器形の構成

①中国製陶磁器（図版第45・54・55・66・120・131）

中国製陶磁器には、381の越州窯産の青磁椀、327と731の長沙窯産の青磁椀をはじめとして、龍泉窯産などが出土している。椀形態が多いが、四耳壺(48)や皿(47)なども出土している。

②文字資料（第24図・図版第132・付表８）

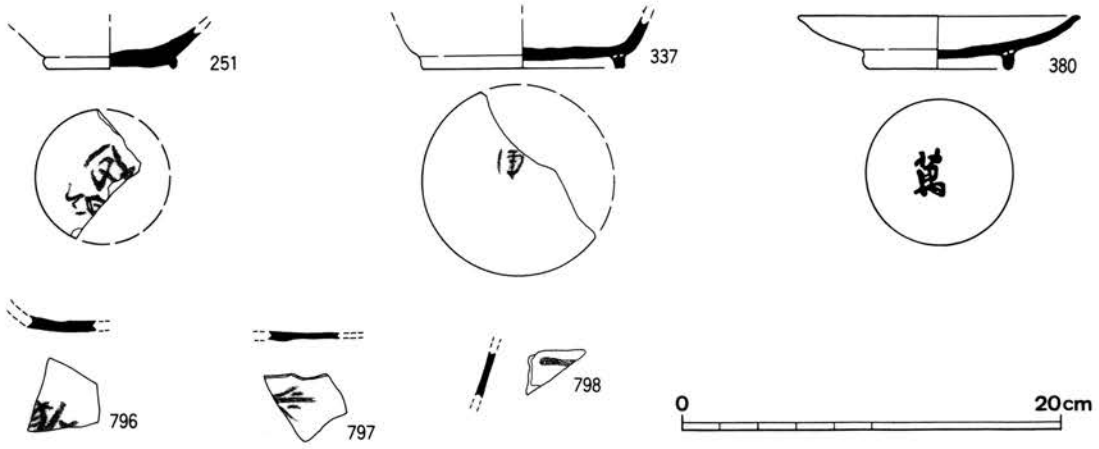
文字資料には墨書土器があり、すべてで６点出土している。木簡の出土は見なかった。確実に判読できるのは380の「萬」のみである。337が「淨」の可能性がある。その他の四点は、何らかの文字または記号らしき墨痕が観察されるが、判読できるものではない。その他、318の無釉陶器皿は、底部外面に文字らしき墨痕が見て取れるが、墨痕自体が薄いために、文字かどうかも不明である。同様の墨痕は317や285の土器でも認められる。これらの土器は、Ｃ地区でのみ出土しており、特にＣ２トレンチに集中している。

③陰刻花文（第25図・図版第132）

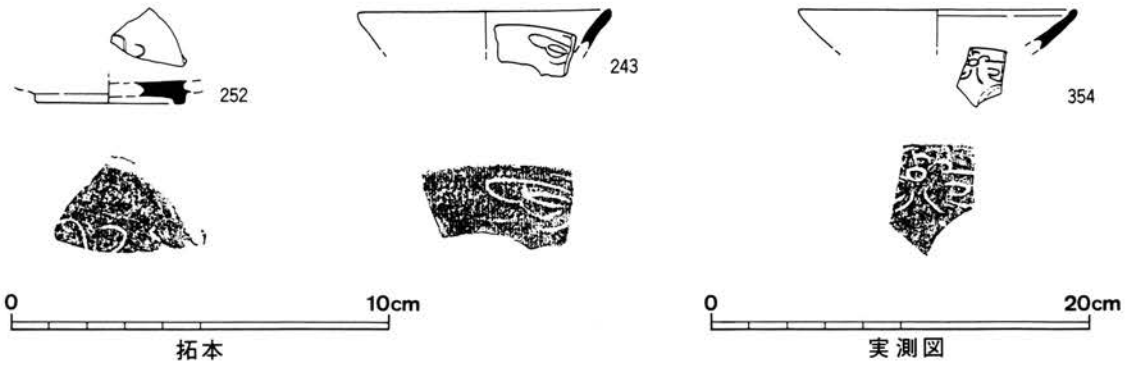
陰刻花文は三点が確認されているが、いずれも小片である。

付表８　墨書土器一覧表

実測番号	釈文	器種	器形	位置	トレンチ	出土遺構・層位	備考
251	□□	無釉陶器	椀	底部外面	Ｃ２	ＳＤ349111 Ⅳ層	ロクロナデ･ミガキ、灰色、焼成硬、胎土精良、内面に墨痕
337	□淨カ	須恵器	杯	底部外面	Ｃ２	ＳＤ349111 Ⅱ層	ロクロナデ、灰色、焼成良、胎土精良
380	萬	灰釉陶器	皿	底部外面	Ｃ２	ＳＤ349111 内	ヘラケズリ･ロクロナデ、淡灰色、焼成硬、胎土精良
796	□□	須恵器	壺カ	底部外面	Ｃ３a	ＳＥ36714	ロクロナデ、淡灰色、焼成良、胎土精良、内面に墨痕
797	□	須恵器	杯	底部外面	Ｃ２	ＳＤ349111 Ⅳ層	ロクロナデ、淡灰色、焼成良、胎土良
798	□	黒色土器	椀	体部外面	Ｃ２	ＳＥ349112	暗文・ナデ、黒色・茶褐色、焼成硬、胎土良



第24図　墨書土器実測図



第25図　陰刻花文実測図

第２節　土製品（第26図・図版第133・付表９）

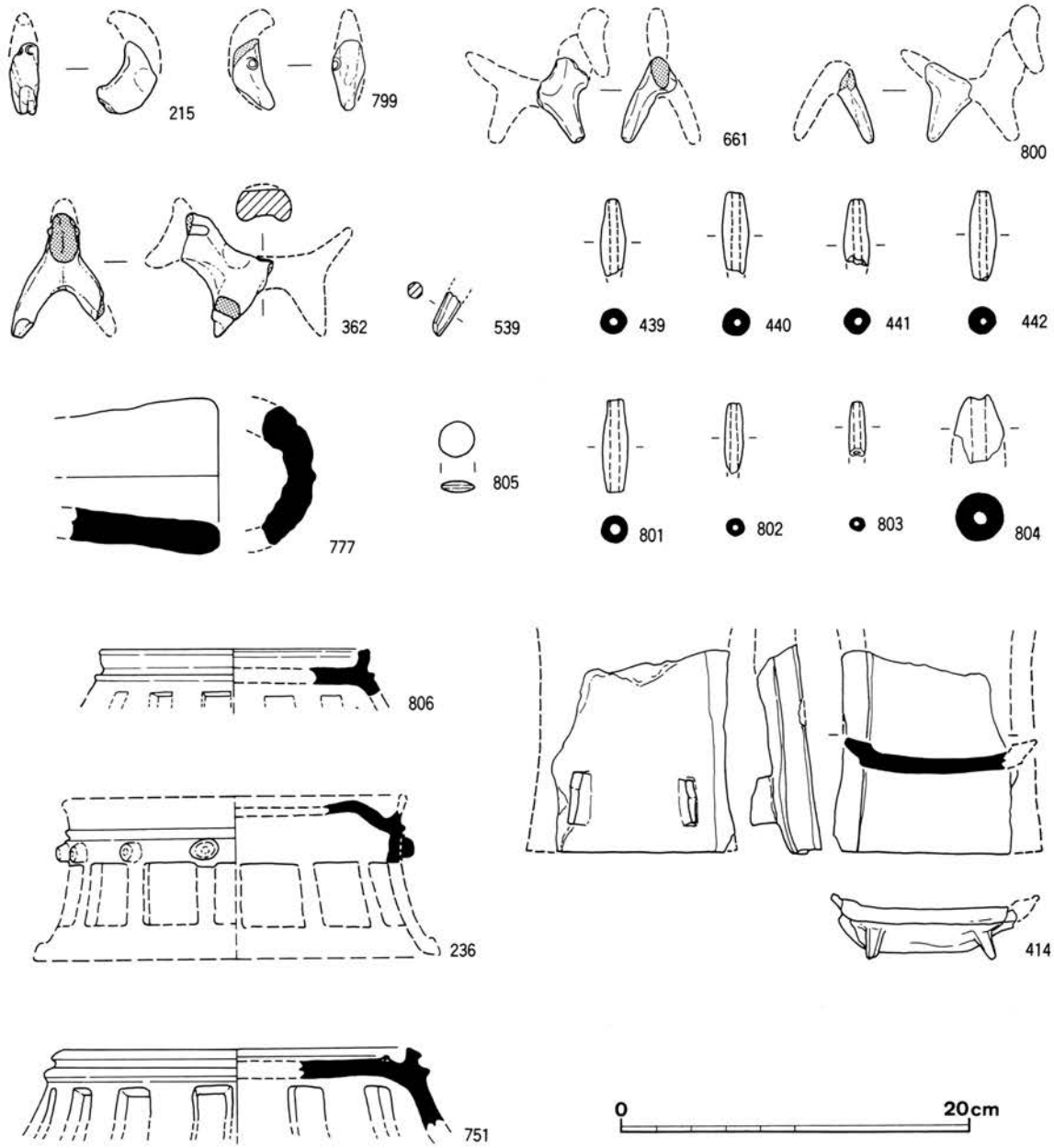
土製品の出土には土馬・土錘・鞴の羽口・硯、碁石状の土製品、製塩土器がある。土馬は総数で６点出土している。土錘は８点出土しており、このうちの５点がＣ２のＳＸ349133から出土しており、ＳＤ349111から１点が出土している。鞴の羽口は、Ｅ地区の竪穴式住居跡ＳＨ367045か

付表９　土製品一覧表

番号	器形	トレンチ	出土遺構・層位	残存率	各部長(cm)	重量(g)	色調	焼成	胎土	備考
215	土馬	Ｃ２	SD349111 Ⅳ層	頭部	—	—	淡灰橙色	良	精良	
799	土馬	D	包含層	頭部	—	—	淡灰橙色	良	精良	
661	土馬	D	SK34915	脚部	—	—	淡橙褐色	良	良	
800	土馬	D	包含層	脚部	—	—	淡灰橙色	良	精良	
362	土馬	Ｃ２	SD349111 Ⅰ層	脚部～首	—	—	淡灰橙色	良	精良	
539	土馬	Ｃ２	Ｐ267	脚部	長2.5、径0.9	—	淡黄褐色	良	精良	
439	土錘	Ｃ２	SX349133	4／5	長さ(4.8)、最大径1.4	(7.3)	淡黄灰色	良	やや粗 1mm茶砂粒多	
440	土錘	Ｃ２	SX349133	5／6	長さ(4.7)、最大径1.5	(10.1)	淡黄灰色	良	やや粗 1mm白、茶砂粒多	
441	土錘	Ｃ２	SX349133	2／3	長さ(3.8)、最大径1.5	(6.5)	淡黄灰色	良	やや粗 5mm灰色 2mm細粒多	
442	土錘	Ｃ２	SX349133	完形	長さ5.2、最大径1.5	11.5	淡灰橙色	良	やや粗 1mm白、茶砂粒多	
801	土錘	Ｃ２	SX349133	完形	長さ5.3、最大径1.55	9.5	淡黄灰色	良	やや粗 1mm白、茶砂粒多	
802	土錘	Ｃ２	SD349111 Ⅲ層		長さ(4.0)、最大径1.0	(4.5)	橙灰色	良	良	
803	土錘	D	包含層		長さ(3.2)、最大径0.95	(2.2)	淡黄灰色	良	良	

804	土錘	C 4	包含層		長さ(4.0)、最大径(2.7)	(15.8)	暗灰色	良	良	
777	鞴の羽口	E	SH367045		長さ(8.6)、外径(8.0)・内径(6.0)	—	淡橙黄褐色	良	粗 4mm細粒多・1cm礫多	
805	碁石状土製品	C 2	包含層	完形	径2.0、厚さ0.6	2.4	淡灰色	良	良	
806	円面硯	C 2	S K275	1／20	径(15.7)、高さ(3.1)	—	黒灰色	良	良	
236	円面硯	C 2	SD349111 Ⅳ層	1／20	径(19.0)、高さ(3.6)	—	青灰色	硬	精良	
414	風字硯	C 2	SE349112	1／2	長さ11.6、幅10.2、高さ3.7	—	青灰色	やや良	精良	一部墨付着・自然釉(硯の背)
751	円面硯	D	包含層	1／16	径(20.0)、高さ(5.0)	—	灰色	硬	精良	

長さ・高さ・重量の（）は現存、径の（）は復原・ただし804の径は現存



第26図　土製品実測図

付表10　出土瓦一覧表

実測番号	種別	トレンチ	出土遺構	残存	色調	焼成	胎土	備考
807	軒丸瓦	D	ＳＫ34915	2／5	灰白色	やや軟・土師質	良	平城宮式6134
808	軒丸瓦	Ｃ２	ＳＤ349111Ⅱ層	1／3	灰白色	やや軟・土師質	良・11mmの礫	表面･割れ口にスス付着
809	軒平瓦	Ｃ２	ＳＤ349111Ⅳ層	1／4	淡青灰色	硬・須恵質	良	平城宮式6691
810	軒平瓦	Ｃ２	ＳＸ349133		淡灰色	軟・須恵質	良	
811	平瓦	D	ＳＤ34914	4／5	淡青灰色	硬・須恵質	良	

ら出土している。硯は４点出土しており、風字硯、円面硯がある。硯ではないが、318の無釉陶器皿や307の緑釉陶器は硯に転用されたもので(図版第53)、図示しなかったが、灰釉陶器を転用した硯などが出土している。これらは西国街道西側溝ＳＤ349111内から出土しており、Ｃ２トレンチに集中する傾向がある。製塩土器は、Ｃ２トレンチ西国街道西側溝ＳＤ349111とＤトレンチ中央部のＳＸ34931を造成した盛り土の中から出土している。前者からは数十点、後者からは整理用コンテナ２箱程度ある。ほとんどが細片で、胎土には砂礫を多く含み、粘土紐の跡を残しているものもある。全体に口縁部片は少ない。砲弾形になると思われる(図版第134-(2))。

第３節　瓦(図版第71・131・132、付表10)

瓦片は、整理用コンテナ２～３箱分のうち、軒丸瓦・軒平瓦は図版第71に掲げた各２点ずつである。807と809は平城宮式瓦で、807が単弁蓮華文の軒丸瓦で、弁幅と内縁幅以外の各部はすべて復原で、中房径3.9cm、蓮子数１＋６、弁区径8.1cm、弁幅1.0cm、弁数は単弁12葉、内縁幅1.8cm、同文様が珠文で18個である。外区の外縁が全く残っていないことや、約２/５程度しか残っていないので、確証はないが、平城宮6134型式に属すると考えられる。809は、唐草文軒平瓦の一部で、厚さ5.8cm、内区の厚さ2.2cm、同文様が唐草文、上外区厚さ1.7cm、同文様が珠文、下外区厚さ1.9cm、同文様が珠文である。拓本から推定すると、6691型式に属すると考えられる。

第４節　木製品(図版第72・73・135・136、付表11～13)

大山崎工区の発掘調査で木製品が出土したのは、Ｃ４トレンチＳＥ394010及び、Ｃ２地区ＳＥ349112及びＥ地区の井戸内で、量的には10数点である。Ｃ３aトレンチで検出した井戸ＳＥ36714からも板材などが出土しているが、井戸を構築していた部材と思われるものばかりである。

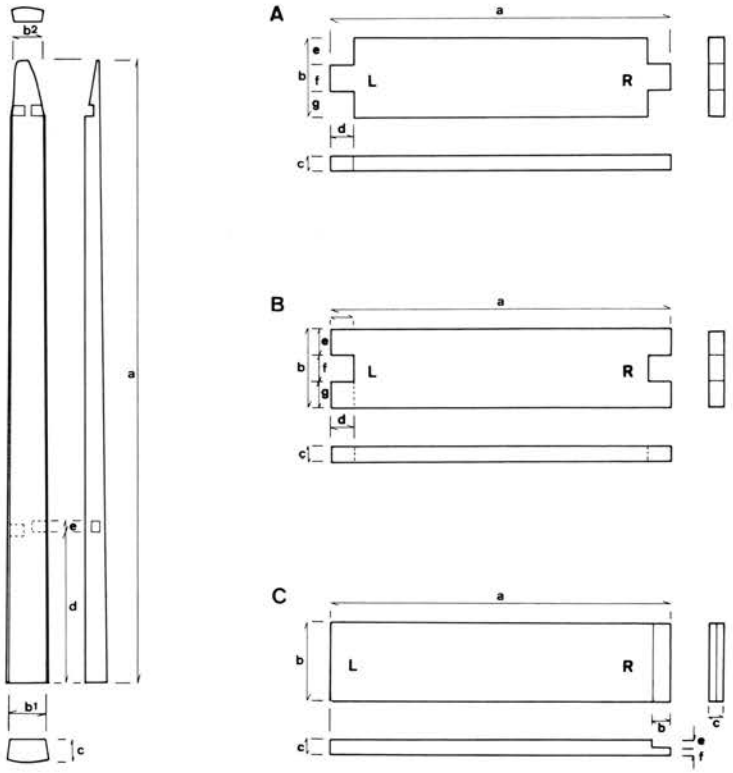
812～816は、Ｃ４トレンチの井戸ＳＥ394001から出土した。812は、鉄製刃を着装した鎌である。鎌刃は湾曲しないで、ゲタ鎌から約115°の角度で直線的にのびる。鎌刃は刃部の最大幅約3.0cm・最大厚さ３mmを測る。柄は長さ36.6cm・幅約1.6cm×約2.7cmを測り、鎌刃を着装した長さは42.3cmとなる。813は、長方形の板材の短辺の一方を切り取り、柄を造り出した羽子板状木製品である。羽子板またはタタキ板と推定される。814・815は、曲物底板で、側面に目釘穴がある。816は、短辺が上下に組み合わせる箱様のものである。長辺の一方(底部側)には密に目釘穴があり、他方には３か所に目釘が打ち込まれている。短辺にも目釘及び穴がある。同形のものを４枚組み合わせ、底板を付けると、内法15cm前後・高さ7.6cmの枡に復原できる。これで容積計

算をすると約1,700ccとなる。

817は、Ｅトレンチから出土した羽子板状木製品である。

818～822は、Ｃ２トレンチのＳＥ349112から出土した。818は、曲物底板である。819は、板状木製品で、井戸側の底に挟み込まれていた井戸側を組み上げる際に、高さをそろえるために用いられたものである。821・822は横櫛の残欠で、820は３か所に穿孔を有した木製品である。

図版第73-823～829は、Ｃ２トレンチＳＥ349112の東側の井戸側を構成していた横板である。最下段から七段分が完存しており、構築されていたままで配列してある。823のみいわゆる井籠組の井戸部材で、中央部分は井戸廃棄時に遺棄された岩石のために内側に湾曲している。824～829は、向かって右側にのみ「抉り」を入れており、ここに南側の側板の小口を当てて組み合わせる。西二など数点の横板には補修材が鉄釘によって打ちつけられた補修の痕跡が認められ、これらの板材が転用材であることがうかがわれる。830～832はＣ３aトレンチのＳＥ36714の井戸側の一部である。28枚の板材で構成されていたが、そのうちの３枚の板材の実測図を掲げた。板材の側面の上部と下部に枘穴を設け、隣り合う板材を枘でつなぎ止めるものである。最も残りのよい部材で、長さ225.5cmあり、少なくともこれ以上の高さであったことがわかる。



第27図　井戸側計測位置図（Ｒ：右、Ｌ：左）

付表11　木製品一覧表

番号	トレンチ	遺構	種別	各部長			備考
812	C4	ＳＥ394001	鉄鎌柄	長36.6cm	太2.7cm×1.6cm		
813	C4	ＳＥ394001	羽子板状木製品	長26.1cm	幅7.0cm	厚さ7mm	
814	C4	ＳＥ394001	曲物底板	径13.4cm	厚さ9mm		
815	C4	ＳＥ394001	曲物底板	径17.9cm	厚さ7mm		一部焼亡
816	C4	ＳＥ394001	柄杓側板状木製品	長17.1cm	幅7.8cm	厚さ８mm	釘・目釘穴多数
817	E	ＳＥ367041	井戸部材か？	現存長18.5cm	幅7.9cm	厚さ2.2cm	
818	C2	ＳＥ349112	曲物底板	径13.9cm	厚さ９mm		
819	C2	ＳＥ349112	板状木製品	長22.9cm	幅2.6cm	厚さ８mm	端部焼けこげと折損
820	C2	ＳＥ349112	有孔板状木製品	長12.4cm	幅2.3cm	厚さ3.5mm	三か所に径２～３mmの有孔
821	C2	ＳＥ349112	横櫛	幅5.0cm	現存長1.6cm	厚さ1.0cm	歯は47本
822	C2	ＳＥ349112	横櫛	現存幅2.7cm	現存長2.9cm	厚さ0.85cm	

付表12　ＳＥ349112井戸側観察表(単位はcm)

実測番号	部位	タイプ	a；(全長)	b；(幅)	c；厚	計測部位	d；(抉り)	e；	f；	g；	備考
－	東1										残欠のみ
823	2	B	139.5	28.0	2.5	R	9.3	6.0	16.8	4.0	磨滅激しく２枚に割れている
						L				5.5	
824	3	C	127.5	16.0	6.0		5.5	3.0	3.0		
825	4	C	129.0	19.0	5.0		5.0	2.0	3.0		
826	5	C	130.0	27.0	6.0		6.0	2.5	3.5		
827	6	C	130.0	31.0	5.5～6.5		6.0	3.0	3.5		左側２cmの所に枘あり
828	7	C	130.0	26.0	5.5		7.0	2.5	3.0		
829	8	C	129.0	30.0	6.0		6.3	3.0	3.0		
－	南1	A	85.0	21.5	3.0						痩せて原形不明
－	2	A	131.2	28.3	4.2	R	8.0	7.9	11.4	8.7	
						L	8.0	8.7	12.2	7.2	
－	3	C	127.5	17.5	5.0		7.0	2.5	2.5		
－	4	C	127.3	16.4	4.5		5.9	1.7	1.6		
－	5	C	127.9	26.3	5.5		6.7	2.5	1.7		
－	6	C	127.0	30.5	6.0		5.5	2.0	3.0		5.5×4.5×15.5の接ぎ木あり
－	7	C	129.0	25.5	5.5		6.9	2.5	3.0		
－	8	C	129.5	29.4	5.7		7.2	3.2	2.7		
－	西1	B	112.5	9.5	1.5						痩せて原形不明
－	2	B	126.5	29.0	3.7	R	8.7	5.6	15.5	8.9	6.7×4.9×20.8の接ぎ木あり
						L	4.8		12.8以上	6.7	
－	3	C	129.0	18.0	4.9		7.0	2.5	2.5		
－	4	C	125.7	18.0	4.5		6.4	2.0	1.8		
－	5	C	126.4	27.0	6.1		5.7	1.5	2.8		
－	6	C	128.3	29.9	6.2		7.0	2.3	3.5		
－	7	C	128.5	26.1	6.0		7.4	2.4	3.0		
－	8	C	129.0	29.0	6.4		6.5	3.0	3.2		
－	北1	A	25.0	9.0							痩せて原形不明
－	2	A	129.0	28.8	4.8	R	5.7	7.0	12.6	8.4	
						L	7.3	9.3	12.0	6.9	
－	3	C	130.0	18.0	4.2		7.0	2.5	3.0		
－	4	C	128.4	17.7	4.0		7.6	1.7	3.0		
－	5	C	128.0	26.0	5.2		6.6	2.5	3.3		
－	6	C	128.6	30.0	5.3		6.4	1.9	3.3		
－	7	C	129.1	25.9	7.0		6.6	2.5	3.3		くさび止め
－	8	C	129.5	29.6	6.0		6.5	3.0	3.0		つぎたしあり

部位は、東・西・南・北面の上位からの順番である。

付表13　ＳＥ36714井戸側観察表(単位はcm)

実測番号	整理番号	a；全長	b1；下端部幅	b2；上端部幅	c；下端部厚	d；枘位置	e；枘の長さ	備考
－	1	207.0	14.0	11.0	7.0	52.0	5.5	
－	2	191.0	13.0	13.0	8.0	51.0	5.5	
－	3-1	59.0	11.0	8.0	6.0			折損
	-2	13.2	9.0	7.5	5.5			折損
	-3	59.0	11.0	8.0	6.5			折損
－	4	222.0	14.5	13.0	8.0	50.0	5.5	
－	5	190.0	12.0	10.0	8.0	50.0	5.5	
－	6	217.0	12.0	11.0	7.0	50.0	5.5	
830	7	224.5	14.0	12.0	7.5	56.5	5.0	

831	8	213.0	14.0	13.0	7.0	56.5	5.5	
832	9	200.5	13.0	12.0	7.0	56.5	5.0	
−	10	192.0	12.5	12.0	7.0	56.0	5.5	
−	11	218.0	14.0	12.0	7.0	55.0	5.5	
−	12	221.0	16.0	16.0	6.0	56.0	5.5	
−	13	196.5	10.0	8.5	7.0	56.0	5.5	
−	14	219.0	14.0	13.0	9.0	56.5	5.5	
−	15	196.0	13.5	12.5	8.0	56.5	5.5	下から5.5cmの所に縦横4.5cmの枘あり
−	16-1	198.0	14.0	13.0	7.5	56.0	6.0	折損
	-2		8.0		0.5			折損
−	17	200.0	14.5	12.5	6.0	56.0	5.5	
−	18	225.0	13.0	11.5	7.0	56.5	5.5	
−	19	222.0	14.0	13.0	7.0	56.0	5.5	
−	20	224.0	13.5	13.0	6.0	56.0	5.5	
−	21	228.0	12.0	11.0	7.0	55.0	5.5	
−	22-1	191.0	14.0	13.0	8.0	54.0	5.5	折損
	-2	26.0	11.0		2.0			折損
−	23	225.5	11.5	11.0	7.0	50.5	5.5	
−	24	221.5	14.0	12.0	8.0	51.5	5.5	
−	25	221.0	14.0	13.0	6.0	52.0	5.5	
−	26	221.0	10.5	8.0	7.0	52.0	5.5	
−	27	219.0	14.0	13.0	6.0	52.5	5.5	
−	28	186.0	13.0	12.0	6.0	52.0	5.5	下から６cmの所表裏に枘あり、縦5.5cm・横５cmの石をはめている

注：ホゾの位置はすべて向かって右側のもの

付表14　石製品観察表(単位はcm)

実測番号	種別	トレンチ	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ(Kg)	石質	備考
833	砥石	Ｃ２	ＳＥ349112	28.5	8.9	7.2	1.6	粘板岩	四面を研ぎ面として使用
834	砥石	Ｃ３a	ＳＥ36713	15.0	11.1	9.6	1.45	凝灰岩	三面を研ぎ面として使用
835	砥石	Ｃ３a	ＳＥ36712	40.8	11.5	11.3	8.6	砂岩	四面を研ぎ面として使用

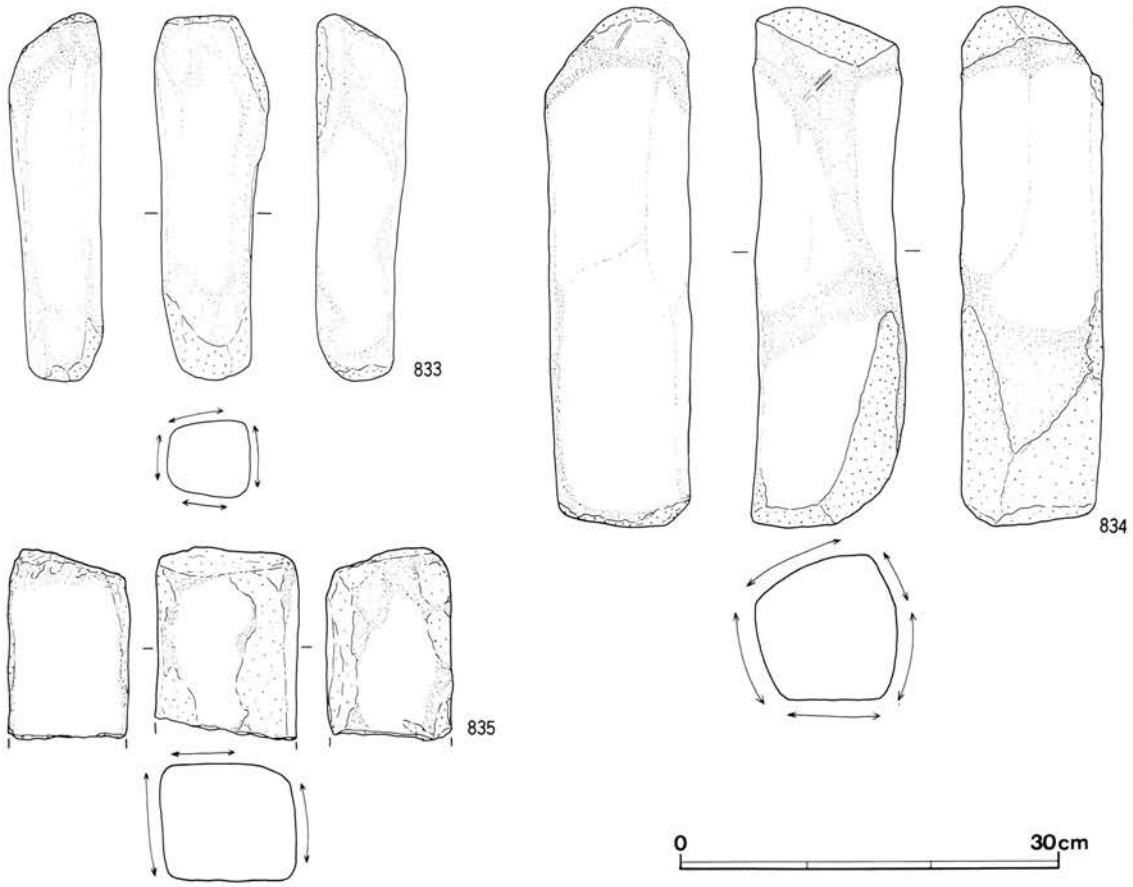
第５節　石製品(第28図、図版第48・56・137、付表14)

石製品には石鍋と砥石がある。石鍋は計３点、２個体分が出土している。415は、Ｃ２トレンチのＳＥ349112から出土している。瘤状の把手がつくもので、木戸の分類によるとⅡ類になる。10世紀末から11世紀前半頃のものである。165・166はＣ１トレンチＳＲ34901から出土しており、同一個体のものである。これは鍔が削り出されたもので、Ⅲ-ａ類に分類され、12世紀初頭頃のものである。

砥石は総数３石を数え、すべて井戸内から出土している。833はＣ２トレンチの平安時代井戸ＳＥ349112の井戸枠内埋土から出土しており、834・835は、Ｃ３aトレンチの中世井戸ＳＥ36713・ＳＥ36712からそれぞれ出土している。

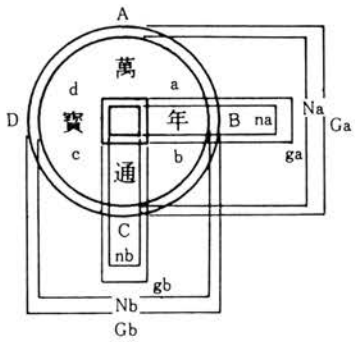
第６節　金属製品(第30図、図版第74・75・138、付表15)

大山崎工区で出土した金属製品には、銭貨・蛇尾裏金具、鉄鎌がある。銭貨・蛇尾裏金具は平安時代のもので、鉄鎌は共伴した遺物の年代観から中世のものである。



第28図　石製品実測図

銭貨は、Ｃ２トレンチとＤ１トレンチから総数22枚が出土した。銭名のわかるものは20枚で、すべて皇朝十二銭である。中国銭をはじめとする、中世以後の銭貨の出土は全く見なかった。「和同開珎」(708年初鋳)が１枚、「萬年通寶」(760年初鋳)が１枚、「神功開寶」(765年初鋳)が３枚、「隆平永寶」(796年初鋳)が１枚、「富壽神寶」(818年初鋳)が３枚、「承和昌寶」(835年初鋳)が11枚である。銭名のわからない２枚は、どちらも承和昌寶と共伴していること、銭径が18～19mmであるが、部分的に外縁が剝落しているので20mm程度に復原できることから、これらも承和昌寶の可能性が高い。Ｃ２トレンチでは、平安時代前期の西国街道西側溝(ＳＤ349111)を中心に、井戸(ＳＥ349112)や土坑(ＳＸ349110)から出土し、すべて遺構内から出土している。Ｄ１トレンチでは、９枚の銭貨が１か所で出土している(ＳＸ34933)。



第29図　銭貨計測位置

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅵ 別表８　銭貨計測値分布図(189頁)から(単位mm)

$G=\frac{Ga+Gb}{2}$　　$g=\frac{ga+gb}{2}$

$N=\frac{Na+Nb}{2}$　　$n=\frac{na+nb}{2}$

$T=\frac{A+B+C+D}{4}$　　$t=\frac{a+b+c+d}{4}$

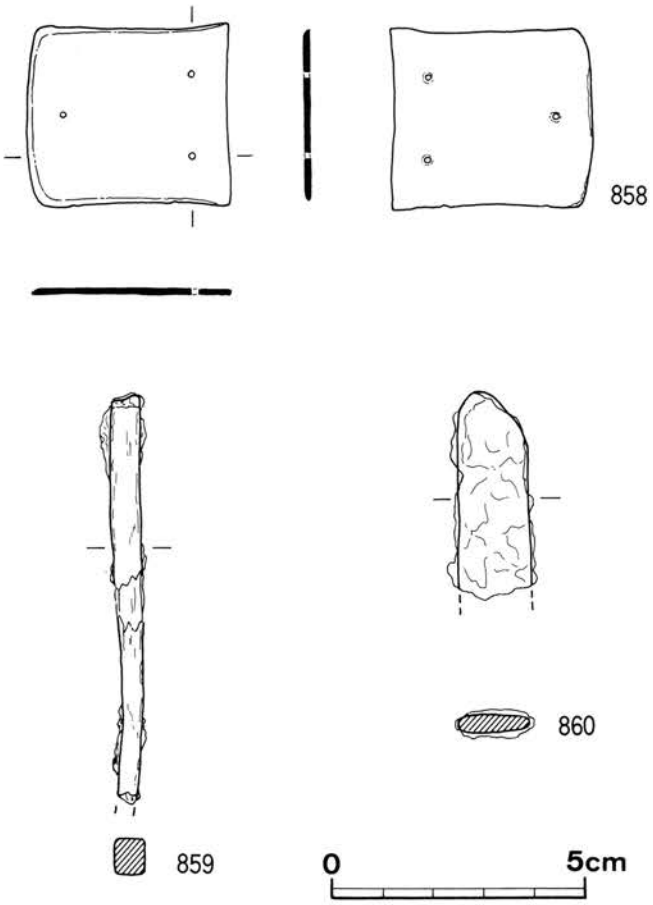
皇朝十二銭の内、早い時期の６種の銭貨が出土しているのに対して、「長年大寶」(848年初鋳)以下、「延喜通寶」(907年初鋳)や「乾元大寶」(957年初鋳)などは全く出土していな

い。ＳＤ349111(西国街道西側溝)や井戸ＳＥ349112、土坑ＳＸ349110は、出土遺物の年代観によると、10世紀中頃まで存続していたことは明らかであるので、これらの銭貨が直接的には遺構の埋没年代を示しているものではなかろう。

第30図858は帯金具のうち、蛇尾の裏金具で、Ｃ２トレンチ西国街道西側溝ＳＤ349111第Ⅳ層から出土している。ほぼ正方形の平面形をしており、前方の辺はやや丸く凸形を呈しており、側

付表15　銭貨観察表

番号	銭名	初鋳(年)	トレンチ	出土遺構(層)	重量(W)	外径(G)	内径(N)	穴外径(g)	穴内径(n)	縁幅(T)	穴縁幅(t)	状態	備考
836	和同開珎	708	Ｃ２	ＳＤ349111(Ⅳ層)	(1.65)	(25.0)	21.0	8.0	6.0	1.77	0.73	3／4	
837	萬年通寶	760	Ｃ２	ＳＸ349110	2.09	26.25	22.25	8.5	6.25	1.05	0.67	完形	5片に割れている
838	神功開寶	765	Ｃ２	ＳＤ349111(Ⅳ層)	2.77	24.0	20.75	8.0	6.0	1.7	0.9	完形	
839	神功開寶	765	Ｃ２	ＳＤ349111(Ⅳ層)	3.75	25.0	20.5	7.5	6.0	2.05	0.65	完形	
840	神功開寶	765	Ｃ２	ＳＥ349112	(1.33)	(25.0)	(21.5)	(7.5)	(6.0)	(1.75)	(0.7)	1／2	
841	隆平永寶	796	Ｃ２	ＳＥ349112	2.69	25.5	21.75	7.5	6.5	1.65	0.7	完形	
842	富壽神寶	818	Ｃ２	ＳＤ349111(Ⅳ層)	5.13	23.5	19.25	7.75	5.75	2.05	0.83	完形	
843	富壽神寶	818	Ｃ２	ＳＤ349111(Ⅳ層)	3.04	23.0	19.0	8.0	6.25	1.88	0.73	完形	
844	富壽神寶	818	Ｃ２	ＳＤ349111(Ⅳ層)	2.97	23.0	19.0	8.0	6.5	2.0	1.83	完形	
845	承和昌寶	835	Ｃ２	ＳＫ276	2.11	20.75	17.25	7.5	6.25	1.73	0.78	完形	
846	承和昌寶	835	Ｃ２	ＳＤ349111(Ⅳ層)	1.88	20.75	18.0	7.75	5.75	1.58	0.73	完形	
847	承和昌寶	835	Ｄ１	ＳＸ34933	1.75	20.5	17.5	7.75	6.25	1.63	0.7	完形	
848	承和昌寶	835	Ｄ１	ＳＸ34933	1.37	20.5	17.5	7.75	6.0	1.5	0.68	完形	
849	承和昌寶	835	Ｄ１	ＳＸ34933	1.60	20.5	17.5	7.75	6.0	1.6	0.71	完形	
850	承和昌寶	835	Ｄ１	ＳＸ34933	1.71	20.5	17.5	7.75	6.0	1.53	0.78	完形	
851	承和昌寶	835	Ｄ１	ＳＸ34933	1.99	20.5	17.5	7.75	6.0	1.55	0.78	完形	
852	承和昌寶	835	Ｄ１	ＳＸ34933	(1.33)	20.5	17.5	7.75	6.0	1.5	0.78		
853	承和昌寶	835	Ｄ１	ＳＸ34933	1.43	20.5	17.5	7.75	6.0	1.58	0.7	完形	
854	承和昌寶	835	Ｃ２	ＳＤ349111(Ⅲ層)	(0.75)	(20.5)	(18.5)	7.5	6.0	1.4	0.63	1／2	
855	承和昌寶	835	Ｄ１	ＳＸ34933	(0.43)	(20.0)	(17.0)	—	—	(1.6)	(0.6)		
856	承和昌寶か？	—	Ｄ１	ＳＸ34933	2.20	(19.5)	(16.75)	—	(6.0)	(1.6)	—	完形	
857	承和昌寶か？	—	Ｃ２	ＳＫ276	2.20	(16.0)	—	(6.0)	(1.3)	—		完形	



第30図　鉄製品実測図

辺はやや湾曲して凹形をなしている。内外面ともにすべて錆のため、いわゆる銅色をなしているが、外面の一部に鍍金の残欠が観察される。断面はほぼ平坦で、後方の辺を除く三辺は、外面の稜線を削って、斜縁になっている。この裏金具は、長さ3.85cm・最大幅3.65cm・最小幅3.35cm・厚さ1mm、重さ9.45gである。859は鉄釘で、D1トレンチの廃棄土坑と推定するSK34915から出土した。現存長8.0cmで、断面方形を呈している。860は刀子残欠で、C3aトレンチの竪穴式住居跡SH36717の床面から出土した。

そのほか、C4トレンチでは井戸SE394010から中世の鉄鎌が出土しているが、これについては、木製の柄も残存していたので、木製品の項で述べた。

（岩松　保）

第5章　総　　括

第1節　各地区の時期別遺構

出土遺物の項で分類した土器群の時期区分に従って主要遺構を時期分類すると、次のようになる。()は出土遺物では不確かなもので、周囲の遺構との関係からの推定である。

1．縄文時代

①晩期：ＳＫ272(Ｃ２トレンチ)

2．弥生時代

①後期～庄内期：ＳＸ367046・ＳＨ34959・ＳＨ36761～63

3．古墳時代

①布留期：ＳＸ34965・ＳＸ349128・ＳＲ367042

②ＭＴ15～ＴＫ10：ＳＨ367045・ＳＲ34952・(ＳＲ34951)・(ＳＲ367042)

③ＴＫ209～ＴＫ217：ＳＨ367047・ＳＨ36717・ＳＨ367060・ＳＫ394006・ＳＨ34960・(ＳＲ367042)

4．平安時代

①９世紀初頭：ＳＸ349133・ＳＤ394104・ＳＤ394106・(ＳＲ367042)

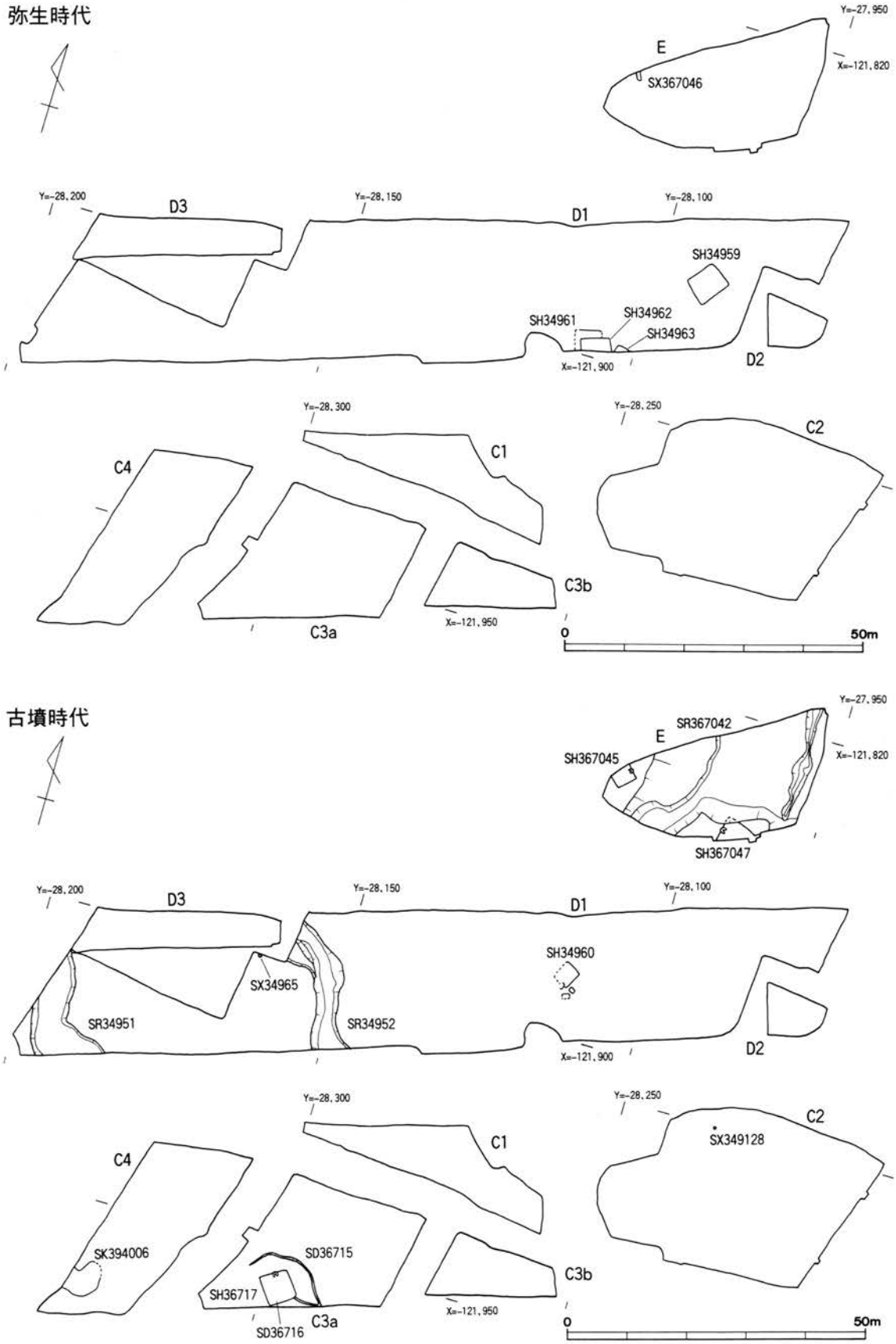
②９世紀前半：ＳＥ36714・ＳＸ349131・ＳＸ349110・ＳＫ36711・ＳＤ34929・(ＳＢ36706)・(ＳＲ367042)

③９世紀中葉から末：ＳＤ34914・ＳＸ349109・ＳＤ349111Ⅲ・Ⅳ層・ＳＥ34958・ＳＫ34955・ＳＤ34929・ＳＢ349122・ＳＢ349123・ＳＢ34923・(ＳＢ34957)・(ＳＲ367042)

④10世紀初頭から中葉：ＳＫ34915・ＳＤ349111Ⅲ層・ＳＢ349121・ＳＢ349126・(ＳＦ394103)・(ＳＫ34916)・ＳＫ34925・ＳＢ34926・(ＳＦ394103整地土)・(ＳＲ367042)

⑤10世紀後半から11世紀初頭：ＳＥ349112・ＳＤ349111Ⅱ・Ⅲ層・ＳＤ394102・ＳＤ349103・(ＳＲ367042)

不詳　ＳＡ349120・ＳＢ349119・ＳＢ349118・ＳＢ349124・ＳＢ349123・ＳＢ34918・ＳＢ34927・ＳＢ3492・ＳＢ394111・ＳＢ394108



第31図　百々遺跡遺構変遷図(1)

5．中世

①11世紀後葉頃？：ＳＥ394003・（ＳＲ367042）

②12世紀前半：ＳＲ34901・ＳＢ349115・（ＳＲ367042）

③12世紀中葉：ＳＸ34924・ＳＥ34920・ＳＢ349009・ＳＫ36719・ＳＢ349125・（ＳＲ367042）

④12世紀後半から13世紀初頭：ＳＥ36710・ＳＢ349116・（ＳＲ367042）

⑤13世紀前半：ＳＥ36713・ＳＤ34902・ＳＫ34904・ＳＢ36704・ＳＢ36702・ＳＫ349129・（ＳＲ367042）

⑥13世紀中葉から後葉：ＳＫ394004・ＳＢ394010・ＳＫ36711・ＳＢ36705・（ＳＲ367042）

⑦14世紀前葉から中葉：ＳＥ36712・（ＳＲ367042）

⑧14世紀後半：ＳＥ394001・（ＳＲ367042）

不詳　ＳＡ34928（705の瓦器皿）

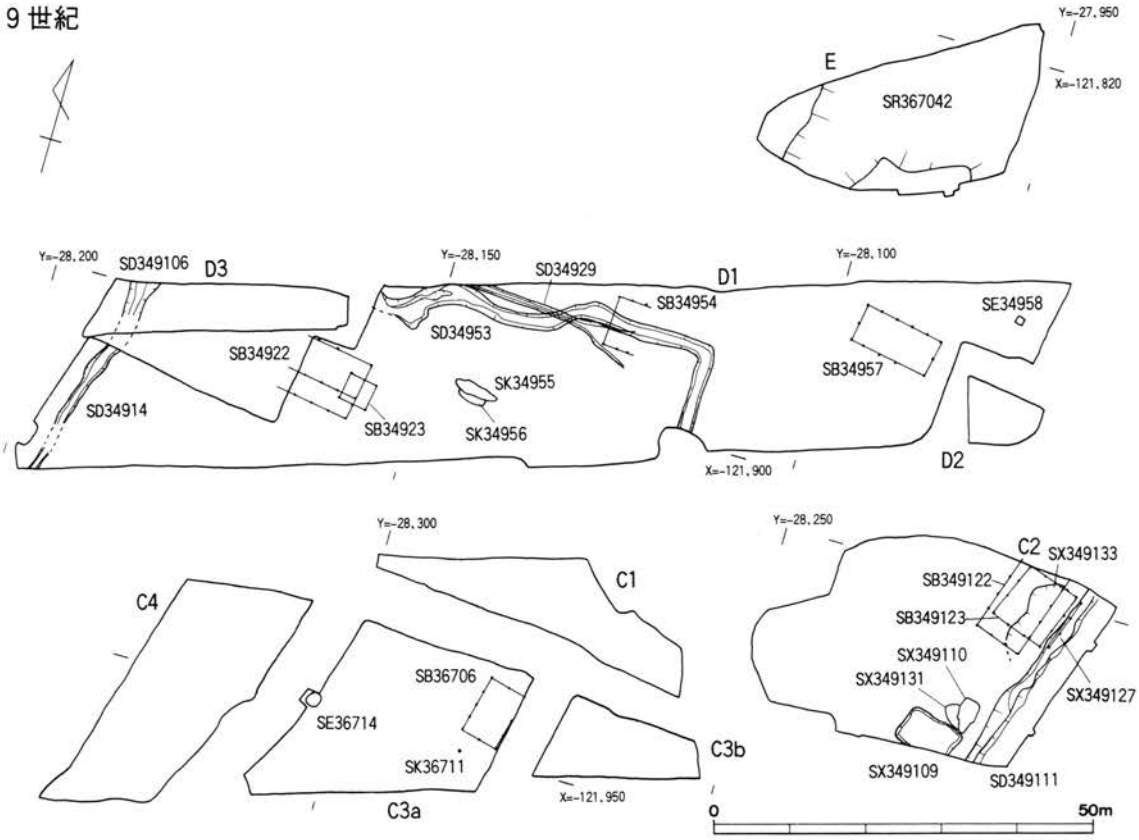
6．近世

①18世紀後半から19世紀：ＳＸ12・ＳＥ367041

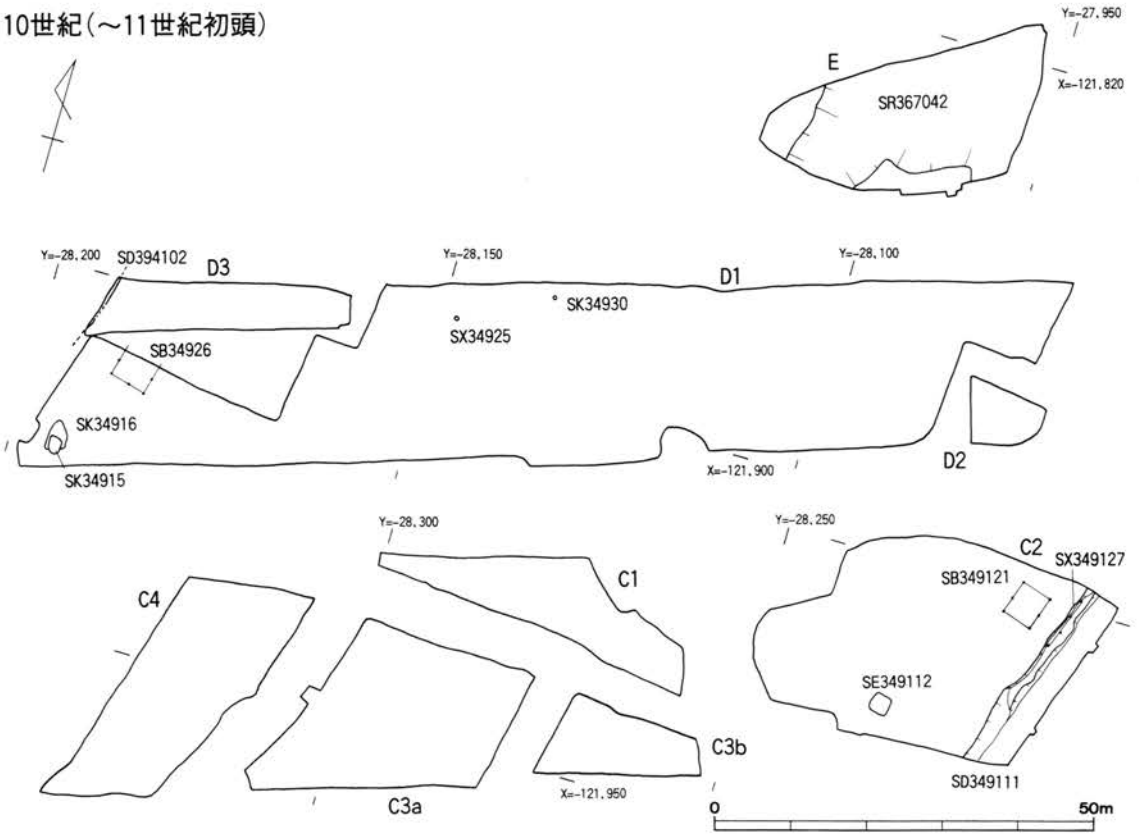
この時期分類では100年を２～３時期に分けて示したが、そのまま図示しても一時期に属する遺構が少なく、その変遷がかえって追いにくいと思われる。また、出土遺物からの時期認定では、存続期間の一時期しか押さえていないということも考えられる。そこで、以下、年代幅をやや広く取って、100年程度を単位として、その変遷を見ていきたい。これらの遺構の時期別分布をこの規準で図示したのが、第31～34図である。

弥生時代・古墳時代の遺構は、Ｄ地区の東半とＥ地区に集中している。これは、百々遺跡の南及び東側に分布している算用田遺跡や下植野南遺跡が関係していると考えられる。これらの遺跡では、過去の調査で多くの古墳時代及び弥生時代の竪穴式住居跡を検出している。また、名神関係遺跡の調査でも、下植野南遺跡で多数の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡が検出され、大山崎町内でも最大級の弥生・古墳時代集落であることが明らかになってきた。Ｄ地区・Ｅ地区はこういった弥生・古墳時代集落の縁辺部に位置しているためであろう。それに対して、Ｃ３ａ・Ｃ４トレンチで検出した竪穴式住居跡ＳＨ36717や土坑ＳＫ394006は、わずかに竪穴式住居跡と土坑を各１基ずつ確認しただけであるが、その距離の隔たりから、下植野南や算用田の集落とは明らかに別の集落を構成していたと判断される。しかも、Ｄ地区の西半には流路ＳＲ34951やＳＲ34952があり、これらの流路によっても下植野南や算用田の集落と分離されていたであろう。Ｃ地区の西側は試掘調査によって、遺構・遺物が分布していないことが判明しているので、北側及び南側に集落跡が包蔵されていると判断される。また、Ｄ１トレンチの土器埋納土坑ＳＸ34965の周辺の柱穴内には弥生土器が混じっており、この北側一帯にも弥生集落が包蔵されている可能性がある。古墳時代の初頭頃にはＥ地区に流路が形成されていたことが確認されている。以後、近世に至るまでこの場所近辺に流路が位置しつづけたものと推測される。

9 世紀



10世紀(～11世紀初頭)



第32図　百々遺跡遺構変遷図(2)

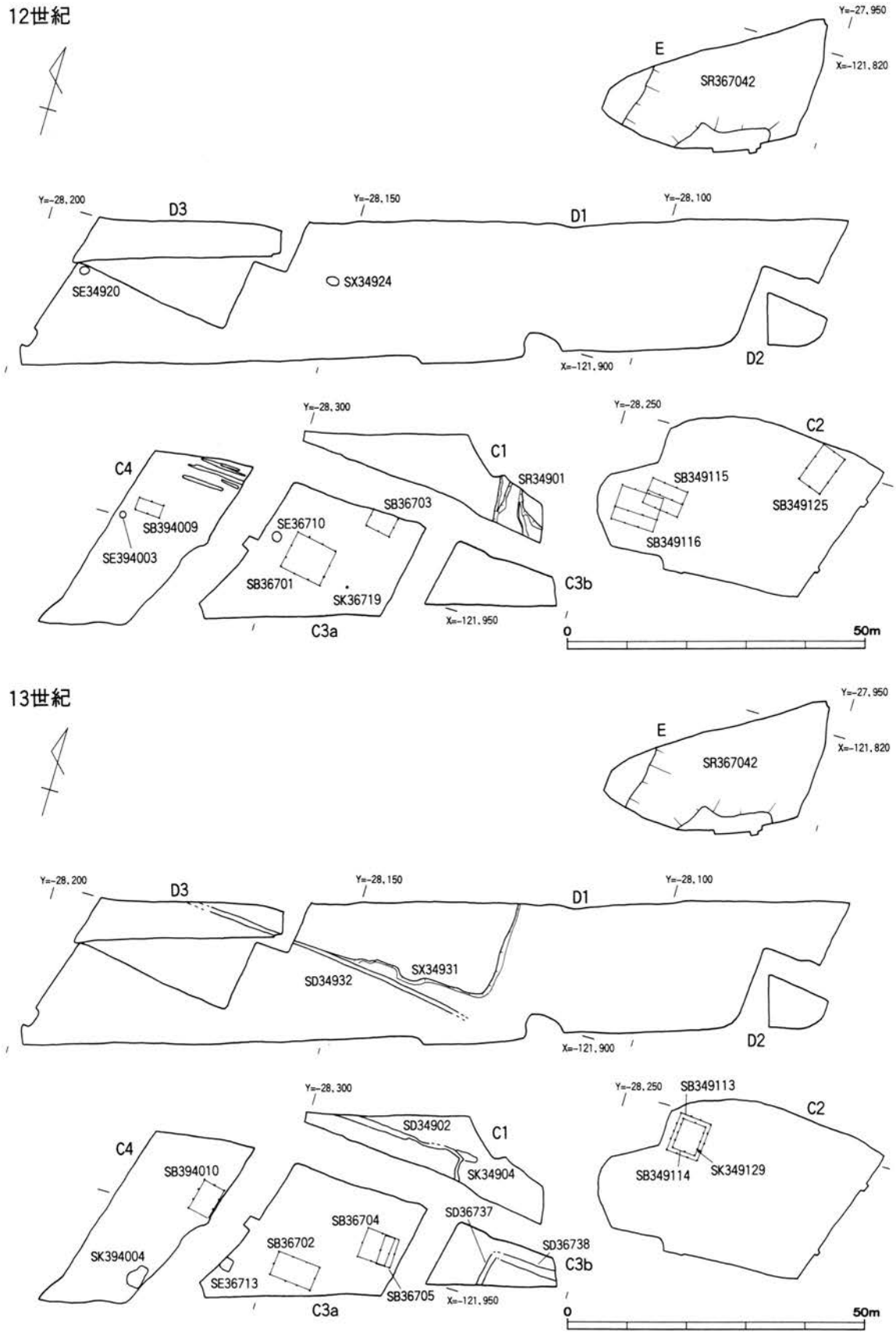
飛鳥時代から奈良時代及び長岡京期にかけての遺構は確認できず、不明である。ただ、第３節で後述するように、大山崎町をはじめとした乙訓郡の当時の重要性を考えれば、集落が分布しないだけで、少なくとも古西国街道ともいうべき道路が奈良時代には存在したことが推測される。

平安時代以後には、西国街道が“整備”され、この街道を中心にして東西に掘立柱建物跡や井戸が多数分布する。平安京遷都直後、９世紀初頭に西国街道の東・西側溝が“整備”される。出土土器を見ると、西側溝の掘削(正確には土砂の堆積)は東側溝ＳＤ394104・39414にやや遅れるようであるが、西側溝ＳＤ349111内には、ＳＤ394104と同じ時期の土器を含んでいる廃棄土坑ＳＸ349133の土砂が流入しているのが観察されたので、東側溝とほぼ同じ時期に掘削・整備されたと考えられる。また、掘立柱建物跡ＳＢ34957は井戸ＳＥ34958と、ＳＢ34922はＳＢ34923と位置が近接したり、重複しているので、ほぼ同時もしくは相前後の時期にあったと考えられる。溝ＳＤ34953は、712の土器が一点出土しているだけで、詳細な時期は不明であるが、層位的には９世紀と考えられる溝ＳＤ34929よりも古い。また、溝ＳＤ34953は古墳時代の流路ＳＲ34952と同一の位置から掘削されていることや、内部の堆積土がともに砂層を主体としていることから、自然流路ＳＲ34952を人工的に付け替えたと判断される。そうすると、溝ＳＤ34953の掘削時期は、この地が本格的に整備されて利用が開始された段階と考えられ、奈良時代・長岡京期の可能性も含めて９世紀でも早い段階といえよう。このように、９世紀は、西国街道を中心に、Ｄ地区の東端からＣ３aトレンチまでの広範囲にわたって、宅地としての土地利用が行われている。

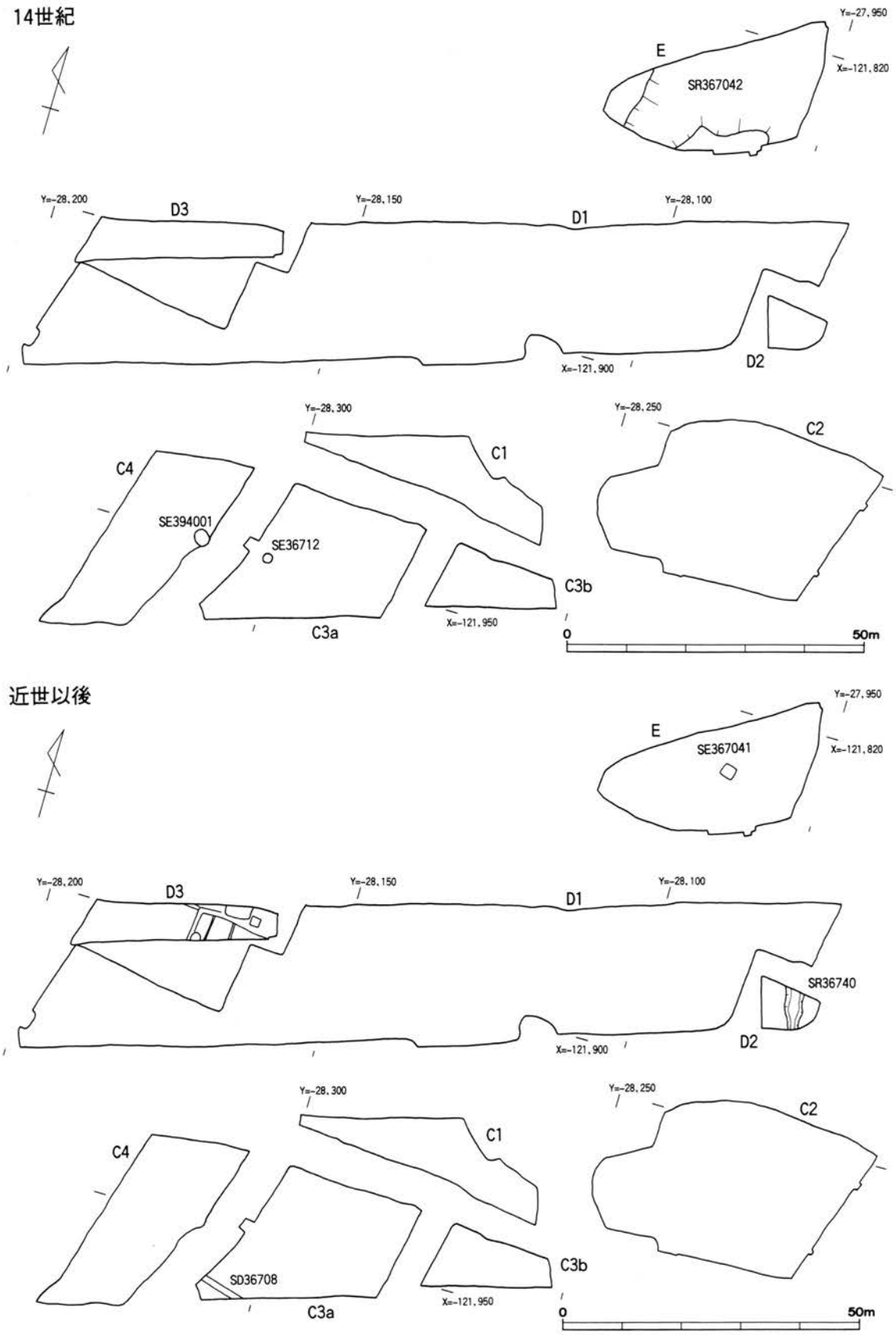
10世紀には、新たにＳＤ394102が掘削されて東側溝として利用され、西国街道の路面が２～３ｍ狭められ、それまでの東側溝ＳＤ34914上に廃棄土坑ＳＫ34915・16が掘削される。西国街道に面した掘立柱建物跡の多くは、詳細な時期こそわからないが、ほとんどが９～10世紀に収まり、西国街道に面した20ｍ内外のみ密度が濃く、前段階より継続的に利用されている。それに対して、Ｄ地区の東側やＣ１トレンチより西では、居住空間としての土地利用がなされなくなり、何らかの社会的な要因があったものと想定される。なお、９世紀から11世紀にかけてのＣ・Ｄ地区の西国街道の変遷は、第３節で詳しく触れている。

11世紀には遺構の空白時期が若干存在する。

12世紀には、この時期以降の西国街道の東西の側溝は調査では検出できていないので、西国街道は現道幅内に収まる程度の道幅となって、以後、その位置を現在に至るまで踏襲したようである。この時期以降には、Ｃ地区を中心にして、家屋が多く建ち並ぶようになる。西国街道に面して１棟、Ｃ２トレンチのやや高台に２棟、Ｃ１トレンチの流路ＳＲ34901を隔てて、Ｃ３a・Ｃ４トレンチにそれぞれ数棟ずつが分布する。Ｃ３aトレンチでは、出土遺物からこの時期とわかるのは井戸ＳＥ36710と土坑ＳＫ36711しかないが、時期の決め手に欠く掘立柱建物跡ＳＢ36701は柱穴内に瓦器片を含むので、おそらくこの段階である可能性が高い(井戸ＳＥ36712と同じ時期の可能性もあるが、この井戸は瓦器を含まない時期と考えられるため)。掘立柱建物跡ＳＢ36703は、掘立柱建物跡ＳＢ36701とほぼ同じ方位で建てられており、同時にあったと推測される。また、Ｃ４トレンチの東西の素掘り溝群も、掘立柱建物跡ＳＢ394009とほぼ同じ振れ角を有しており、



第33図　百々遺跡遺構変遷図(3)



第34図　百々遺跡遺構変遷図(4)

この時期と捉えられよう。以上のように、遺構の時期を分類すると、Ｃ４トレンチとＣ３aトレンチの掘立柱建物跡群にはそれぞれ井戸を伴っているので、それぞれが別個の屋敷地となっていたと考えられる。流路ＳＲ34901の西側には２軒、東側にはＳＢ349115・116の１軒と西国街道沿いの一軒の屋敷地が分布している。

13世紀は、12世紀と基本的に同じで、Ｃ２～Ｃ４トレンチにかけて屋敷地が連なる。Ｃ２トレンチの掘立柱建物跡ＳＢ349113・114は厳密な時期はわからないが、掘立柱建物跡ＳＢ349113の柱穴が瓦器埋納土坑ＳＫ349129を切っているので、これらの掘立柱建物跡群は瓦器埋納土坑ＳＫ349129に相前後する時期と考えられる。この時期の特徴として挙げられるのは、現在の土地区画や地形と合致する区画溝や段差を伴う溝が検出されており、大規模に土地区画を行っていると考えられる点である。これらの区画溝や段差は、約10°北で東に振る角度を持つ。遺物から確実にこの時期を押さえられるのは、Ｃ１トレンチの溝ＳＤ34902・04の13世紀前半だけである。しかし、Ｄ１トレンチの溝ＳＤ34932は、遺物の出土はないが、遺構の上下関係から中世墓ＳＸ34924に後出し、この溝をこの時期に比定しても矛盾しない。また、Ｃ３bトレンチの溝ＳＤ36737・38や、Ｃ２トレンチの区画溝ＳＤ349105・106には瓦器片が混じっているが、今回の百々遺跡での一連の調査では14世紀の瓦器は出土していない。後述のように、14世紀には急激に遺構の分布が疎らになることを考慮に入れると、何らかの変化がこの地の土地利用に関して生じたことが推測され、このことからも、これらの振れ角を有する溝や段差は13世紀の所産と考えられる。

14世紀には、13世紀に大規模な土地区画・開発を行ったため、ほとんど遺構が分布していない。Ｃ４・Ｃ３aトレンチでわずかに井戸２基が見つかった程度であり、居住の場としての利用がこの時期以降はなされなくなったようである。

15～18世紀にかけての遺物の出土はなく、この地が居住空間として利用されていなかったと推測される。

その後、18世紀後半から19世紀になって、遺構・遺物が再び確認されるようになる。この時期の遺構には、Ｄ３トレンチの東半で検出した遺構群があり、西国街道に面した小範囲のみが、生活の場として利用されるようになったようである。これは、明治23年の「仮製地形図」の家屋の分布と一致する。Ｄ２トレンチでは、小泉川の氾濫に伴う流路痕跡を検出した。Ｅ地区の流路は、この時期には完全に埋まり、井戸が造られる。元禄11(1698)年には河村瑞賢によって小泉川の流路付け替えが行われており、河川改修の結果、急激に流路が埋まったのであろう(今井1983)。さらに、寛政４(1792)年の頃には小泉川の川床は３ｍ以上も高くなり、洪水による堤防の決壊や大雨による被害を避けるため、江戸時代以降には何度も護岸工事や川浚いが繰り返されており、現在の小泉川の現況となったのであろう。

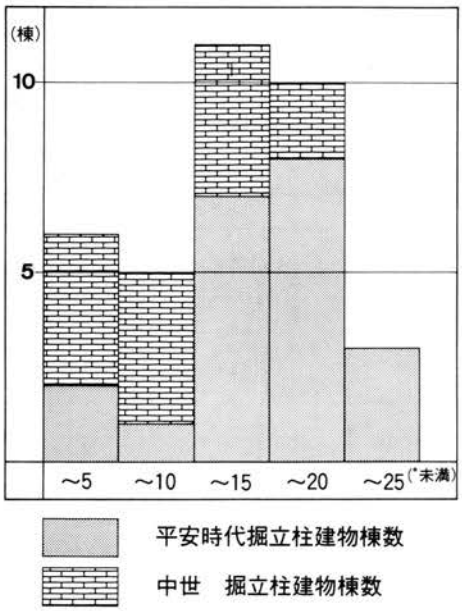
第２節　建物跡方位の変遷

百々遺跡の調査により、33棟の掘立柱建物跡と２条の柵、２基の橋脚もしくは門を検出した。『京都府遺跡調査概報』第47冊などでは、平安時代の掘立柱建物跡が約15°北で東に振る方位を有

し、中世に至るにつれて北方位を向くようになることを述べた。また、古閑氏は、百々遺跡の総括的な研究を行う中で、掘立柱建物跡の方位の変遷について検討した(古閑1997)。ここでは、今回の調査で検出した平安時代と中世の掘立柱建物跡についてのみ、その方位の変遷についてまと

付表16　掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	調査地	方位	規模	位置	出土遺物	時期	備考
SA349120	C2	18	4間	W1	土師器・須恵器・灰釉陶器	平安	
SB349113	C2	5	3×4	W2	土師器小片	13世紀	
SB349114	C2	4	2×4	W2	土師器小片	13世紀	
SB349115	C2	7	2×3	W2	土師器皿(492)・瓦器小片	12世紀前半	
SB349116	C2	2	2×3	W2	土師器小片・瓦器椀(496)	12世紀後半～13世紀初頭	南に廂
SB349117	C2	17	2×2	W1	土師器・瓦器小片	中世	
SB349118	C2	15.5	1×2	W1	土師器・須恵器小片	平安	
SB349119	C2	20	2×2	W1	土師器・黒色土器・須恵器壺(530)・緑釉陶器(531)・無釉陶器(536)	平安	
SB349121	C2	18	1×2	W1	土師器椀(514)・土師器杯(517・518)・須恵器鉢(529)・黒色土器・瓦	10世紀初頭～中葉	
SB349122	C2	18	3×4以上	W1	土師器皿(506・509)・無釉陶器(535)・灰釉陶器(538)・須恵器・緑釉陶器	9世紀中葉～末	
SB349123	C2	21	3×3	W1	土師器皿(501)・須恵器	9世紀中葉～末	
SB349124	C2	20	1×2	W1	土師器甕(525)・黒色土器・須恵器・瓦	平安	
SB349125	C2	19	2×3	W1	土師器小片・瓦器椀(498)	12世紀中葉	
SB349126	C2	20	1間	W1	土師器杯(513)・緑釉陶器(532)	10世紀初頭～中葉	門または橋
SX349127	C2	20	3間	W1	土師器・須恵器	平安	橋脚
SB36701	C3a	11	3×3	W3	土師器・須恵器・瓦器小片	12世紀	
SB36702	C3a	6	2×3	W3	土師器皿(88・90・91・93・94)・瓦器椀(98・99)	13世紀前半	
SB36703	C3a	12	2×2	W3	土師器小片	12世紀	
SB36704	C3a	4.5	2×2	W3	土師器皿(79・80)・瓦器椀(96)	13世紀前半	
SB36705	C3a	1.5	1×2	W3	土師器・瓦器椀(95)	13世紀中葉～後葉	
SB36706	C3a	15	2×4	W3	土師器小片・須恵器杯(117)	9世紀前半	
SB394009	C4	5	2×4	W4	土師器皿(28・29)	12世紀中葉	
SB394010	C4	12	2×3	W4	土師器皿(27)	13世紀中葉～後葉	
SA34928	D1	13	4間	E1	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器皿(705)	中世	
SB34918	D1	14	2×3	E1	土師器・須恵器杯蓋(632)・弥生土器	平安	
SB34919	D1	12	2×3	E1	土師器・須恵器・弥生土器	平安	
SB34922	D1	10	2×3以上	E2	土師器・須恵器杯(633～635)・弥生土器	9世紀	南に廂
SB34923	D1	10	1×2	E2	土師器皿(629)・須恵器・弥生土器	9世紀中葉～末	
SB34926	D1	15.5	2×1以上	E1	土師器杯(631)・須恵器・黒色土器・弥生土器(739)	10世紀初頭～中葉	
SB34927	D1	9	2×2	E1	土師器皿(630)・瓦・弥生土器	平安	
SB34954	D1	3	3×3以上	E3		9世紀	
SB34957	D1	10	2×5	E4	土師器・須恵器・弥生土器(741・742)	9世紀中葉～末	
SB394108	D3	10	2×2以上	E1	土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器(637)・無釉陶器(638～640)	平安	
SB394109	D3	15	2×1以上	E1	土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器	平安	
SB394110	D3	15	3×2以上	E1	土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器	平安	
SB394111	D3	10.5	1×2	E1	土師器・黒色土器・須恵器杯(636)	平安	
SB394112	D3	2	2×	E1	土師器・須恵器杯(727)	平安	



第35図　掘立柱建物跡方位分布図

めを行い、今後の基礎資料としたい。

百々遺跡で検出した掘立柱建物跡は、柱穴が不ぞろいで、その柱間も不均等で、柱列もそれほど直線に並ばない傾向にある。そのため特に、柱穴が錯綜して検出されている地区では掘立柱建物跡の柱穴の組み合わせにやや不適切なものが含まれているかもしれない。建物跡の復原線は、1尺＝約30cmを基本に、できるだけ整数値になるような柱間の尺数で、隣り合う辺が直角に交わって、できるだけ柱穴上を通るように設定した。しかし、先に述べたような不確かな要素を持っているので、復原線の設定の仕方によっては建物跡の方位に数度の違いが生じるかもしれない。ここでの検討は、あくまでも調査者が行った建物跡復原に基づくものであることを断っておきたい。建物跡方位は、国土座標軸からどの程度振っているかで示した。東西方向のものでも、90°を加減して、北からの振れに直した。また、それぞれの建物跡の時期は、第1節で検討した時期区分に従っており、遺物からその時期が判明しないものでも周囲の遺構の関係からその時期を復原した。時期不詳の建物跡でも、大まかに平安時代(9～11世紀)と中世(12～14世紀)の時期区分を与えてある。

付表17　掘立柱建物跡方位頻度表

		～5°	～10°	～15°	～20°	～25°	合計
平安時代	棟数	2	1	7	8	3	21
	%	9.5	4.8	33.3	38.1	14.3	100.0
中世	棟数	4	4	4	2	0	14
	%	28.5	28.6	28.6	14.3	0	100.0
総計	棟数	6	5	11	10	3	35
	%	17.1	14.3	31.4	28.6	8.6	100.0

数値は未満である

付表16は、今回の百々遺跡の調査によって検出した掘立柱建物跡の一覧表である。すべての掘立柱建物跡が北で東に振る方位を有しており、例外は認められない。これらの建物跡方位は、北で東に1°近く振るだけのほぼ真北を向くものから、東に振る角度が20°を超えるものまでがあり、平均するとN－11.4°－Eとなる。一見すると、両時期を通じて特定の角度に集中する傾向を認めることはできず、N－10～16°－Eを向くものがやや多い程度である。そこで、方位の傾向及び時期的な変遷が認められるかどうかを検討するために、建物跡方位を中世と平安時代に分けて、5°ごとのデータの頻度を示したものが付表17と第35図である。これを見ると、平安時代の掘立柱建物跡はN－10°－E以上の方位を有するものが85%以上を占めるのに対して、中世では15°以下のものが85%を占める。この点は、時期別による建物跡方位の平均の違いに明瞭に現れており、平安時代の掘立柱建物跡の平均がN－13.4°－E、中世のものがN－8.5°－Eである。この内容を見る限りでは、時期が新しくなると掘立柱建物は真北に近く造られる“傾向”を認めてもよさそうである。

ここで、各時期の建物跡方位の“標準”を検討したい。Ｃ２トレンチでは西国街道に面して中世の掘立柱建物跡ＳＢ349125を確認しているが、この建物跡はその方位が西国街道に面した他の平安時代の掘立柱建物跡と同じくＮ－20°－Ｅ前後あり、建物跡方位だけでは時期の区別はつかない。中世の建物跡方位の平均はＮ－8.5°－Ｅなので、このＮ－20°－Ｅ前後はかなり大きな振れ角である。もし、大きな範囲にわたる規制が中世の段階に存在し、掘立柱建物跡の建てる方位がその規制に従ったものであるならば、建物跡方位はこれほど大きな違いにはならないであろう。この現象を解釈するための一つの考え方は、“道路に面した範囲は道路の方向に規制される”という考えを付け加えることである。道路に面した範囲はその道路の方向に建物跡などの構造物が規制されるのに対して、その範囲をはずれたところでは広範囲にわたる地域の“規制”が建物跡方位を決定するのである。付表16の「位置」の項目は、ある建物跡が西国街道からどれだけ離れているかを示したものである。１単位を25mとし、それぞれの掘立柱建物跡が西国街道の中軸から東・西にどの程度離れているのかを、東をＥ、西をＷとして何単位の位置にあるかを示した。建物跡がその境界に位置している場合には近い位置で表示した。これを検討することで、ある建物跡の方位と西国街道からどれだけ離れているかということの間の相関関係がわかるであろう。

西国街道の東側のＤ地区を見ると、15棟のうち２～３棟を除いて、Ｎ－10～15°－Ｅの間に分布している。これは、Ｅ４といった、比較的離れた位置で検出した掘立柱建物跡ＳＢ34957でもそうである。Ｄ地区では柵跡を除いて中世の掘立柱建物跡は確認されておらず、すべて平安時代のものである。一方、西国街道の西側のＣ地区を見ると、西国街道に面したＷ１区で検出した９棟の掘立柱建物跡はすべてＮ－15～20°－Ｅの方位を有している。Ｗ２区ではＮ－２～７°－Ｅ、Ｗ３区ではＮ－1.5～15°－Ｅ、Ｗ４区ではＮ－５～12°－Ｅであり、Ｗ１区の建物跡方位の振れ角の大きさは突出している。このＮ－15～20°－Ｅという振れ角は、このあたりの西国街道の方位とほぼ一致しており、Ｅ１区の掘立柱建物跡もＮ－10～15°－Ｅと、西国街道の振れにほぼ一致している。このことから、少なくとも西国街道に面したＷ１及びＥ１は、道路の振れ角に規制されて建物が建てられるのであろう。また、先に触れたように、Ｄ地区の掘立柱建物跡はそのほとんどが平安時代のものであり、Ｄ地区の全域でＮ－10～15°－Ｅ程度の振れを有している。Ｃ地区でも、Ｗ３区で検出した平安時代の掘立柱建物跡ＳＢ36706はＮ－15°－Ｅの方位角を有している。このように、平安時代にはＮ－10～20°－Ｅ程度の振れ角を有する建物跡が広範囲に分布しており、この時期に何らかの“規制”があったことをうかがわせる。このうち、Ｎ－15～20°－Ｅのものは、西国街道に隣接しているためその方向に規制されたとも考えられ、実際の“広範囲にわたる規制”はＮ－10～15°－Ｅ程度であったであろう。

中世の掘立柱建物跡の振れ角を見ると、まず、Ｗ１区やＥ１区では柵ＳＡ34928や掘立柱建物跡ＳＢ349125のように、掘立柱建物跡・柵は西国街道の方位に合わせて造られている。この規制が及ぶのは道路から20～30mの範囲で、そこを超えると広範囲にわたる地割りといった、他の規制で建物の方位が決定されたようで、Ｗ２区からＷ４区にかけての中世掘立柱建物跡の方位の平均はＮ－5.8°－Ｅである。Ｗ３区ではＮ－10°－Ｅを超える振れ角を有した建物跡が数棟あり、

誤差の範囲なのか、違った規制などが存在するのか、よくわからないところである。これを誤差の範囲と考えると、中世の掘立柱建物跡はN－5～10°－E程度の振れ角を有しているといえよう。

このように、時期によって建物方位が変化していることが推定されるが、これらは厳密なものではなく、あくまでも“目安”程度のものである。これは、言い換えると、建物方位を決定する規制はそれだけ弱かったということであり、決して強制的なものではないのである。この建物方位を決定する規制を“土地区画割り”と考えているが、具体的には、土地を区画する溝や道路である。土地を区画する溝や道の方向が屋敷地を規制し、屋敷地の四周の方向がその中に建てられている建物一つ一つの方向を決定付ける。そのため、土地区画の方向に“よく似た”方向の建物が造られるのである。上述の西国街道に面する範囲はその構造物の方向が西国街道の方向に規制されているが、この現象もその一つと捉えられる。その方向の決定は、掘立柱建物などの構築物を造る個々の人間の“自主的な”判断に委ねられているので、決して一律的に決まるものではなく、“ユレ”を有しているのである。このように考えると、平安時代から中世に至って、建物方位が広範囲に変化したのは、この地の土地区画割りに大きな変化が生じたことを類推せしめる。なお、ここで問題にしている中世の土地区画割りの変化は、第1節で述べた13世紀段階に想定した土地区画整理に先立つものであり、この中世掘立柱建物を“規制”した地割りに則って、13世紀には一層大規模な土地区画整備がなされたのであろう。

以上をまとめると、

①西国街道に面した範囲では、掘立柱建物などの構造物の方向は道路の方向に強く規制される（N－15～20°－E）。

②①以外の平安時代の掘立柱建物跡はN－10～15°－E前後の方位を有する。

③①以外の中世掘立柱建物跡はN－5～10°－E前後の方位を有する。

④上記の時期的な変遷は、現時点では細かな時期を経て徐々に変遷したといえず、13世紀以前の土地区画割りの変化に由来すると考えられる。

第3節　西国街道の成立と変遷

1．はじめに

今回の調査によって、平安時代にさかのぼる西国街道の路面・側溝を確認した。古来より、京都と西国の交通を結ぶ道路として重要視されてきたが、その成立についてはよくわかっていない。『向日市史』の中で足利健亮は、西国街道が長岡宮と平安京羅城門を結んでいることから、長岡京の殿舎を解体した資材を平安京へと運搬する道を起源としていると考えている。この考えでは、長岡宮より北側の成立については説明し得ても、長岡京より南の西国街道の成立及び山陽道との関連などが説明できていない。

ここでは、西国街道の成立と山陽道や山崎道との関係を検討したい。以下の記述では、現在見られるルートの西国街道を「現西国街道」と呼称し、それ以前のものを「古西国街道」と表記し、現在と過去の西国街道とではルートがやや異なっているかもしれないという含みを持たせたい。

2．発掘調査による知見

(1) C地区・D地区の様相

C２トレンチは、西国街道の西側に位置し、古西国街道路面及び西側溝を検出した。古西国街道(平安)の路面はＳＦ349104で、この路面に伴う西側溝はＳＤ349102とＳＤ349103の２条がある。ＳＤ349102は、ＳＤ349103に後出するもので、ほぼ同じ位置に造り替えられている。ＳＤ349111は、ＳＦ349102の下層で検出した溝で、これらの西国街道路面・側溝よりも古い時期のものである。この先後関係を整理すると、①ＳＤ349102・ＳＦ349104→②ＳＤ349103・ＳＦ349104→③ＳＤ349111と新→古となる。これらの時期は、②が11世紀初頭、③が９世紀初頭～11世紀初頭で、①も②からそれほど下らない時期のものであろう。これ以降の時期の側溝は確認できておらず、ある時期まで踏襲されたか、もしくは現在の西国街道下に敷設されたかであるが、路面ＳＦ349104の上では遺構を確認していないので、ある時期までは踏襲されていたのであろう。③のＳＤ349111は、10世紀後半頃から溝内の堆積層が厚くなっており、溝さらえなどの清掃がそれほど行われなくなったようである。

D地区では、西国街道の東側溝を検出した。東側溝には、ＳＤ34914、ＳＤ394101、ＳＤ394106、ＳＤ394102があり、ＳＤ394106・ＳＤ34914→ＳＤ394101・ＳＤ34914→ＳＤ394102と変遷する。ＳＤ394106・ＳＤ394101・ＳＤ34914に伴う路面は、ＳＦ34913・ＳＦ394103で、ＳＤ394102に対応する路面は現在の西国街道下に位置している。埋土に含まれる土器から、ＳＤ394106・ＳＤ34914は９世紀初頭、ＳＤ394101・ＳＤ34914が９世紀中葉から末、ＳＤ394102が10世紀後半から11世紀初頭頃に埋まり、その機能を停止したのであろう。C２トレンチでは、路面上で柱穴などは検出できなかったが、D１・D３トレンチでは路面上で柱穴を検出したので、東側溝が東から西へと移設され、それに伴い、宅地が西へ広がったことがわかる。

以上のように、９世紀初頭に西国街道が整備され、10世紀後半頃には西国街道の道幅はやや狭くなり、西側溝もあまり管理されなくなったようである。９世紀初頭における整備は、その時期と大山崎という地理、山崎駅・津といった施設の存在から、山陽道の整備と位置づけたい。西側溝ＳＤ349111の埋没後は、この直上に路面が敷設されるが、それに伴う側溝は貧弱なもので、それ以前と比べて西国街道の重要性が軽減したと思われる。

(2) 周辺市町村の様相

周辺の調査では、遺跡確認調査第15次及び同第21次、右京第69次、同第159次調査で西国街道の側溝や路面が確認されている。これら大山崎町内の西国街道の調査を総合すると、現在の西国街道の位置にほぼ一致すること、その時期は平安時代初頭～中期にかけてのものである。これらの調査については、林氏がまとめている(林1992)。林氏によれば、大山崎町内の古代山陽道は現在の西国街道のルートとほぼ一致しているが、現在の道路面よりも小刻みにアップダウンを繰り返している。

長岡京市域では、右京第176・278・490・513次など、西国街道近傍で発掘調査が数多く行われている。しかし、中・近世の集落遺構が確認されているが、西国街道に面した位置で調査がなさ

れていないためか、西国街道の関連遺構は確認されていない。

向日市域では、長岡宮跡第184次や同第233・270次調査で西国街道近傍が調査されている。このうち、長岡宮跡第233次調査では、西国街道の側溝が検出されている。この調査では、向日丘陵から北東方向に一直線に下る街道の北側の宅地を調査し、現在の西国街道に平行した側溝を検出している。報告によると、この溝が機能していた下限の時期は、この側溝の中から出土した遺物から、「平安時代前半期、厳密にはそれ以降」のものである。

高槻市の嶋上郡衙跡関連遺跡の郡家今城遺跡では、８世紀中頃から10世紀前半にかけての山陽道の両側溝と多数の掘立柱建物跡を検出している(宮崎1990)。山陽道は二時期のものが検出されており、Ⅰ期(８世紀中頃～９世紀後半)は南側溝しか検出されておらず、道路幅は不明であるが、Ⅱ期(９世紀後半～10世紀前半)は両側溝が確認されており、溝心々で約６ｍ、路面幅は５ｍ前後である。ここでの掘立柱建物跡は、山陽道の方向に全く規制されず、ほぼ真北を向いている。

以上のように、西国街道は大山崎町内以東ではその規模や時期など、ほとんどわかっていない。現西国街道横を発掘しても、長岡宮跡第233次調査を除いて、側溝はおろか当時の集落遺構はほとんど見つかっていない。この事実は、現西国街道と違ったルートを古西国街道がとっていたと理解できるのではなかろうか。ここで、平安時代の西国街道の位置付けを検討するが、その前に、奈良時代の乙訓地域の交通を考察し、平安時代以降の西国街道の歴史的な背景を理解したい。

３．奈良時代の乙訓の交通

古代から、山崎は交通の要衝地として位置付けられてきた。文献史料を見ると、垂仁紀15年には、竹野媛が丹波に帰る際に乙訓を通っており(『日本書紀』)、山陰へ向かう道が乙訓を通っていたと推測される。また、白雉４(653)年には、孝徳天皇が山崎に宮を造営する。天平19(747)年の『大安寺伽藍縁起并流記資材帳』には「山背国乙訓郡一処、山前郷にあり」とあり、西国からの物資を奈良へ運ぶために仮置きする倉庫用の荘園が山崎にあったことを伝えている。『行基年譜』によると、行基は神亀２(725)年に山崎橋を架橋し、天平３(731)年には山崎院を建立している。また、長岡京遷都決定直後の延暦３(784)年７月３日には、「阿波、讃岐、伊予三国に仰せて、山埼橋を造る料材を進めしむ」(『続日本紀』)と、まず、山崎橋を修復させていることからも、長岡京における山崎橋が交通の要衝として重要視されていたことがうかがえる。

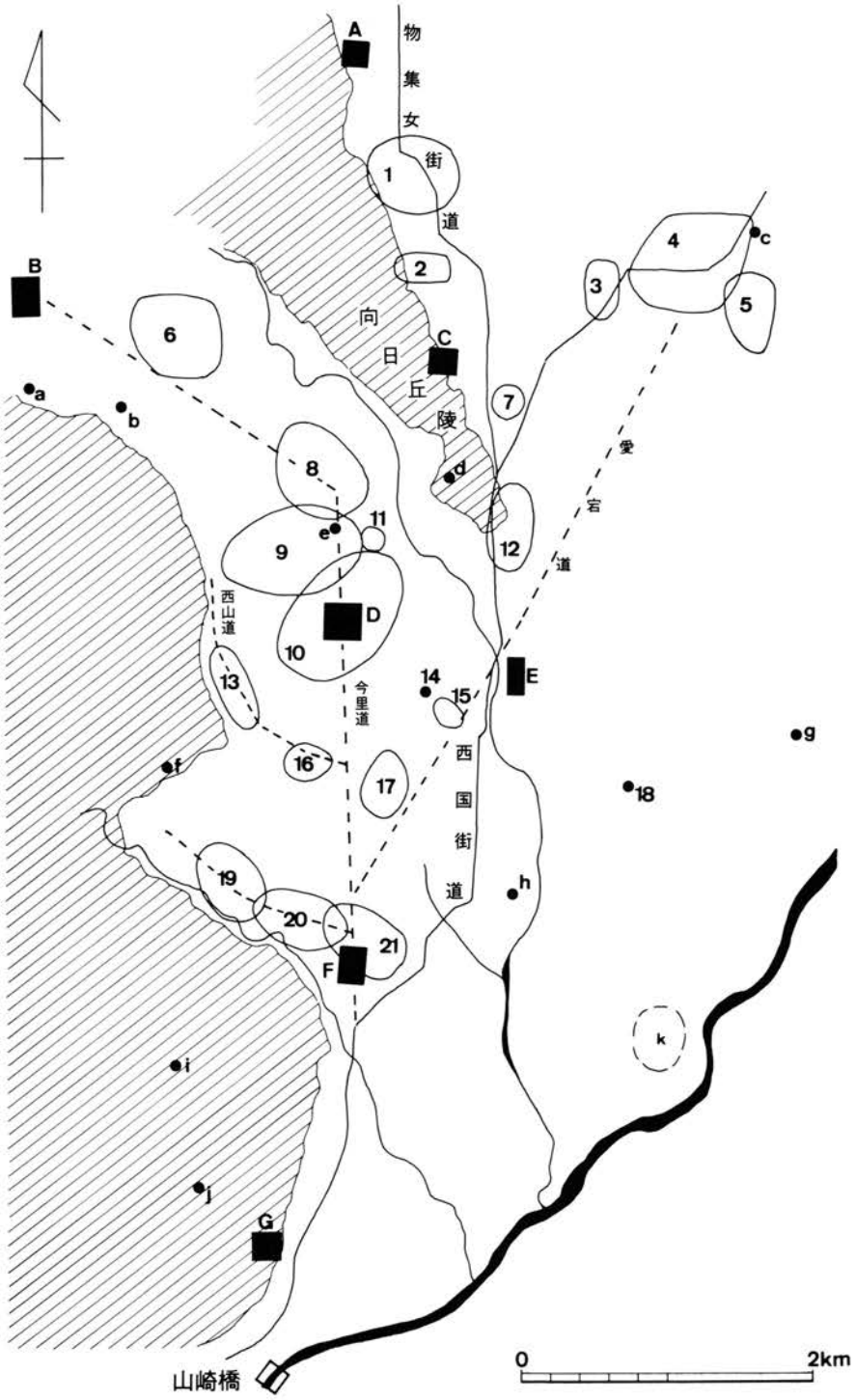
平安京から山陰に向かう官道を山陰道と呼ぶのに対して、平城京から山陰に向かう道を古山陰道と呼称すると、百々遺跡の所在する乙訓の地には古山陰道が通じていた。これには二つの考えがあり、一はいわゆる西山道であり、もう一つは足利健亮氏の主張する直線道である。西山道については、『続日本紀』の和銅４(711)年正月条に、山陽道が相楽郡→綴喜郡→男山→山崎橋→摂津国へ抜けたことから、山崎橋から北上し、西山道を経て大枝へと抜けると考えるルートである。一方、足利氏は、歴史地理学の立場で古山陰道を復原し、木津川旧河道の左岸を北上し、乙訓郡内を直線的に斜めに横切って京都市西京区大枝へと抜けるルートである(足利1983)。長岡京の造成により京域内の道路は廃されてしまったが、長岡京外にはその痕跡が残ることを根拠にしてい

る。近年、左京第235次調査によって、北西に斜行する道路痕跡が確認されている。長岡京市馬場で確認された古道は神田古道と呼ばれ、北で西に30°弱振っている(中島1991)。先の足利氏による古山陰道は約25°の振れであり、やや振れ角が違うこと、推定ルートから1キロメートルもはずれていることから、神田古道を古山陰道と速断することは避けている(中尾1996)。実際に長岡京の調査を進めても、足利の古山陰道に関連する遺構は検出されていない。大まかにいうと、西三坊大路以西、七条大路以南では長岡京条坊関連遺構が確認されていないので、足利の想定した長岡京の京域よりも実際の施工範囲はかなり縮小していることが予想される。そうすると、足利氏のいう古山陰道の痕跡が長岡京の実際の施工範囲と合致しないという事実は、どう解釈すればよいのであろうか。こういった点から、足利氏の古山陰道説を一旦横に置いて、古山陰道は山崎橋経由であったとして、以下の考察を進めたい。

『続日本紀』によると、長岡京の遷都の詔を受けて、長岡宮内に接収される百姓の私宅に「当国正税四万三千束」を与えており、乙訓地域には多くの人々が住んでいたことをうかがわせる。この記事を裏付けるように、今里遺跡・井ノ内遺跡などで掘立柱建物跡を主体とした集落跡などが確認されている。乙訓地域の古代寺院には、高句麗系古瓦が出土する樫原廃寺・宝菩提院廃寺・乙訓寺・山崎廃寺、藤原宮式の古瓦が出土する鞆岡廃寺がある。これらの寺院は、少なくとも長岡京遷都以前の7世紀に創建されたと考えられる。また、厳密には奈良時代に成立していたとはいえないが、『延喜式』に所載の式内社は少なくとも10世紀前半までには存在していたといえるものである。乙訓郡内には19座あり、大社が高御産日神社、火雷神社、大歳神社、小倉神社、酒解神社の5座で、小社は与杼神社、大井神社、石作神社、走田神社、御谷神社、国中神社、向神社、茨田神社、石井神社、神川神社、久何神社、簀原神社、入野神社、神足神社の14座である。これらのうち、文献史料によって奈良時代には成立していたことが確実視されているものがある。『続日本紀』には、大宝元(701)年4月3日の勅に「波都賀志神」とあり、「羽束師に坐す高御産日神社」と考えられている。大宝2(702)年7月8日の条には、「山背国の乙訓郡に在る火雷神、旱ごとに雨を祈るに、頻に徴験あり。宜く大幣及び月次の幣例に入るべし。」とあり、すべてとはいえないが、少なくともそのうちのいくつかは、奈良時代に成立していたと考えられる。

さて、以上の奈良時代にさかのぼる(可能性をもったものも含む)遺跡を地図上に落としたのが第36図である。これらの一つ一つの集落もしくは数個が集まった集落群は、情報や物資を生産し処理する単位であり、それらをつなぐ「道」は情報や物資をやりとりするための経路となる。集落が他の集落から孤立して全く交通を結ばないのでない限り、交通の道がそれぞれの集落間を繋いでいたであろう。これらの交通路は、個々の集落ごとに別個に結ばれていたのではなくて、集落と他の集落を有機的に結んでいたと考えられる。そのため、こういった道路の経路上には、集落が数珠状に分布していたであろう。しかも、交通路は、自然地形が許す限り、最短距離を採ると期待できる。

以上のように考え、集落や寺院、神社などがかたまった複合体に着目すると、樫原廃寺(A)・吉備寺廃寺(E)はやや不確かであるが、鞆岡廃寺と鞆岡遺跡、乙訓寺と井ノ内・今里遺跡と角宮



第36図　奈良時代の集落・寺院・神社と交通路

1. 中海道遺跡　2. 南条遺跡　3. 久々相遺跡　4. 中久世遺跡　5. 大藪遺跡
6. 上里北ノ町遺跡　7. 辰巳遺跡　8. 上里遺跡　9. 井ノ内遺跡　10. 今里遺跡
11. 更ノ町遺跡　12. 乙訓郡衙跡　13. 長法寺遺跡　14. 奥ノ町遺跡　15. 明星野遺跡
16. 東代遺跡　17. 開田城ノ内遺跡　18. 神田古道　19. 下海印寺遺跡　20. 伊賀寺遺跡
21. 友岡遺跡

A. 樫原廃寺　B. 南春日廃寺　C. 宝菩提院廃寺　D. 乙訓寺　E. 吉備寺廃寺
F. 鞆岡廃寺　G. 山崎廃寺　a. 大歳神社　b. 入野神社　c. 国中神社
d. 向日神社　e. 角宮神社　f. 走田神社　g. 高御産日神社(羽束師神社)
h. 神足神社　i. 小倉神社　j. 酒解神社　k. 与杼神社

神社、南春日廃寺と大歳神社と上里北ノ町遺跡、宝菩提院廃寺と向日神社と辰巳遺跡や乙訓郡衙跡などがそういった複合体を形成している。古代寺院を欠くが、中久世遺跡などもこういった複合体の一種と見なせよう。こういった複合体を結ぶ形で、古代交通路が形成されていたと考えたい。そうすると、どのような経路で古山陰道が通じていたと復原できるであろうか。

山崎橋を経由した古山陰道は、山崎院(G)—鞆岡廃寺(F)—乙訓寺(D)とほぼ一直線に北上し、上里遺跡(8)から西に折れて南春日町廃寺(B)に至って沓掛へと北上するものと考えられる(「今里道」と仮称)。長法寺を遺跡を経由して西山の裾を上里北ノ町遺跡(6)にまで北上するのが、いわゆる「西山道」であるが、この道沿いには集落が分布しておらず、しかも、乙訓最大規模の奈良時代集落である井ノ内遺跡や今里遺跡の西端をかすめ、乙訓寺を大きくはずれるもので、メインストリートとしては考えにくい。一方、山崎院—鞆岡廃寺—乙訓寺—上里遺跡—南春日町廃寺をつなぐと、主要な集落はその道沿いに分布することとなり、まさにメインストリート＝山陰道にふさわしいものである。鞆岡廃寺からは、伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡への“枝道”が派生し、東代遺跡(16)からは長法寺遺跡(13)へと通じていた(西山道)。

向日丘陵の東裾に沿って北上するルートも復原できる。乙訓郡衙跡(12)から宝菩提院廃寺(C)を経て樫原廃寺(A)へと向かうルートであり、現在の物集女街道にほぼ一致する。このまま北上して、嵯峨野方面へ向かったのであろう(「古物集女街道」と仮称)。さらに、久々相遺跡(3)・中久世遺跡(4)・大藪遺跡(5)の集落へは、乙訓郡衙跡・辰巳遺跡付近から北東へ向かうルートがあり、そのまま桂川を渡り、愛宕郡へと至ったのであろう(「愛宕道」と仮称：このルートについては後述する)。

このように、遺跡や寺院の分布から、南北の道には、西山道、今里道、古物集女街道が想定される。このように乙訓地域の奈良時代の交通路を復原すると、少なくとも大山崎町内の現西国街道は、古山陰道を踏襲しているものと位置づけられる。

4．平安時代の西国街道と大山崎

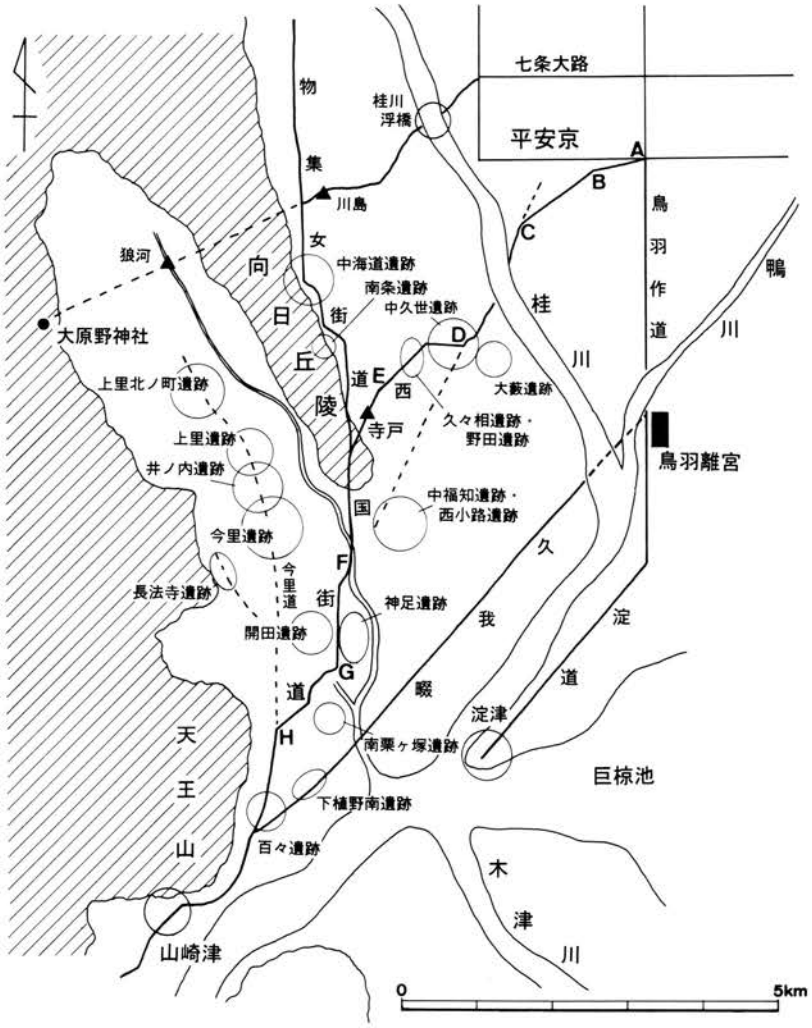
西国街道の成立を考えるために、まず、京都から乙訓に向かう平安時代のルートを文献から求めてみたい。やや時代は下るが、寛弘2(1005)年に中宮彰子が大原野神社に詣でた際には、「かしこく、京のほどは、雨もふらざりしぞかし。閑院太政大臣の、にしの七条よりかへらせ給しをこそ・・・」(『大鏡』)とあり、乙訓に向かうには「にしの七条」を通ったことがわかる。また、『左経記』治安2(1022)年11月1日条には、大原野神社への道程とその清掃の分担が記載されており、「始自朱雀門至于七条大路、左京、始自七条大路至于浄福寺巽角、右京、始自巽角至于皮島中間、大和、始自皮島中間至道寺、河内、自道(ママ)寺至狼河、摂津、始自狼河至二鳥一居和泉、桂川浮橋、山城(後略)」とあり、七条大路から西に出て、「皮島」を経由し、そのまま向日丘陵を横切って、大原野神社へと至ったようである。『小右記』の同年11月28日には「行幸路橘(橋)殊不労造、就中七条末橋騎馬人不能渡」とあり、「七条末橋」は「桂川浮橋」とも呼ばれていたことがわかる。このように、乙訓に至る一つのルートは、七条大路－浄福寺－皮島中間－道寺(道

寺)－狼河(－二鳥一居)で、桂川は七条の末にある浮橋を通るものであった。いわゆる「近世山陰道」とほぼ同じルートを途中までたどるものである。天延2(974)年には、「津廻の事あり。仍って内を退きて西南に向かう。・・・島坂に至る。・・・先ず山埼津を廻る。」(『親信卿記』)とあるが、どういったルートを採ったかはこれだけでは不明である。西南に向かったことを重視すると、宮城から西南方向――七条で西へ向かうこのルートを採って山崎に向かったものと考えられる。もし、この推定が妥当であるならば、乙訓に向かう一つのルートは、七条から西に向かい、川島で南に向かい、古物集女街道を南にとって大山崎へと至るもので、少なくとも、10世紀後半頃には成立していたものであろう。

違ったルートもあった。『今昔物語』巻27の42では、邦利延(くにのとしのぶ)が迷神に惑わされたという物語が載っている。邦利延が三条院の天皇の石清水八幡宮の行幸の際に、九条にとどまるべきを何を思ったか長岡の寺戸にまで行き、さらに歩き続けて、そろそろ山崎の渡りにつくはずなのに、「おかしなことにまだ長岡の辺りを過ぎて、乙訓川の辺りを歩いている」と思っていると、寺戸の丘陵を上っており、寺戸を過ぎて、「今度は乙訓川を渡っている」と思えば、また桂川を渡っていた、迷神に惑わされて、同じところをぐるぐると廻っていたとある。これは長和2(1013)年11月28日の三条天皇の八幡への行幸の際のものである。注目されるのは、乙訓に向かうのに、九条を起点にしていること、山崎へ行くのに寺戸を経由していること、乙訓川と桂川が寺戸からほぼ等距離に位置していた点である。このルートは、九条－桂川－寺戸－乙訓川－山崎という道筋であり、まさに現在の西国街道のルートにほぼ一致する。『中右記』の嘉保2(1095)年3月12日条には、「往年被用山埼路、従院中程被用淀路也、当時最前已被用淀路了、仍申請今度用淀路也」とあり、それ以前は、石清水八幡への行幸には「山埼路」を用いていたとある。このことから、邦利延が歩いたルートが「山埼路」であったといえる。このルートは、少なくとも11世紀には成立していたと判断され、「古西国街道」＝山崎道＝山陽道と考えられる。

それでは古西国街道を山崎路と捉えると、久我畷はどう考えればよいのであろうか。久我畷は、山崎と鳥羽とを直線的に結ぶ道路で、平安京新設と共に計画された山陽・南海道併用道と考えられている(足利1983)。久我畷が文献に現れるのは、『徒然草』195段に「ある人、久我縄手を通りけるに」とあり、その際に久我内大臣(久我通基)に会っている。久我内大臣の没年が1308年であるので、13世紀後半には成立していたのであろう。『太平記』では、元弘3(1333)年の「久我縄手ハ、路細ク深田ナレバ馬ノ懸引モ自在ナルマジトテ」と記されている。このように、文献に現れるのは、せいぜい14世紀以降である。それでは、発掘調査ではどうであろうか。まず、長岡京市内の調査では、左京第53次調査で4期にわたる久我畷が確認されており、久我畷の造営時期を「長岡京期(784～794)をそう下らない時期(平安京遷都後の早い時期)」としている(戸原1985)。左京第230次調査では、近世の段階の久我畷西側溝を検出しただけである(小田桐1991)。次いで、大山崎町内における久我畷の発掘調査を見ておきたい。遺跡確認調査第23次では久我畷と西国街道が接続する位置で、久我畷横を調査しているが、関連する路面や側溝はまったく確認されていない(古閑1996b)。右京第156次調査でも、久我畷の関連遺構は確認されていない(竹井1985)。名

神下植野工区Ｃ６トレンチでは久我畷の路面・側溝を確認している(戸原1996)が、その時期の決め手に欠くもので、下限が中世頃と判断される。このように、平安時代にさかのぼると報告されている久我畷関連の遺構は左京第53次調査のみで、他の調査では確認されていない。しかし、左京第53次調査の久我畷側溝(ＳＤ5320)からは、「坏Ｂ底部と土師器片が出土している」とあるが、その実測図が報告に掲載されていないし、それ以外の時期認定の根拠についても状況証拠的なもので、「平安京遷都後の早い時期」を「上限とする」のが正しいであろう。そうすると、久我畷の敷設時期を平安遷都時に求めるという積極的な根拠は、「山崎と鳥羽作道とを直線的に結ぶ道路」という状況証拠しかないのである。



第37図　平安時代の集落と交通路

鳥羽離宮は、白河上皇が1086年(応徳３年)に造営に着手している。久我畷は、山陽道を通じて陸路で運ばれてきた物資や情報を、“直接”鳥羽離宮に運び入れるためのルートとして設置されたと考えられまいか。『日本後紀』によると、延暦23(804)年に「天皇与等津に幸す」とあり、淀津が初めて文献に現れる。その前の延暦12(793)年正月15日に藤原小黒麻呂らを新京予定地の葛野郡宇多村を視察させ(『日本紀略』)、『帝王編年記』では、同じ日に「始造平安城」と記されている。平安京への遷都の計画が具体的に動き出した後の同年９月に、桓武天皇は「遊猟於瑞野」と、伏見区淀美豆町近辺で遊猟し、同年12月には再度淀美豆町辺りで遊猟を行っている(『類聚国史』)。おそらく、平安京遷都後の外港としての淀津の位置の下見を兼ねたのではなかろうか。もしそうならば、平安京における外港としての淀津が遷都時からかなり重視されたことがうかがわれる。実際、『延喜式』主税上には、各国からの雑物を運漕するための「功賃」が記載されているが、その終点は淀津である。公的には、物資や情報は、山崎津ではなくて、淀津に集められ、

平安京に送られるのである。また、「前滝津」という津も『延喜式』木工寮に記載されている。この津は、現在その位置はよくわからないが、鴨川流域の平安京南と考えられており、宇治津からの木材はこの津に集められている。このように、平安京にあっては、水運を利用して、京のすぐ近くにまで物資を運ぶシステムが整備されている。それなのに、山崎津から物資を陸路久我畷を用いてわざわざ鳥羽経由で平安京に運ぶとは考えにくい。

以上のように、久我畷は西国の物資を平安京に運ぶために造られたとは考えにくく、平安京新設の時点で計画された道路とは考えられないのである。このように、平安京新設の段階でないとしたら、次の可能性としては、鳥羽に離宮が設けられ、情報や物資がそこに集積した時期に、直線道路久我畷が設置されたのではなかろうか。

5．西国街道の成立について

前述のように、現在のルートで西国街道が成立したのは11世紀までと考えたが、奈良時代及び平安時代前・中期頃までは、現在の西国街道とはやや違ったルートを採った道路があったと考える。先に、奈良時代の「愛宕道」というべきものを検討したが、この道と11世紀以後の現西国街道との間に、平安時代前・中期の古西国街道が存在したと考える。平安京に都が移された後の古西国街道は、山崎道であり、山陽道である。

現在の西国街道を見ると、やや不自然な道筋をとる(第37図)。Ａは、平安京との接合点であるが、朱雀大路に一致し、桂川左岸のＢ・Ｃでやや不自然に南に曲がる。Ｂ・Ｃにおける屈曲は、最終的にＡ点に到達するための造作と考えられないであろうか。このように考えると、Ｃ点以東は平安京造営以後の新設道路と考えられる。Ｄの中久世集落などは奈良時代から引き続いて営まれるが、これは奈良時代の「愛宕道」が想定されたルート上であるが、ここで西に折れ、Ｅ・Ｆと、集落の分布しないところを西国街道が通っていく。ところがＣ－Ｄはほぼ一直線であり、これをそのまま延長するとＦもしくはＧ点に至る。Ｆ・Ｇのそれぞれの西側には、その延長線に「対応するような角度」で西国街道が造られている。さらに、この延長線上には、中福知遺跡・西小路遺跡が分布する。中福知遺跡は、第三次山城国府とも考えられている重要な遺跡で、この遺跡上を通過する点は重要である。これらの点から、元々の古西国街道及び愛宕道はＧもしくはＦから一直線にＤに通じていたのであろう。それが、11世紀以降にＥを通るように変更されたのであろう。Ｈは、今里道(＝古山陰道)との分岐点であり、ここを南下して百々遺跡を抜けて、山崎へと至る。

右京第96次調査では、開田遺跡で轍跡ＳＸ9604と轍群が検出されている(木村1984)。轍跡ＳＸ9604は、Ｎ－30～40°－Ｅで、長岡京整地層の下面にあり、確実に長岡京以前のものであるが、遺物の出土がほとんどなく、時期の決め手に欠いている。轍群は、長岡京廃都後のもので、Ｎ－60～70°－Ｅである。こういった遺構群は、古西国街道や愛宕道の方向にほぼ一致しており、こういった方向に規制されたとも考えられる。そうすると、愛宕道は、ＤからＦに通じていた可能性が高く、そのまま延長すると、奈良時代には開田城ノ内遺跡あたりで古山陰道と合流し、長法

寺集落に向かう西北への道と対称する関係になる。

以上を整理すると、古西国街道及び愛宕道は、山崎津からHを北上し、開田遺跡・開田城ノ内遺跡で東北に向かい、Fから中福知遺跡・乙訓郡衙を通ってDの中久世集落に入り、桂川を渡りCに至る。CからBを経てAに通じるのは、平安京の造営に伴って改造されたと考えられるが、奈良時代の愛宕道はF－D－Cがほぼ直線で通じているので、Cからそのまま直線的に京都盆地に入っていたのであろう。

このように、平安時代前中期の古西国街道は、基本的に奈良時代の愛宕道を踏襲している。長岡京の条坊が施工されたのはおよそEからHの範囲であるので、D以東とH以南の道は長岡京期にも廃されずにあったといえる。特に注目されるのは、廃都直後にはD－F間が旧来の道に復されている点である。これには、中久世遺跡が継続して営まれており、D－Cが廃されずに残っていたこと、長岡京廃都直後に成立した中福知遺跡の存在が大きいであろう。さらに、今里遺跡や井ノ内遺跡など、長岡京の造成によって一旦は廃された集落が、平安時代以後にも再び集落を形成しているので、長岡京の廃絶によって旧来の居住地に人々が戻ってきたのであろう。

このルートは現西国街道のルートに変更されるが、これは11世紀を下限と考えられる。足利氏の考えるように、長岡京の廃絶とともにその資材を平安京に運ぶための運搬路として成立したのがF～Dであり、Fで古物集女街道と合流した道が、そのまま南にのびて山崎方面と結びついたのであろう。平安時代前期には、このルートと古西国街道が併存していたのが、現西国街道のルートにとって替わられるのであろう。これには、百々遺跡の発掘調査では、10世紀後半頃に側溝の維持・管理がなされなくなり、路面幅も縮小している。このように、この段階で、社会情勢の変化のために、古西国街道の重要性が変化したことが予想され、こういったことと軌を一にしているのであろう。また、第三次山城国府とも考えられている中福知遺跡の動向などとも関わっているのであろう。

6．まとめ

以上、西国街道の考古学的な知見と遺跡の分布から奈良時代の交通路を復原し、文献史料をもとに、平安時代の京都と乙訓地域への交通路を検討した。これらをまとめると、

①集落などの分布から、奈良時代においては、古物集女街道、今里道、愛宕道が復原でき、今里道が古山陰道として機能していた。

②平安時代に成立した古西国街道は、山陽道・山崎道として、奈良時代の愛宕道を踏襲するものであった。

③平安時代に京都から乙訓方面に向かうのに用いられたのは、古西国街道の他に、川島回りの道(古物集女街道経由)があった。

④久我畷は、白河上皇の鳥羽離宮造営以後に、西国の情報を直接に取り入れるために造られた。

⑤西国街道が現在のように向日丘陵を経由するようになるのは、11世紀以後である。

といった点を指摘した。

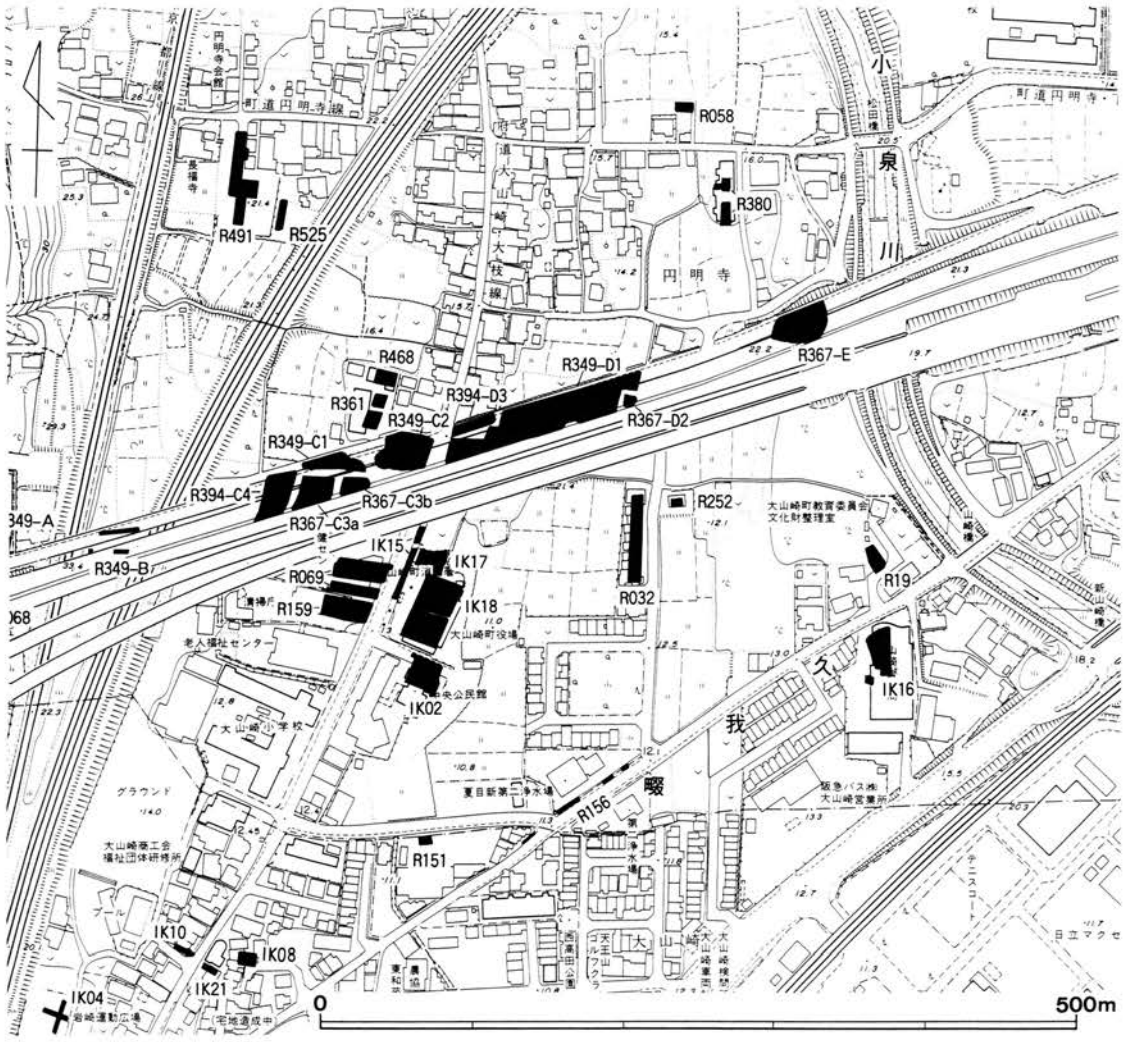
第４節　百々遺跡の評価について―山城国府説との関わり

百々遺跡は、南北約600m・東西約500mと広範囲に分布しており、過去の調査―特に長岡京跡右京第69次調査以来、第三次山城国府の位置に比定されてきた。

第三次山城国府は、延暦16(797)年の「山城国治を“長岡京南”に遷す。葛野郡の地勢狭隘なるを以ってなり。」(『日本紀略』)の記事により、葛野郡にあった第二次山城国府が平安京の建設のために手狭となり、廃都直後の“長岡京南”に移設されたことが知られている。その後、貞観３(861)年には、「山城国奏、河陽離宮、久不行幸、稍到破壊、請為国司行政処、但不廃旧宮名、行幸之日、将加掃除、許之、」(『日本三代実録』)と、山城国司から河陽離宮が使われていないのを国司行政処として用いることを請われ、これが許されている。この時点をもって、国府の政庁機能が河陽離宮(現JR山崎駅周辺に比定)に移されたと考えられている(第四次山城国府)。

従来、第三次山城国府の位置については、長岡京市神足近辺に比定する見解があった(木下1965)。しかし、右京第69次調査で平安時代前期の土器が多量に出土することや、百々遺跡が「長岡京南」に位置すること、河陽離宮に近接した位置にあることから、百々遺跡が第三次山城国府に比定された(百瀬ちどり1984)。さらに、百瀬氏は、現在に残る地割りをもとに、山崎津と平安京を直線的に結ぶ古代幹線道と推測されている久我畷によって東南角は欠落しているものの、方四町半の国府域を復原しており、この見解がある程度有力視されてきた。その後、長岡京を中心とする発掘調査の進展により、近年では平安時代初期の大形の掘立柱建物跡や瓦が多く出土する長岡京市久貝周辺(南栗ヶ塚遺跡)や、向日市上植野周辺(中福知遺跡)こそがその可能性があると指摘されている(中川1992)。さて、実際に発掘調査の面積が増加して資料が蓄積した現時点にあっては、百々遺跡が第三次山城国府であるという考えの妥当性は、考古学的にどの程度認められるのであろうか。

百々遺跡では多くの調査がなされており、百々遺跡内の過去の調査の位置とその内容を第38図及び付表18にまとめた。また、第三次国府に推定されている範囲を黒丸で図示した。まず、遺構の分布範囲を見ると、国府域の東辺に当たる右京第32次(林1984a)や右京第252次(林1996c)では、耕作土・床土下には砂礫層の堆積が確認されており、小泉川の旧流路の影響を受けている。この堆積土の中には、弥生時代から鎌倉時代の土器が含まれていた。また、西国街道と久我畷の合流点付近の右京第151次でも、床土以下、地表下1.7mまで湿地堆積層が続いていた(林1984d)。久我畷沿いの右京第156次でも湿地状堆積を確認しただけである(竹井1985)。遺跡確認調査第17・18次では、西国街道に面して建物跡や井戸を確認しているが、東側は遺構が疎らで、調査地の東に湿地が広がっている様相を呈している(『資料』1992・1993)。このように、国府推定地内の東及び南は、湿地状堆積が広がっており、関連遺構は確認できていない。こういったところにも本来は国府関連遺構が存在したのが、後世の洪水などで削平を受けたとも考えられなくはないが、そうだとしてもかなり水害の影響を受けやすい場所であったことには間違いない。国府推定地の西辺は、丘陵上もしくは裾に位置しており、遺跡確認調査第４次(林1982c)や右京第68次(林1984b)、今回報告の右京第349次Ａ・Ｂ地区では、いずれも顕著な遺構は確認されていない。こ



第38図　百々遺跡調査トレンチ位置図

のように、方四町半の国府推定域の西辺と東南部は全く関連遺構が確認されておらず、たとえ後世の削平によるためとしても、国府としてやや不適切な場所であったことには間違いない。平安時代の掘立柱建物跡や井戸などの遺構を確認しているのは、右京第349次のＤ１トレンチを除くと、ほぼ西国街道に面した範囲に限られ、その分布に偏りが見られる。しかも、平安時代の遺構が分布している西国街道沿いに限っても、大形の掘立柱建物跡は確認されておらず、小規模な掘立柱建物跡が密集している様相である。これらの掘立柱建物跡などの構築物の方位には“強力な規制”は働いておらず、この点でも官衙的な様相は見られない。さらに、これらの掘立柱建物跡に近接して、多くの井戸が検出されているのが大きな特色としてあげられよう。平安時代の井戸は、右京第367次Ｃ３a、右京第349次Ｄ１・Ｃ２、遺跡確認調査第10・17・18次、推定国府域を外れるが右京第491次で検出されている(林1996b・『資料』1992・1993・古閑1996a)。これらの井戸は官衙や大規模宅地に伴う井戸という様相ではなく、小規模な掘立柱建物跡とともに分布しており、小さな宅地が百々遺跡内に“分立”している状況である。９世紀前半、第三次山城国府の時期に限ってもその状況はほとんど同じで、右京第349次Ｄ１や右京第367次Ｃ３aトレンチで見られるように、やや広い範囲で掘立柱建物跡や井戸が分布しているが、遺構密度や小宅地的な

付表18　周辺調査一覧表

次数	主要遺構	出土遺物・備考	調査主体	報告
ＩＫ２	平安柵列・柱穴群	製塩土器多数出土	町教委	第3
ＩＫ４	顕著な遺構なし		町教委	第3
ＩＫ８	平安土坑・溝		町教委	第14
ＩＫ10	平安井戸・柱穴	巡方・鈹具	町教委	第14
ＩＫ15	平安溝・柵列	西国街道東側溝、土馬・斎串	府センター	府概42
ＩＫ16	弥生～飛鳥竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・土坑	算用田遺跡内・1m以上の河川堆積層（中近世）	府センター	府概53
ＩＫ17	平安井戸・掘立柱建物跡、古墳時代溝		町教委	資料
ＩＫ18	平安井戸・掘立柱建物跡・柵列、古墳時代溝		町教委	資料
ＩＫ21	平安西国街道路面・東側溝	Ｌ=10.44mで検出	町教委	年報Ｈ7
ＩＫ23	顕著な遺構なし		町教委	年報Ｈ7
Ｒ32	顕著な遺構なし	湿地堆積	町教委	第4
Ｒ58	中世石敷・土器溜まり		町教委	第2
Ｒ68	顕著な遺構なし		町教委	第4
Ｒ69	平安掘立柱建物跡・側溝	西国街道西側溝	町教委	第4
Ｒ151	顕著な遺構なし	地表下1.7mまで湿地状堆積	町教委	歴史と文化
Ｒ156	顕著な遺構なし		府センター	府概15
Ｒ159	平安土坑・溝・掘立柱建物跡	西国街道西側溝	町教委	資料
Ｒ192	平安旧河道・古墳時代竪穴式住居跡	算用田遺跡内	町教委	第9
Ｒ252	顕著な遺構なし	湿地堆積・河川堆積	町教委	第14
Ｒ349-Ｄ1	平安掘立柱建物跡・溝・井戸・土坑	西国街道東側溝	府センター	本報告
Ｒ349-Ａ	顕著な遺構なし		府センター	本報告
Ｒ349-Ｂ	顕著な遺構なし		府センター	本報告
Ｒ349-Ｃ1	中世流路・溝		府センター	本報告
Ｒ349-Ｃ2	平安掘立柱建物跡・溝・井戸・土坑、中世掘立柱建物跡	西国街道西側溝	府センター	本報告
Ｒ361	中世土坑・溝		町教委	第10
Ｒ367-Ｃ3a	平安掘立柱建物跡・井戸、中世掘立柱建物跡・井戸、古墳時代竪穴式住居跡		府センター	本報告
Ｒ367-Ｃ3b	中世区画溝		府センター	本報告
Ｒ367-Ｄ2	近世流路		府センター	本報告
Ｒ367-Ｅ	古墳時代竪穴式住居跡・流路		府センター	本報告
Ｒ380	溝	製塩土器・奈良時代土器	町教委	第11
Ｒ394-Ｃ4	中世掘立柱建物跡・井戸		府センター	本報告
Ｒ394-Ｄ3	平安掘立柱建物跡・溝	西国街道東側溝	府センター	本報告
Ｒ468	中世流路	難波宮式瓦・富壽神寳	町教委	未報告
Ｒ491	平安井戸・掘立柱建物跡	真東西を向く柵列・溝	町教委	年報Ｈ7
Ｒ525	平安掘立柱建物跡		町教委	年報Ｈ8

1 『資料』は説明会及び記者発表資料、第○は『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』、年報は『大山崎町文化財年報』、府概は『京都府遺跡調査概報』の略

2 ＩＫは大山崎町教育委員会の遺跡確認調査の略、Ｒは長岡京跡右京域の発掘調査次数

3 歴史と文化は『大山崎町の歴史と文化』の略

4 Ｒ468は大山崎町教育委員会よりご教示

様相から、第三次山城国府を積極的に主張するほどではない。

さて、百々遺跡が第三次山城国府でないとしたら、百々遺跡はどういった歴史的な背景を有していたのであろうか。ここで、百々遺跡の特徴を整理すると、

①長岡京廃都直後に西国街道が整備される。

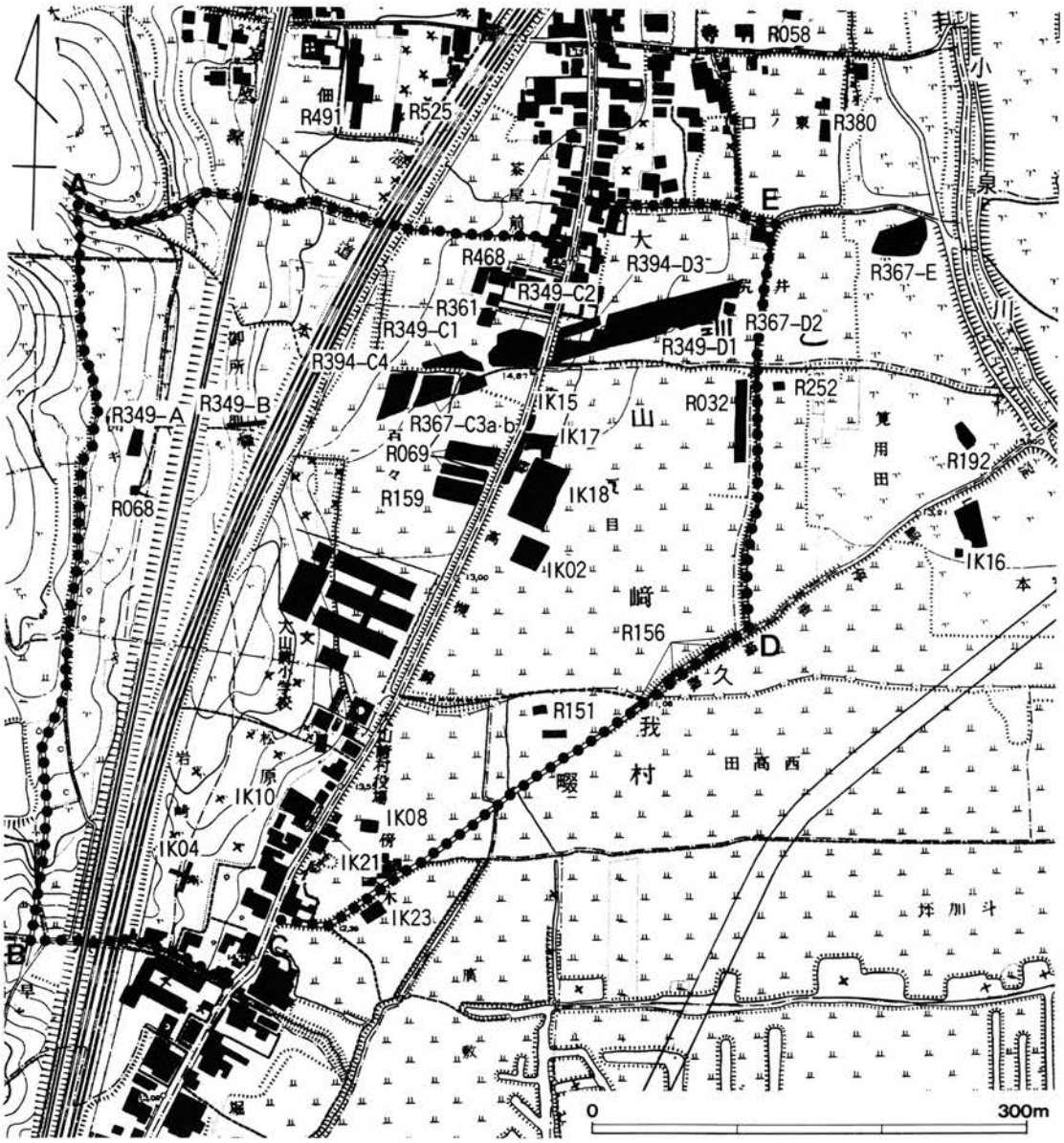
②9世紀から11世紀初頭にかけて小規模な宅地が分布するが、比較的広い範囲に分布するのは9世紀中頃までで、その後は西国街道に面した範囲に限られる。

③越州窯や長沙窯などの“貴重な”中国製陶磁器が出土する。

④巡方や蛇尾裏金具、硯、転用硯、墨書土器などが多く出土する。

⑤土馬や斎串など、“都城的”な祭祀用具が出土する。

といった点が挙げられる。①は、平安京から西国へと向かう山陽道の整備として理解される。さらに、平安時代前・中期における山崎駅・津・離宮などの存在も無視できない。このように、平



第39図　第三次山城国府推定地と調査トレンチ配置図(A・B・C・D・E.第三次山城国府比定地)

安時代には山崎の地には津や離宮、駅などの公的な施設が置かれており、②～⑤の点から、いわゆる民間人ではなく、律令貴族やそこに勤める官人が住む宅地であったと推測される。前節で見たように、西国街道は当初は平安京と山崎津を結ぶ幹線道(山陽道)として整備され、淀津が平安京の外港として位置づけられると、山崎津の重要性が減じた。この歴史的な事情のため、9世紀中頃以降には、百々遺跡で宅地に供される範囲が減少したのであろう。とはいっても、山崎津は山陽道上に位置していることからすぐに廃されることはなく、9世紀中頃以降にも交通の要衝地として繁栄し、それゆえ第四次山城国府が置かれたりしたのであろう。百々遺跡に見られるように、9世紀中頃以降に宅地の範囲が西国街道沿いに限られるのも、そういった歴史の脈絡の中で理解できよう。

(岩松　保)

秋山浩三　1991　「長岡宮跡第233次(7AN110地区)～北辺官衙(南部)、森本遺跡、岸ノ下遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第32集　(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会
足利健亮　1983　「国府と古道」『向日市史』上巻　向日市
『向日市史』史料編　向日市　1988
石尾政信　1996　「集落と道」『京都府埋蔵文化財論集』第3集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
伊野近富　1995　「土師器皿」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編　真陽社
今井修平　1983　「産業と人々のくらし」『大山崎町史』本文編　大山崎町役場
岩崎　誠　1986　「長岡京跡右京第163次(7ANMKI地区)調査概要―右京六条一坊四町・勝龍寺城跡・神足遺跡・神足古墳」『長岡京市文化財調査報告書(1986)』第17冊　長岡京市教育委員会
岩崎　誠　1996　「右京第490次(7ANLMR地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成6年度　(財)長岡京市埋蔵文化財センター
大橋康二　1989　『肥前陶磁　考古学ライブラリー』55　(株)ニュー・サイエンス社
小田桐淳　1985　「右京第176次(7ANLND地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和59年度　(財)長岡京市埋蔵文化財センター
小田桐淳　1989　「右京第278次(7ANLTR-2地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和62年度　(財)長岡京市埋蔵文化財センター
小田桐淳　1991　「左京第230次(7ANMJN地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度　(財)長岡京市埋蔵文化財センター
木下　良　1965　「古代集落と交通路――律令都市特に国府の形態について」『社会科学』1-1　同志社大学人文科学研究所
木村泰彦　1984　「長岡京跡右京第96次調査概要(7ANKUT-4)」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集　(財)長岡京市埋蔵文化財センター
黒坪一樹他　1991　「百々遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第42冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
古閑正浩　1996a　「長岡京跡右京第491次(7ANSTD地区)調査略報」『大山崎町文化財年報』平成7年度　大山崎町教育委員会
古閑正浩　1996b　「大山崎町第23次遺跡確認調査(7YYMS'HK-3地区)略報」『大山崎町文化財年報』平成7年度　大山崎町教育委員会
古閑正浩　1997a　「長岡京跡右京第525次(7ANSTD-2地区)調査略報」『大山崎町文化財年報』平成8年度

大山崎町教育委員会
古閑正浩　1997b　『百々遺跡における道路の敷設と建物の造作―成立期の様相を中心に―』　長岡京連絡協議会資料報告
小森俊寛　1994　「概説」『古代の土器　都城の土器集成』Ⅲ　古代の土器研究会編
小森俊寛・上村憲章　1996　「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　(財)京都市埋蔵文化財研究所
鋤柄俊夫　1995　「各地の瓦質土器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社
竹井治雄　1985　「長岡京跡右京第156次発掘調査概要(7ANSNM地区)」『京都府遺跡調査概報』第15冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
戸原和人　1985　「長岡京跡左京第53次(7ANMSB地区)調査概要――左京六条二坊五・十二町・下八ノ坪遺跡・久我畷――」『長岡京市文化財調査報告書』第14冊　長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所
戸原和人他　1990　「長岡京跡左京第216次・右京第343次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第40冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
戸原和人他　1992a　「長岡京跡左京第216・241・242次、右京第349・357次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第47冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
戸原和人他　1992b　「名神高速道路関係遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第51冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
戸原和人他　1994　「名神高速道路関係遺跡平成４年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第57冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
戸原和人　1996　「名神高速道路関係遺跡平成６年度発掘調査概要　長岡京跡右京第466次　下植野工区Ｃ－６地区(7ANTTD-5)」『京都府遺跡調査概報』第69冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
中井淳史　1994　「畿内土器様相の中世的特質」『中近世土器の基礎研究』Ｘ　日本中世土器研究会
中尾秀正　1996　「古道と村落」『長岡京市史』本文編１　長岡京市役所
『長岡京市史』資料編２　長岡京市役所　1992
中川和哉　1992　「第三次山城国府跡に関する新提言――平安時代の瓦が出土する遺跡」『長岡京古文化論叢』Ⅱ　中山修一先生喜寿記念事業会
中川和哉　1993　「算用田遺跡発掘調査概要(IK-16)」『京都府遺跡調査概報』第53冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
中島皆夫　1991　「左京第235次(7ANLRB-2地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度　(財)長岡京市埋蔵文化財センター
中塚　良　1993　「長岡宮跡第270次(7AN12M地区)～北辺官衙(南部)、岸ノ下遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第36集　(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会
林　亨　1982a　「長岡京跡右京第58次(7ANSSG地区)発掘調査・遺物整理概要」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第２集　大山崎町教育委員会
林　亨　1982b　「大山崎町第２次遺跡確認調査(7YYMS′NM-Ⅱ地区)発掘調査概要」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第３集　大山崎町教育委員会
林　亨　1982c　「大山崎町第４次遺跡確認調査(7YYMS′IS地区)発掘調査概要」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第３集　大山崎町教育委員会
林　亨　1984a　「長岡京跡右京第32次(7ANSNM-I地区)発掘調査概要」『大山崎町文化財調査報告書』第４集　大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所
林　亨　1984b　「長岡京跡右京第68次(7ANSGE地区)発掘調査概要」『大山崎町文化財調査報告書』第４集

大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所
林　亨他　1984c　「長岡京跡右京第69次(7ANSDD地区)発掘調査概要」『大山崎町文化財調査報告書』第4集　大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所
林　亨　1984d　「長岡京跡右京第151次(7ANS′ND地区)発掘調査概要」『昭和58年度埋蔵文化財発掘調査概要報告　大山崎町の歴史と文化』　大山崎町教育委員会
『長岡京跡右京第159次(7ANSDD-2地区)現地説明会資料』大山崎町教育委員会　1984
林　亨　1991　『算用田遺跡　右京第192次発掘調査概報　大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第9集　大山崎町教育委員会
林　亨　1991　「長岡京跡右京第361次(7ANSCE2地区)発掘調査概要」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第10集　大山崎町教育委員会
林　亨　1992　「山陽道の復元」『長岡京古文化論叢』Ⅱ　中山修一先生喜寿記念事業会
林　亨　1993　「長岡京跡右京第380次(7ANSHC地区)発掘調査概要」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第11集　大山崎町教育委員会
林　亨　1996a　「第8次遺跡確認調査概要」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第14集　大山崎町教育委員会
林　亨　1996b　「第10次遺跡確認調査概報」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第14集　大山崎町教育委員会
林　亨　1996c　「長岡京跡右京第252次発掘調査概報」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第14集　大山崎町教育委員会
林　亨　1996d　「大山崎町第21次遺跡確認調査(7YYMS′HK-2地区)略報」『大山崎町文化財年報』平成7年度　大山崎町教育委員会
原　秀樹　1997　「右京第513次(7ANKKC地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成7年度　(財)長岡京市埋蔵文化財センター
宮崎康雄　1990　「郡家今城遺跡(89-2)の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要』14　高槻市教育委員会
百瀬ちどり　1984　「長岡京跡右京第69次(7ANSDD地区)発掘調査概要　遺跡の性格と第3次山城国府の問題」『大山崎町文化財調査報告書』第4集　大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所
百瀬正恒　1984　「長岡京跡右京第69次(7ANSDD地区)発掘調査概要　出土遺物」『大山崎町文化財調査報告書』第4集　大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所
百瀬正恒　1985　「平安京及び近郊における土器の生産と消費」『中近世土器の基礎研究』　日本中世土器研究会
百瀬正恒　1995　「各地の土器様相　近畿　京都」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社
森島康雄・尾上　実・近江俊秀　1995　「瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社
森田　稔　1995　「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社
渡辺　博　1989　「長岡宮跡第184次(7AN13H地区)～朝堂院北西官衙発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第36集　(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会
『第17次遺跡確認調査記者発表資料』　大山崎町教育委員会　1992
『第18次遺跡確認調査(7YYMSNM-6)』(説明会資料)　大山崎町教育委員会　1993
古代の土器研究会編『都城の土器集成』Ⅰ・Ⅲ(1992・1994)

付表19　出土土器観察表

実測番号	トレンチ	器種	器形	出土遺構	残存率	口径	器高	底径	調整(内)	調整(外)	色調(内・外)	焼成	胎土	備考
1	C 4	土師器	Ⅲ	SE394001	1／9	(7.0)	0.8		ナデ	ナデ	乳白色	良	精良	
2	C 4	土師器	Ⅲ	SE394001	1／4	(7.8)	0.9		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶色	良	良	
3	C 4	土師器	Ⅲ	SE394001	1／8	(13.6)	1.3		ナデ	ナデ・指オサエ	淡褐色	良	良 0.5mm赤砂粒多	
4	C 4	須恵器	ねり鉢	SE394001	1／15	(27.4)	(2.8)		ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	良	
5	C 4	瓦質土器	羽釜の脚部	SE394001			(17.4)		ナデ	ナデ	灰色	硬	良 1mm砂粒	
6	C 4	土師器	Ⅲ	SE394003	1／2	(10.0)	1.6		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良	
7	C 4	土師器	Ⅲ	SE394003	ほぼ完形	9.0	1.5		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良	
8	C 4	土師器	Ⅲ	SE394003	2／3	(15.0)	2.7		ナデ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良 砂粒多	
9	C 4	土師器	Ⅲ	SE394003	1／2	(15.0)	2.9		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良 1mm砂粒多	
10	C 4	土師器	Ⅲ	SE394003	1／2	(15.4)	2.3		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	乳白色	やや軟	精良	
11	C 4	土師器	高台	SE394003	1／3	－	(3.6)	(9.5)	ロクロナデ	ナデ	淡赤褐色	良	やや粗 4mm白細粒多	
12	C 4	瓦器	Ⅲ	SE394003	完形	9.7	2.5	5.0	ナデ・指オサエ	回転ナデ	黒灰色	良	精良	輪高台貼り付け
13	C 4	瓦器	椀	SE394003	1／4	(14.8)	(4.9)	－	ミガキ	ミガキ・ナデ・指オサエ	暗黒灰色	良	精良	
14	C 4	土師器	Ⅲ	SK394004	1／6	(7.6)	1.7		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 極砂粒多	
15	C 4	土師器	Ⅲ	SK394004	1／4	(10.4)	1.7		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 極砂粒	
16	C 4	土師器	Ⅲ	SK394004	1／3	(9.4)	1.7		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 1mm砂粒多	
17	C 4	土師器	Ⅲ	SK394004	1／6	(10.0)	1.5		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 1mm赤砂粒多	
18	C 4	瓦器	椀	SK394004	1／3	(12.2)	(4.1)	(4.4)	ミガキ・ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡灰褐色	良	精良 1mm砂粒多	
19	C 4	瓦器	椀	SK394004	1／2	(12.0)	(3.9)	－	ミガキ・ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	灰色	良	精良 1mm砂粒	
20	C 4	瓦器	椀	SK394004	1／5	(12.2)	4.1	(5.4)	ミガキ・ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	黒色	良	精良 1mm白砂粒	
21	C 4	瓦質土器	鍋	SK394004	1／3	(28.2)	(10.0)		ナデ	指オサエ	淡茶褐色 黒灰色	良	良	外面スス付着
22	C 4	瓦質土器	鍋	SK394004	1／2	30.0	13.7		ナデ・指オサエ	指オサエ	淡黄褐色	良	精良	外面スス付着
23	C 4	瓦質土器	鍋	SK394004	3／4	24.0	(10.0)		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色 茶褐色	良	良 1mm砂粒	外面スス付着・器高は上・下の和

24	C 4	土師器	皿	P75	1／7	(7.2)	1.0		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	茶	良	良	
25	C 4	土師器	皿	P70	ほぼ完形	8.0	1.0		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良	
26	C 4	土師器	皿	P105	4／5	7.4	1.9		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	橙色	良	良	
27	C 4	土師器	皿	SB394010	1／5	(6.8)	1.2		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	肌色	良	良 1.5mm 赤砂粒多	北西隅ピット
28	C 4	土師器	皿	SB394009	1／12	(9.8)	(1.7)		ナデ	ナデ	淡黄褐色	良	良	南西隅ピット
29	C 4	土師器	皿	SB394009	完形	8.8	1.4		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 1mm 褐砂粒多	南辺中央ピット
30	C 4	瓦器	椀	P57	1／8	(13.2)	(4.5)	—	ミガキ	ミガキ・指オサエ	灰色	良	精良	
31	C 4	白磁	椀	P60	1／4	(18.5)	(5.2)	—	不詳	ロクロケズリ	淡緑灰色	堅緻	精良	口縁は玉縁状・白磁椀Ⅳ類
32	C 4	白磁	小型椀	P60	1／2	(9.6)	2.7	(3.0)	不詳	ロクロケズリ・ミガキ	淡緑灰色	堅緻	精良	糸切り底
33	C 4	須恵器	甕(口縁欠損)	SK394007	体部のみほぼ完形	最大腹径47.0	(38.0)		タタキ	タタキ	暗青灰色	硬	良 3mm 細粒多	
34	C 4	須恵器	蓋	SK394006	1／2	(9.2)	2.9		ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	良	
35	C 4	須恵器	蓋	SK394006	4／5	10.8	3.4		ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	良	
36	C 4	土師器	甕	SK394006	1／2	(20.8)	(25.7)		ナデ・指オサエ	ナデ・ハケ目	淡黄褐色	良	良 2mm 黒、茶、白、灰細粒多	黒斑有り
37	C 4	土師器	皿	包含層	1／6	(12.2)	2.2		ナデ	ナデ	淡赤褐色	硬	良 1.5mm 赤砂粒多	SK394008の上層から検出
38	C 4	黒色土器	椀	包含層	1／6	(15.3)	5.2	(5.6)	ミガキ	ミガキ	黒色	良	精良	SK394008の上層から検出・内外面黒色
39	C 4	土師器	鍋	包含層	1／5	(24.0)	(8.4)		ナデ	指オサエ	黄褐色 黒灰色	良	精良	外面スス付着 SK394008の上層から検出
40	C 4	須恵器	杯蓋	包含層	1／2	(9.6)	2.4		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ	灰色	硬	良 1mm 白砂粒少	
41	C 4	須恵器	壺(口縁底部欠損)	包含層	1／8 (体部)	最大腹径 (17.8)	(7.5)		ロクロナデ	ヘラケズリ	濃灰色	硬	良 1mm 白砂粒	沈線と櫛描き列点文・自然釉・SK394008の上層から検出

42	C3a	土師器	Ⅲ	SE36712	1／4	(10.0)	1.2		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良 1mm砂粒	
43	C3a	土師器	Ⅲ	SE36712	ほぼ完形	11.2	2.0		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良 1～3mm赤褐色細粒多	
44	C3a	瓦質土器	羽釜	SE36712	1／8	(22.0)	(4.4)		ナデ	ナデ	暗灰色	良	精良	ツバの下面に炭化物付着
45	C3a	瓦質土器	甕	SE36712	4／5（口縁肩部）	30.8	(9.8)		ナデ	タタキ・ナデ	濃灰色	良	やや粗 3～4mm細粒多	
46	C3a	青磁	椀	SE36712	2／5	(8.6)	4.9	3.3	不詳	不詳	灰緑色	堅緻	精良	外面に蓮弁文を施す・墨付着（底部）
47	C3a	白磁	Ⅲ	SE36712	4／5	12.1	2.9	6.5	不詳	不詳	淡緑灰色	堅緻	精良	口剝げ・墨付着（口縁端部 底部）白磁ⅢⅨ類・中国南部産
48	C3a	白磁	壺（口縁底部欠損）	SE36712	1／3（体部）	最大腹径 (32.0)	(20.0)	－	不詳	不詳	淡緑灰色	堅緻	精良	四耳壺・中国南部産
49	C3a	土師器	Ⅲ	SE36713	1／5	(6.2)	1.0		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良	
50	C3a	土師器	Ⅲ	SE36713	1／8	(11.0)	0.9		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 1mm砂粒	
51	C3a	土師器	Ⅲ	SE36713	ほぼ完形	8.0	1.4		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良	
52	C3a	土師器	Ⅲ	SE36713	1／6	(10.4)	1.9		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	硬	良	
53	C3a	土師器	Ⅲ	SE36713	1／4	(11.8)	1.6		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 2mm細粒	
54	C3a	土師器	Ⅲ	SE36713	1／3	11.8	2.1		ナデ	ナデ・指オサエ	淡褐色	良	良 3mm白、赤細粒	
55	C3a	土師器	Ⅲ	SE36713	4／5	12.0	2.1		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡褐色	良	良	
56	C3a	土師器	Ⅲ	SE36713	ほぼ完形	11.6	2.5		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良	
57	C3a	瓦器	椀	SE36713	1／4	(10.2)	3.2	(4.0)	ミガキ・ナデ	ナデ・指オサエ	暗黒灰色	良	精良	
58	C3a	瓦器	椀	SE36713	1／3	(12.8)	(3.9)	－	ミガキ	ナデ・指オサエ	暗黒灰色	良	精良	
59	C3a	瓦器	椀	SE36713	1／2	(12.6)	4.4	4.4	圏線ミガキ	ナデ・指オサエ	灰褐色	良	精良	口縁端部スス付着
60	C3a	瓦器	椀	SE36713	ほぼ完形	12.2	4.0	4.2	ミガキ	ナデ・指オサエ	黒色	良	精良	
61	C3a	瓦器	椀	SE36713	3／5	(14.2)	4.9	4.6	ミガキ	ナデ・指オサエ	黒色	良	精良	
62	C3a	瓦器	椀	SE36713	1／2	(13.4)	(3.8)	－	ミガキ	ナデ・指オサエ	暗黒灰色	硬	精良	
63	C3a	瓦器	椀	SE36713	1／3	(12.8)	3.5	(6.2)	ミガキ	指オサエ・磨耗	暗黒灰色	良	精良	

64	C3a	須恵器	杯	SE36713	1／3	(17.4)	5.4	(12.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	やや軟	精良	
65	C3a	須恵器	ねり鉢の底部	SE36713	底部完形	—	(7.4)	10.0	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	灰白色	やや軟	良	口縁端部内外面スス付着・東播系(神出)・内面使用で磨耗
66	C3a	白磁	椀	SE36713	1／5(底部)	—	(3.3)	(6.6)	ロクロケズリ	ロクロケズリ	明灰色	堅緻	精良	中国製・高台底部釉なし・Ⅳ類
67	C3a	白磁	Ⅲ	SE36713	1／8	(11.0)	(2.6)	—	不詳	不詳	乳白色	堅緻	精良	中国製
68	C3a	土師器	Ⅲ	SE36710	完形	9.2	1.9		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良	
69	C3a	土師器	Ⅲ	SE36710	1／8	(13.0)	(2.3)		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	
70	C3a	土師器	Ⅲ	SE36710	1／3	(15.4)	2.8		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡黄茶褐色	良	良	
71	C3a	瓦器	椀	SE36710	完形	14.0	5.5	5.6	ミガキ	ナデ・指オサエ・ミガキ	暗黒灰色	良	精良	
72	C3a	瓦器	椀	SE36710	1／12	(14.0)	4.3	(5.2)	ミガキ	ナデ・指オサエ	黒灰色	良	精良	
73	C3a	瓦器	椀	SE36710	1／5	(14.6)	(4.2)	—	ミガキ	ナデ・指オサエ・ミガキ	黒褐色	良	精良	
74	C3a	瓦器	椀	SE36710	2／3	15.1	4.9	5.6	ミガキ	ナデ・指オサエ	黒灰色	良	精良	
75	C3a	瓦器	椀	SE36710	1／3	(14.6)	4.7	(5.6)	ミガキ	ミガキ・ナデ・指オサエ	灰色	良	精良	
76	C3a	土師器	Ⅲ	P66	1／3	(7.4)	1.6		ナデ	ナデ	淡橙褐色	良	良	
77	C3a	土師器	Ⅲ	SK36718	4／5	8.2	1.4		ナデ	ナデ・指オサエ	橙褐色	良	良	
78	C3a	土師器	Ⅲ	P44	9／10	8.0	1.0		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	橙茶褐色	良	良	
79	C3a	土師器	Ⅲ	SB36704	1／7	(8.6)	1.2		ナデ	ナデ	橙色	良	良	口縁端部にスス付着・北辺中央
80	C3a	土師器	Ⅲ	SB36704	1／4	(8.4)	0.8		ナデ	ナデ	淡褐色	良	良	東辺中央
81	C3a	土師器	Ⅲ	P187	1／3	(9.8)	1.2		ナデ	ナデ	淡赤褐色	良	良 0.5mm茶砂粒微	
82	C3a	土師器	Ⅲ	P37	1／2	(9.5)	1.2		ナデ	ナデ	淡黄褐色	良	良 1.5mm赤細粒少	
83	C3a	土師器	Ⅲ	P37	1／10	(10.0)	1.9		ナデ	ナデ	赤褐色	良	良	
84	C3a	土師器	Ⅲ	P86	1／6	(10.0)	1.1		ナデ	ナデ	橙色	良	良 1mm茶、黒砂粒少	

85	C 3 a	土師器	Ⅲ	P188	完形	9.8	1.5		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良 砂粒多	
86	C 3 a	土師器	Ⅲ	SK36711	完形	10.6	1.6		指オサエ・磨滅	ナデ・磨滅	淡赤褐色	良	良 1mm 褐砂粒多	
87	C 3 a	土師器	Ⅲ	P34	1／5	(11.0)	1.9		ナデ	ナデ	淡黄褐色	良	良 1mm 白、灰砂粒少	
88	C 3 a	土師器	Ⅲ	SB36702	1／3	(12.0)	1.5		ナデ	ナデ	橙褐色	良	良 2mm 赤細粒多	北東隅
89	C 3 a	土師器	Ⅲ	P34	1／8	(13.2)	1.9		ナデ	ナデ	乳褐色	良	良 2mm 赤細粒多	
90	C 3 a	土師器	Ⅲ	SB36702	1／6	(17.6)	(2.3)		ナデ・指オサエ	ナデ	乳褐色	良	良	北東隅
91	C 3 a	土師器	Ⅲ	P10	ほぼ完形	14.3	2.2から3.3		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡橙灰色	良	良	北西隅柱穴
92	C 3 a	土師器	Ⅲ	P34	1／2	(14.0)	2.5		ナデ	ナデ	乳茶褐色	良	良	
93	C 3 a	土師器	Ⅲ	SB36702	1／3	(14.2)	3.1	－	ナデ	ナデ・指オサエ	淡橙褐色	良	良 1から2mm 褐砂粒多	北東隅
94	C 3 a	土師器	Ⅲ	SB36702	1／2	14.3	2.7		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡黄褐色	良	良 1から2mm 黒褐砂粒多	北東隅
95	C 3 a	瓦器	椀	SB36705	1／8	(12.0)	(3.0)	－	磨滅	ナデ・磨滅	淡黄褐色	やや軟	粗 0.5mm 白、灰、茶砂粒少	南東隅
96	C 3 a	瓦器	椀	SB36704	1／10	(14.0)	(3.8)	－	ミガキ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡黒灰色	良	精良	東辺中央
97	C 3 a	瓦器	椀	SK36719	1／5	(15.6)	(4.5)	－	磨滅	指オサエ・磨滅	灰色	やや軟	精良	
98	C 3 a	瓦器	椀	SB36702	1／8	(13.2)	4.7	(4.0)	磨滅	磨滅	淡赤褐色	やや軟	精良	北東隅・二次焼成を受ける
99	C 3 a	瓦器	椀	SB36702	3／5	12.6	(4.3)	－	磨滅・ミガキ	ナデ	濃灰色	良	精良	北東隅
100	C 3 a	瓦器	椀	P16	1／3	(14.8)	(4.3)	－	磨滅	ナデ・指オサエ・磨滅	暗黒灰色	やや軟	良 1mm 白、灰砂粒少	
101	C 3 a	瓦器	椀	P16	1／3	(14.4)	5.7	(5.5)	ナデ・ミガキ	ナデ・指オサエ	暗黒灰色	やや軟	精良	
102	C 3 a	白磁	椀	P37	1／8	(16.8)	(4.8)	－	不詳	不詳	明灰色	堅緻	精良	白磁椀Ⅳ類
103	C 3 a	青磁	椀	P44	1／8	(16.8)	(4.8)	－	ロクロケズリ・不詳	ロクロケズリ・不詳	淡青緑色	堅緻	精良	外面に蓮弁文を施す・龍泉窯系
104	C 3 a	土師器	Ⅲ	SE36714	1／5	(13.8)	2.1		ナデ	ナデ・ケズリ	赤褐色	良	良	
105	C 3 a	土師器	Ⅲ	SE36714	1／3	(14.4)	2.2		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	

106	C 3 a	土師器	杯	SE36714	1／2	(14.0)	3.1		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	茶褐色	良	良 1mm 褐砂粒多	
107	C 3 a	土師器	杯	SE36714	1／4	(16.6)	3.9		ナデ・指オサエ	ナデ・ケズリ・指オサエ	淡茶褐色	良	良	
108	C 3 a	黒色土器	椀	SE36714	1／8	(16.0)	(4.4)	－	ミガキ	ミガキ・ナデ	黒色	良	良 3mm 白細粒微	
109	C 3 a	須恵器	蓋	SE36714	1／3	(13.1)	(1.6)		ロクロナデ	ケズリ・ロクロナデ	青灰色	良	精良	
110	C 3 a	須恵器	杯蓋	SE36714	1／8	(19.4)	(1.4)		ロクロナデ	ロクロナデ	淡青灰色	硬	良	
111	C 3 a	須恵器	蓋	SE36714	1／10	－	(2.6)		ロクロナデ	ロクロナデ	淡青灰色	硬	良 1.5mm 白砂粒少	外面に自然釉
112	C 3 a	須恵器	蓋	SE36714	1／3	(8.8)	(1.2)		ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良	外面自然釉
113	C 3 a	須恵器	壺	SE36714	1／3 (口縁)	(6.8)	(4.9)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	灰褐色	硬	良	自然釉
114	C 3 a	須恵器	壺	SE36714	1／2 (底部)	－	(2.9)	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良 2mm白細粒微	
115	C 3 a	瓦質土器	羽釜	SX36714	1／14	(22.0)	(4.6)		磨滅・ナデ	磨滅・ケズリ・沈線有り	黒灰色	やや軟	良 2mm 灰細粒少	
116	C 3 a	土師器	皿	SK36711	2／5	(14.8)	3.2		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良	混じり込み
117	C 3 a	須恵器	皿	SB36706	1／10	(15.6)	1.7	(12.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	良	
118	C 3 a	土師器	甑	SH36717 カマド内	1／3	(21.6)	(11.0)		磨滅・指オサエ	磨滅	赤褐色	良	良 2mm 黒、灰、白、赤細粒多	
119	C 3 a	須恵器	蓋	SH36717 カマド内	2／3	10.8	3.6		ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	良 砂粒多	
120	C 3 a	須恵器	杯身	SH36717	1／2	(9.0)	4.3		ロクロナデ	ロクロナデ・頂部ロクロケズリ	淡茶褐色	良	良	底部特に焼けが甘い
121	C 1	土師器	皿	SR34901	1／3	(8.2)	1.5		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡橙灰色	良	良 1mm 赤砂粒多	
122	C 1	土師器	皿	SR34901	1／6	(9.0)	1.4		ナデ	ナデ	淡赤褐色	良	精良	
123	C 1	土師器	皿	SR34901	1／2	(9.8)	1.7		ナデ	ナデ・指オサエ	橙色	良	良 0.5mm 赤砂粒多	
124	C 1	土師器	皿	SR34901	1／4	(8.8)	1.3		ナデ	ナデ・指オサエ	橙色	良	良 1mm 灰砂粒少	
125	C 1	土師器	皿	SR34901	1／4	(8.6)	1.3		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	やや軟	精良	
126	C 1	土師器	皿	SR34901	4／5	9.4	1.6		ナデ	ナデ・指オサエ	淡灰褐色	良	精良	

127	C 1	土師器	皿	SR34901	2／3	9.6	1.7		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡黄褐色	良	良	
128	C 1	土師器	皿	SR34901	完形	9.6	1.8		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡乳褐色	良	良	
129	C 1	土師器	皿	SR34901	ほぼ完形	9.6	2.0		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良	
130	C 1	土師器	皿	SR34901	1／4	(7.8)	0.9		ナデ	ナデ	橙色	良	良 1mm 赤砂粒少	
131	C 1	土師器	皿	SR34901	1／8	(10.8)	1.3		ナデ	ナデ	橙色	良	精良	
132	C 1	土師器	皿	SR34901	1／8	(11.0)	2.5		ナデ	磨滅	淡赤褐色	良	良 1mm 赤砂粒多	
133	C 1	土師器	皿	SR34901	1／5	(13.6)	3.0		ナデ	ナデ	茶褐色	良	精良	
134	C 1	土師器	皿	SR34901	2／3	14.2	3.0		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡黄褐色	良	良 0.5mm 砂粒多	
135	C 1	土師器	皿	SR34901	2／3	14.8	2.9		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	橙灰色	良	良 1mm 砂粒少	
136	C 1	土師器	皿	SR34901	1／10	(14.0)	2.7		ナデ・指オサエ	ナデ	茶色	良	良 2mm 黒、茶細粒少	
137	C 1	土師器	皿	SR34901	1／4	(15.4)	(2.7)		ナデ	ナデ	淡赤褐色	良	良 1.5mm 赤砂粒多	
138	C 1	土師器	皿	SR34901	1／8	(14.2)	3.0		ナデ	ナデ	橙色	良	良 1mm 赤砂粒多	
139	C 1	土師器	皿	SR34901	1／2	(15.4)	2.5		ナデ	ナデ	淡赤褐色	良	精良	
140	C 1	土師器	皿	SR34901	1／2	14.6	2.8		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡黄褐色	良	精良	
141	C 1	土師器	皿	SR34901	ほぼ完形	15.0	2.7		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡黄褐色	良	精良	底部に径2～3cmの穿孔
142	C 1	土師器	皿	SR34901	ほぼ完形	14.3	2.9		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡黄褐色	良	精良	底部に径2～3cmの穿孔
143	C 1	土師器	皿	SR34901	1／6	(16.0)	(2.5)		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	橙褐色	良	良・粗粒砂	
144	C 1	瓦器	椀	SR34901	1／4	(16.2)	(4.2)		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	橙灰色	良	良 2mm 赤、白細粒多	
145	C 1	瓦器	椀	SR34901	1／6	(15.2)	(4.0)	－	圏線ミガキ・沈線跡(口縁部)	指オサエ・ミガキ	暗黒灰色	良	精良	
146	C 1	瓦器	椀	SR34901	1／3 (底部完形)	(15.6)	5.0	5.1	磨滅・ミガキ跡	磨滅・指オサエ跡	黒灰色	良	精良	
147	C 1	瓦器	椀	SR34901	1／3	(16.0)	5.0	6.4	ミガキ	ナデ・指オサエ・ミガキ	灰色	良	精良	
148	C 1	瓦器	椀	SR34901	1／3	(15.2)	5.0	5.6	ミガキ	ミガキ・指オサエ	黒灰色	良	精良	
149	C 1	瓦器	椀	SR34901	1／8	(15.6)	(4.3)	－	圏線ミガキ	ナデ・指オサエ・圏線ミガキ	暗黒灰色	良	精良	

150	C 1	瓦器	椀	SR34901	ほぼ完形	15.3	5.3	6.2	ミガキ	磨滅・指オサエ	暗灰色	良	精良	
151	C 1	瓦器	椀	SR34901	1／3	(14.4)	(4.0)	—	圏線ミガキ・沈線跡(口縁部)	ミガキ・指オサエ	暗黒灰色	良	良 1mm黒砂粒少	
152	C 1	瓦器	椀	SR34901	1／5	(18.0)	(4.8)	—	圏線ミガキ・沈線(口縁部)	ナデ・指オサエ	淡乳褐色	やや軟	精良	二次焼成
153	C 1	瓦器	椀	SR34901	ほぼ完形	15.4	(5.5)	ほぼ5.6	ミガキ	ミガキ・指オサエ	暗黒灰色	良	精良	高台剝離
154	C 1	瓦器	椀	SR34901	ほぼ完形	15.2	(5.3)	ほぼ4.0	ミガキ	ミガキ・ナデ・指オサエ	暗黒灰色	良	精良	高台剝離
155	C 1	瓦質土器	盤	SR34901	1／4	(50.0)	11.5	(38.0)	ナデ	ナデ・指オサエ	黒褐色茶褐色	良	やや粗1.5mm赤、茶、白、黒、灰砂粒	炭化物付着・底部に植物繊維の跡
156	C 1	須恵器	杯底部	SR34901	1／4(底部)	—	(2.5)	(10.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	精良	
157	C 1	須恵器	壺底部	SR34901	1／5(底部)	—	(5.9)	(13.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	やや粗・2mm灰、白細粒少	輪高台
158	C 1	須恵器	皿・壺？底部	SR34901	底部完形	—	(1.5)	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良	底部回転糸切り底
159	C 1	須恵器	ねり鉢	SR34901	1／5	(24.0)	(9.0)	—	ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	灰褐色	硬	良 2mm茶、灰細粒	
160	C 1	白磁	椀	SR34901	1／10	(15.5)	(4.6)	—	不詳	不詳	淡乳灰色	堅緻	精良	白磁椀Ⅳ類
161	C 1	白磁	椀底部	SR34901	底部完形	—	(6.0)	5.8	不詳	ロクロケズリ	乳灰色	堅緻	精良	白磁椀Ⅴ類
162	C 1	瓦質土器	羽釜	SR34901	1／10	(23.8)	(7.2)		ナデ・ハケ目	ナデ・指オサエ・ハケ目	灰褐色・黒色	良	精良	外面スス付着
163	C 1	土師器	羽釜	SR34901	1／2	(22.6)	(12.0)		ナデ	ナデ・ハケ目	褐色・黒色	やや軟	良 3mm茶、白細粒	外面スス付着
164	C 1	土師器	羽釜	SR34901	1／2	(28.2)	(19.4)		ナデ・磨滅	ナデ・指オサエ・磨滅	暗茶褐色	軟	粗 1mm白砂粒多	体部に穿孔
165	C 1	石鍋	口縁部	SR34901	1／12	(20.4)	(3.6)	—	ケズリ・ミガキ	ケズリ・ミガキ	灰色		ろう石	把手部分スス付着・166と同一
166	C 1	石鍋	底部	SR34901	1／10	—	(3.0)	(20.2)	ケズリ・ミガキ	ケズリ・ミガキ	灰色		ろう石	
167	C 1	土師器	皿	SD34902	1／8	(13.2)	(2.4)		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 2mm細粒赤微細粒	底部内面黒色
168	C 1	瓦器	椀	SD34902	1／16	(15.1)	(3.0)	—	磨滅・ミガキ跡	磨滅	黒灰色	良	精良	
169	C 1	瓦器	椀	SD34902	1／10	(14.6)	(3.2)	—	ミガキ	指オサエ・ナデ	暗黒灰色	良	精良	

170	C 1	瓦質土器	鉢	SD34902	1／3（底部）	－	(2.7)	(10.6)	磨滅	磨滅・指オサエ	淡黒灰色～淡茶褐色	良	良 3mm 細粒 白微細粒	
171	C 1	白磁	椀	SD34902	1／18	(14.8)	(3.2)	－	不詳	不詳	乳白色	堅緻	精良	
172	C 1	土師器	Ⅲ	SK34904	1／8	(11.4)	2.7		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	
173	C 1	土師器	Ⅲ	SK34904	1／5	(13.2)	2.3		ナデ	ナデ・指オサエ	淡橙褐色	良	良 1.5mm 砂粒多	
174	C 1	土師器	Ⅲ	SK34904	1／5	(14.0)	2.2		ナデ	ナデ	淡橙褐色	良	精良	
175	C 1	土師器	Ⅲ	SK34904	4／5	14.2	2.1		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	乳灰色	やや軟	良 2mm 細粒多	
176	C 1	土師器	Ⅲ	SK34904	1／4	(15.0)	2.3		ナデ・指オサエ	ナデ	淡橙灰色	良	良	
177	C 1	土師器	Ⅲ	SK34904	完形	14.8	2.8		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	橙色	良	良 1mm 赤砂粒多	
178	C 1	瓦器	椀	SK34904	1／4	(14.0)	(3.8)	－	磨滅	磨滅	橙色	やや軟	良 1mm 砂粒 微砂粒	二次焼成
179	C 1	瓦器	椀	SK34904	1／4	(14.0)	(4.0)	－	ミガキ	ナデ・指オサエ	黒灰色	良	精良	
180	C 1	須恵器	杯	SK34909	1／3	(13.0)	3.2	(8.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰褐色	硬	良 0.5mm 白砂粒少 4mm 白細粒 微砂粒	
181	C 1	須恵器	杯	SK34910	1／6	(14.0)	3.3	9.2	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	良	良	
182	C 1	瓦器	Ⅲ	包含層	1／3	(10.0)	2.0		ミガキ・ナデ	ナデ・指オサエ	暗黒灰色	良	良 1mm 黒砂粒	
183	C 1	土師器	Ⅲ	包含層	1／2	(12.6)	2.0		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 2mm 白、赤、灰細粒多	
184	C 1	土師器	Ⅲ	包含層	1／10	(15.6)	1.6		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良 1mm 赤砂粒少	
185	C 1	瓦器	椀	包含層	1／2	(15.0)	(4.4)		ミガキ	ミガキ・ナデ	暗黒灰色	良	精良	
186	C 1	土師器	椀	包含層	2／3	11.8	3.7		ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ	淡黄褐色	良	良	
187	C 2	土師器	Ⅲ	SD349111 Ⅳ層	1／10	(13.0)	1.9		ナデ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良 砂粒多	
188	C 2	土師器	Ⅲ	SD349111 Ⅳ層	1／8	(14.4)	1.5		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	
189	C 2	土師器	Ⅲ	SD349111 Ⅳ層	1／10	(14.4)	1.4		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	
190	C 2	土師器	Ⅲ	SD349111 Ⅳ層	1／12	(17.2)	1.8		ナデ	ナデ・指オサエ	淡橙褐色	良	精良	
191	C 2	土師器	Ⅲ	SD349111 Ⅳ層	1／10	(17.0)	2.0		ナデ	ナデ	淡赤褐色	良	精良	

192	C 2	土師器	皿	SD349111 Ⅳ層	1／10	(17.0)	(2.2)		ナデ	ヘラケズリ・ナデ・指オサエ	淡灰橙色	良	精良	
193	C 2	土師器	皿	SD349111 Ⅳ層	1／10	(16.4)	1.7		ナデ	ナデ	赤褐色	良	精良	
194	C 2	土師器	皿	SD349111 Ⅳ層	2／5	(14.0)	2.4		ナデ	ナデ・指オサエ・ケズリ	暗赤褐色	良	精良	口縁部にスス付着
195	C 2	土師器	椀	SD349111 Ⅳ層	1／8	(12.6)	(2.8)		ナデ	ナデ・指オサエ	淡黄灰褐色	良	精良	
196	C 2	土師器	椀	SD349111 Ⅳ層	1／5	(12.8)	(2.4)		ナデ	ナデ・指オサエ	淡褐色	良	精良	
197	C 2	土師器	椀	SD349111 Ⅳ層	1／6	(14.4)	2.2		ナデ	ナデ・指オサエ	淡暗褐色	良	精良	
198	C 2	土師器	椀	SD349111 Ⅳ層	1／8	(14.4)	(2.5)		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 砂粒少	
199	C 2	土師器	椀	SD349111 Ⅳ層	1／5	(14.0)	3.2		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	茶赤褐色	硬	精良	内外面ともスス付着
200	C 2	土師器	杯	SD349111 Ⅳ層	1／7	(15.2)	(2.2)		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤茶褐色	良	精良	
201	C 2	土師器	杯	SD349111 Ⅳ層	1／8	(15.6)	(2.4)		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤茶褐色	良	良 砂粒少	
202	C 2	土師器	杯	SD349111 Ⅳ層	1／8	(16.2)	3.1		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	
203	C 2	土師器	杯	SD349111 Ⅳ層	1／8	(17.8)	(3.5)		ナデ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良 0.5mm 黒砂粒少	
204	C 2	土師器	杯	SD349111 Ⅳ層	1／6	(12.4)	3.2		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	
205	C 2	土師器	高杯	SD349111 Ⅳ層	1／8	(22.2)	(4.0)		ナデ・ハケ	ハケ・ナデ・指オサエ	茶褐色	良	精良	杯部
206	C 2	土師器	甕	SD349111 Ⅳ層	1／3	(18.5)	(5.3)		ミガキ・ナデ	ナデ・ヘラケズリ	黒色～暗茶褐色	硬	精良	内外面ススコゲ付着
207	C 2	土師器	甕	SD349111 Ⅳ層	1／12	(19.0)	(5.8)		ナデ・指オサエ	ハケ目・ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 1mm 黒、白砂粒多	外面スス付着
208	C 2	土師器	甕	SD349111 Ⅳ層	1／4	(25.4)	(5.5)		ナデ	ナデ・ハケ目	淡灰褐色	良	やや粗 1～2mm 白、黒、茶砂粒多	外面全体と口縁部内面スス付着
209	C 2	黒色土器	椀	SD349111 Ⅳ層	1／7	(14.6)	(3.5)	－	磨滅	ナデ・指オサエ	黒色・淡茶褐色	良	精良	口縁部外面～内面にかけて黒色
210	C 2	黒色土器	椀	SD349111 Ⅳ層	1／7	(16.4)	(3.6)	－	ミガキ・暗文	ナデ	黒色・茶褐色	良	精良	口縁部外面～内面にかけて黒色
211	C 2	黒色土器	椀	SD349111 Ⅳ層	1／12	(16.6)	4.0	－	ミガキ	ナデ・指オサエ	黒色・淡赤茶褐色	良	精良	内面のみ炭素付着
212	C 2	黒色土器	椀	SD349111 Ⅳ層	1／8	(19.0)	(4.8)	－	ミガキ	ナデ・指オサエ	黒色・茶褐色	良	精良	内面のみ黒色

213	C 2	黒色土器	甕	SD349111 Ⅳ層	1／4	(10.6)	(4.0)		ミガキ	ナデ・指オサエ・ミガキ	黒色・黒色	良	精良	口縁部内面にコゲ付着
214	C 2	白色土器	椀	SD349111 Ⅳ層	底部完形	－	(2.8)	5.2	ナデ	ロクロナデ	白黄褐色	良	精良	削り出し輪高台
215	C 2	土製品	土馬	SD349111 Ⅳ層	頭部					ミガキ	淡灰橙色	良	精良	
216	C 2	土師器	壺(口縁部欠損)	SD349111 Ⅳ層	1／3 (体部)	－	(7.8)	(5.0)	指オサエ	ナデ・指オサエ	暗黄褐色	良	精良 金属光沢の微細粒多	外面全体に朱が塗られている
217	C 2	須恵器	杯	SD349111 Ⅳ層	1／5	(12.9)	2.7	(6.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	暗青灰色～暗灰色	やや軟	精良	内面～口縁部外面にかけて炭素付着
218	C 2	須恵器	杯	SD349111 Ⅳ層	2／5	(13.8)	3.7	8.6	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良	口縁端部内外面炭化物付着
219	C 2	須恵器	杯	SD349111 Ⅳ層	1／2	(15.3)	3.4	9.4	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	硬	精良	
220	C 2	須恵器	蓋	SD349111 Ⅳ層	1／5	(12.8)	(1.9)		ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	やや軟	精良	
221	C 2	須恵器	蓋	SD349111 Ⅳ層	1／4	(12.7)	(1.6)		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラオサエ	淡青灰色	硬	精良	墨付着
222	C 2	須恵器	杯	SD349111 Ⅳ層	底部完形	(12.5)	4.5	7.2	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	精良	輪高台貼り付け
223	C 2	須恵器	杯	SD349111 Ⅳ層	1／4	(12.5)	5.5	(8.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	暗青灰色	硬	良	輪高台貼り付け
224	C 2	須恵器	杯	SD349111 Ⅳ層	1／8	(9.0)	3.4	(4.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良	糸切り底
225	C 2	須恵器	椀	SD349111 Ⅳ層	1／10	(16.0)	(2.7)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	淡茶褐色	やや軟	精良	
226	C 2	須恵器	蓋	SD349111 Ⅳ層	1／5	(14.8)	(2.6)		ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色～乳灰色	硬	精良	外面全体自然釉
227	C 2	須恵器	壺	SD349111 Ⅳ層	1／2 (底部)	－	(5.1)	(4.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	精良	糸切り底
228	C 2	須恵器	壺	SD349111 Ⅳ層	1／5	(11.7)	(4.8)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	硬	精良	外面頸部～肩部に自然釉
229	C 2	須恵器	壺	SD349111 Ⅳ層	1／3 (底部)	－	(5.0)	(11.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良	輪高台貼り付け・底部内面自然釉
230	C 2	須恵器	鉢	SD349111 Ⅳ層	1／10	(26.0)	(7.3)	－	ナデ	ナデ・指オサエ	赤茶褐色	良	良 白砂粒多	
231	C 2	須恵器(陶器か？)	甕	SD349111 Ⅳ層	1／6	(18.8)	(5.8)		ナデ・タタキ	ナデ・タタキ	暗茶色～淡黄緑色	硬	精良	自然釉・陶器質・常滑系か？
232	C 2	須恵器	甕	SD349111 Ⅳ層	1／5	(22.0)	(12.2)		ナデ・タタキ	ナデ・タタキ	(器壁)暗灰褐色 (内部)淡赤褐色	硬	良 1～2mm白細粒多	自然釉
233	C 2	須恵器	甕	SD349111 Ⅳ層	1／4	(24.0)	(10.3)		ナデ・タタキ	ナデ・タタキ	暗青灰色	硬	良 1～3mm細粒多	

234	C 2	須恵器	甕	SD349111 Ⅳ層	1／4	(22.2)	(11.2)		ナデ・タタキ	ナデ・タタキ	淡灰色	硬	精良	
235	C 2	須恵器	甕	SD349111 Ⅳ層	1／20	(32.0)	(7.8)		ナデ・タタキ	ナデ・タタキ	灰色	硬	精良	自然釉
236	C 2	須恵器	円面硯	SD349111 Ⅳ層	1／20	(19.0)	(3.6)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良	
237	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅳ層	1／4	－	(1.0)	(7.0)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	暗緑灰色	やや軟	精良	底部外面釉無し・京都産
238	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅳ層	1／2	－	(1.0)	(7.0)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	灰白色	硬	精良	全面釉跡・京都産
239	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅳ層	1／3	－	(1.3)	(6.4)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡緑灰色	硬	精良	全面施釉・京都産
240	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅳ層	1／2	－	(1.4)	(6.6)	不詳	不詳	茶緑灰色	軟(土師質)	精良	素地は乳灰色・全面施釉・京都産
241	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅳ層	1／3	－	(2.0)	(7.0)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	茶緑色	硬	精良	全面施釉・京都産
242	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅳ層	底部完形	－	(1.5)	7.0	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	暗緑茶色	硬	精良	全面施釉・京都産
243	C 2	緑釉陶器	椀	SD349111 Ⅳ層	1／10	(13.4)	(1.9)	－	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡黄緑色	やや軟	精良	内面に陰刻花文・京都産
244	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅳ層	1／4	－	(2.4)	(7.4)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡緑灰色	硬	精良	内面見込みに重ね焼き痕跡・全面施釉・京都産
245	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅳ層	1／3	－	(1.9)	(6.4)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡橙色	軟(土師質)	精良	全面施釉・京都産
246	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅳ層	1／2	－	(1.8)	(7.4)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	暗緑灰色	やや軟	精良	全面施釉・京都産
247	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅳ層	1／2	－	(2.8)	(7.4)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	緑灰褐色	硬	精良	全面施釉・京都産
248	C 2	緑釉陶器	椀	SD349111 Ⅳ層	2／3	－	(4.5)	6.8	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡黄褐色	軟(土師質)	精良	全面施釉・京都産
249	C 2	無釉陶器	椀	SD349111 Ⅳ層	1／5	(12.2)	(3.2)	－	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	青灰色	硬	精良	京都産
250	C 2	無釉陶器	椀	SD349111 Ⅳ層	1／4	－	(3.5)	(8.2)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	青灰色	硬	精良	窯記号(底部外面)「×」・京都産
251	C 2	無釉陶器	椀	SD349111 Ⅳ層	1／3	－	(1.8)	(7.0)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	灰色	硬	精良	底部外面に墨書・京都産

252	C 2	無釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅳ層	1／10	－	(1.2)	(8.0)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ケズリ・ミガキ	明灰色	硬	精良	内面底部に陰刻文を施す・京都産
253	C 2	灰釉陶器	壺底部	SD349111 Ⅳ層	1／2（底部）	－	(1.7)	(5.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	硬	精良	外面に陰刻文を施す・内面施釉・東海灰釉壺
254	C 2	灰釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅳ層	1／10	－	(1.8)	(7.3)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	灰色	硬	精良	底部外面未施釉・東海灰釉椀
255	C 2	灰釉陶器	皿	SD349111 Ⅳ層	1／5	(15.1)	2.4	(7.8)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	灰色	硬	精良	内面施釉・東海灰釉皿
256	C 2	土師器	皿	SD349111 Ⅲ層	1／8	(10.4)	1.0		ナデ	ナデ	淡黄褐色	良	精良	
257	C 2	土師器	皿	SD349111 Ⅲ層	1／5	(14.2)	2.3		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	
258	C 2	土師器	皿	SD349111 Ⅲ層	1／8	(13.6)	1.8		ナデ	ナデ・指オサエ	乳白色	良	良 1～2mm赤細粒少	
259	C 2	土師器	皿	SD349111 Ⅲ層	1／5	(13.4)	1.9		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 1～3mm濃茶細粒多	
260	C 2	土師器	皿	SD349111 Ⅲ層	1／10	(14.4)	2.2		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良 1mm白砂粒多	
261	C 2	土師器	皿	SD349111 Ⅲ層	1／3	(14.6)	1.6		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	
262	C 2	土師器	皿	SD349111 Ⅲ層	1／12	(14.0)	2.2		ナデ	ナデ	橙褐色	良	良 1～2mm砂粒	
263	C 2	土師器	皿	SD349111 Ⅲ層	1／6	(14.0)	1.5		ナデ	ナデ・指オサエ	橙茶褐色	良	良 1～3mm細粒多	
264	C 2	土師器	皿	SD349111 Ⅲ層	1／10	(17.4)	1.7		ナデ・指オサエ	ナデ	淡赤褐色	良	精良	
265	C 2	土師器	皿	SD349111 Ⅲ層	1／8	(17.0)	2.3		ナデ	ナデ	淡赤褐色(底部)黒色	良	精良	
266	C 2	土師器	皿	SD349111 Ⅲ層	1／6	(20.4)	1.8		ナデ	ナデ	橙褐色	良	良 1～3mm白、黒細粒多	
267	C 2	土師器	椀	SD349111 Ⅲ層	1／3	(13.0)	3.0		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良 砂粒多	端部に3cm程のスス付着
268	C 2	土師器	椀	SD349111 Ⅲ層	1／4	(14.0)	(2.8)		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	
269	C 2	土師器	椀	SD349111 Ⅲ層	2／5	(16.4)	5.5	7.2	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡黄白色	良	良 砂粒多	防長土器・輪高台貼り付け・墨跡底部内外面付着

270	C 2	黒色土器	椀	SD349111 Ⅲ層	1／8	(17.0)	(4.7)	—	ミガキ	ナデ・指オサエ	暗黒灰色・茶褐色	良	精良	内面のみ黒色
271	C 2	黒色土器	椀	SD349111 Ⅲ層	1／12	(19.0)	(4.2)	—	ミガキ	ミガキ	黒色	良	精良	
272	C 2	土師器	羽釜	SD349111 Ⅲ層	1／8	(19.8)	(6.0)		ナデ	ナデ	黄褐色	やや軟	良 1～3mm褐細粒多	
273	C 2	土師器	高杯	SD349111 Ⅲ層	1／9 (裾部)	—	(8.4)	(18.0)	ナデ・指オサエ	ヘラケズリ・ナデ・ハケ目	淡赤褐色	良	精良	裾端面にハケ目工具による沈線状施文
274	C 2	土師器	盤	SD349111 Ⅲ層	1／12	(26.8)	(3.1)	(21.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	赤褐色	良	精良	高台は体部と別粘土で1～2mm砂粒多・輪高台
275	C 2	黒色土器	甕	SD349111 Ⅲ層	1／4	(13.6)	(5.3)		ナデ・ミガキ	ケズリ・ナデ	黒色・茶褐色	硬	良 1～3mm白、透明細粒	内面のみ黒色
276	C 2	土師器	甕	SD349111 Ⅲ層	1／6	(13.7)	(3.5)		ナデ	ナデ	淡橙褐色	良	精良	
277	C 2	土師器	甕	SD349111 Ⅲ層	1／5	(17.6)	(4.2)		ナデ	ナデ	淡黄茶褐色	良	精良	外面スス付着
278	C 2	土師器	甕	SD349111 Ⅲ層	1／12	(22.4)	(3.5)		ナデ・ハケ目	ナデ	淡橙褐色	良	良 1～3mm白、灰細粒多	
279	C 2	土師器	甕	SD349111 Ⅲ層	1／9	(28.0)	(6.3)		ナデ・ハケ目	ナデ・指オサエ・ハケ目	暗茶褐色	やや軟良	良 1～2mm白砂粒多	
280	C 2	土師器	甕	SD349111 Ⅲ層	1／10	(19.0)	(4.9)		ナデ	ナデ・指オサエ	淡橙褐色	良	精良	
281	C 2	土師器	甕	SD349111 Ⅲ層	1／4	(26.4)	(11.8)		ナデ・指オサエ・ハケ目	ナデ・指オサエ	淡乳赤褐色	良	精良	
282	C 2	須恵器	杯	SD349111 Ⅲ層	1／8	(11.7)	2.0	(7.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	やや軟	精良	
283	C 2	須恵器	杯	SD349111 Ⅲ層	1／4	(12.2)	4.2	(8.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	やや軟	精良	輪高台貼り付け
284	C 2	須恵器	杯	SD349111 Ⅲ層	1／6	(15.8)	5.8	(11.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	精良	輪高台貼り付け
285	C 2	須恵器	蓋	SD349111 Ⅲ層	1／5	(14.0)	(2.3)		ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	精良	外面に墨痕
286	C 2	須恵器	杯蓋	SD349111 Ⅲ層	1／3	(14.7)	(1.5)		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ	乳灰色	硬	精良	
287	C 2	須恵器	蓋	SD349111 Ⅲ層	1／8	(16.8)	(1.9)		ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	精良	内面に墨付着
288	C 2	須恵器	杯蓋	SD349111 Ⅲ層	1／8	(19.0)	(2.0)		ロクロナデ	ロクロナデ	淡青灰色	硬	精良	
289	C 2	須恵器	壺	SD349111 Ⅲ層	1／3 (体部)	—	(6.6)	—	ロクロナデ	ロクロナデ・ミガキ	濃灰色	硬	精良	

290	C 2	須恵器	壺	SD349111 Ⅲ層	1／3 (体部)	−	(9.4)	(7.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	暗青灰色	硬	良 3〜5mm白細粒多	
291	C 2	須恵器	壺	SD349111 Ⅲ層	3／4	7.4	(5.6)	−	ロクロナデ	ロクロナデ	淡青灰色	硬	精良	
292	C 2	須恵器	高杯	SD349111 Ⅲ層	柱部ほぼ完存	−	(8.7)	−	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	良 砂粒多	
293	C 2	須恵器	鉢	SD349111 Ⅲ層	1／9	(19.6)	(5.5)	−	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良	
294	C 2	須恵器	鉢	SD349111 Ⅲ層	1／9	(21.2)	(3.5)	−	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	精良	
295	C 2	須恵器	甕	SD349111 Ⅲ層	1／3	(19.4)	(6.3)		ロクロナデ・タタキ	ロクロナデ・タタキ	灰色	硬	良 1〜4mm白細粒多	外面肩部に自然釉・東海産
296	C 2	須恵器	甕	SD349111 Ⅲ層	1／6	(19.0)	(5.0)		ロクロナデ・タタキ	ロクロナデ・タタキ	青灰色	硬	良 2〜5mm黒、灰細粒少	
297	C 2	緑釉陶器	椀・Ⅲ底部	SD349111 Ⅲ層	底部完形	−	(1.3)	7.0	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	濃緑色	軟	精良	平高台・京都産
298	C 2	緑釉陶器	椀・Ⅲ底部	SD349111 Ⅲ層	1／3 (底部)	−	(1.5)	(6.0)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	緑茶色	やや軟	精良	全面施釉・京都産
299	C 2	緑釉陶器	椀・Ⅲ底部	SD349111 Ⅲ層	1／2 (底部)	−	(1.2)	(7.4)	ロクロナデ？	ロクロナデ？	暗緑灰色	やや軟	精良	全面施釉・京都産
300	C 2	緑釉陶器	椀・Ⅲ底部	SD349111 Ⅲ層	1／4 (底部)	−	(1.6)	(8.0)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	黄灰緑色	軟	精良	全面施釉・京都産
301	C 2	緑釉陶器	椀・Ⅲ底部	SD349111 Ⅲ層	1／3 (底部)	−	(2.0)	(7.0)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡黄緑色	軟	精良	全面施釉・京都産
302	C 2	緑釉陶器	Ⅲ	SD349111 Ⅲ層	1／7	(15.0)	(2.2)	−	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡黄緑色	軟	精良	京都産
303	C 2	緑釉陶器	Ⅲ	SD349111 Ⅲ層	4／5	13.4	2.8	6.8	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	濃緑褐色	硬	精良	全面施釉・京都産
304	C 2	緑釉陶器	椀・Ⅲ底部	SD349111 Ⅲ層	底部完形	−	(2.1)	7.2	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	緑灰色	硬	精良	全面施釉・内面重ね焼き時の痕跡・京都産
305	C 2	緑釉陶器	椀・Ⅲ底部	SD349111 Ⅲ層	1／2	−	(1.8)	(6.4)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	暗緑灰色	やや軟	良 砂粒多	全面施釉・京都産
306	C 2	緑釉陶器	椀・Ⅲ底部	SD349111 Ⅲ層	底部完形	−	(1.8)	6.0	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	暗緑灰色	やや軟	精良	内面に窯記号「×」・全面施釉・京都産
307	C 2	緑釉陶器	椀	SD349111 Ⅲ層	1／2	−	(3.3)	(6.2)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	暗緑褐色	硬	精良	底部に墨跡有り・転用硯・京都産

308	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅲ層	底部完形	－	(3.7)	7.2	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡黄緑色	やや軟	精良	全面施釉・京都産
309	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅲ層	1／3	－	(2.0)	(8.6)	ロクロナデ・ロクロケズリ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡橙茶褐色	やや軟	精良	全面施釉・京都産
310	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅲ層	1／2	－	(2.3)	(8.3)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡黄緑色	軟(土師質)	精良	全面施釉・京都産
311	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅲ層	1／3	－	(2.6)	(7.8)	ロクロナデ・ロクロケズリ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	橙緑色	軟(土師質)	精良	全面施釉・京都産
312	C 2	緑釉陶器	椀	SD349111 Ⅲ層	1／12	(16.5)	(3.5)	－	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡橙緑色	軟(土師質)	精良	京都産
313	C 2	緑釉陶器	椀	SD349111 Ⅲ層	1／5	(18.6)	6.2	(9.0)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡緑灰色	やや軟	精良	平高台・全面施釉・京都産
314	C 2	緑釉陶器	椀	SD349111 Ⅲ層	1／3	(15.8)	5.4	(7.2)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	黒灰褐色	硬	精良	全面施釉変色・京都産
315	C 2	無釉陶器	椀	SD349111 Ⅲ層	1／4	(19.0)	5.9	(8.0)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡灰色	良	精良	京都産
316	C 2	無釉陶器	皿	SD349111 Ⅲ層	1／5	(14.8)	(2.0)	－	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	暗灰色	硬	精良	内面に墨付着
317	C 2	無釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅲ層	底部完形	－	(2.5)	6.5	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	灰色	やや軟	精良	内面に墨付着・京都産
318	C 2	無釉陶器	皿	SD349111 Ⅲ層	2／3	14.2	2.8	6.6	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ	灰色	硬	精良 7㎜白細粒	平高台・底部墨書・内面全体に墨痕・転用硯・京都産
319	C 2	無釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅲ層	底部完形	－	(2.0)	5.7	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	濃青灰色	硬	精良	内面見込みに窯記号「×」・京都産
320	C 2	無釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅲ層	2／3	－	(1.8)	5.9	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	灰色	硬	精良	平高台・外面に窯記号「×」拓本・京都産
321	C 2	無釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅲ層	底部完形	－	(1.7)	6.0	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	青灰色	硬	精良	内面に重ね焼き時の粘土付着・京都産

322	C 2	灰釉陶器	壺	SD349111 Ⅲ層	1／2	－	(5.7)	(6.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡緑灰色	硬	精良	糸切り底・底面無釉・東海灰釉壺
323	C 2	灰釉陶器	壺	SD349111 Ⅲ層	1／5	－	(2.0)	(12.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	明灰褐色	硬	良 砂粒多	東海灰釉壺
324	C 2	輸入陶磁器	椀	SD349111 Ⅲ層	1／5	(12.4)	(3.3)		不詳	不詳	淡黄灰色	硬	精良	長沙窯・黄釉
325	C 2	土師器	Ⅲ	SD349111 Ⅱ層	1／7	(15.6)	(2.2)		ナデ	ナデ	淡赤褐色	良	良 1mm 砂粒少	
326	C 2	土師器	Ⅲ	SD349111 Ⅱ層	1／8	(15.6)	1.7		ナデ	ナデ	淡黄褐色	良	精良	
327	C 2	土師器	Ⅲ	SD349111 Ⅱ層	1／10	(17.8)	2.7		ナデ	ナデ	淡赤褐色	良	良 1.5mm 赤、黒、灰細粒	
328	C 2	黒色土器	椀	SD349111 Ⅱ層	1／10	(16.0)	(5.1)	－	ミガキ	ミガキ	暗灰色	良	精良	二次焼成
329	C 2	土師器	甕	SD349111 Ⅱ層	1／7	(13.4)	(3.7)		ナデ・指オサエ	ナデ	淡茶褐色	良	精良	
330	C 2	土師器	甕	SD349111 Ⅱ層	1／8	(16.0)	(3.5)		ナデ	ナデ・指オサエ	橙茶褐色～暗茶褐色	良	良 1.5mm 白細粒多	
331	C 2	土師器	甕	SD349111 Ⅱ層	1／12	(17.0)	(4.9)		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	内外面口頸部ススト付着
332	C 2	土師器	甕	SD349111 Ⅱ層	1／6	(17.2)	(3.3)		ヘラケズリ・ナデ	ナデ・指オサエ	暗茶褐色	良	やや粗 5mm白細粒多	外面ススト付着
333	C 2	土師器	甕	SD349111 Ⅱ層	1／6	(17.4)	(4.3)		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良 5mm 白細粒多	
334	C 2	土師器	甕	SD349111 Ⅱ層	1／12	(24.8)	(3.8)		ナデ・ヘラオサエ	ナデ・指オサエ・ハケ目	淡黄茶褐色	良	良 1.5mm 砂粒多	
335	C 2	土師器	高杯	SD349111 Ⅱ層	1／2	(28.0)	(5.0)		ナデ	ナデ・指オサエ・ヘラオサエ	淡灰白色	やや軟	精良	
336	C 2	土師器	羽釜	SD349111 Ⅱ層	1／5	(25.0)	(15.0)		ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	黄褐色	良	良 1mm 赤、白砂粒多	内外面コゲ・ススト付着
337	C 2	須恵器	杯	SD349111 Ⅱ層	3／5 (底部)	－	(2.7)	11.0	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	良	精良	輪高台・墨書跡
338	C 2	須恵器	杯	SD349111 Ⅱ層	1／6	(13.3)	3.2	(9.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	やや軟	精良	
339	C 2	須恵器	鉢	SD349111 Ⅱ層	1／7	(20.2)	(4.6)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	良	精良	
340	C 2	須恵器	鉢	SD349111 Ⅱ層	1／6	(18.6)	(4.5)	－	ロクロナデ	ナデ・ヘラケズリ・ミガキ	淡灰色	良	精良	鉄鉢形金属模倣
341	C 2	須恵器	甕	SD349111 Ⅱ層	1／2	(55.2)	(9.6)	－	ナデ・タタキ	ナデ・タタキ	暗青灰色	硬	良 3mm 白細粒	
342	C 2	緑釉陶器	椀・Ⅲ底部	SD349111 Ⅱ層	1／2	－	(1.3)	(6.0)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	暗緑灰色	硬	精良	平高台・底内面無釉・京洛西産

343	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅱ層	3／5	－	(1.5)	6.0	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ？	淡緑灰色	良	精良	平高台・全面施釉・京洛北産
344	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅱ層	1／3	－	(1.5)	(6.8)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	黄緑灰色	良	精良	底内面無釉・京都産
345	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅱ層	1／4	－	(1.2)	(9.4)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	黄褐色	軟(土師質)	精良	蛇の目高台・全面施釉・京洛北産
346	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅱ層	1／3	－	(2.0)	(6.2)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡緑褐色	軟(土師質)	精良	平高台・全面施釉・京洛北産
347	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅱ層	1／4	－	(1.7)	(7.3)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	暗緑灰色	硬	精良	平高台・全面施釉・京洛西産
348	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅱ層	1／6	－	(2.3)	(6.8)	ロクロナデ・ミガキ・内面底部に凹線による圏線	ロクロナデ・ミガキ	緑色	良	精良	糸切り底に輪高台貼り付け・全面施釉・近江産
349	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅱ層	3／5 (底部)	－	(2.0)	7.7	ロクロナデ・ミガキ・内面底部に凹線による圏線	ロクロナデ・ミガキ	緑色	良	精良	糸切り底に輪高台貼り付け・全面施釉・近江産
350	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SD349111 Ⅱ層	1／3 (底部)	－	(2.1)	(7.2)	ロクロナデ・内面底部に凹線による圏線	ロクロナデ・ミガキ	緑灰色	硬	精良	糸切り底に輪高台貼り付け・全面施釉・近江産
351	C 2	緑釉陶器	椀	SD349111 Ⅱ層	1／12	(13.5)	(2.3)	－	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	濃緑黄色	良	精良	京都産
352	C 2	緑釉陶器	椀	SD349111 Ⅱ層	1／4 (底部)	－	(2.6)	(7.6)	ロクロナデ	ロクロナデ・ミガキ	濃緑黄色	良	精良	糸切り底に輪高台貼り付け・全面施釉・近江産
353	C 2	緑釉陶器	椀	SD349111 Ⅱ層	1／2 (底部)	－	(2.4)	(6.0)	ロクロナデ・内面底部に凹線による圏線	ロクロナデ・ミガキ	濃緑茶褐色	硬	精良	輪高台貼り付け・底内面無釉・東海産
354	C 2	無釉陶器	皿	SD349111 Ⅱ層	1／24	(14.8)	(2.0)	－	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡青灰色	硬	精良	内面口縁陰刻文・京都産
355	C 2	灰釉陶器	壺	SD349111 Ⅱ層	1／4	－	(7.2)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	緑灰色	良	精良	ハケ塗り施釉
356	C 2	土師器	椀	SD349111 Ⅰ層	1／8	(15.0)	(3.8)	－	ナデ	ナデ・指オサエ	淡橙茶褐色	良	精良	

357	C 2	土師器	甕	SD349111 I 層	1／3	(12.6)	(3.0)		ナデ	ナデ	赤褐色	良	良 1～2mm砂粒	外面コゲあり
358	C 2	土師器	甕	SD349111 I 層	1／8	(11.8)	(4.6)		ナデ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良 1mm白砂粒	
359	C 2	土師器	甕	SD349111 I 層	1／6	(14.4)	(3.0)		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良 2mm白細粒多	
360	C 2	土師器	甕	SD349111 I 層	1／4	(22.0)	(7.2)		ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	暗茶褐色	良	やや粗 1mm赤、白砂粒多	内面炭化物付着・体部外面二次焼成
361	C 2	土師器	甕	SD349111 I 層	1／10	(26.0)	(8.0)		ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	黄褐色	良	やや粗 1～3mm白、褐砂粒多	
362	C 2	土製品	土馬	SD349111 I 層					指オサエ・ナデ		淡灰橙色	良	精良	
363	C 2	須恵器	皿	SD349111 I 層	1／10	(15.0)	2.8	(7.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	乳灰色	軟	精良	
364	C 2	須恵器	皿	SD349111 I 層	1／5	(14.1)	3.5	(8.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	やや軟	精良	
365	C 2	須恵器	杯	SD349111 I 層	1／3 (底部)	－	(3.6)	(9.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良	輪高台貼り付け
366	C 2	須恵器	短頸壺	SD349111 I 層	1／6	(10.6)	(4.3)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	淡青灰色	硬	精良	
367	C 2	須恵器	壺	SD349111 I 層	1／3	(19.4)	(11.8)	(9.0)	ロクロナデ	ロクロナデ・ミガキ	暗青灰色	良	良 1mm白砂粒多	糸切り底・器高は上部と下部の和
368	C 2	緑釉陶器	皿・椀底部	SD349111 I 層	底部完形	－	(1.5)	6.6	磨滅	磨滅	白灰色	軟(土師質)	精良	一部緑釉残存・(明緑色)・全面施釉・京都産
369	C 2	緑釉陶器	皿・椀底部	SD349111 I 層	底部完形	－	(1.5)	6.6	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	明緑褐色	軟(土師質)	精良	内面見込みに窯記号・全面施釉・京都産
370	C 2	緑釉陶器	皿・椀底部	SD349111 I 層	1／6 (底部)	－	(1.2)	(6.5)	ロクロナデ?	ロクロナデ・ミガキ	緑灰色	硬	精良	内面見込みに窯記号・底部無釉・京都産
371	C 2	緑釉陶器	皿・椀底部	SD349111 I 層	1／2 (底部)	－	(1.5)	(8.0)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡緑灰色	やや軟	精良	全面施釉・京都産
372	C 2	緑釉陶器	皿・椀底部	SD349111 I 層	1／3 (底部)	－	(1.9)	(6.0)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡黄緑色	やや軟	精良	全面施釉・京都産
373	C 2	緑釉陶器	皿・椀底部	SD349111 I 層	1／12 (底部)	－	(1.8)	(7.2)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	明緑色	やや軟	精良	内面に窯記号・全面施釉・京都産
374	C 2	緑釉陶器	皿・椀底部	SD349111 I 層	1／2 (底部)	－	(1.5)	(6.6)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	明緑灰色	やや軟	精良	全面施釉・京都産

375	C 2	緑釉陶器	皿・椀底部	SD349111 Ⅰ層	1／5（底部）	－	(1.6)	(8.8)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡緑灰色	やや軟	精良	全面施釉・京都産
376	C 2	緑釉陶器	皿・椀底部	SD349111 Ⅰ層	1／8（底部）	－	(1.8)	(5.8)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	緑灰色	硬	精良	全面施釉・東海産
377	C 2	無釉陶器	皿	SD349111 Ⅰ層	1／8	(13.8)	3.2	(7.4)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	青灰色	硬	精良	京都産
378	C 2	灰釉陶器	皿	SD349111 Ⅰ層	1／3（底部）	－	(1.9)	(6.6)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡灰緑色	硬	精良	重ね焼き痕・底面内面無釉・東海系
379	C 2	灰釉陶器	壺	SD349111 Ⅰ層	1／4（底部）	－	(2.5)	(7.2)	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	明灰色	硬	精良	釉一部付着・東海系
380	C 2	灰釉陶器	皿	SD349111 内	底部完形	(15.0)	2.9	7.6	ヘラケズリ・ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	硬	精良	削り出し輪高台・外面底面見込み内「萬」墨書・全面無釉・京都産
381	C 2	青磁	椀	SD349111 内	1／6	(15.0)	4.8	(6.5)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡緑灰色	硬	精良	蛇の目高台・越州窯産
382	C 2	土師器	皿	SE349112	1／10	(9.0)	1.3		ナデ	ナデ・指オサエ	淡乳褐色	良	良 0.5mm 赤砂粒多	
383	C 2	土師器	皿	SE349112	1／2	(10.2)	1.4		ナデ	ナデ・指オサエ	淡乳褐色	良	良	
384	C 2	土師器	皿	SE349112	1／3	(10.0)	2.0		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良 1mm 茶砂粒多	
385	C 2	土師器	皿	SE349112	1／5	(10.6)	1.9		ナデ	ナデ・指オサエ	淡乳褐色	良	良 1mm 茶砂粒少	
386	C 2	土師器	皿	SE349112	1／5	(11.4)	1.5		ナデ	ナデ・指オサエ	淡乳褐色	良	精良	
387	C 2	土師器	皿	SE349112	1／4	(11.4)	(1.4)		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 0.5mm 赤砂粒多	
388	C 2	土師器	皿	SE349112	1／2	(12.6)	2.1		ナデ	ナデ・指オサエ	橙褐色	良	良	
389	C 2	土師器	皿	SE349112	2／5	(12.8)	2.0		ナデ	ナデ・指オサエ	橙褐色	良	精良	
390	C 2	土師器	皿	SE349112	1／8	(13.0)	1.9		ナデ	ナデ・指オサエ	淡乳褐色	硬	良	外面スス付着
391	C 2	土師器	皿	SE349112	1／8	(13.0)	1.8		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡乳褐色	良	良	
392	C 2	土師器	皿	SE349112	1／8	(13.4)	1.8		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良	
393	C 2	土師器	皿	SE349112	1／6	(14.4)	(1.5)		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良	

394	C 2	土師器	皿	SE349112	1／3	(14.2)	(2.3)		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良	
395	C 2	土師器	皿	SE349112	1／5	(15.0)	2.2		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良 0.5mm 赤砂粒多	
396	C 2	土師器	皿	SE349112	2／5	(15.8)	2.3		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	乳褐色	良	良	
397	C 2	土師器	皿	SE349112	1／10	(15.2)	1.4		ナデ	ナデ・指オサエ	茶褐色	良	精良	
398	C 2	土師器	杯	SE349112	1／3	(13.0)	2.6		ナデ	ナデ	茶褐色	良	良	
399	C 2	土師器	椀	SE349112	1／8	(14.0)	(4.0)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色	良	良 1.5mm 灰砂粒少	瀬戸内西部付近の土師器椀
400	C 2	黒色土器	椀	SE349112	1／10	(15.0)	4.6	(8.0)	ミガキ	ナデ・指オサエ・ミガキ	黒色・茶褐色	やや軟	精良	口縁部外面～内面炭素吸着
401	C 2	黒色土器	椀	SE349112	1／2	(14.2)	4.8	7.8	ミガキ	ナデ・指オサエ	黒色・茶褐色	良	良 1.5mm 砂粒少	内面のみ炭素
402	C 2	黒色土器	椀	SE349112	1／5	(14.6)	(4.3)	－	ミガキ	ミガキ・ナデ・指オサエ	黒色・褐色	良	精良	口縁部外面～内面炭素吸着
403	C 2	黒色土器	椀	SE349112	2／3	15.6	(4.2)	－	ミガキ	ナデ・指オサエ・ミガキ	黒色・茶褐色	良	精良	体部外面～内面炭素吸着
404	C 2	黒色土器	椀	SE349112	1／5	(14.0)	5.4	(6.8)	ミガキ	ナデ・指オサエ	黒色・褐色	良	精良	体部外面～内面炭素吸着
405	C 2	須恵器	杯蓋	SE349112	1／8	(15.2)	(1.4)		ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	やや軟	精良	
406	C 2	須恵器	杯	SE349112	1／10	(12.5)	3.0	(9.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	やや軟	精良	
407	C 2	須恵器	椀	SE349112	完形	14.4	5.0	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	黄灰褐色	硬	良	糸切り底・亀岡産
408	C 2	須恵器	鉢	SE349112	1／6	(16.0)	(3.0)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	茶褐色	硬	精良	
409	C 2	須恵器	鉢	SE349112	2／5	(20.5)	9.2	7.5	ロクロナデ	ロクロナデ	淡青灰色	硬	良	糸切り底
410	C 2	緑釉陶器	椀	SE349112	1／5	(16.0)	4.5	(7.8)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	濃緑色～淡緑色	硬	精良	全面施釉・京都産
411	C 2	緑釉陶器	椀	SE349112	ほぼ完形	12.3	4.3	5.8	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	緑茶褐色	良	精良	高台部施釉なし・京都産
412	C 2	緑釉陶器	椀	SE349112	4／5	16.8	6.2	7.0	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡緑灰色	良	精良	高台部施釉なし・京都産
413	C 2	無釉陶器	椀	SE349112	1／5	(14.2)	(4.3)	－	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	濃灰色	硬	精良	京都産
414	C 2	須恵器	風字硯	SE349112	1／2	幅10.2	高さ3.7	長さ11.6	ナデ	ナデ・施釉	青灰色	やや良	精良	一部墨付着・自然釉(硯の背)

415	C 2	石鍋	口縁部片	SE349112	－	－	(4.2)	－			黒灰褐色		ろう石	スス付着・把手痕跡より上下にスス付着
416	C 2	土師器	Ⅲ	SX349133	1／10	(14.4)	1.8		ナデ・指オサエ	磨滅	淡茶褐色	良	良 1mm赤、褐砂粒多	
417	C 2	土師器	Ⅲ	SX349133	1／5	(14.4)	1.8		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	やや軟	良 1mm赤砂粒少	
418	C 2	土師器	Ⅲ	SX349133	1／6	(15.0)	2.7		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	やや粗5mm赤、灰、白細粒少	
419	C 2	土師器	Ⅲ	SX349133	1／5	(16.0)	2.2		ナデ	磨滅	赤褐色	良	良 1.5mm茶、白砂粒多	
420	C 2	土師器	Ⅲ	SX349133	1／6	(16.4)	2.5		ナデ	ナデ	淡茶褐色	良	良	
421	C 2	土師器	Ⅲ	SX349133	1／8	(16.6)	2.3		ナデ・指オサエ	ナデ	淡赤褐色	良	良	
422	C 2	土師器	Ⅲ	SX349133	1／5	(17.8)	2.7		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	精良	
423	C 2	土師器	Ⅲ	SX349133	1／5	(17.2)	1.9		ナデ	ナデ・指オサエ・ケズリ	淡赤褐色	良	精良	
424	C 2	土師器	Ⅲ	SX349133	1／5	(17.0)	1.7		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	精良 2mm黒細粒微細粒	
425	C 2	土師器	杯	SX349133	1／2	(13.7)	2.8		磨滅・指オサエ	磨滅・指オサエ	淡乳褐色	良	良	
426	C 2	土師器	杯	SX349133	1／3	(15.0)	2.9		ナデ	磨滅	赤褐色	良	良 1mm赤砂粒少	
427	C 2	土師器	杯	SX349133	1／8	(17.0)	2.5		ナデ	ナデ	淡赤褐色	良	良 1mm白砂粒微細粒	
428	C 2	土師器	杯	SX349133	1／4	(18.0)	(2.6)		ナデ	ナデ	淡赤褐色	良	良 1.5mm砂粒微細粒	
429	C 2	土師器	杯	SX349133	1／3	(18.0)	3.6		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 1mm赤砂粒少	
430	C 2	土師器	杯	SX349133	1／8	(16.0)	(2.8)		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良	
431	C 2	土師器	椀	SX349133	1／5	(13.0)	3.2		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色～赤褐色	良	やや粗3mm灰、黒、茶細粒少	
432	C 2	土師器	椀	SX349133	1／8	(13.0)	3.0		磨滅	磨滅	赤褐色	良	やや粗1mm白砂粒多	
433	C 2	土師器	椀	SX349133	1／5	(13.2)	3.3		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	橙色	良	良 1mm砂粒多	

434	C 2	土師器	椀	SX349133	1／4	(14.0)	4.2		ナデ・指オサエ	磨滅・指オサエ	橙色	良	やや粗 1.5mm 灰細粒多	
435	C 2	土師器	甕	SX349133	1／6	(11.4)	(5.5)		ナデ	ナデ・指オサエ	橙色	良	良 2mm 白、黒細粒多	
436	C 2	土師器	甕	SX349133	1／4	(17.0)	(6.5)		ナデ・ハケ目・指オサエ	ハケ目・ナデ	橙褐色	良	やや粗 1.5mm 黒、灰砂粒多	
437	C 2	土師器	甕	SX349133	1／2	(17.4)	(7.1)		ナデ・指オサエ・ハケ目	ナデ・指オサエ・ハケ目	淡茶褐色	良	良	
438	C 2	黒色土器	椀	SX349133	1／4	(20.0)	5.1	(11.0)	ナデ・指オサエ・ミガキ	ナデ・指オサエ・削り	黒・茶褐色	良	良 1mm 白砂粒少	内面のみ炭素付着
439	C 2	土錘		SX349133	4／5	最大幅 1.4	(4.8)		磨滅		淡黄灰色	良	やや粗 1mm茶砂粒多	
440	C 2	土錘		SX349133	5／6	最大幅 1.5	(4.7)		磨滅		淡黄灰色	良	やや粗 1mm白、茶砂粒多	
441	C 2	土錘		SX349133	2／3	最大幅 1.5	(3.8)		磨滅		淡黄灰色	良	やや粗 5mm灰色 2mm 細粒多	
442	C 2	土錘		SX349133	完形	最大幅 1.5	5.2		磨滅		淡灰橙色	良	やや粗 1mm白、茶砂粒多	
443	C 2	須恵器	皿	SX349133	1／8	(18.0)	2.2	—	ロクロナデ	ロクロナデ・ナデ	灰色	良	精良	
444	C 2	須恵器	杯	SX349133	1／3	(12.0)	3.2	(6.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡青灰色	硬	良	
445	C 2	須恵器	杯	SX349133	1／4	(10.6)	3.4	(7.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	良	良 砂粒少	
446	C 2	須恵器	杯	SX349133	2／3	10.6	3.9	8.2	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	良	輪高台貼り付け・外面自然釉・口縁端部にス付着
447	C 2	須恵器	杯	SX349133	1／3	(14.2)	4.8	9.8	ロクロナデ	ロクロナデ	乳灰色	軟	良	輪高台貼り付け
448	C 2	須恵器	杯	SX349133	1／6	(16.4)	5.0	12.0	ロクロナデ	ロクロナデ	暗灰色	硬	良	輪高台貼り付け
449	C 2	須恵器	杯	SX349133	1／3	(18.6)	4.1	(12.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	乳灰色	良	精良	輪高台貼り付け
450	C 2	須恵器	杯	SX349133	1／3	—	(1.7)	(9.6)	ロクロナデ	磨滅・指オサエ	灰白色	やや軟	精良	
451	C 2	須恵器	杯	SX349133	1／10	(13.8)	3.1	(9.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡乳灰色	やや軟	良 微細粒	
452	C 2	須恵器	杯蓋	SX349133	2／5	(17.0)	2.3		ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	淡灰色	硬	精良	
453	C 2	須恵器	杯蓋	SX349133	3／5	16.4	3.3		ロクロナデ	ロクロナデ	暗青灰色	硬	良	

454	C 2	須恵器	壺底部	SX349133	底部完形	—	(5.4)	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	精良	内外面に墨付着
455	C 2	緑釉陶器	底部	SX349133	1／3	—	(1.2)	(9.2)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡緑色	硬	精良	全面施釉・東海系
456	C 2	土師器	皿	SX349131	1／3	(15.8)	2.0		磨滅	磨滅	淡褐色	良	良 0.5mm 砂粒少	
457	C 2	土師器	椀	SX349131	1／4	(13.6)	3.2		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 1mm 赤砂粒少	
458	C 2	須恵器	杯	SX349131	1／6	—	(1.0)	(10.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	良	良	輪高台貼り付け
459	C 2	須恵器	杯	SX349131	1／4	(13.0)	3.2	(9.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡青灰色	硬	良	
460	C 2	須恵器	杯蓋	SX349131	1／10	(17.1)	(1.7)		ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	淡青灰色	硬	良 1mm 黒砂粒多	
461	C 2	須恵器	壺	SX349131	1／2（体部）	最大腹径 (12.0)	(10.6)	(6.6)	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	淡灰色	硬	良	輪高台貼り付け
462	C 2	須恵器	甕	SX349131	1／6	(19.3)	(5.5)		ロクロナデ・タタキ	ロクロナデ・タタキ	淡灰色	硬	良 2mm 白細粒微細粒	
463	C 2	土師器	皿	SX349109	1／5	(15.0)	2.1		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	精良	口縁端部に幅3cmに渡ってススス付着
464	C 2	土師器	皿	SX349109	1／5	(15.0)	1.8		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 砂粒多	
465	C 2	土師器	皿	SX349109	1／5	(16.0)	2.2		磨滅・指オサエ	磨滅	淡赤褐色	良	良 砂粒多	
466	C 2	土師器	皿	SX349109	1／8	(17.0)	1.9		磨滅	磨滅	淡赤褐色	良	精良	
467	C 2	土師器	皿	SX349109	1／8	(19.0)	2.1		磨滅・指オサエ	磨滅・指オサエ	乳赤褐色	良	良	
468	C 2	土師器	皿	SX349109	1／8	(19.0)	(1.9)		ナデ	ナデ	淡赤褐色	良	良 1mm 赤、黒砂粒少	
469	C 2	土師器	皿	SX349109	1／8	(12.6)	1.9		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良 1mm 褐砂粒多	
470	C 2	土師器	杯	SX349109	1／12	(16.8)	(3.0)		ナデ	ナデ	淡茶褐色	良	良	
471	C 2	土師器	杯	SX349109	1／8	(14.0)	2.6		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	精良	
472	C 2	土師器	杯	SX349109	1／8	(15.0)	2.6		ナデ	ナデ	淡茶褐色	良	良 0.5mm 赤、黒砂粒少	
473	C 2	土師器	杯	SX349109	1／5	(18.0)	2.8		ナデ	ナデ	淡赤褐色	良	良 0.5mm 黒砂粒少	
474	C 2	土師器	椀	SX349109	2／5	(17.0)	(4.6)		ナデ	磨滅	赤褐色	良	良	
475	C 2	土師器	甕	SX349109	1／10	(18.8)	(5.8)		ナデ	磨滅	赤褐色	良	精良	
476	C 2	黒色土器	杯	SX349109	1／8	(11.6)	3.5		ミガキ	ナデ・磨滅	黒色・淡茶褐色	良	精良	内面のみ炭素付着
477	C 2	須恵器	杯蓋	SX349109	1／10	(14.4)	(1.9)		ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良	

478	C 2	緑釉陶器	皿	SX349109	1／12	(13.6)	(1.6)	—	不詳	ミガキ・ロクロナデ	暗緑灰色	硬	精良	京都産
479	C 2	土師器	皿	SX349110	1／10	(10.2)	1.9		ナデ	磨滅	赤褐色	良	良 砂粒多	
480	C 2	土師器	皿	SX349110	1／5	(12.8)	1.1		ナデ	磨滅	赤褐色	良	良 1mm 褐砂粒多	
481	C 2	土師器	皿	SX349110	2／3	15.8	2.0		ナデ・磨滅	ナデ・指オサエ	乳赤褐色	良	良 1.5mm 褐、黒砂粒多	
482	C 2	土師器	皿	SX349110	1／10	(18.4)	2.5		ナデ	磨滅	赤褐色	良	精良	
483	C 2	土師器	椀	SX349110	1／12	(14.8)	3.2		ナデ	ナデ	淡赤褐色	良	良 1.5mm 黒、灰細粒多	
484	C 2	土師器	椀	SX349110	1／4	(12.6)	(3.8)		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良 砂粒多	
485	C 2	土師器	椀	SX349110	1／3	(13.3)	3.4		ナデ	ナデ・指オサエ・削り	赤褐色	良	良	
486	C 2	土師器	甕	SX349110	1／5	(13)	(5.8)		ナデ・指オサエ	磨滅	赤褐色	良	良 1.5mm 黒、褐細粒多	
487	C 2	須恵器	杯	SX349110	1／4	(13.3)	3.3	(10.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	良	良	
488	C 2	須恵器	杯	SX349110	3／5	13.2	4.5	8.0	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰褐色	やや軟	良	
489	C 2	須恵器	杯	SX349110	1／10	(14.2)	5.1	(10.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡青灰色	硬	良	輪高台貼り付け
490	C 2	須恵器	鉢	SX349110	1／10	(15.4)	(8.3)		ロクロナデ	ロクロナデ	黒灰色	やや軟	良 1mm 白砂粒少	生焼け
491	C 2	土師器	皿	SD01	1／3	(10.8)	1.5		ナデ	ナデ・指オサエ	黄褐色	良	良 1mm 赤、褐砂粒少	
492	C 2	土師器	皿	SB349115	1／5	(13.6)	2.6		ナデ	ナデ・指オサエ	淡黄褐色	良	良 1.5mm 赤、灰、黒砂粒多	棟持筋東から２基目の柱穴
493	C 2	土師器	皿	P455	1／4	(14.4)	2.3		ナデ	ナデ	淡橙色	良	精良	
494	C 2	土師器	皿	P304	1／8	(12.0)	2.0		ナデ	ナデ	淡橙褐色	良	良	
495	C 2	瓦器	椀	SK349129	ほぼ完形	13.0	4.0	5.0	ミガキ	ナデ・指オサエ	灰褐色	良	精良	SB349113の柱穴に切られる
496	C 2	瓦器	椀	SB349116	底部完存	—	(1.4)	5.9	磨滅・ミガキ	磨滅	暗黒灰色	良	精良	北辺筋西から２基目の柱穴
497	C 2	瓦器	椀	P333	1／10	(13.8)	(4.0)	—	指ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ・指オサエ	暗黒灰色	良	精良	
498	C 2	瓦器	椀	SB349125	1／6	(15.6)	(4.8)	—	磨滅・ミガキ	ナデ・指オサエ	淡灰色	良	精良	北辺筋中央柱穴

499	C 2	土師器	皿	P241	1／4	(11.4)	1.0		ナデ	ナデ・指オサエ	淡灰褐色	良	良	内面底部にスス付着
500	C 2	土師器	皿	P241	1／8	(12.0)	1.2		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡黄褐色	良	精良	
501	C 2	土師器	皿	SB349123	1／10	(13.0)	1.7		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良	
502	C 2	土師器	皿	P140	1／8	(13.2)	(1.3)		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡灰褐色	良	良 灰、白微細粒多	
503	C 2	土師器	皿	P140	1／8	(15.6)	1.5		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良 0.5mm赤砂粒多	
504	C 2	土師器	皿	P130	1／8	(12.0)	(1.7)		ナデ	ナデ	淡橙褐色	良	精良	
505	C 2	土師器	皿	P188	1／9	(12.4)	1.8		ナデ	ナデ	橙褐色	良	良 砂粒多	
506	C 2	土師器	皿	SB349122	1／8	(12.0)	1.6		ナデ	ナデ	淡赤褐色	良	良	北東隅柱穴
507	C 2	土師器	皿	P218	1／2	(13.8)	2.7		磨滅・指オサエ	磨滅	淡黄褐色	やや良	精良	２か所にスス付着
508	C 2	土師器	皿	SD349106	1／3	(14.4)	2.5		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	混じり込み
509	C 2	土師器	皿	SB349122	1／10	(16.0)	2.7		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	橙茶褐色	良	良 1.5mm赤、黒細粒多	東辺筋北から２基目の柱穴
510	C 2	土師器	皿	P298	1／3	(19.2)	2.7		磨滅・指オサエ	ナデ・指オサエ	橙褐色	良	良 2mm細粒少	
511	C 2	土師器	皿	P164	1／20	(26.8)	2.5		磨滅	磨滅	橙褐色	良	良 砂粒多	
512	C 2	土師器	杯	P18	1／8	(16.0)	2.8		ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	淡茶褐色	良	1mm砂粒多	
513	C 2	土師器	杯	SB349126	1／3	(15.9)	3.3		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	やや粗 1mm砂粒多	南側柱穴群
514	C 2	土師器	椀	SB349121	2／5	(10.0)	2.7		磨滅・指オサエ	磨滅・指オサエ	赤褐色	良	良 0.5mm砂粒多	北東隅柱穴
515	C 2	土師器	椀	SD252	1／8	(11.8)	3.1	－	磨滅	磨滅	橙褐色	良	良 1mm白、灰砂粒少	
516	C 2	土師器	椀	SD252	1／6	(12.2)	(3.2)	－	ナデ	ナデ・指オサエ	茶褐色	良	良 砂粒多	
517	C 2	土師器	杯	SB349121	1／6	(14.8)	(3.2)		ナデ	ナデ・指オサエ	橙茶褐色	良	良 1.5mm黒砂粒多	北東隅
518	C 2	土師器	杯	SB349121	1／8	(18.0)	6.2	(9.8)	磨滅	磨滅	橙褐色	良	良 砂粒多	北東隅
519	C 2	土師器	壺	P180	1／8	(8.9)	(3.5)	－	ナデ	ナデ・ヘラミガキ	淡茶褐色	硬	精良	
520	C 2	土師器	壺	P20	1／8	(8.0)	(4.5)	－	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	淡茶褐色	硬	精良	
521	C 2	土師器	甕	P169	1／6	(16.4)	(3.3)		ナデ・指オサエ	ナデ	橙茶褐色	良	良 2.5mm白細粒 1mm砂粒多	

522	C 2	黒色土器	甕	P294	1／5	(17.0)	(6.0)		磨滅	ナデ・磨滅	黒灰色・黒色	硬	精良	外面頸部～内面全体に黒
523	C 2	土師器	甕	SK95	1／3	(35.0)	(5.8)		ナデ	ナデ・指オサエ	茶褐色	良	やや粗 1～2mm 白、褐砂粒多	
524	C 2	土師器	甕	P20	1／8	(18.0)	(4.4)		ナデ・指オサエ	ナデ・タタキ	暗茶褐色	良	良 1mm 砂粒多	外面頸部～口縁部炭化物・口縁部内面～外面にスス付着
525	C 2	土師器	甕	SB349124	1／6	(16.0)	(3.9)		ナデ	ナデ・指オサエ	茶褐色	硬	良 4mm 白細粒多 1mm 砂粒多	外面スス付着・北東隅柱穴
526	C 2	土師器	甕	P158	1／3	(22.8)	(17.0)		ナデ	ナデ・ハケ目	暗茶褐色	良	やや粗 1.5mm 白細粒多	内外面共に頸部より下スス付着
527	C 2	須恵器	杯蓋	SD349103	1／6	(15.8)	(2.0)		ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	明灰色	やや軟	精良	
528	C 2	須恵器	杯蓋	P168	1／7	(14.0)	(0.9)		ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	青灰色	硬	精良	
529	C 2	須恵器	鉢	SB349121	1／12	(16.0)	(9.6)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	濃灰色～淡灰色	良	精良	北東隅柱穴
530	C 2	須恵器	壺	SB349119	1／8	－	(2.5)	(7.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰白色	やや軟	良	北東隅柱穴
531	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SB349119	1／4（底部）	－	(1.0)	(6.0)	不詳・ミガキ	不詳	明茶灰色	硬	精良	全面施釉・東海系・南東隅柱穴
532	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	SB349126	1／5（底部）	－	(1.8)	(7.2)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡緑灰色	軟（土師質）	精良	全面施釉・京洛北産・素地は淡黄灰色・北側柱穴群
533	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	P350	1／4（底部）	－	(1.3)	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ・ミガキ	淡緑灰色	良	精良	高台内面無釉・京都産・素地淡褐色土
534	C 2	緑釉陶器	椀・皿底部	P147	ほぼ完形	－	(1.2)	7.0	ミガキ・ロクロナデ	ミガキ・ロクロナデ	淡緑灰色～緑橙灰色	硬	精良	底面外面無釉・京都産
535	C 2	無釉陶器	椀	SB349122	1／10	(19.2)	(5.0)		ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	灰色	硬	精良	京都産・東辺筋北から２基目の柱穴
536	C 2	無釉陶器	椀	SB349119	1／4（底部）	－	(2.2)	(7.2)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	青灰色	硬	精良密	京都産・北西隅柱穴

537	C 2	灰釉陶器	椀	SD252	1／8	(11.0)	(3.4)	－	ミガキ・ロクロナデ	ロクロナデ	明灰色	硬	精良	東海灰釉椀(猿投産)・つけ掛け施釉
538	C 2	灰釉陶器	椀	SB349122	1／4(底部)	－	(1.9)	(6.0)	ミガキ・ロクロナデ	ミガキ・ロクロナデ	明緑灰色	硬	精良	東海灰釉椀、高台内面施釉なし・内面見込み部・東北隅柱穴
539	C 2	土製品	土馬	P267	脚部	長2.5	径0.9				淡黄褐色	良	精良	
540	C 2	須恵器	高杯	P31	ほぼ完形(杯部)	12.7	(5.1)	－	磨滅	ロクロナデ・削り	淡灰色	やや軟	精良	
541	C 2	土師器	甕(口縁部欠損)	SX349128	ほぼ完形(体部)	－	(24.3)		磨滅	磨滅	淡茶褐色	やや軟	良 1mm砂粒多	
542	C 2	縄文土器	深鉢	P272	1／8	最大腹径'(33.0)	(12.5)	－	ナデ・指オサエ	磨滅・指オサエ	暗茶褐色	良	粗 5mm白細粒2～3mm細粒多	
543	C 2	須恵器	杯	包含層	1／2	(14.0)	4.0	(5.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	硬	精良	糸切り
544	C 2	須恵器	杯	包含層	1／2	(14.7)	4.6	(10.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	硬	精良	
545	C 2	灰釉陶器	壺底部	包含層	1／4	－	(2.8)	(10.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	明灰色	硬	精良	内面釉付着・東海系灰釉
546	C 2	須恵器	蓋	包含層	1／4	(13.3)	3.9		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ	暗灰色	硬	良	外面自然釉
547	D 3	土師器	Ⅲ	SX12西側造成土	1／4	(5.6)	1.0		ナデ	ナデ・指オサエ	橙褐色	良	精良	
548	D 3	土師器	Ⅲ	SX12東側造成土	1／5	(6.4)	1.2		ナデ	ナデ・指オサエ	淡褐色	良	良	
549	D 3	土師器	Ⅲ	SX12	1／4	(6.8)	1.7		ナデ	ナデ・指オサエ	橙褐色	良	良	
550	D 3	土師器	Ⅲ	SX12東側造成土	1／5	(7.2)	1.9		ナデ	ナデ・指オサエ	橙褐色	良	精良	
551	D 3	土師器	Ⅲ	SX12東側造成土	1／2	7.4	1.2		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	橙褐色	良	良	
552	D 3	土師器	Ⅲ	SD05	1／4	(6.0)	1.5		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良	
553	D 3	土師器	Ⅲ	SD05	1／2	(5.6)	1.3		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良	
554	D 3	土師器	Ⅲ	SD05	1／5	(6.8)	1.2		ナデ	ナデ・指オサエ	暗茶褐色	良	良	
555	D 3	土師器	Ⅲ	SD04	1／4	(6.8)	1.5		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	
556	D 3	土師器	Ⅲ	SK17	1／5	(7.6)	1.6		ナデ・指オサエ	ナデ	淡茶褐色	良	良 1mm砂粒少	
557	D 3	土師器	Ⅲ	SX12東側造成土	1／4	(7.6)	1.5		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良	
558	D 3	土師器	Ⅲ	SX12	1／2	(9.0)	1.7		ナデ	ナデ	茶褐色	良	精良	
559	D 3	土師器	Ⅲ	SK10	1／6	(9.0)	1.6		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	

560	D 3	土師器	Ⅲ	SX12東側造成土	1／4	(9.8)	1.9		ナデ	ナデ・指オサエ	黄褐色	良	良	
561	D 3	土師器	Ⅲ	SD05	完形	9.4	2.2		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	
562	D 3	土師器	Ⅲ	SX12東側造成土	1／8	(10.4)	1.9		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡黄褐色	良	良	
563	D 3	土師器	Ⅲ	SD15	1／8	(10.0)	2.0		ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良	
564	D 3	土師器	Ⅲ	SX12東側造成土	1／5	(10.9)	1.3		ナデ	ナデ・指オサエ	淡黄褐色～黒褐色	良	良 0.5mm砂粒少	外面スス付着
565	D 3	土師器	Ⅲ	SX12東側造成土	1／6	(11.2)	1.5		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	黄褐色	良	良 1mm白、砂粒 微細粒	
566	D 3	土師器	Ⅲ	SX12西側造成土	1／8	(12.8)	2.2		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	精良	
567	D 3	近世陶器椀	椀	SX394107	1／3	(10.7)	7.1	(4.7)	不詳	不詳	淡黄褐色	硬	精良	内外面スス付着・貫入・京焼
568	D 3	近世陶磁椀（半磁器）	染付椀	SD12西側造成土	1／6	(10.2)	6.5	(4.6)	不詳	不詳	灰白色	硬	精良	肥前磁器椀
569	D 3	近世陶磁椀	染付椀	SK06	1／2	(11.6)	5.6	(4.4)	不詳	不詳	白色	硬	精良	伊万里・蛇の目釉剝ぎ
570	D 3	近世陶磁椀	染付椀	SD05	1／2	(9.8)	6.2	(3.6)	不詳	不詳	白色	硬	精良	伊万里
571	D 3	近世陶磁椀（半磁器）	染付椀	SX394107	1／8（底部完形）	(12.4)	3.7	(4.5)	不詳	不詳	青白色	硬	精良	伊万里・蛇の目釉剝ぎ
572	D 3	近世陶磁器	染付椀	SD05	1／2	(7.4)	6.0	(3.9)	不詳	不詳	青白色～緑白色	硬	精良	伊万里
573	D 3	近世陶磁椀	染付椀	SX394107	ほぼ完形	11.0	6.5	4.3	不詳	不詳	青白色	硬	精良	伊万里・肥前焼
574	D 3	陶器	すり鉢	SX394107	1／2	(35.8)	14.0	(15.0)	磨滅・ナデ・ハケ目	ナデ	赤褐色	良	良 2～8mmの白い礫	使用による磨滅
575	D 3	陶器	すり鉢	SD05	1／3	(35.8)	14.4	(16.4)	ナデ・ハケ目	ナデ	暗紫褐色～赤茶褐色	良	やや粗 2～8mmの白い礫	使用による磨滅
576	D 1	土師器	Ⅲ	SX34924	1／8	(9.5)	1.3		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 1mm赤砂粒多	
577	D 1	土師器	Ⅲ	SX34924	1／2	(9.1)	1.7		ナデ	ナデ・指オサエ	明茶褐色	良	良 1mm赤砂粒多	
578	D 1	土師器	Ⅲ	SX34924	1／7	(8.4)	1.1		ナデ	ナデ・指オサエ	橙褐色	良	良	
579	D 1	土師器	Ⅲ	SX34924	1／3	(9.2)	1.2		ナデ	ナデ・指オサエ	淡橙褐色	良	良	
580	D 1	土師器	Ⅲ	SX34924	1／5	(9.3)	1.4		ナデ	ナデ・指オサエ	淡橙褐色	良	精良	

581	D 1	土師器	皿	SX34924	ほぼ完形	8.9	1.8		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良 0.5mm 砂粒 微細粒	
582	D 1	土師器	皿	SX34924	ほぼ完形	9.4	1.7		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良 1mm 赤砂粒 少	
583	D 1	土師器	皿	SX34924	1／4	(9.3)	1.8		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡橙褐色	良	良 1mm 赤砂粒 少	
584	D 1	土師器	皿	SX34924	1／6	(11.2)	(1.8)		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 1mm 赤砂粒 多	径 2mm程度の穿孔あり
585	D 1	土師器	皿	SX34924	1／12	(12.0)	(1.2)		ナデ	ナデ	淡赤褐色	やや軟	精良	
586	D 1	土師器	皿	SX34924	1／16	(16.0)	1.3		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	やや軟	精良	外面スス付着
587	D 1	瓦器	椀	SX34924	2／3	(14.2)	(4.8)	－	ミガキ	ミガキ	暗黒灰色	良	精良	
588	D 1	瓦器	椀	SX34924	1／2 (底部)		(1.7)	(11.2)	ミガキ	磨滅	暗灰色	良	精良	
589	D 1	瓦器	椀	SX34924	完形	13.7	4.7	5.0	ミガキ	ミガキ・指オサエ・ナデ	暗黒灰色	良	精良	
590	D 1	瓦器	椀	SX34924	ほぼ完形	14.0	4.3	6.0	ミガキ	ミガキ・指オサエ・ナデ	暗黒灰色	良	精良	
591	D 1	瓦器	椀	SX34924	完形	13.8	5.2	5.2	ミガキ	ミガキ・指オサエ・ナデ	灰黒色	良	精良	
592	D 1	瓦器	椀	SE34920	1／3	(15.4)	(4.5)	－	ミガキ	ナデ・指オサエ・ミガキ跡	灰白色	良	精良	
593	D 1	瓦器	椀	SE34920	1／3	(14.0)	(4.2)	－	ミガキ	ナデ・指オサエ・ミガキ	黒灰色	良	精良	
594	D 3	土師器	皿	SD394102	1／8	6.0	1.9	－	ナデ	ナデ	黄褐色	良	精良	
595	D 3	土師器	皿	SD394102	1／2	(14.4)	2.4		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡橙褐色	良	良	
596	D 3	土師器	杯	SD394102	1／4	(17.3)	3.8	－	ナデ	ナデ	赤褐色	良	精良	
597	D 3	土師器	甕	SD394102	1／5	(18.9)	(5.4)		ナデ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良 0.5mm 白砂粒 少	外面スス付着
598	D 3	無釉陶器	椀	SD394102	1／10	(15.4)	(4.6)	－	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	黄褐色～灰褐色	良	精良	京都産
599	D 1	土師器	皿	SD34914	1／3	(12.4)	1.9		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良	
600	D 1	土師器	皿	SD34914	1／5	(13.4)	1.8		磨滅・指オサエ	磨滅・指オサエ	淡茶褐色	やや軟	良	
601	D 1	土師器	皿	SD34914	1／5	(14.5)	1.8		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良	
602	D 1	土師器	杯	SD34914	1／6	(11.4)	2.5	－	ナデ	ナデ・指オサエ	橙色	良	良	

603	D 1	土師器	杯	SD34914	1／8	(20.0)	(4.7)	－	ナデ・指オサエ	ナデ	淡赤褐色	良	良 1mm 茶、白砂粒多	
604	D 1	土師器	杯	SD34914	1／8 (底部)	－	(1.5)	(13.6)	磨滅	磨滅・指オサエ	淡茶褐色	やや軟	良 1mm 赤砂粒少	輪高台貼り付け
605	D 1	土師器	椀	SD34914	1／8	(13.0)	(2.8)	－	ナデ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良	
606	D 1	土師器	甕	SD34914	1／4	(19.8)	(12.5)		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	暗橙褐色	良	良 3mm 白細粒多	外面スス跡
607	D 1	黒色土器	椀	SD34914	1／10	(13.8)	4.8	(6.2)	ミガキ	ナデ・指オサエ・磨滅	黒色・淡茶褐色	良	良 1mm 砂粒少	外面口縁部～内面にかけて炭素付着
608	D 1	須恵器	杯	SD34914	底部完形	－	(1.8)	8.8	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	良	輪高台貼り付け
609	D 1	須恵器	杯	SD34914	2／3 (底部)	－	(2.1)	8.7	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	軟	良 1.5mm 白細粒多	輪高台貼り付け
610	D 1	須恵器	杯	SD34914	1／8 (底部)	－	(1.4)	(9.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	乳灰色	やや軟	良	輪高台貼り付け
611	D 1	須恵器	杯	SD34914	1／8 (底部)	－	(2.2)	(10.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	精良	輪高台貼り付け
612	D 1	須恵器	杯	SD34914	1／2	(15.8)	4.6	7.5	ロクロナデ	ロクロナデ	乳灰色	やや軟	良	
613	D 1	須恵器	杯	SD34914	1／10	(12.8)	(1.0)		ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良	
614	D 1	須恵器	壺	SD34914	1／4	20.0	(14.0)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	1.5mm 細粒少	外面自然釉
615	D 1	須恵器	甕	SD34914	1／24	(30.8)	(2.7)		ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	茶褐色	硬	精良	東海産
616	D 1	須恵器	甕	SD34914	1／3	(30.0)	(13.5)		ロクロナデ・タタキ	ロクロナデ・タタキ・ケズリ	灰色	硬	精良	
617	D 1	須恵器	甕	SD34914	1／8	(55.0)	(11.3)		ロクロナデ・タタキ	ロクロナデ・タタキ・ケズリ	灰色	硬	良 4mm 白細粒少	
618	D 1	緑釉陶器	椀	SD34914	1／6	(16.4)	(4.5)	－	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	濃緑色	硬	精良	輪花装飾椀・京都産
619	D 1	緑釉陶器	椀・皿底部	SD34914	1／6 (底部)	－	(1.5)	(6.0)	磨滅	ミガキ	茶灰色	良	精良	全面施釉・土師質・京洛北産
620	D 3	土師器	椀	SD394106	1／6	(11.8)	(3.0)	－	磨滅	ナデ・指オサエ	橙褐色	良	良	
621	D 3	土師器	椀	SD394106	1／3	(13.0)	3.3		ナデ・指オサエ	磨滅・指オサエ	淡赤褐色	良	良	
622	D 3	土師器	椀	SD394106	1／5	(13.2)	(2.5)	－	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	精良	
623	D 3	土師器	皿	SD394106	ほぼ完形	16.3	2.8		磨滅	磨滅・指オサエ・ケズリ	橙褐色	良	良	

624	D 3	黒色土器	椀	SD394106	底部完形	－	(2.6)	8.5	ミガキ・指オサエ	ミガキ・ナデ	黒色	良	精良	輪高台貼り付け・全面炭素付着
625	D 3	須恵器	杯	SD394106	1／10	(13.8)	(3.4)		ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	良	良	
626	D 3	須恵器	杯	SD394106	1／10	(14.0)	4.4	(9.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	良	精良	輪高台貼り付け
627	D 3	須恵器	杯	SD394106	1／12	(13.6)	3.8	(8.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良	輪高台貼り付け
628	D 3	須恵器	鉢	SD394106	1／3	(22.7)	18.5	(11.6)	ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	青灰色	硬	良	輪高台貼り付け
629	D 1	土師器	皿	SB34923	1／10	19.8	(1.8)		ナデ	ナデ	赤褐色	良	良	
630	D 1	土師器	耳皿	SB34927	2／3	7.4×5.7	2.5	3.7	ナデ	ナデ	灰黄褐色	良	良	
631	D 1	土師器	杯	SB34926	1／10	(19.0)	5.8	(8.0)	磨滅	磨滅	淡茶色～淡赤褐色	やや軟	良	輪高台
632	D 1	須恵器	杯蓋	SB34918	1／15	(17.0)	(1.1)		ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	良	
633	D 1	須恵器	杯	SB34922	1／15	(18.1)	(2.5)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	暗青灰色	硬	良	
634	D 1	須恵器	杯	SB34922	1／7（底部）	－	(2.8)	(11.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	やや軟	良	輪高台貼り付け
635	D 1	須恵器	杯	SB34922	1／7（底部）	－	(1.0)	(10.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	濃灰色	硬	精良	輪高台貼り付け
636	D 3	須恵器	杯	SB394111	1／8	(15.0)	3.0	－	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色	やや軟	良	
637	D 3・	灰釉陶器	皿	SB394108	1／8	(14.0)	(1.7)	－	不詳	ロクロナデ	淡茶灰色	硬	精良	東海産
638	D 3	無釉陶器	椀	SB394108	1／4	(17.8)	(3.9)	－	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡灰白色	硬	精良	輪花装飾椀
639	D 3	無釉陶器	椀	SB394108	1／15	(18.6)	(3.3)	－	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡青灰色	硬	精良	京都産
640	D 3	無釉陶器	椀・皿底部	SB394108	底部完形	－	(1.4)	6.4	ロクロナデ・ミガキ	ヘラケズリ・ミガキ	暗灰色	硬	精良	外面窯記号「×」・内面自然釉・京都産
641	D 3	須恵器	椀	SF394103整地土	1／2（底部）	－	(2.2)	(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	やや軟	良	糸切り底
642	D 3	須恵器	杯	SF394103整地土	1／8（底部）	－	(1.5)	(9.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良	
643	D 3	緑釉陶器	椀	SF394103整地土	1／2（底部）	－	(1.5)	(7.1)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	濃緑色	硬	精良	東海産
644	D 3	緑釉陶器	椀・皿底部	SF394103整地土	底部完形	－	(1.5)	6.6	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡黄灰色	軟（土師質）	精良	底部外面に窯記号「×」・京洛北産
645	D 3	緑釉陶器	椀・皿底部	SF394103整地土	1／2（底部）	－	(2.8)	(7.2)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	濃緑灰色	軟	精良	京都産
646	D 1	土師器	皿	SK34915	1／8	(14.0)	1.8		ナデ	ケズリ・ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良 赤砂粒少	良	

647	D 1	土師器	皿	SK34915	1／2	15.1	1.9		ナデ	ナデ・指オサエ	淡黄褐色	良	精良	外面スス付着
648	D 1	土師器	皿	SK34915	4／5	15.8	1.9		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良	
649	D 1	土師器	皿	SK34915	1／5	(16.2)	(2.5)		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	やや軟	良 赤砂粒微	
650	D 1	土師器	椀	SK34915	1／7	(12.4)	2.4	4.0	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	良 砂粒少	
651	D 1	土師器	椀	SK34915	1／5	(12.9)	2.5	6.0	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡橙褐色	良	良	
652	D 1	土師器	椀	SK34915	1／10	(13.2)	(3.3)	－	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡黄褐色	良	良 1mm砂粒微	
653	D 1	土師器	椀	SK34915	1／10	(13.8)	3.5	7.4	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	黄褐色	良	精良	内面見込みスス付着
654	D 1	土師器	杯	SK34915	1／6	(15.5)	2.8	－	ナデ・指オサエ	ナデ	淡赤褐色	良	良 赤砂粒微	
655	D 1	土師器	杯	SK34915	2／3	16.3	3.6	8.0	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡橙褐色	良	良 1mm砂粒微	
656	D 1	土師器	杯	SK34915	1／6	(14.8)	(3.6)	－	ナデ	ナデ・指オサエ	茶褐色	良	良	
657	D 1	土師器	杯	SK34915	1／8	(14.1)	(4.1)	－	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	淡橙褐色	良	良 赤砂粒微	
658	D 1	土師器	甕	SK34915	1／14	(17.8)	(3.5)	－	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	淡茶褐色	良	良 砂粒少	
659	D 1	土師器	甕	SK34915	1／6	(19.5)	(5.8)		ナデ・ハケ目(口縁部)	ナデ・ハケ目	淡乳褐色	良	良 細粒少	外面スス付着
660	D 1	土師器	高杯	SK34915	1／10	(29.0)	(2.0)	－	ナデ	ナデ	茶褐色	良	良	
661	D 1	土製品	土馬	SK34915	脚部				ナデ	ナデ	淡橙褐色	良	良	
662	D 1	須恵器	蓋	SK34915	1／3	(14.0)	(1.8)		ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	青灰色	硬	良	
663	D 1	須恵器	杯	SK34915	1／10	(12.4)	3.9	6.6	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	良	精良	
664	D 1	須恵器	杯	SK34915	1／6	(13.6)	3.0	6.4	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰褐色	良	精良	
665	D 1	須恵器	杯	SK34915	1／10	(17.4)	(4.1)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	乳灰色	軟	精良	
666	D 1	緑釉陶器	椀・皿底部	SK34915	1／4(底部)	－	(2.1)	(7.8)	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	明黄褐色	軟	精良	京洛北産・全面施釉
667	D 1	緑釉陶器	皿	SK34915	1／5	(13.3)	3.1	6.2	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	淡緑褐色	軟	精良	京都産・全面施釉
668	D 1	土師器	杯	SK34916	ほぼ完形	13.0	2.5		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡橙褐色	良	良	
669	D 1	須恵器	杯蓋	SK34916	1／5	(13.8)	(2.2)		ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	青灰色	硬	良	
670	D 1	土師器	甕	SK34916	1／5	17.5	(5.4)		ナデ・指オサエ	ナデ・ハケ目	淡茶褐色	良	良 細粒多	体部外面スス付着
671	D 1	土師器	甕	SK34916	1／6	(29.6)	(7.7)		ナデ・指オサエ	ナデ・タタキ	淡橙茶褐色	良	良	
672	D 1	土師器	高杯	SK34916	1／4	(32.0)	(11.0)	－	ナデ・指オサエ	ナデ・ヘラケズリ	淡赤褐色	良	良	杯部口縁内面にスス付着

673	D 3	土師器	皿	SX394104	ほぼ完形	14.5	2.6		ナデ	ナデ・指オサエ・ケズリ	橙褐色	良	良	
674	D 3	土師器	杯	SX394104	1／12	(19.1)	(2.8)	－	ナデ	ナデ	淡赤褐色	良	精良	
675	D 3	土師器	椀	SX394104	1／5	(13.5)	3.5		ナデ	ナデ・指オサエ	淡黄灰褐色	良	良	
676	D 3	土師器	椀	SX394104	1／8	(13.9)	3.5	10.0	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡橙褐色	良	良	
677	D 3	土師器	皿	SX394104	1／10	(25.7)	4.3	20.0	ナデ・指オサエ	ナデ・ヘラオサエ	茶褐色	良	精良	
678	D 3	須恵器	蓋	SX394104	完形	17.9	3.8		ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	青灰色	硬	良	
679	D 3	須恵器	杯	SX394104	2／5	(12.6)	4.4	8.4	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	良	
680	D 3	須恵器	杯	SX394104	1／4	(12.6)	3.5	(5.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰褐色	やや軟	良	
681	D 3	須恵器	杯	SX394104	1／2	(16.1)	5.9	10.4	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	良	輪高台貼り付け
682	D 1	須恵器	椀	SE34958	1／8	(14.0)	(2.5)	－	磨滅	ナデ・磨滅	乳白色	やや軟	良	
683	D 1	須恵器	杯蓋	SE34958	1／12	(14.4)	(0.7)		ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	濃灰色	硬	精良	
684	D 1	須恵器	壺	SE34958	1／2（底部）	－	(4.5)	(7.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	精良	輪高台貼り付け
685	D 1	須恵器	壺	SE34958	－	－	(9.4)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	濃灰色	硬	精良	双耳壺・自然釉
686	D 1	土師器	皿	SK34925	ほぼ完形	15.2	3.0		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	橙色	良	良	
687	D 1	土師器	杯	SK34925	ほぼ完形	13.9	4.2		ナデ・指オサエ	指オサエ・磨滅	橙褐色	良	良 0.5mm赤砂粒多	
688	D 1	土師器	皿	SK34955	1／6	(16.2)	(2.4)	－	ナデ	ナデ・ミガキ	赤橙褐色	良	精良	
689	D 1	土師器	皿	SK34955	1／16	(21.4)	2.6		ナデ・暗文	ナデ	赤褐色	良	良 白砂粒微	
690	D 1	土師器	椀	SK34955	1／10	(9.2)	(1.9)		磨滅	磨滅	淡黄褐色	良	精良	
691	D 1	土師器	椀	SK34955	1／8	(10.0)	(2.8)	－	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	明茶褐色	良	精良	
692	D 1	須恵器	杯蓋	SK34956	1／6	(21.2)	(2.1)		ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	淡灰色	やや軟	良 灰細粒微	
693	D 1	須恵器	壺	SD34929	1／3（底部）	－	(2.5)	(7.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	良	輪高台貼り付け・外面自然釉
694	D 1	須恵器	壺	SD34929	1／3（底部）	－	(3.2)	(9.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	濃灰色	硬	良	輪高台貼り付け
695	D 1	須恵器	杯	SD34929	1／7（底部）	－	(1.8)	(10.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	淡灰色	やや軟	良	
696	D 1	須恵器	杯	SD34929	1／12（底部）	－	(1.4)	(10.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	良	輪高台貼り付け
697	D 1	土師器	皿	P177	1／4	(9.4)	1.9	7.0	ナデ	ナデ	茶褐色	良	良	
698	D 1	須恵器	杯	P177	1／6（底部）	－	(1.4)	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	良	輪高台貼り付け

699	D 1	須恵器	杯	P177	1／8（底部）	－	(1.7)	(8.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	良	輪高台貼り付け
700	D 1	土師器	杯	SD296	1／8	(18.3)	(2.6)	－	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	良 白細粒微	
701	D 1	須恵器	杯	SD296	1／8（底部）	－	(1.9)	(10.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	乳灰色	良	良	輪高台貼り付け
702	D 1	土師器	Ⅲ	P87	1／10	(6.8)	1.2		ナデ	ナデ	黄褐色	良	良	口縁端部スス付着・中世
703	D 1	土師器	Ⅲ	P95	1／6	(9.5)	1.5		ナデ	ナデ・指オサエ	淡赤褐色	良	良 1mm砂粒多	
704	D 1	土師器	Ⅲ	P171	1／4	(10.2)	2.4	5.8	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡茶褐色	良	精良	
705	D 1	瓦器	Ⅲ	SA34928	1／8	9.6	1.4		ミガキ	ナデ	灰色	硬	精良	
706	D 1	土師器	Ⅲ	SK48	1／16	(16.2)	2.1		ナデ	ナデ	淡橙褐色	良	良	
707	D 3	土師器	Ⅲ	P73	1／8	(17.8)	2.4		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	橙褐色	良	精良	
708	D 1	土師器	杯	P347	1／8	(16.8)	(2.9)		ナデ	ナデ・磨滅	橙褐色	良	良 1mm白、黒砂粒	
709	D 1	土師器	杯	P75	1／6	(8.5)	(2.2)		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	橙褐色	良	良 砂粒微	
710	D 1	土師器	杯	P336	1／5	(16.0)	(3.5)	－	磨滅	磨滅	橙茶褐色	良	良 1mm赤砂粒多	外面スス付着
711	D 1	土師器	甕	P191	1／8	(21.6)	(8.2)		ナデ・ハケ	ナデ・指オサエ・ハケ目	淡茶褐色	良	良 1.5mm砂粒多	
712	D 1	須恵器	杯蓋	SD34953	1／10	－	－	－	ロクロナデ	自然釉のため不詳	灰色	良	良	
713	D 1	須恵器	蓋	P75	1／2	(14.0)	1.5		ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	微	
714	D 1	須恵器	蓋	P176	1／8	(16.8)	(0.8)		ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	良	
715	D 1	須恵器	杯	P174	1／10	(13.0)	3.4	(9.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	精良	
716	D 1	須恵器	杯	P248	1／10	(12.8)	(3.2)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	精良	
717	D 3	須恵器	杯	SD394101	1／4	(15.0)	(5.0)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	良	
718	D 3	須恵器	杯	P127	1／8	(10.5)	4.2	(7.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	良	良	輪高台
719	D 3	須恵器	杯	P45	1／5	(10.4)	3.8	(6.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良	輪高台貼り付け
720	D 3	須恵器	杯	SD394101	1／9（底部）	－	(2.0)	(7.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良	輪高台貼り付け
721	D 1	須恵器	杯	P120	1／5（底部）	(15.6)	4.0	(10.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	精良	輪高台
722	D 1	須恵器	壺	P47	1／6（底部）	－	(2.2)	(9.4)	ロクロナデ	自然釉のため不詳	灰色	良	良	輪高台・外面自然釉
723	D 1	須恵器	杯	P325	1／5（底部）	－	(1.9)	(11.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	濃灰色	硬	精良	輪高台貼り付け
724	D 3	須恵器	杯	P85	1／7（底部）	－	(1.8)	(12.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	良	精良	輪高台貼り付け
725	D 1	須恵器	盤	SD69	1／3	(22.6)	4.1	(16.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	良 1mm白砂粒多	輪高台貼り付け

726	D 1	須恵器	壺	SK34930	体部完形	－	(11.0)	7.5	ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	灰色	良	精良	糸切り
727	D 3	須恵器	杯	SB394112	1／8（底部）	－	(3.0)	(9.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	硬	精良	輪高台貼り付け
728	D 1	須恵器	杯	P123	1／8（底部）	－	(4.0)	(10.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	良	精良	輪高台貼り付け
729	D 3	緑釉陶器	底部	P85	底部完形	－	(1.5)	6.0	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ・ミガキ	暗緑茶色	良	精良	京都産・高台底面無施釉
730	D 1	緑釉陶器	羽釜	P47	1／12	(14.4)	(3.6)	－	ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	淡黄灰色	軟（土師質）	精良	外面のみ施釉
731	D 1	輸入陶磁器	椀	P339	1／9	(13.0)	(2.7)	－	不詳	不詳	淡黄灰色	硬	精良	長沙窯
732	D 1	須恵器	杯身	SH34960	1／16	(11.2)	(2.4)		ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	灰色	良	良	
733	D 1	須恵器	杯身	SR34952	1／2	(11.4)	5.0		ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	青灰色	硬	良 0.5mm 砂粒多	
734	D 1	須恵器	壺頸部	SR34952	1／8	－	(5.0)	－	ロクロナデ	ロクロナデ・波状文	青灰色	良	良 白砂粒多	表面磨耗著しい
735	D 1	須恵器	甕	P189	1／6	(28.0)	(5.3)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	濃灰色	硬	良	口頸部内面自然釉付着
736	D 1	土師器	甕	SX34965	ほぼ完形	13.8	24.3		磨滅・指オサエ	磨滅	淡黄茶褐色	良	良 2mm 細粒少	布留式・外面に黒斑
737	D 1	弥生	壺	SR34951	2／3	16.6	(7.5)	－	磨滅	磨滅	淡赤褐色	良	良 2mm 砂粒多	
738	D 1	土師器	高杯	P181	1／5	(19.8)	(6.5)	－	磨滅	磨滅	暗赤褐色	やや軟	粗 2.5mm 細粒多	
739	D 1	弥生	壺	SB34926	1／3（底部）	－	(2.0)	(3.6)	ナデ	磨滅・指オサエ	淡橙褐色	良	良 1mm 砂粒多	混じり込み
740	D 1	弥生	甑	P244	底部完形	－	(2.8)	4.5	ハケ・ナデ	タタキ・ナデ	淡茶褐色	良	良 3mm 細粒多	底に約1cm穿孔
741	D 1	弥生	高杯	SB34957	柱部のみ	－	(6.4)	－	ハケ・ナデ・しぼり	ナデ・ヘラミガキ	淡橙褐色	良	やや粗	4方向にスカシ；混じり込み
742	D 1	弥生	高杯	SB34957	－	－	(5.8)	－	ナデ・しぼり	ナデ	淡赤褐色	良	良 1.5mm 砂粒多	混じり込み
743	D 1	弥生	壺底部	SH34959	底部完形	－	(6.5)	5.0	磨滅・指オサエ	磨滅・ナデ	淡赤褐色	良	やや粗 3mm細粒多	二次焼成
744	D 1	弥生	小形高杯	SH34959	ほぼ完形（脚裾部）	－	(4.8)	6.5	ナデ	ナデ・指オサエ・ヘラミガキ	淡茶褐色	良	良 2mm 砂粒多	
745	D 1	弥生	高杯杯部	SH34959	1／2	(15.6)	(5.5)		磨滅	ナデ	橙褐色	良	良 3mm 細粒多	一部二次焼成
746	D 1	弥生	高杯裾部	SH34959	1／4	－	(4.6)	(14.6)	ナデ	磨滅・指オサエ	淡茶褐色	良	良 3mm 細粒多	スカシ有り

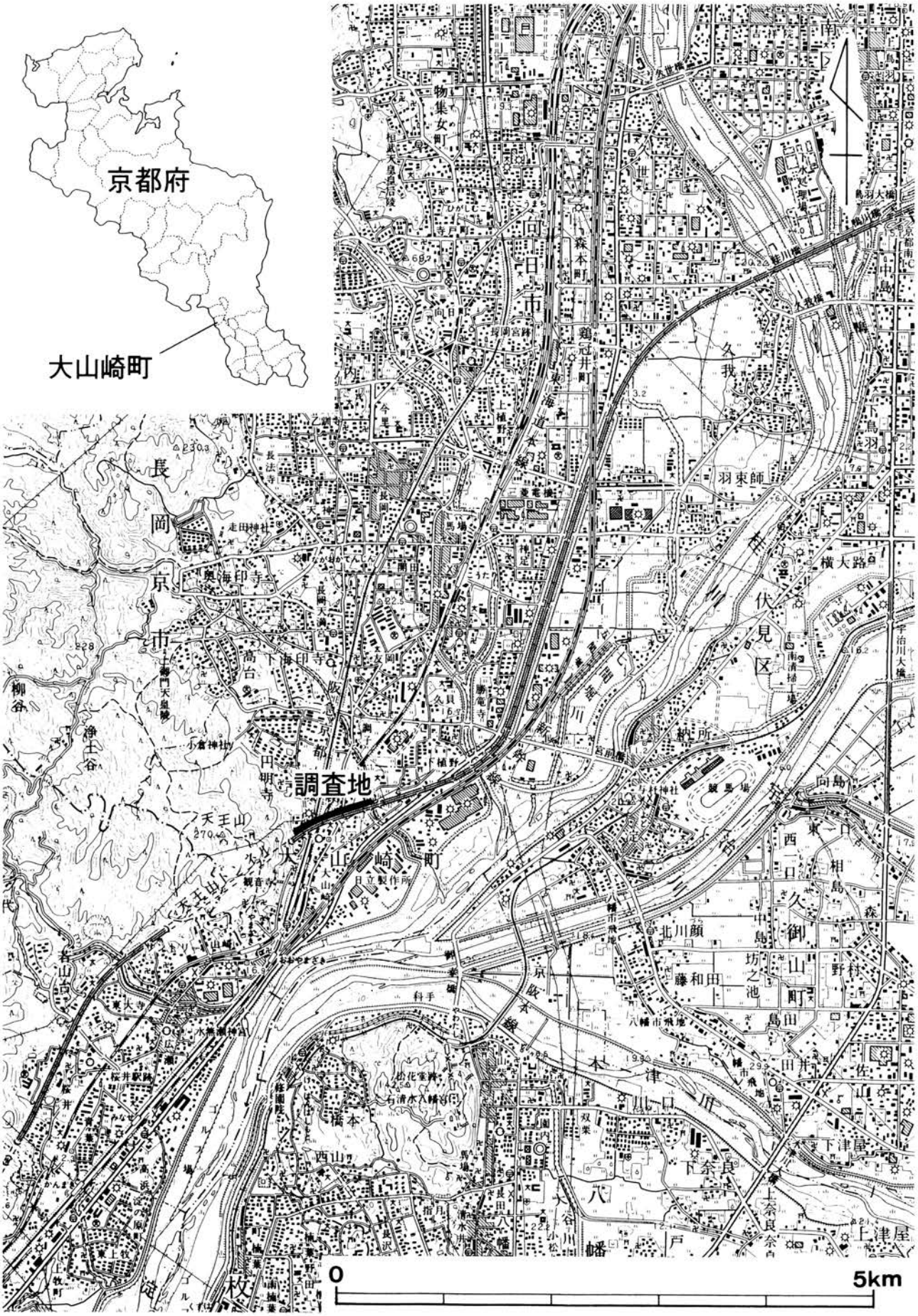
747	D 1	弥生	手焙り形土器	SH34959	1／3（口縁部）	(16.4)	(7.8)	—	ナデ	ナデ	淡茶褐色	良	やや粗 1.5mm 砂粒多	竹管文・張り付け突帯刻み目列点文
748	D 1	土師器	杯	包含層	1／3	(19.0)	3.7		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	精良	
749	D 1	土師器	皿	包含層	1／4	(25.5)	2.9		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡橙褐色	良	精良	
750	D 1	須恵器	壺	包含層	ほぼ完形	7.6	21.5	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	濃灰色	硬	やや粗 3mm細粒微	糸切り底
751	D 1	須恵器	円面硯	包含層	1／16	(20.0)	(5.0)	—	ナデ	ロクロナデ・ケズリ	灰色	硬	精良	
752	D 1	土師器	甕	包含層	1／16	(25.6)	(11.6)	—	ナデ・ケズリ・磨滅	ナデ・指オサエ・頸部に張り付け突帯1条	淡赤褐色	良	良 3mm 白細粒多	
753	E	須恵器	杯蓋	SH367047	ほぼ完形	10.9	4.0		磨滅	磨滅	淡黄灰色	軟	やや粗 2mm細粒少	
754	E	須恵器	杯蓋	SH367047	1／2	(11.0)	3.4		ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	灰色	硬	精良	
755	E	須恵器	杯蓋	SH367047	ほぼ完形	10.8	3.9		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ	暗茶褐色～暗青灰色	良	良 0.5mm 砂粒微	
756	E	土師器	甕	SH367047	1／3	(11.8)	(11.2)		ナデ・指オサエ・ハケ目	ナデ・ハケ目・指オサエ	暗茶褐色	良	良 1mm 砂粒微	内外面スス付着
757	E	土師器	甕	SH367047	ほぼ完形	13.0	14.0		ナデ・指オサエ	磨滅・指オサエ	赤褐色	良	良 1.5mm 砂粒少	内面にスス付着
758	E	土師器	甕	SH367047	1／3	(14.2)	13.2		ナデ・指オサエ・ハケ目	ナデ・ハケ目	橙褐色～茶褐色	良	良 0.5mm 砂粒微	外面スス付着
759	E	土師器	甕	SH367047	1／5	(11.0)	(4.5)		ナデ・指オサエ	ナデ	橙褐色	良	良 3mm 細粒少	
760	E	土師器	甕	SH367047	1／3	18.3	(4.2)		ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	淡赤褐色	良	良 1mm 砂粒少	
761	E	土師器	甕	SH367047	7／8	(13.8)	(6.8)		ナデ・指オサエ・磨滅	ナデ・磨滅	暗茶褐色	軟	良 1mm 砂粒微	
762	E	土師器	甕	SH367047	ほぼ完形	18.6	38.0		ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	茶褐色	良	良 2mm 細粒少	底部コゲ跡
763	E	土師器	甕	SH367047	1／8	(23.0)	(17.4)		ナデ・指オサエ	ナデ・ハケ目	淡黄灰色	やや軟	やや粗 3mm白細粒多	
764	E	土師器	甕	SH367047	1／3	—	(29.0)		ハケ目・指オサエ	ハケ目	淡黄茶褐色～茶褐色	良	良 2mm 細粒少	外面底部コゲ跡
765	E	土師器	甕・鍋？	SH367047	1／5	—	(23.0)		指オサエ・ハケ目・磨滅	指オサエ・ハケ目	橙褐色～橙茶褐色	良	良 1mm 砂粒少	角状取手
766	E	須恵器	杯身	SH367045	ほぼ完形	11.5	5.0		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ	青灰色	硬	やや粗 2mm細粒少	

767	E	須恵器	杯身	SH367045	ほぼ完形	12.3	4.5		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ	淡灰色～濃青灰色	硬	やや粗 3mm細粒少	
768	E	須恵器	杯身	SH367045	ほぼ完形	11.7	5.7		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ	淡青灰色	硬	やや粗 2mm細粒少	
769	E	須恵器	杯身	SH367045	1／9	(12.8)	5.2		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ	青灰色	硬良	良 1mm砂粒少	
770	E	須恵器	杯身	SH367045	ほぼ完形	13.0	5.0		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ	淡青灰色	硬	やや粗 3mm細粒少	
771	E	須恵器	蓋	SH367045	1／4	最大腹径 '(9.4)	(9.2)	－	ロクロナデ	ロクロナデ・沈線・櫛描き文	淡灰色	硬	精良	
772	E	土師器	杯	SH367045	1／4	(9.5)	3.4		磨滅	磨滅・指オサエ	黄褐色	不良	やや粗 1.5mm砂粒多	
773	E	土師器	壺	SH367045	2／3	11.7	(6.2)	－	指オサエ・ナデ	ナデ・指オサエ	赤褐色	良	精良	
774	E	土師器	甕	SH367045	1／2	11.7	(7.8)		指オサエ・ハケ目	磨滅・ナデ・指オサエ	濃茶色～橙褐色	やや軟	やや粗 4mm細粒少	内面スス付着
775	E	土師器	甕	SH367045	1／8	(13.4)	(8.0)		ナデ・沈線1条(口縁部)	ナデ・ハケ目	黒褐色	良	やや粗 0.5mm砂粒多 6mm細粒	
776	E	土師器	甕	SH367045	ほぼ完形	15.7	31.3	9.6	ナデ・指オサエ	ナデ・ハケ目	茶褐色	良	やや粗 1.5mm砂粒少	外面全体にスス付着
777	E	土製品	鞴の羽口	SH367045		外径 '(8.0) 内径 '(6.0)	(8.6)		ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	淡橙黄褐色	良	粗 4mm細粒多・1cm礫多・シャモット(土器破片)	
778	E	弥生土器	甕	SX367046	1／6	(27.2)	(30.9)	6.0	指オサエ・磨滅	磨滅・ハケ目	橙褐色	不良	粗 6mm細粒多	
779	E	弥生土器	甕	SX367046	1／4	(21.4)	32.9	5.0	ナデ・タタキ	ナデ・指オサエ	橙褐色	良	粗 1.5mm砂粒多	
780	E	須恵器	杯蓋	包含層	1／3	(12.9)	(4.4)		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ	黒灰色	良	やや粗 2.5mm細粒少	
781	E	須恵器	杯蓋	包含層	完形	13.0	4.6		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ	暗青灰色	良	良	
782	E	須恵器	杯蓋	包含層	1／8	(14.2)	(3.8)		ロクロナデ	ロクロナデ	濃灰色	硬	精良	
783	E	須恵器	杯身	包含層	1／8	(10.8)	4.4		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ	青灰色～茶灰褐色	良	良 1.5mm砂粒少	
784	E	須恵器	杯身	包含層	1／12	(12.2)	5.0		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラケズリ	灰褐色	硬	良 1.5mm砂粒少	

785	E	須恵器	杯身	包含層	1／7	(13.2)	(4.2)		ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	硬	精良	
786	E	土師器	杯	包含層	3／4	10.4	(2.5)		ナデ	ナデ	淡橙褐色	良	良 0.5mm 砂粒多	
787	E	土師器	甕	包含層	ほぼ完形	15.5	19.3		ナデ・指オサエ・ケズリ跡	ナデ・ハケ目	橙色	良	良 2mm 細粒微	
788	E	土師器	甕	包含層	9／10	14.2	(18.9)		ナデ・指オサエ・ヘラケズリ	ナデ・ハケ目	橙茶褐色	良	良 1mm 砂粒少	
789	E	土師器	甕	包含層	1／3	(22.0)	(15.5)		ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ハケ目	橙茶褐色	良	やや粗 3mm細粒少	外面スス付着
790	E	土師器	甕	包含層	1／7	(17.8)	(15.6)		ナデ・指オサエ・ケズリ跡	磨滅・ナデ	淡茶褐色～淡黄褐色	良	やや粗 5mm白細粒少	
791	E	土師器	甕	包含層	1／2	(19.2)	28.2		ナデ・指オサエ	ナデ・ハケ目	赤褐色	良	良 2mm 細粒少	内面炭化物・外面スス付着
792	E	土師器	甕	包含層	1／5	(24.3)	(9.8)		ナデ・磨滅・指オサエ	ナデ・タタキ	淡茶褐色	良	やや粗 3mm茶、白細粒多	
793	E	土師器	甕	包含層	1／3	(18.0)	(8.6)		ナデ・波状文・ハケ目・指オサエ	ナデ・ハケ目	淡黄褐色	良	良 1mm 砂粒少	
794	E	土師器	高杯	包含層	1／6	(18.0)	(3.3)	－	磨滅	磨滅	淡橙褐色	良	良 1mm 砂粒微	
795	E	土師器	高杯裾部	包含層	1／3	－	(7.2)	(12.4)	ナデ・指オサエ	ハケ目・ケズリ・磨滅	淡赤褐色	良	良 2mm 細粒少	

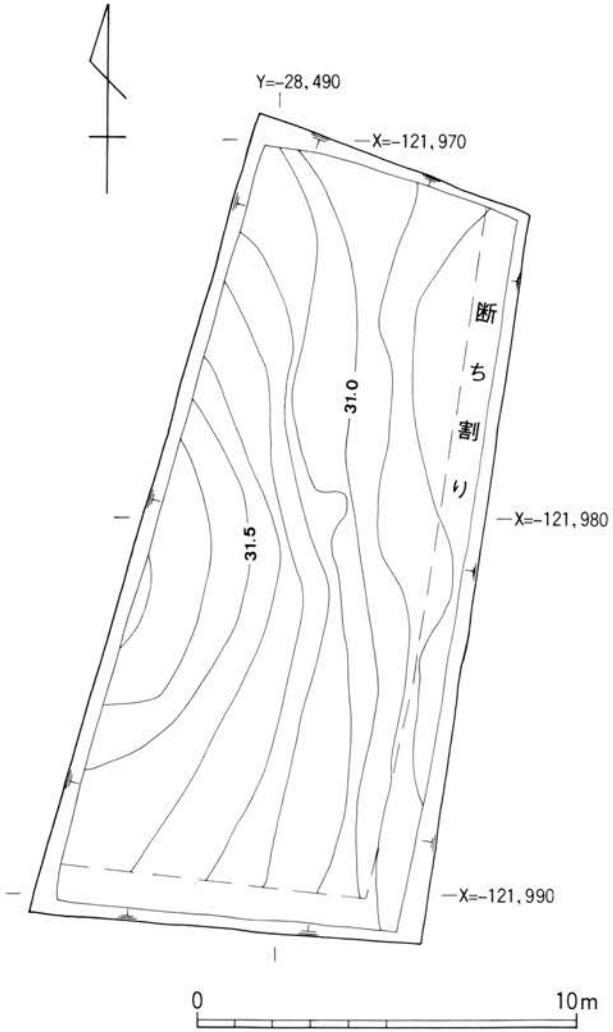
図　　版

図版第一

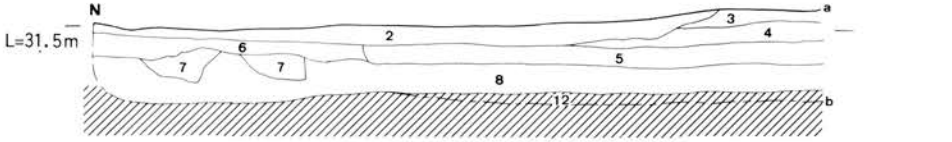


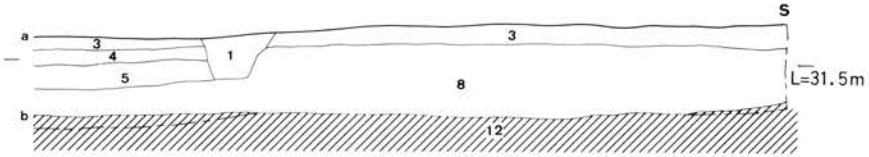
調査地位置図

A地区調査トレンチ平面図・土層図

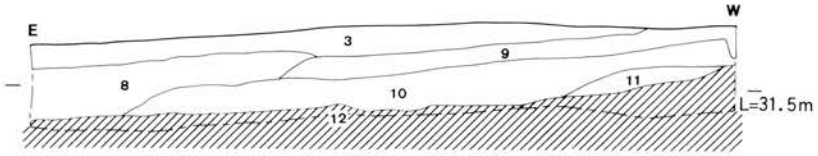


東壁土層図





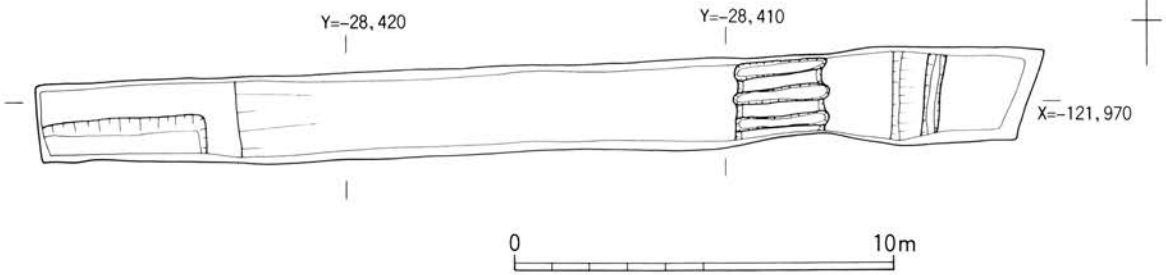
南壁土層図



0 5 m

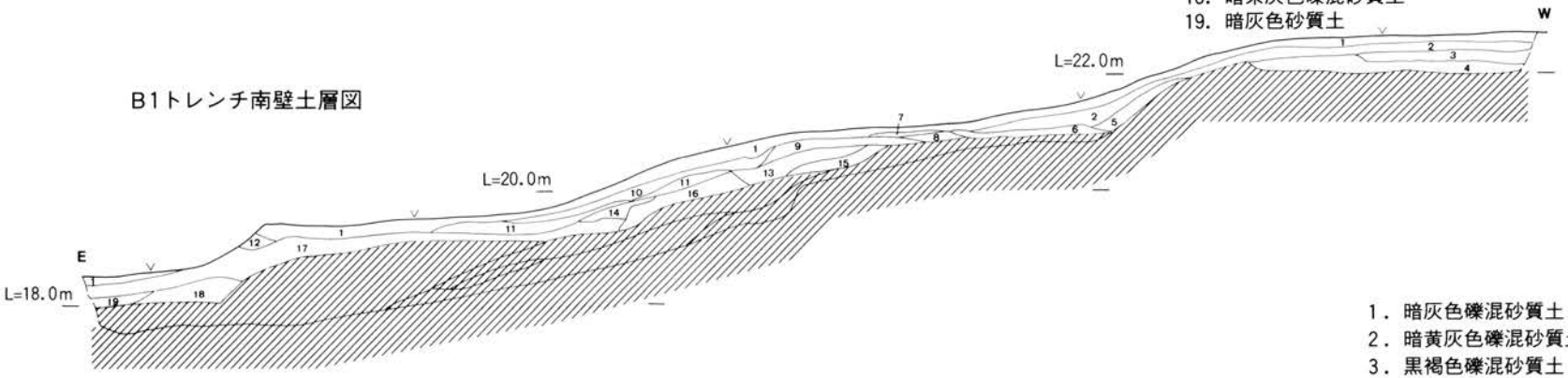
1．排水溝　暗茶褐色土礫混じり
2．盛り土　褐色土礫混じり
3．暗茶褐色土(畑の土)
4．褐色土(堅い)
5．暗茶褐色土
6．暗茶褐色砂質土
7．茶褐色土礫混じり
8．暗黄褐色土
9．茶褐色礫混じり土(堅い)
10．茶褐色土(堅い)
11．茶褐色土(礫多い)
12．茶褐色土(大きな礫が混じる)

B1トレンチ平面図

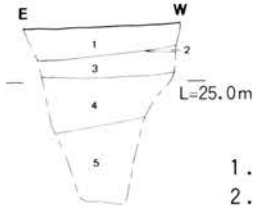


1．表土
2．黄褐色礫混砂質土
3．黄茶褐色礫混砂質土
4．灰褐色礫混砂質土
5．黄褐色礫層
6．暗灰褐色砂層
7．暗灰褐色砂層
8．暗黄褐色礫混砂質土
9．暗灰褐色砂層
10．暗灰褐色礫混砂質土
11．黄褐色礫層
12．黄褐色砂質土
13．暗茶褐色礫混砂質土
14．暗灰褐色礫混砂質土
15．暗灰褐色砂礫層
16．明茶褐色礫混砂質土（礫は少ない）
17．暗灰褐色砂質土
18．暗茶灰色礫混砂質土
19．暗灰色砂質土

B1トレンチ南壁土層図

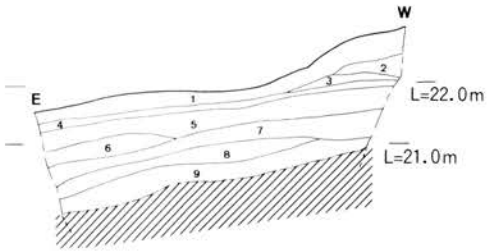


B2トレンチ南壁土層図



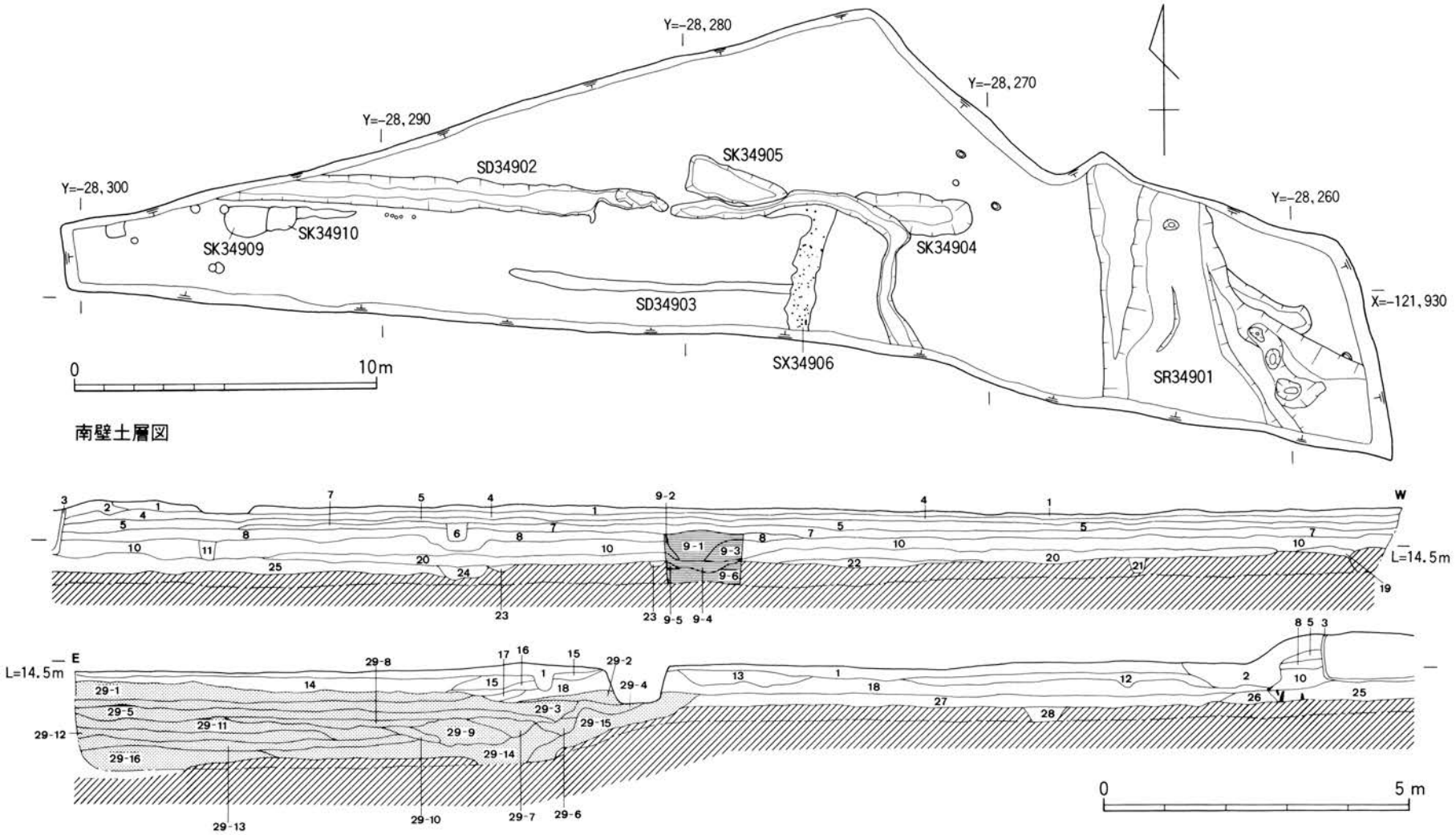
1．褐色砂質土
2．暗褐色砂質土
3．暗黄褐色礫混砂質土
4．暗黄褐色礫混砂質土（人頭大含む）
5．黒褐色礫混砂質土

B3トレンチ南壁土層図



1．暗灰色礫混砂質土
2．暗黄灰色礫混砂質土
3．黒褐色礫混砂質土
4．暗黄褐色礫混砂質土
5．暗褐色礫混砂質土
6．暗茶灰色礫混砂質土
7．暗黄褐色礫混砂質土
8．暗茶褐色礫混砂質土
9．茶褐色礫混砂質土

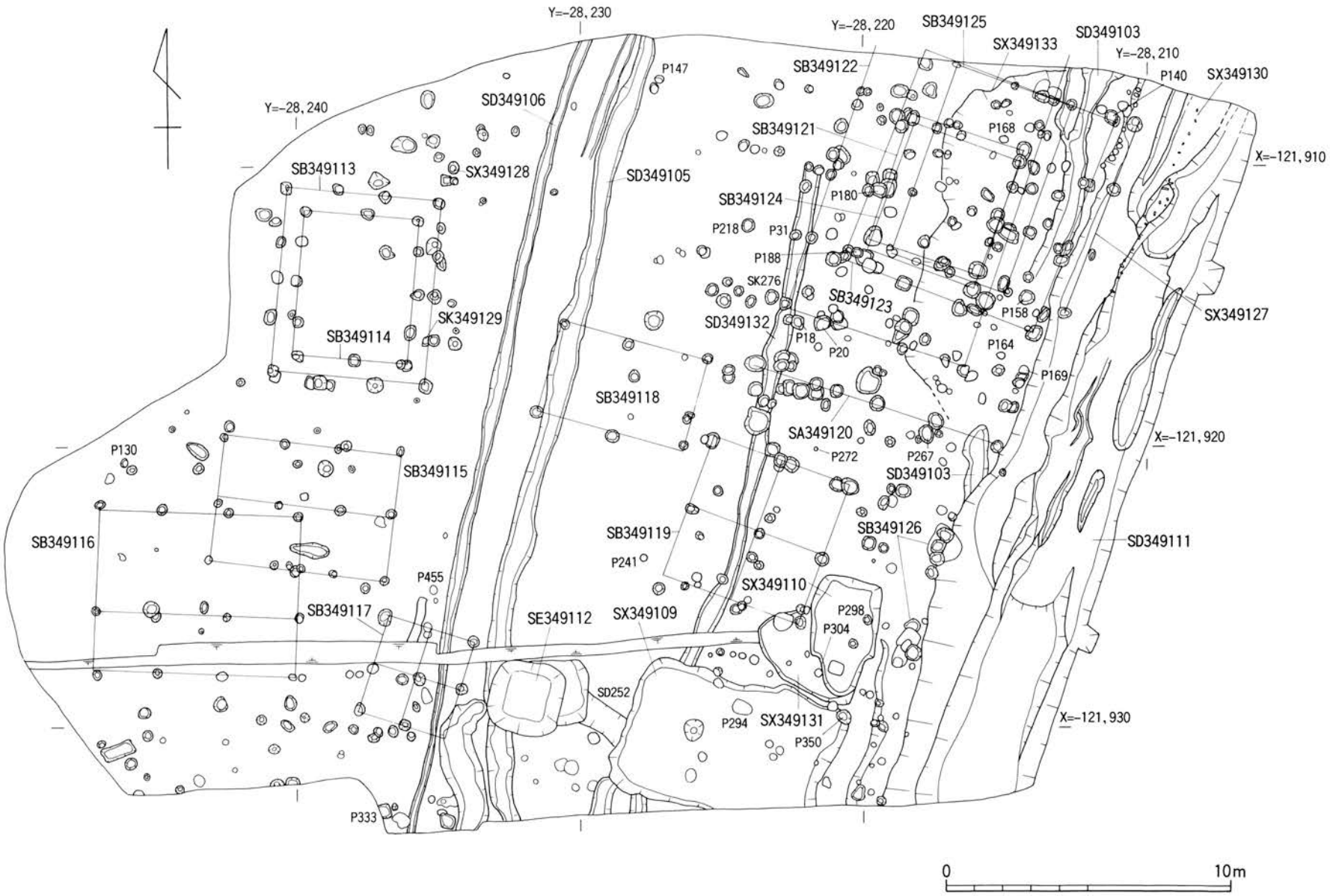
0　5 m



1.耕作土　2.暗茶褐色土　3.モルタル井戸　4.暗褐色土　5.淡茶褐色土　6.茶褐色混淡灰色土　7.淡灰色砂質土　8.黄茶色土　9.井戸
10.明茶褐色～淡茶灰色土　11.淡茶灰色土(汚れあり)　12.淡灰色土(床土)　13.土坑　暗黄褐色土(軟らかい)　14.淡黄褐色土(汚れあり)
15.明褐色砂礫　16.黄褐色砂質土　17.淡灰色粘土　18.明褐色砂質土　19.明黄褐色土　20.茶褐色土(中世の土器を含む)　21.淡褐色土
22.淡茶褐色土　23.淡黄褐色土　24.暗茶褐色土　25.明褐色斑混灰白色粘質土　26.明茶褐色砂質土　27.茶褐色混淡灰色粘質土
28.淡灰色砂(ＳＤ34902)　29.流路ＳＲ34901

井戸　：9-1.淡茶褐色土　9-2.茶褐色粘質土　9-3.暗黄褐色土　9-4.褐色混淡茶褐色土　9-5.暗黄褐色粘質土(汚れあり)　9-6.明茶褐色砂混淡青灰色粘土

流路ＳＲ34901：29-1.灰色混茶褐色砂土　29-2.淡灰色粘質土　29-3.礫混灰色砂　29-4.明褐色砂　29-5.褐色混淡灰色砂土　29-6.灰色粘土(径５～８cmの礫多)
29-7.灰褐色砂(径５cmの礫多)　29-8.褐色砂礫混淡灰色砂土　29-9.青灰色粘質砂　29-10.黄色砂混淡灰色砂質土
29-11.淡青灰色粘土混砂　29-12.淡青灰色砂礫　29-13.淡青灰色砂　29-14.淡青灰色砂礫　29-15.淡青灰色粘土　29-16.淡黄褐色砂と淡青灰色砂の互層

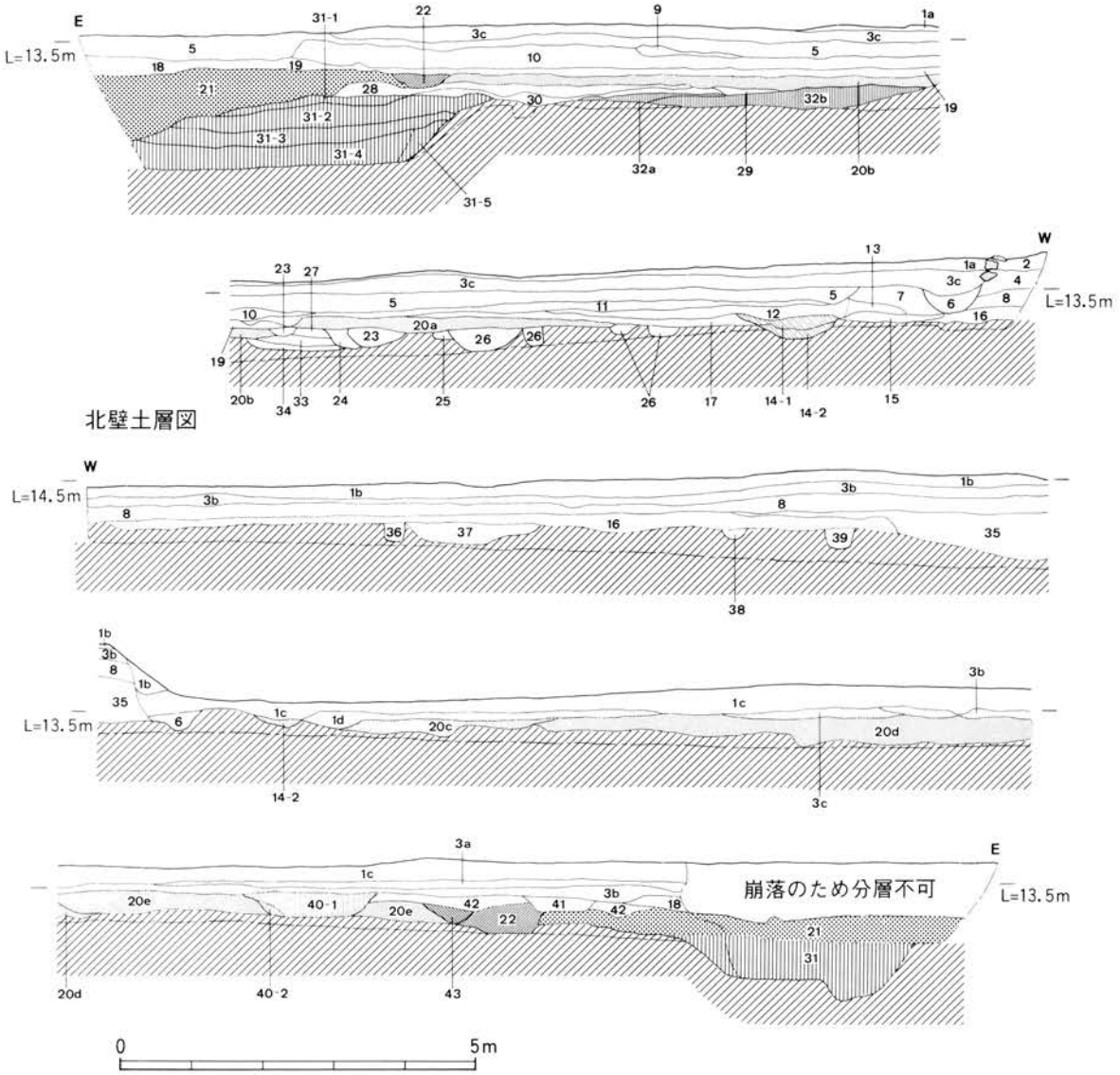


C2トレンチ検出遺構平面図

図版第五

図版第六

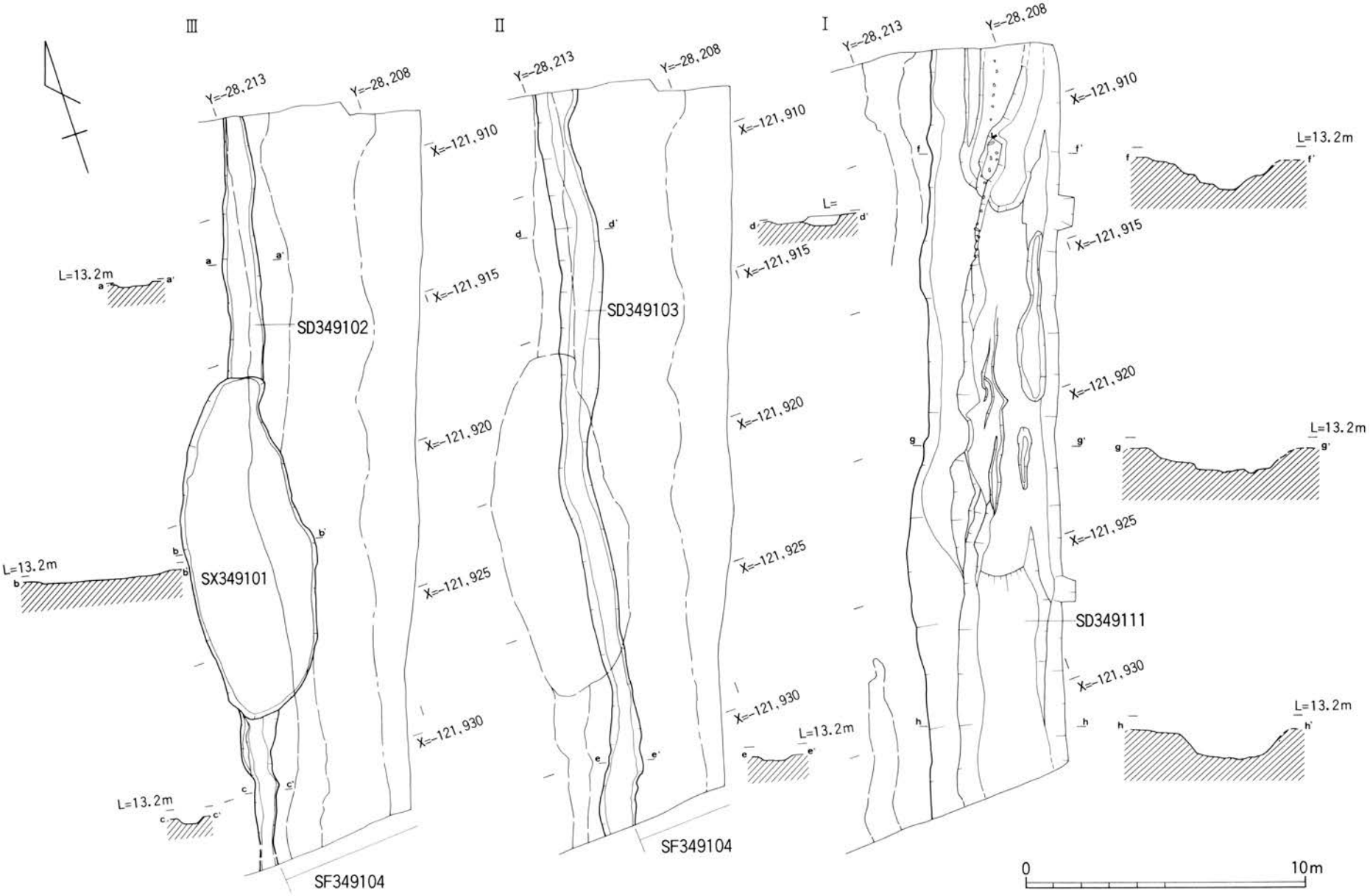
南壁土層図



C2トレンチ土層図

1.耕作土　2.黄褐色土　3.床土　4.灰色混茶褐色土　5.青灰色砂混粘土(旧耕作土)
6.暗褐色砂(SD349106)　7.黄色斑混淡青灰色土　8.茶褐色土　9.青灰色粘土(汚れあり)　10.灰白色土
11.淡茶褐色土(旧床土)　12.淡青灰色粘質土　13.暗褐色土　14.溝SD349105　15.明褐色土
16.淡暗茶褐色土　17.淡褐色土　18.明褐色土　19.黄褐色土　20.整地土層
21.灰色礫混青灰色粘土壁(路面整地土)　22.淡茶灰色砂(SD349103)　23.茶褐色土
24.淡暗灰色土　25.暗灰色土　26.暗茶褐色土　27.淡黄褐色土　28.淡灰茶色土
29.淡暗褐色土　30.淡灰色～白灰色砂　31.西国街道西側溝SD349111　32.池状土坑SX349109
33.淡灰色砂　34.暗褐色砂混黄褐色土　35.礫混褐色土　36.茶褐色土　37.礫混茶褐色土
38.淡茶褐色土　39.暗茶褐色土　40.遺構　41.淡褐色砂(堅い)　42.淡茶褐色土(径3～4cmの礫)
43.礫混明褐色土(SD349102)

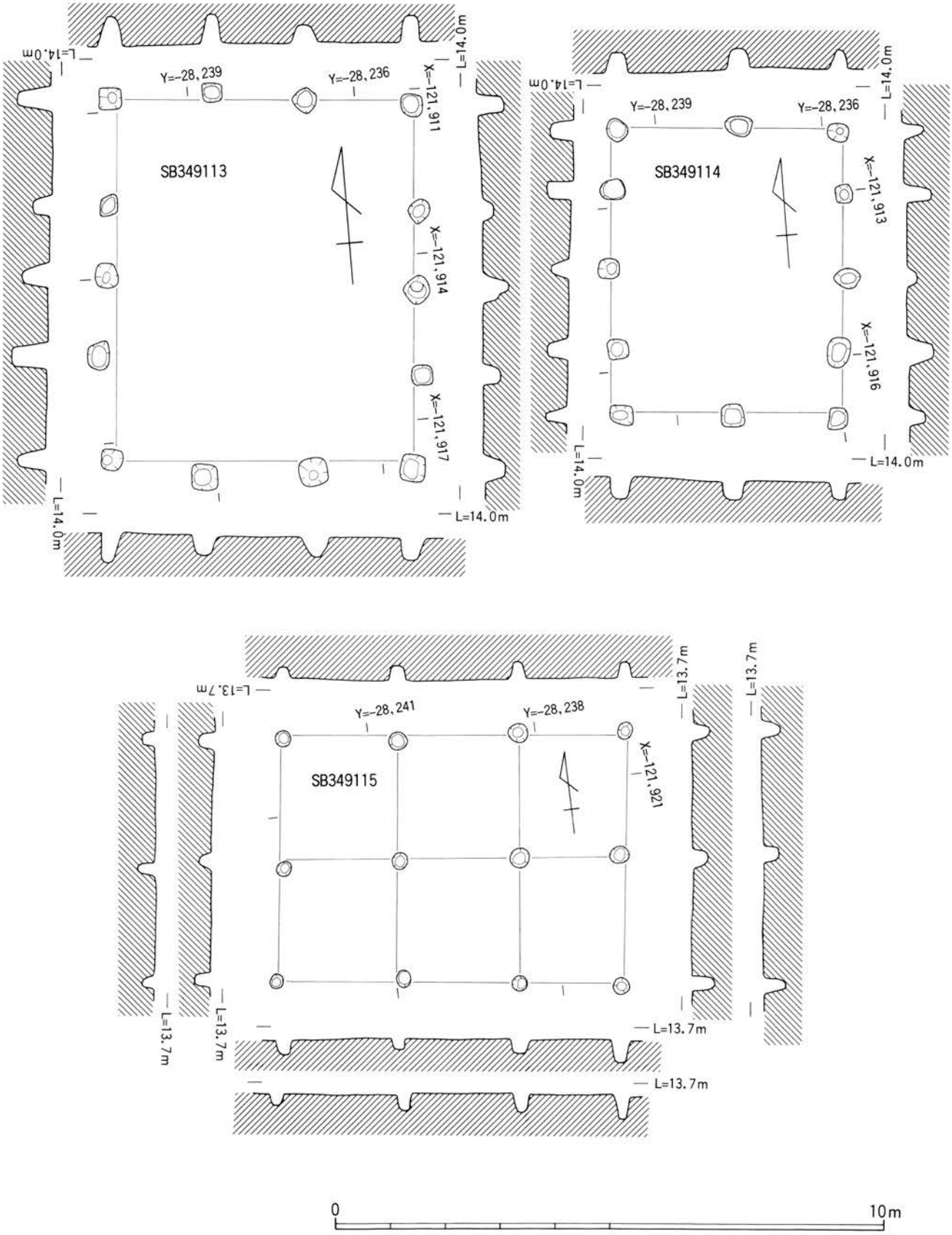
耕作土：1a.暗青灰色土　1b.暗褐色土　1c.暗茶褐色土　1d.暗褐色土(軟らかい)
床土：3a.黄色砂混淡青灰色土　3b.明褐色土　3c.淡暗褐色土
溝SD349105：14-1.石礫混明褐色土(汚れあり)　14-2.淡褐色砂土
整地土層：20a.明茶黄色土　20b.淡暗黄褐色土　20c.淡黄灰色土　20d.淡暗褐色砂土　20e.明黄褐色土
西国街道西側溝SD349111：31-1.淡灰色砂　31-2.淡青灰色粘質土　31-3.礫多混灰色砂　31-4.淡灰色砂　31-5.淡青灰色粘土
池状土坑SX349109：32a.茶褐色砂土(堅い)　32b.暗茶褐色土
遺構：40-1.茶褐色土　40-2.黄色混淡灰色土



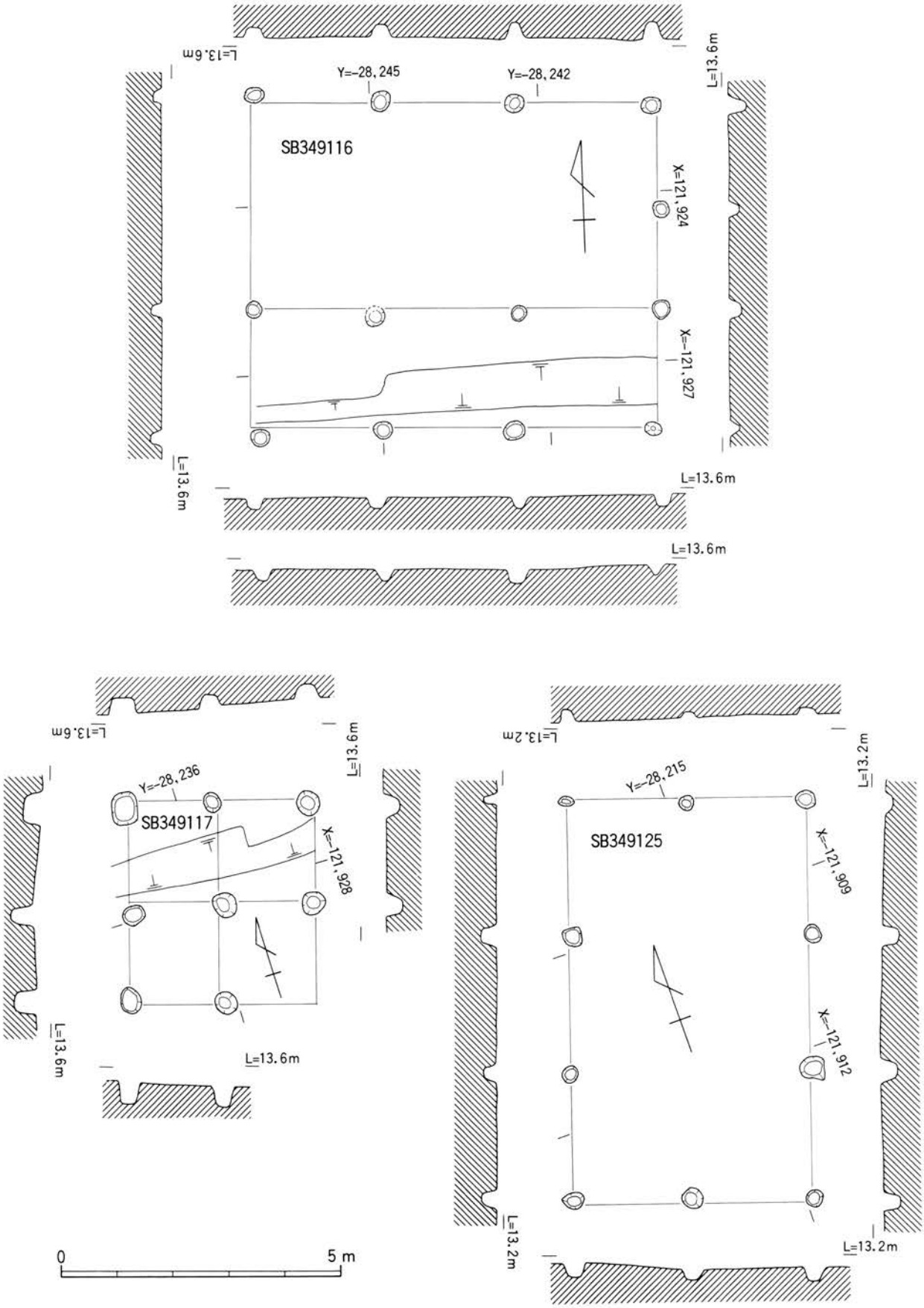
C2トレンチ西国街道西側溝変遷図

図版第七

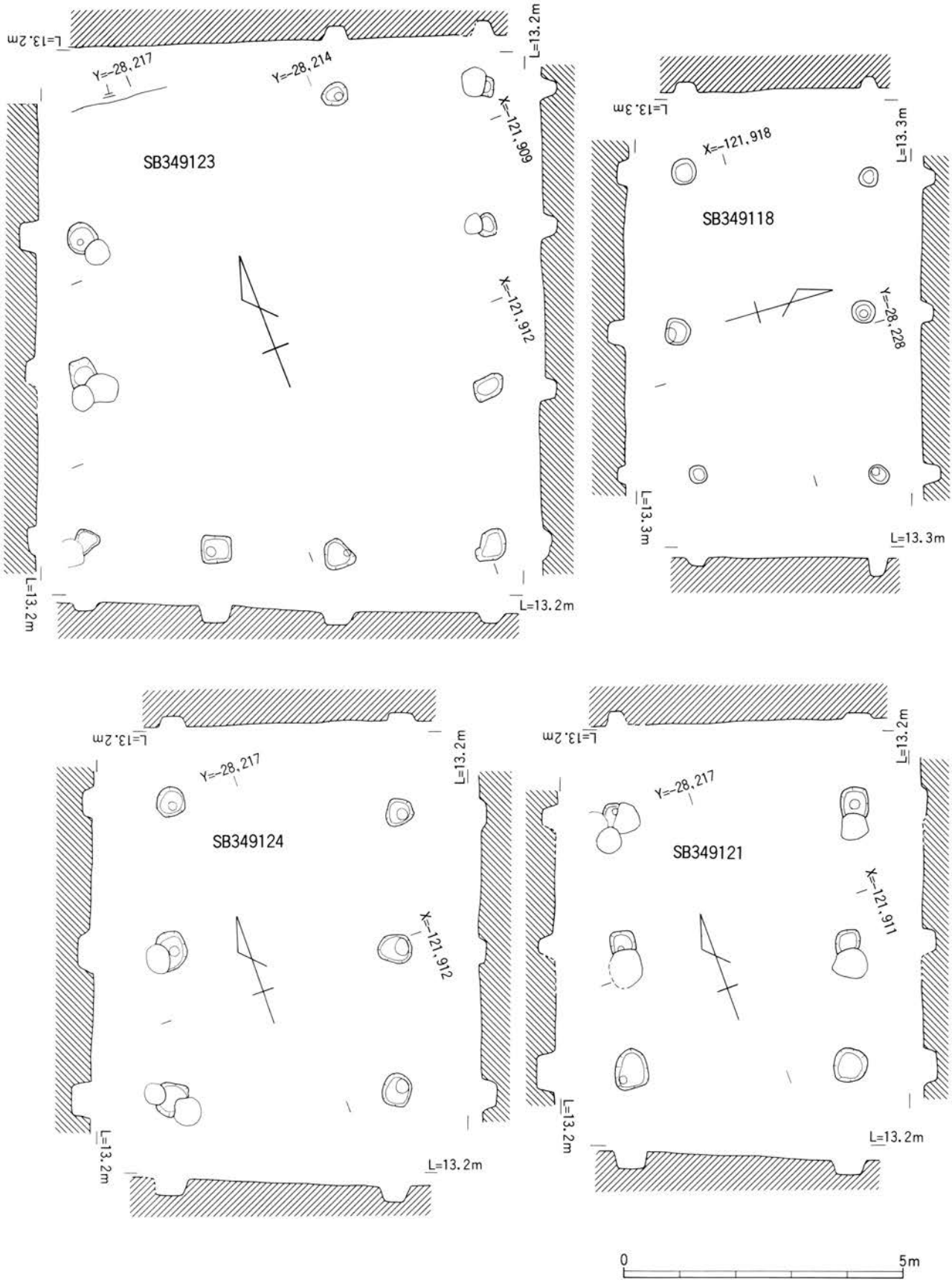
図版第八



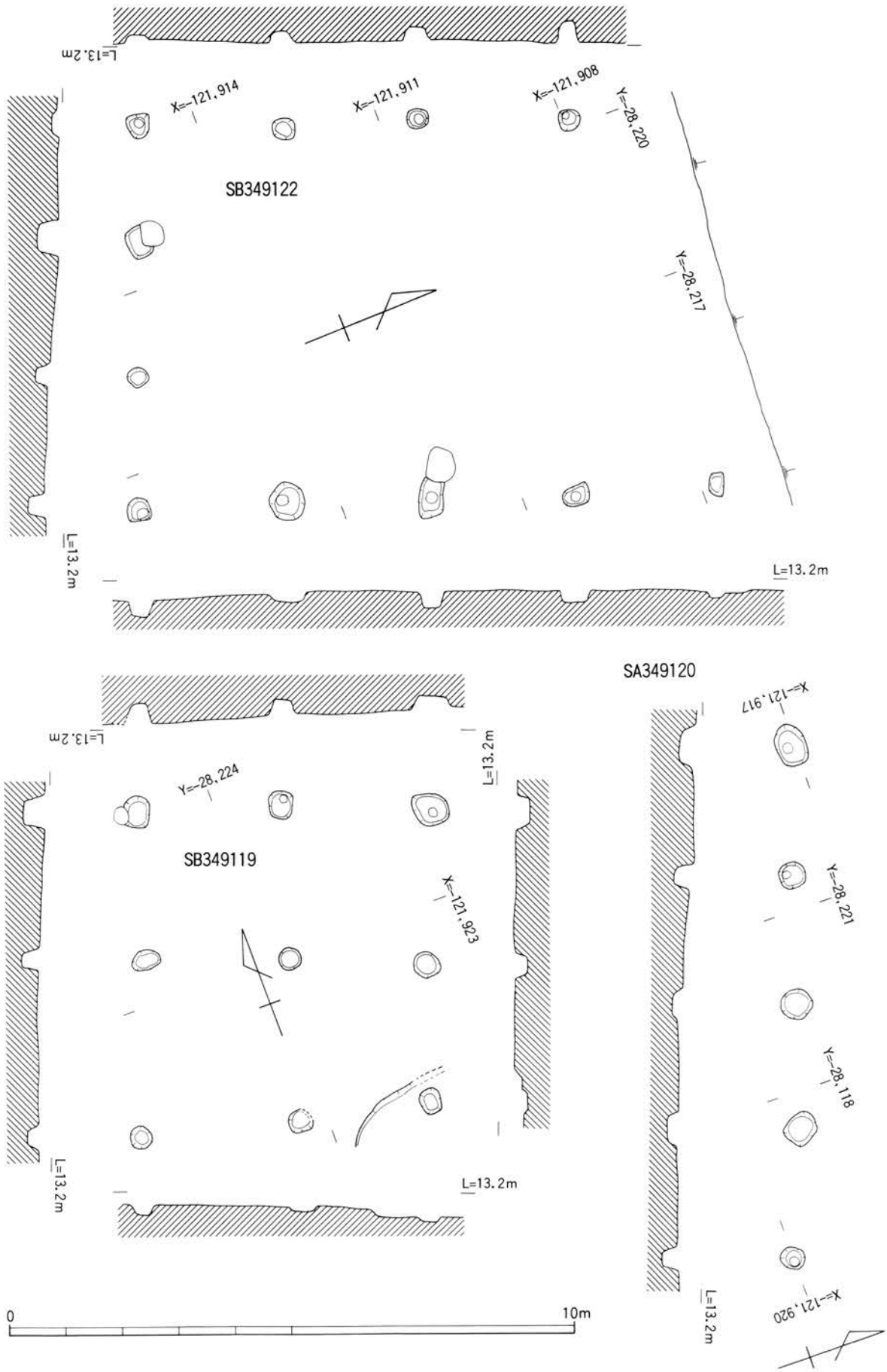
C2トレンチ掘立柱建物跡実測図(1)



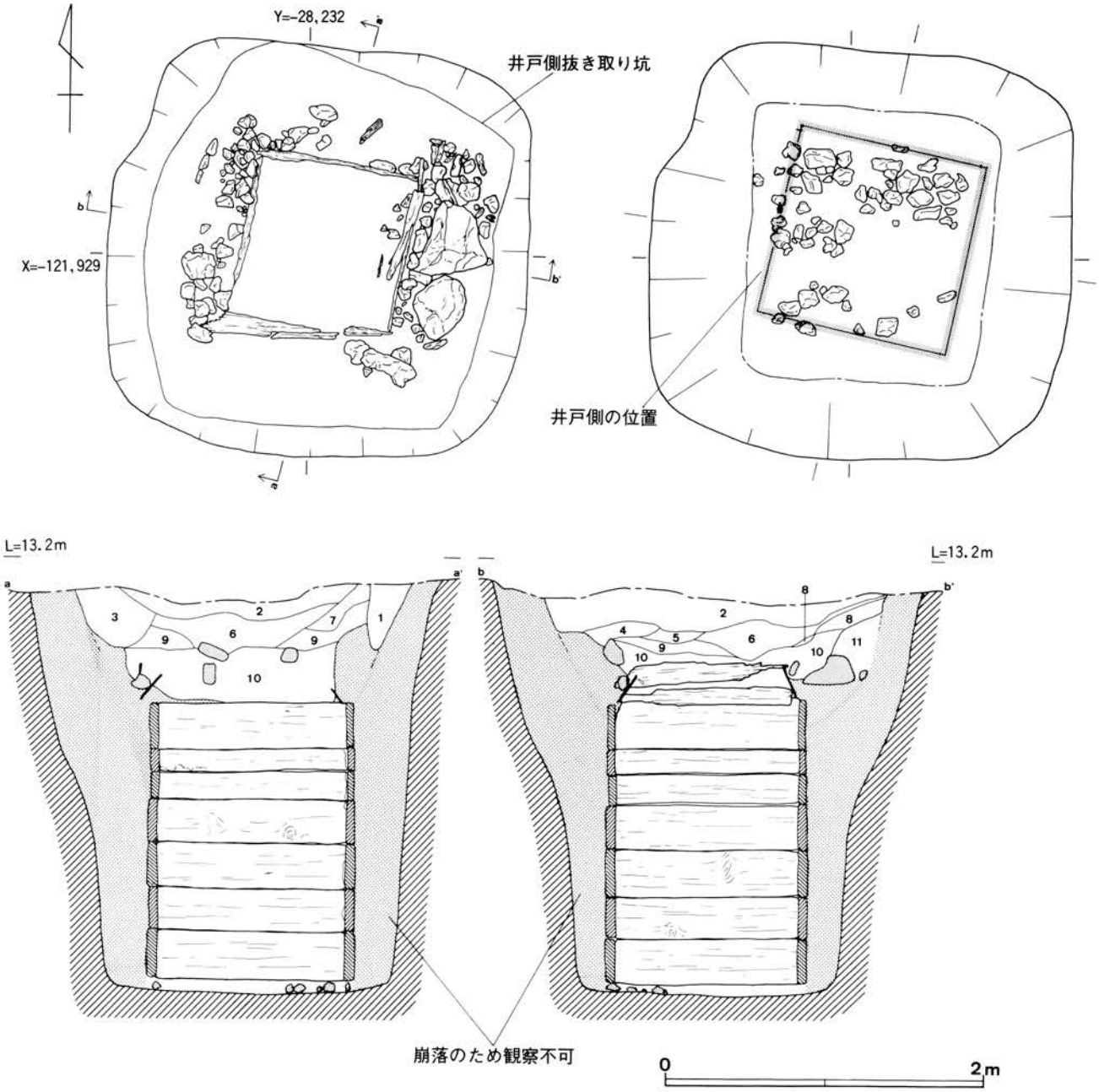
C2トレンチ掘立柱建物跡実測図(2)



C２トレンチ掘立柱建物跡実測図(3)

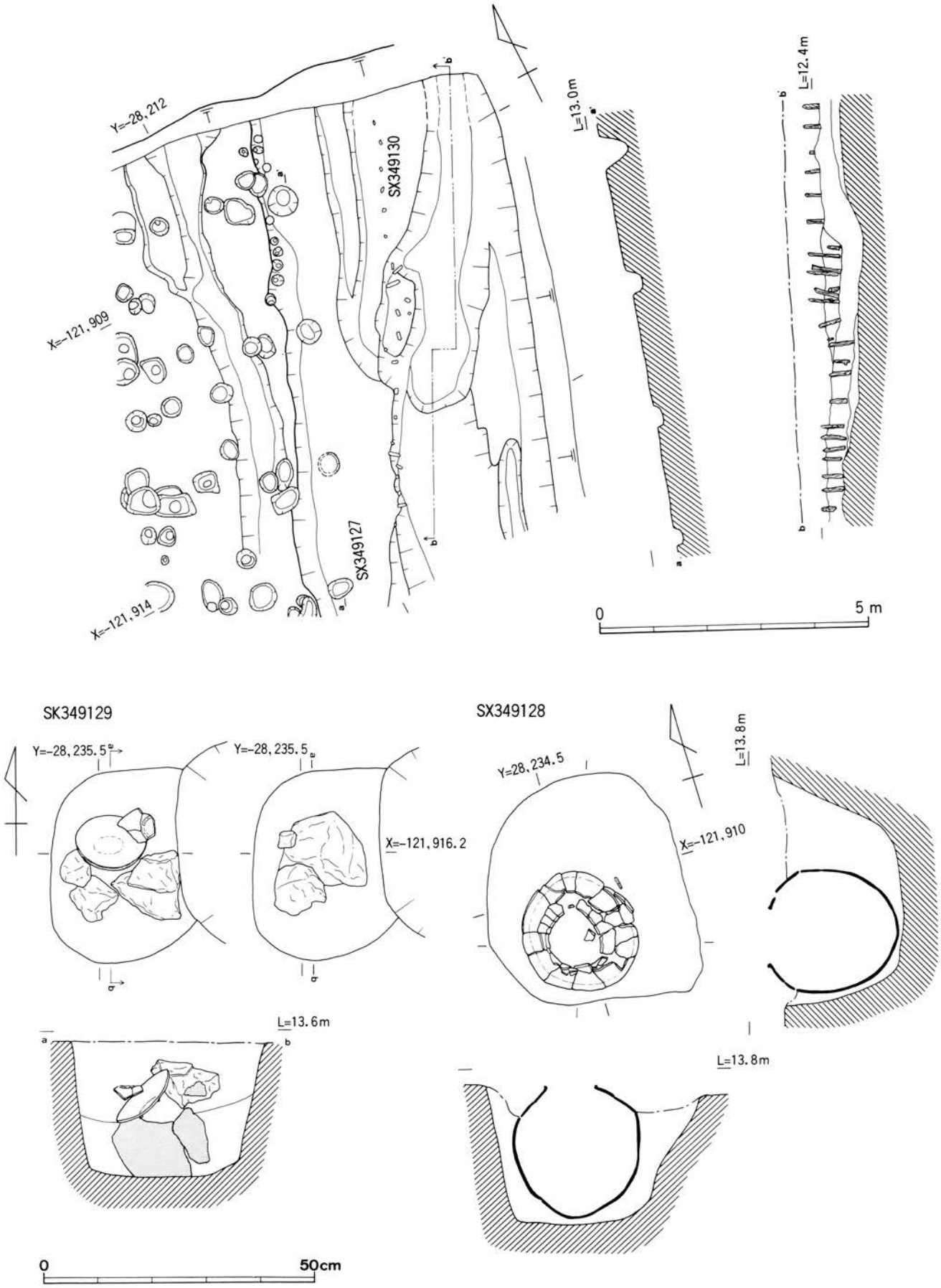


C２トレンチ掘立柱建物跡実測図(4)



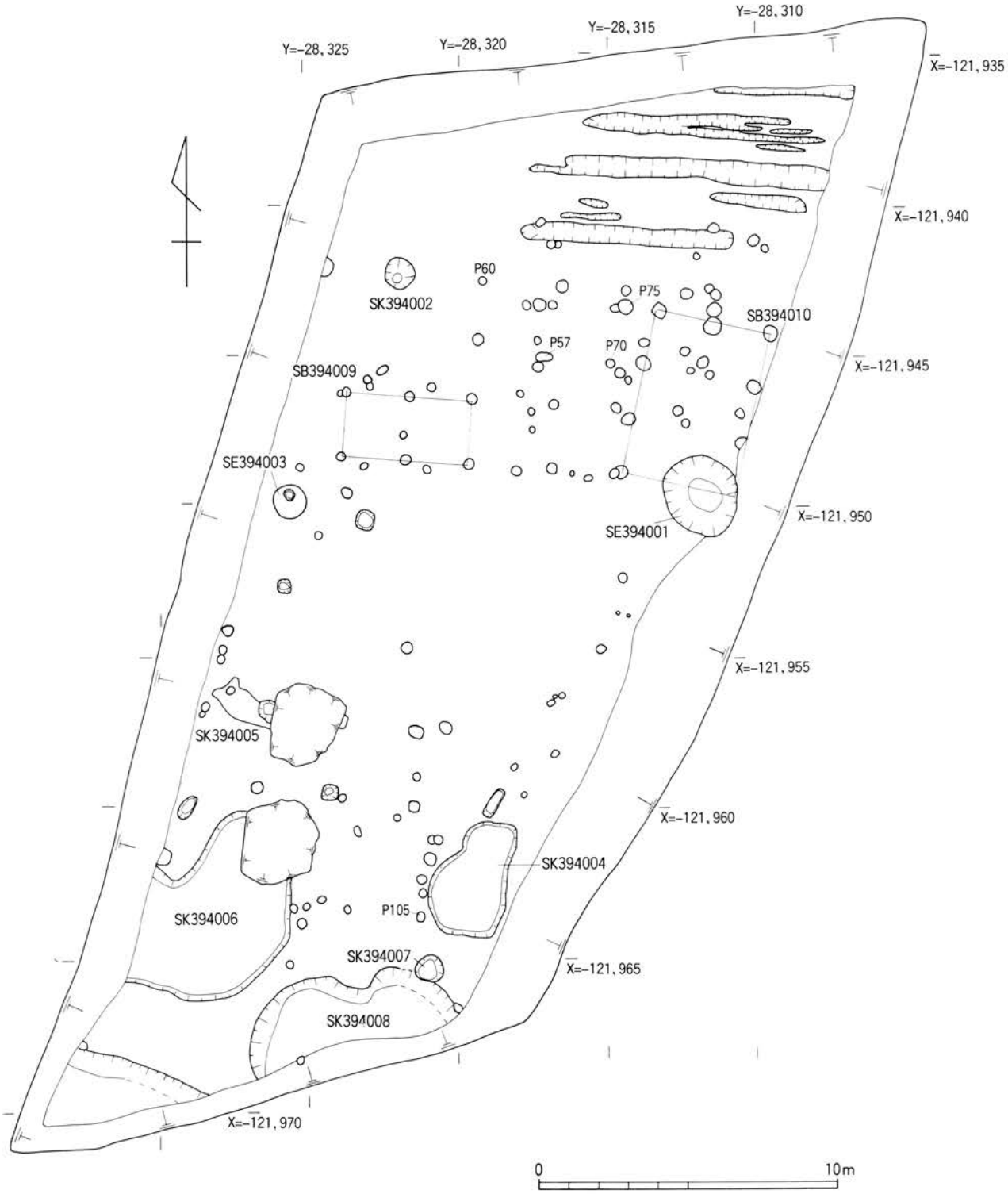
1．灰色混茶褐色土一遺構（柱穴）
2．灰色褐色混砂土
3．淡茶褐色砂土
4．茶褐色混灰色粘土
5．淡灰色砂質土
6．淡灰色粘土（やや堅い）
7．茶褐色土
8．暗青灰色砂土
9．淡灰色砂混粘土
10．淡灰色粘土（粘質大）
11．淡灰色砂土

C２トレンチSE349112実測図



C2トレンチ検出遺構実測図

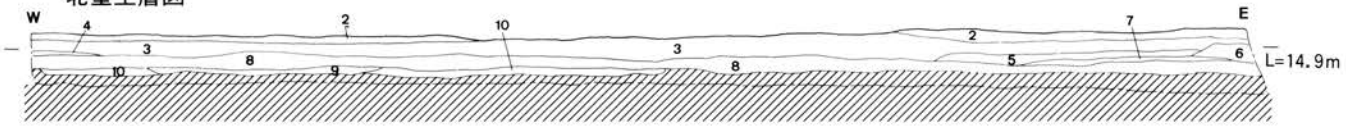
C3aトレンチ検出遺構平面図



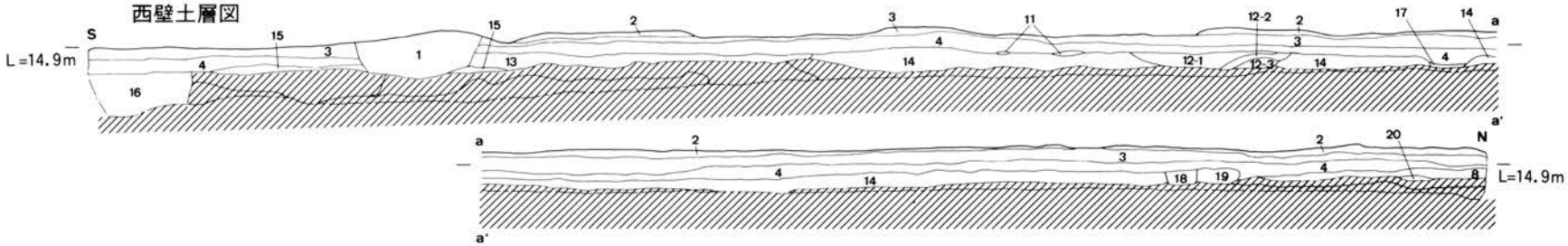
C4トレンチ検出遺構平面図

C4トレンチ

北壁土層図

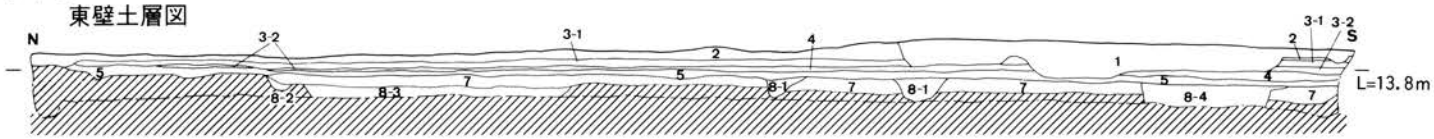


西壁土層図

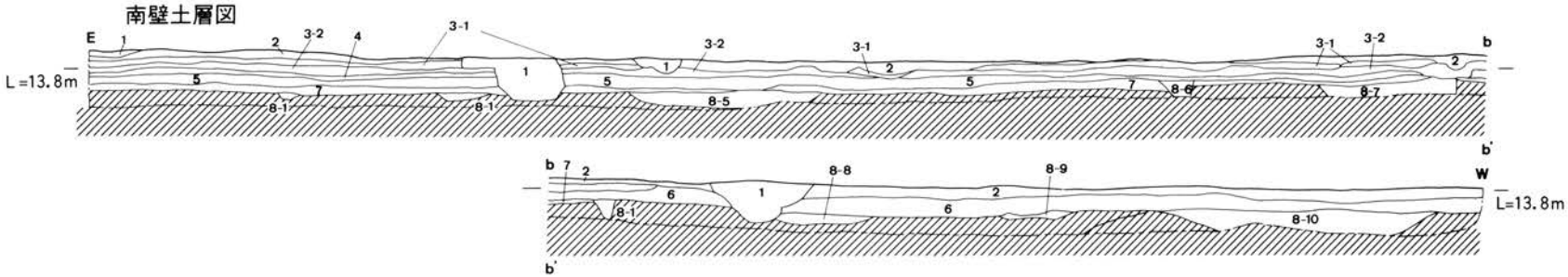


C3aトレンチ

東壁土層図



南壁土層図



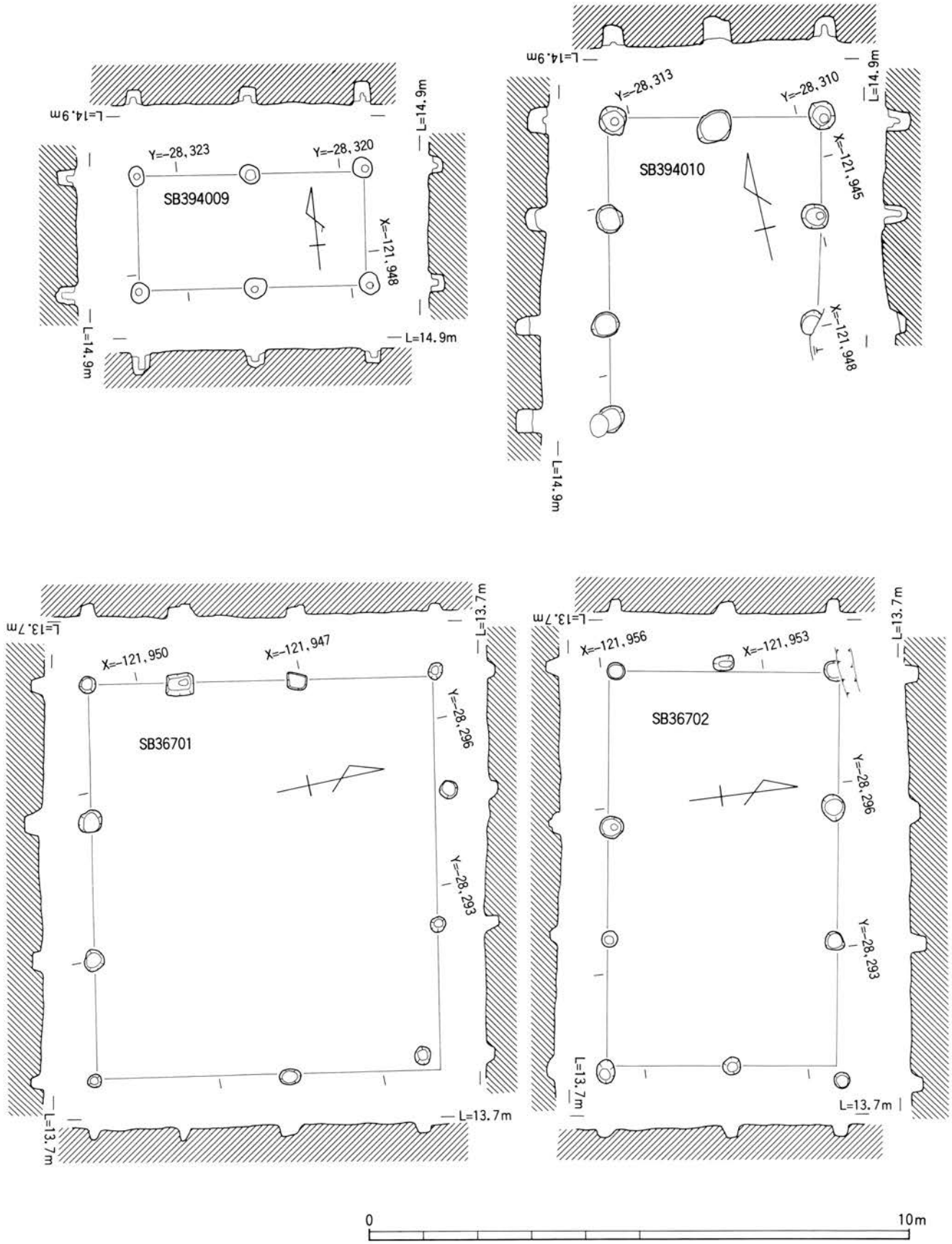
0　　10m

C４トレンチ

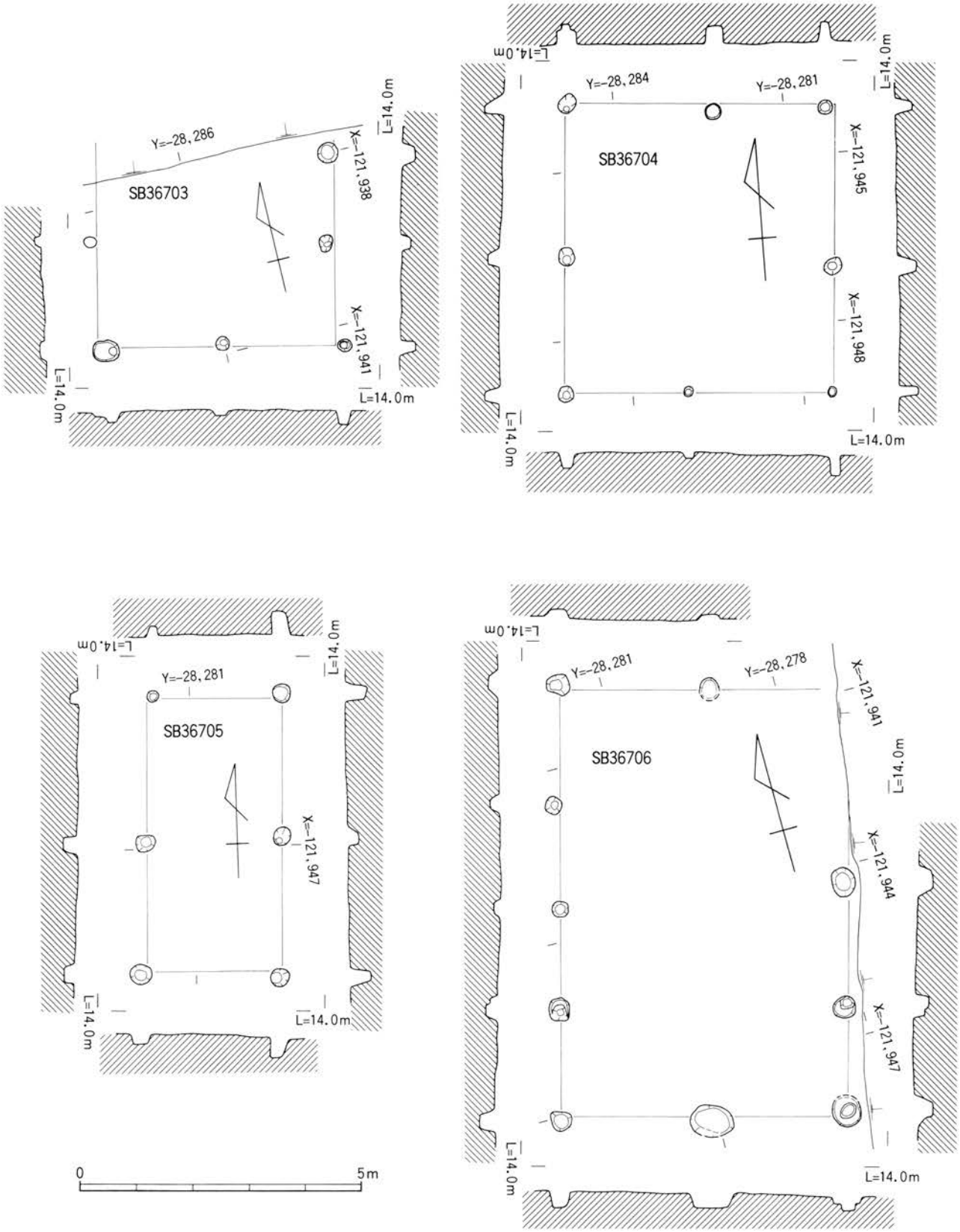
1.攪乱　2.暗茶褐色粘質土　3.暗青灰色細砂混粘質土　4.茶褐色礫混青灰色粘質土　5.青灰色細砂混粘質土(キメが細かい)　6.暗茶褐色細砂
7.茶褐色細砂混青灰色粘質土　8.青灰色細砂混粘質土　9.明青灰色粘質土　10.黄茶褐色粘質土　11.黒褐色礫混茶褐色細砂
12.土坑　13.黒褐色礫混灰褐色細砂　14.黄茶色礫混青灰色粘土　15.明青灰色細砂(ＳＫ394006)　16.暗灰色粘質土(溝)
17.青灰色細砂　18.茶褐色細砂混明青灰色粘土　19.乳青灰色細砂混粘土　20.青灰色細砂混砂礫
土坑：12-1.暗赤褐色礫混細砂　12-2.茶褐色礫混細砂　12-3.暗青灰色砂礫

Ｃ３aトレンチ

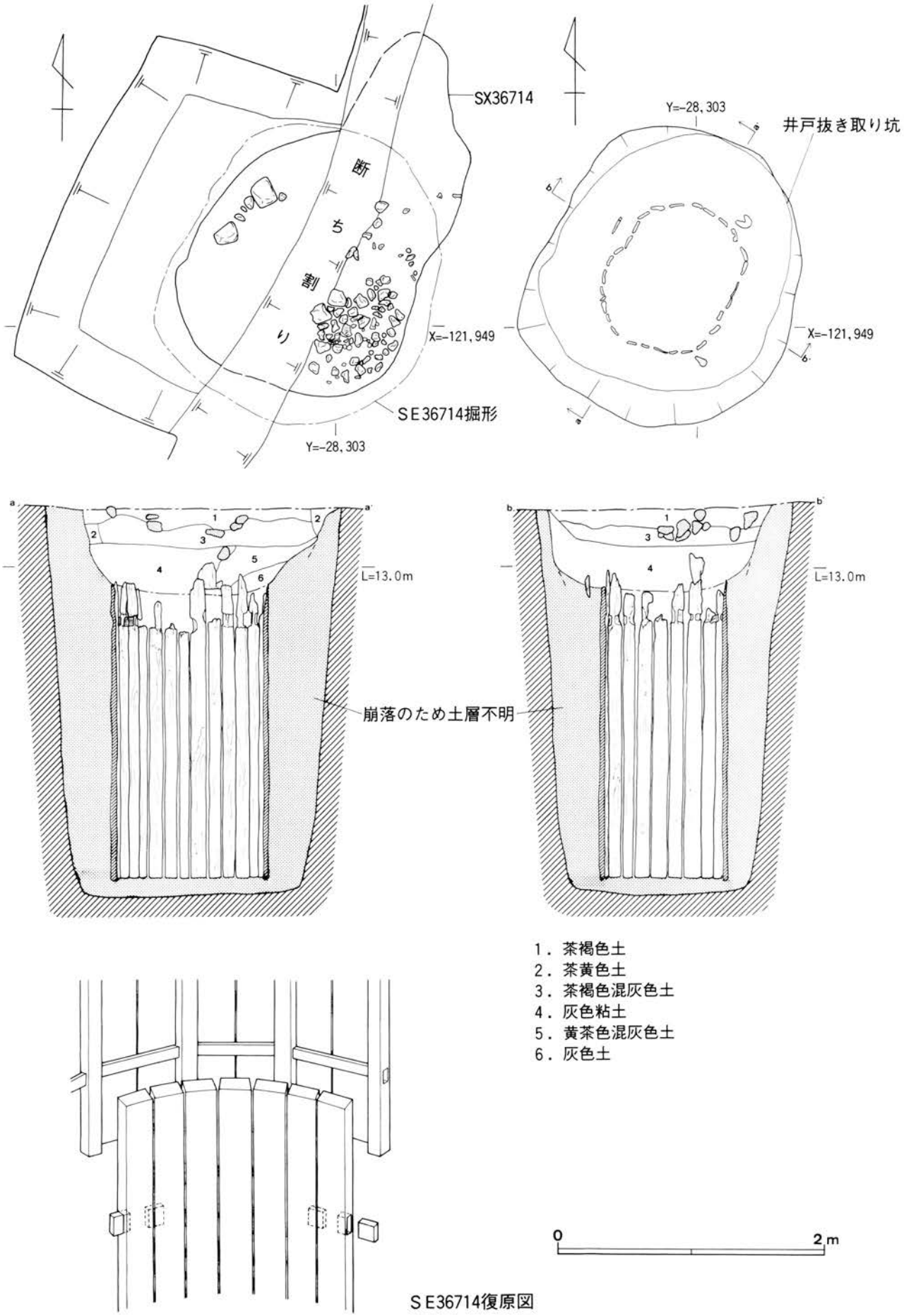
1.現代攪乱　2.暗灰色土(耕作土)　3.床土　4.淡灰色土　5.淡茶灰色土　6.黄褐色土　7.茶褐色土(中世包含層)　8.遺構内埋土
床土　：3-1.明茶褐色土　3-2.明褐色土
遺構内埋土：8-1.暗茶褐色土(柱穴など)　8-2.暗褐色土(素掘り溝)　8-3.灰色混茶褐色土(ＳＸ36720)　8-4.淡灰色土(ＳＫ36707)　8-5.暗茶灰色礫土
8-6.暗茶褐色土(ＳＤ36715)　8-7.礫混茶褐色土　8-8.淡青灰色砂混粘土　8-9.淡黄褐色礫土　8-10.褐色砂礫(ＳＤ36708)



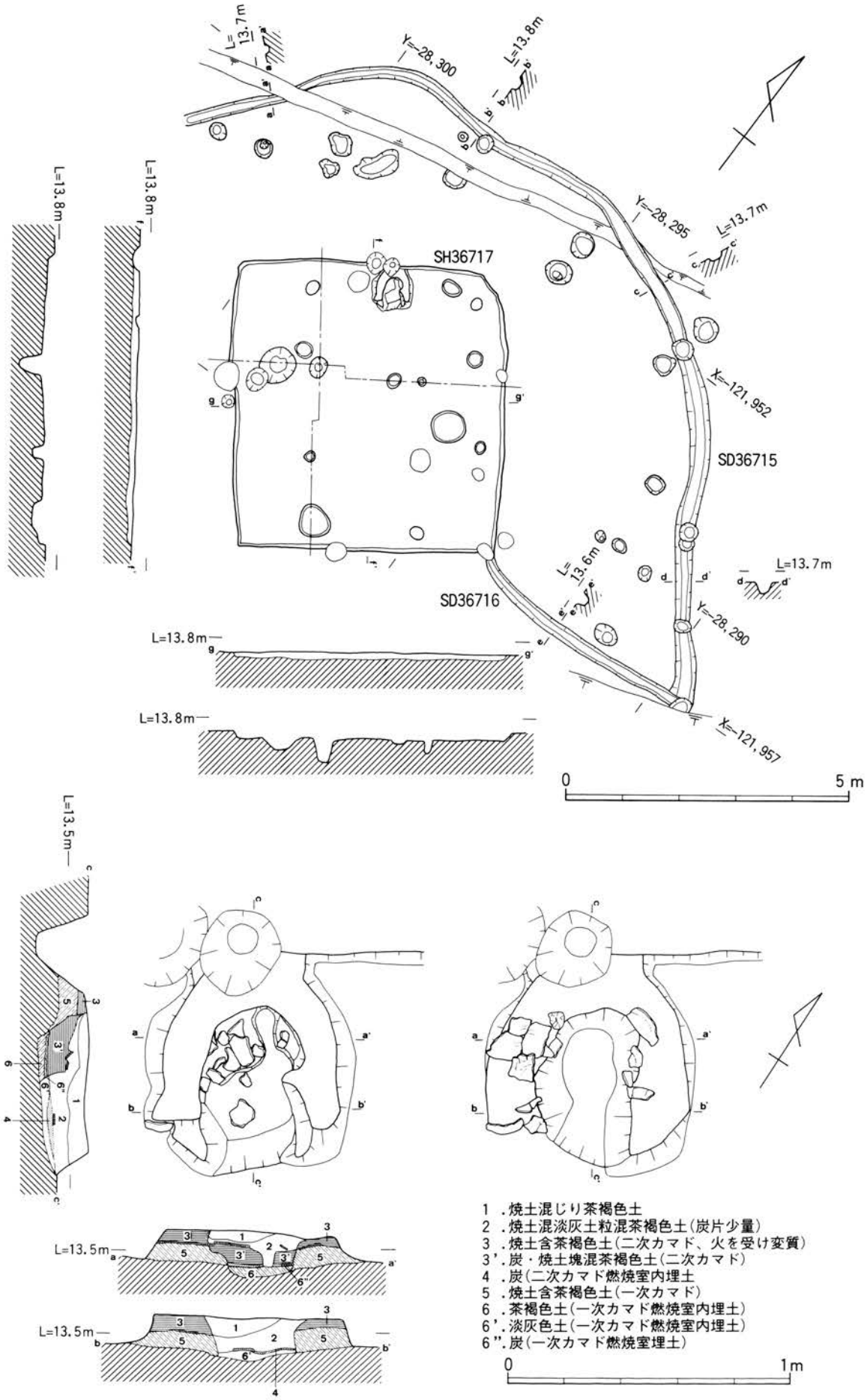
C3a・C4トレンチ掘立柱建物跡実測図(1)



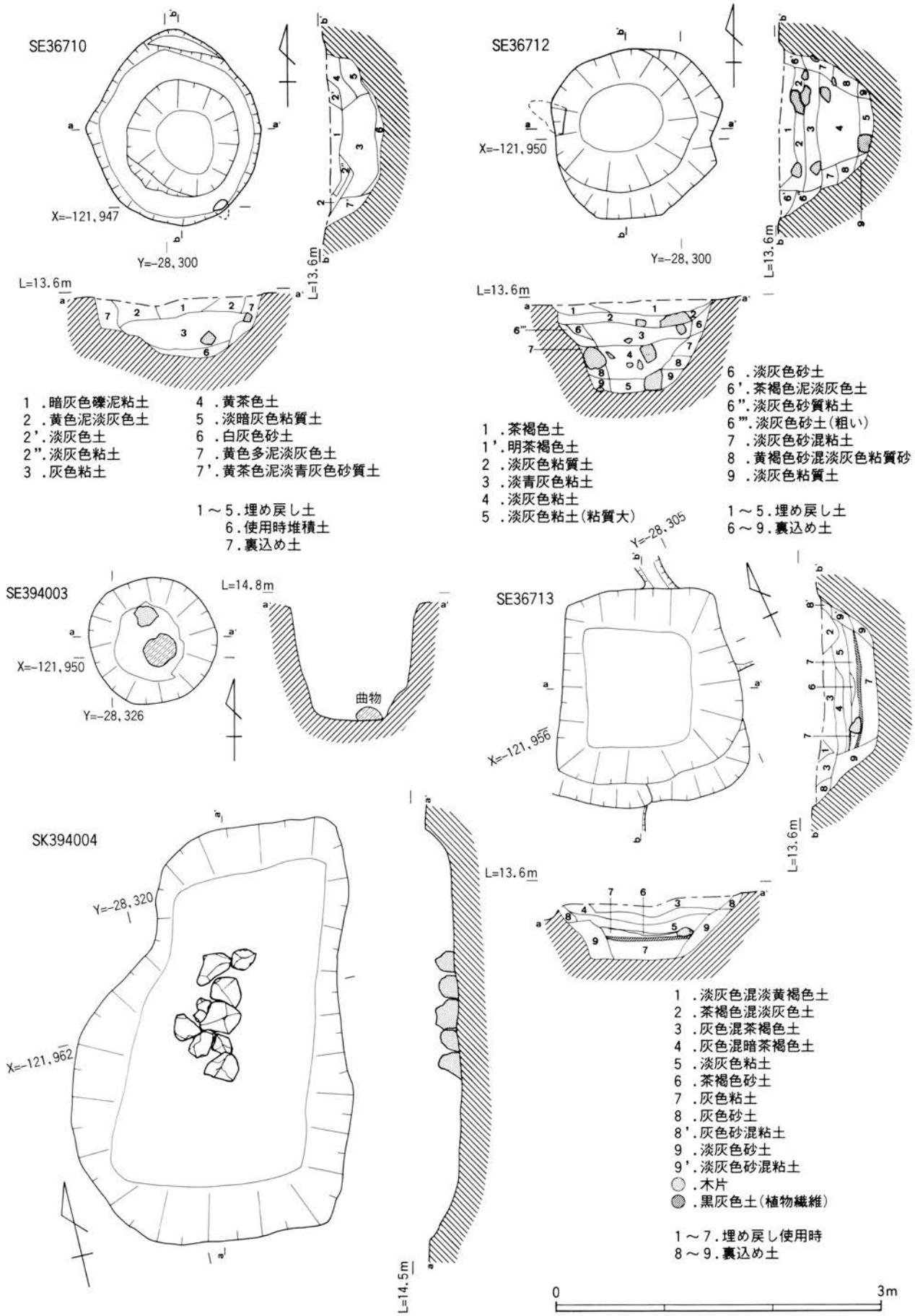
C3a・C4トレンチ掘立柱建物跡実測図(2)



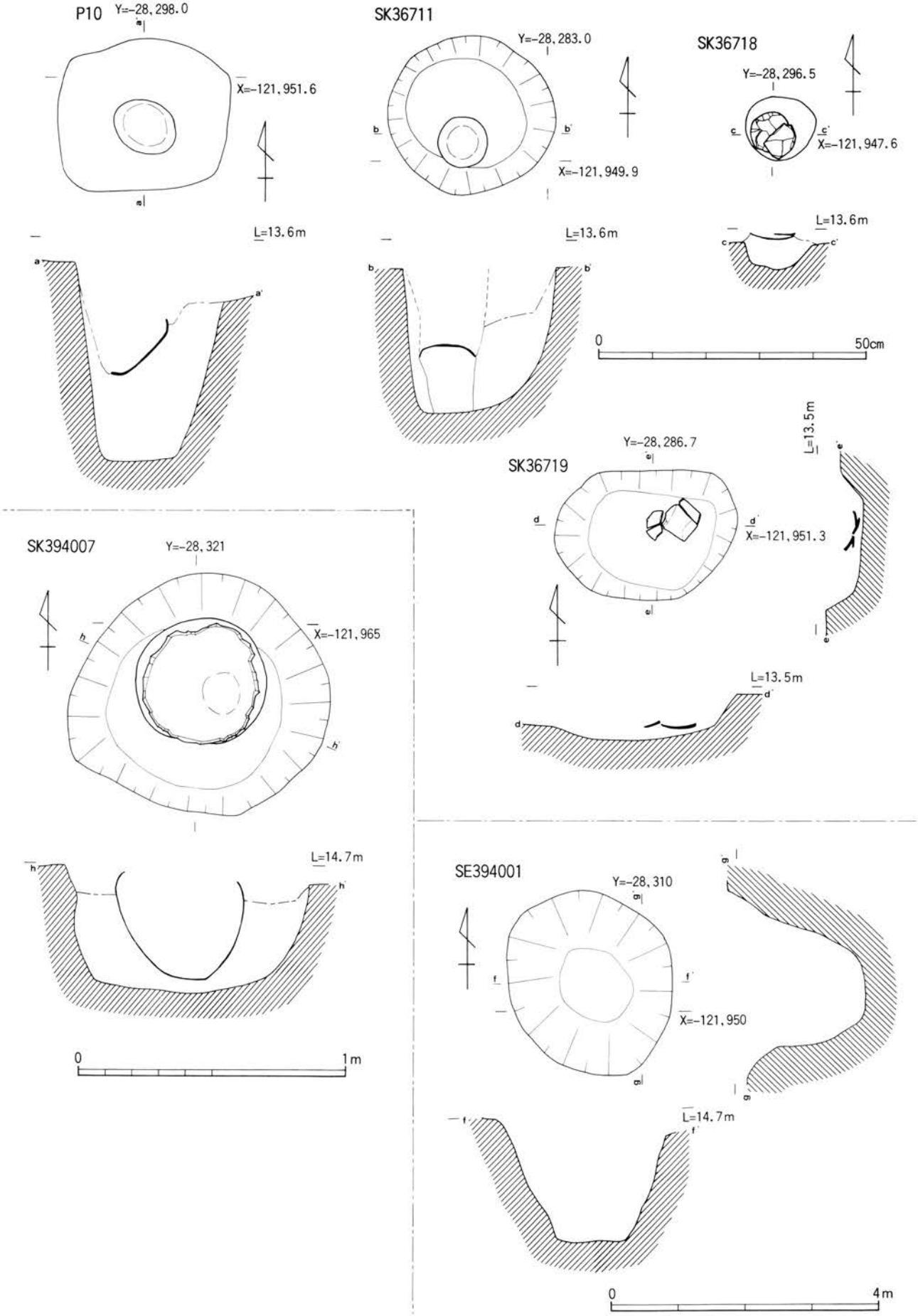
C3aトレンチSE36714実測図



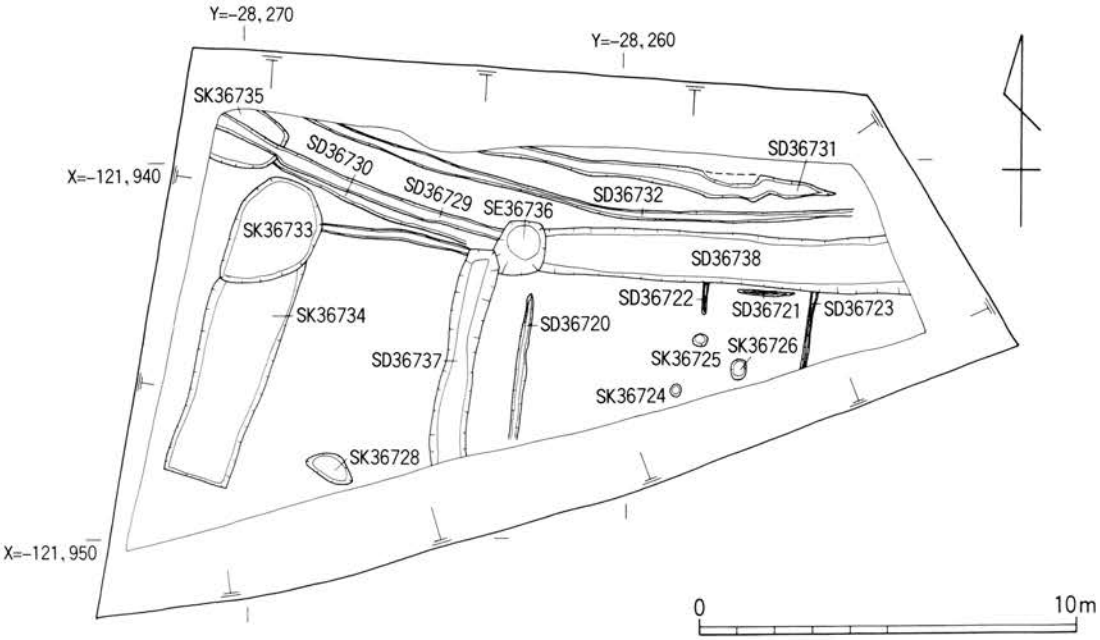
C3aトレンチSH36717実測図



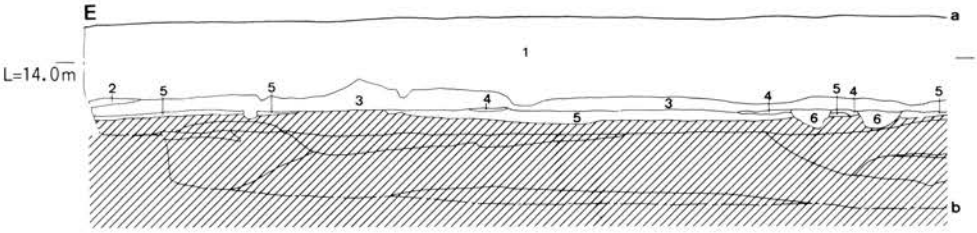
C3a・C4トレンチ検出遺構実測図(1)

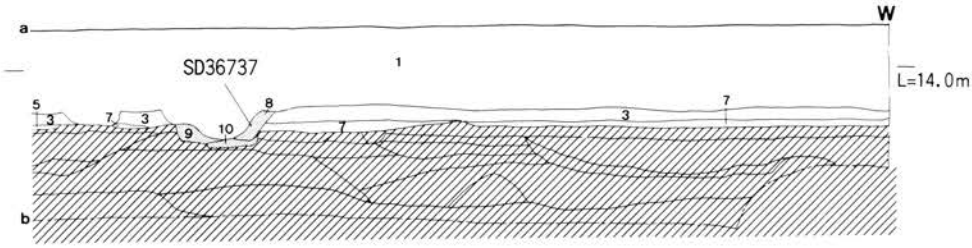


C3a・C4トレンチ検出遺構実測図(2)

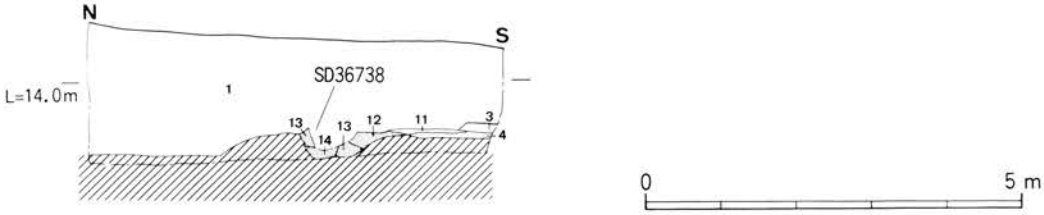


南壁土層図



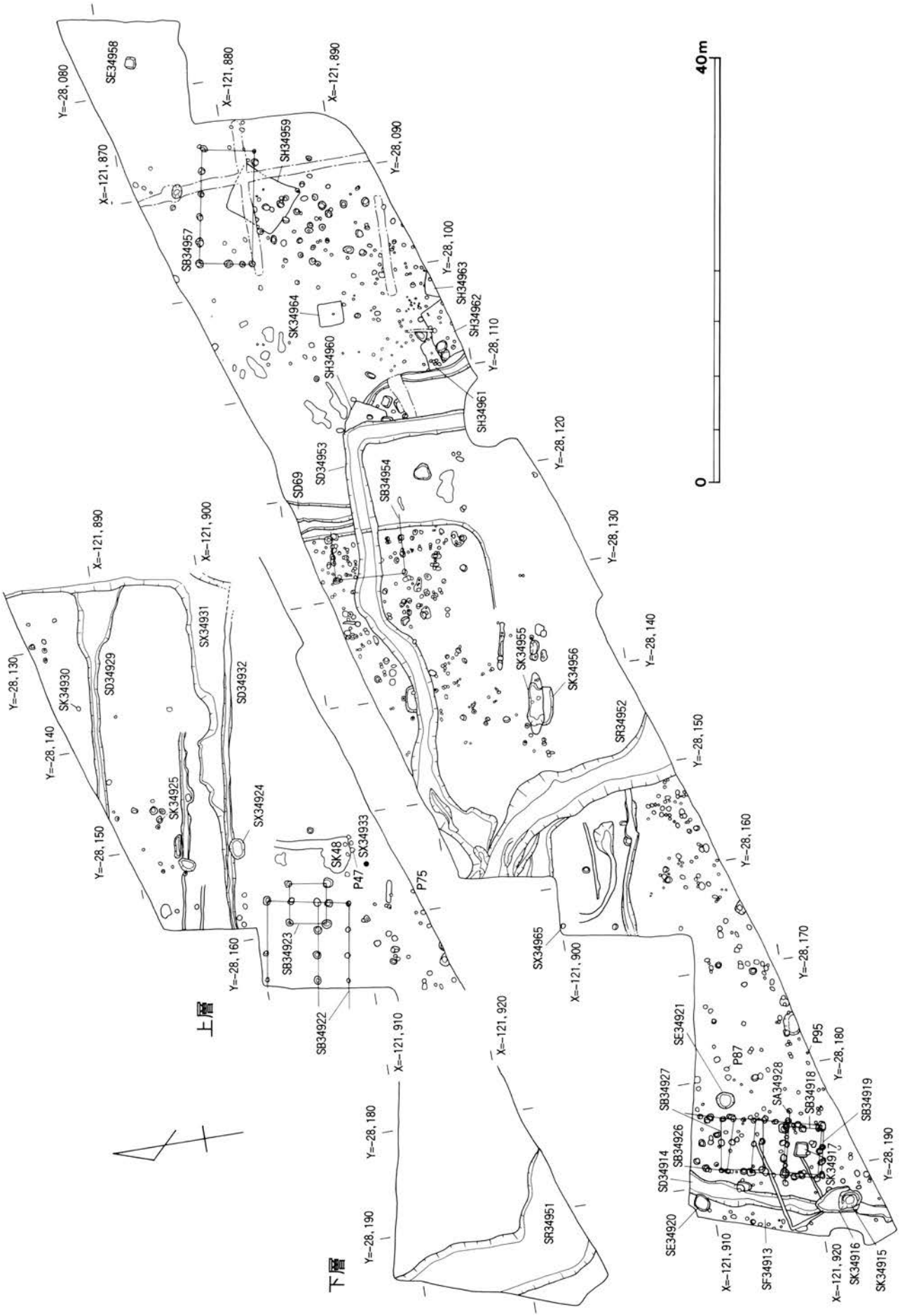


東壁土層図

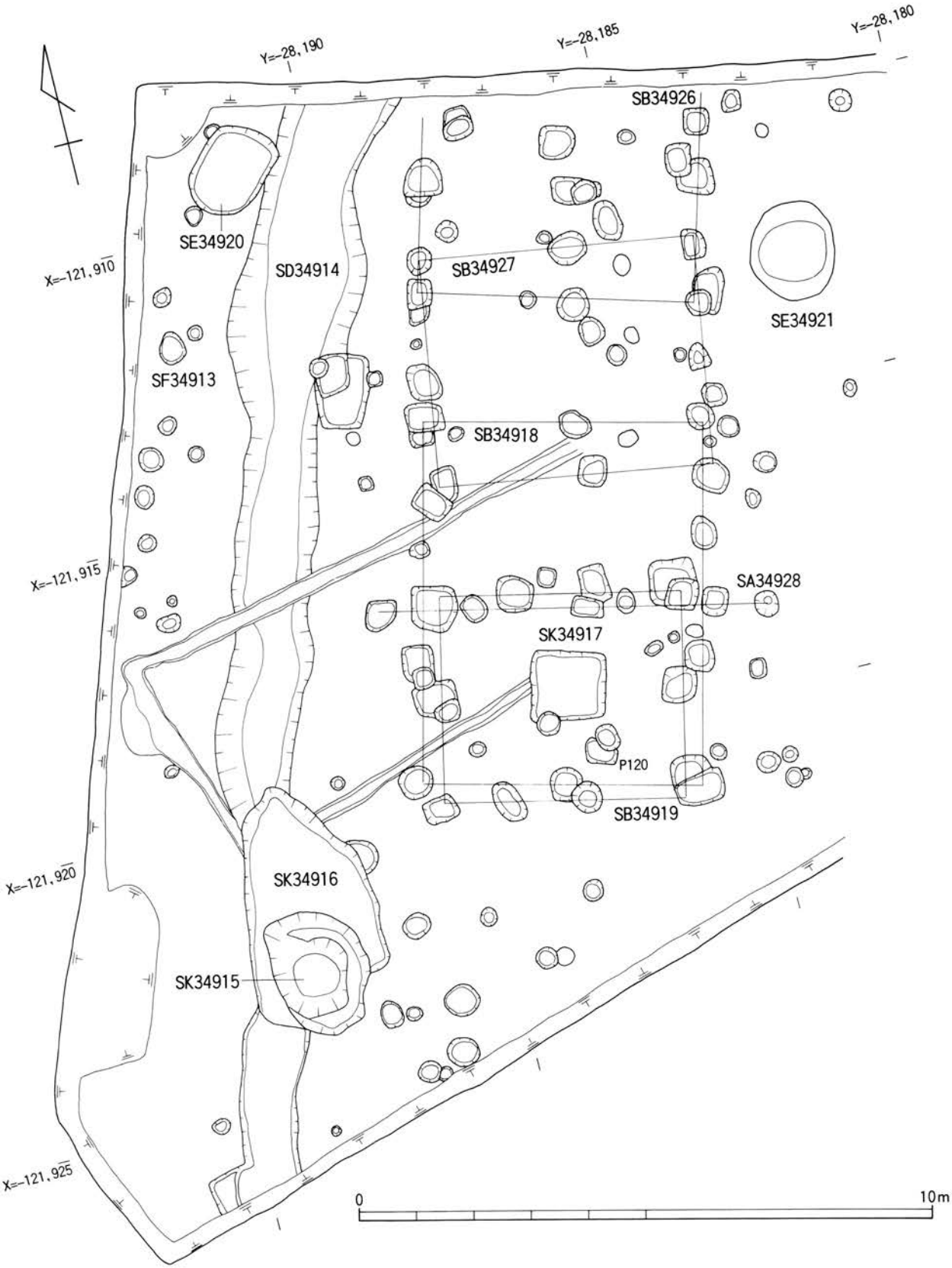


C３bトレンチ検出遺構平面図・土層図

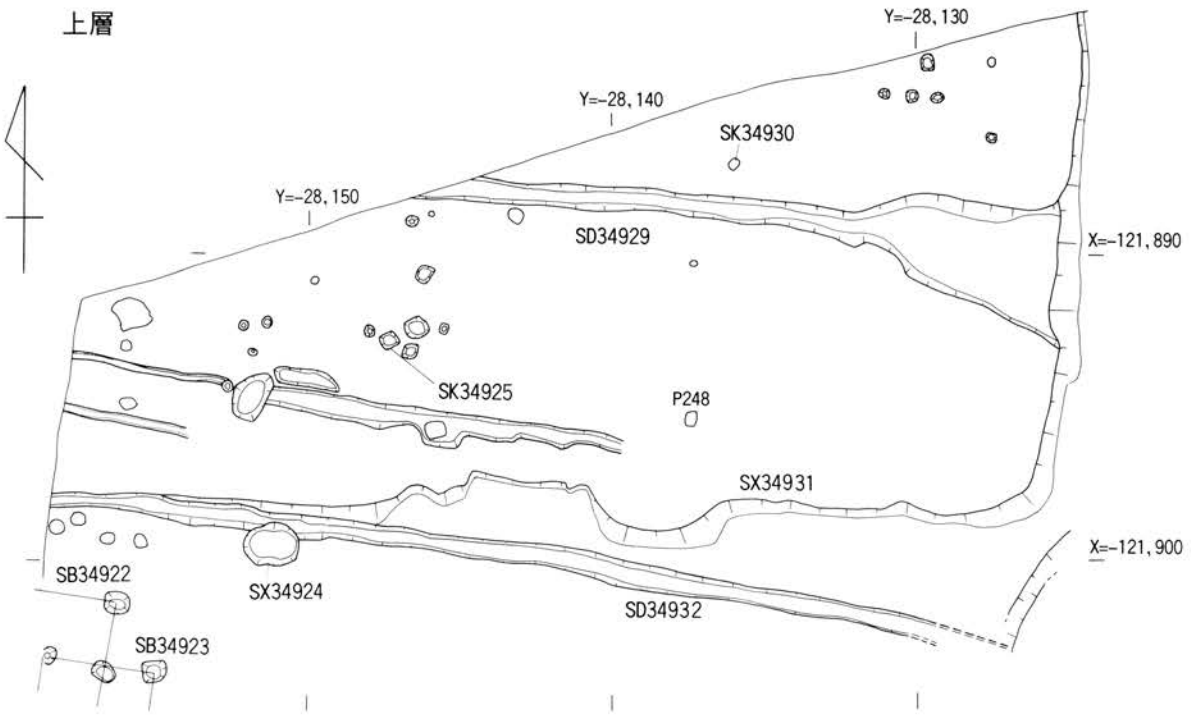
1．造成盛り土
2．淡灰色砂質土
3．青灰色砂混粘土(水田耕作土)
4．淡白色土(床土)
5．茶褐色土(包含層)
6．淡黄褐色土
7．淡黄灰色土(床土)
8．暗青灰色粘土
9．黒灰色砂土
10．明褐色砂(堅い)
　} ＳＤ36737 溝内堆積・水流あり
11．黄褐色土(床土)
12．黄茶色土
13．青灰色礫泥砂
14．暗青灰色砂質粘土
　} ＳＤ36738

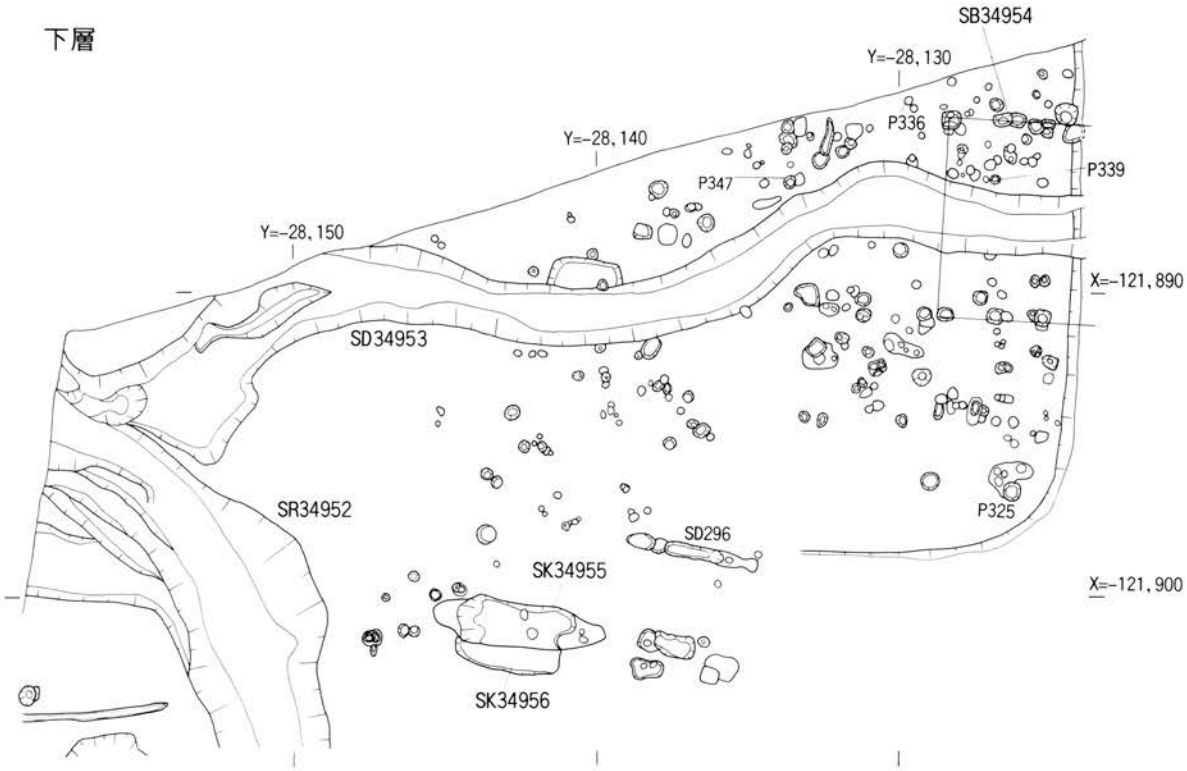


D１トレンチ検出遺構平面図



D１トレンチ検出遺構平面図(西端部)

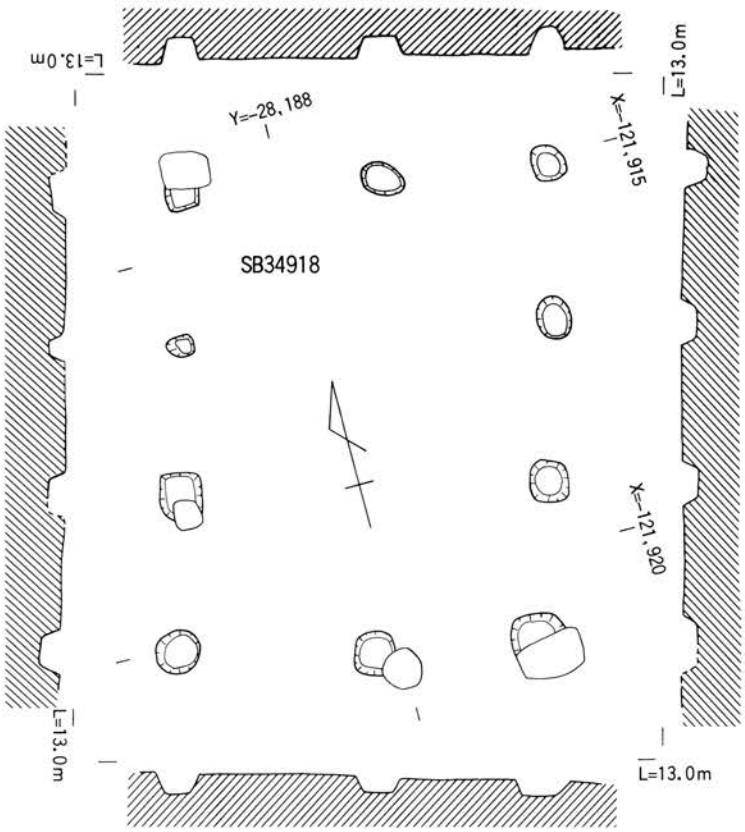


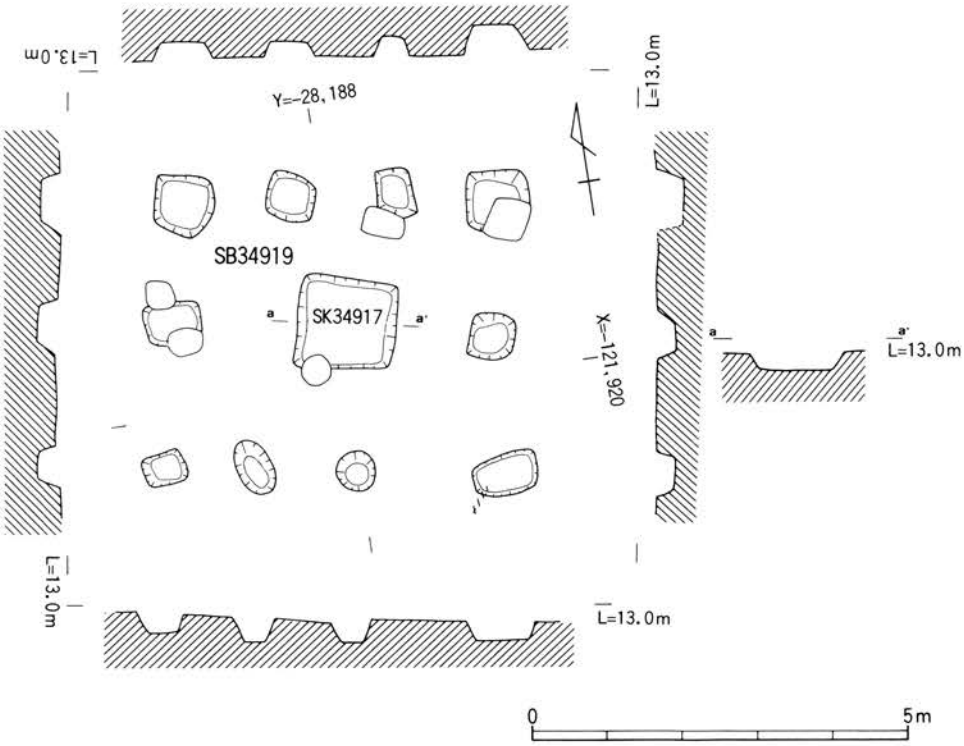


D１トレンチ検出遺構平面図(中央部)

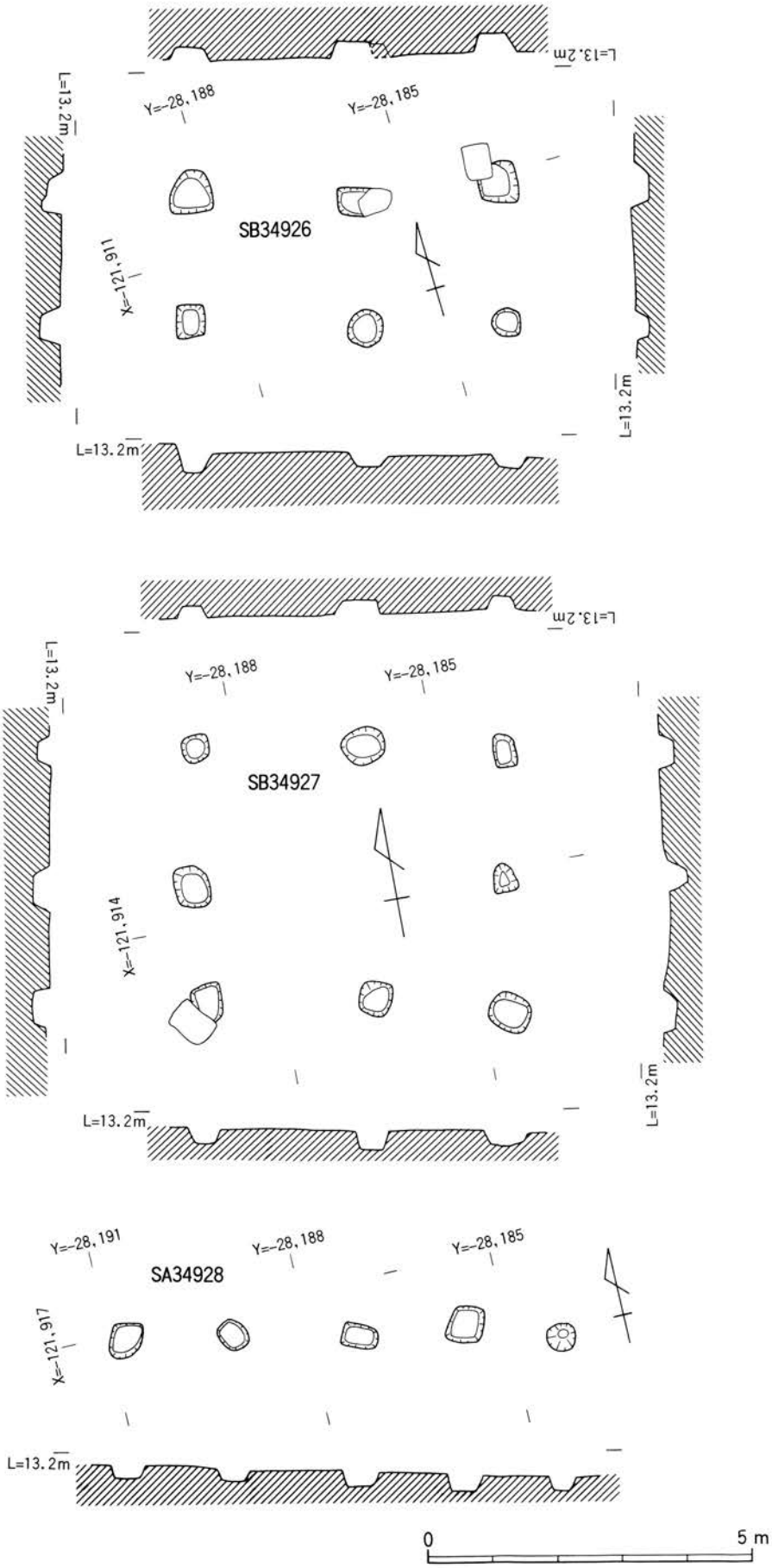
D1トレンチ検出遺構平面図(東部)

図版第114



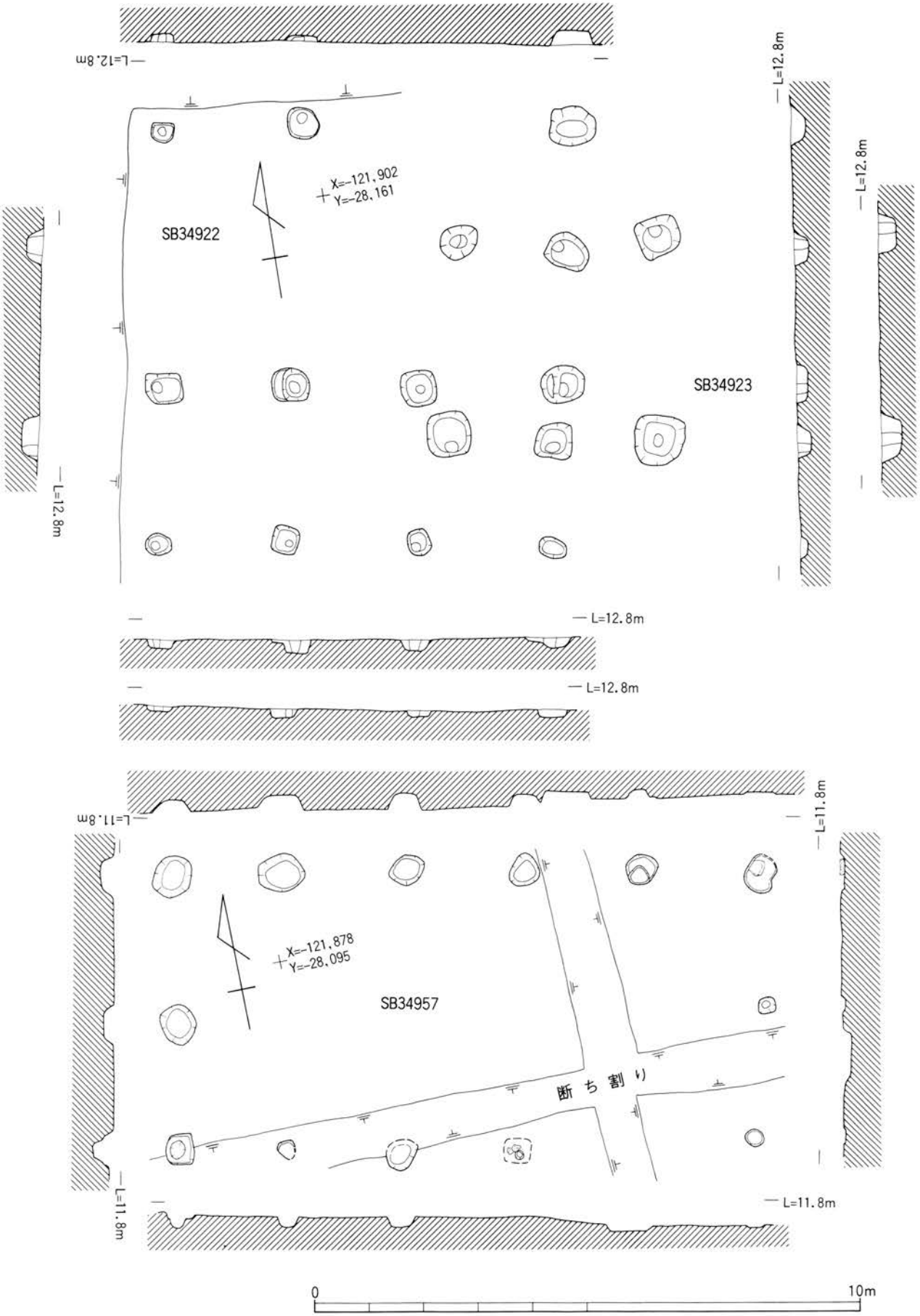


Ｄ１・Ｄ３トレンチ掘立柱建物跡実測図(1)



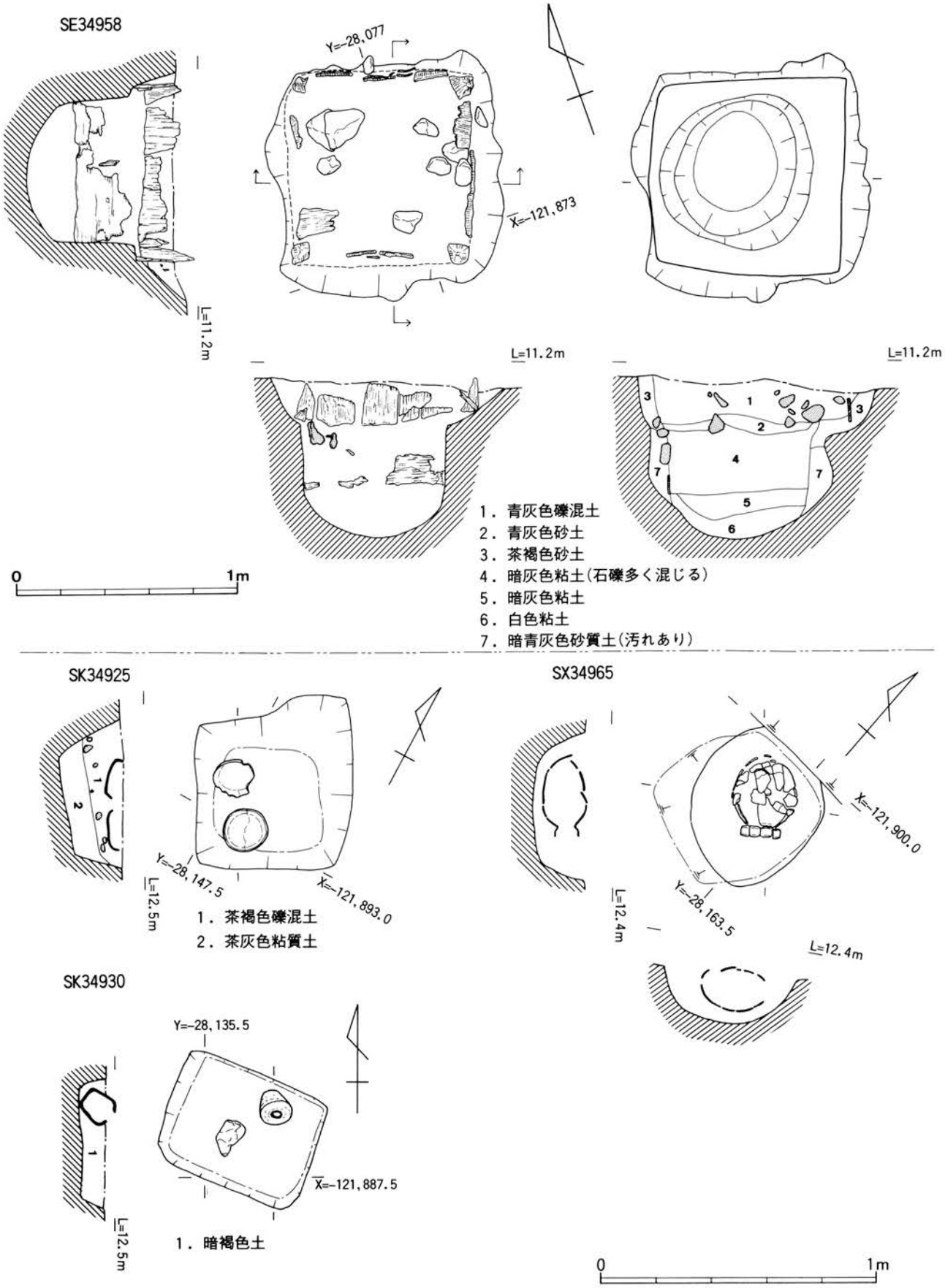
Ｄ１・Ｄ３トレンチ掘立柱建物跡実測図(2)

D１・D３トレンチ掘立柱建物跡実測図(3)

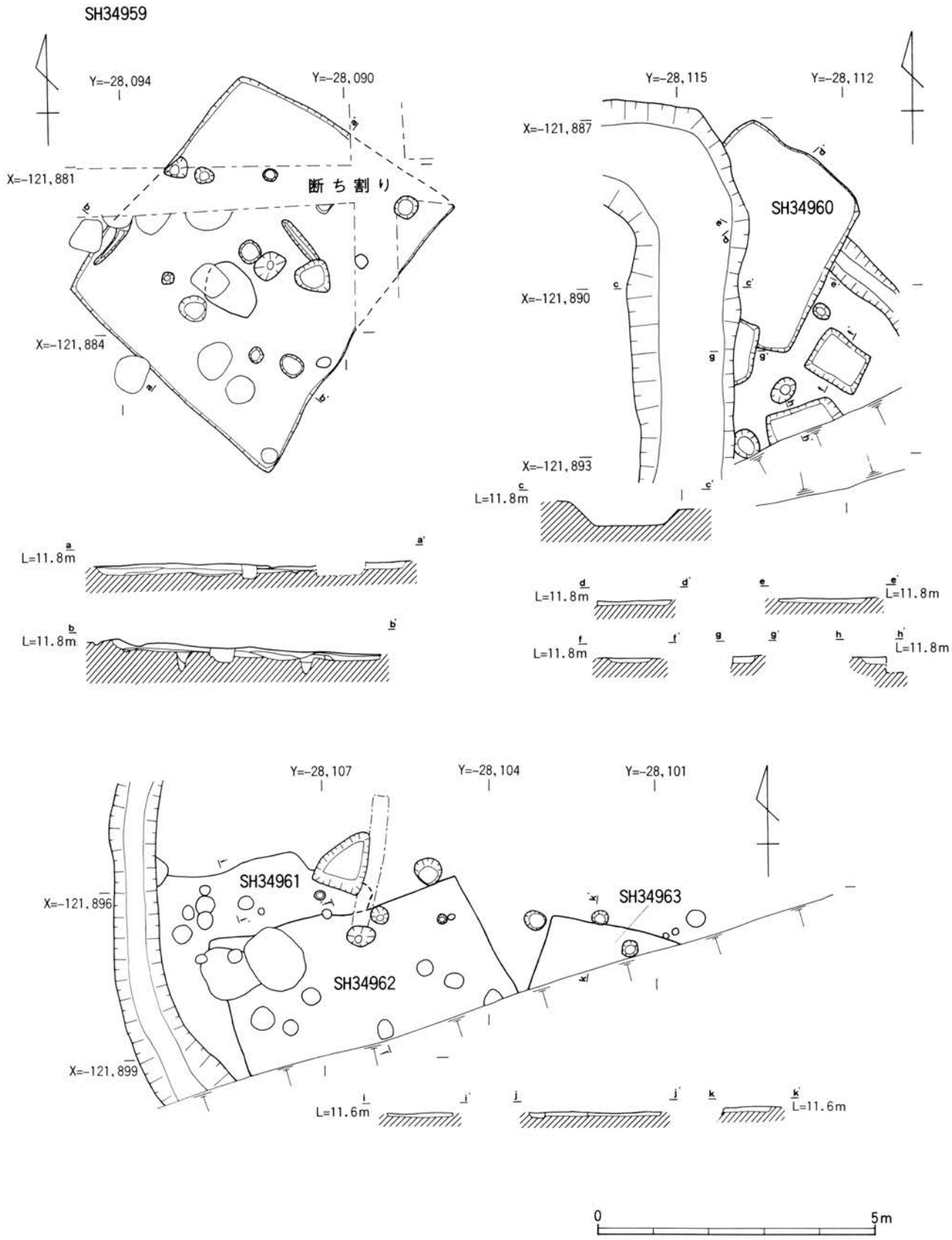


D１・D３トレンチ掘立柱建物跡実測図(4)

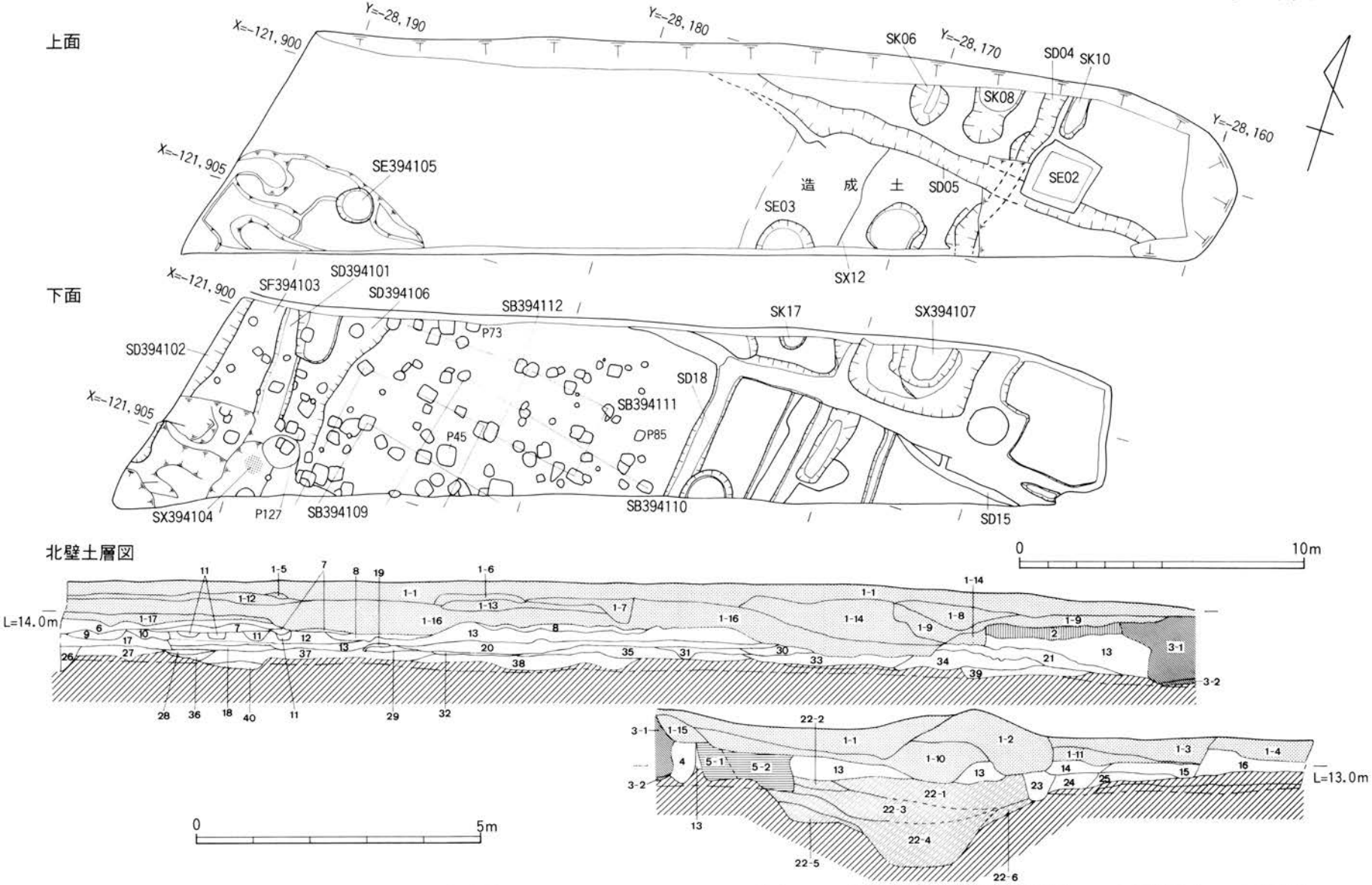
図版第三二



D１トレンチ検出遺構実測図



Ｄ１トレンチ竪穴式住居跡実測図

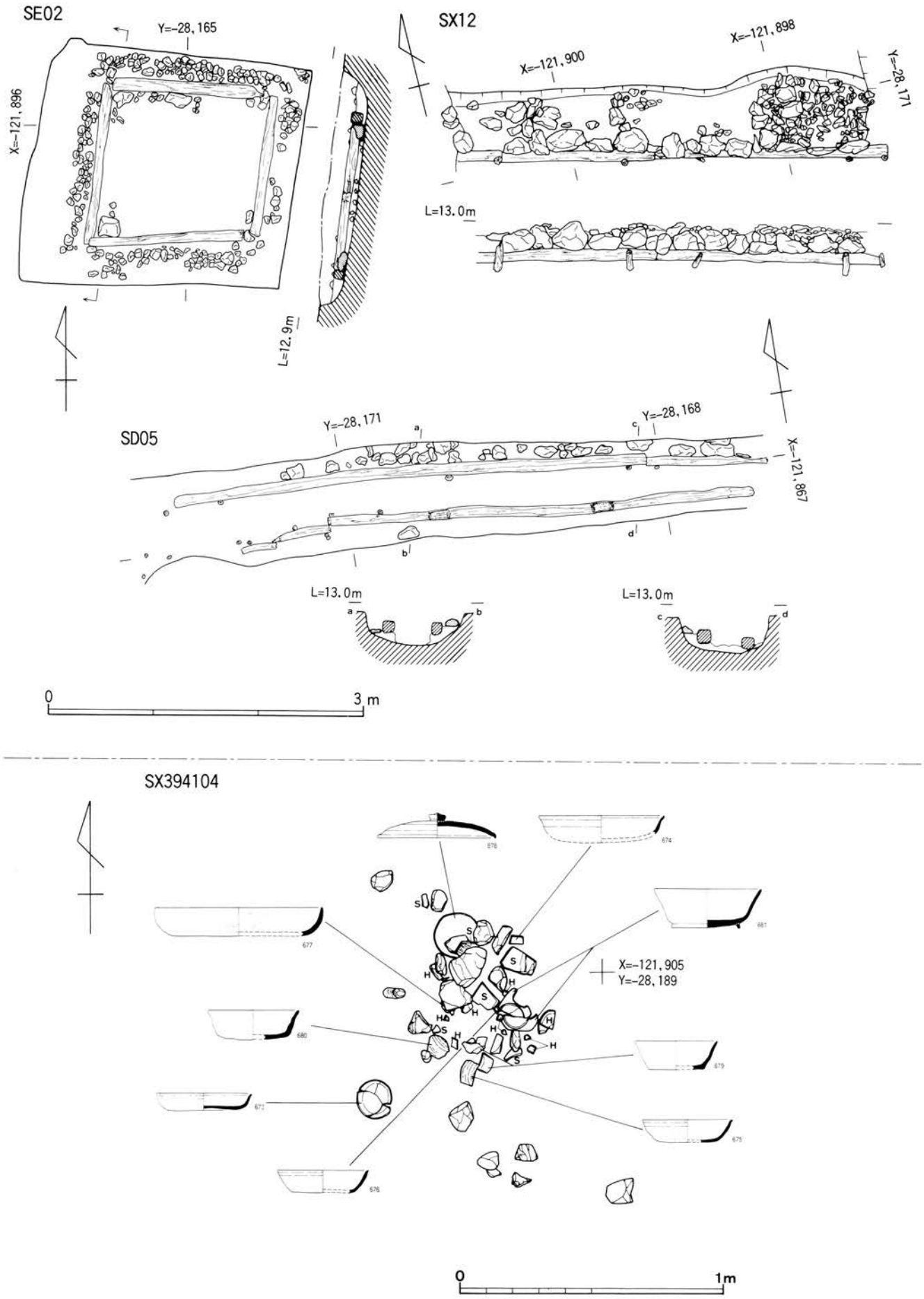


1.盛り土　2.黄茶色土　3.ＳＫ17　4.淡褐色礫土　5.ＳＫ06　6.灰色土　7.淡茶褐色土　8.茶色混淡灰色土　9.淡灰褐色土　10.炭化物
11.淡混茶褐色土　12.茶黄色土　13.茶褐色土　14.暗青灰色土　15.淡暗灰色土(耕作土)　16.褐色砂土　17.淡青灰色土　18.明茶褐色土　19.淡灰色砂土　20.黄茶色土
21.淡茶褐色土　22.ＳＸ394107　23.淡灰色粘土　24.淡暗灰色土　25.灰色土　26.暗青灰色粘土(ＳＤ394102)　27.青灰色礫混粘土(ＳＦ394103)　28.淡灰色砂混粘土
29.黄灰色土　30.淡灰色砂　31.黄色混暗灰色土　32.明褐色土　33.淡青灰色砂土　34.淡灰色土　35.黄色(少混)淡灰色土(小礫含む)　36.淡灰色粘土
37.淡灰色粘質土　38.淡灰色礫混粘土　39.小礫混淡青灰色粘土　40.灰色礫土

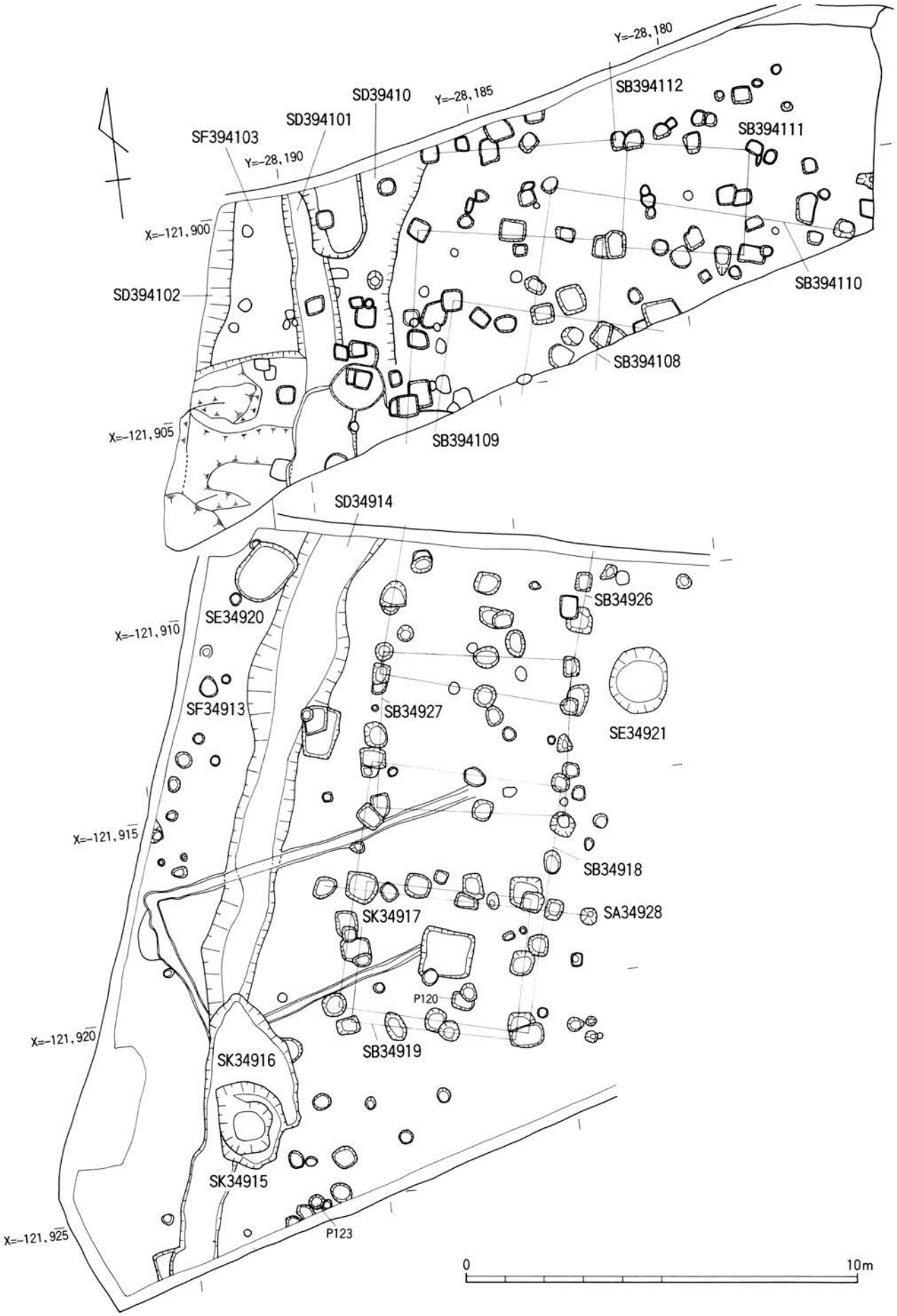
盛り土　：1-1.褐色土～暗褐色砂土　1-2.黄茶色土(瓦・石多)　1-3.黒灰色土(焼却土)　1-4.暗灰色土(焼却土)　1-5.黄褐色土　1-6.明褐色土　1-7.褐色土　1-8.炭混じり黒色土(廃材焼却)
1-9.暗褐色土　1-10.炭化物　1-11.暗黄褐色砂　1-12.茶褐色土　1-13.淡黄褐色土　1-14.黄褐色土　1-15.茶褐色砂土　1-16.茶褐色砂土　1-17.黄褐色土

ＳＫ17　：3-1.礫混黄褐色土　3-2.淡茶褐色土　ＳＫ06　：5-1.茶褐色礫土(径５cmの礫)　5-2.黒灰色砂土(人頭大石)

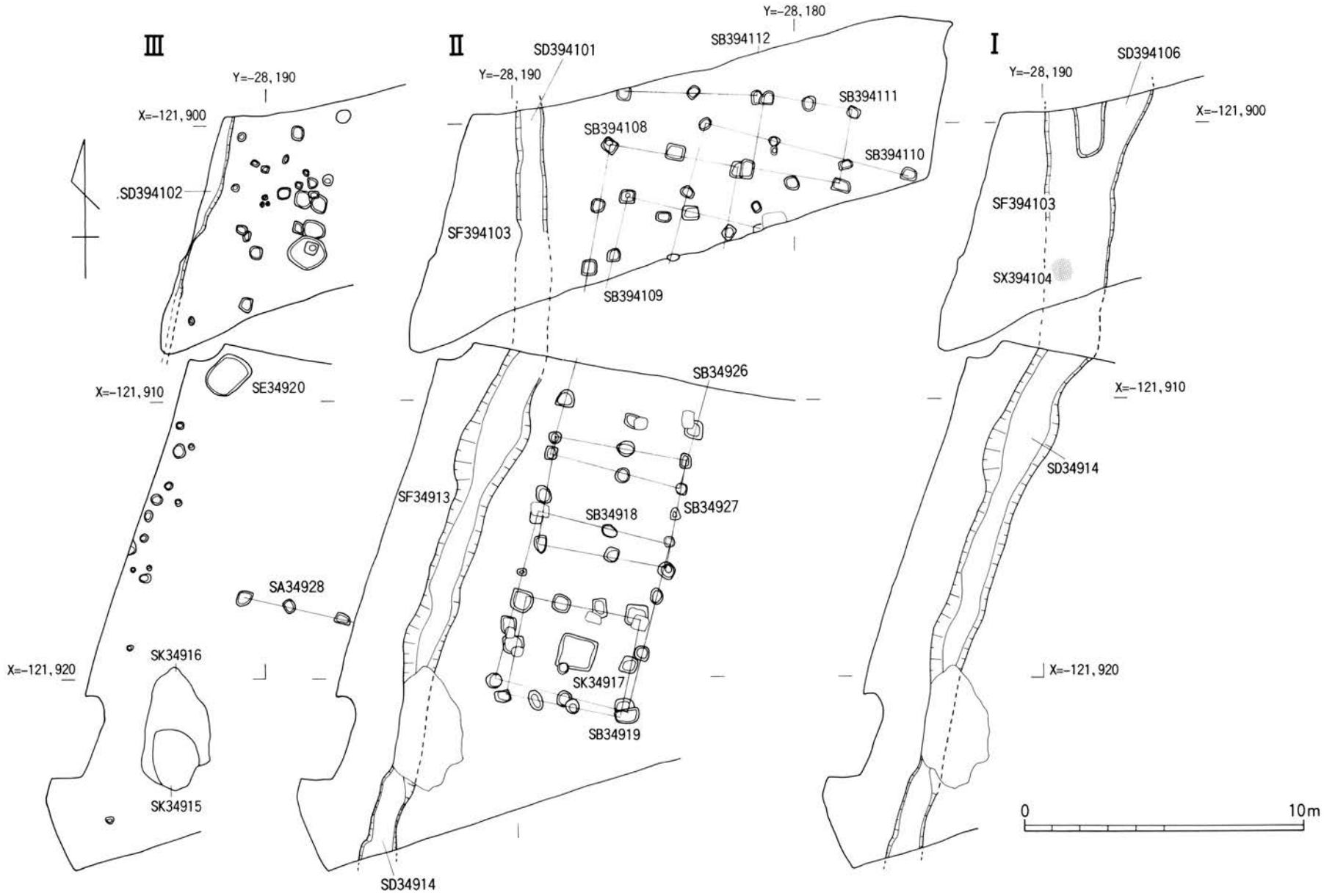
ＳＸ394107：22-1.暗灰色土(植物質多)　22-2.淡茶褐色礫土　22-3.暗灰色粘質土(植物質多、近世土器多)　22-4.淡灰色礫(径５cmの礫)　22-5.淡灰色礫土(径２cmの礫)　22-6.淡灰色砂



D３トレンチ検出遺構実測図

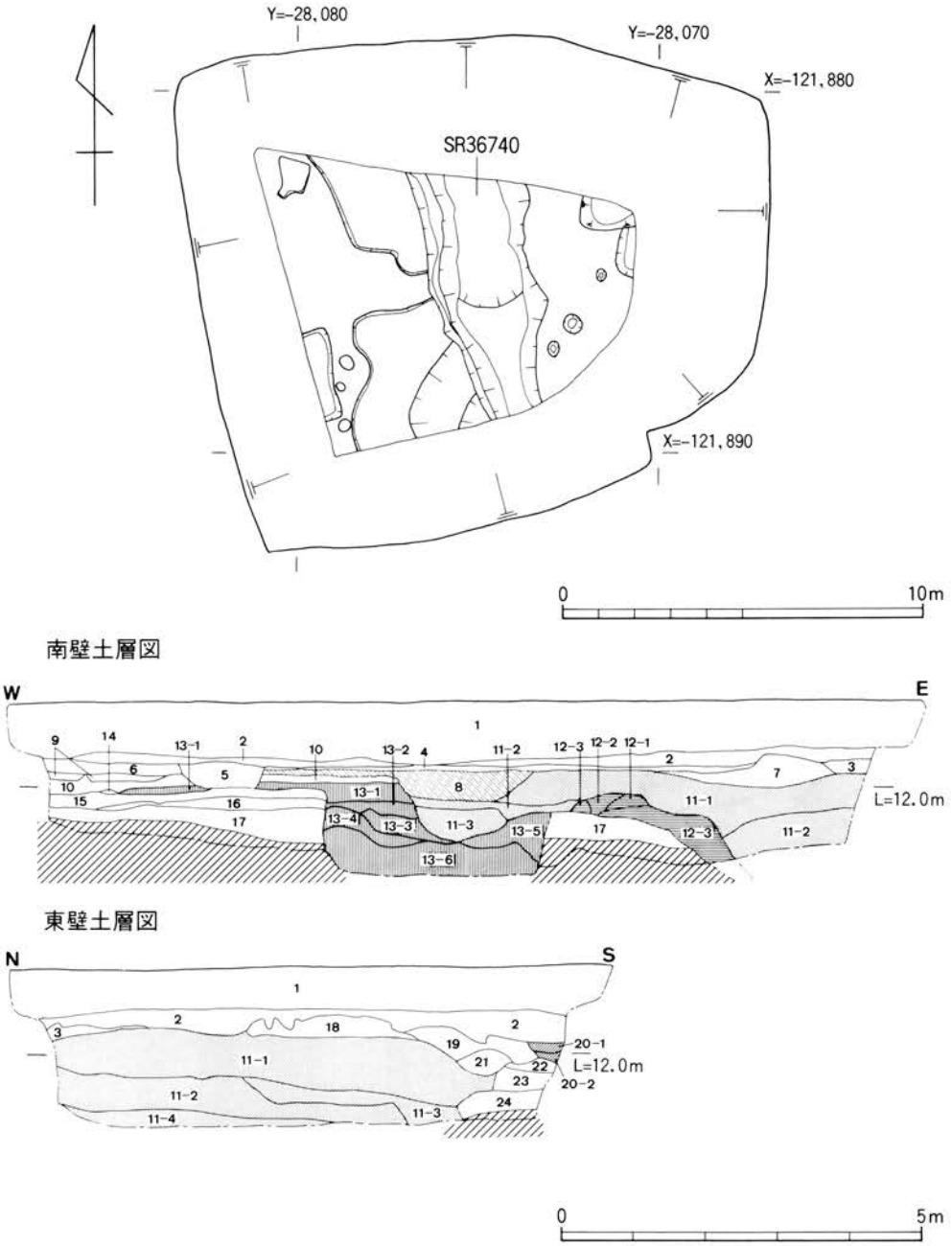


Ｄ１・Ｄ３トレンチ西国街道東側検出遺構実測図



D1・D3トレンチ西国街道東側遺構変遷図

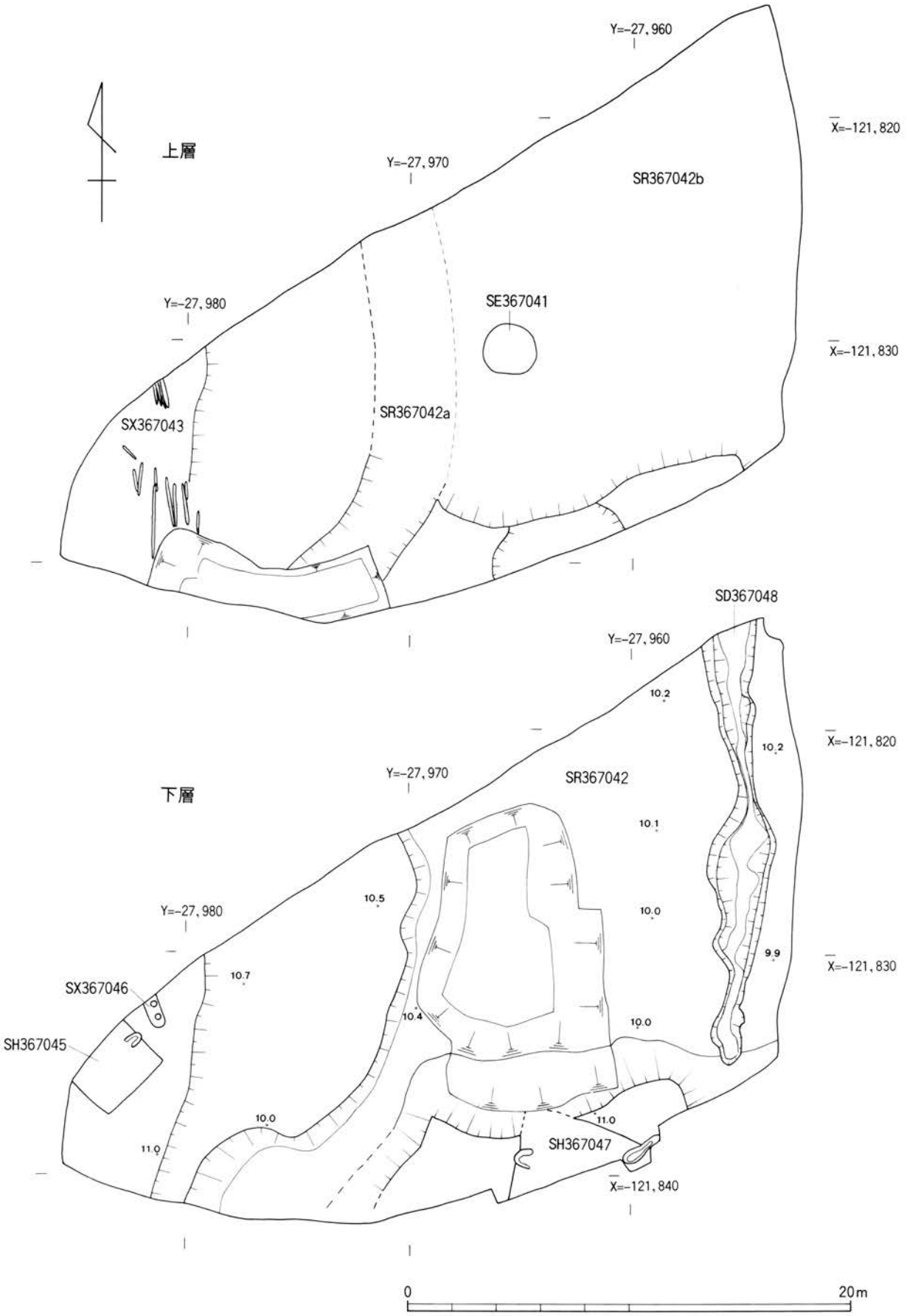
図版三十



D２トレンチ検出遺構平面図・土層図

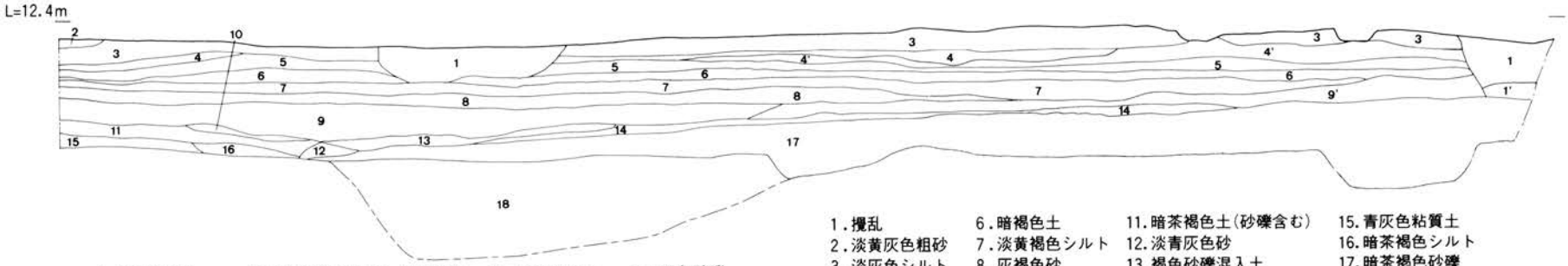
1.盛り土　2.黒灰色土(耕作土)　3.淡黄灰色砂土　4.茶褐色砂礫
5.暗褐色礫～明褐色礫(攪乱)　6.淡暗灰色砂土　7.暗灰褐色砂礫　8.暗褐色砂礫
9.褐色砂(洪水堆積)　10.淡灰色砂土(床土)　11.流路１　12.流路２
13.流路３　14.褐色砂　15.淡灰白色土　16.明茶褐色土
17.暗灰色礫土(弥生～平安時代包含層)　18.明黄褐色土　19.灰色砂混土
20.流路４　21.暗褐色礫土　22.暗褐色土　23.淡灰色土
24.明褐色礫

流路１：11-1.明褐色砂礫　11-2.明褐色砂　11-3.明褐色礫　11-4.灰色砂礫
流路２：12-1.黄褐色砂礫混灰色粘土　12-2.明褐色砂礫　12-3.灰色粘土
流路３：13-1.明褐色砂礫　13-2.淡青灰色砂～明褐色砂礫　13-3.淡灰褐色砂礫(２～３㎜の礫)
13-4.明褐色砂～淡灰褐色砂礫　13-5.淡明褐色砂　13-6.淡灰褐色砂
流路４：20-1.灰色礫　20-2.暗褐色礫土

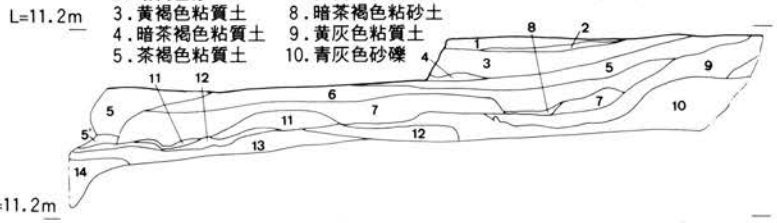


Eトレンチ検出遺構平面図

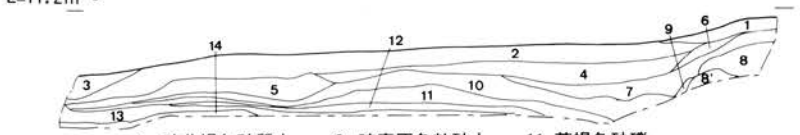
Eトレンチ土層図



1．攪乱
2．淡黄灰色粗砂
3．淡灰色シルト
4．灰褐色土
5．褐色砂
6．暗褐色土
7．淡黄褐色シルト
8．灰褐色砂
9．灰色シルト
10．淡灰褐色砂
11．暗茶褐色土（砂礫含む）
12．淡青灰色砂
13．褐色砂礫混入土
14．淡灰色砂
15．青灰色粘質土
16．暗茶褐色シルト
17．暗茶褐色砂礫
18．茶褐色砂礫

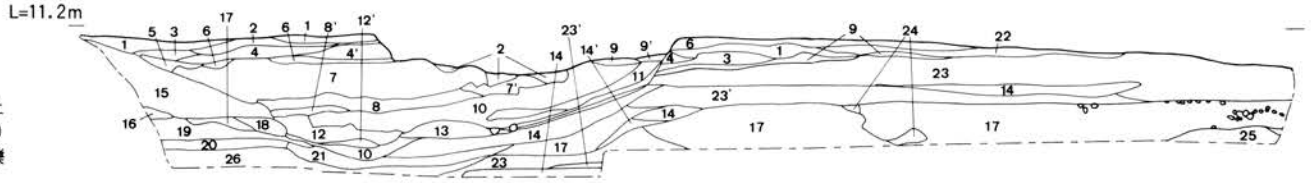


1．褐色粘質土
2．暗褐色砂
3．黄褐色粘質土
4．暗茶褐色粘質土
5．茶褐色粘質土
6．茶褐色粘質土（5より砂質）
7．灰褐色粘質土
8．暗茶褐色粘砂土
9．黄灰色粘質土
10．青灰色砂礫
11．灰褐色砂礫
12．暗灰褐色砂礫
13．灰色砂礫
14．暗褐色砂礫



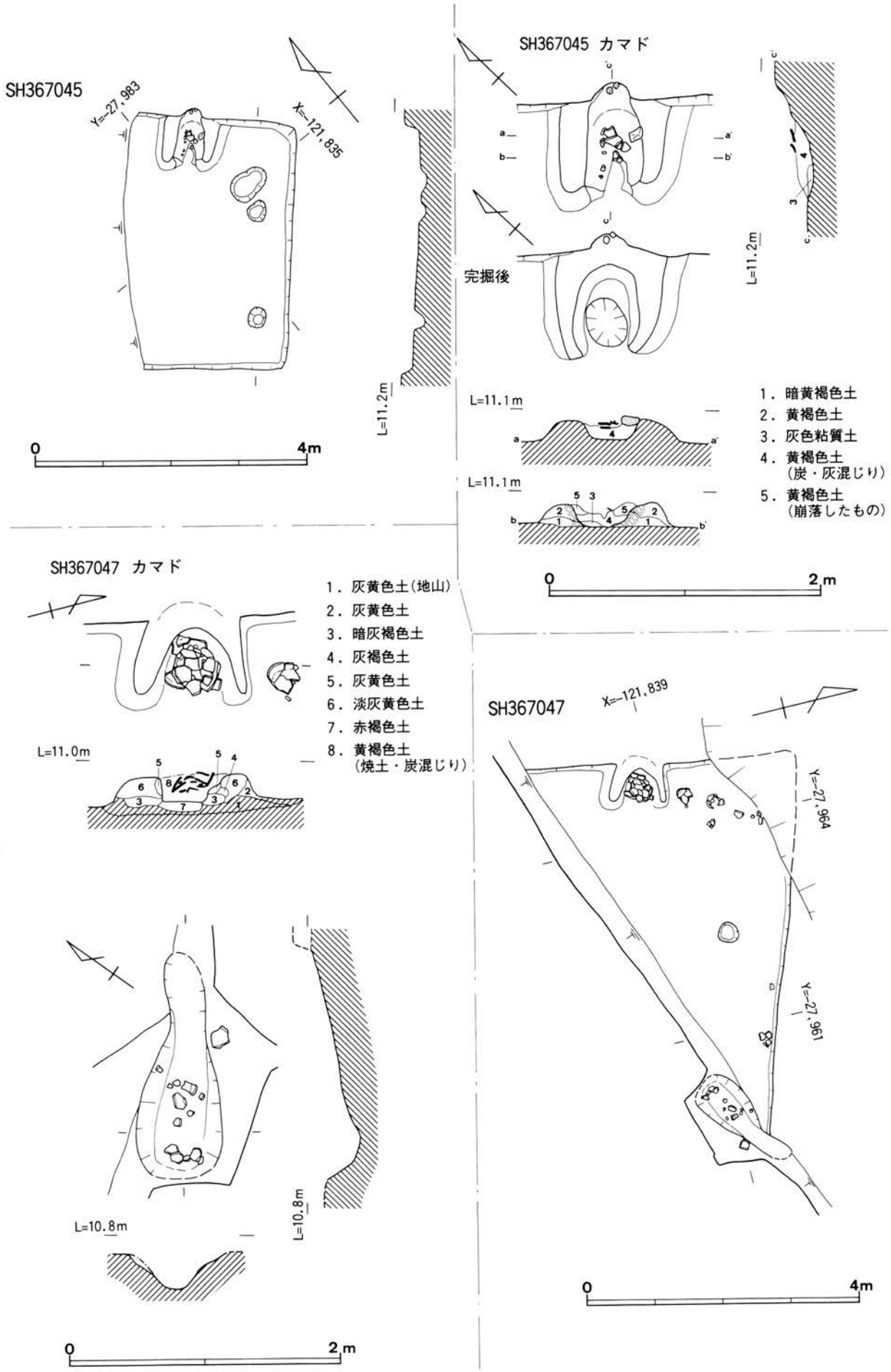
1．暗黄褐色砂質土
2．暗褐色粘質土
3．茶褐色粘質土
4．暗青灰色粘質土
5．青灰色粘質土
6．暗青灰色粘砂土
7．青灰色粘砂土
8．青灰色砂
9．緑灰色粘砂土
10．青灰色砂礫
11．茶褐色砂礫
12．黄褐色砂礫
13．暗褐色砂礫
14．茶褐色砂

1．黄褐色粘質土
2．灰色粘質土
3．灰色砂（細）
4．灰色粘砂土
5．暗褐色粘質土
6．灰色砂（粗）
7．暗茶褐色粘質土
8．黒褐色粘砂土
9．黒褐色粘質土
10．暗黄褐色粘質土

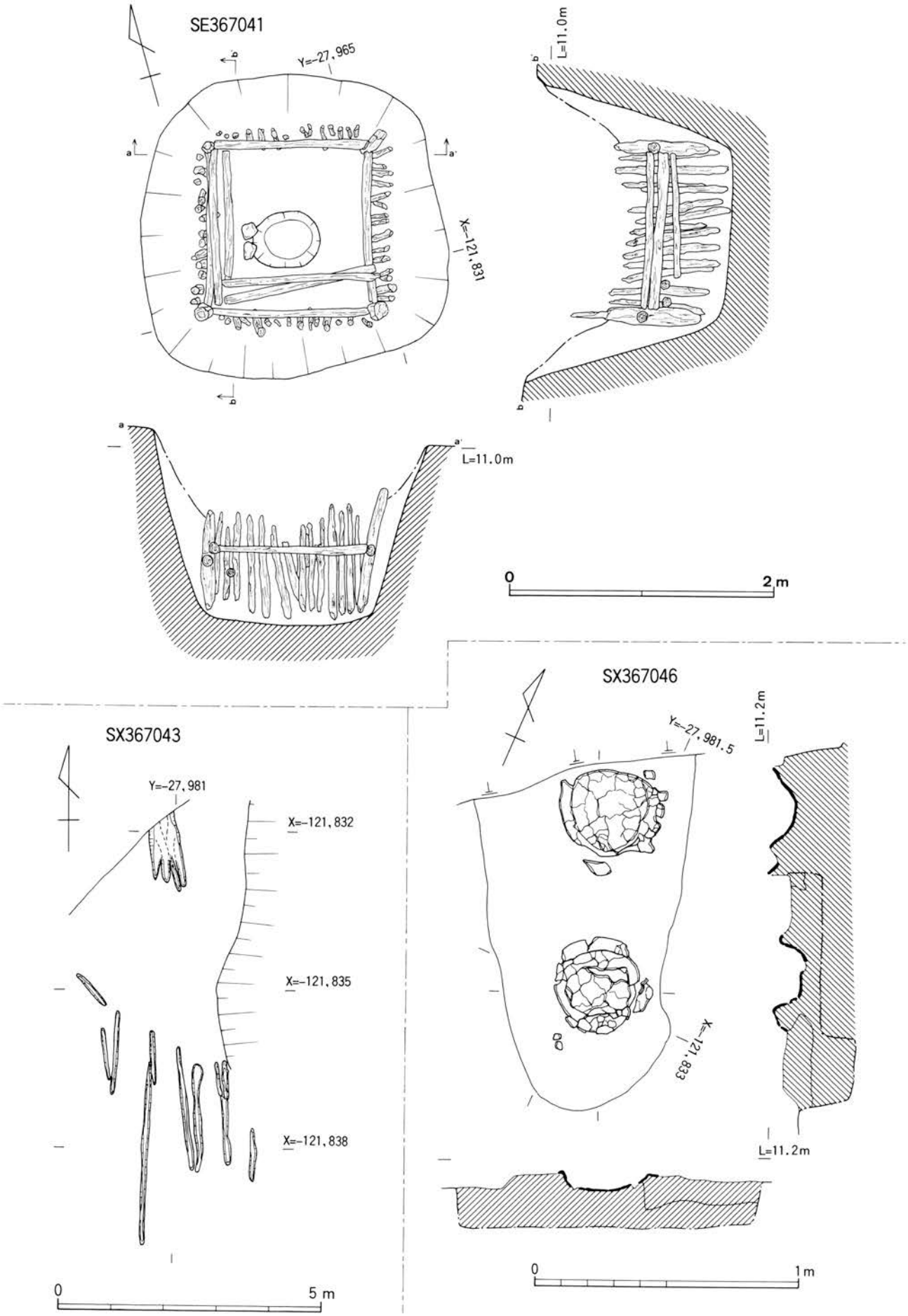


1．茶褐色粘質土
2．茶褐色砂
3．褐色砂
4．茶褐色砂（やや粗い）
5．暗青灰色粘質土
6．青灰色粘質土
7．暗青灰粘質土
8．青灰色粘砂土
9．灰色粘質土
10．青灰色粘質土（砂礫混じり）
11．青灰色粘質土
12．青灰色砂（細）
13．暗青褐色砂礫
14．茶褐色砂礫
15．茶褐色粘砂土
16．茶褐色粘砂土（砂礫混じり）
17．暗褐色砂礫
18．暗青灰色砂
19．明褐色砂礫
20．明茶褐色砂礫
21．茶褐色砂礫（礫小さい）
22．黄褐色粘質土
23．暗茶褐色砂礫
24．淡青灰粘土
25．暗褐色粘質土
26．赤褐色砂礫

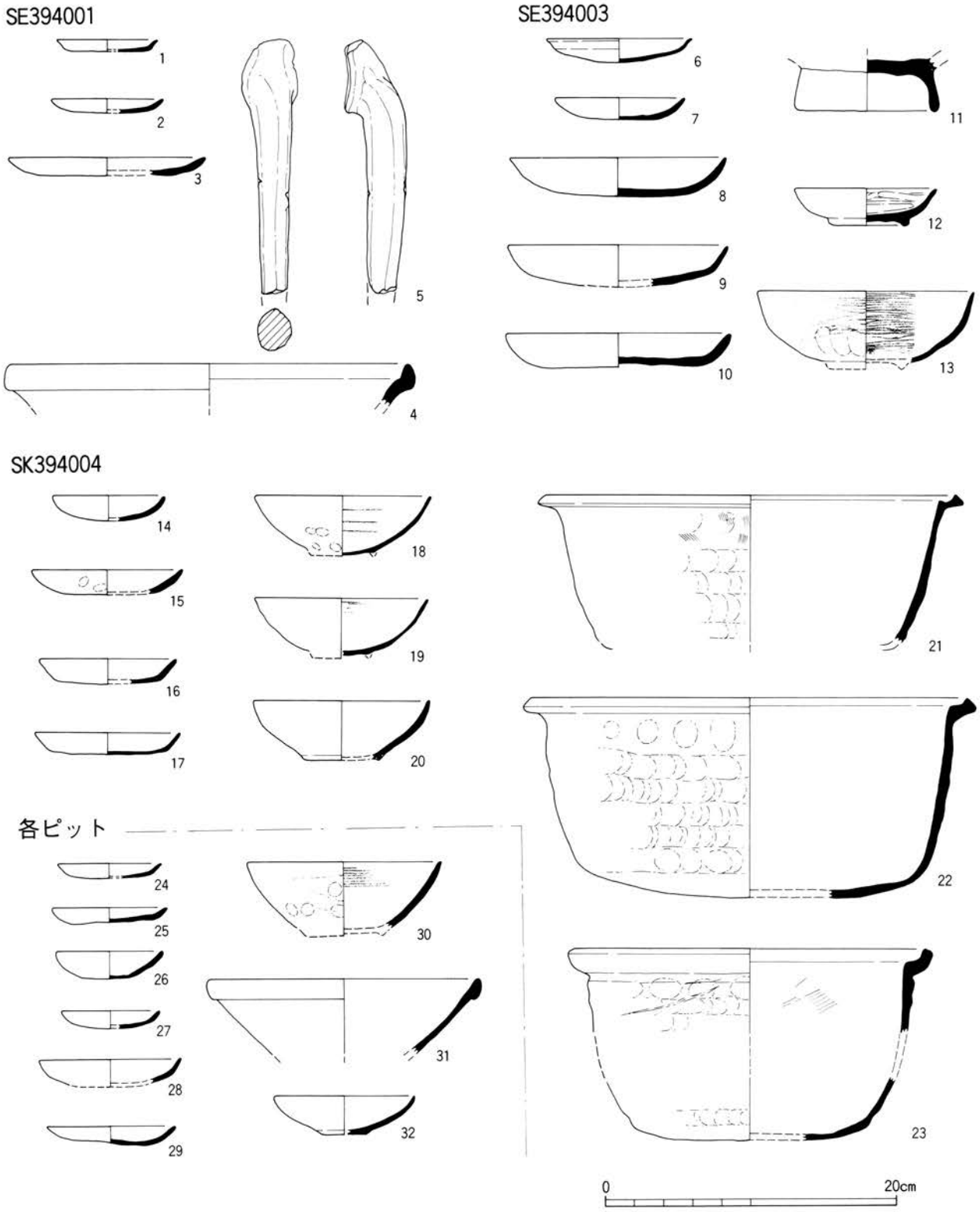
0　10m



Eトレンチ竪穴式住居跡実測図

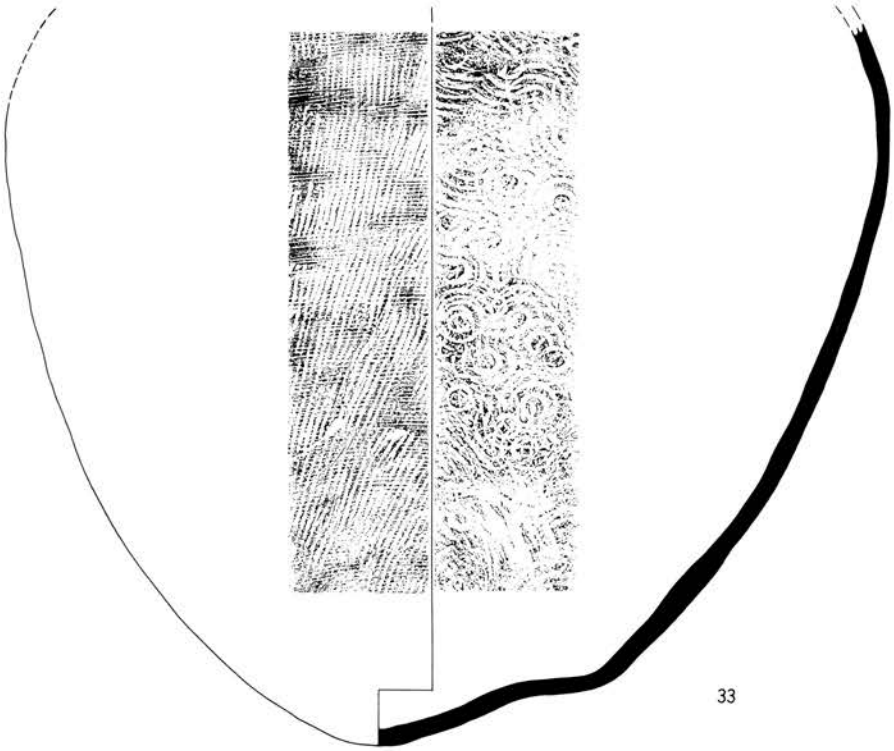


Eトレンチ検出遺構実測図

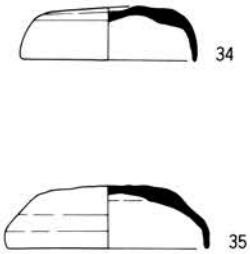


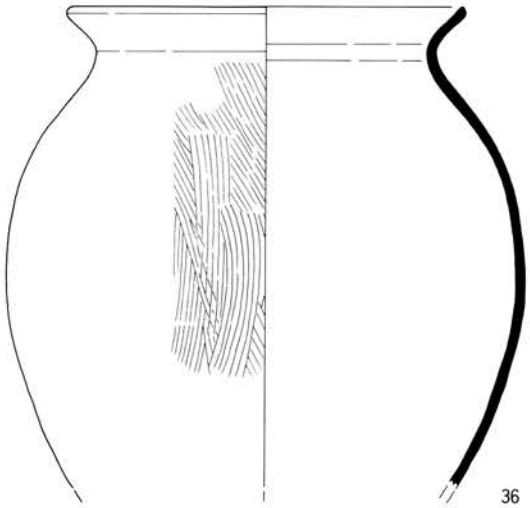
土器実測図(1)

SK394007

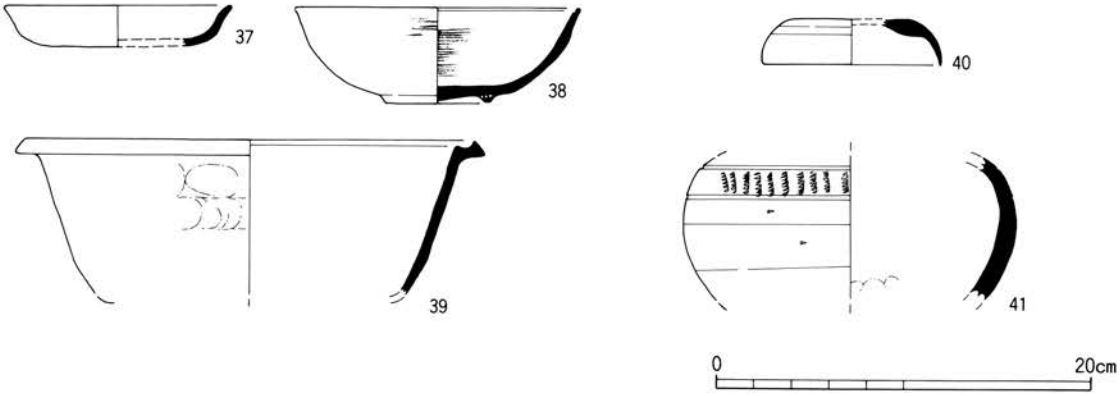


SK394006

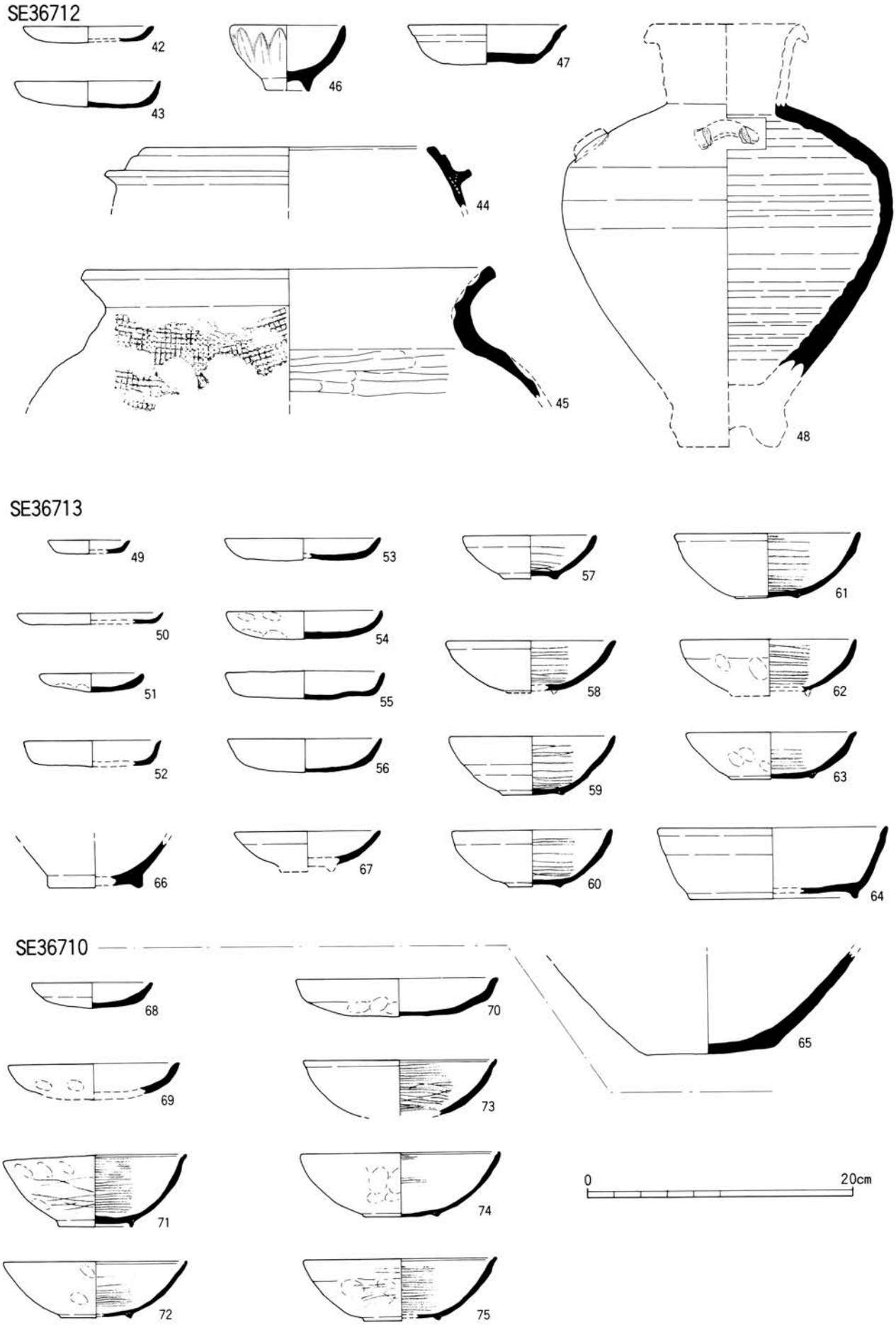




包含層

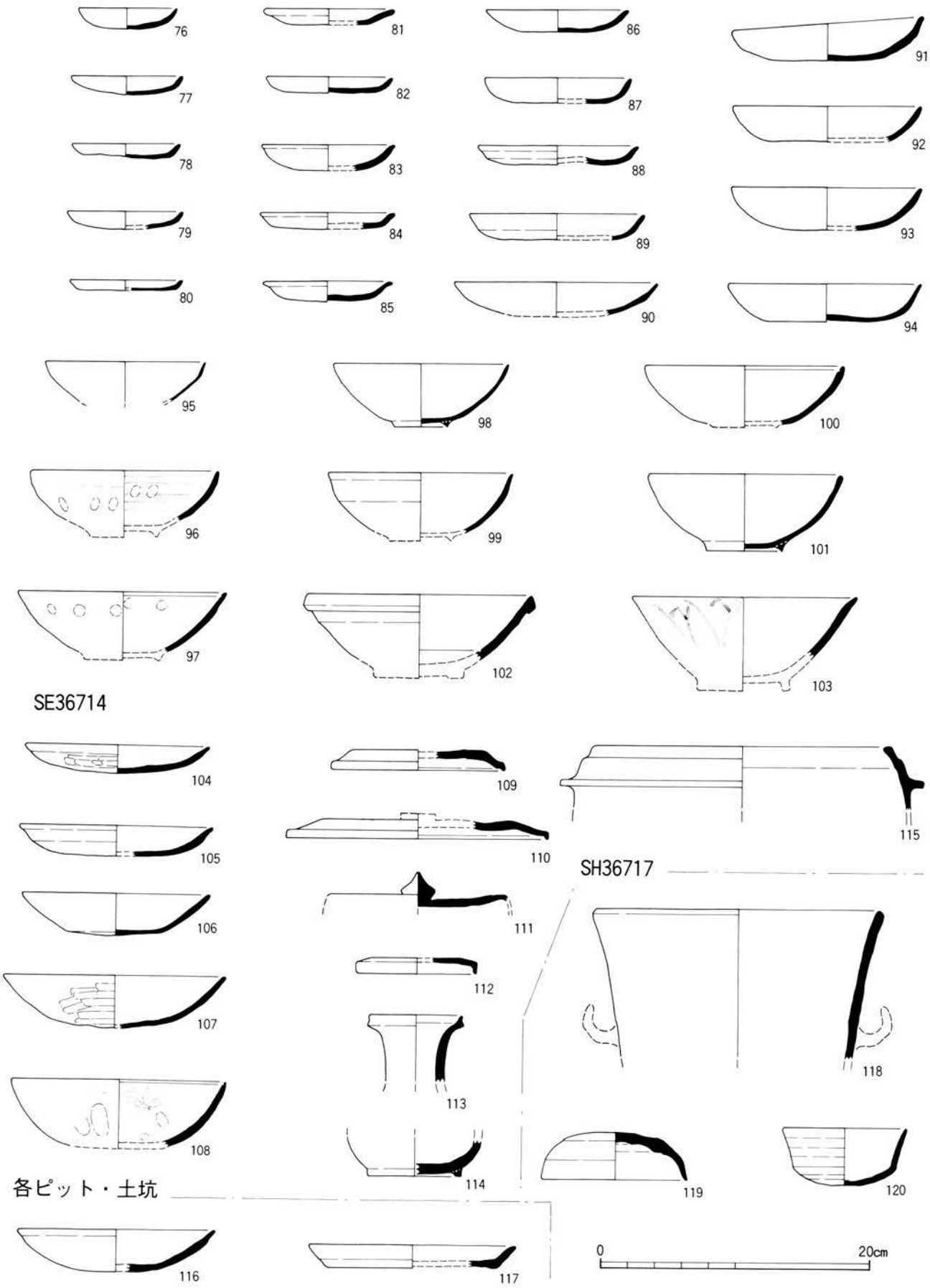


土器実測図(2)


SE36712
42
43
46
47
44
45
48
SE36713
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
66
67
SE36710
68
69
70
71
72
73
74
75
65
0
20cm

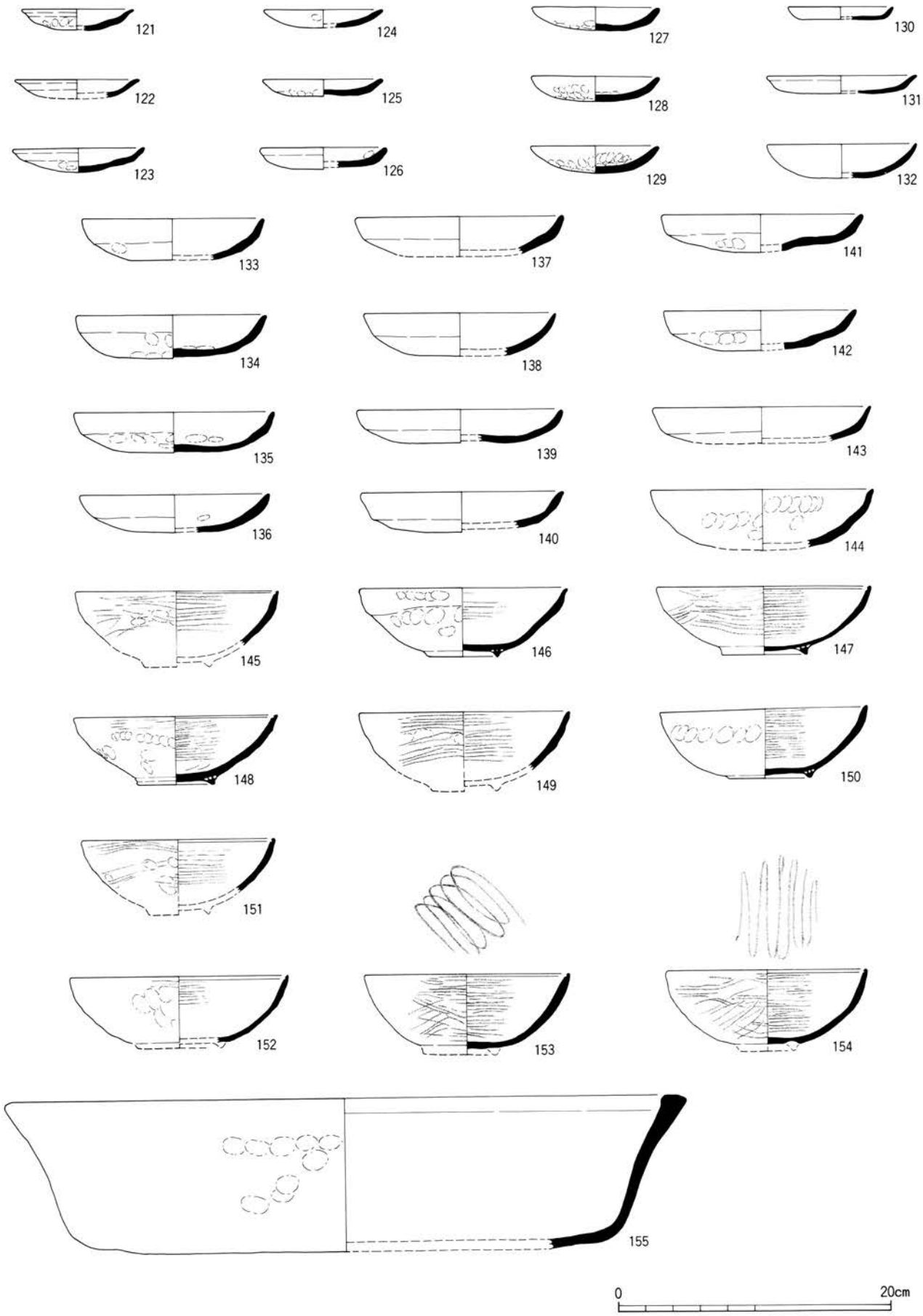
土器実測図(3)

各ピット・土坑

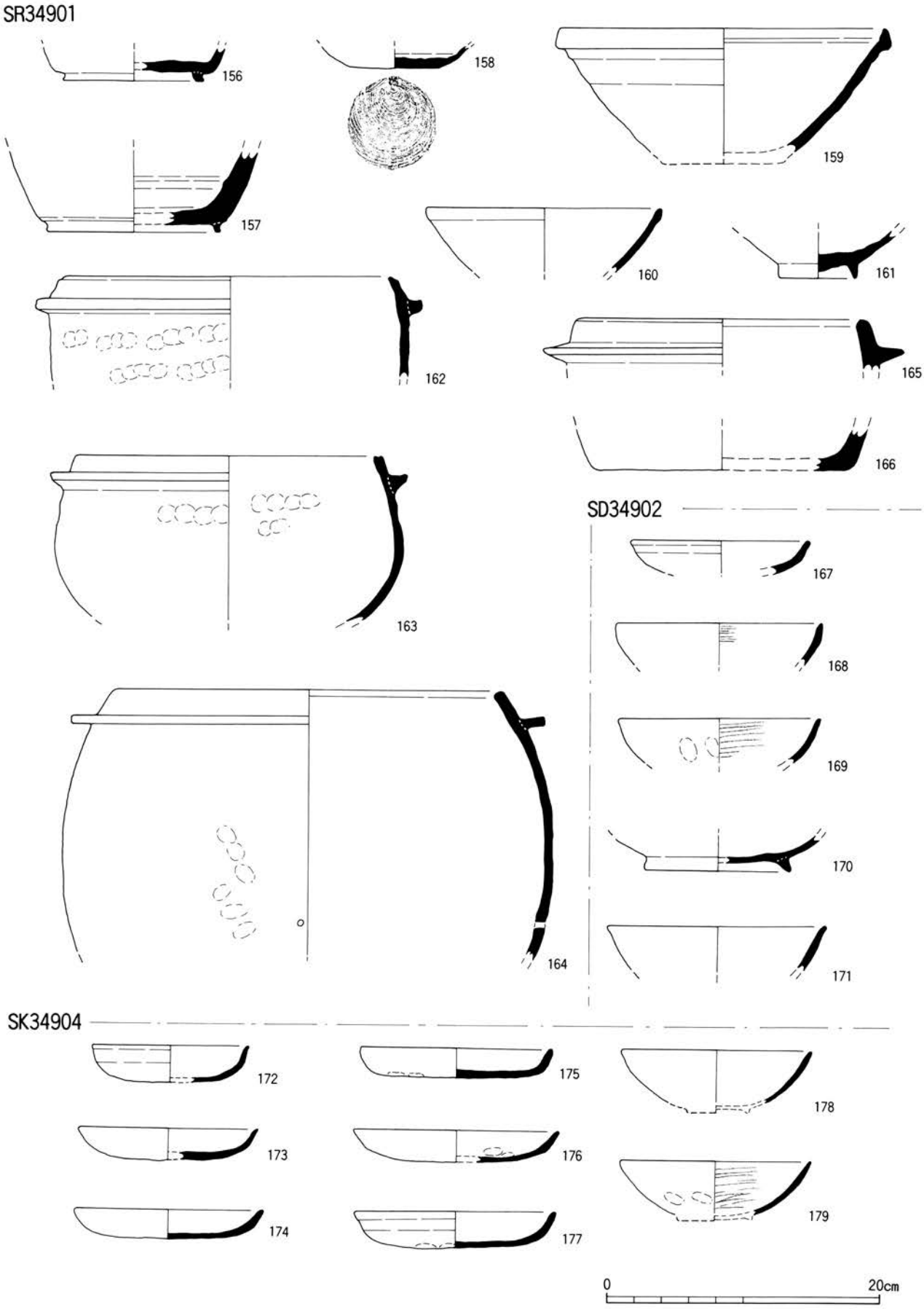


土器実測図(4)

SR34901



土器実測図(5)


SR34901
156
158
159
157
160
161
162
165
166
163
SD34902
167
168
169
170
171
164
SK34904
172
175
178
173
176
174
177
179
0
20cm

土器実測図(6)

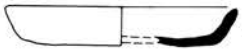
各ピット

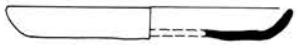
180

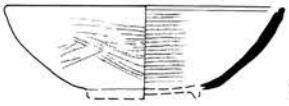
181

包含層

182

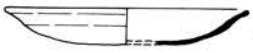

183


184

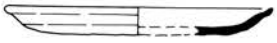

185

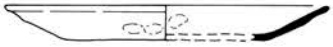
186

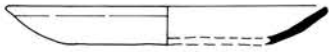
SD349111Ⅳ層

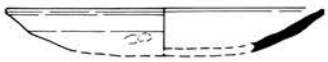

187

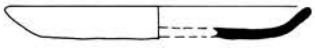
188

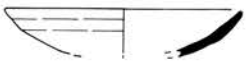

189

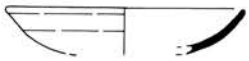

190

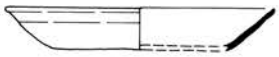

191


192


193

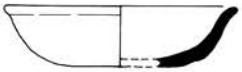

195


196

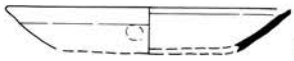

197

198

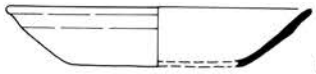
199

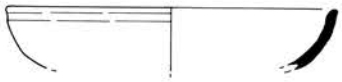

204

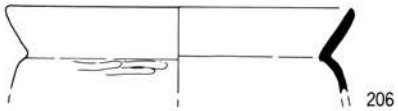
194


200

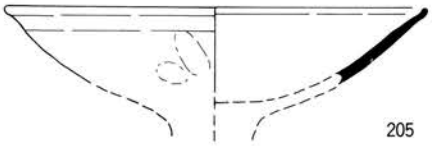
201

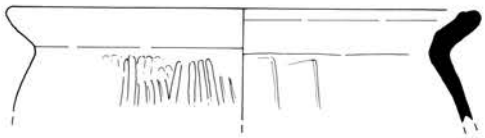

202


203


206

207

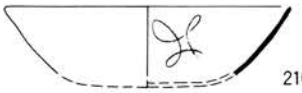

205

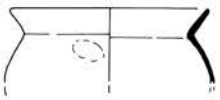

208

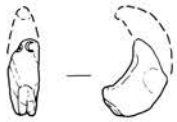
209

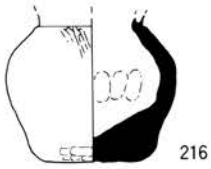
212

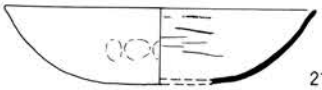
214


210


213


215

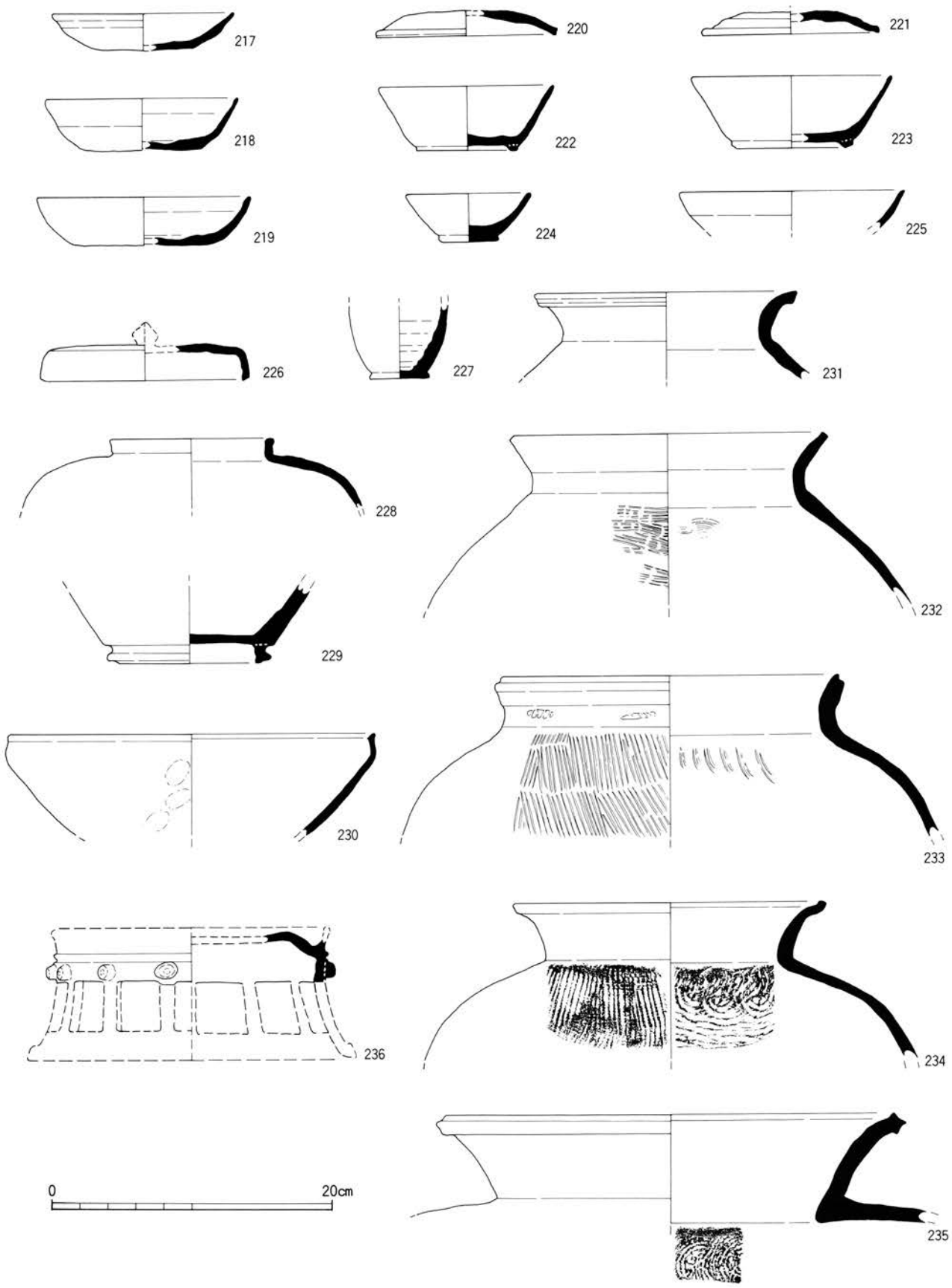

216


211

土器実測図(7)

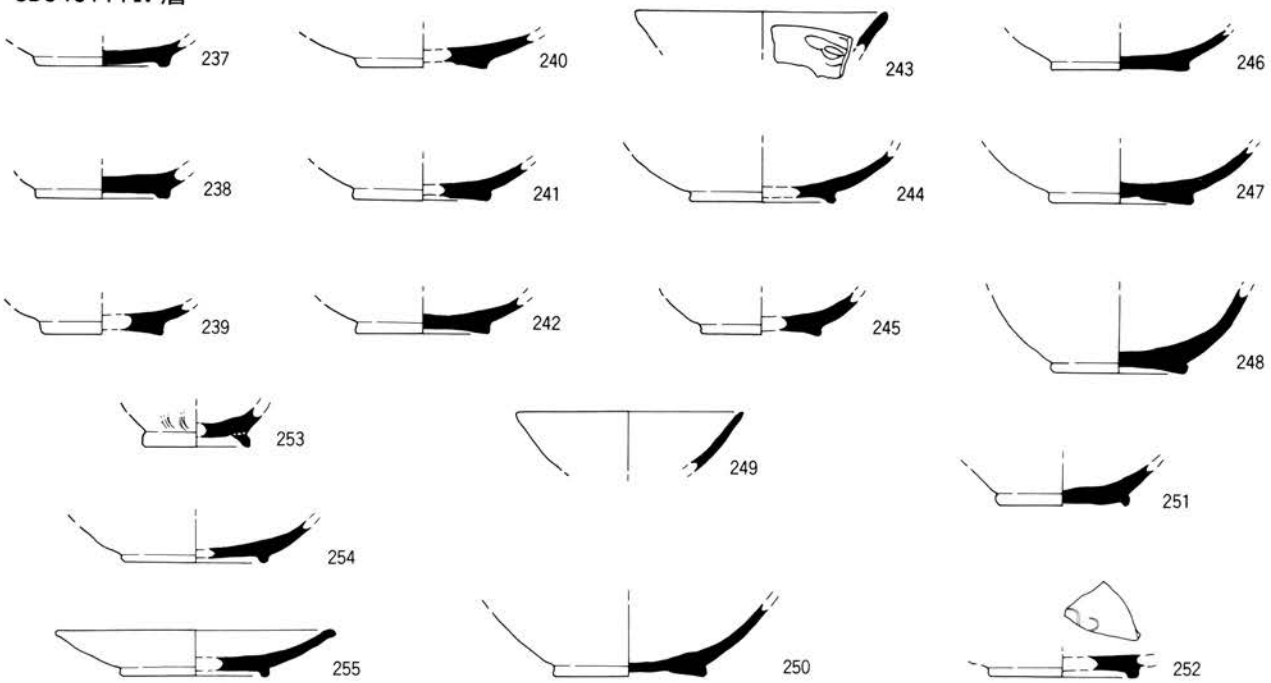
図版第五〇

SD349111Ⅳ層

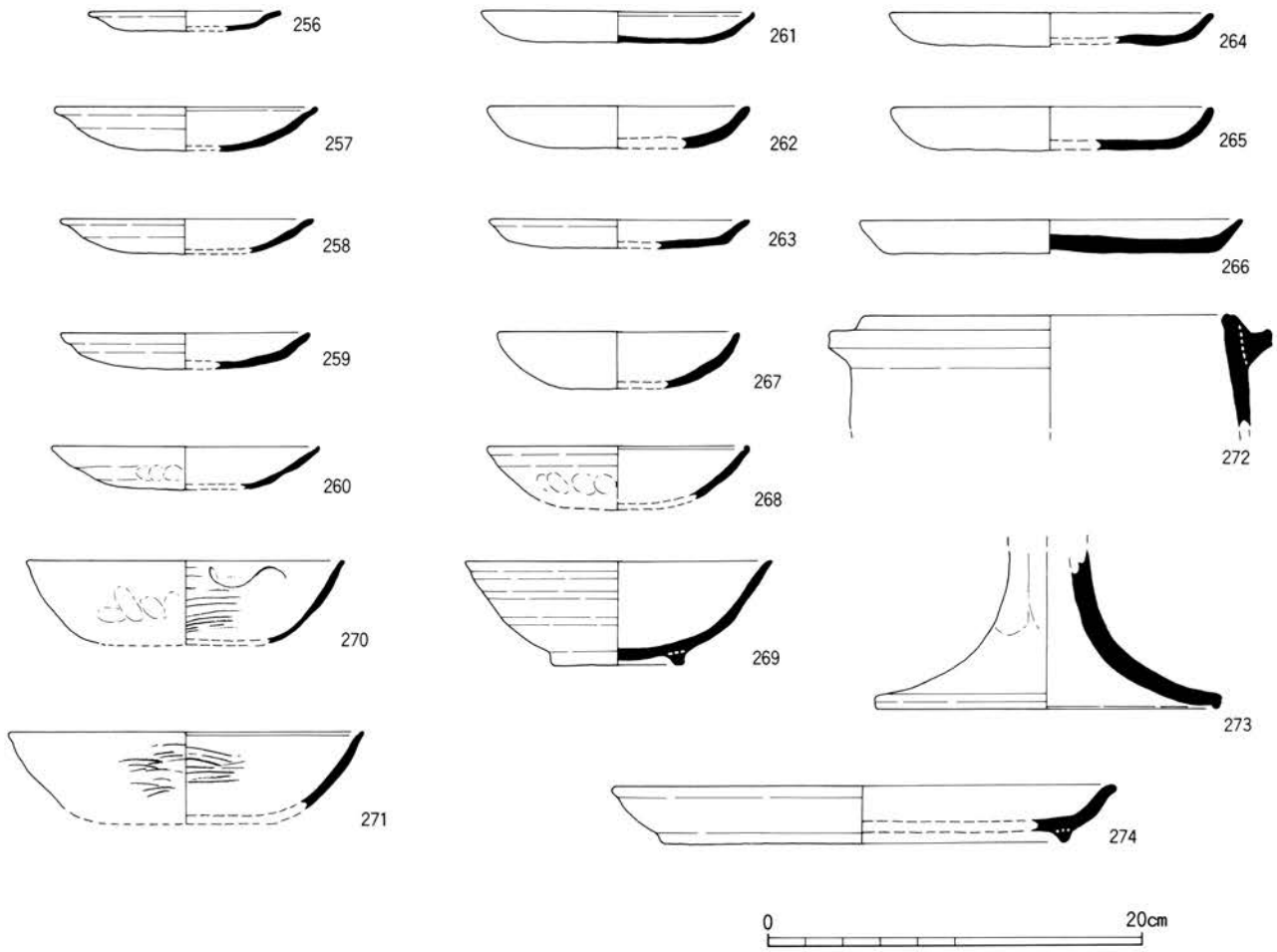


土器実測図(8)

SD349111Ⅳ層



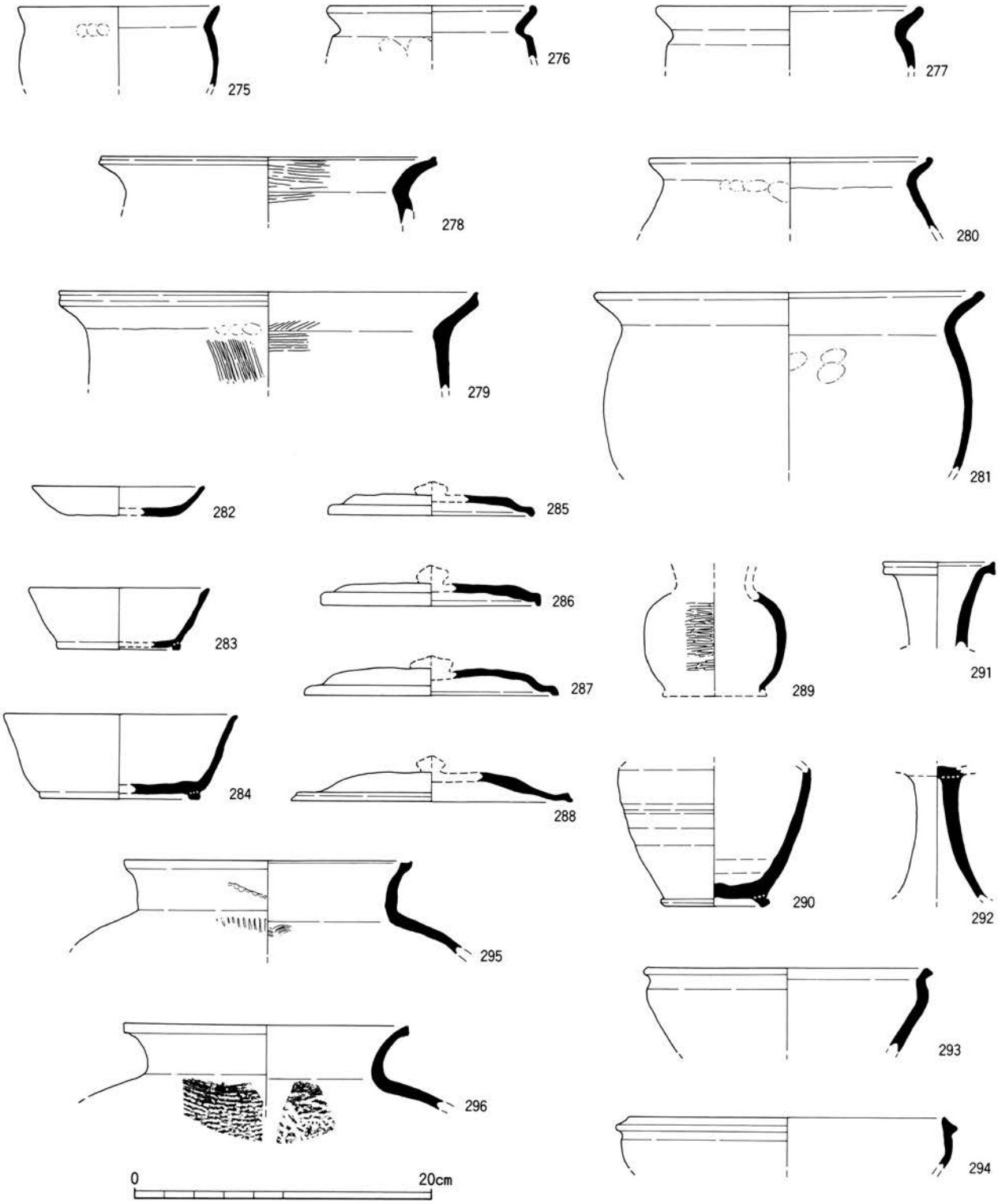
SD349111Ⅲ層



土器実測図(9)

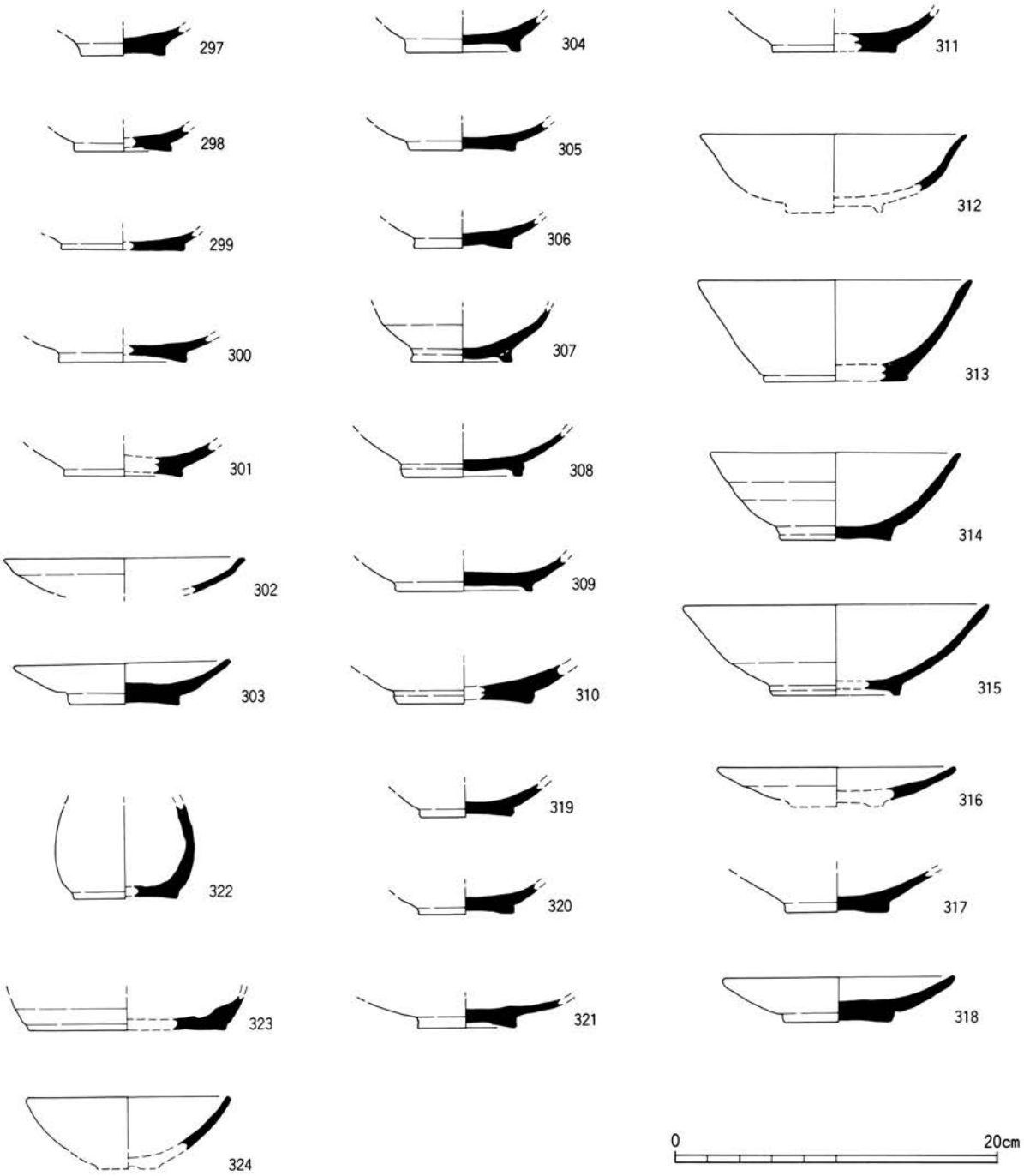
図版第五二

SD349111Ⅲ層



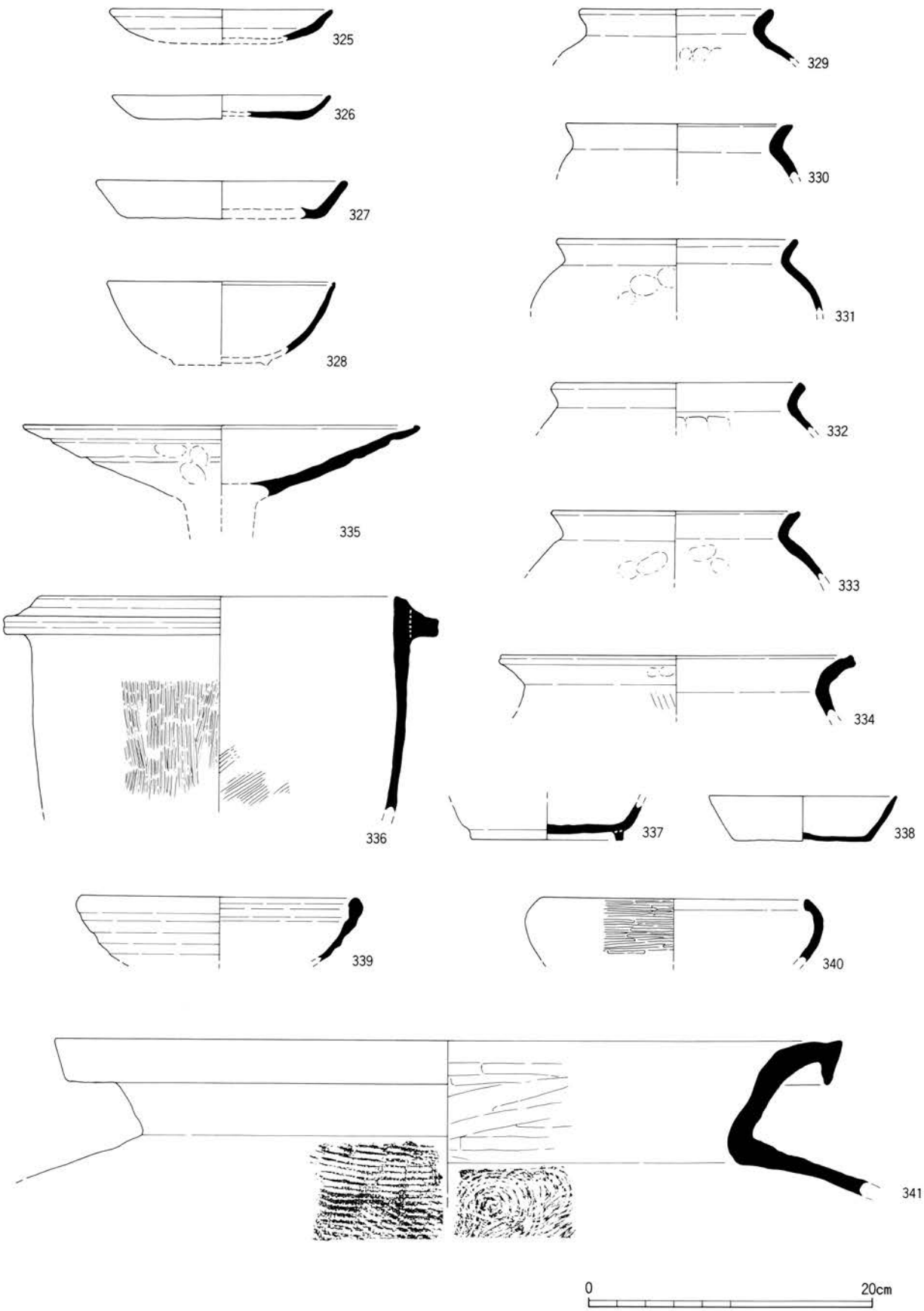
土器実測図(10)

SD349111Ⅲ層



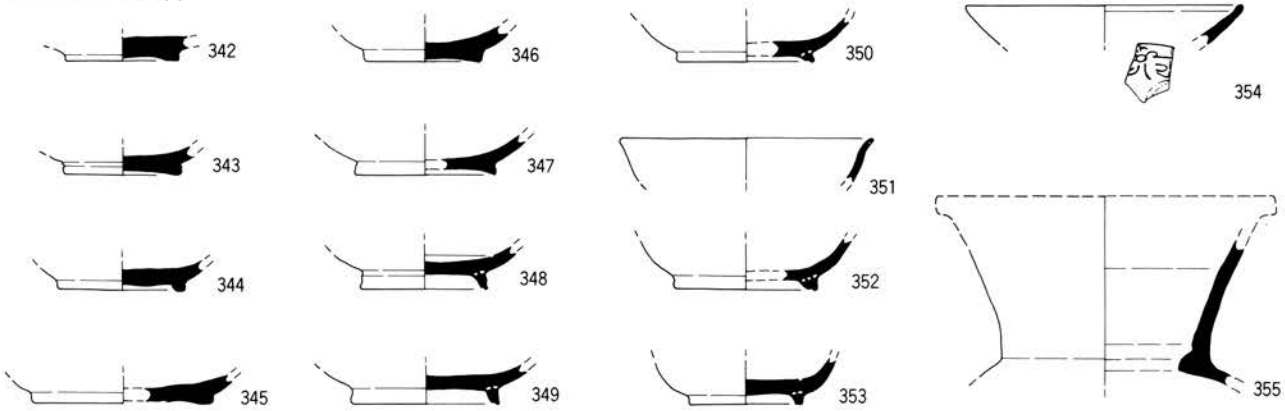
土器実測図(11)

SD349111 Ⅱ層

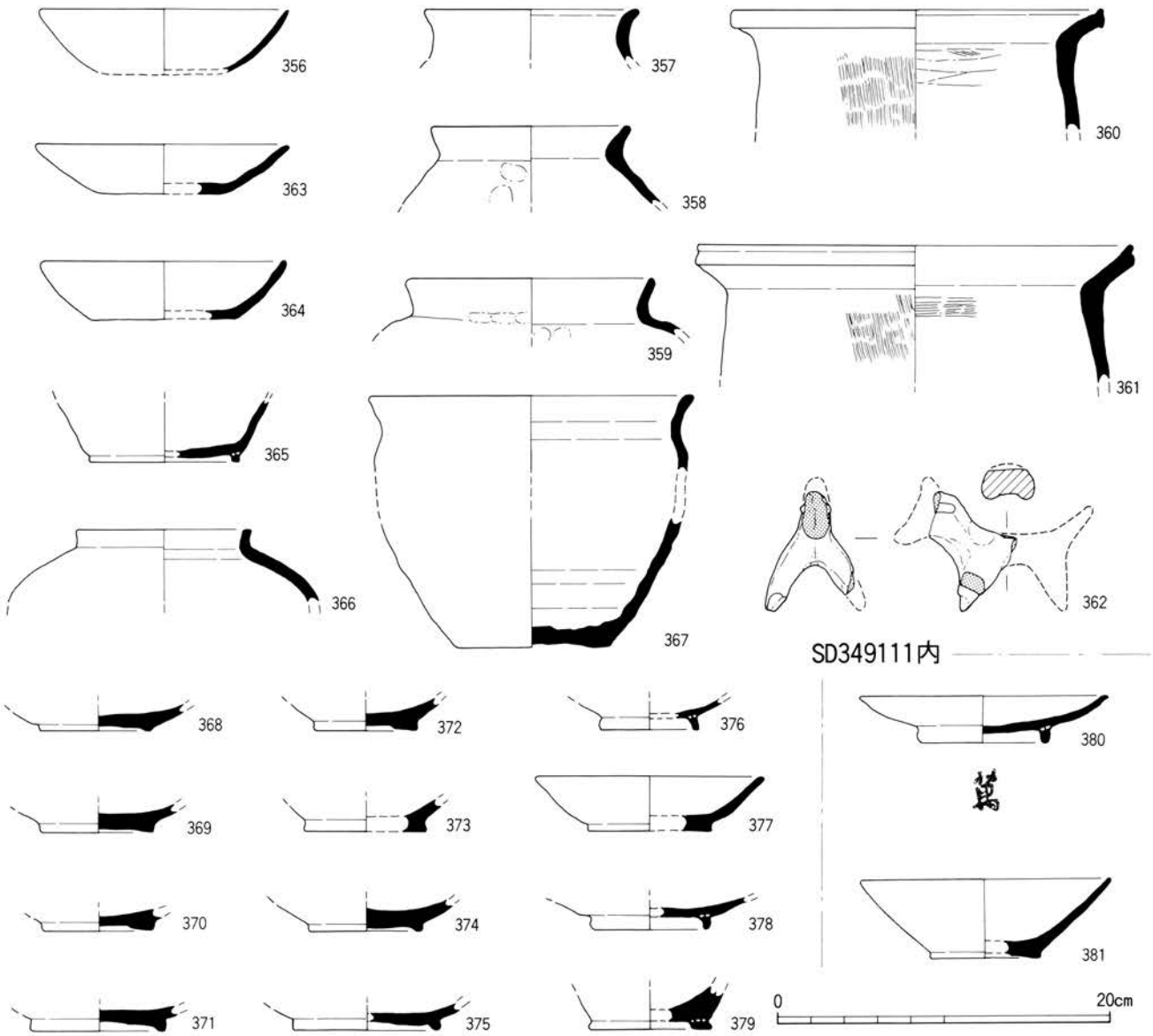


土器実測図(12)

SD349111 Ⅱ層

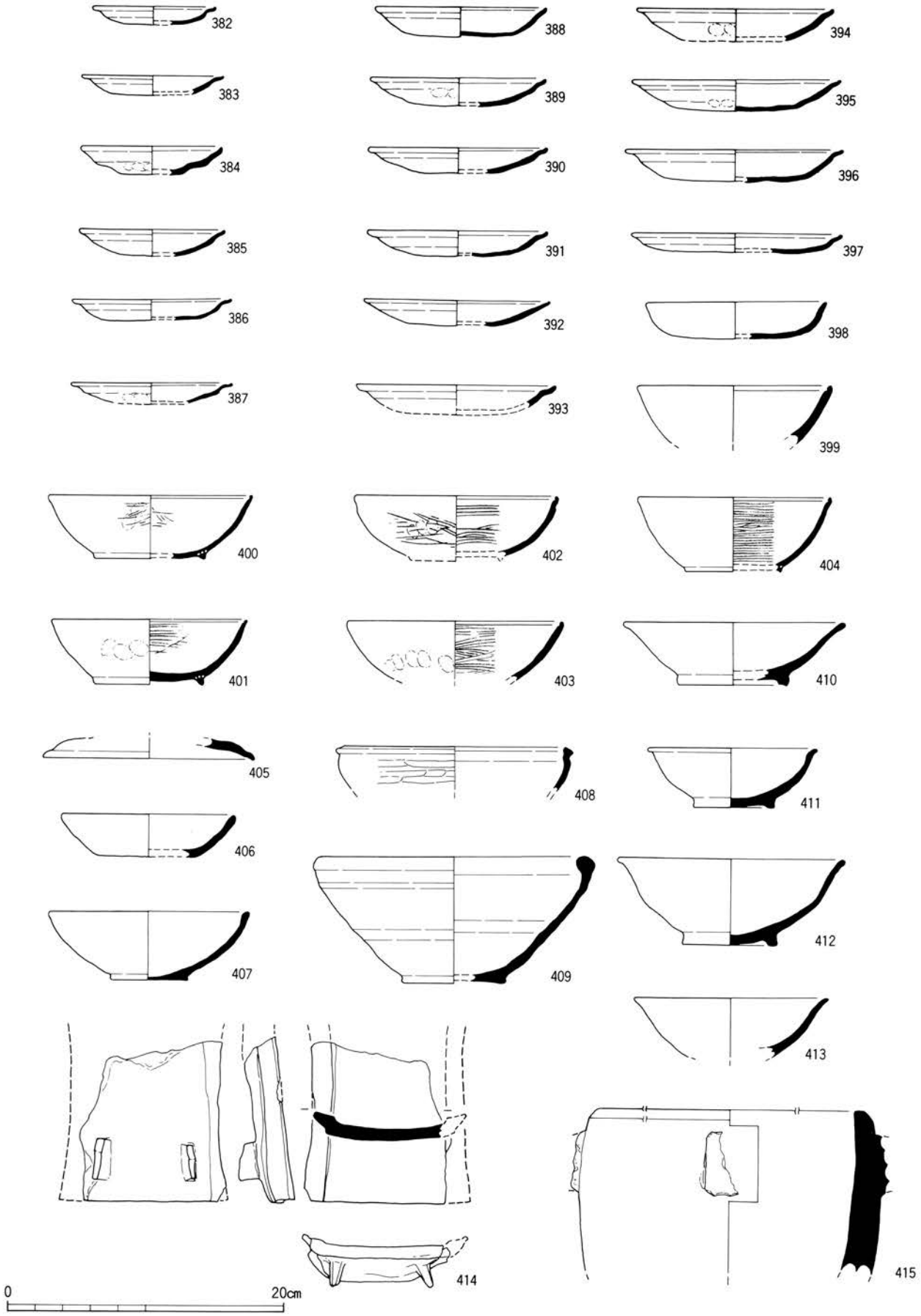


SD349111 Ⅰ層



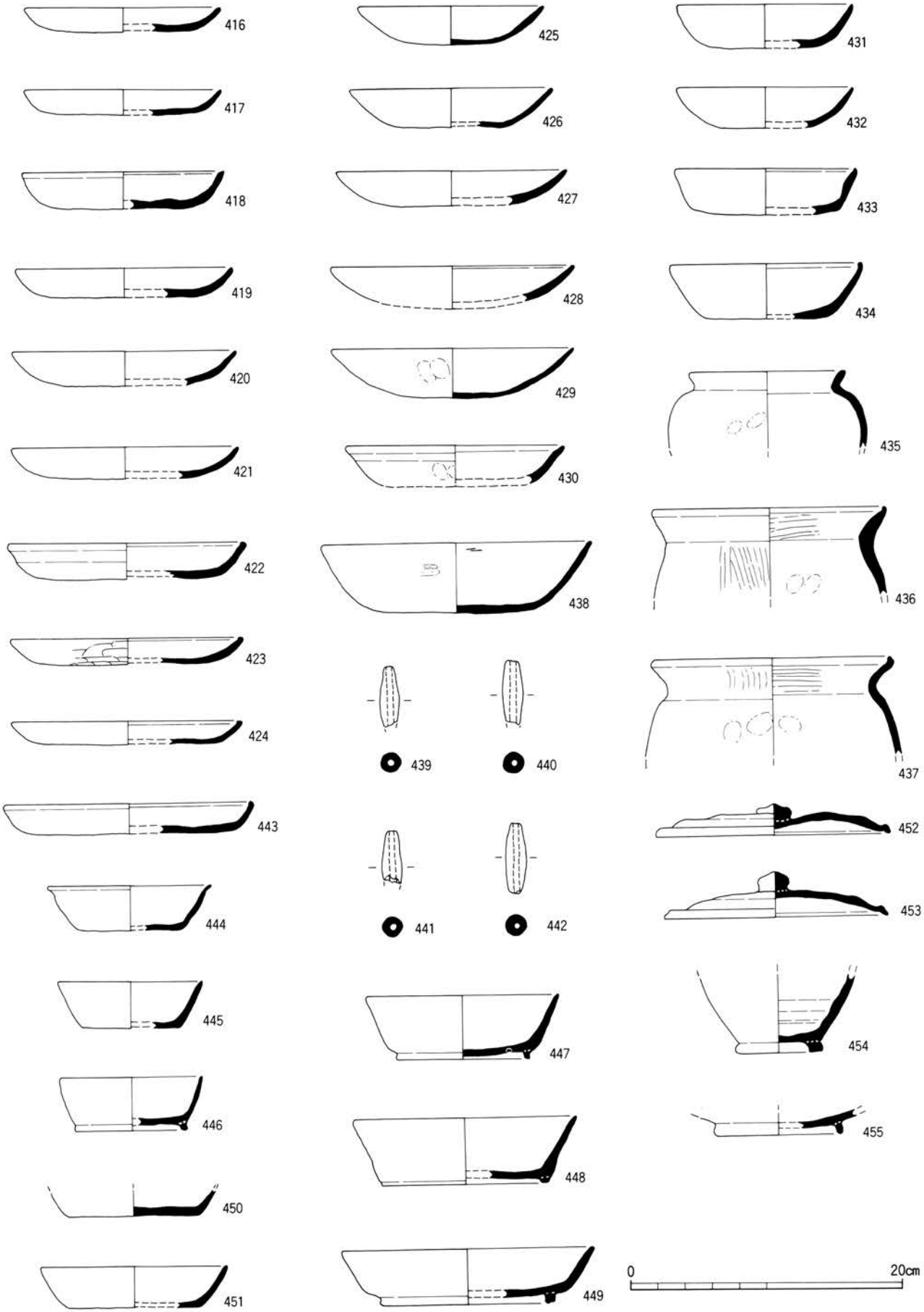
土器実測図(13)

SE349112



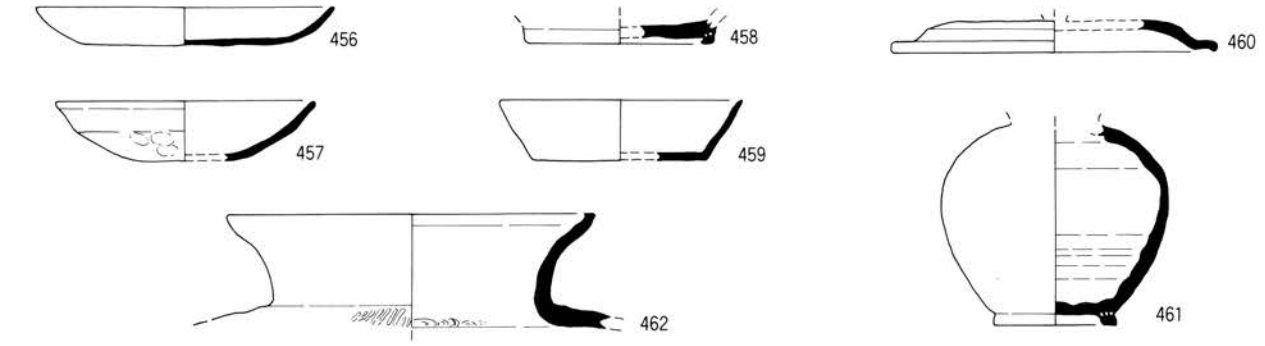
土器実測図(14)

SX349133

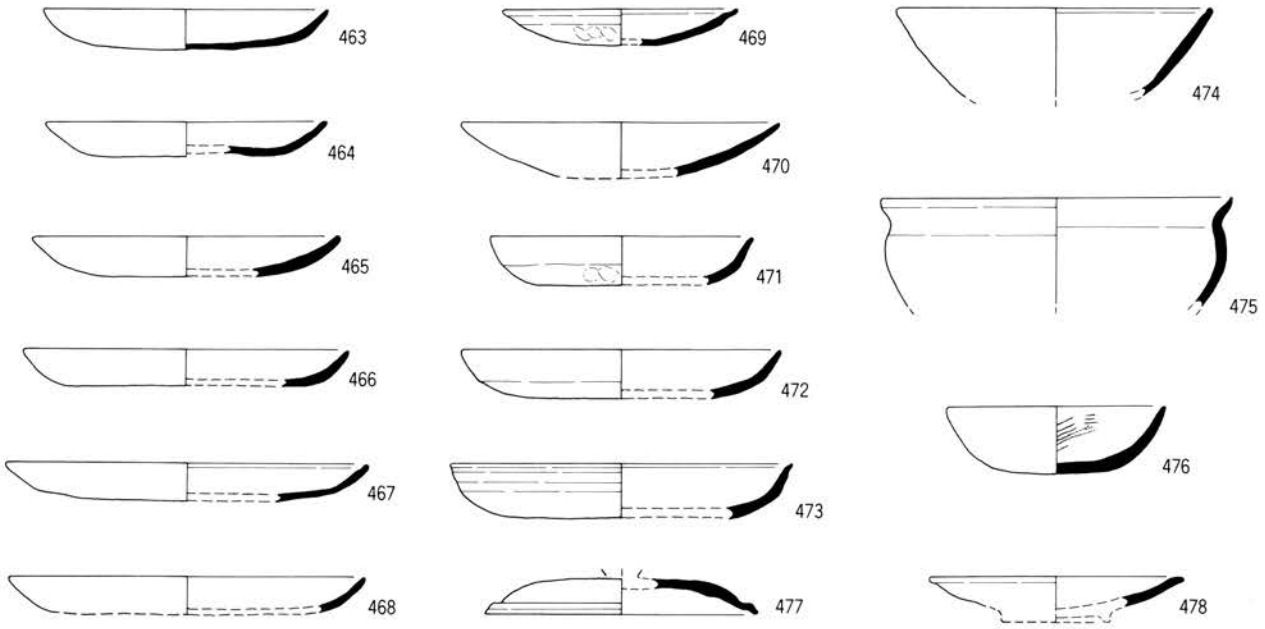


土器実測図(15)

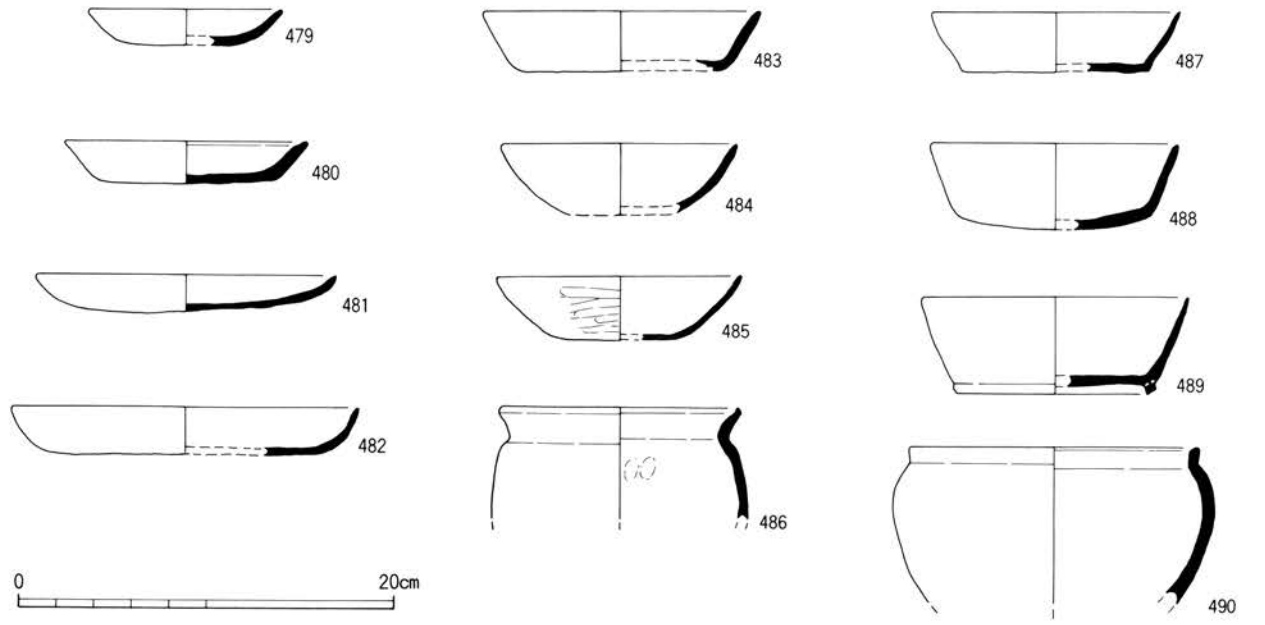
SX349131



SX349109

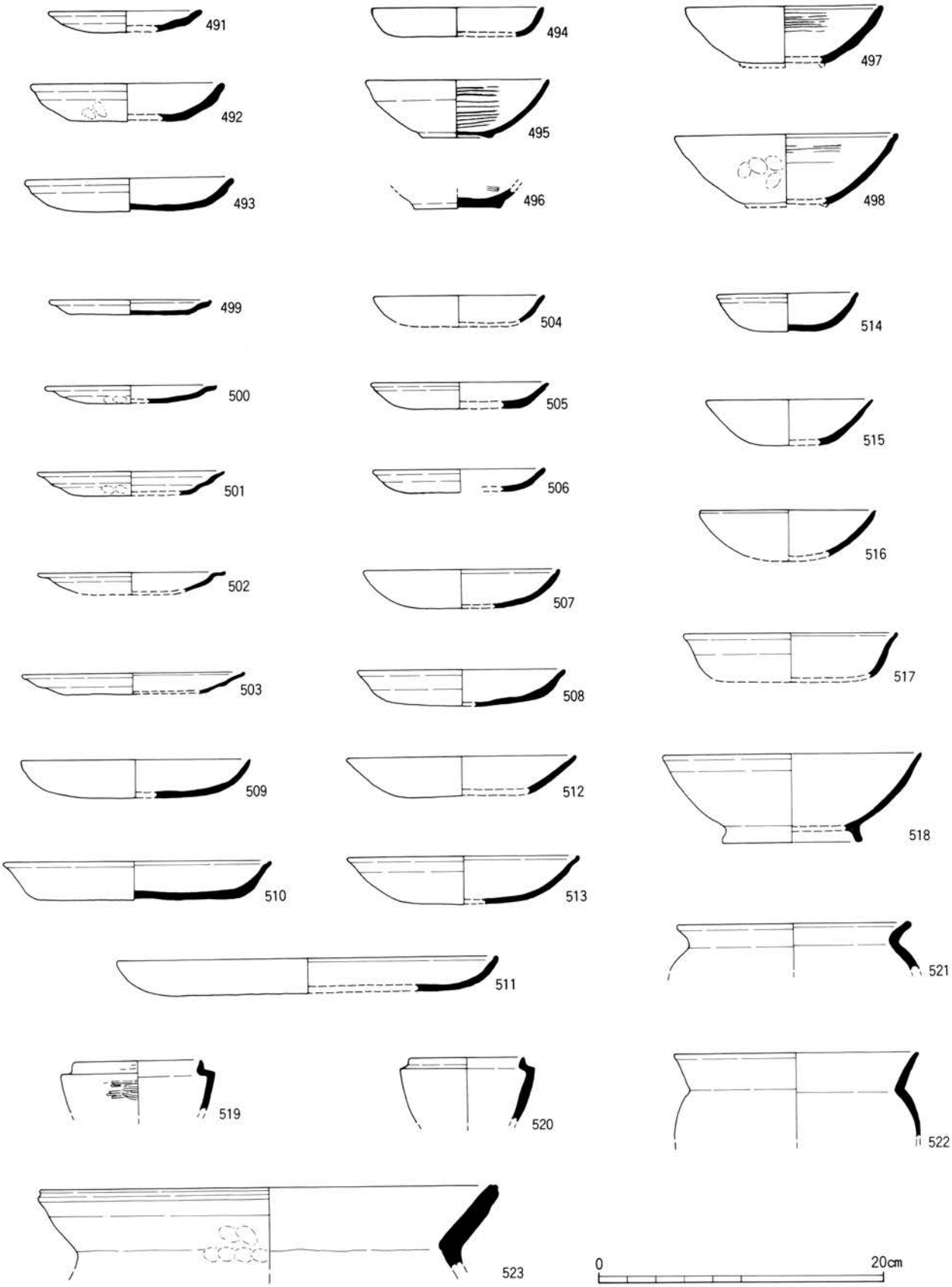


SX349110



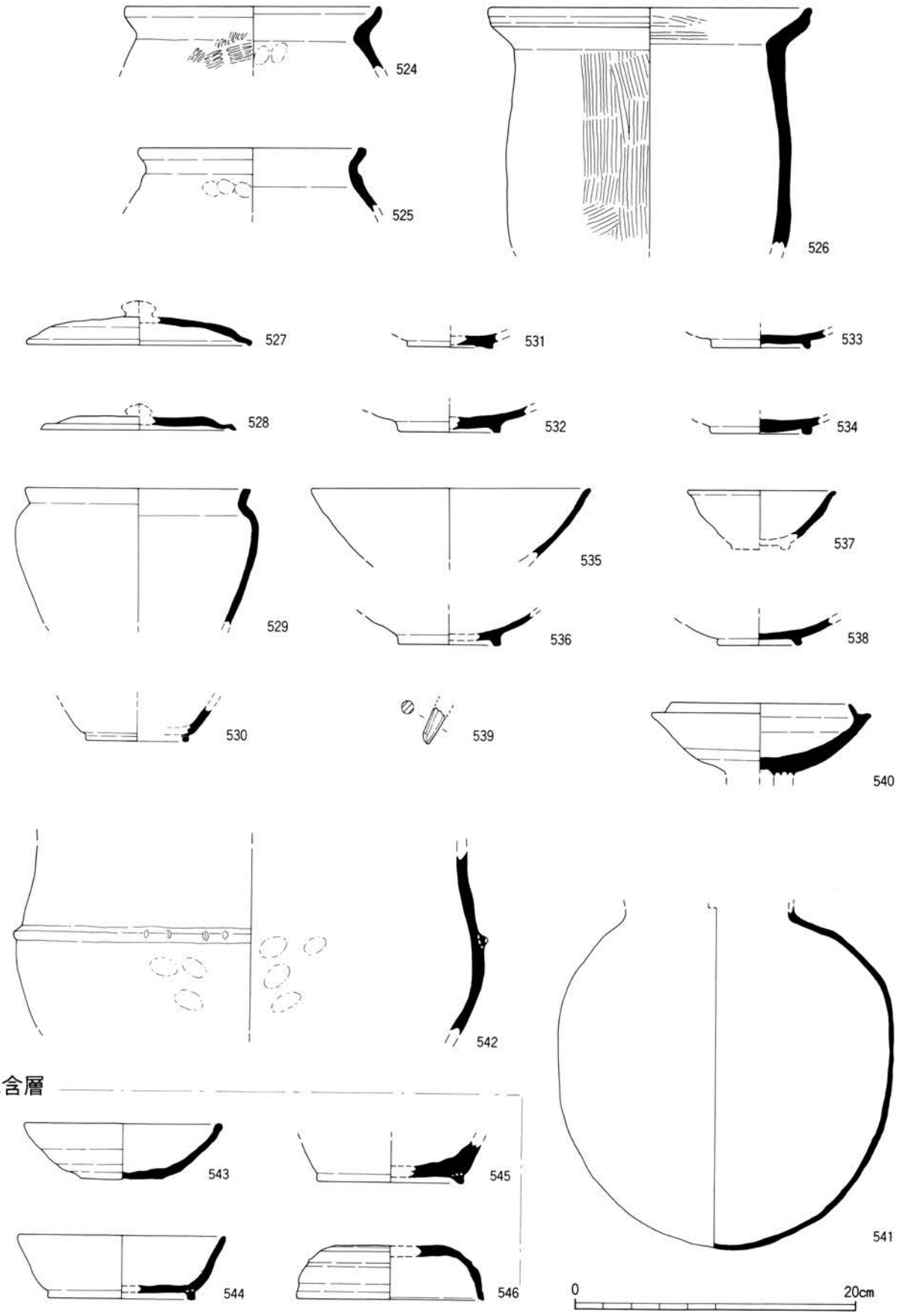
土器実測図(16)

各ピット・土坑



土器実測図(17)

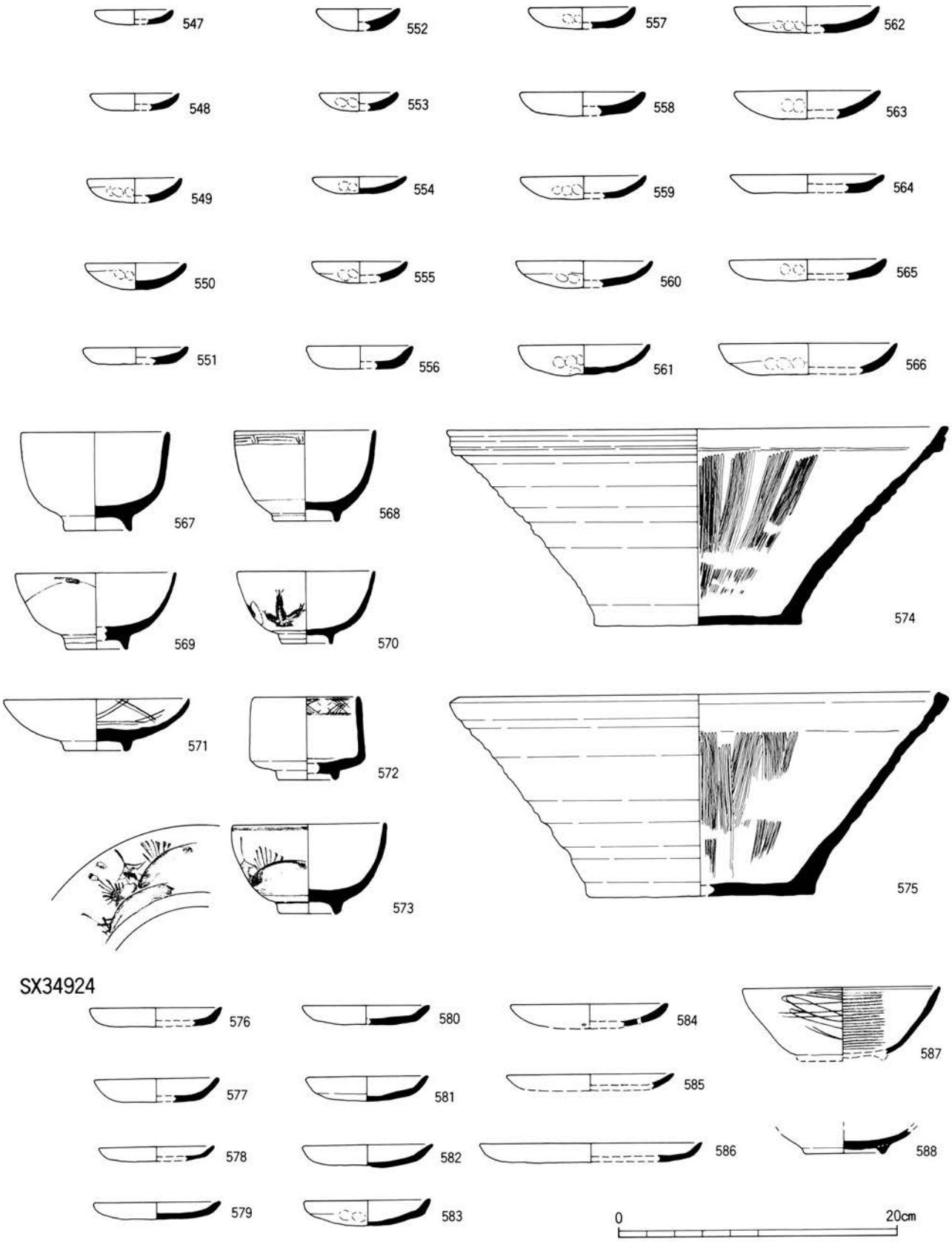
各ピット・土坑



包含層

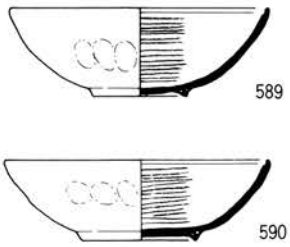
土器実測図(18)

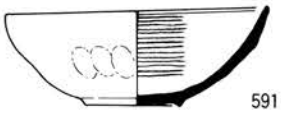
整地土・各遺構



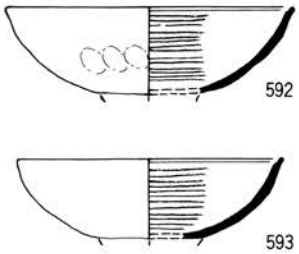
土器実測図(19)

SX34924

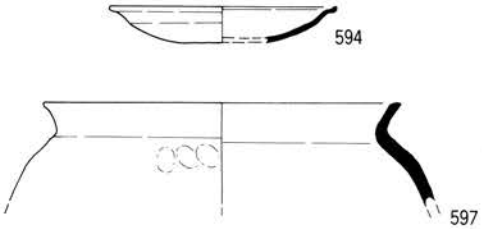


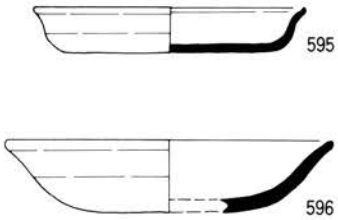


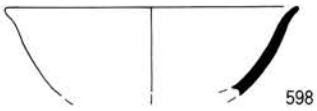
SE34920



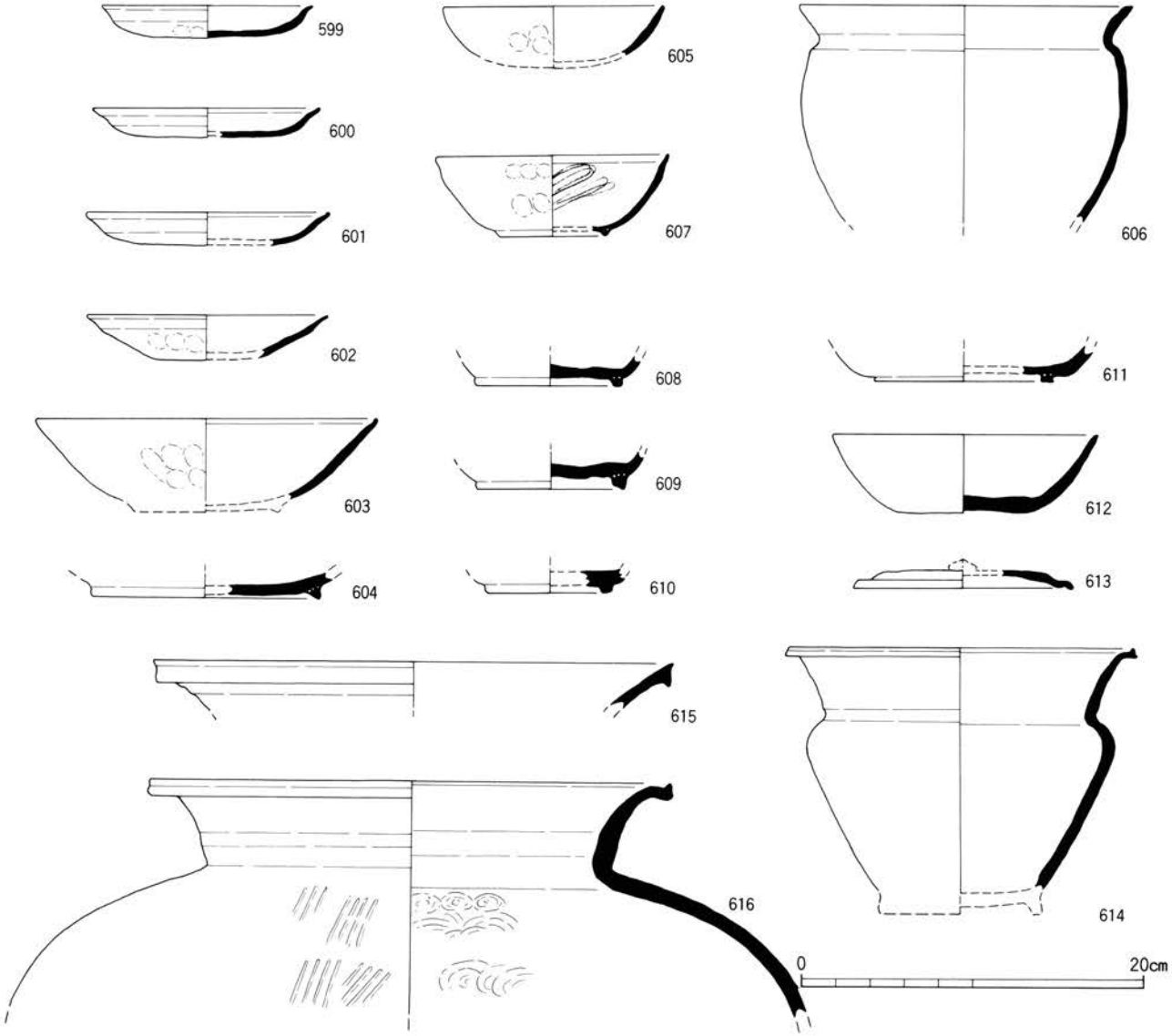
SD394102





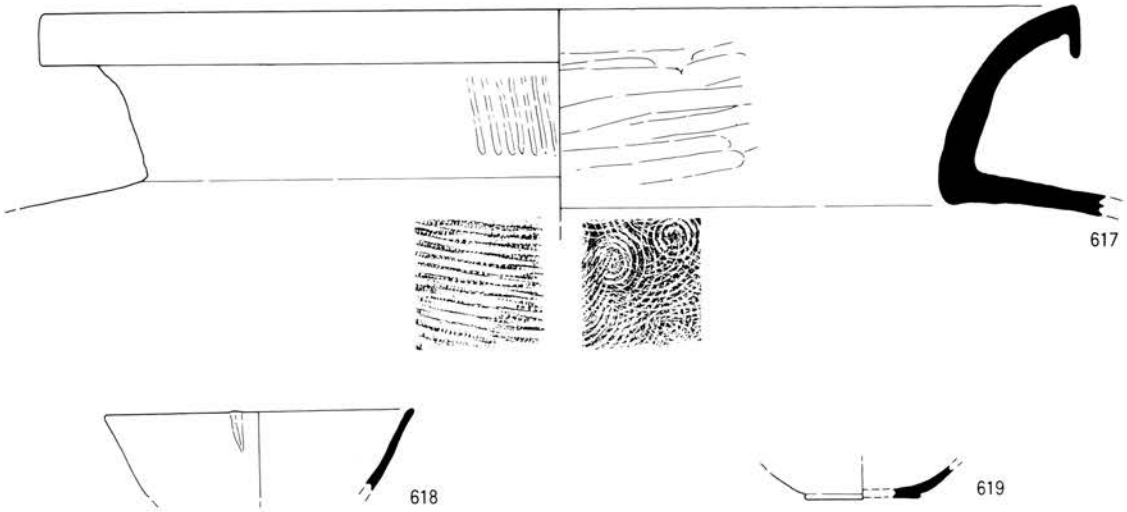


SD34914

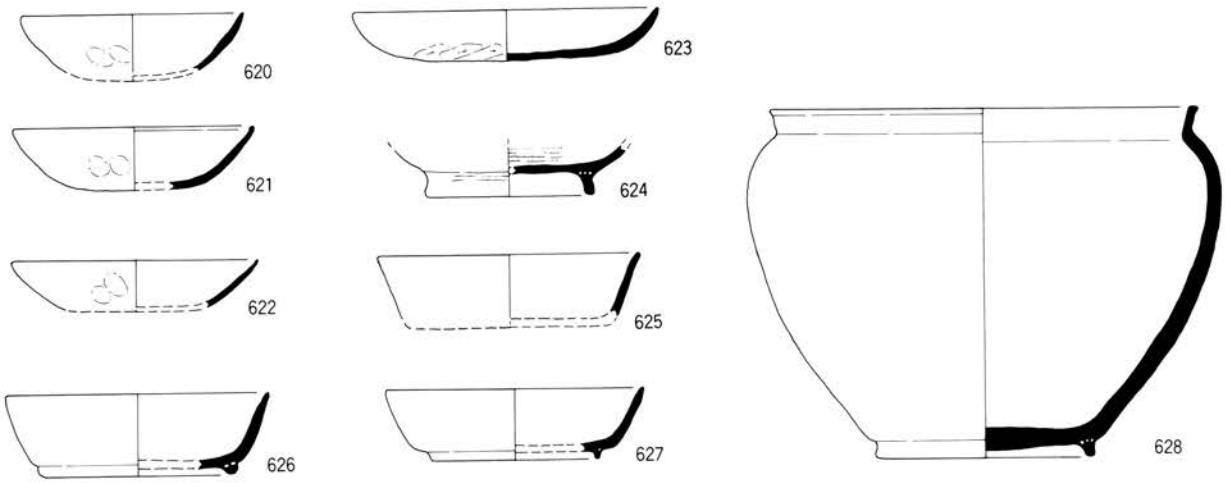


土器実測図(20)

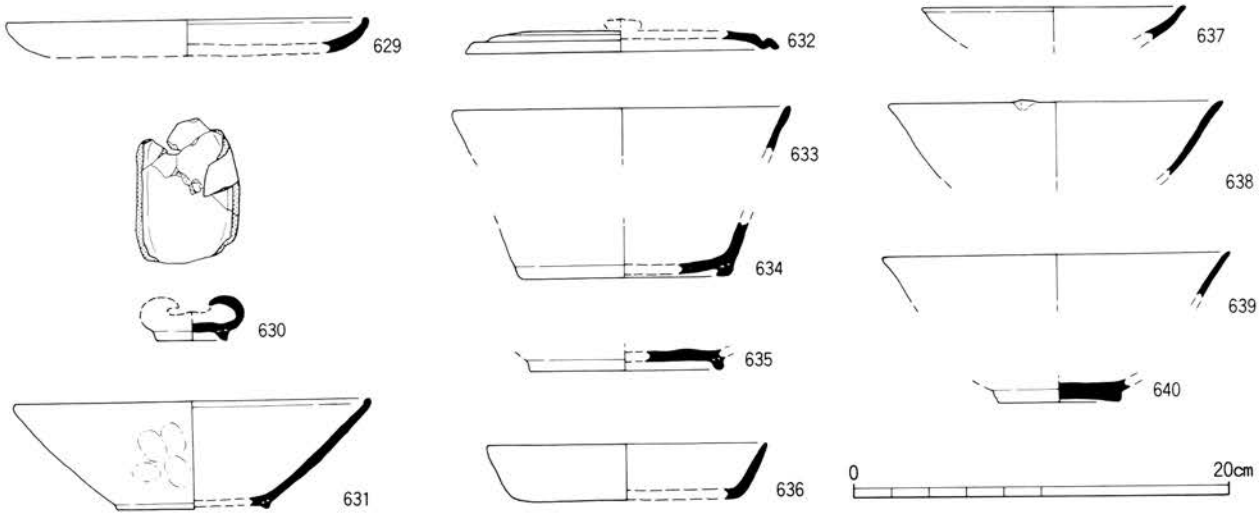
SD34914



SD394106

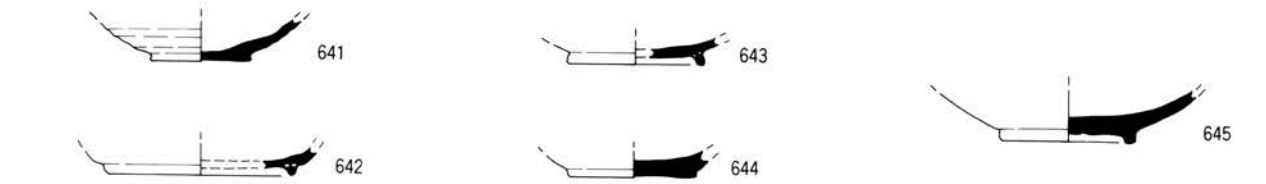


各掘立柱建物柱穴

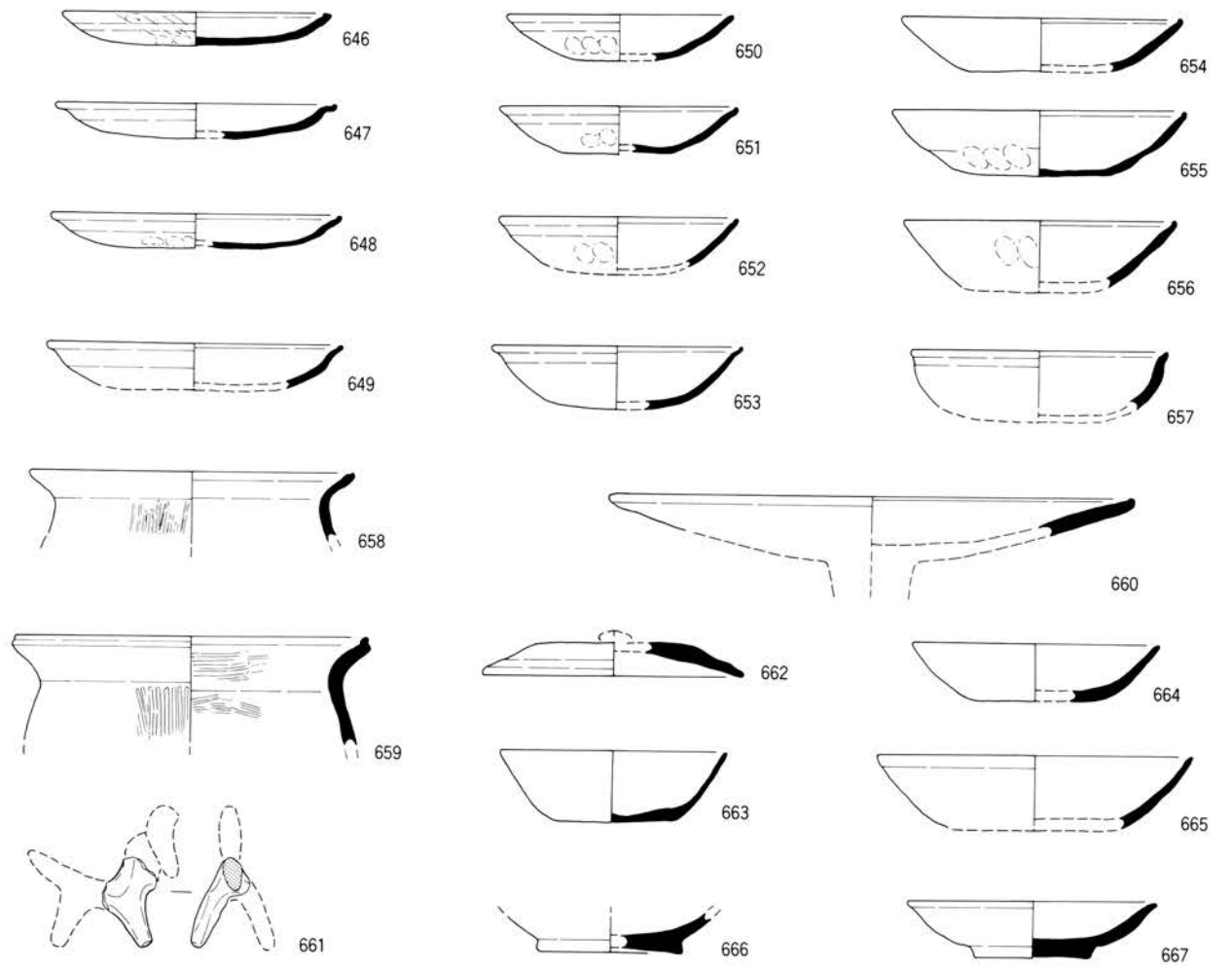


土器実測図(21)

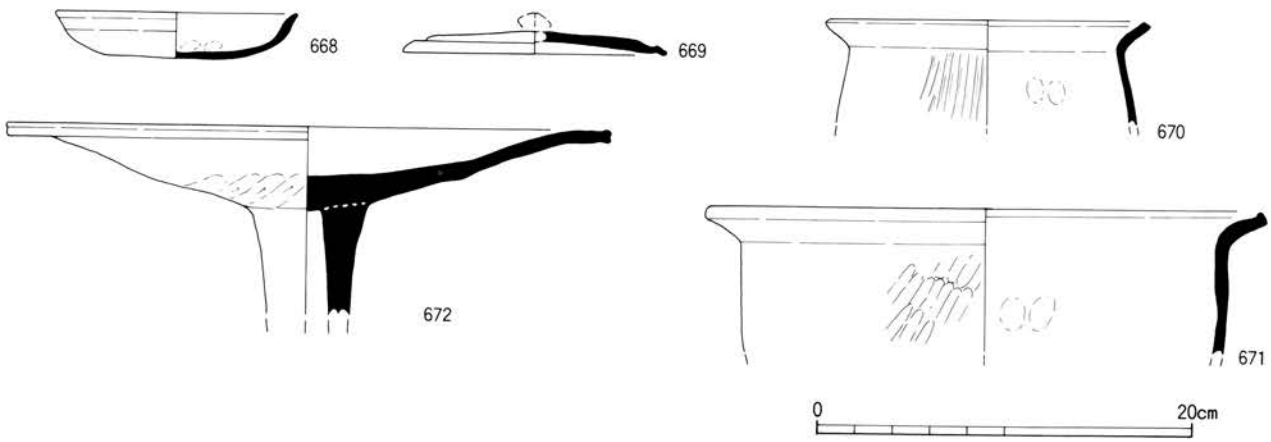
SF394103整地土



SK34915

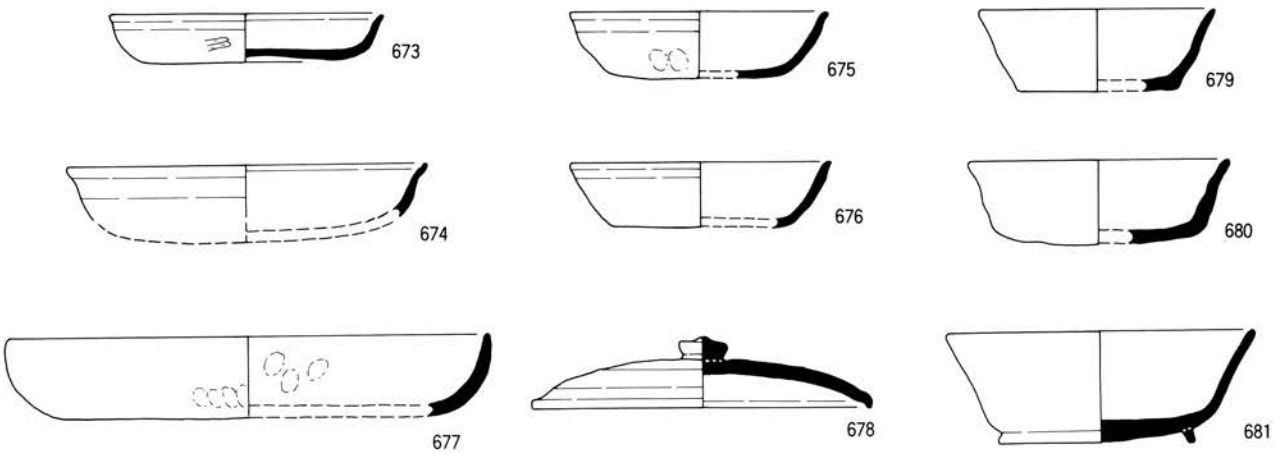


SK34916

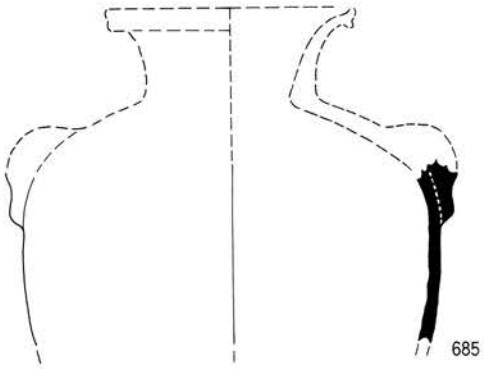


土器実測図(22)

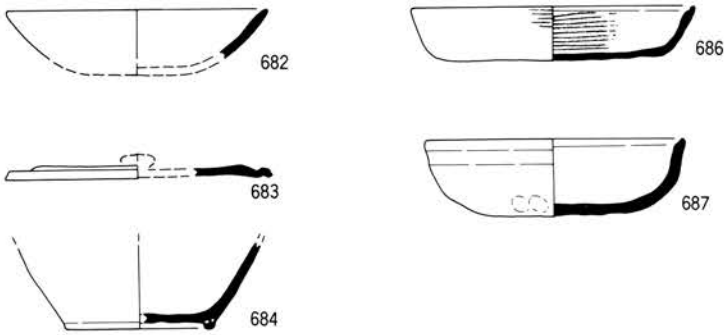
SX394104



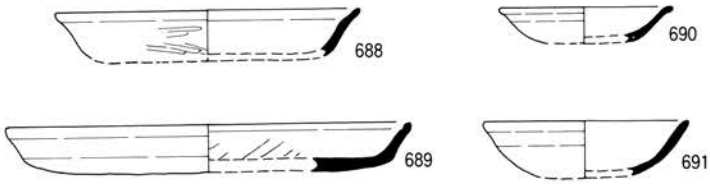
SE34958



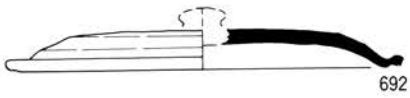
SK34925



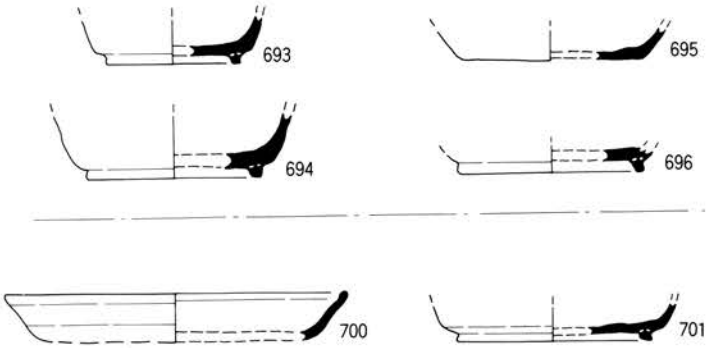
SK34955



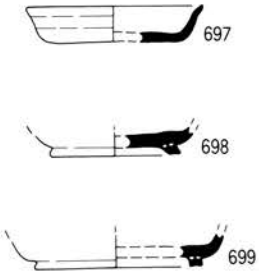
SK34956



SD34929



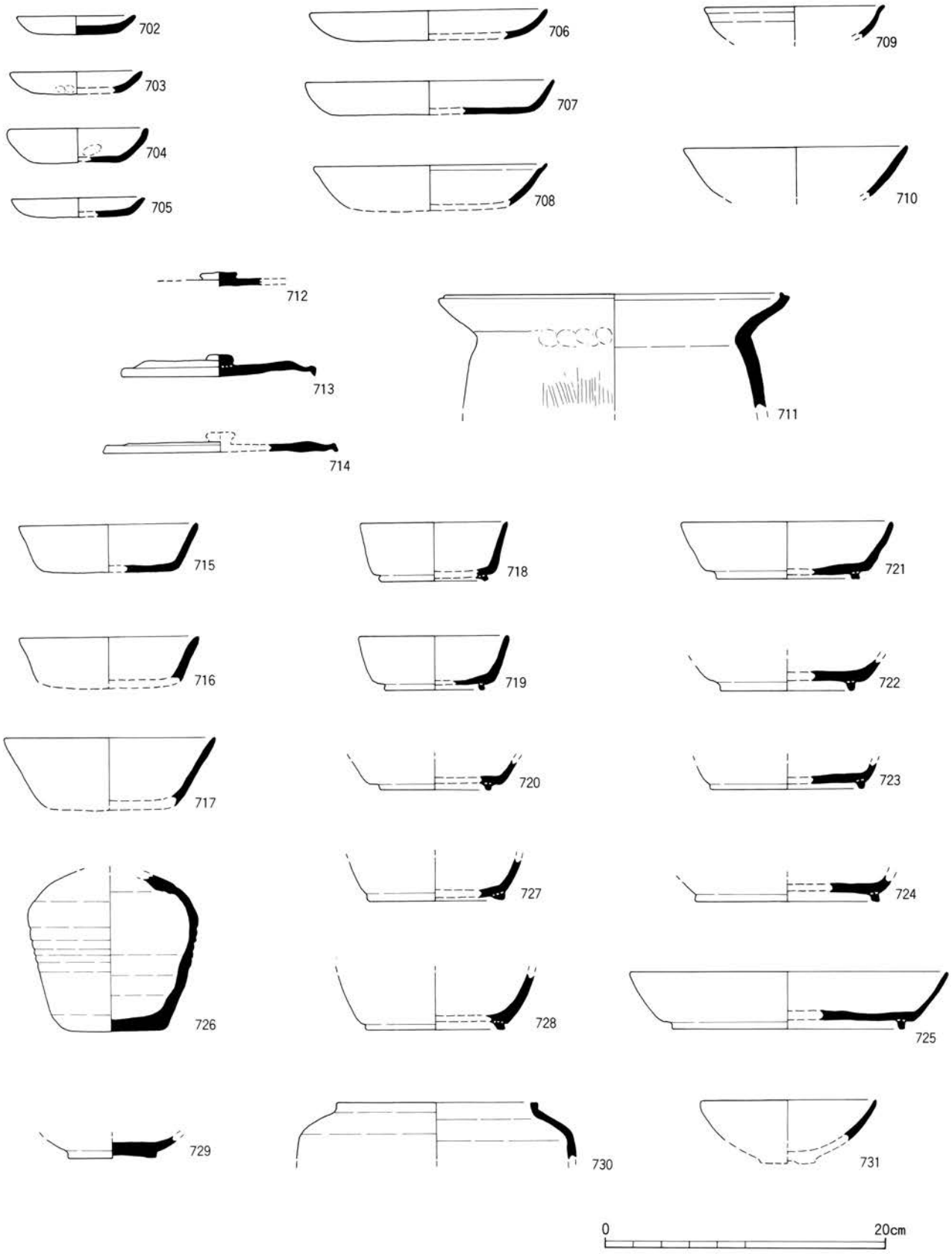
各ピット・土坑



土器実測図(23)

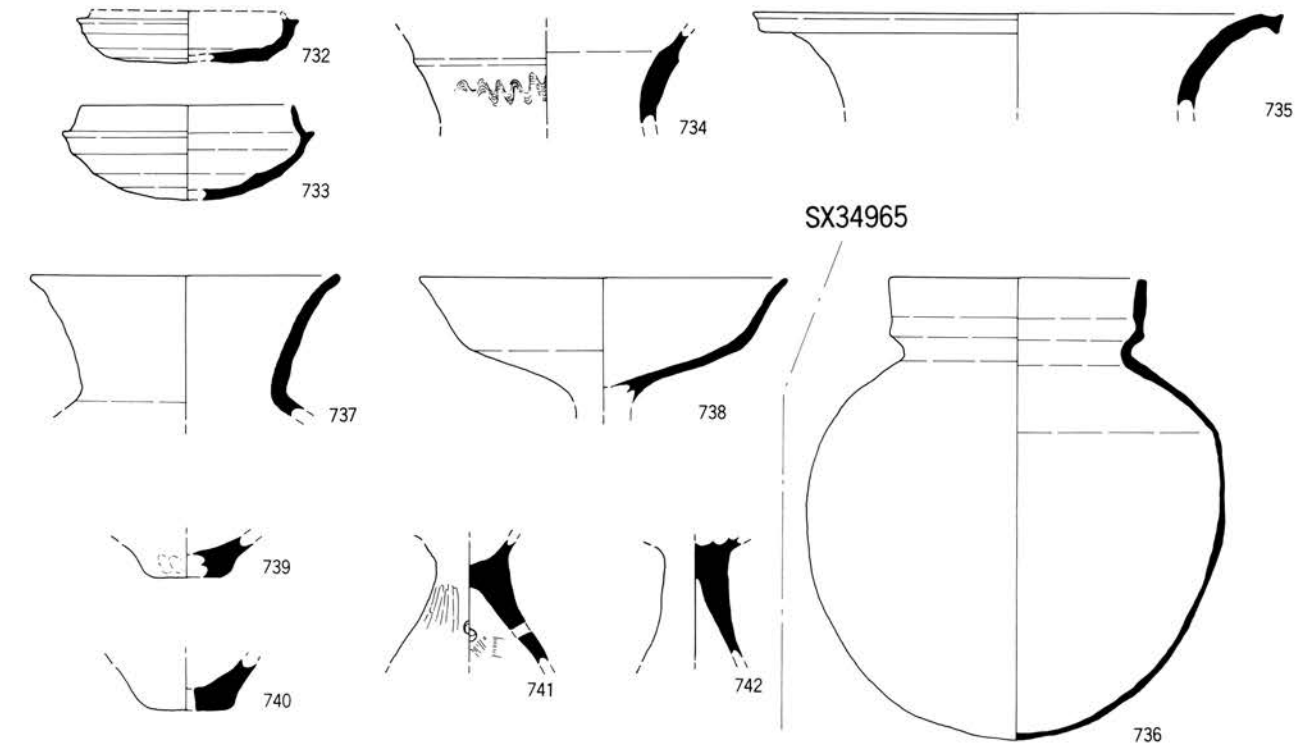
図版第六六

各ピット・土坑

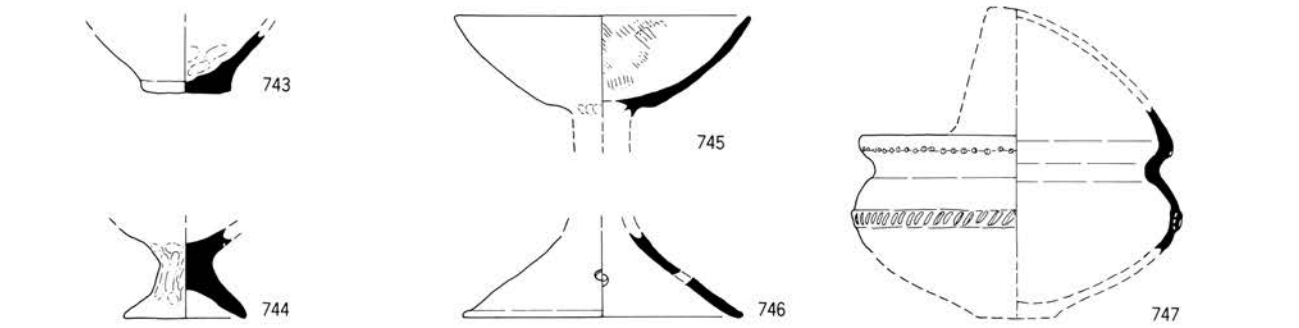


土器実測図(24)

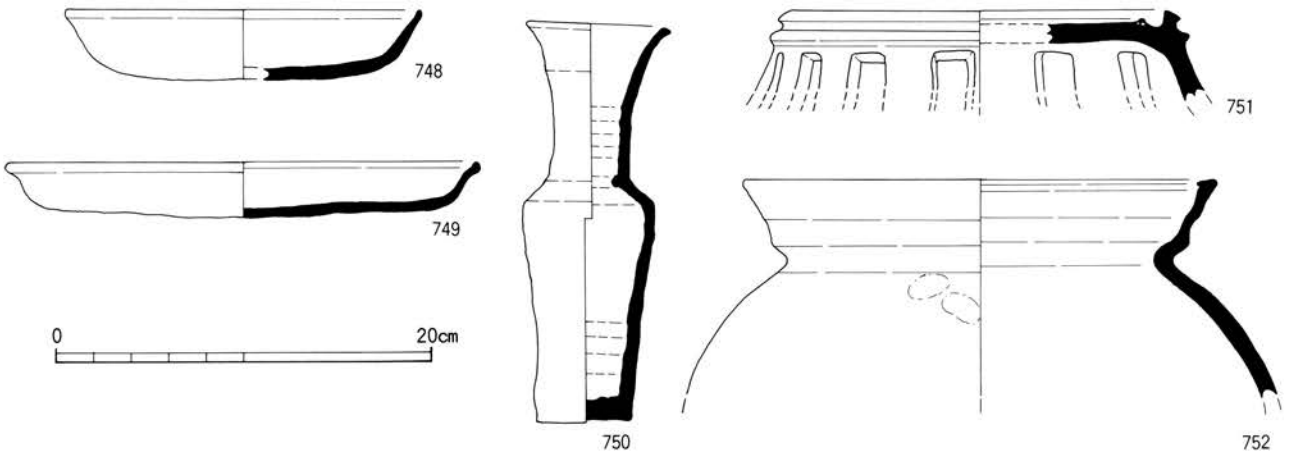
各ピット・土坑



SH34959



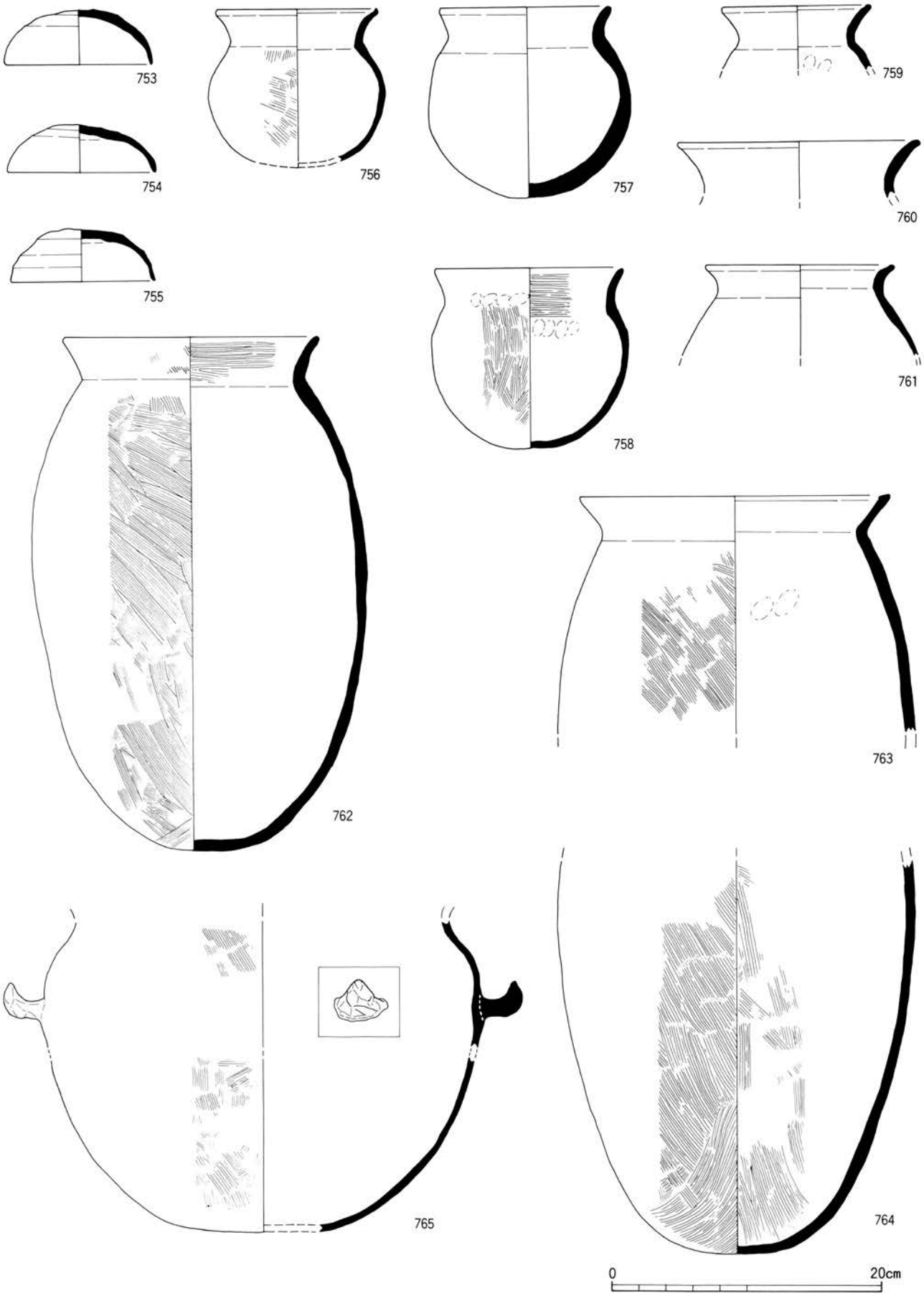
包含層



土器実測図(25)

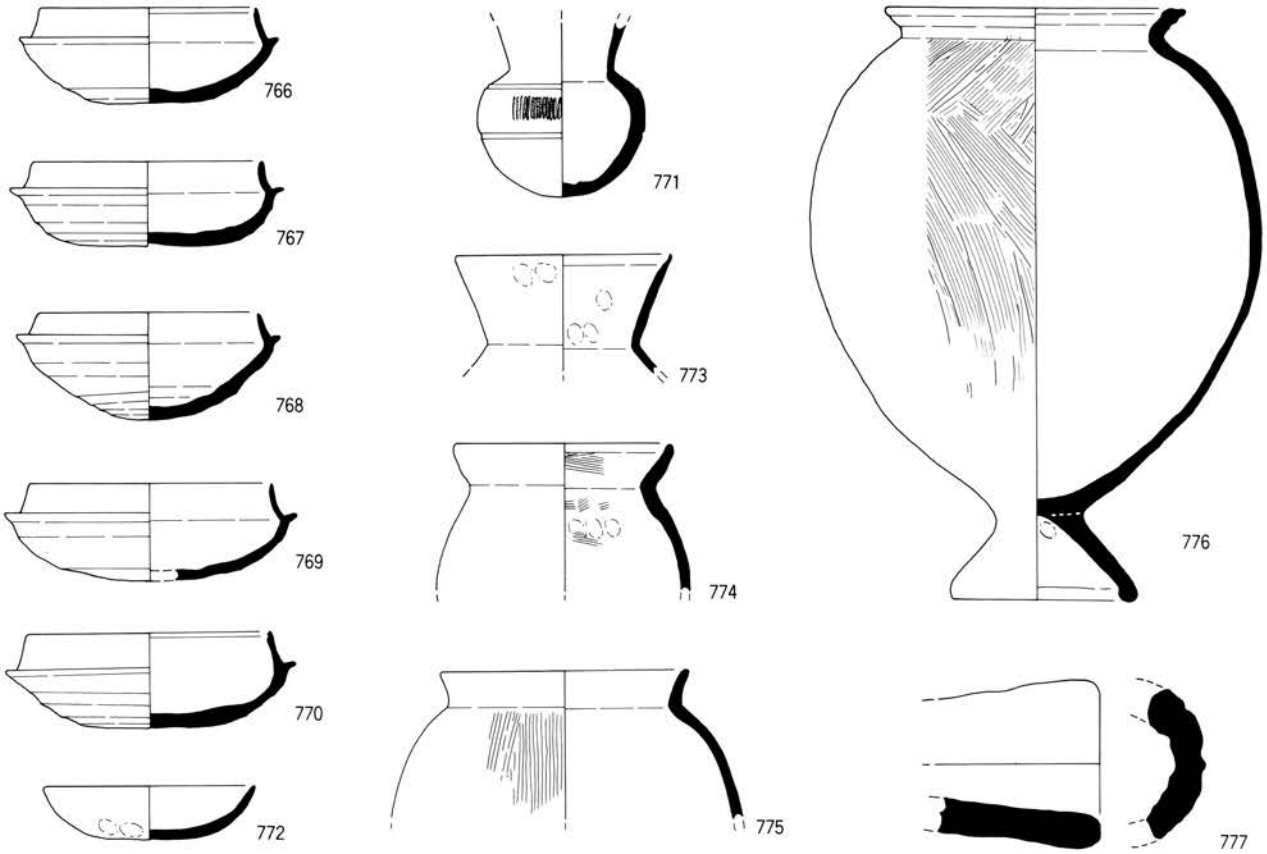
SH367047

図版第六八

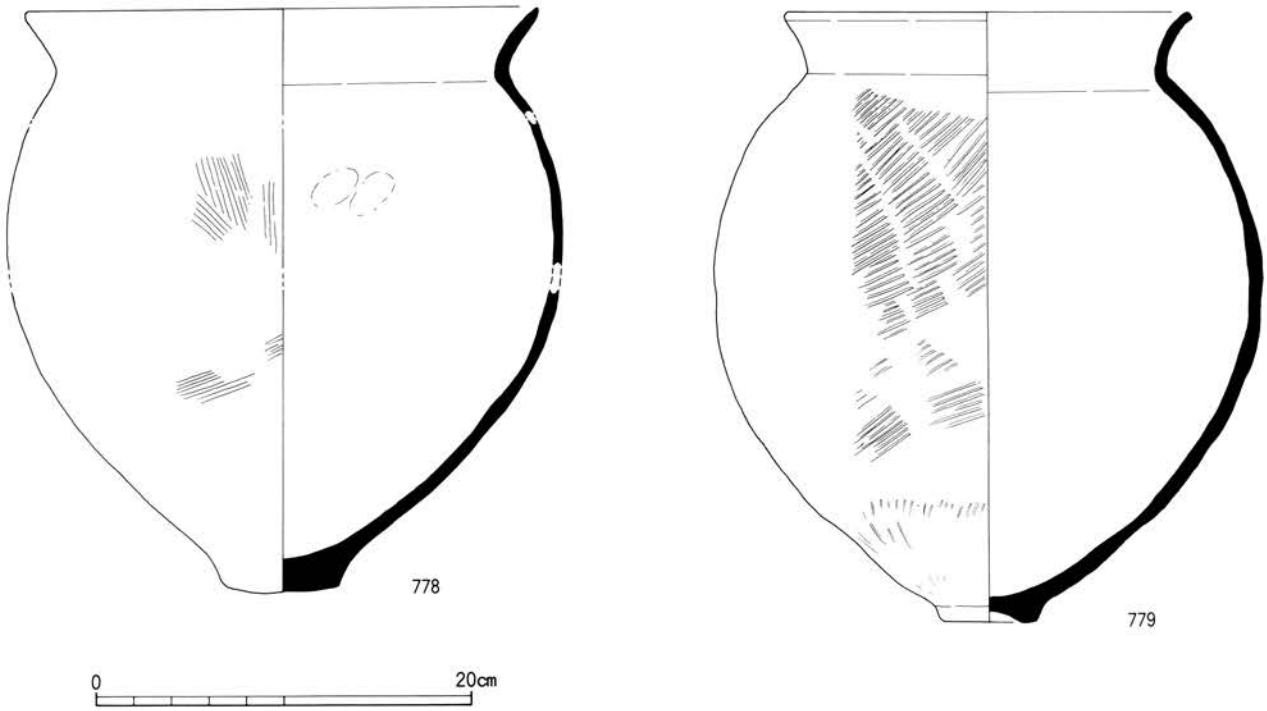


土器実測図(26)

SH367045

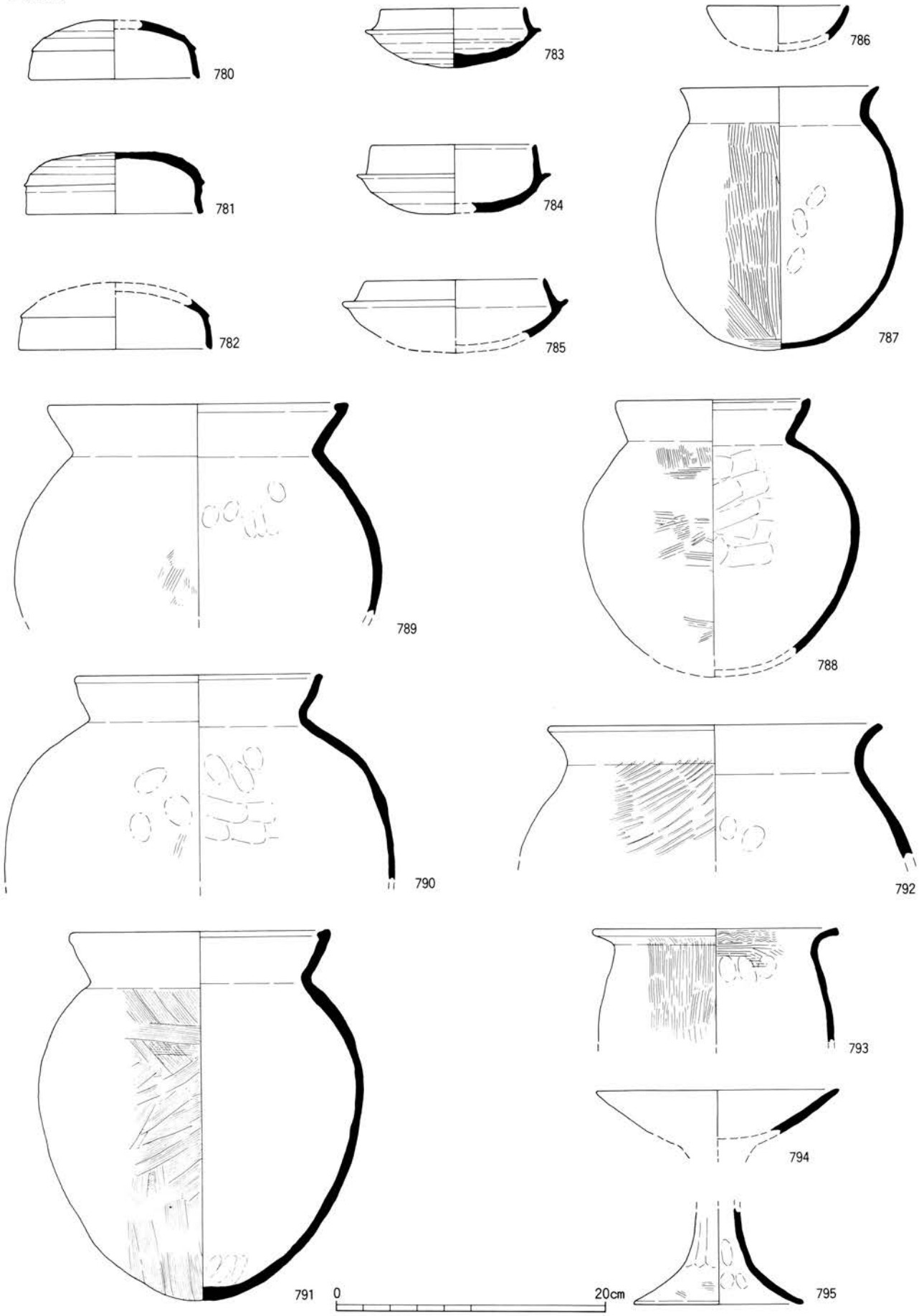


SX367046

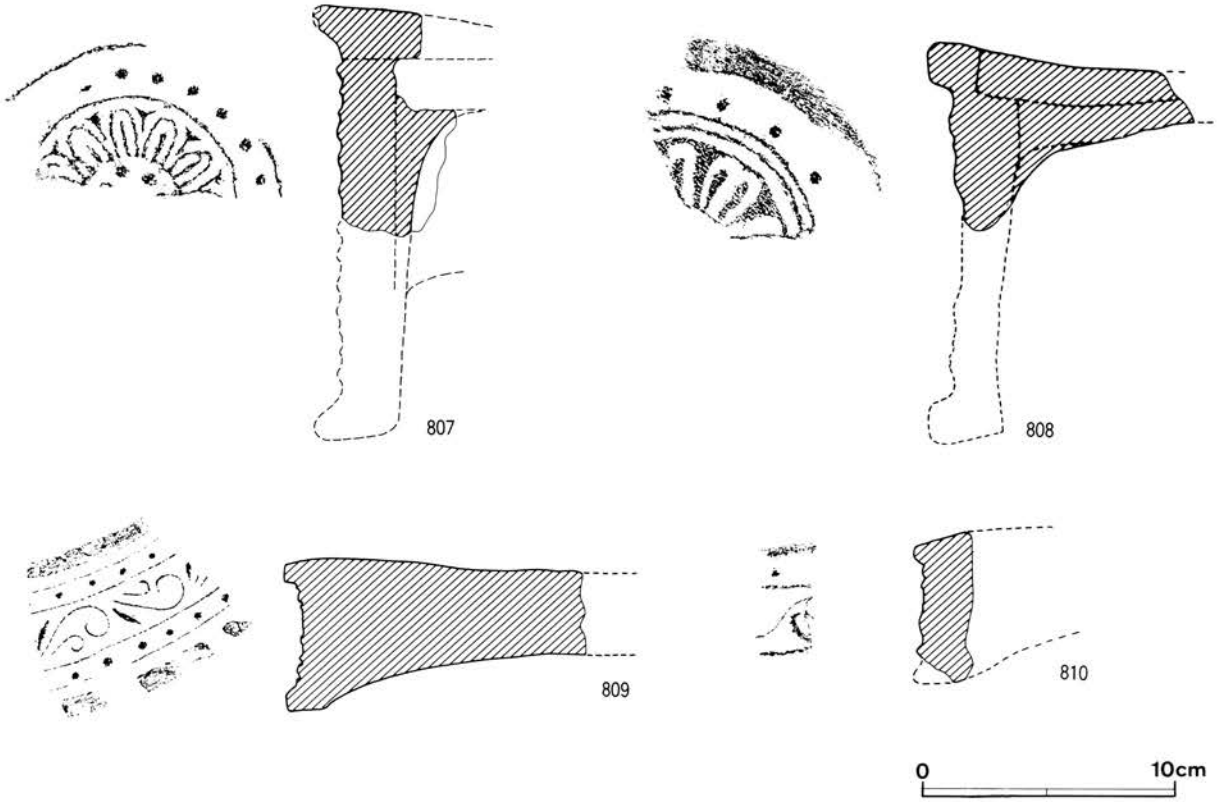


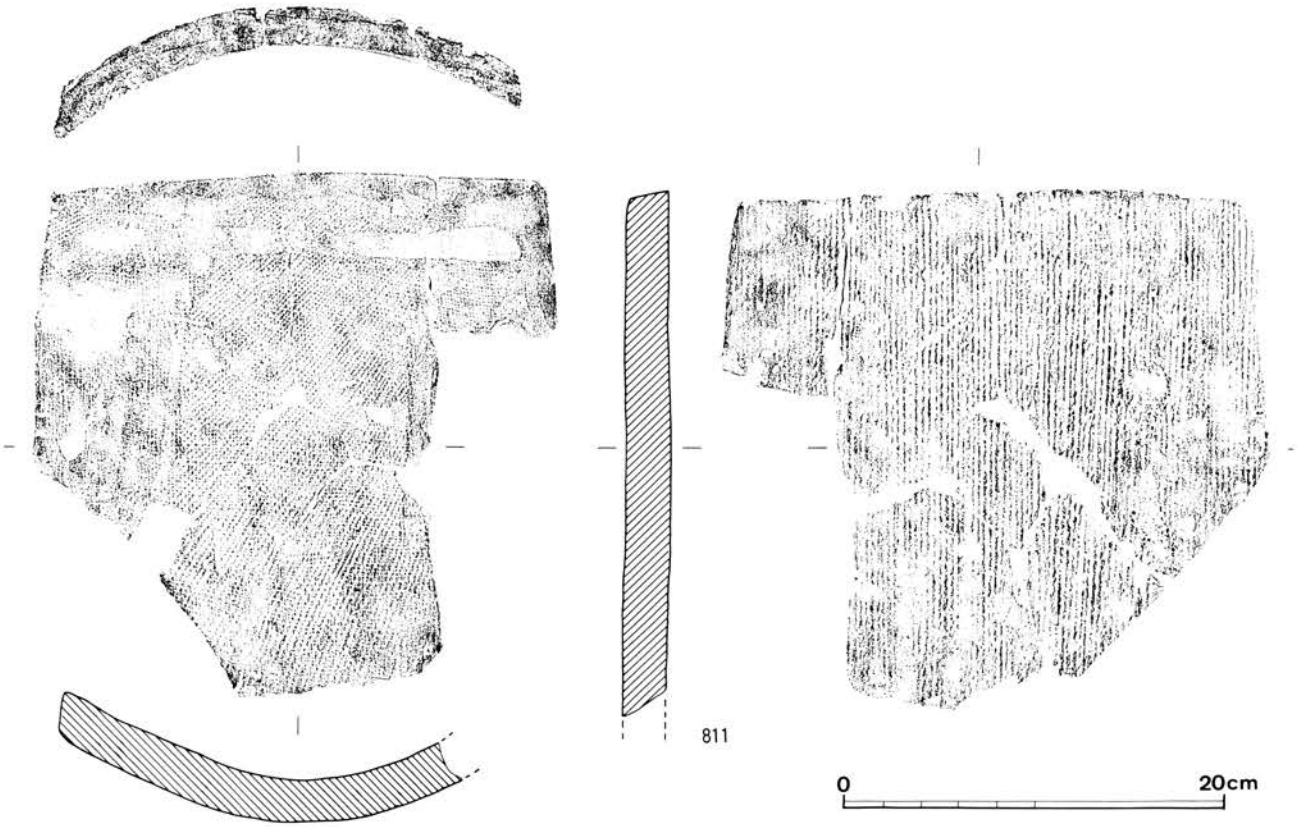
土器実測図(27)

包含層

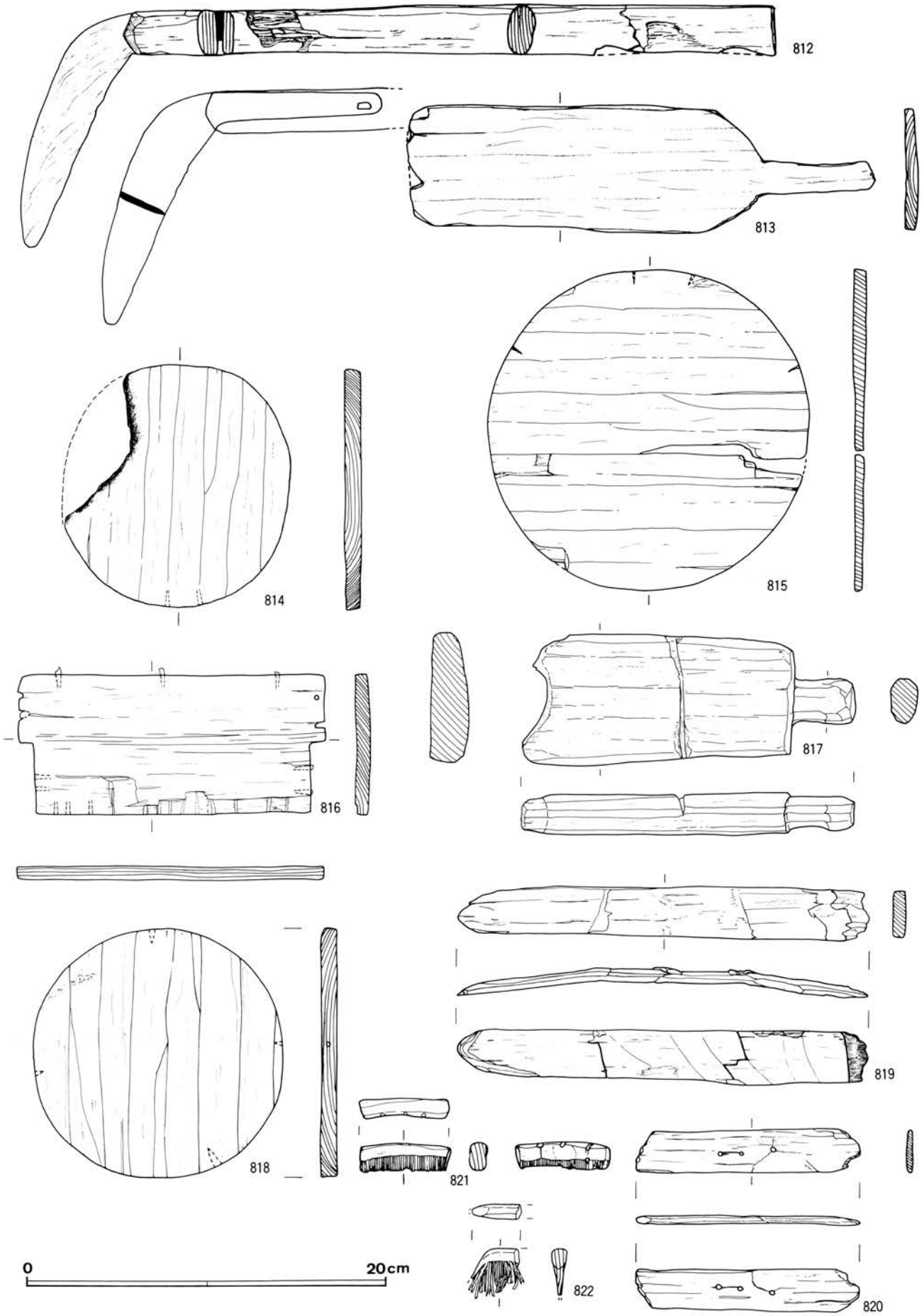

780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
0
20cm

土器実測図(28)

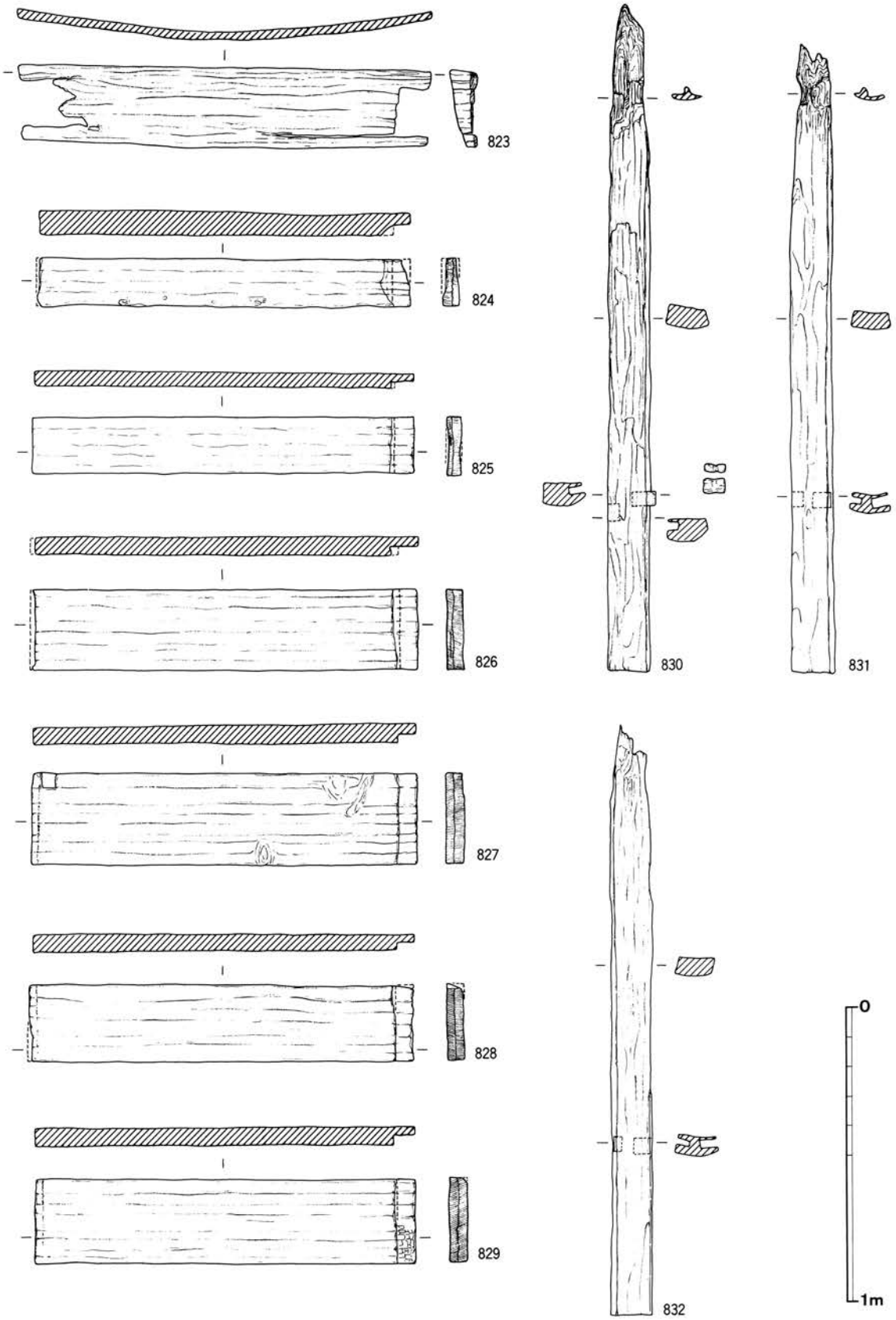




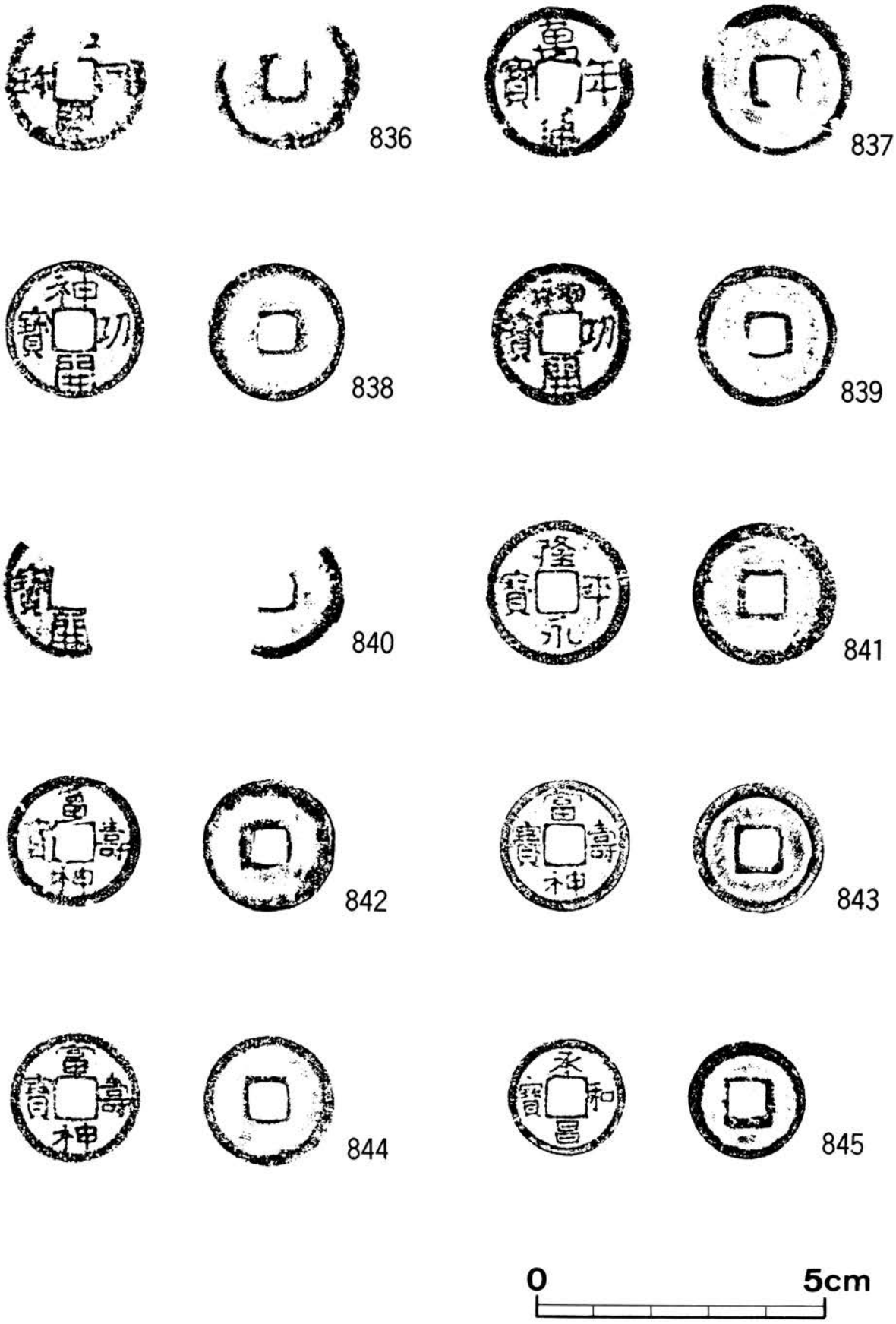
瓦実測図



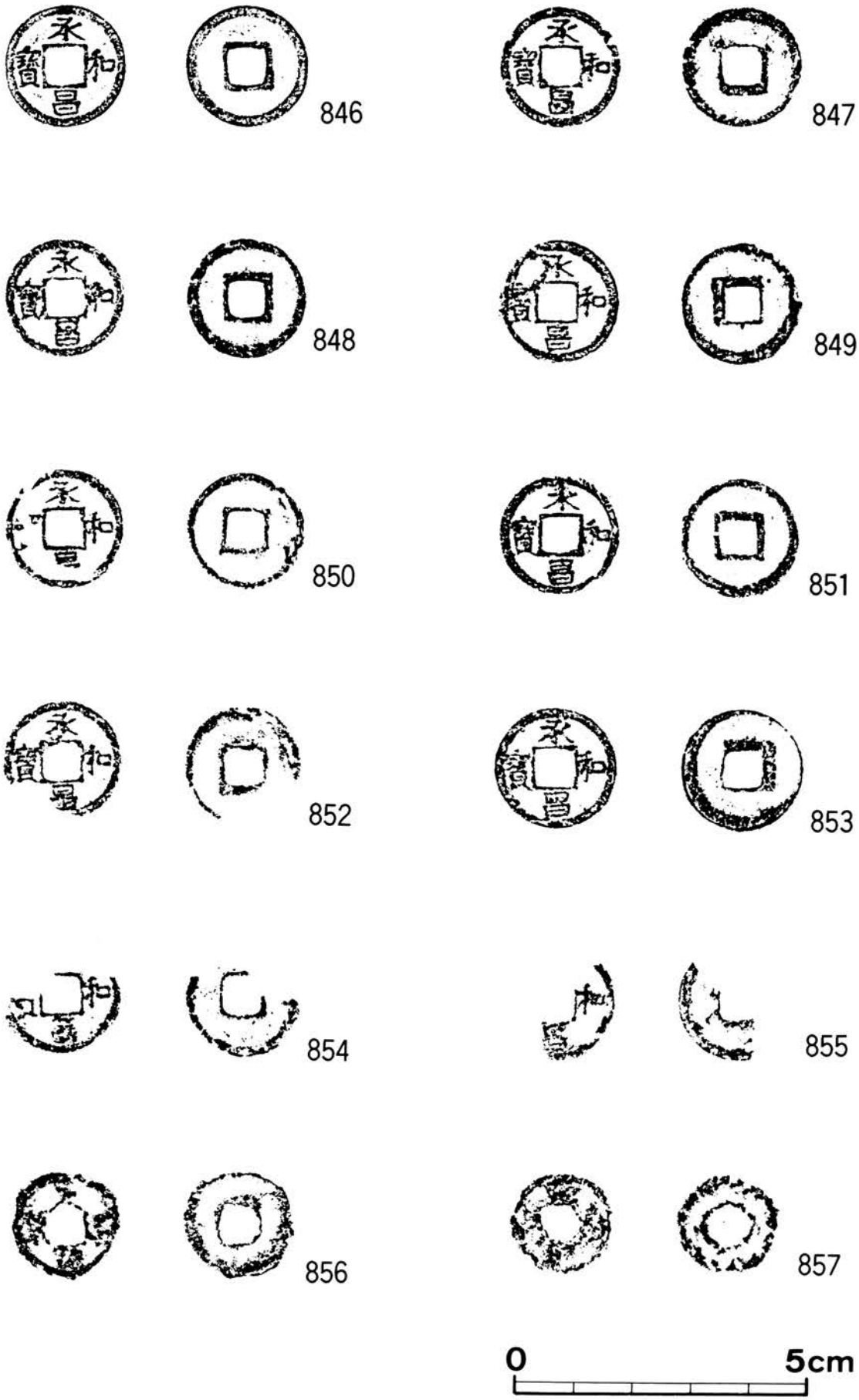
木製品実測図



井戸側実測図



銭貨実測図(1)



銭貨実測図(2)

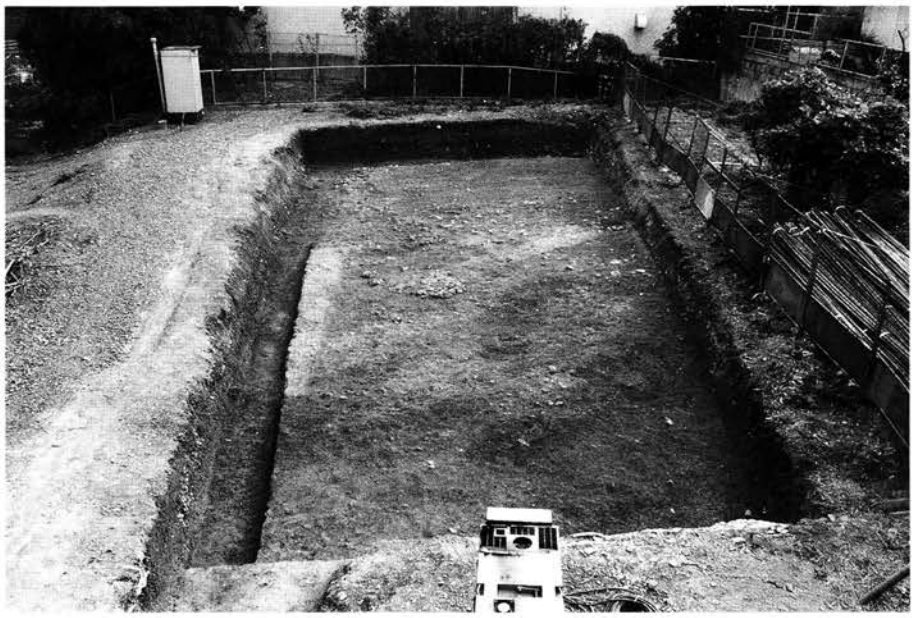
図版第七六

(1)D地区調査着手前の状況
（東から、後方の山は天王山）

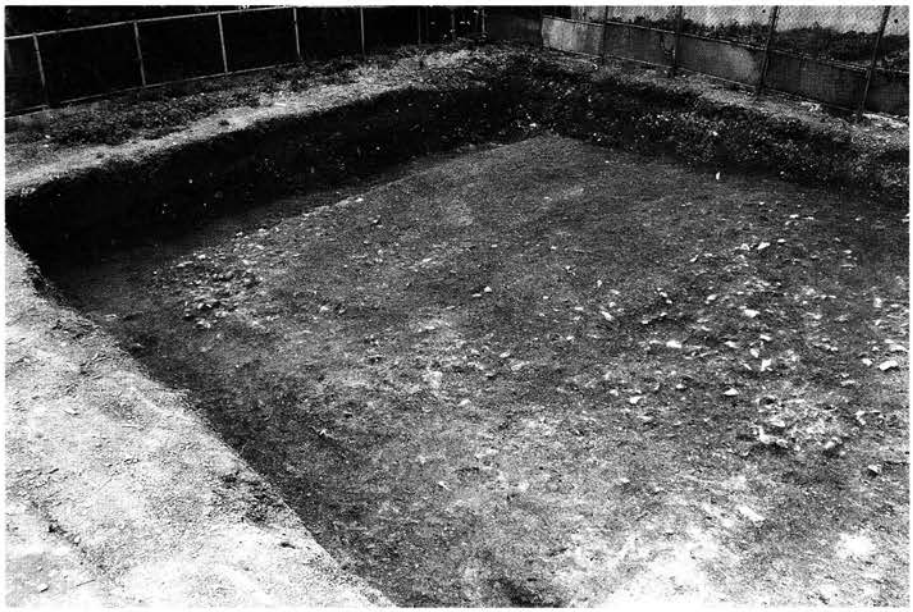
(2)A・B地区を望む
（東から、後方の山は天王山）

(3)D地区拡幅工事の状況
（西から）

(1)Aトレンチ　全景(南から)

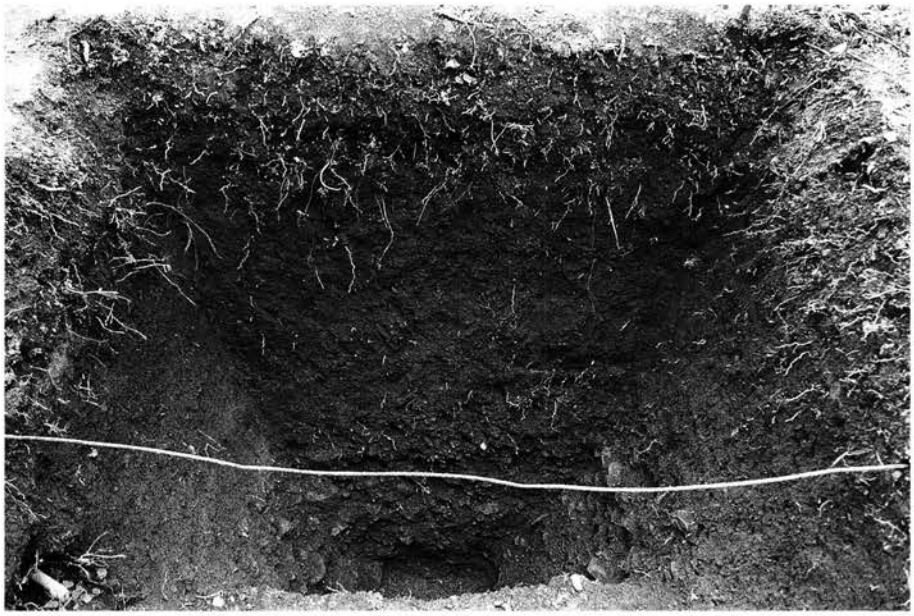


(2)Aトレンチ　全景(北から)

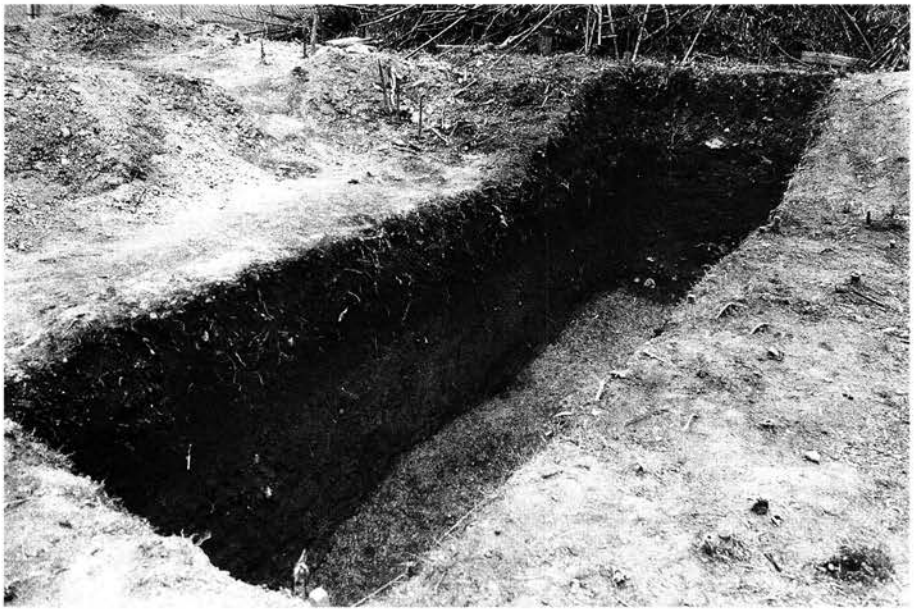


(3)Aトレンチ　南半部
(北東から)

(1)B 1トレンチ　全景
（北東から）



(2)B 2トレンチ　南壁土層
（北から）



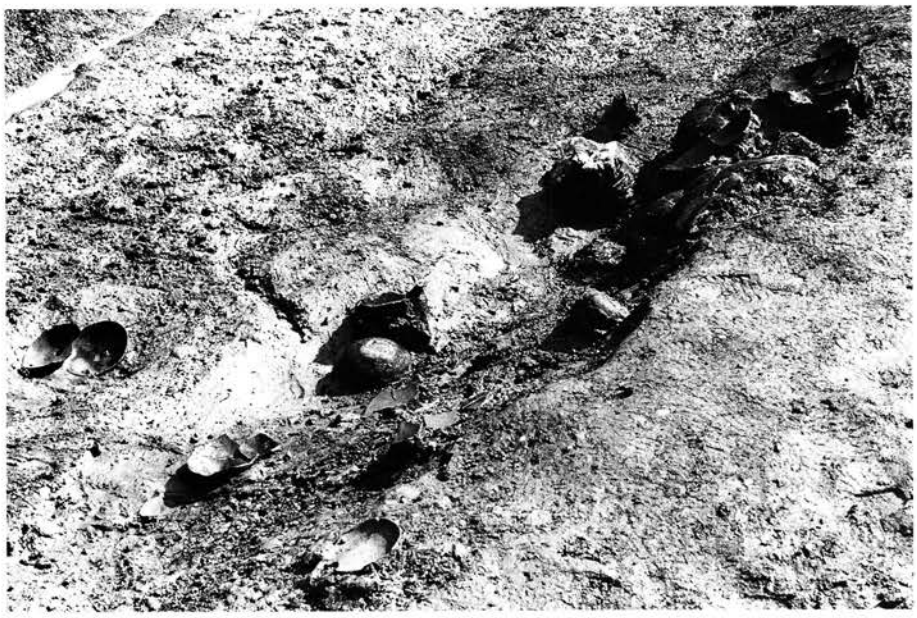
(3)B 3トレンチ　全景
（北東から）

(1)C１トレンチ　全景(東から)

(2)C１トレンチ
ＳＤ34902検出状況(西から)

(1)C 1トレンチ
S R34901掘削状況(西から)

(2)C 1トレンチ　S R34901内
遺物出土状況(東から)



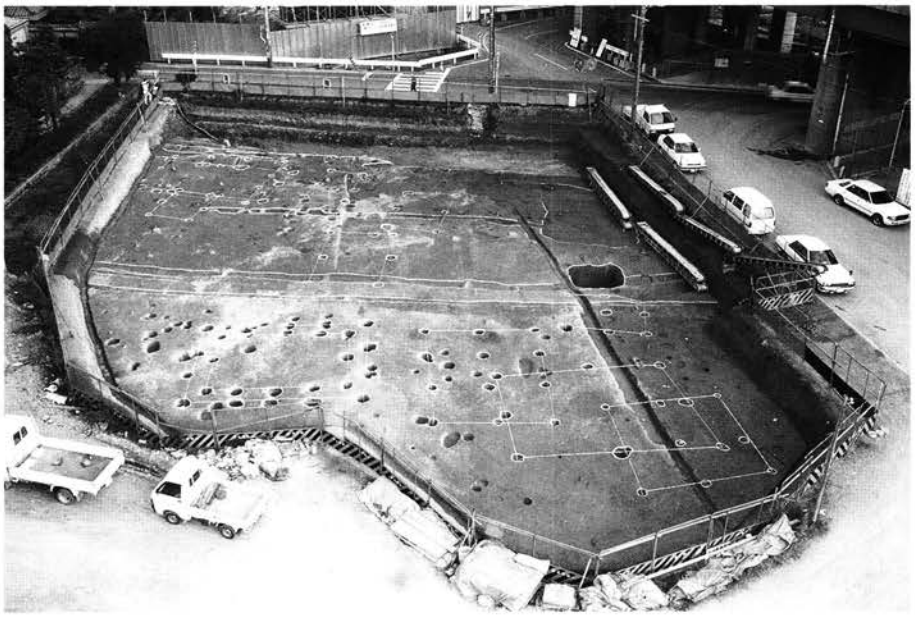
(3)C 1トレンチ　S R34901内
遺物出土状況(北西から)

(1)C１トレンチ
ＳＸ34906・ＳＤ34902
検出状況(南東から)

(2)C１トレンチ　ＳＸ34906
検出状況(南から)

(3)C１トレンチ
ＳＫ34909･10検出状況
(南西から)

(1)C 2トレンチ　全景
（南西から）



(2)C 2トレンチ　全景（西から）

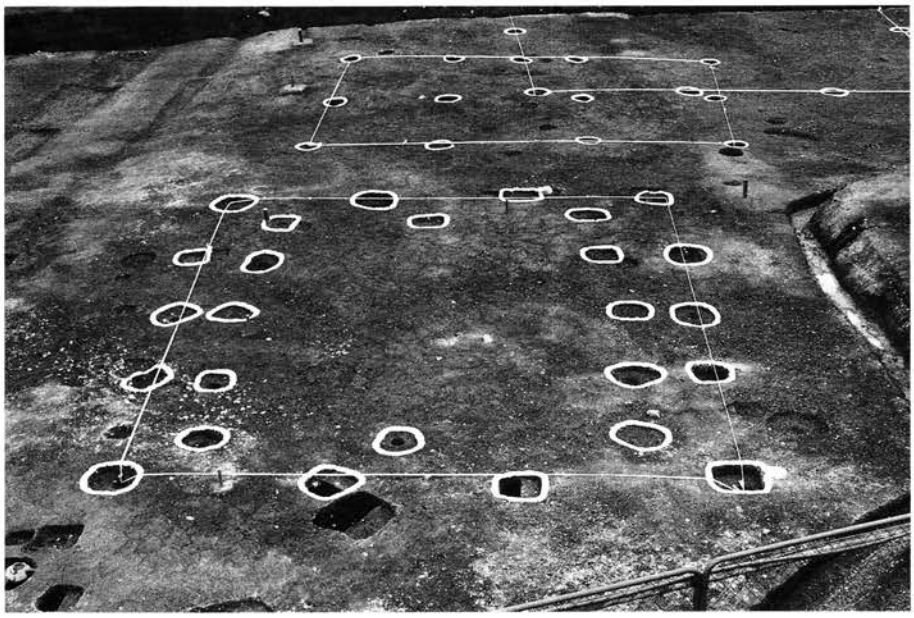
(3)C 2トレンチ
西国街道西側
掘立柱建物跡検出状況
（西から）

(1)C 2トレンチ
西国街道西側溝
SD349111検出状況
(南から)

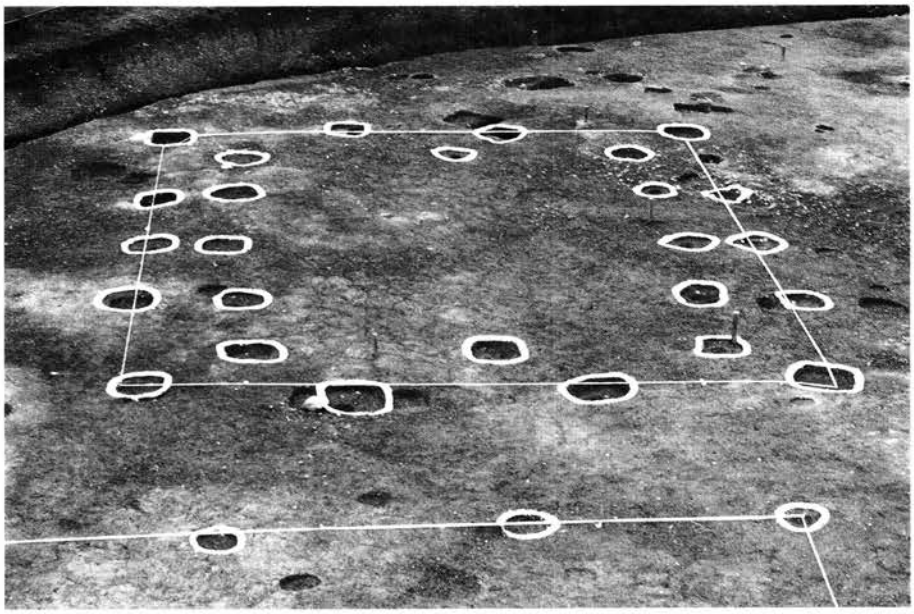
(2)C 2トレンチ　杭列
SX349130検出状況
(北東から)

(3)C 2トレンチ
西国街道西側溝
SD349111内土砂堆積状況
(北から)

(1)C 2トレンチ　西半
掘立柱建物跡検出状況
（北東から）



(2)C 2トレンチ　掘立柱建物跡
S B349113・114検出状況
（北から）



(3)C 2トレンチ　掘立柱建物跡
S B349113・114検出状況
（南から）

(1)C２トレンチ
井戸ＳＥ349112検出状況
（北から）

(2)C２トレンチ
井戸ＳＥ349112完掘状況
（東から）

(3)C２トレンチ
井戸ＳＥ349112内底面
石礫検出状況（北から）

(1)C 2トレンチ　西国街道路面
S F349104検出状況
(南西から)

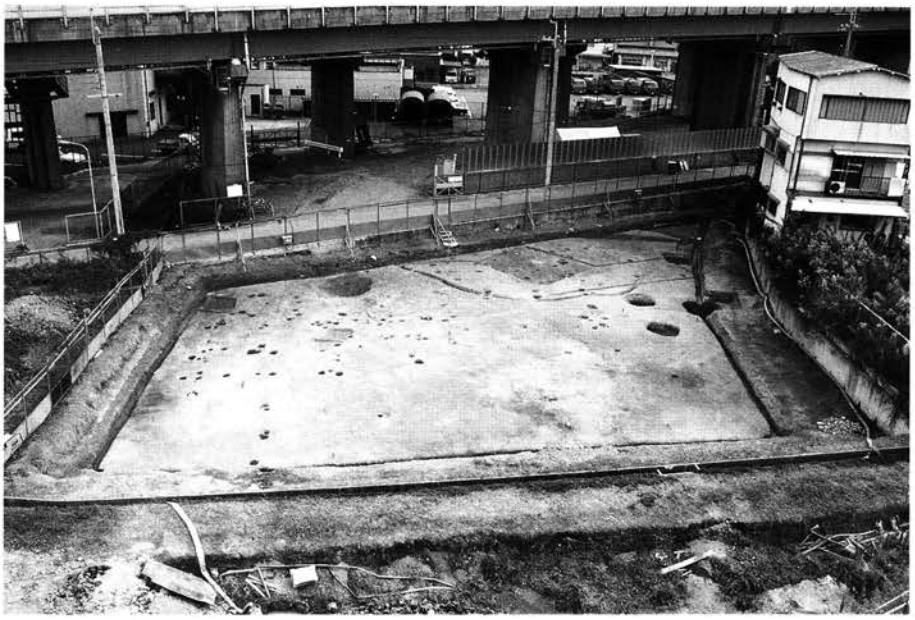
(2)C 2トレンチ
西国街道西側溝S D349103
検出状況(南西から)

(3)C 2トレンチ
S X349110・131検出状況
(北西から)

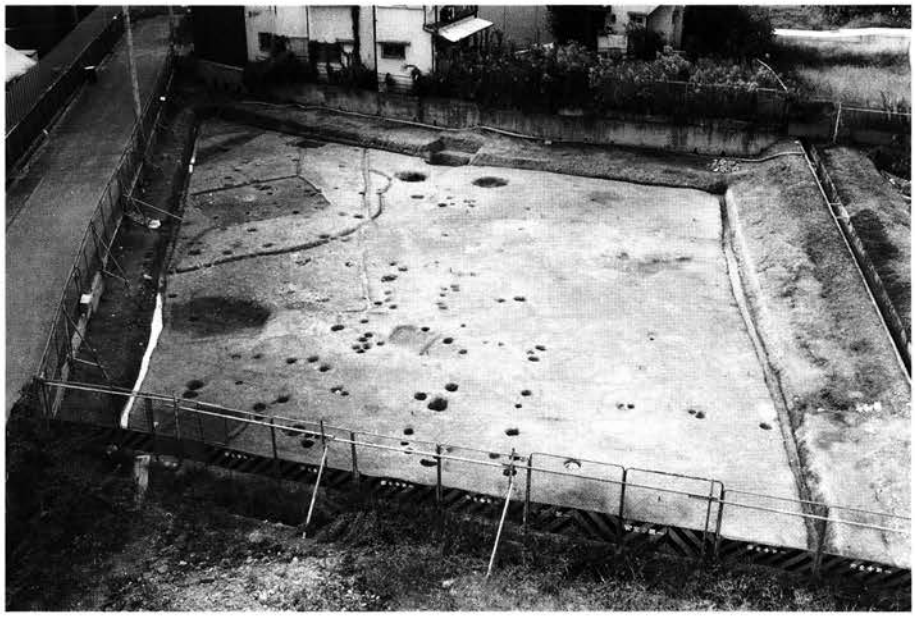
(1)C 2トレンチ
瓦器埋納土坑SK349129
検出状況(東から)

(2)C 2トレンチ
布留式土器埋納土坑
SK349128検出状況
(東から)

(3)C 2トレンチ　P294
検出状況(北西から)



(1)C3aトレンチ　全景
（北から）



(2)C3aトレンチ　全景
（東から）

(3)C3aトレンチ　掘立柱建物跡
ＳＢ36701・02検出状況
（北東から）

(1)C3aトレンチ　掘立柱建物跡
ＳＢ36703・04・05検出状況
（北西から）

(2)C3aトレンチ　掘立柱建物跡
ＳＢ36706検出状況（西から）

(3)C3aトレンチ　竪穴式住居跡
ＳＨ36717検出状況（北西から）

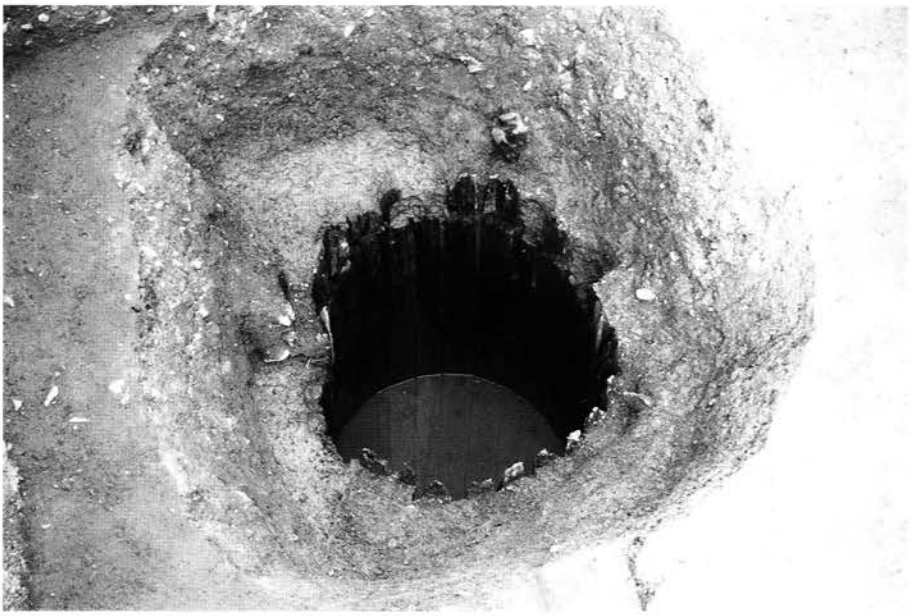
図版第九〇

(1)C3aトレンチ　竪穴式住居跡
ＳＨ36717検出状況
（南東から）

(2)C3aトレンチ　竪穴式住居跡
SH36717カマド(新)検出状況
（南東から）

(3)C3aトレンチ　竪穴式住居跡
SH36717カマド(旧)検出状況
（南東から）

(1)C3aトレンチ　井戸SE36714
上面石礫検出状況(南東から)



(2)C3aトレンチ井戸ＳＥ36714
井戸側検出状況(南西から)

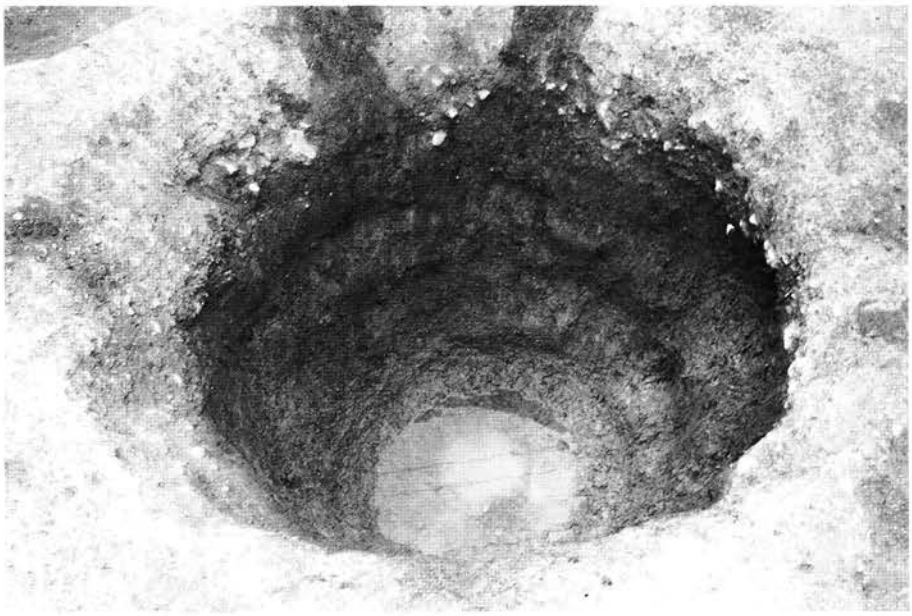
(3)C3aトレンチ　井戸SE36714
井戸側検出状況(北西から)

(1)C3aトレンチ
井戸ＳＥ36710内
土器出土状況(北から)

(2)C3aトレンチ
井戸ＳＥ36712内
石礫検出状況(東から)

(3)C3aトレンチ
井戸ＳＥ36713内
土器出土状況(北から)

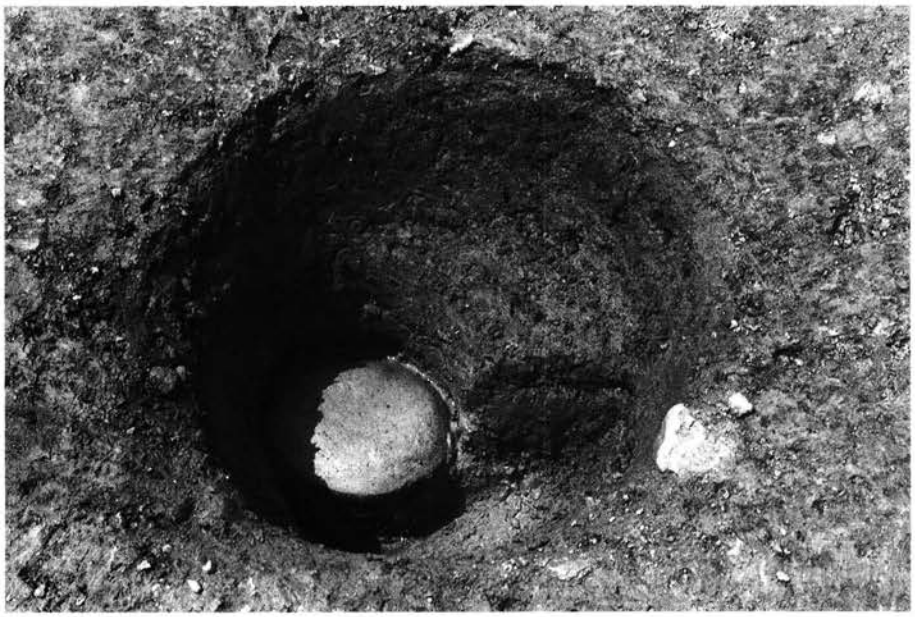
(1)C3aトレンチ
井戸ＳＥ36710完掘状況
（東から）



(2)C3aトレンチ
井戸ＳＥ36712完掘状況
（北から）

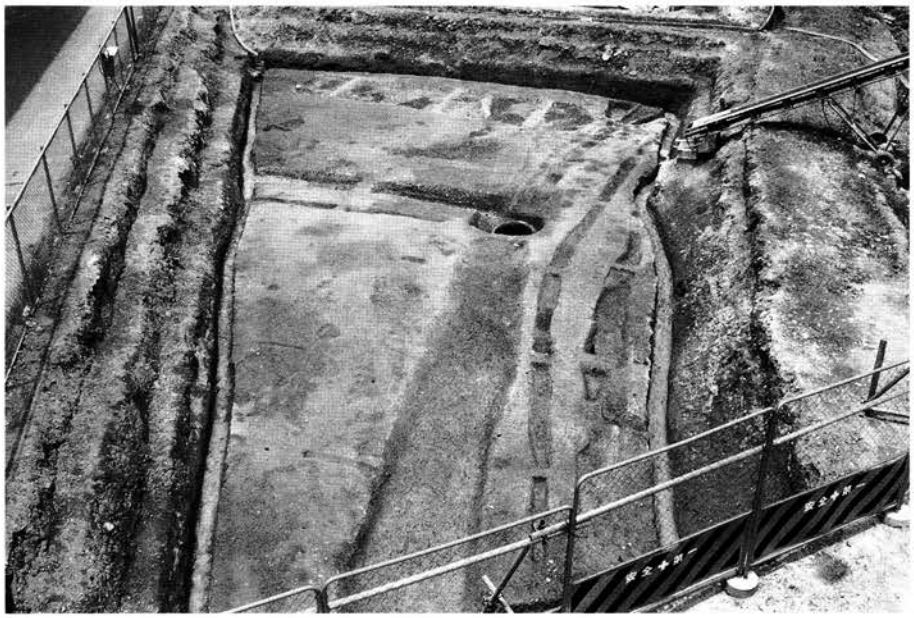
(3)C3aトレンチ
井戸ＳＥ36713完掘状況
（北西から）

(1)C3aトレンチ
土師皿埋納柱穴Ｐ10検出状況
（南から）

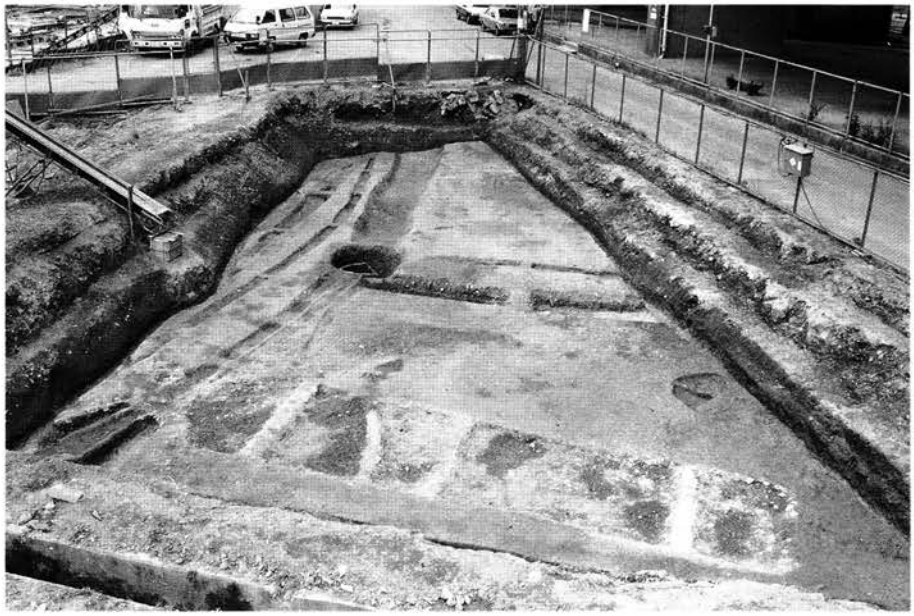


(2)C3aトレンチ
土師皿埋納土坑
ＳＫ36711検出状況（南から）

(3)C3aトレンチ
土器埋納土坑ＳＫ36719
検出状況（北西から）

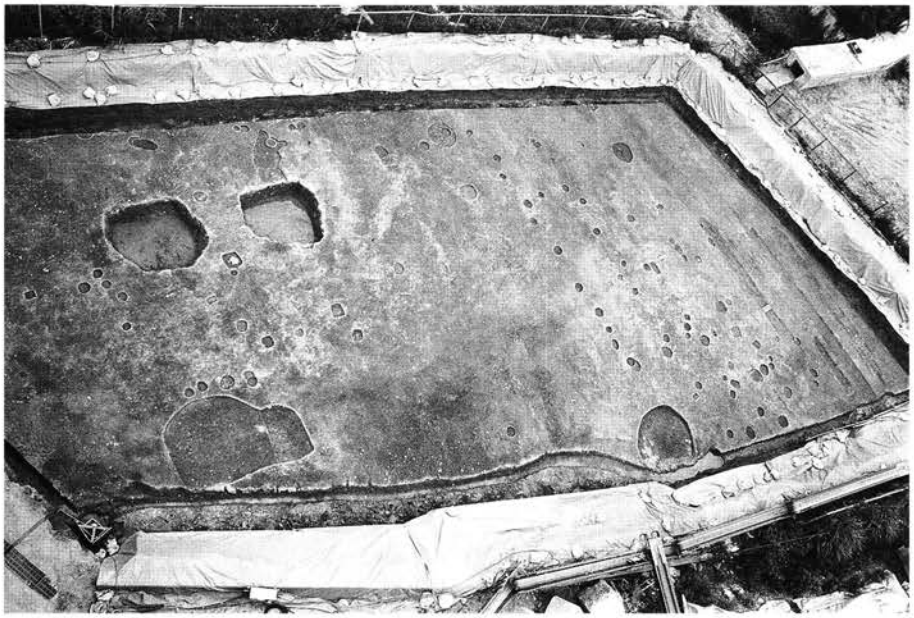


(1)C3bトレンチ　全景(東から)

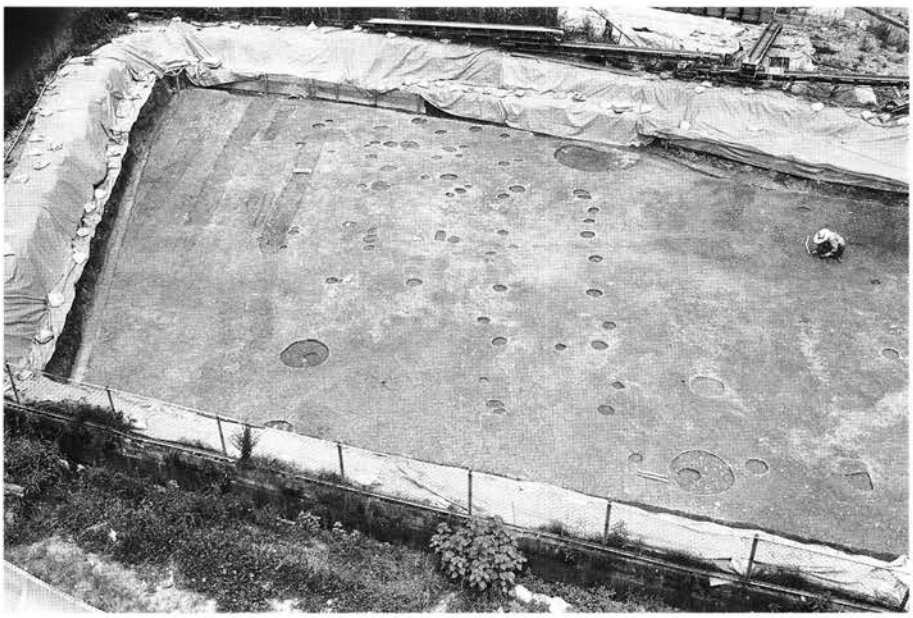


(2)C3bトレンチ　全景(西から)

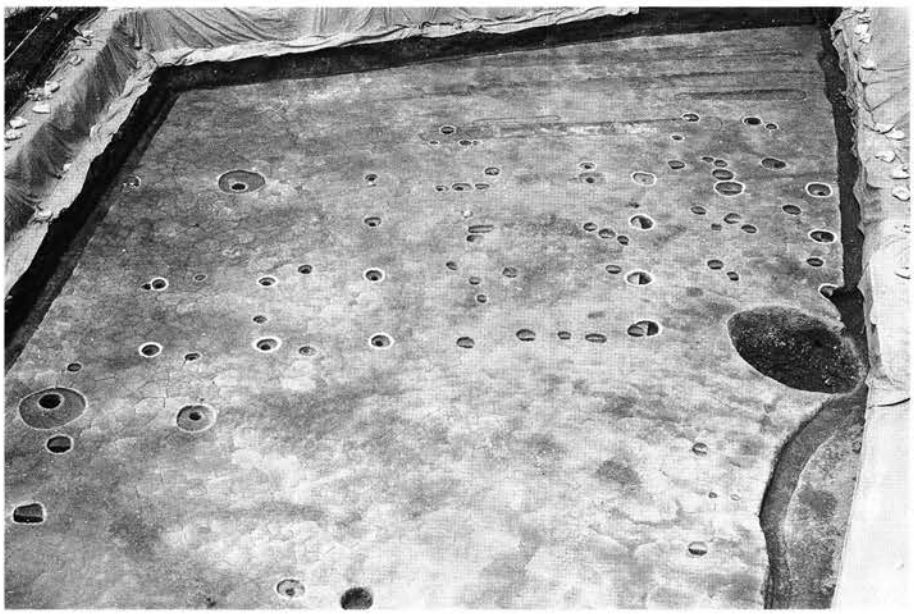
(3)C3bトレンチ　溝ＳＤ36737
検出状況(北から)



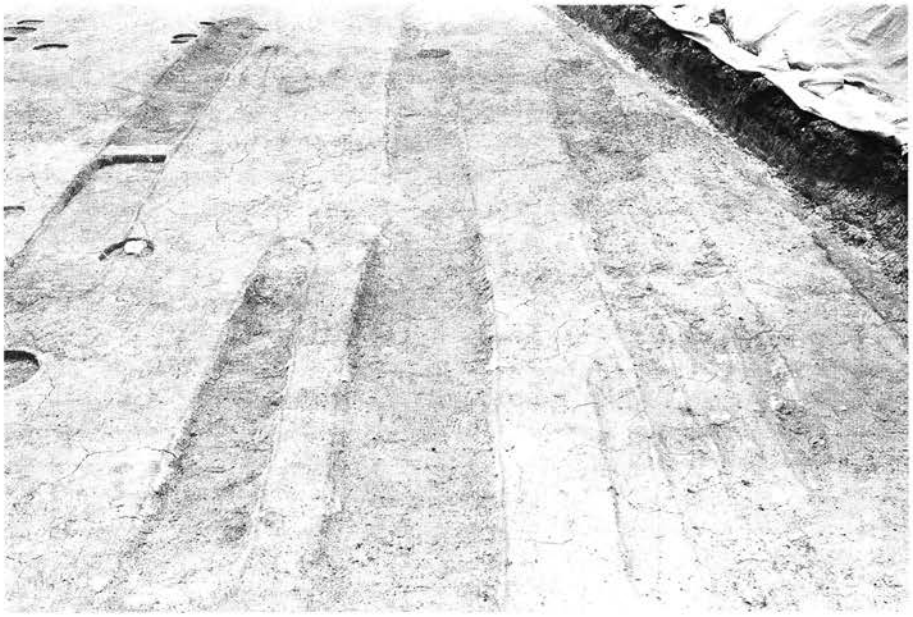
(1)C 4トレンチ　全景
（南東から）



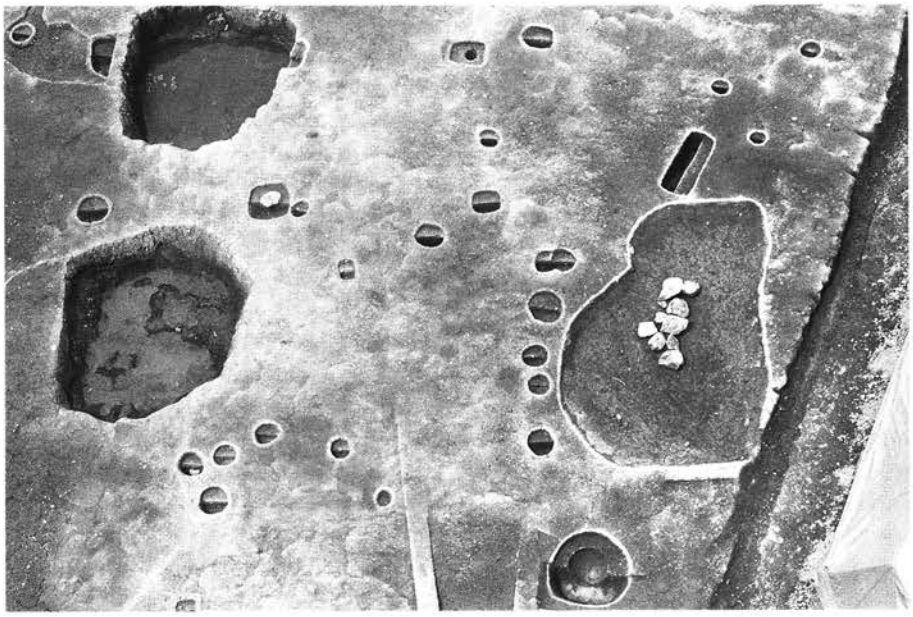
(2)C 4トレンチ　北半検出遺構
（西から）



(3)C 4トレンチ　掘立柱建物跡
S B394009・010検出状況
（南から）



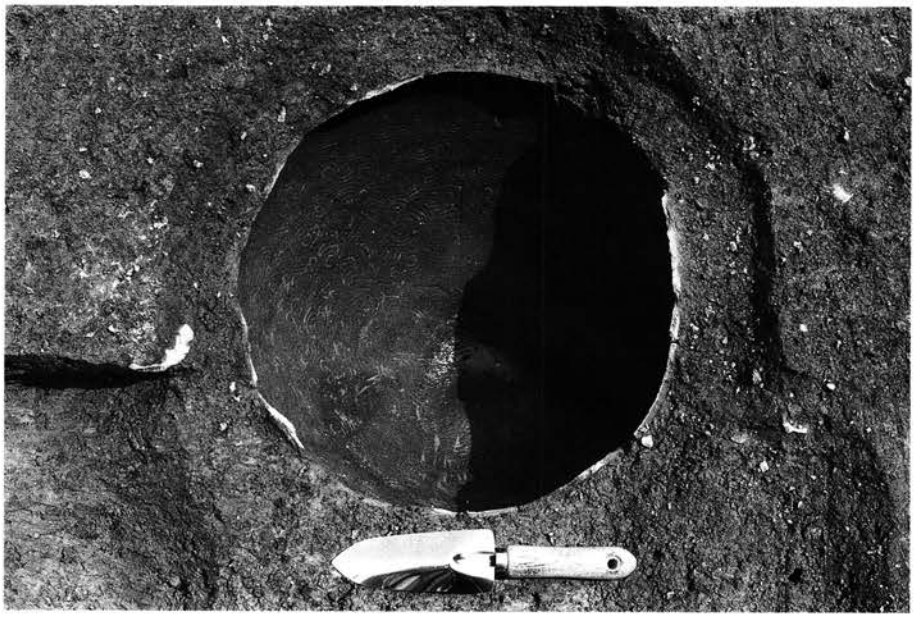
(1)C 4 トレンチ
素掘り溝群検出状況
（東から）



(2)C 4 トレンチ
土坑ＳＫ394004検出状況
（南から）

(3)C 4 トレンチ
南東部遺構検出状況
（南から）

(1)C 4 トレンチ
土坑ＳＫ394007検出状況
（南西から）

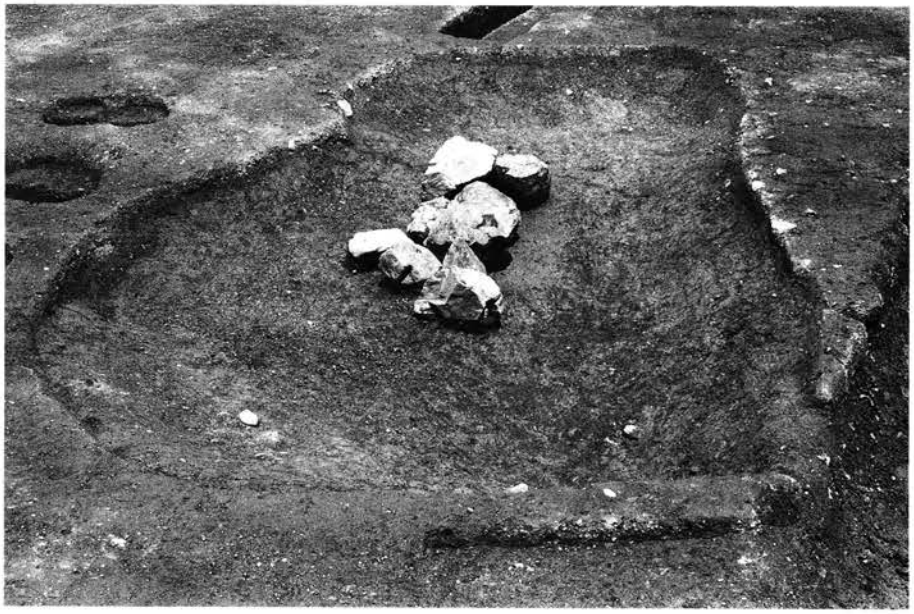


(2)C 4 トレンチ
土坑ＳＫ394007完掘状況
（南西から）

(3)C 4 トレンチ
土坑ＳＫ394006内
遺物出土状況（東から）

(1)C 4トレンチ
井戸SE394001検出状況
(北西から)

(2)C 4トレンチ
井戸SE394001完掘状況
(北西から)

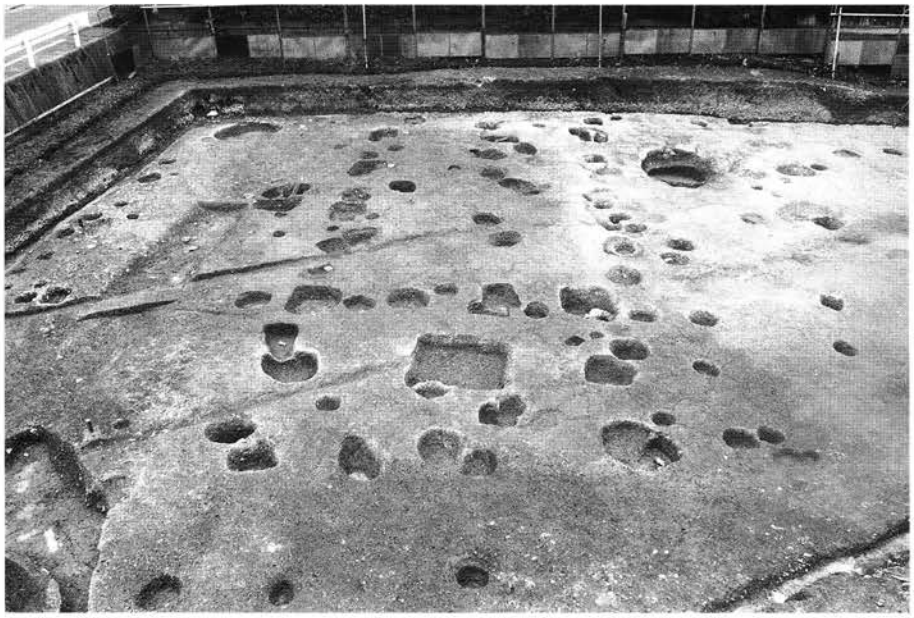


(3)C 4トレンチ
土坑SK394004内
石礫検出状況(南西から)

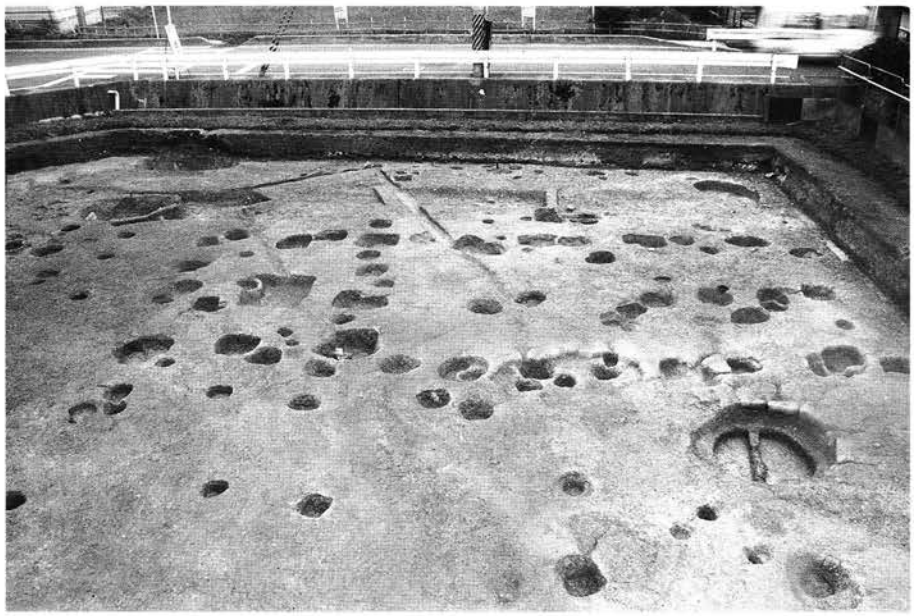
(1)D地区調査着手前全景
（東から）

(2)D１トレンチ　全景
（南西から）

(3)D１トレンチ　全景
（北東から）



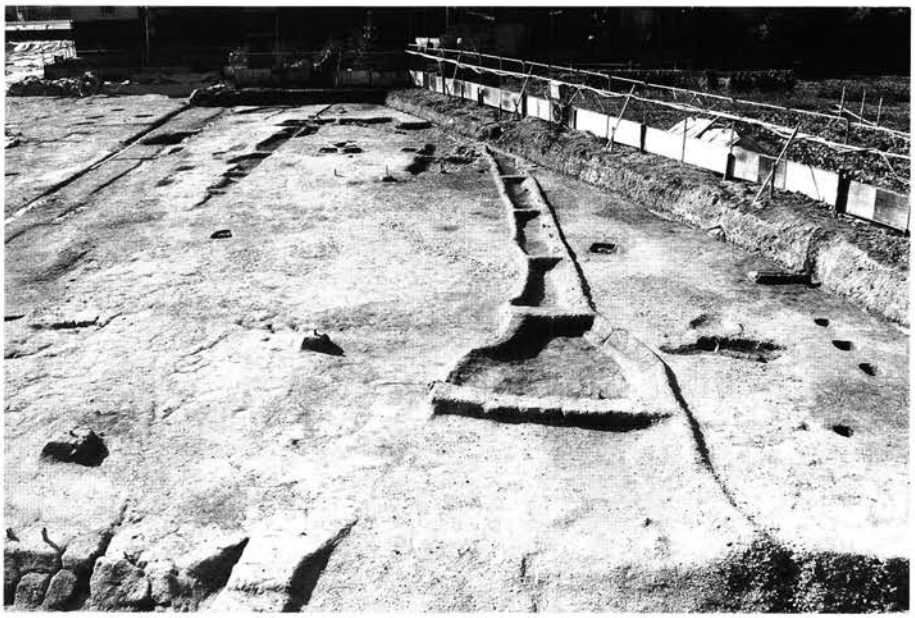
(1)D１トレンチ　西国街道東側
掘立柱建物跡群検出状況
（南から）



(2)D１トレンチ　西国街道東側
掘立柱建物跡群検出状況
（東から）

(3)D１トレンチ　西国街道東側
掘立柱建物跡群検出状況遠景
（北東から）

(1)D１トレンチ　掘立柱建物跡
ＳＢ34922・23検出状況
（南から）



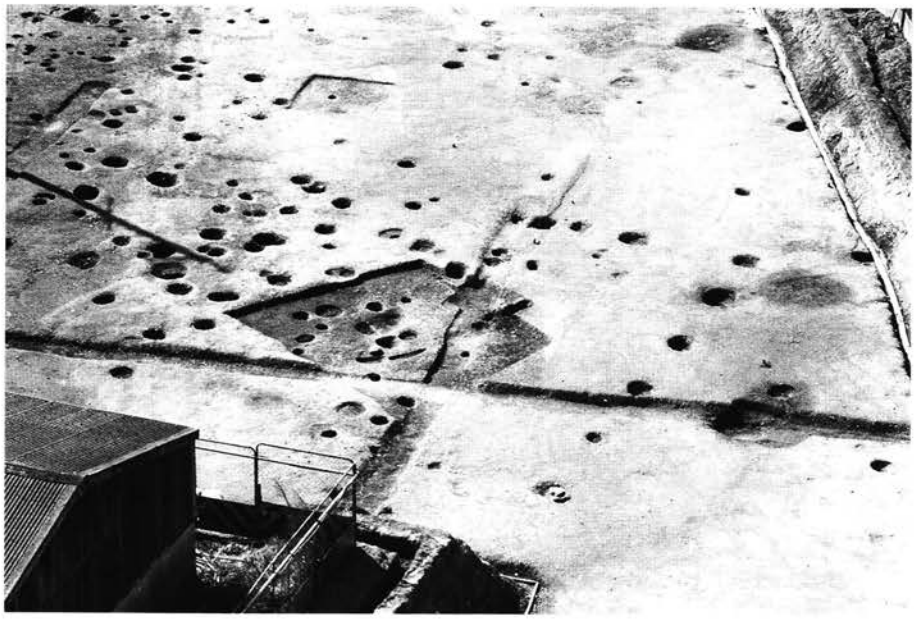
(2)D１トレンチ　トレンチ中央
北半部上面遺構検出状況
（北東から）

(3)D１トレンチ　トレンチ中央
北半部下面遺構検出状況
（北東から）

(1)D１トレンチ　掘立柱建物跡
ＳＢ34954周辺遺構検出状況
（北東から）

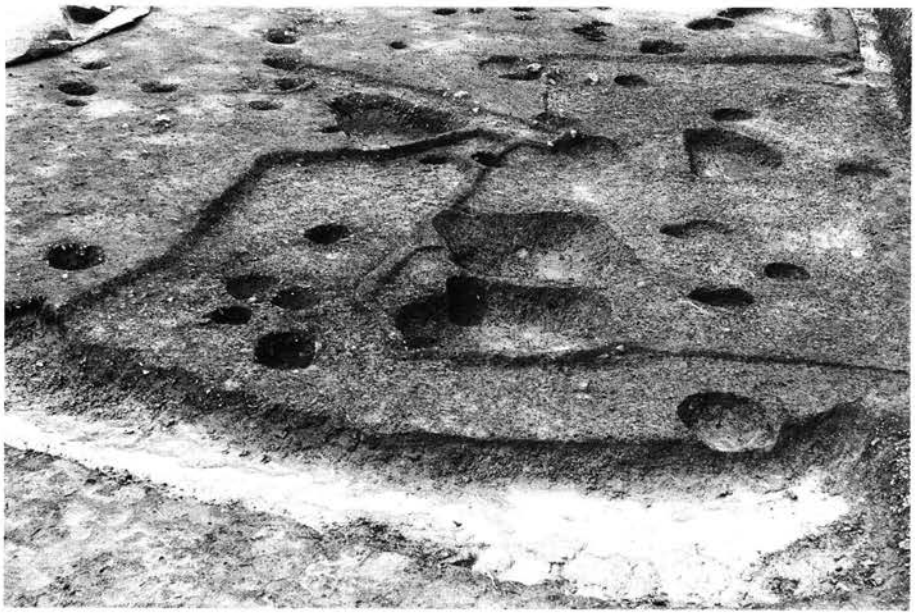
(2)D１トレンチ
溝ＳＤ34953・中央部北半下面
遺構検出状況（東から）

(3)D１トレンチ　溝ＳＤ34953
検出状況（北西から）



(1)D１トレンチ　竪穴式住居跡
ＳＨ34959周辺遺構検出状況
（北東から）

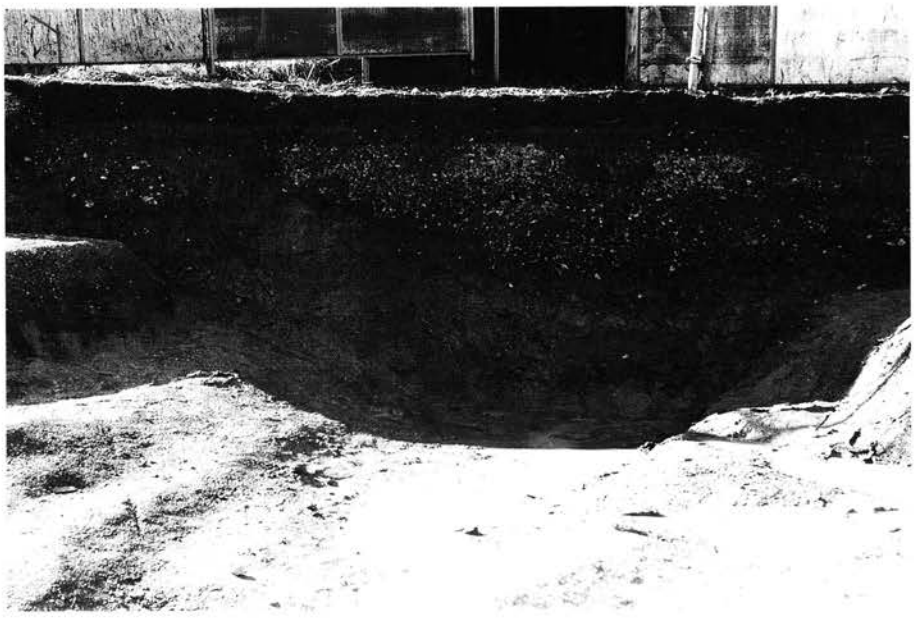
(2)D１トレンチ　掘立柱建物跡
ＳＢ34957検出状況
（北西から）



(3)D１トレンチ　竪穴式住居跡
ＳＨ34961・62検出状況
（西から）

(1)D１トレンチ　自然流路
ＳＲ34951検出状況
（南から）

(2)D１トレンチ　自然流路
ＳＲ34952検出状況
（南東から）



(3)D１トレンチ　自然流路
ＳＲ34952・溝ＳＤ34953内
土層（東から）

(1)D１トレンチ　土壙墓
ＳＸ34924検出状況
（南西から）

(2)D１トレンチ　土壙墓
ＳＸ34924内埋納土器・
石礫検出状況（南東から）

(3)D１トレンチ
土壙墓ＳＸ34924完掘状況
（南西から）

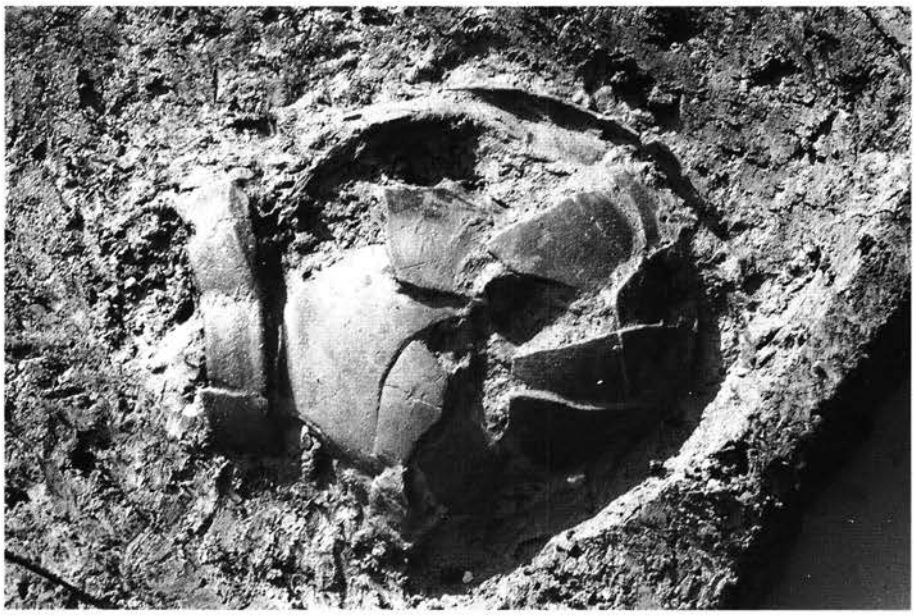
(1)D１トレンチ　土坑
ＳＫ34915・16完掘状況
（南西から）

(2)D１トレンチ
井戸ＳＥ34958検出状況
（南から）

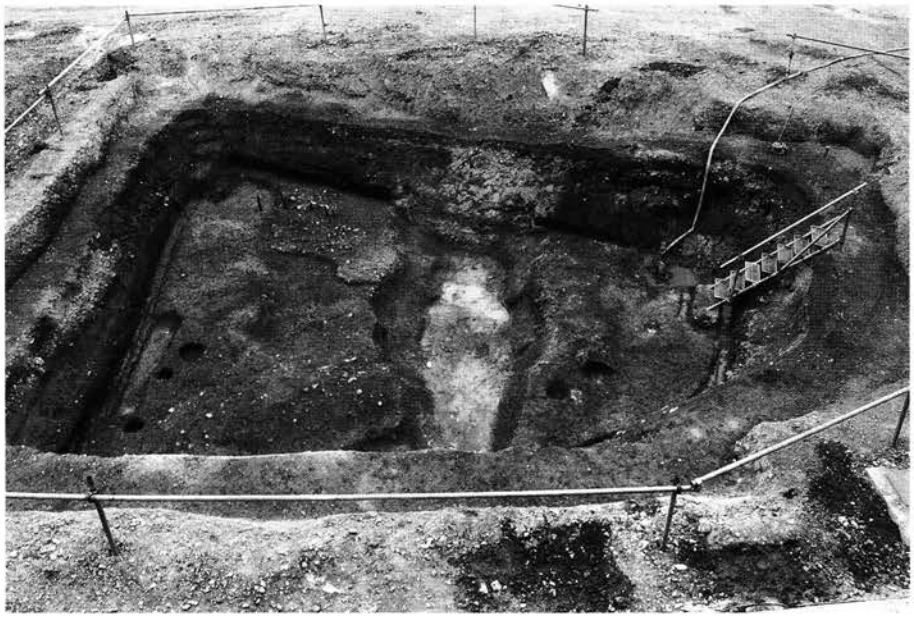
(3)D１トレンチ
銭貨埋納遺構ＳＸ34933
検出状況（北西から）

(1)D１トレンチ　土器埋納土坑
ＳＫ34925検出状況(西から)

(2)D１トレンチ　土器埋納土坑
ＳＫ34930検出状況
(北西から)



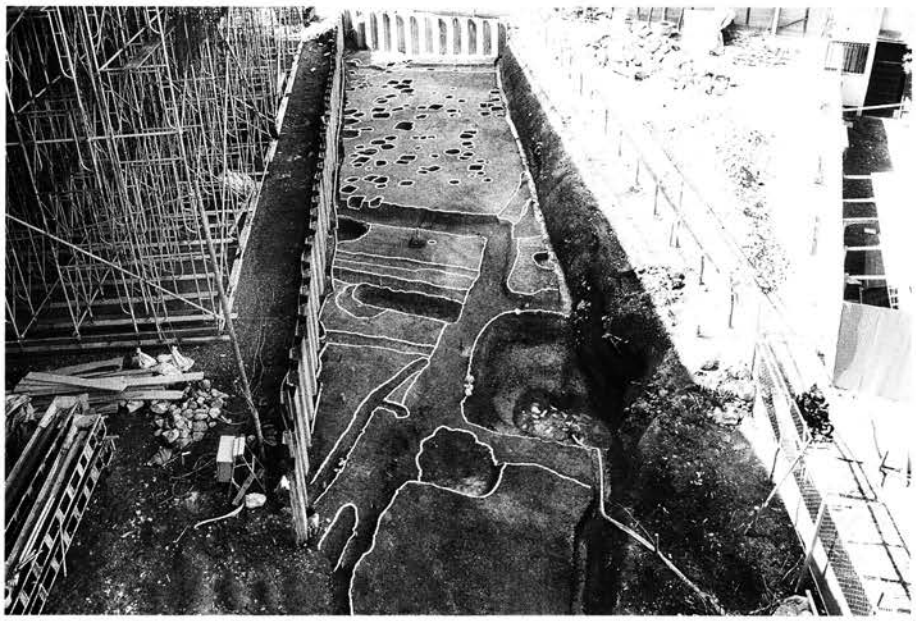
(3)D１トレンチ
土器埋納土坑ＳＸ34965
検出状況(北東から)



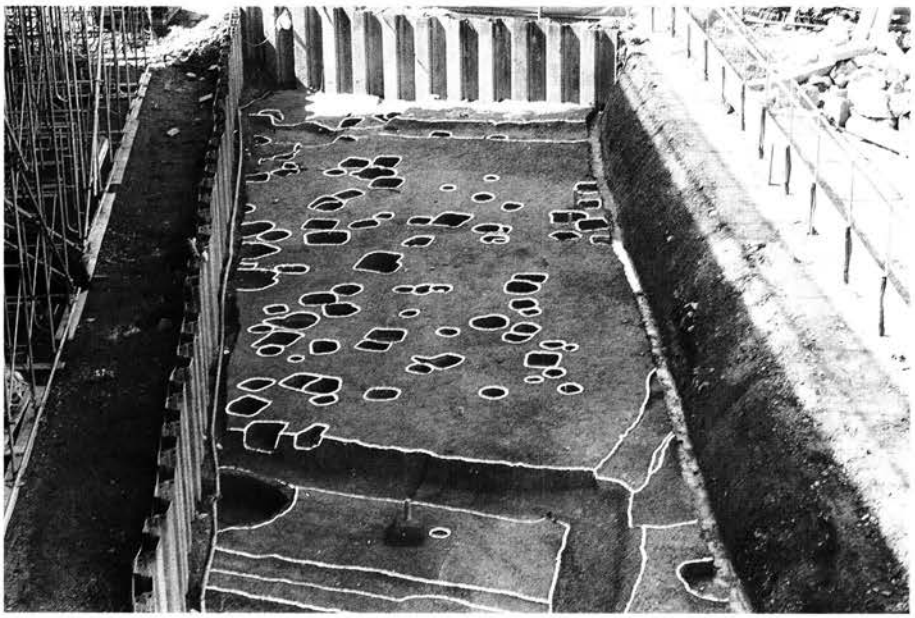
(1)D 2 トレンチ　全景(南から)

(2)D 2 トレンチ　自然流路
S R36740検出状況(北から)

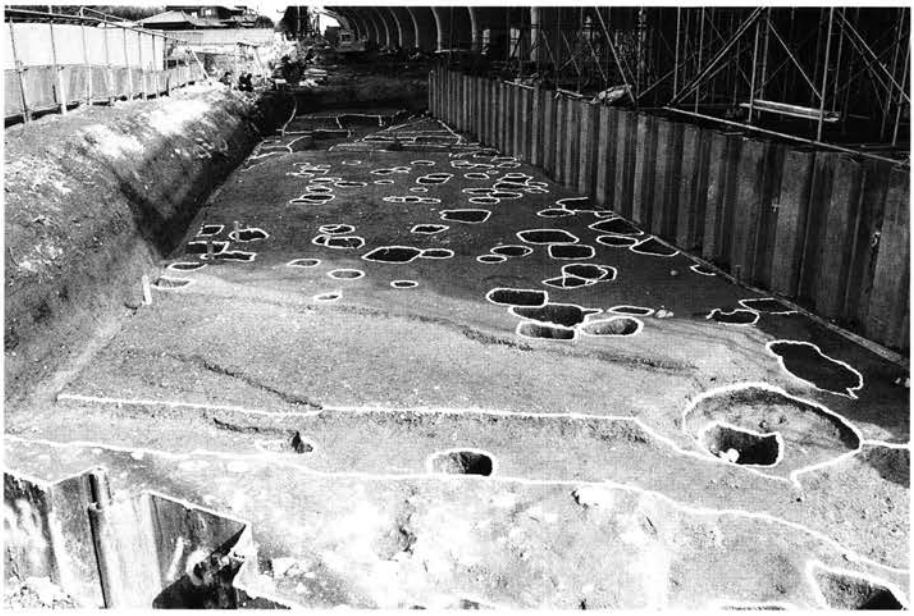
(3)D 2 トレンチ　自然流路
S R36740検出状況
(北西から)



(1)D 3トレンチ　全景
（北東から）



(2)D 3トレンチ
西半部（北東から）

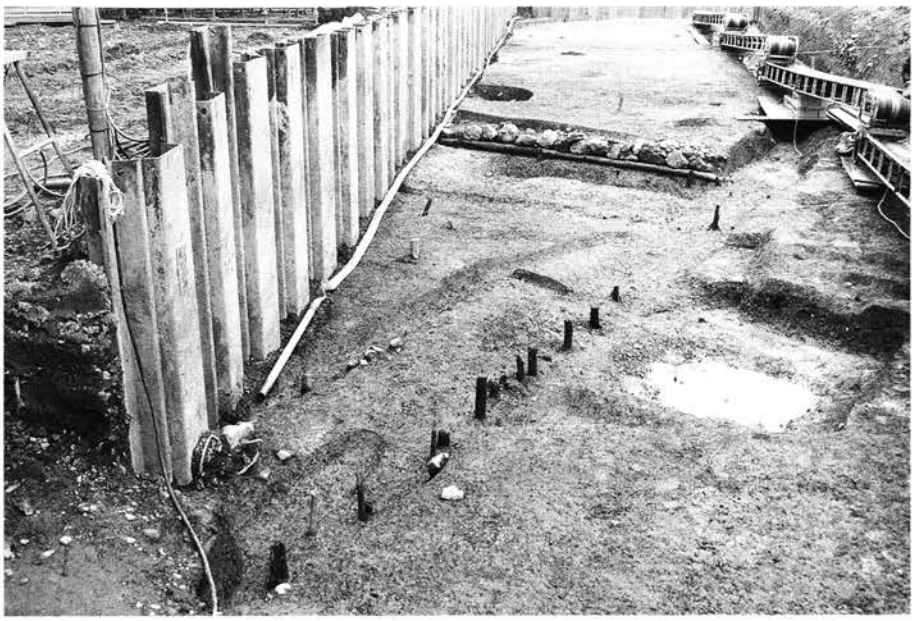


(3)D 3トレンチ　全景
（南西から）

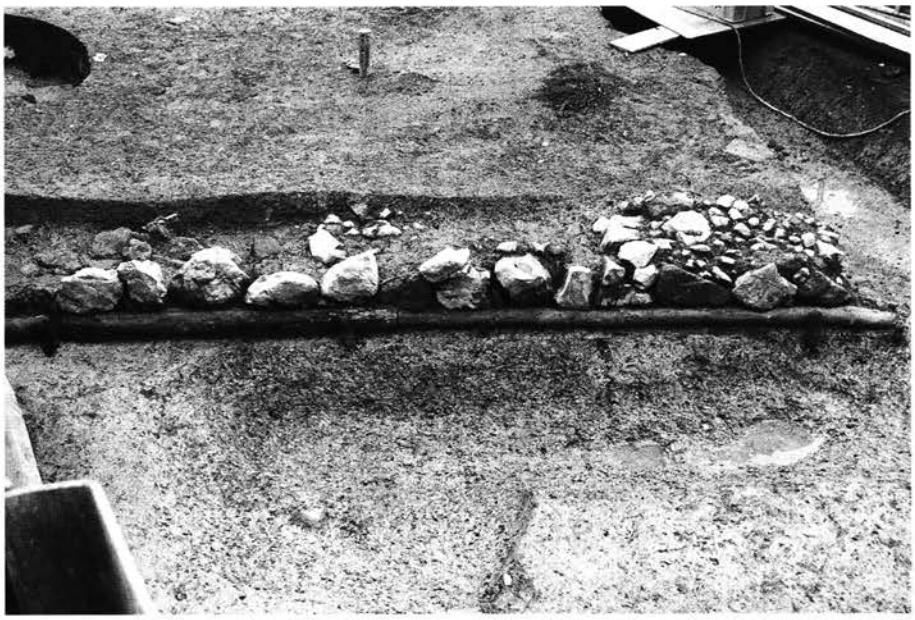
(1)D３トレンチ
西国街道路面ＳＦ394103・東側溝ＳＤ394101検出状況（南から）

(2)D３トレンチ
西国街道路面ＳＦ394103・東側溝ＳＤ394101検出状況（北から）

(3)D３トレンチ
土器埋納遺構ＳＸ394104検出状況（東から）

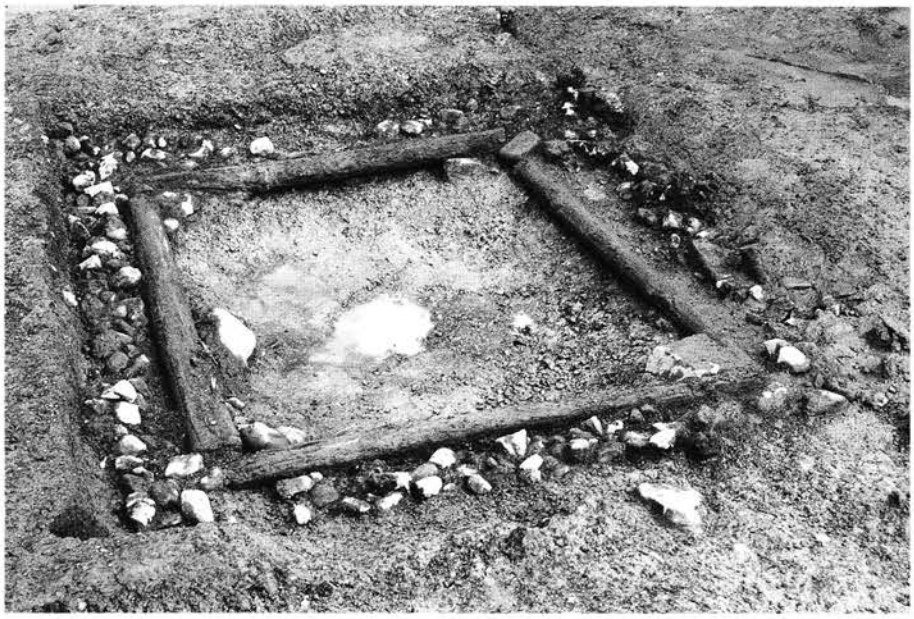


(1)D３トレンチ　近世遺構群
検出状況(北東から)



(2)D３トレンチ　石垣状遺構
ＳＸ12検出状況(東から)

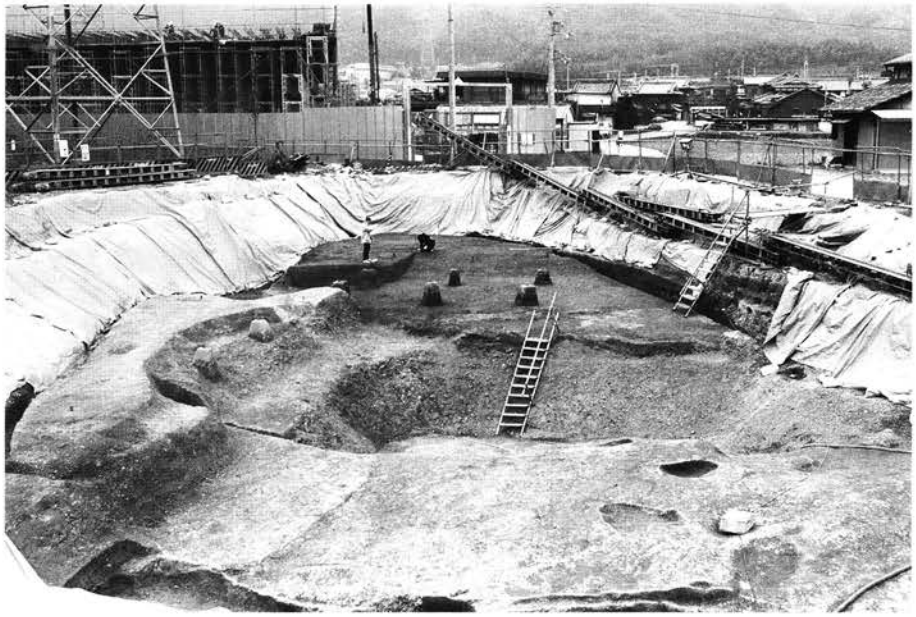
(3)D３トレンチ　暗渠排水
ＳＤ05検出状況(南東から)



(1)D３トレンチ
井戸ＳＥ02検出状況
（西から）

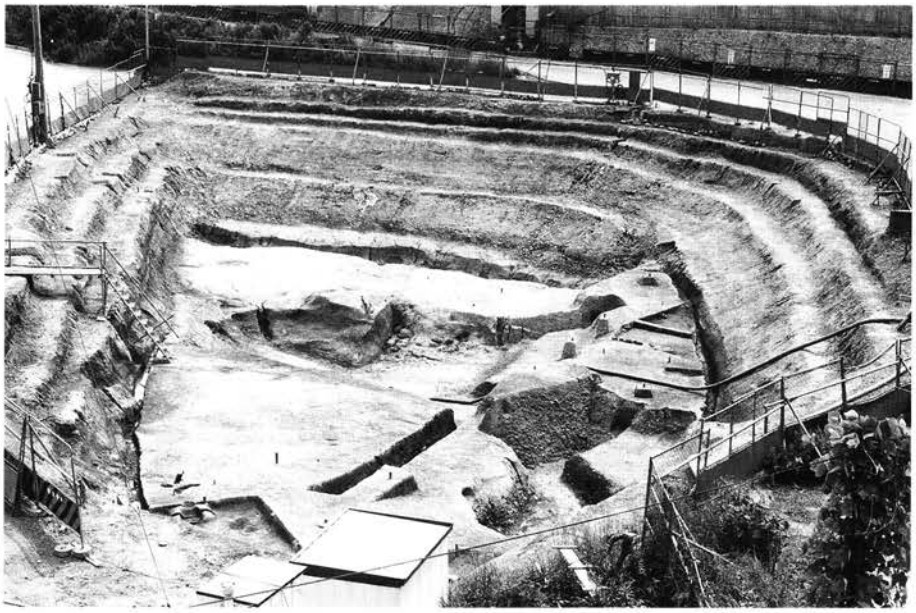
(2)D３トレンチ
井戸状遺構ＳＸ394107
検出状況（北東から）

(3)D３トレンチ　井戸ＳＥ03
検出状況（北西から）



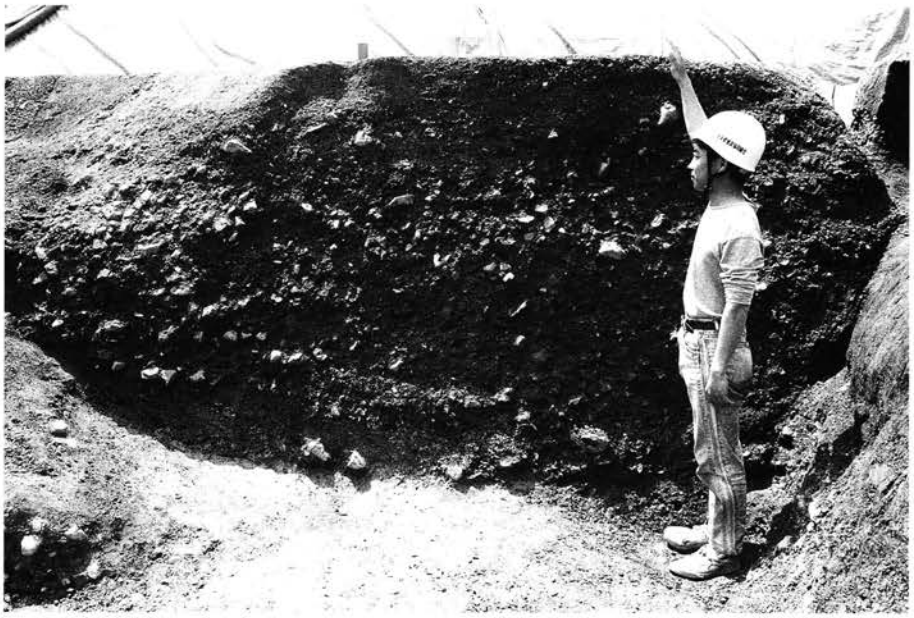
(1)Eトレンチ　上層遺構面全景
（北東から）

(2)Eトレンチ　下層遺構面全景
（北東から）



(3)Eトレンチ　下層遺構面全景
（南西から）

(1)Eトレンチ
自然流路ＳＲ367042下面・
ＳＤ367048検出状況
（南から）



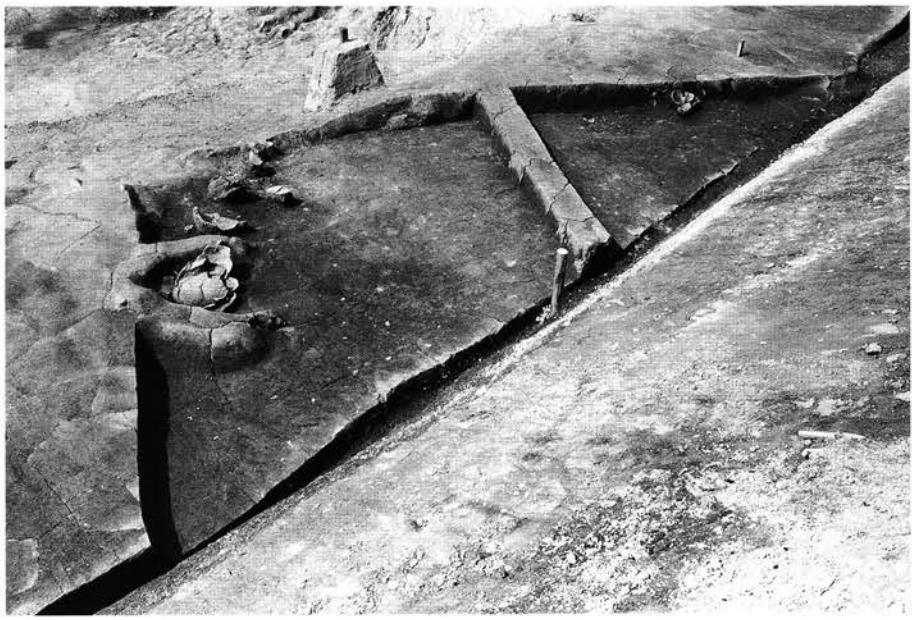
(2)Eトレンチ　自然流路
ＳＲ367042ａ内堆積砂礫
（北から）

(3)Eトレンチ　自然流路
ＳＲ367042ａ内堆積土中
土器出土状況（東から）

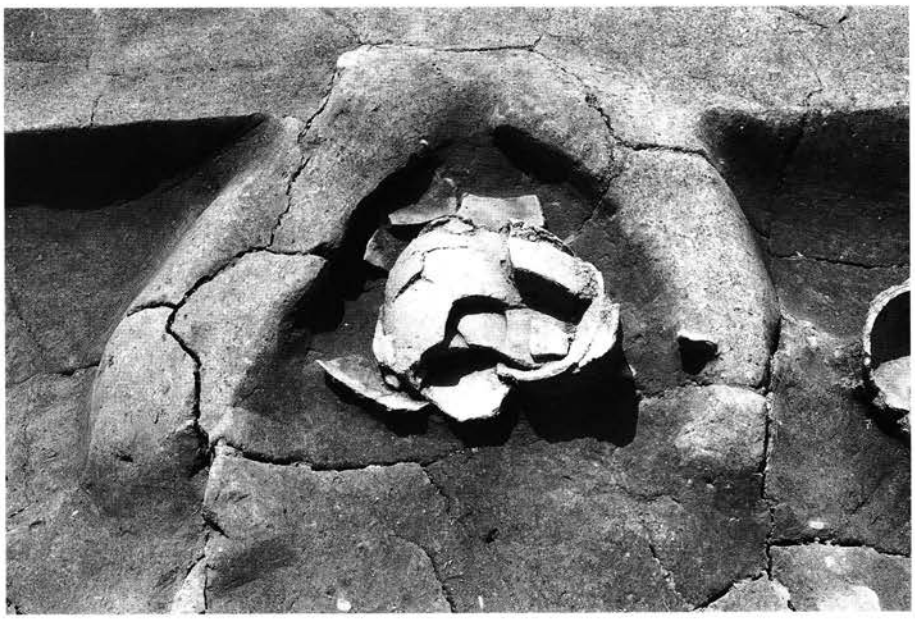
(1)Eトレンチ　竪穴式住居跡
ＳＨ367045検出状況
（南東から）

(2)Eトレンチ　竪穴式住居跡
ＳＨ367045完掘状況
（南西から）

(3)Eトレンチ　竪穴式住居跡
ＳＨ367045カマド検出状況
（南西から）

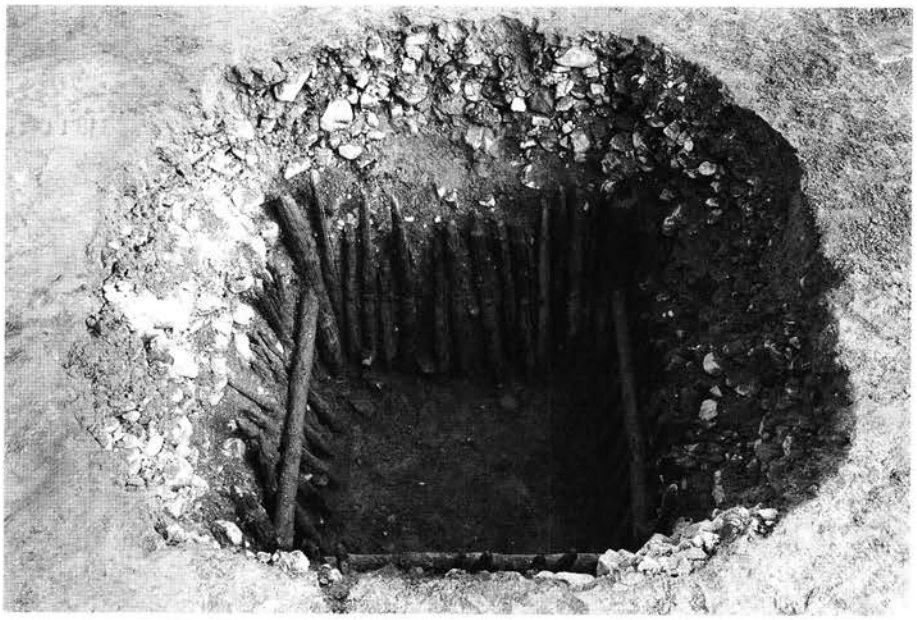


(1)Eトレンチ　竪穴式住居跡
ＳＨ367047検出状況
（南から）

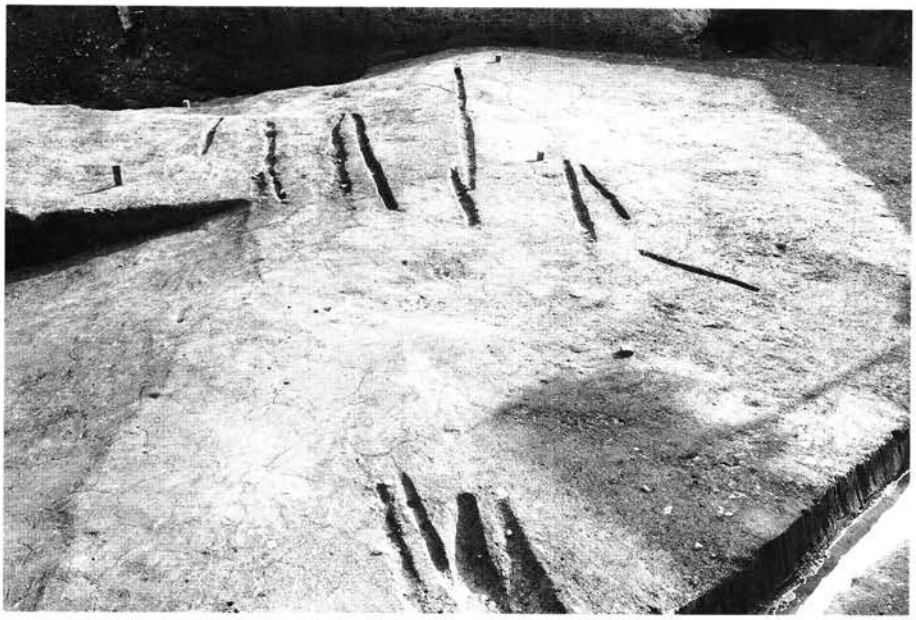


(2)Eトレンチ　竪穴式住居跡
ＳＨ367047カマド検出状況
（東から）

(3)Eトレンチ　竪穴式住居跡
ＳＨ367047北東隅カマド
検出状況（北から）



(1)Eトレンチ　井戸ＳＥ367041
検出状況(南から)

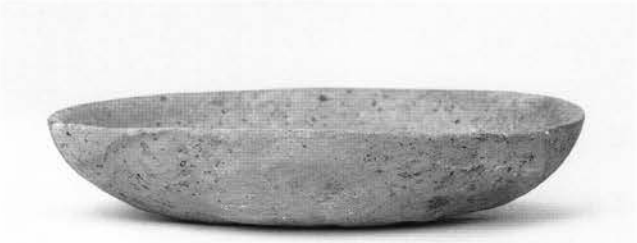


(2)Eトレンチ　轍ＳＸ367043
検出状況(北から)

(2)Eトレンチ　土器埋置遺構
ＳＸ367046検出状況
(北東から)

6

7


8

9

12

22

25

26

32

33

34

35

出土遺物(1)

43

46

47

48

51

55

56

59

60

61

68

70

71

74

出土遺物(2)

77

78

85

86

91

94

101

106

107

116

119

120

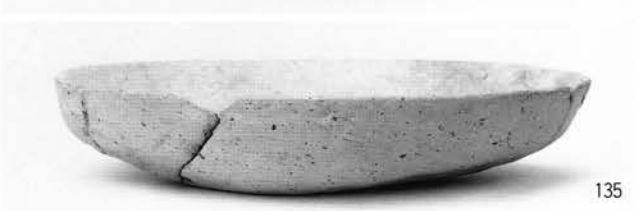
126

127

128

129

134


135

出土遺物(3)

141

142

147

148

150

153

154

175

176

177

185

186

出土遺物(4)

194

218

219

236

303

314

380

386

388

389

398

401

407

409

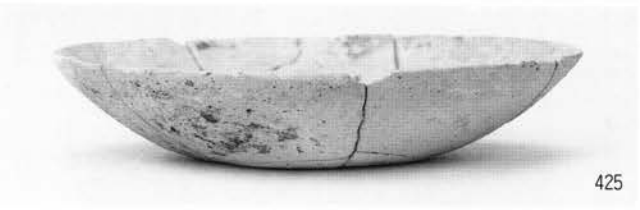
出土遺物(5)

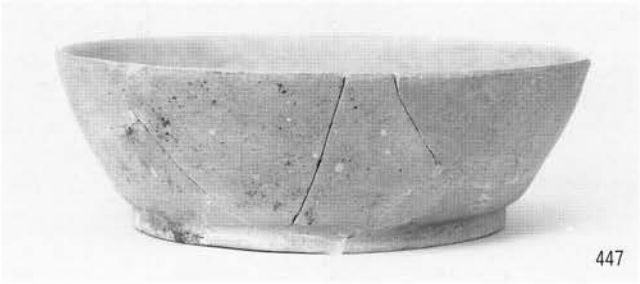
411

444

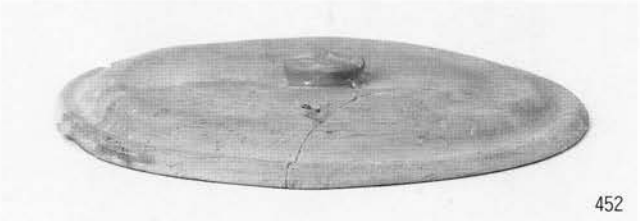
412

446


425

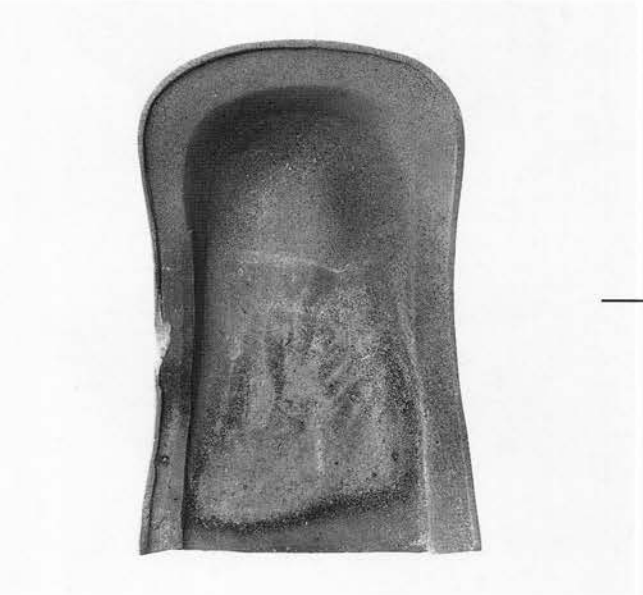

447

438


452

414

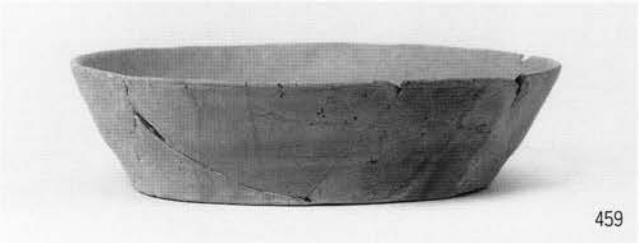
453



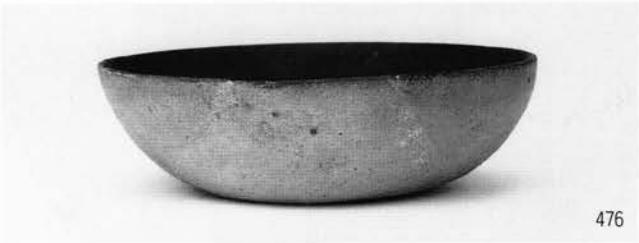
414

出土遺物(6)

456


459

461


476

485

488

495

507

510

514

540

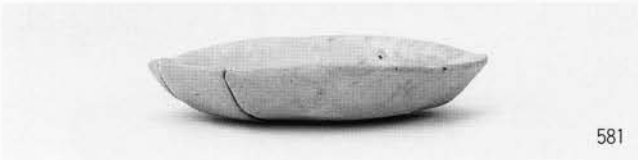
541

出土遺物(7)

558

561

577


581

582

589

590

591

595

614

623

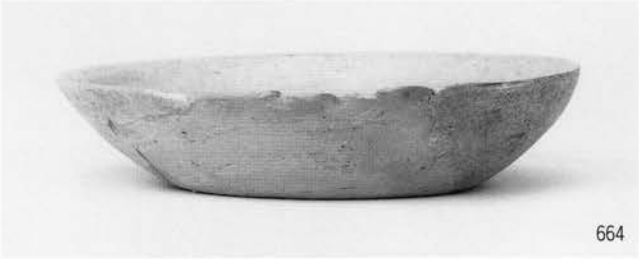
628

648

655

663

出土遺物(8)

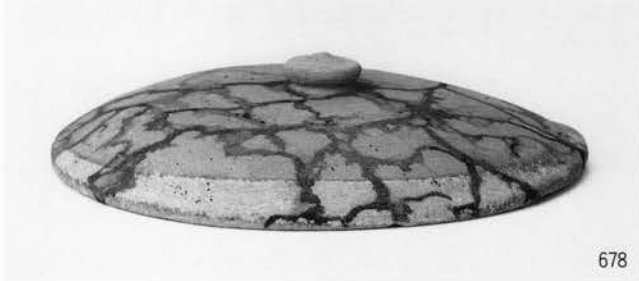

664

667

668

672

673


678

679

680

681

686

687

713

出土遺物(9)

726

733

748

737

749

747

750

出土遺物(10)

753

780

755

758

756

762

757

766

767

768

770

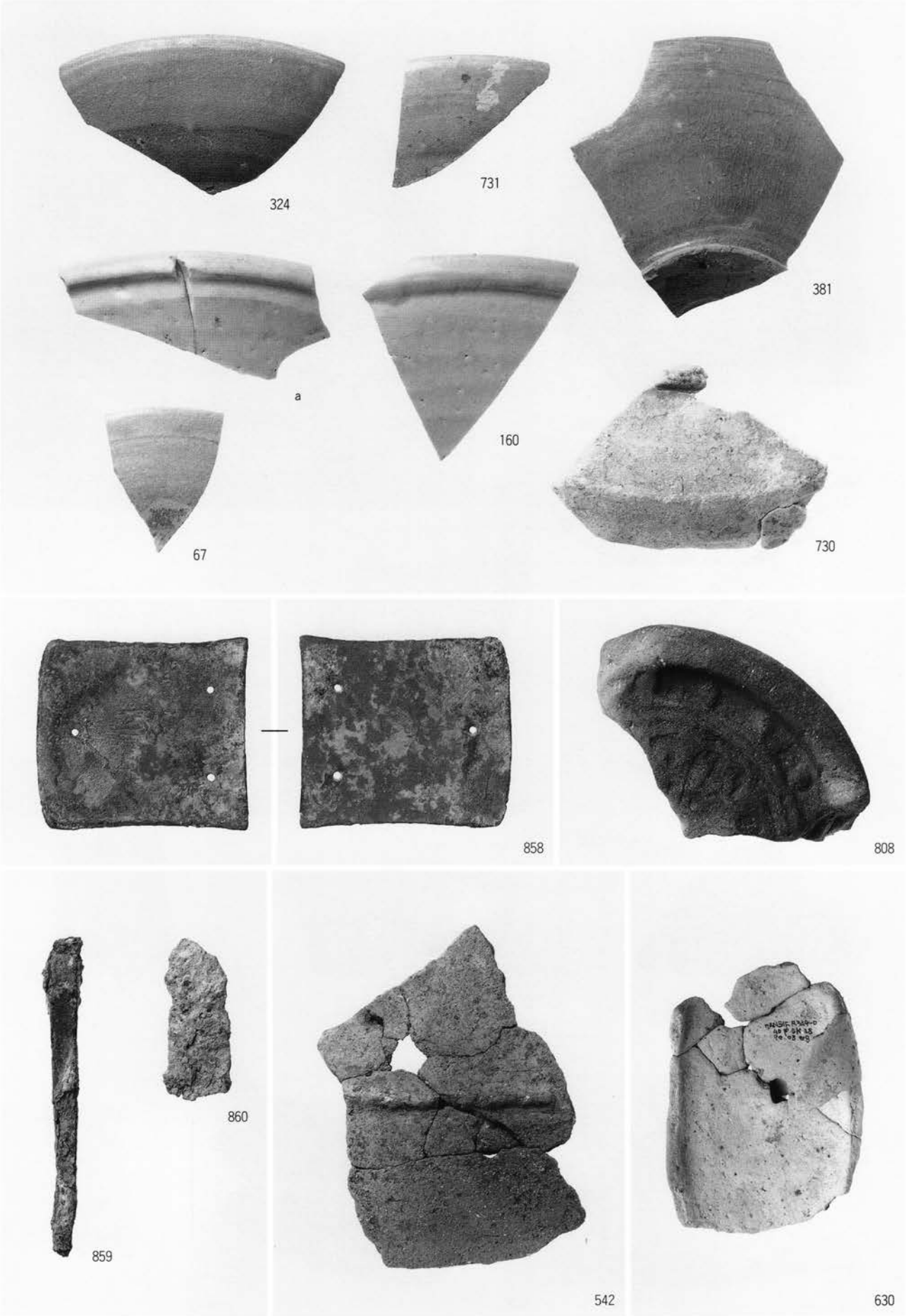
776

779

781

791

出土遺物(12)



出土遺物(13)　a：C２トレンチ　P333　白磁

251

380

796

797

798

252

243

354

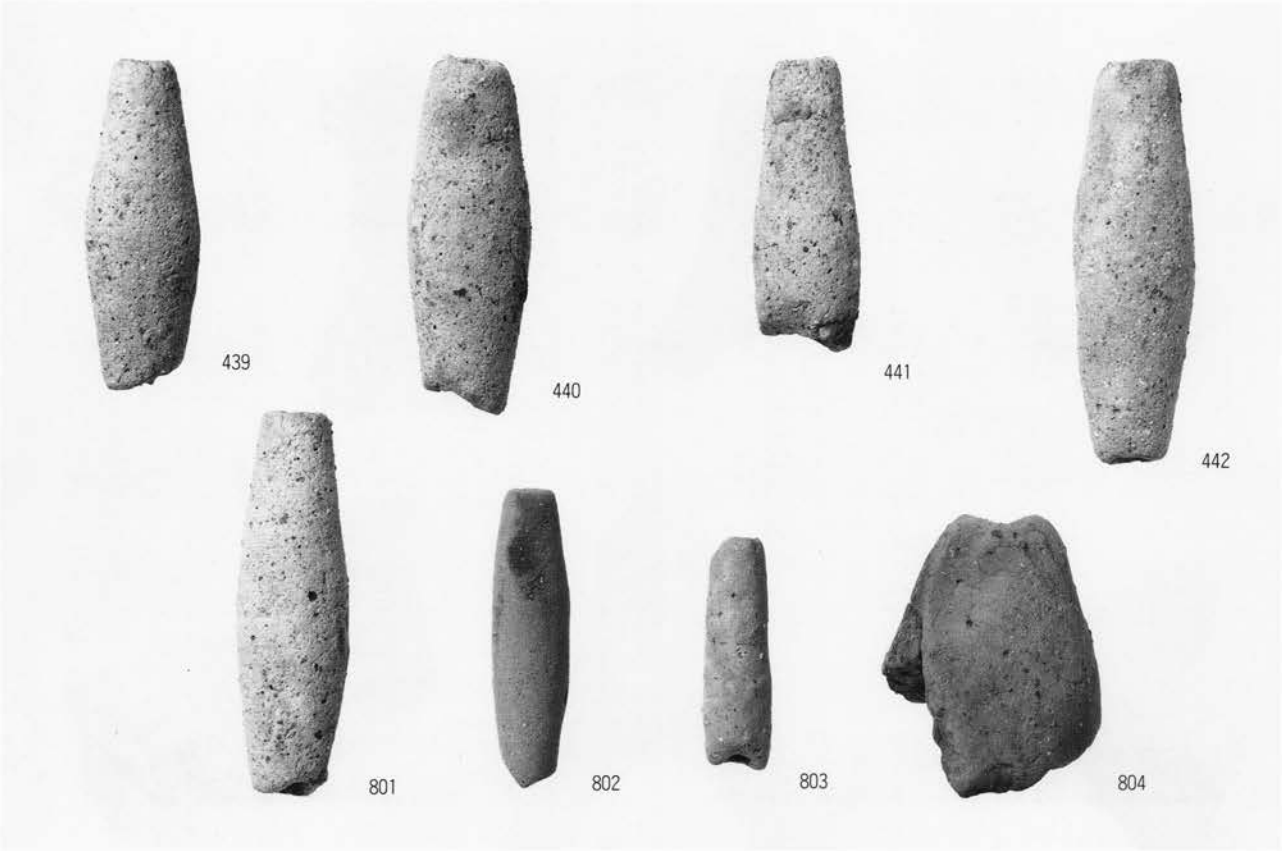
807

809

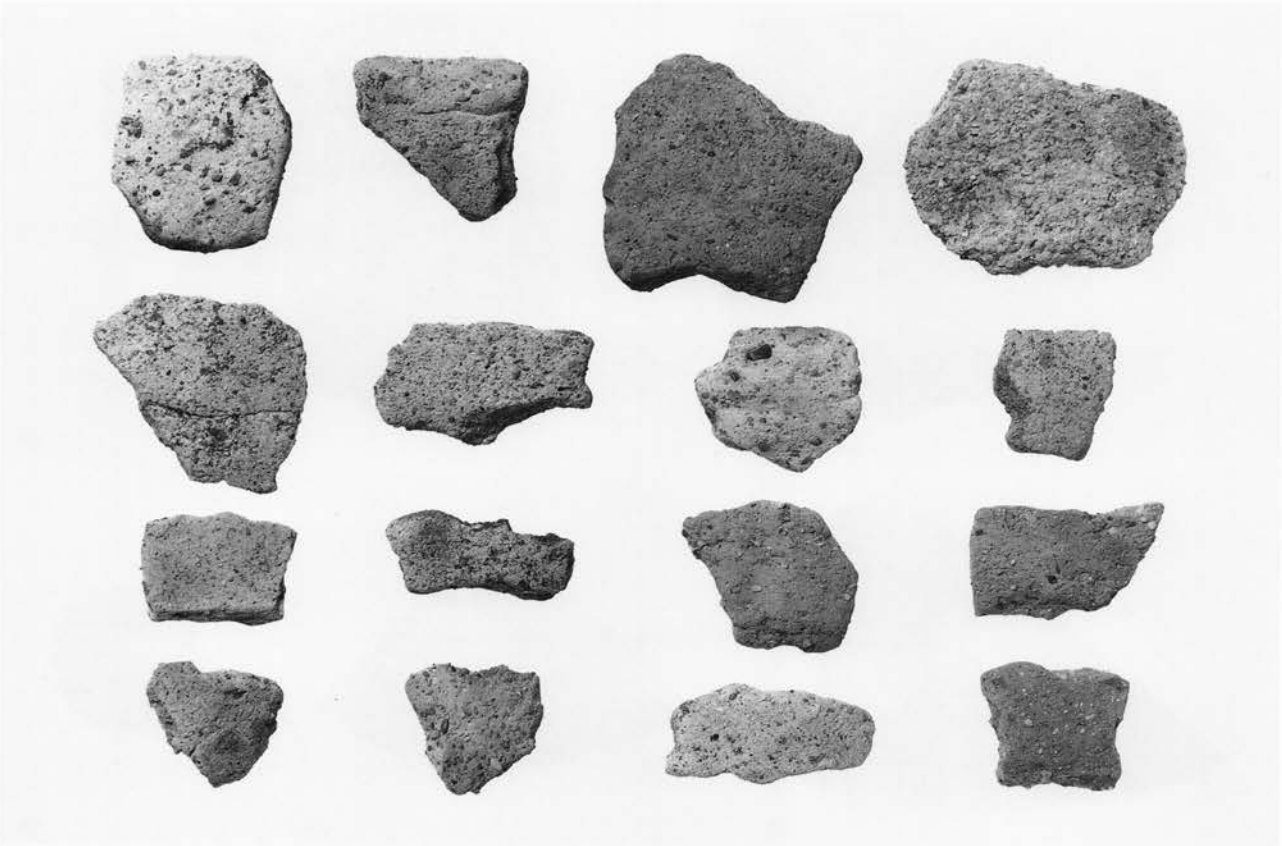
810

出土遺物(14)

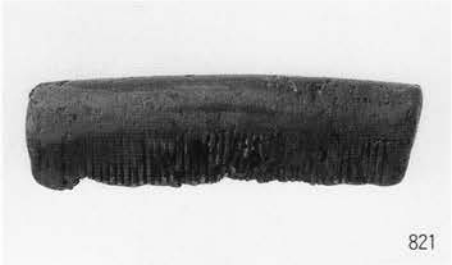
出土遺物(15)

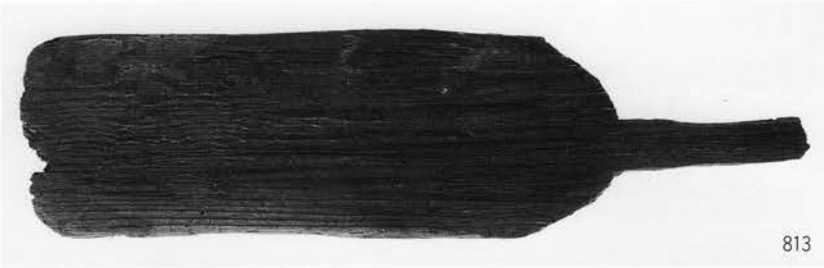


(1)土錘

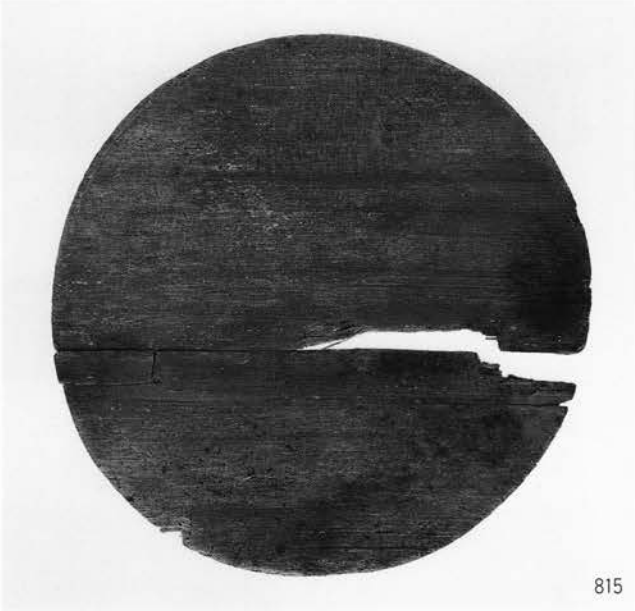


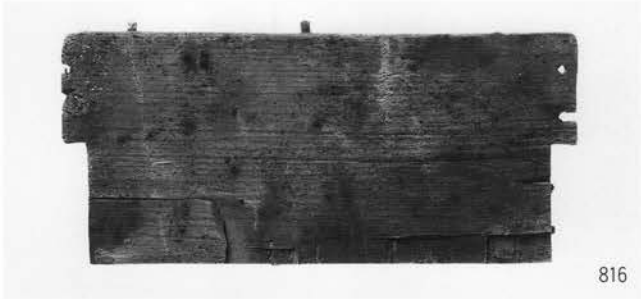
(2)製塩土器

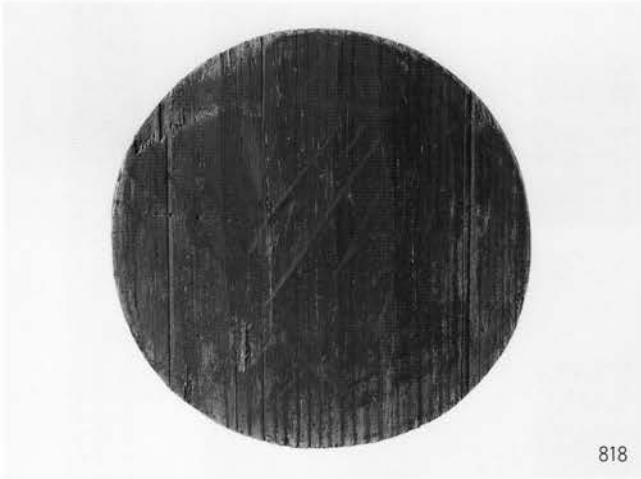

821


813

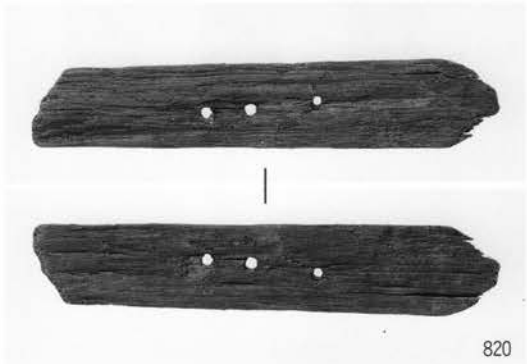
814

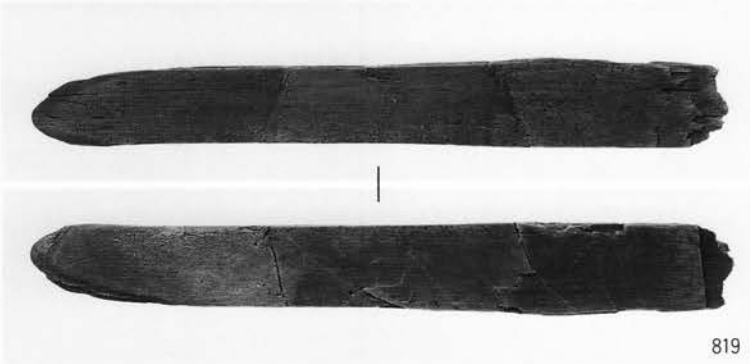

815


816

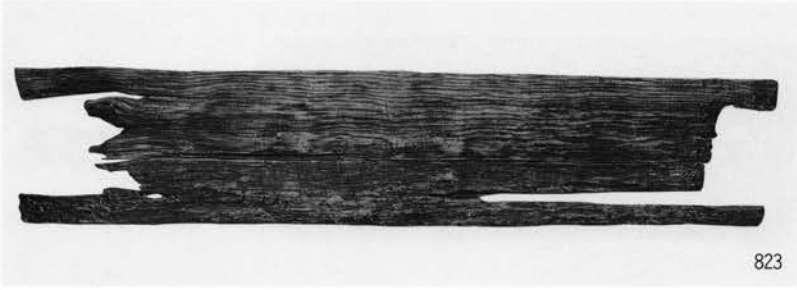

818

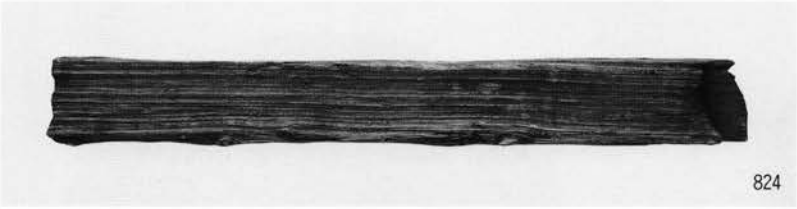
817

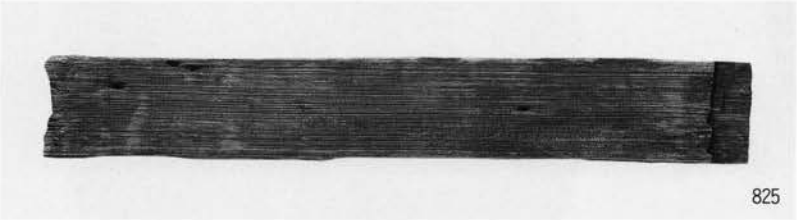

820

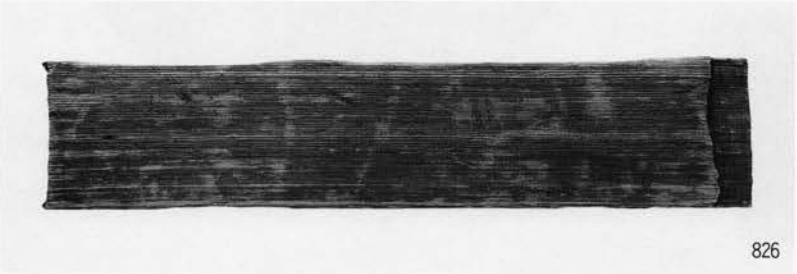

819

木製品(1)

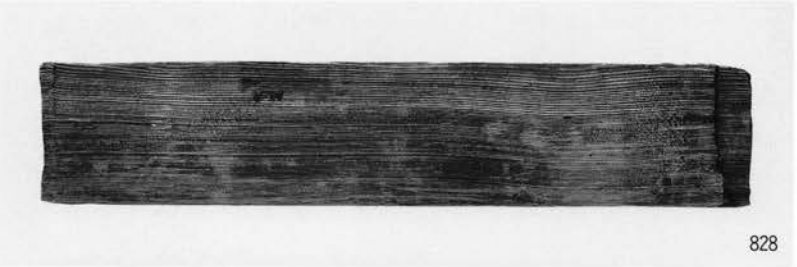

823

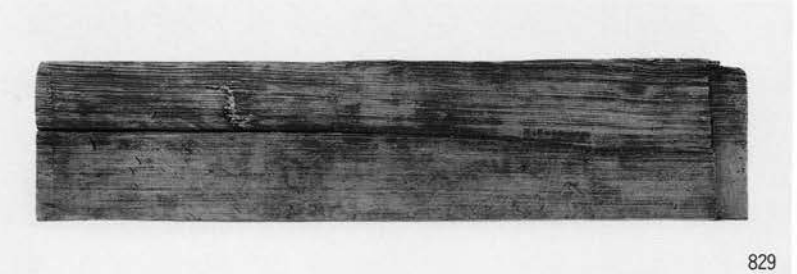

824

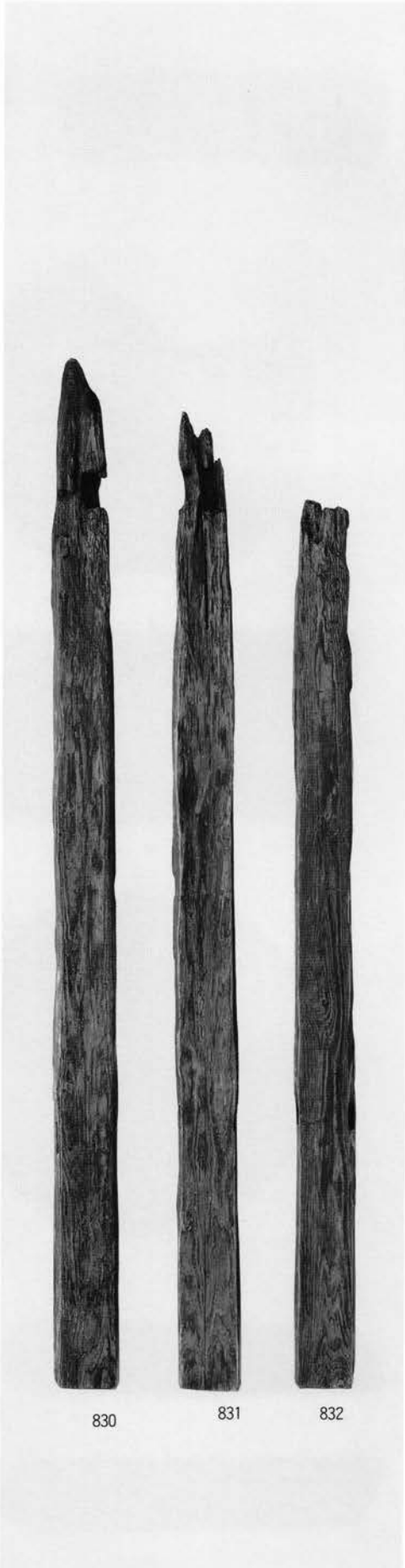

825


826

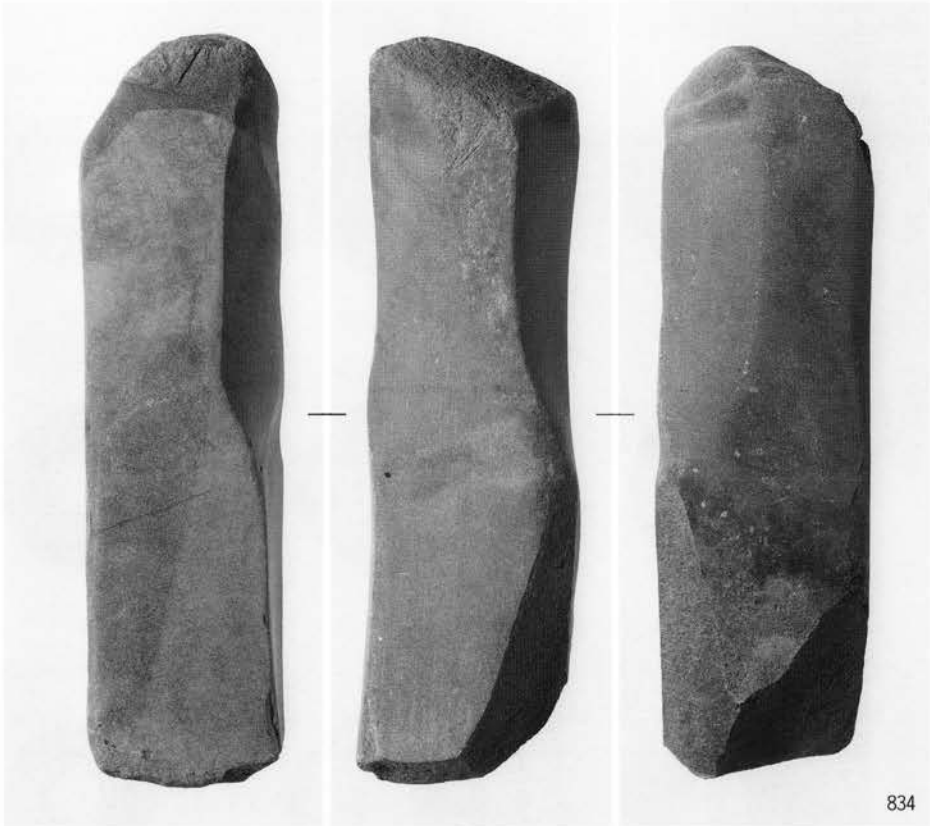
827

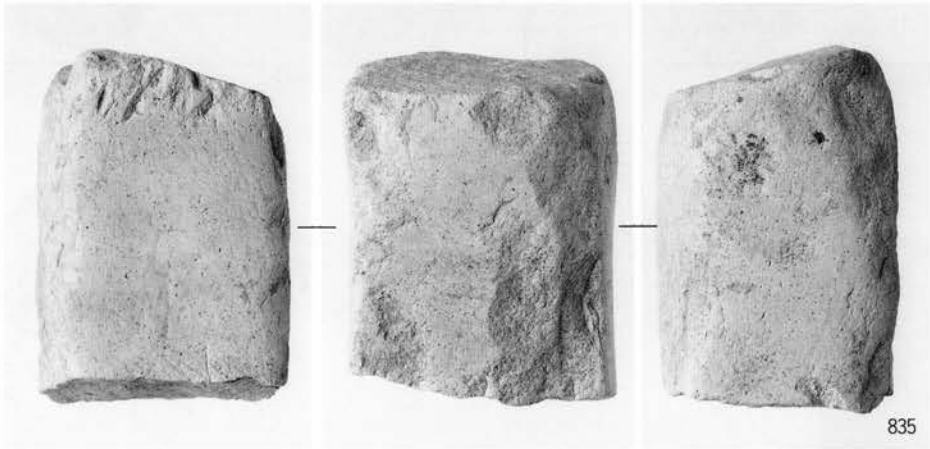

828


829


830 831 832

木製品(2)





石製品

図版 一三十

836

837

838

839

840

841

842

843

844

845

846

847

848

849

850

851

852

853

854

855

856

857

報告書抄録

ふりがな	どどいせき
書　名	百々遺跡
副書名	
巻　次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告書
シリーズ番号	第24冊
編著者名	岩松　保・石尾政信・中川和哉・戸原和人・平良泰久
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　Phone　075(933)3877
発行年月日	西暦　1998　年　3　月　26　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
どどいせき・だいさんじやましろこくふ・さんようでんいせき	おとくにぐんおおやまざきちょうおおあざえんみょうじこあざひらき・ごしょのまえ・どど・いじり							
百々遺跡・第三次山城国府・算用田遺跡	乙訓郡大山崎町大字円明寺小字開キ・御所ノ前・百々・井尻	303	21	34° 54′ 2″	135° 41′ 29″	19890108 ～ 19930305	10,640	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
百々遺跡	集落	縄文		縄文土器	
		弥生	竪穴住居	弥生土器	
		古墳	竪穴住居・土器棺墓	土師器・須恵器	
		平安	掘立柱建物・西国街道東西両側溝・井戸	土師器・須恵器・中国製陶磁器・帯金具土馬・銭貨	
		鎌倉・室町	掘立柱建物・井戸・溝・土坑	土師器・須恵器・瓦器・中国製陶磁器・鉄鎌・砥石	
		江戸	溝・土坑	土師器・肥前陶磁器	

京都府遺跡調査報告書 第24冊

平成10年3月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷　中西印刷株式会社
〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入ル
Phone (075)441-3155 (代)